石川原遺跡（4）

第５分冊　自然科学分析・遺物観察表編

八　ッ　場　ダ　ム　建　設　工　事　に　伴　う
埋　蔵　文　化　財　発　掘　調　査　報　告　書　第78集

2021

国　　土　　交　　通　　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第688集
石川原遺跡(4)
第５分冊 自然科学分析 遺物観察表編
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第78集
二〇二一
国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

石川原遺跡（4）

第５分冊　自然科学分析・遺物観察表編

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第78集

2021

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

自然科学分析・観察表編目次

目　　次

第５章　自然科学分析

第１節　建築部材・木製品の樹種同定（１）・・・・・ 1

第１項　同定委託の目的と成果

第２項　建築部材等の樹種同定（１）

第２節　建築部材・木製品の樹種同定（２）・・・・・16

第１項　同定委託の目的と成果

第２項　建築部材等の樹種同定（２）

第３節　繊維製品等の素材植物について ・・・・・・24

第１項　同定委託の目的と成果

第２項　繊維製品等の素材植物の同定

第４節　出土人骨鑑定（１）・・・・・・・・・・・・・28

第１項　３号人骨の取り上げと鑑定

第２項　３号人骨の鑑定

第５節　出土人骨鑑定（２）・・・・・・・・・・・・・31

第１項　１・２・４号人骨の取り上げと鑑定

第２項　１・２・４号人骨の鑑定

第６節　人骨のDNA鑑定・・・・・・・・・・・・・・・35

第１項　１・２・４号人骨のDNA鑑定委託

第２項　DNA鑑定委託

第７節　獣骨の鑑定・・・・・・・・・・・・・・・・・39

第１項　獣骨の鑑定委託

第２項　石川原遺跡出土のネコ遺体

第８節　緑色系漆椀の分析・・・・・・・・・・・・・・41

遺物観察表

挿図目次

図１　人体骨格各部の名称 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
図２　試料および出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
図３　１号人骨出土状況概略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
図４　２号人骨出土状況概略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
図５　４号人骨出土状況概略図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
図６　下顎第１大臼歯のサイズ比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図７　上腕骨のサイズ比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図８　橈骨のサイズ比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図９　大腿骨のサイズ比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
図10　頸骨のサイズ比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
図11　Ｘ線光電子分光ワイドスキャン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
図12　Ｘ線光電子分光As 3dスペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
図13　Ｘ線光電子分光As $2p_{3/2}$スペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
図14　Ｘ線光電子分光S 2pスペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
図15　Ｘ線光電子分光O 1sスペクトル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

表　目　次

表１　木製品同定一覧（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
表２　木製品同定一覧（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
表３　遺構別の素材同定測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
表４　骨同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
表５　骨同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
表６　歯牙計測値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
表７　出土人骨の歯式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
表８　反応組成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
表９　プライマー組み合わせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
表10　PCRプログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
表11　プライマー組み合わせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
表12　リアルタイムPCRプログラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
表13　各プライマー組み合わせによるPCR増幅有無結果一覧・・・・・・・・・・・・ 35
表14　HV1領域の塩基配列決定結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
表15　サンプル塩基配列とrCRS配列との比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
表16　リアルタイムPCRを用いたX染色体、Y染色体検出による性別判定
・・ 38
表17　ネコ遺体頭骨計測値 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

写真目次

写真１　出土材樹種同定－１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
写真２　出土材樹種同定－２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
写真３　出土材樹種同定－３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
写真４　出土材樹種同定－４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
写真５　出土材樹種同定－５ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
写真６　出土材樹種同定－６ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
写真７　出土材樹種同定－７ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
写真８　出土繊維同定－資料１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
写真９　出土繊維同定－資料２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
写真10　出土繊維同定－資料３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
写真11　出土繊維同定－資料４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
写真12　出土繊維同定－顕微鏡写真１ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
写真13　出土繊維同定－顕微鏡写真２ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
写真14　出土繊維同定－顕微鏡写真３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
写真15　サンプルDNAを鋳型としたmtDNA HV1領域のPCR増幅結果 ・・・・ 36
写真16　出土人骨鑑定（１）－３号人骨出土状況・・・・・・・・・・・・・・・ 60
写真17　出土人骨鑑定（１）－３号人骨出土状況・・・・・・・・・・・・・・・ 61
写真18　出土人骨鑑定（２）－１号人骨 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
写真19　出土人骨鑑定（２）－２号人骨 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
写真20　出土人骨鑑定（２）－４号人骨 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
写真21　出土人骨鑑定（２）－４号人骨 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
写真22　27号建物出土ネコ主要部位写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

遺物観察表目次

陶磁器・鉄銅製品・石製品遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
　６区１号屋敷　１号建物・洗い場・泥流
　７区２号屋敷　９号建物・12号建物・11号建物
　５区３号屋敷　16号建物・18号建物・20号建物
　５区５号屋敷　21号建物
　６区６号屋敷　15号建物
　６区７号屋敷　13号建物
　８区８号屋敷　30号建物・31号建物・32号建物
　　34号建物
　８区９号屋敷　14号建物
　８区10号屋敷　36号建物
　７区12号屋敷　42号建物
　６区11号屋敷　38号建物・47号建物・48号建物
　６区14号屋敷　41号建物
　６区13号屋敷　39号建物
　６区15号屋敷　27号建物・52号建物
　６区16号建物　40号建物
　屋敷以外の建物
　22号建物・43号建物・51号建物
　１区不動院(本堂)６号建物
　１区不動院(庫裏)５号建物・池
　１区不動院池状遺構・築山・３号石垣
　１区不動院泥流中・３号建物(薬師堂)３号建物
　遺構外出土遺物

木製品遺物観察表　（遺物番号前にW）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
　７区２号屋敷　53号溝
　５区３号屋敷　16号建物・薪場・17号建物・18号建物
　５区４号屋敷　20号建物
　５区５号屋敷　21号建物・廃材
　６区６号屋敷　15号建物
　７区漂着物
　７区12号屋敷　42号建物
　６区13号屋敷　46号建物
　６区14号建物　49号建物
　５区15号屋敷　27号建物・52号建物・53号建物
　屋敷外建物　50号建物・51号建物・７号道・３号水路
　５区１面

第５章　自然科学分析

第１節　建築部材・木製品の樹種同定（１）

第１項　同定委託の目的と成果

本遺跡では天明３(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で家屋等が埋没し、そのため多くの木製品等が出土した。これらの木製品等の樹種を把握するため、樹種同定を２回に分けて委託により実施したが、本節ではその第１回の同定結果を記すこととする。

なお、この同定作業は、西宮遺跡出土材と一括で委託したのであるが、本節では石川原遺跡についての記載のみを抽出して記すこととする。

さて、本遺跡では泥流で倒壊した建物の建築材、建具材、仏壇等の木製品、薪など、多種多様な木製遺物が出土した。本同定作業はこのうち133点を樹種を選定して、木材利用や植生の検討に資することを目的として同定作業をパリノ・サーヴェイ社に委託して実施した。

この結果、石川原遺跡では21種類の樹種を有する材が同定されたが、このうち建築部材にはマツ類やクリ材の利用が多く、桶はマツ類、スギ、クリ材、肥溜め用の桶ではクリの利用が多く、薪はコナラ類が多く利用されるという所見が得られた。

第２項　建築部材等の樹種同定（１）

はじめに

八ッ場地区の石川原遺跡では、天明３(1783)年の浅間山の噴火に伴う泥流に覆われた集落跡等が検出されている。建物は、建築部材が良好な状態で残っており、内部からは木製品も多数出土している。また、薪を大量に積み上げた状況なども確認されている。

本分析調査では、石川原遺跡から出土した建築部材、木製品、薪等を対象として、木材利用や古植生を検討するための樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、石川原遺跡から出土した建築部材、木製品、薪である。2018年２月５日に当社技師と担当者(中沢氏、洞口氏、板垣氏)とで遺物の保管状況と作業の進め方について打合せを実施した。その際の確認で、一覧表に記載された資料の一部が保存処理や実測の関係で遺物観察と試料採取が難しいことが判明した。対応を協議した結果、遺物観察と試料採取ができない資料は、実際に確認できる遺物で補填することとした。最終的に、778点を分析対象とし、その中の133点についてプレパラート作成と同定を実施する。

試料観察と試料採取は、当社技師２名が遺物保管場所に赴き、2019年２月18日から22日の期間で実施した。

２．分析方法

(１)資料観察・試料採取

遺物保管場所において、建築部材等についてルーペや携帯用の小型実体鏡で観察し、可能な範囲で分類する。また、破損部などを用いて木片を採取する。

観察・分類結果に基づき、プレパラート作成・同定を実施する試料を決定する。

(２)プレパラート作成・同定

剃刀を用いて、採取した木片から木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の徒手切片を作成し、切片をガム・クロラール(抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

３．結果

石川原遺跡の観察および同定結果を表１に示す。建築部材ではマツ、クリと判断される資料、桶等の木製品ではスギ、マツ、クリと判断される資料が多かった。一方、

薪ではナラ類と判断される資料が多かった。この他、点数は少ないが、スギやマツとは異なる針葉樹、ブナ、カツラ、サクラ等の広葉樹が認められた。これらの観察結果を考慮し、プレパラート作成では全ての種類が含まれるように選択した。

プレパラート作成・同定の結果では、石川原遺跡の試料に針葉樹５分類群(マツ属複維管束亜属・モミ属・ヒノキ・サワラ・スギ)と広葉樹14分類群(ヤナギ属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・カツラ・マタタビ属・ウルシ科・トチノキ・タカノツメ・ゴンズイ・ガマズミ属)が認められた。なお、乾燥による収縮等で組織の状態が悪い試料があり、そうした試料については観察できた範囲での同定結果を記した。同定された各分類群の主な解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus subgen.* Diploxylon)　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔組織、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・モミ属(*Abies*)　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔組織のみで構成される。柔組織の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don)　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔組織のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis* obtusa (Sieb.et Zucc.) Endlcher)　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔組織のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・サワラ　*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl.　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、１分野に１～３個。分野壁孔の孔口の長軸方向は水平に近いものが多い。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ科　*Cupressaceae*

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔組織のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

上記ヒノキやサワラを含むヒノキ科のいずれかであるが、分野壁孔が観察できず、種類を特定できない試料をヒノキ科とした。

・ヤナギ属(*Salix*)　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(*Alnus subgen. Alnus*)　カバノキ科

散孔材で、道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと集合放射組織とがある。

集合放射組織の存在を確認できなかった試料はハンノキ属とした。

・クマシデ属イヌシデ節(*Carpinus subgen. Euarpinus*)　カバノキ科

散孔材で、道管は単独または２～４個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。

表１　木製品同定一覧（１）

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区16号建物	W1	IK0399	建材15	柱の一部か?	芯持角材	マツ	―		
5区16号建物	W3･4	IK0053	建材14	根太か?	分割角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区16号建物	W2	IK0060	建材86	柱	芯持角材	クリ	―		
5区16号建物	W6	IK0127	建材４	根太	芯持角材	マツ	―		
5区16号建物	W9	IK0078	建材12	根太	分割角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区16号建物	W10	IK0135	建材69	角材	分割角材	マツ	―		
5区16号建物	W11	IK0129	建材38	角材	分割角材	マツ	―		
5区16号建物	W18	IK0138-1	製品143	桶底板	板目	クリ	―		1のみコア採取
5区16号建物	W18	IK0138-2	製品143	桶底板	板目	クリ	―		
5区16号建物	W18	IK0138-3	製品143	桶底板	板目	クリ	―		
5区16号建物	W18	IK0138-4	製品143	桶底板	板目	クリ	―		
5区16号建物	W19	IK0099-1	建材130	桶樽底板(便所)	板目	マツ	-		小
5区16号建物	W19	IK0099-2	建材130	桶樽底板(便所)	板目	マツ	-		大
5区16号建物	W20	IK0100-1	建材141	桶底板	板目	クリ	―		1のみコア採取
5区16号建物	W20	IK0100-2	建材141	桶底板	板目	クリ	―		
5区16号建物	W20	IK0100-3	建材141	桶底板	板目	クリ	―		
5区16号建物	W20	IK0100-4	建材141	桶底板	板目	クリ	―		
5区18号建物	W38	IK0023	建材132	土台	芯持角材	クリ	―		
5区18号建物	W39	IK0028	建材131	土台	芯持角材	クリ	―		
5区18号建物	W40	IK0258	建材141①	土台	芯持材	クリ	―		
5区18号建物	W41	IK0011	建材130	土台	芯持角材	クリ	―		
5区18号建物	W43	IK0026	建材142	大引	芯持丸木	クリ	―		
5区18号建物	W46	IK0066	建材118	根太	分割角材	クリ	―		
5区18号建物	W47	IK0052	建材113	根太	分割角材	クリ	―		
5区18号建物	W48	IK0059	建材125	根太	分割角材	クリ	―		
5区18号建物	W53	IK0068-1	建材22	板戸枠木	分割角材	マツ	―		細
5区18号建物	W53	IK0068-2	建材22	板戸枠木	半裁角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	太
5区18号建物	W55	IK0122	建材39	板	削出棒	クリ	―		
5区18号建物	W57	IK0139	№6	飼葉桶	芯持材	クリ	―		
5区18号建物	W62	IK0128	建材55	油搾り機土台か?	分割角材	クリ	―		
5区20号建物	W1	IK0024	建材110①	土台	芯持角材	クリ	―		
5区20号建物	W4	IK0013	建材110③	土台	芯持角材	クリ	―		
5区20号建物	W10	IK0071	建材112	根太	半裁角材	クリ	―		
5区20号建物	W11	IK0072	建材111	根太	芯持角材	クリ	―		
5区20号建物	W12	IK0019	建材115	根太	芯持丸木	クリ	―		
5区20号建物	W13	IK0141	建材114	根太(柱を転用)	半裁角材	クリ	―		
5区20号建物	W14	IK0095	建材98	床板	板目	マツ	―		
5区20号建物	W16	IK0084	建材101	床板	板目	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区20号建物	W17	IK0091	建材158	板	柾目	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区20号建物	W18	IK0136	建材160	板	板目	マツ	―		
5区20号建物	W199	IK0006	建材1		芯持丸木	クリ	―		
5区20号建物	W200	IK0032	建材2	Ｙ字状棒	芯持丸木	クリ	―		
5区21号建物	W1	IK0036	建材556	壁　基礎	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W3	IK0137	建材481	梯子	半裁状	マツ	―		
5区21号建物	W5	IK0048	建材596	根太か?(柱の転用か?)	半裁状	クリ	―		
5区21号建物	W8	IK0077	建材408	柱か?(掘立)	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W9	IK0001	建材520	柱	芯持角材	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W11	IK0033	建材559	東柱(南)	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W12	IK0014	建材463	柱(太)　東壁２	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W13	IK0015	建材290	北壁太柱　土間柱	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W14	IK0010	建材412	南壁①　太柱	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W16	IK0008	建材422	角(文)　北壁	芯持丸木	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W18	IK0255	建材297	柱	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W19	IK0256	建材403	南壁③　柱	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W51	IK0075	建材406	唐臼杵	芯持角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W21	IK1019	建材551	敷居	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W24	IK0025	建材554	大引	芯持丸木	クリ	―		
5区21号建物	W25	IK0034	建材546	根太	半裁角材	クリ	―		
5区21号建物	W26	IK0035	建材542	根太	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W28	IK0012	建材549	根太	半裁状	広葉樹	○	クリ	
5区21号建物	W29	IK0248	建材548	根太	分割角材	マツ	―		
5区21号建物	W29	IK0682	建材548	根太(楔)	板目	クリ	―		
5区21号建物	W30	IK0007	建材547	根太	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物	W31	IK0087	建材514	板	板目	クリ	―		
5区21号建物	W33	IK0093	建材512	板	板目	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W34	IK0103	建材511	板	板目	クリ	―		
5区21号建物	W35	IK0096	建材501	床板	板目	クリ	―		
5区21号建物	W36	IK0098	建材500	板	板目	マツ	―		
5区21号建物	W39	IK0102	建材509	板	板目	クリ	―		
5区21号建物	W40	IK0097	建材506	床板	板目	クリ	―		
5区21号建物	W42	IK0080	建材5	板	板目	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W43	IK0094	建材455	大板	板目	不明	―		
5区21号建物	W44	IK0083	建材486	板	板目	クリ	―		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区21号建物	W47	IK0118-1	建材287	板戸横桟木	分割角材	クリ	－		長
5区21号建物	W47	IK0118-2	建材287	板戸横桟木	分割角材	マツ	－		短
5区21号建物	W52	IK0140	建材605	唐臼支柱	芯持丸木	クリ	－		二股部分
5区21号建物	W56	IK0349	建材392	名称用途不明	芯持丸木	クリ	－		
5区21号建物	W59	IK0076	建材314	棚の枠木	芯持角材	クリ	－		
5区21号建物	W162	IK0131	建材321 その2	アンギン編台	半裁状	クリ	－		二股
5区21号建物	W162	IK0131	建材321 その3	アンギン編台	半裁状	クリ	－		二股
5区21号建物	W163	IK0130	建材321	アンギン編台	半裁状	クリ	－		二股
5区27号建物	W1	IK1000	№948	土台	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W85	IK0607	建材444	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W2	IK0192	建材967	土台	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W3	IK0157	建材552	土台	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W5	IK0251	建材280	角材	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W8	IK0272	建材170 その1	土台　ホゾ穴有り	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W11	IK0153	建材1139	土台	分割角材	クリ	－		
5区27号建物	W13	IK0276	建材307	角材　ホゾ穴有り	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W16	IK0994	№678	柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W18	IK1001	№952	柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W19	IK0992	№1316	柱	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W20	IK0161	建材1264	柱(加工有り)	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W22	IK0236-1	建材1260	柱	芯持角材	クリ	－		角材
5区27号建物	W22	IK0236-2	建材1260		板目	マツ	－		ほぞにささる板材
5区27号建物	W25	IK1012	№462	柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W26	IK0269	建材173	柱　加工有り	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W27	IK0294	建材519	柱	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W29	IK0293	建材79	土台か?	芯持材	クリ	－		
5区27号建物	W30	IK0186	建材814	柱	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W31	IK0145	建材1142	梁	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W36	IK0398	建材1034	束柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W40	IK0183	建材1163	根太	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W41	IK0162	建材1162	根太	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W42	IK0191	建材988	根太	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W44	IK0989	№1036	角材	芯持丸木	マツ	－		
5区27号建物	W45	IK0520	建材925	柱	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W45	IK0524	建材925	柱	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W47	IK0164	建材998	根太	半裁状	クリ	－		
5区27号建物	W49	IK0991	№882	根太	半裁状	クリ	－		
5区27号建物	W52	IK0986	№1005	柱	芯持材	マツ	－		
5区27号建物	W53	IK0988	№1014	柱	分割材	マツ	－		
5区27号建物	W24	IK1014	№929	柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W54	IK0309	建材889	根太か?	芯持角材	マツ	－		
5区27号建物	W56	IK0292	建材1105	柱	板目	クリ	－		
5区27号建物	W57	IK0213	建材1213	板	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W58	IK0216	建材999	板	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W59	IK0985	№897	根太か?	半裁状	クリ	－		
5区27号建物	－	IK0602-1	建材314	桶　蓋、底板→樽の蓋	板目	針葉樹	○	スギ	栓の穴有
5区27号建物	－	IK0602-2	建材314	桶　蓋、底板→樽の蓋	板目	針葉樹	○	スギ	
5区27号建物	－	IK0602-3	建材314	桶　蓋、底板→樽の蓋	板目	針葉樹	○	スギ	
5区27号建物	－	IK0602-4	建材314	桶　蓋、底板→樽の蓋	柾目	針葉樹	○	スギ	
5区27号建物	－	IK0602-5	建材314	桶　蓋、底板→樽の蓋	板目	針葉樹	○	スギ	
5区27号建物	W60	IK0283	建材1061	根太か?	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W62	IK0168	建材1035	根太	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W64	IK0303	建材212の2	根太掛けか?	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W65	IK0246	建材131	柱か?	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W67	IK1015	№574	馬屋出入口柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W69	IK0201	建材1149	床板	芯持板	マツ	－		
5区27号建物	W70	IK0181	建材1261	板	板目	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物	W71	IK0179	建材1215	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W72	IK0305	建材1262	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W73	IK0393	建材206	板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W74	IK0990	№572	板	芯持板	クリ	－		
5区27号建物	W77	IK0526	建材666	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W78	IK0376	建材908	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W79	IK0381	建材950	板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W80	IK0377	建材982	板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W81	IK0389	建材1136	板	柾目	ナラ類	－		
5区27号建物	W82	IK0378	建材1181	板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W83	IK0532	建材766	床板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W84	IK0538	建材767	床板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W87	IK0536	建材659	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W86	IK0574	建材658	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W88	IK0539	建材660	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W89	IK0587	建材668	床板	板目	クリ	－		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区27号建物	W90	IK0356	建材672	床板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W91	IK0555	建材1050	板	柾目	マツ	－		
5区27号建物	W92	IK0534	建材1128	板	柾目	ナラ類	－		
5区27号建物	W93	IK0540	建材965	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W95	IK0375	建材1341	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W96	IK0577	建材1167	板	柾目	クリ	－		
5区27号建物	W97	IK0547	建材663	板	追柾	クリ	－		
5区27号建物	W98	IK0337	建材664	板	柾目	クリ	－		
5区27号建物	W99	IK0336	建材60	板	追柾	クリ	－		
5区27号建物	W100	IK0387	建材1143	板	追柾	マツ	－		
5区27号建物	W101	IK0390	建材62	板	板目	クリ	－		
5区27号建物	W102	IK0312	建材357	板(貫)	板目	マツ	－		
5区27号建物	W103	IK0316	建材463	貫板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W104	IK0590	建材1322	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W105	IK0560	建材366	貫板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W106	IK0593	建材469	板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W107	IK0576	建材1166	板	柾目	ナラ類	－		
5区27号建物	W108	IK0567	建材88	板	柾目	ナラ類	－		
5区27号建物	W109	IK0195	建材566	板	柾目	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区27号建物	W110	IK0530	建材1168	板	柾目	ナラ類	－		
5区27号建物	W112	IK0993	№1001	角材	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W113	IK0364	建材1340	板	半裁状	マツ	－		
5区27号建物	W114	IK0987	№581	角材	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W115	IK1004	№558	厚板	芯持角材	マツ	－		
5区27号建物	W116	IK1003	№560	厚板	芯持角材	マツ	－		
5区27号建物	W117	IK1002	№559	厚板	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W119	IK1017	№1353	柱	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W121	IK0230	建材1317	板材　加工有り	板目	マツ	－		
5区27号建物	W127	IK0291	建材1308	根太	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W128	IK0217	建材1368	梁	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W129	IK0350	建材94	板材　根太がけ	板目	マツ	－		
5区27号建物	W133	IK0370	建材1358	根太	芯持角材	クリ	－		
5区27号建物	W134	IK0279	建材1359	板	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W135	61584	№1360	根太	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W137	IK0231	建材1362	根太	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W138	IK0322	建材1363	根太	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W139	IK0176	建材1282	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W140	IK0171	建材1283	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W141	IK0175	建材1284	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W142	IK0177	建材1285	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W149	IK0367	建材1345　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W148	IK0388	建材1346　①	床板	柾目	マツ	－		
5区27号建物	W147	IK0391	建材1348　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W146	IK0392	建材1349　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W145	IK0368	建材1350　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W143	IK0210	建材1351　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W144	IK0369	建材1352　①	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W151	IK0226	建材1259		分割角材	クリ	－		226のほぞ穴内
5区27号建物	W152	IK0373	建材1343	敷居	芯持板	マツ	－		
5区27号建物	W153	IK0371	建材1111	敷居	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W159	IK0146	建材1081	桁か?	芯持角材	トチ	○	トチノキ	最大部材からコア採取。
5区27号建物	W160	IK0170	建材1091	根太	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W161	IK0286	建材1090	根太	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W162	IK0204	建材1089	根太	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W163	IK0207	建材1088	根太	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W167	IK0288	建材1085	根太	分割角材	マツ	－		
5区27号建物	W168	IK0184	建材1086	根太	四方柾	マツ	－		
5区27号建物	W172	IK0394	建材1041	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W171	IK0543	建材1043	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W170	IK0544	建材1044	床板	板目	マツ	－		
5区27号建物	W176	IK0247	建材1386	木材	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W175	IK0242	建材1388	棒　木材	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W180	IK0287	建材537		芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W181	IK0382	建材1200	木材	半裁状	クリ	－		
5区27号建物	W182	IK0605	建材118	板	ミカン割	ナラ類	－		
5区27号建物	W183	IK0557	建材212の1	角　ほぞ穴有り	芯持板	クリ	－		
5区27号建物	W184	IK0345	建材1074	角材	分割角材	クリ	－		
5区27号建物	W186	IK0229	建材521	板　厚い	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W192	IK0313	建材132	角材　加工有り	半裁角材	クリ	－		
5区27号建物	W194	IK0549	建材54	角材　加工有り	半裁角材	マツ	－		
5区27号建物	W195	IK0358	建材351	角材	芯持丸木	クリ	－		
5区27号建物	W196	IK0541	建材1058	丸太半割り	半裁状	クリ	－		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区27号建物	W198	IK0600	建材251	板	板目	クリ	―		
5区27号建物	W201	IK0601	建材612	板	板目	トチ	○	トチノキ	
5区27号建物	W205	IK0384	建材329	大板　四角　のし板?	板目	トチ	○	トチノキ	
5区27号建物	W207	IK0147-1	建材967 その2	出入口土台(大戸用敷居付)	芯持角材	クリ	―		角材
5区27号建物	W207	IK0147-2	建材967 その2	出入口土台(大戸用敷居付)	板目	クリ	―		板
5区27号建物	W207	IK0147-3	建材967 その2	出入口土台(大戸用敷居付)	分割角材	クリ	―		角材と板を繋ぐ部材
5区27号建物	W209	IK0174	建材1146	板	板目	スギ	○	スギ	
5区27号建物	W211	IK0169	建材1288	壁の横板	板目	マツ	―		
5区27号建物	W212	IK0314	建材1289	壁の横板	板目	マツ	―		
5区27号建物	W217	IK1006	№1324	鴨居(3本溝)	半裁状	クリ	―		
5区27号建物	W220	IK0212	建材1249	障子の桟?	分割角材	マツ	―		
5区27号建物	W221	IK0597-1	建材1141	枠　障子	分割角材	針葉樹	○	針葉樹	短
5区27号建物	W221	IK0597-2	建材1141	枠　障子	分割角材	針葉樹	○	針葉樹	長
5区27号建物	W224	IK0311	建材1297	木材	分割角材	クリ	―		
5区27号建物	W226-5	IK1016	№1391　①	唐臼踏木	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物	W226-1	IK1005	№1391　②	杵	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物	W227	IK0535	建材679	飼馬桶	芯持角材	トチ	○	トチノキ	
5区27号建物	W228	IK0219	建材204	飼い馬桶	芯持材	クリ	―		
5区27号建物	W230	IK0527	建材189	飼馬桶	芯持材	クリ	―		
5区27号建物	W447	IK0584	建材89	木製品	半裁状	クリ	―		
5区27号建物	W448	IK0284	建材90	木製品	板目	クリ	―		
5区27号建物	W449	IK0298	建材19	木　加工品	芯持材	クリ	―		
5区27号建物		IK0202	建材1242	丸、木材	芯持丸木	マツ	―		
5区27号建物		IK0237	建材1329	根太掛けか?	板目	クリ	―		
5区50号建物	W1	IK0254	建材 1	柱	芯持角材	クリ	―		
5区50号建物	W2	IK0263			芯持角材	クリ	―		
5区51号建物	W1	IK0241	建材102	柱	芯持材	クリ	―		
5区51号建物	W2	IK0238	建材101	柱(掘立)	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W3	IK0166	建材100	柱	芯持材	クリ	―		
5区51号建物	W4	IK0257	建材128	柱	芯持角材	クリ	―		
5区51号建物	W5	IK0266	建材129	角材	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W6	IK0395	建材130	角材	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W8	IK0302	建材16	棒(杭)	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W10	IK0304	建材252	板	板目	クリ	―		
5区51号建物	W11	IK0551	建材251	板	板目	マツ	―		
5区51号建物	W12	IK0362	建材51	角	半裁角材	マツ	―		
5区51号建物	W13	IK0265	建材50	角材	半裁角材	クリ	―		
5区51号建物	W17	IK0383	建材15	飼馬桶	半裁角材	クリ	―		
5区51号建物	W18	IK0562	建材267	囲炉裏、枠	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W19	IK0525	建材266	囲炉裏、枠	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W20	IK0529	建材268	囲炉裏、枠	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W21	IK0548	建材253	丸太	芯持丸木	クリ	―		
5区51号建物	W22	IK0285	建材257	木材	半裁状	クリ	―		
5区51号建物		IK0523	建材162	広板	芯持丸木	スギ	○	スギ	
5区52号建物	W456	IK0580-1	建材3	底板	柾目	クリ	―		
5区52号建物	W456	IK0580-2	建材3	底板	板目	クリ	―		
5区52号建物	W456	IK0580-3	建材3	底板	板目	クリ	―		
5区52号建物	W456	IK0580-4	建材3	木釘	削出	タケ類	○	タケ亜科	節無
6区15号建物	W1・2	IK0004	建材18	土台	芯持角材	広葉樹	○	広葉樹	
6区15号建物	W3	IK0027	建材16	土台(根太掛け)	芯持材	クリ	―		
6区15号建物	W4	IK0009	建材21	馬屋柱	芯持角材	広葉樹	―		
6区15号建物	W5	IK0002	建材19	土台	芯持角材	クリ	○	クリ	
6区46号建物	W2	IK0588	建材5	桶底板	板目	クリ	―		
6区7号道	W1	IK0249	建材2	木材	芯持角材	マツ	―		
7区42号建物	W1	IK0022	建材66	囲炉裏枠木	半裁状	クリ	―		
7区42号建物	W2	IK0058	建材64	囲炉裏枠木	半裁状	クリ	―		
7区42号建物	W3	IK0056	建材65	囲炉裏枠木	半裁状	クリ	―		
7区53号溝	W1	IK0003	建材18	柱	分割角材	クリ	○	クリ	
5-2区1面	W3	IK0063	№3	根太掛けか?	板目	マツ	―		
5区27号建物	W15	IK0277	不明		芯持角材	クリ	―		
5区16号建物		IK0031	建材70	土台	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物		IK0040	建材535		芯持角材	クリ	―		
6区15号建物		IK0042	建材20	土台	半裁角材	クリ	―		
5区20号建物		IK0051	建材109	土台	芯持角材	クリ	―		
5区21号建物		IK0054	建材468		芯持丸木	ケヤキ?	○	ケヤキ	
5区21号建物		IK0067	建材585	角材	半裁状	クリ	―		
5区21号建物	W45	IK0143-1	建材451	角材	板目	クリ	―		矢板状
5区21号建物	W45	IK0143-2	建材451	角材	半裁状	クリ	―		
5区21号建物	W45	IK0143-3	建材451	角材	半裁状	クリ	―		
5区27号建物		IK0187	建材968	材	分割材	マツ	―		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区27号建物		IK0193	建材969	材	分割材	マツ	―		
5区27号建物		IK0205	建材1093	材	芯持丸木	クリ	―		
5区27号建物		IK0221	建材1247	材	芯持角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		IK0228	建材812	束	芯持角材	マツ	―		
5区27号建物		IK0232	建材825	角材	分割角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0233	建材1210	半丸太	1/4割	クリ	―		
5区27号建物		IK0250	建材813	角材	分割材	マツ	―		
5区27号建物		IK0253	建材641	柱	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0260-1	-	-	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0260-2	-	-	芯持材	クリ	―		ホゾ穴内
5区27号建物		IK0274	-	-	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0281	建材460	木材	半裁状	マツ	―		
5区27号建物		IK0282	建材881	角材	1/4割	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		IK0289	建材133	杭	分割材	クリ	―		
5区27号建物	W50	IK0290	建材244	根太	半裁角材	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		IK0295	建材61	板	板目	クリ	―		
5区51号建物		IK0296	建材151	杭	芯持丸木	クリ	―		
5区27号建物		IK0297	建材106	木製品	芯持丸木	クリ	―		
5区27号建物		IK0300	建材193	角材	四方柾	マツ	―		
5区27号建物		IK0306	建材1069	角材	芯持角材	マツ	―		
5区51号建物		IK0307	建材152	杭	芯持丸木	クリ	―		
5区27号建物		IK0308	建材174	角	芯持角材	マツ	―		
5区27号建物		IK0315	建材290	板	板目	マツ	―		
5区51号建物		IK0321	建材149	角材	半裁状	クリ	―		
5区51号建物		IK0323	建材143	杭	みかん割状	クリ	―		
5区27号建物		IK0328	建材842	根太杭	芯持丸木	クリ	―		
5区27号建物		IK0332	建材1363	根太	分割材	クリ	―		
5区27号建物		IK0335	建材266	木材	半裁角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0340	建材100	桶（底板）	柾目	針葉樹	○	針葉樹	
5区27号建物		IK0341	建材1031	板	柾目	マツ	―		
5区27号建物		IK0343	建材733	板	柾目	スギ	―		
5区27号建物		IK0346	建材298	角材	半裁角材	マツ	―		
5区27号建物		IK0348	建材162	板	板目	マツ	―		
5区27号建物		IK0352	建材1194	板	板目	マツ	―		
5区27号建物		IK0354	建材891	角材	芯持材	マツ	―		
5区27号建物		IK0355	建材1071	板	板目	クリ	―		
5区27号建物		IK0357	建材760	桶	板目	マツ	―		
5区27号建物		IK0359	建材891	角材	芯持角材	マツ	―		
5区27号建物		IK0360	建材1063	支脚	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0361	-	桶	柾目	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		IK0372	建材364	板材	板目	クリ	―		
5区27号建物		IK0380	建材584	板	柾目	マツ	―		
-		IK0385	-	-	芯持丸木	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		IK0396	建材270	板	板目	クリ	―		
5区16号建物		IK0397	建材113	-	芯持角材	クリ	―		
5区27号建物		IK0522	建材1296	木材	板目	クリ	―		
5区51号建物		IK0528	建材42	木	芯持丸木	カツラ?	○	カツラ	
5区27号建物		IK0531	建材953	板	板目	マツ	―		
6区5号屋敷		IK0563	建材8	-	板目	クリ	―		洗い場
5区27号建物		IK0566	建材169	板	板目	クリ	―		
5区27号建物		IK0569	建材1238	木材	柾目	ナラ類	―		
5区27号建物		IK0570	建材586	板	板目	クリ	―		
5区27号建物		IK0571	建材397	板	柾目	ナラ類	―		
5区51号建物		IK0572	建材256	木材	板目	クリ	―		
6区3号屋敷		IK0573	建材5	木材	板目	クリ	―		洗い場
5区27号建物		IK0583	建材719	貫板	板目	マツ	―		
5区51号建物		IK0596-1	建材150	角材	分割角材	針葉樹	○	針葉樹	
5区51号建物		IK0596-2	建材150	板	板目	針葉樹	○	針葉樹	一番長い板
5区46号建物	W1	IK0599	建材4		分割材	マツ	―		
5区27号建物		IK0606	建材765	床板	板目	クリ	―		
5区27号建物		IK0652	建材94	板材	板目	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
-		IK0683	-		芯持材	マツ	―		
5区27号建物		IK0973	建材1279	床板	板目	スギ	―		
-		IK6135	-	たる側面	未観察	スギ	○	スギ	
5区27号建物		61220②	建材405	わっぱ	未観察	マツ	―		
5区27号建物	W278-1	61222	349	漆製品	未観察	モミ	○	モミ属	
5区27号建物	W278-6	61224	347	漆製品	未観察	針葉樹	○	針葉樹	
5区27号建物	W278-3	61225	348	漆製品	未観察	クリ	―		
5区27号建物	W278-5	61226	345	漆製品	未観察	針葉樹	○	モミ属	
5区27号建物	W278-9	61227	346	漆製品	未観察	モミ	―		
5区27号建物	W278-7	61228	343	漆製品	未観察	クリ	―		
5区27号建物	W278-4	61229	344	漆製品	未観察	モミ	―		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区27号建物	W278-8	61230	341	漆製品	未観察	モミ	－		
5区27号建物		61231-1	338	板(2枚)	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61231-2	338	板(2枚)	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61231-3	338	板(2枚)	未観察	針葉樹	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		61231-4	338	板(2枚)	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61232	340	板(2枚)	未観察	マツ	－		
5区-		61233	395	おひつ	未観察	モミ	－		
5区27号建物		61234	452	蓋	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W362	61235	289	桶の側板	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W355	61236①	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236②	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236③	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236④	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236⑤	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236⑥	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W355	61236⑦	443	桶の蓋	未観察	マツ	－		
1区42号建物		61246	一括	破片	未観察	マツ	－		
1区42号建物		61247	28	木片	未観察	クリ	－		
5区42号建物	W14	61255①	35	桝（ます）	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W14	61255②	35	桝（ます）	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W14	61255③	35	桝（ます）	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W14	61255④	35	桝（ます）	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W14	61255⑤	35	桝（ます）	未観察	マツ	－		
7区1面		61256①	60-1	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256②	60-2	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256③	60-3	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256④	60-4	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256⑤	60-5	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256⑥	60-6	板	未観察	マツ	－		
7区1面		61256⑦	60-7	板	未観察	スギ	－		
7区1面		61256⑧	60-8	板	未観察	ヒノキ科	○	サワラ	
7区1面		61256⑨	60-9	板	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W17	61257①	23	箱	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W17	61257②	23	箱	未観察	広葉樹	○	タカノツメ	
5区42号建物	W8	61260	7	おひつ（底）	未観察	ヒノキ科	－		
5区42号建物	W16	61263	53	板	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W12	61264	21	火打ち箱	未観察	マツ	－		
5区42号建物	W7	61265	3	下駄	未観察	クリ	○	クリ	
-		61266	-	-	未観察	マツ	－		
7区1面	W1	61271①	56	-	未観察	ブナ	－		
6区15号建物		61275	27	建材	未観察	クリ	－		
6区15号建物		61276	一括	破片	未観察	カツラ	○	カツラ	
6区15号建物		61277	建材28	建材	未観察	ブナ	－		
6区15号建物		61283	16	建材	未観察	スギ	○	スギ	
5区27号建物	W231	61290①	220	馬の鞍	未観察	ニレ科	○	ケヤキ	
5区27号建物	W231	61290②	220	馬の鞍	未観察	ニレ科	○	ケヤキ	
5区27号建物	W231	61290③	220	馬の鞍	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W231	61290④	220	馬の鞍	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W231	61290⑤	220	馬の鞍	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W231	61290⑦	220	馬の鞍	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61297	979	わっぱ	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		61300	1021	半丸型	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区27号建物	W435	61301	994	-	未観察	環孔材	○	ウルシ科	
5区27号建物	W281	61302	1024	重箱	未観察	ホオノキ	○	モクレン属	
5区27号建物	W353	61304	946	ミズオケ	未観察	スギ	－		
5区27号建物		61309①	222	桶	未観察	スギ	－		
5区27号建物		61309②	222	桶	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W367	61311	973	蓋	未観察	モミ	○	モミ属	
5区27号建物		61362	985	板	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W299	61363	1066	すいのう	未観察	マタタビ	○	マタタビ属	
5区27号建物		61364	983	角材	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61404	1125	曲物	未観察	モミ	－		
5区27号建物	W426	61408	1151	柄	未観察	ナラ類	－		
5区27号建物	W357	61413①	1107	樽の栓	未観察	マツ	－		
5区27号建物		61414	1108	樽の栓	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W385	61420	1152	こね鉢	未観察	ニレ科	○	ケヤキ	
5区27号建物		61421①	1153	こね鉢	未観察	ニレ科	○	ケヤキ	
5区27号建物		61421②	1153	こね鉢	未観察	ケヤキ	○	ケヤキ	
5区27号建物		61421③	1153	こね鉢	未観察	ケヤキ	－		
5区27号建物		61422	1153	こね鉢	未観察	ケヤキ	－		
5区27号建物	W431	61423	1195	臼	未観察	ケヤキ	－		
5区27号建物	W280	61434	1212	置台	未観察	ブナ	－		
5区27号建物	W270	61435	1204	曲物	未観察	スギ	○	スギ	

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区27号建物		61435	1204	わっぱ底	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W268	61436	1206		未観察	モミ	○	モミ属	
5区27号建物		61436	1206	底	未観察	モミ	○	モミ属	
5区27号建物		61441	1153	こね鉢	未観察	ケヤキ	－		
5区27号建物	W312	61472①	1069	柄杓	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物	W312	61472②	1069	柄杓	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W312	61472	1069	柄杓の底	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W450	61474①	1265	-	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区27号建物		61474②	1265	-	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W368	61476	1268	盥(たらい)	未観察	スギ	－		
5区27号建物	W246-1	61496①	-	漆深椀	未観察	ブナ	－		
5区27号建物	W246-2	61496②	-	漆浅椀	未観察	ブナ	－		
5区27号建物	W246-3	61496③	-	漆深椀蓋	未観察	ブナ	－		
5区27号建物	W434	61547	1321	-	未観察	ナラ類	－		
5区27号建物		61549	1332	こね鉢	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区27号建物	W232	61550③	1319	鞍	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W439	61570	1381	取手	未観察	スギ	－		
5区27号建物		61571	1382	椀	未観察	ブナ	－		
5区27号建物		61572	1383	椀	未観察	ブナ	－		
5区27号建物	W250	61573	1384	深椀蓋	未観察	ブナ	－		
5区27号建物		61575	1375	桶	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W348	61576	-	栓	未観察	針葉樹	○	針葉樹	
5区27号建物	W131	61582	1356	根太	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W132	61583	1357	根太	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W135	61584	1360	根太	未観察	マツ	－		
5区27号建物	W136	61585	1361	根太	未観察	クリ	－		
		61612		木片	未観察	クリ	－		
5区27号建物	W420	61626-1	1121	柄	未観察	ナラ類	－		
5区27号建物	W420	61626-2	1121	柄	未観察	ナラ類	－		
5区27号建物	W420	61626-3	1121	柄	未観察	ナラ類	－		
5区27号建物	W420	61626-4	1121	柄	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区27号建物	W420	61626-5	1121	柄	未観察	クリ?	○	クリ	
5区27号建物	W416	61628-2	1409	柄	未観察	広葉樹	－		
5区27号建物	W416	61628-5	1409	柄	未観察	広葉樹	－		
5区27号建物		61629-2	1410	-	未観察	広葉樹	－		
5区27号建物		61632	1406	わっぱ	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区16号建物	W26	61676	製品12	板　墨書あり	未観察	スギ	○	スギ	
5区16号建物		61677	製品17	漆塗り	未観察	ホオノキ	○	モクレン属	
5区16号建物		61678-2	製品18	漆塗り	未観察	針葉樹	○	スギ	
5区16号建物		61681	製品82	漆塗り	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区16号建物		61682	製品83	漆塗り	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区20号建物	W22	61686	建材25	角材	未観察	スギ	○	スギ	
5区20号建物	W23-1	61688①	製品4	下駄	未観察	ブナ	－		
5区20号建物	W23-2	61688②	製品4	下駄	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区20号建物	W25-1	61689①	製品6	下駄	未観察	クリ	○	クリ	
5区20号建物		61689②	製品6	下駄	未観察	クリ	○	クリ	
5区20号建物	W20	61691	製品7	漆椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区20号建物		61694	製品16	下駄	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区20号建物	W26	61695	製品10	下駄	未観察	クリ	○	クリ	
5区20号建物	W21	61696	製品13	椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区20号建物		61697	製品15	曲物	未観察	スギ	○	スギ	
5区21号建物	W170	61715	233	取手	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W148	61716	84	床板	未観察	スギ	○	スギ	
5区21号建物	W96-2	61717	158.175①	重箱	未観察	ヒノキ科	－		
5区21号建物	W106	61727	26	膳	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W73	61728	257	ヘラ	未観察	ヒノキ科	－		
5区21号建物	W177	61729	135	杵	未観察	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W104	61732	130	板	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W141-1	61733	②140	下駄	未観察	クリ	○	クリ	
5区21号建物	W141-2	61734	②140	下駄	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物		61735	製品10	椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区21号建物	W120	61736	75	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W124	61738	72	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W136	61739	64	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W122	61741	36	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W125	61742	78	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W137	61744	65	下駄	未観察	クリ	－		
5区21号建物		61746	製品36	下駄	未観察	サクラ?	○	ヤナギ属	
5区21号建物		61747	製品169	下駄	未観察	サクラ?	○	ガマズミ属	
5区21号建物	W95	61748	210	箱	未観察	ヒノキ科	－		
5区21号建物	W103	61750	151	桝(ます)	未観察	ヒノキ科	－		
5区21号建物	W74	61752	218	しゃもじ	未観察	クリ	－		
5区21号建物	W169	61753	176	行灯の取手	未観察	スギ	○	スギ	

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区21号建物	W164	61755	製品7	背負子	未観察	クリ	―		
5区21号建物	W164	61755①	製品7	背負子	未観察	クリ	―		
5区21号建物	W164	61755②	製品7	背負子	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物	W164	61755③	製品7	背負子	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物		61757	製品7		未観察	クリ	―		
5区21号建物		61759	製品26	-	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物		61760	製品175①	-	未観察	タカノツメ?	○	タカノツメ	
5区21号建物		61761	製品176	-	未観察	モミ	○	モミ属	
5区21号建物	W138	61763②	168-②	下駄	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物	W138	61763③	168-②	下駄	未観察	モミ	○	モミ属	
5区21号建物	W108	61767	157	箱	未観察	モミ	○	モミ属	
5区21号建物	W109-2	61768	144	箱	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W107-1	61770	144	箱	未観察	マツ	○	マツ属複維管束亜属	
5区21号建物	W92-3	61773	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-4	61774	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-5	61775	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-6	61776	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-7	61777	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-8	61778	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W92-9	61779	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	○	ヒノキ	
5区21号建物	W140-2	61781②	141	下駄の歯	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物	W128	61782	301	下駄	未観察	クリ	―		
5区21号建物	W105-2	61785	200	足	未観察	ヒノキ科	―		
5区21号建物	W180	61787	89	木槌	未観察	サクラ?	○	ガマズミ属	
5区21号建物	W178	61788	54	木槌	未観察	広葉樹	○	ゴンズイ	
5区21号建物	W75	61790	15	杓子	未観察	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区21号建物	W65	61791	71	漆器?	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区21号建物	W62	61792	13	漆深椀	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区21号建物	W67	61793	119	漆椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区21号建物	W63	61794	12	漆椀	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区21号建物	W66	61795	52	漆椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区21号建物	W64	61796	19	漆椀	未観察	ブナ	○	ブナ属	
5区21号建物	W61	61797	136	漆深椀	未観察	トチノキ	○	トチノキ	
5区21号建物		61799	147	盆底	未観察	ヒノキ科	―		
5区21号建物	W92-10	61800	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	―		底面
5区21号建物	W92-2	61801	147	丸膳	未観察	ヒノキ科	―		
5区21号建物	W167	61802	7	鞍の一部	未観察	ヒノキ科	―		
5区21号建物	W54	61806	②/8 270	唐臼上の材	未観察	クリ	―		
5区21号建物	W54	61806	③/8 270	唐臼上の材	未観察	クリ	―		
5区薪遺構		―	No.1	薪	芯持丸木	ナラ類	○	コナラ属コナラ節	
5区薪遺構		―	No.3	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.4	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.5	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.6	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.7	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.8	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.9	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.10	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.11	薪	芯持丸木	ハンノキ	―		
5区薪遺構		―	No.12	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.13	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.14	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.15	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.16	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.17	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.18	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.19	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.20	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.21	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.22	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.23	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.24	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.25	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.26	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.27	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.28	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.29	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.30	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.31	薪	芯持丸木	環孔材	○	コナラ属コナラ節	
5区薪遺構		―	No.32	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.33	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.34	薪	芯持丸木	ナラ類	―		
5区薪遺構		―	No.35	薪	芯持丸木	ナラ類	―		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区薪遺構		—	No.36	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.37	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.38	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.39	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.40	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.41	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.42	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.43	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.44	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.45	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.46	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.47	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.48	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.49	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.50	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.51	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.52	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.53	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.54	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.55	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.56	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.57	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.58	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.59	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.60	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.61	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.62	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.63	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.64	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.65	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.66	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.67	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.68	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.69	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.70	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.71	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.72	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.73	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.74	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.75	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.76	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.77	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.78	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.79	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.80	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.81	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.82	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.83	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.85	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.86	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.87	薪	芯持丸木	環孔材	○	クリ	
5区薪遺構		—	No.88	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.89	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.91	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.92	薪	芯持丸木	シデ?	○	クマシデ属イヌシデ節	
5区薪遺構		—	No.94	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.95	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.96	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.97	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.98	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.99	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.101	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.102	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.103	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.104	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.105	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.107	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	No.108	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.109	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.110	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.112	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	No.113	薪	芯持丸木	ナラ類	—		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区薪遺構		—	№114	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№115	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№116	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№117	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№118	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№119	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№120	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№121	薪	芯持丸木	ナラ類	—		樹皮のみ
5区薪遺構		—	№122	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№123	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№124	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№126	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№128	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№129	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№130	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№131	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№132	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№133	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№134	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№135	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№136	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№137	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№138	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№139	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№140	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№141	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№145	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№146	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№150	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№151	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№152	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№154	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№156	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№157	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№158	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№161	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№162	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№163	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№164	薪	芯持丸木	サクラ?	○	ガマズミ属	
5区薪遺構		—	№165	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№166	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№167	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№170	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№173	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№174	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№176	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№177	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№178	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№184	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№185	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№186	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№187	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№188	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№190	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№191	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№192	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№195	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№198	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№199	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№202	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№203	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№204	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№205	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№206	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№207	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№208	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№209	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№210	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№211	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№212	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№213	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№214	薪	芯持丸木	ナラ類	—		

遺構名	掲載番号	管理番号	遺物番号	資料名・内容	木取り	肉眼観察結果	プレパラート	種類	備考
5区薪遺構		—	№215	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№216	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№217	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№218	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№223	薪	芯持丸木	サクラ?	—		
5区薪遺構		—	№225	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№226	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№227	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№228	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№229	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№230	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№234	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№235	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№236	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№237	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№238	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№239	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№240	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№241	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№242	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№243	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№244	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№247	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№248	薪	芯持丸木	サクラ?	—		
5区薪遺構		—	№249	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№250	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№254	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№255	薪	芯持丸木	サクラ?	—		
5区薪遺構		—	№257	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№258	薪	芯持丸木	ブナ	○	ブナ属	
5区薪遺構		—	№261	薪	芯持丸木	サクラ?	—		
5区薪遺構		—	№262	薪	芯持丸木	サクラ?	—		
5区薪遺構		—	№265	薪	芯持丸木	ハンノキ?	○	広葉樹	
5区薪遺構		—	№272	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№276	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№277	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№278	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№282	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№283	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№286	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№287	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№291	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№294	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№295	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№301	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№305	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№306	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№307	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№308	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№309	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№310	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№315	薪	芯持丸木	ハンノキ	—		
5区薪遺構		—	№316	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№317	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№318	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№319	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№320	薪	芯持丸木	ナラ類	—		
5区薪遺構		—	№321	薪	芯持丸木	ナラ類	—		

掲載番号＝報告書に掲載した番号
管理番号＝整理段階での遺物番号
遺物番号＝発掘番号での遺物取上番号

放射組織は異性、１～３細胞幅、１～40細胞高のものと集+合放射組織とがある。

・ブナ属(*Fagus*)　ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性､単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ節(*Quercus sect. Prinus*)　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ケヤキ(*Zelkova serrata*(Thunb.)Makino)　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～６細胞幅、１～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクレン属(*Magnolia*)　モクレン科

散孔材で、道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性､１～２細胞幅、１～40細胞高。

・カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)　カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は極めて高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～30細胞高。

・マタタビ属(*Actinidia*)　マタタビ科

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外でやや急激に径を減じて散在する。道管はほぼ単独で、時に２個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～４細胞幅、１～60細胞高。

・サクラ属(*Prunus*)　バラ科

散孔材で、道管は単独または２～６個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～５細胞幅、１～30細胞高。

・ウルシ属(*Rhus*)　ウルシ科

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外への移行は緩やか。晩材部の道管は保存が悪く観察できない。道管は単穿孔を有し､壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。

・トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume)　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１～15細胞高で層階状に配列する。

・ゴンズイ(*Euscaphis japonica*(Thunb.)Kanitz)　ミツバウツギ科ゴンズイ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状～対列状に配列する。放射組織は、異性、単列で１～20細胞高前後の組織と、５～10細胞幅、20～60細胞高の組織とがある。

・タカノツメ(*Evodiopanax innovans*(Sieb. et Zucc.) Nakai)　ウコギ科タカノツメ属

環孔材で、孔圏部は接線方向に疎な１列、孔圏外で急激に径を減じたのち、２～４個が放射方向、斜方向等に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・マダケ属(*Phyllostachys*)　イネ科

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束をする。維管束は柔組織中

に散在し、不斉中心柱をなす。

いわゆるタケ・ササ類である。組織構造から種類を細分することは困難であるが、節が二重になる特徴からマダケ属と判断される。なお、加工等により、節の形状が確認できなかった試料をタケ亜科として記載した。

４．考察

石川原遺跡の試料には21種類の樹種が認められた。各種類の材質等についてみると、針葉樹のカラマツは、火山災害地等にいち早く侵入する先駆植物となる落葉高木であり､木材は針葉樹の中では比較的重硬で強度が高い。マツ属複維管束亜属は本州ではアカマツまたはクロマツであり、本地域ではアカマツが一般的である。アカマツは、二次林等に生育する常緑高木であり、木材は強度と保存性が高い。モミ属とツガ属は、山地斜面や高山等に生育する常緑高木である。モミ属は強度と保存性は低いとされる。スギ、ヒノキ、サワラは山地・丘陵などに生育し、また植栽される常緑高木であり、木材は比較的耐水性が高い。広葉樹のヤナギ属は、河畔から山地まで広く分布する落葉高木～低木であり、木材は強度と保存性が低い。ハンノキ亜属は、河畔等に生育する落葉高木であり、木材は比較的強度が高い。ブナ属は、山地の冷温帯性落葉広葉樹林の主要な構成種を含む落葉高木であり、木材は比較的重硬で強度が高いが、保存性は低いとされる。コナラ節は、山地の冷温帯性落葉広葉樹林や二次林の主要な構成種を含み、イヌシデ節、クリ、サクラ属、ウルシ属、タカノツメ、ゴンズイはその林内や林縁部に生育する。落葉高木～低木であり、比較的強度が高い種類が多い。ケヤキ、モクレン属、カツラ、シナノキ属は、渓畔等に生育する落葉高木である。ケヤキとクワ属は重硬で強度と耐朽性が高い。一方、モクレン属、カツラはやや軽軟な部類に入る。

器種が分かる資料についてみると、建築部材ではマツ属複維管束亜属やクリの利用が多い傾向がある。一方、桶ではマツ属複維管束亜属、スギ、クリの利用が見られ、特に埋設し肥溜めとして使用した桶ではクリの利用が多い。これは、運搬する必要が無いため、重いが強度や耐朽性の高い木材を利用したことが推定される。

一方、薪についてみるとコナラ節が多い傾向がある。コナラ節には、二次林(いわゆる雑木林)の主要な構成種であるコナラが含まれるが、こうした二次林は古くから薪炭林として管理・維持されてきた。本地域でも、薪炭林としての二次林があり、そこから薪材を得ていた可能性がある。

試料観察時と実際に同定した結果について、針葉樹のマツ属、スギ、広葉樹のコナラ節やクリでは大きな違いは見られなかったが、ヒノキ科にはヒノキとサワラが確認され、コナラ節やクリ以外の広葉樹では予想と異なる種類が認められた例もあった。この点を考慮すると、本分析調査においてヒノキ科とした試料、ハンノキやサクラとした試料等を中心に、プレパラート作成と顕微鏡による同定を行う点数を増やして詳細を確認する必要がある。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

第２節　建築部材・木製品の樹種同定（２）

第１項　同定委託の目的と成果

第１節に述べたように、本遺跡では天明３(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流で多くの木製品等が埋没したが、これらの樹種を把握するため樹種同定を行った。本節では第２回の樹種同定結果を記す。

さて、本遺跡では泥流下に出土した木製品を中心に、建築材等を含む木質遺物、293点の同定作業をパリノ・サーヴェイ社に委託、実施した。

この結果、本遺跡では18種類の樹種を有する材が同定されたが、このうち建築部材にはマツ類やクリ材、下駄はクリ、ハンノキ、位牌はスギ、キリ、マツ類が見られ、建物脇にはナシ亜科の植物が生育していたことが確認された。

第２項　建築部材等の樹種同定（２）

はじめに

石川原遺跡では、天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う土石流によって埋もれた村が良好な保存状態で検出されている。木材や木製品の出土状態は、部位復元が可能な状態で建築部材が出土している他、様々な道具類も大量に出土しており、家単位で道具の種類や材質等を比較検討できる貴重な資料となることが期待される。

本報告では、出土した木製品について、用材選択に関する資料を得るための樹種同定を実施する。なお、本遺跡では、これまでにも多くの建築部材・木製品について、肉眼による観察と樹種同定が実施されており、大まかな傾向が明らかとなっている。これらの事情を考慮し、今回の調査ではより多くの資料数を得るために、実体験顕微鏡による観察・同定を中心に実施する。

１．試料

試料は、出土した建築部材および木製品から選択された293点である。試料の大部分(279点)は、昨年度の分析調査や保存処理の際に木片が採取されており、その木片を試料とする。一方、木片未採取の14点については、木片の採取から実施する。

２．分析方法

木片未採取の14点は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団にて木取り観察を実施した上で木片を採取する。木片は、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の表面を整えた上で双眼実体顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して分類群を同定する。この際、一部の試料については、より正確に樹種を確認する目的から、整形の際に生じる切片を用いて簡易的なプレパラートを作製し、生物顕微鏡による観察を実施する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

３．結果

樹種同定結果を表２に示す。木製品は、針葉樹６分類群(マツ属複維管束亜属・モミ属・ツガ属・マツ科・スギ・ヒノキ科)と広葉樹18分類群(ヤナギ属・ハンノキ属ハンノキ亜属・ハンノキ属・カバノキ属?・ブナ属・コナラ属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクレン属・カツラ・サクラ属・ナシ亜科・カエデ属・トチノキ・アワブキ属・シナノキ属?・ヤマボウシ近似種・キリ・ガマズミ属)に同定された。なお、21号建物W113と51号建物W27の２点は、広葉樹であるが、木片が小さく道管配列等が観察できないため、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylon*)　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１－15細胞高。

・モミ属(*Abies*)　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は

狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１－４個。放射組織は単列、１－20細胞高。

・ツガ属(*Tsuga*)　マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、年輪界近くに認められるが、数が少なく目立たない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１－４個。放射組織は単列、１－20細胞高。

・マツ科(*Pinaceae*)

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。放射組織には柔細胞の他に水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は低倍での観察のため、確認できない。日本産針葉樹で垂直樹脂道を持つのはマツ科のマツ属、カラマツ属、トウヒ属、トガサワラ属の４属のみである。本遺跡では、マツ属複維管束亜属が多数確認されている他、カラマツも確認されており、この２種類のうち、いずれかと考えられる。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ科　Cupressaceae

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射柔細胞の分野壁孔は低倍での観察のため、確認できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヤナギ属(*Salix*)　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(*Alnus* subgen. *Alnus*)　カバノキ科

散孔材で、道管は単独または２－４個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと集合放射組織とがある。

集合放射組織が認められなかった試料はヤシャブシ亜属の可能性もあるため、ハンノキ属とした。

・カバノキ属?(*Betula*?)　カバノキ科

散孔材で、道管は単独または２－４個が放射方向に複合して散在する。放射組織は１～４細胞幅、１～30細胞高前後。

低倍の観察で穿孔板や放射組織の詳細が観察できなかったため、カバノキ属?とした。

・ブナ属(*Fagus*)　ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に２－３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ節(*Quercus* sect. *Prinus*)　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１－３列、孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性、単列、１-15細胞高。

・ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１－２列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は異性、１－６細胞幅、１－50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクレン属(*Magnolia*)　モクレン科

散孔材で、道管は単独または２－４個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管内壁

表２　木製品同定一覧（２）

遺構名	掲載番号	管理番号	枝番	遺物番号	資料名・内容	部位	木取り	観察結果
5区16号建物	W12	IK 0064		建材41	板(長い)		未観察	マツ科
5区16号建物	W30	60854		133	下駄		未観察	クリ
5区16号建物	W32	60855		139	下駄		未観察	クリ
5区20号建物	W3	IK 0079		建材110　②	土台		未観察	クリ
5区20号建物	W5	IK 0018		建材28　①	土台　38と接合		未観察	クリ
5区20号建物	W5	IK 0038		建材28　②	土台　18と接合		未観察	クリ
5区20号建物	W6	IK 0259		建材161　②	土台		芯持角材	クリ
5区20号建物	W7	IK 0037		建材54　②	土台		芯持材	クリ
5区20号建物	W8	IK 0074		建材129	根太		分割角材	クリ
5区20号建物	W9	IK 0049		建材94	根太		芯持材	クリ
5区20号建物	W19	IK 0264		製品12	台		板目	クリ
5区20号建物	W24	61690		製品5	下駄		未観察	サクラ属
5区20号建物	W27	61693	①	製品18	下駄		未観察	ハンノキ属
5区20号建物	W28	61631		27	木槌		未観察	ガマズミ属
5区27号建物	W251	60907	1	15	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W329-1	60925	1	23	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W238-1・2	60897	1	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-3・4	60897	2	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-5・6	60897	3	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-9・10	60897	5	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-11・12	60897	6	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-13・14	60897	7	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-15・16	60897	8	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-17・18	60897	9	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W238-19・20	60897	10	37	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-2	60934	1	38	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-1	60934	1-2	38	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-6	60934	2	38	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-5	60934	2-2	38	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-3・4	60934	3	38	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-7・8	60934	4	38	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-10	60934	5	38	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W239-9	60934	5-2	38	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W240-4	60931	2-1	69	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W241-3	60930	1	70	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W241-1	60930	2	70	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W242-1	60929	1	71	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W242-1	60929	2	71	椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W266	60924	2	97	わっぱ	底板	未観察	ケヤキ
5区27号建物	W330	60902		111	下駄		未観察	トチノキ
5区27号建物	W263	60901		120	ワッパ		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W344	60926		125	下駄		未観察	クリ
5区27号建物	W235	60932		175	馬ブラシ		未観察	マツ科
5区27号建物	W313	61213	柄	201	柄杓		未観察	マツ科
5区27号建物	W278-2	61223		350	漆製品		未観察	モミ属
5区27号建物	W277	61217	1	415	塗り物		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W346	61105		518	下駄		未観察	クリ
5区27号建物	W262	61110	2	548	曲物		未観察	スギ
5区27号建物	W415	61096		579	柄		未観察	コナラ属コナラ節
5区27号建物	W421	61623	1	593	柄		未観察	アワブキ属
5区27号建物	W333	61104		632	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W236	61087		726	おろし		未観察	クリ
5区27号建物	W402	61113	2	795	自在鉤	心棒	未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W261	61109	2	802	曲物		未観察	ツガ属
5区27号建物	W272	61176		816	ワッパ		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W258	61136		821	おひつ(曲物)		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W271	61152	1	855	ワッパ		未観察	ツガ属
5区27号建物	W274-1	61147	1-1	856	丸膳ワッパ		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W274-2	61147	1-2	856	丸膳		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W274-3	61147	1-3	856	丸膳		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W284	61148	2	860	漆		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W252	61157		861	漆椀		未観察	モクレン属
5区27号建物	W296	61140		864	しゃもじ		未観察	ブナ属
5区27号建物	W245	61159		865	椀		未観察	モクレン属
5区27号建物	W237	61142		868	板(おろし板?)		未観察	マツ科
5区27号建物	W335	61150		870	下駄		未観察	カエデ属
5区27号建物	W345	61151		871	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W336	61180		872	下駄		未観察	ハンノキ属

遺構名	掲載番号	管理番号	枝番	遺物番号	資料名・内容	部位	木取り	観察結果
5区27号建物	W337	61181		873	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W400	61167	2	874	自在鉤		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W388	61133		912	戸棚	敷居	未観察	モミ属
5区27号建物	W255	61143		921	漆椀蓋		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W354	61173	1	944	蓋		未観察	マツ科
5区27号建物	W297	61174		947	しゃもじ		未観察	ケヤキ
5区27号建物	W338	61291		995	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W208-8	61568	5	1155	大戸　戸板	戸板	板目	マツ科
5区27号建物	W208-2	61568	7	1155	大戸　下柱	下柱	分割角材	クリ
5区27号建物	W208-2	61568	7	1155	大戸　下柱　歯車	下柱(歯車)	柾目	ミズキ属
5区27号建物	W208-2	61568	7	1155	大戸　下柱　歯車芯	下柱(歯車芯)	削出	ミズキ属
5区27号建物	W208-4	61568	8	1155	大戸　横柱	横柱	四方柾	マツ属複維管束亜属
5区27号建物	W208-1	61568	9	1155	大戸　横さん	横桟	四方柾	マツ科
5区27号建物	W208-3	61568	10	1155	大戸　縦さん	縦桟	柾目	マツ科
5区27号建物	W436	61416		1164	木鉢		未観察	トチノキ
5区27号建物	W339	61417		1188	下駄		未観察	トチノキ
5区27号建物	W341	61440		1244	下駄		未観察	ヤナギ属
5区27号建物	W340	61439		1258	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W427	61478		1270	木槌	打部	未観察	カエデ属
5区27号建物	W427	61478		1270	木槌	柄	未観察	サクラ属
5区27号建物	W343	61546		1320	下駄		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W342	61545		1331	下駄		未観察	ハンノキ属ハンノキ亜属
5区27号建物	W425	61556	2	1334	木槌		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W430	61559		1338	木槌		未観察	カエデ属
5区27号建物	W429	61569		1380	大槌		未観察	カエデ属
5区27号建物	W423	61667		1412	踏み鋤		未観察	サクラ属
5区27号建物	W156	IK 1010		№1039	梁か？		芯持角材	マツ科
5区27号建物	W155	IK 1009		№1040	梁		半裁角材	マツ科
5区27号建物	W200	IK 0931		№1056	暖簾かけ		未観察	コナラ属コナラ節
5区27号建物	W158	IK 1007		№1057	梁か？		未観察	マツ科
5区27号建物	W157	IK 1008		№1094	梁か？		芯持角材	クリ
5区27号建物	W10	IK 1011		№1099	土台		芯持角材	クリ
5区27号建物	W453	IK 0790		№1126	丸棒		未観察	クリ
5区27号建物	W124	IK 0844		№1304	根太		未観察	スギ
5区27号建物	W216	IK 1020		№1323	柱		芯持角材	マツ科
5区27号建物	W154-1・2	IK 0843		№1369	敷居(2本溝)		未観察	マツ科
5区27号建物	W369	IK 0921		№197①	樽		未観察	スギ
5区27号建物	W349	IK 0922		№361	樽	側板	未観察	スギ
5区27号建物	W350	IK 0850	1	№474	樽		未観察	スギ
5区27号建物	W417	IK 0739		№638	棒曲り		未観察	ハンノキ属
5区27号建物	W23	IK 1013		№655	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W292	IK 0920		№770	箱		未観察	マツ科
5区27号建物	W264	60839	1	一括	ワッパ?		未観察	モミ属
5区27号建物	W243-1	60840	1	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-4	60840	2	一括	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-7	60840	3	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-10	60840	4	一括	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-2	60840	5	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-8	60840	6	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-5	60840	7	一括	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-12	60840	8	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-3	60840	9	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-9	60840	10	一括	漆椀		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-6	60840	11	一括	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W243-11	60840	12	一括	蓋		未観察	ブナ属
5区27号建物	W283	60841	1	一括	箱		未観察	モクレン属
5区27号建物	W445	IK 0486		建材1002	板　ホゾ穴4		未観察	マツ科
5区27号建物	W111	IK 0150		建材1017	柱		分割角材	マツ科
5区27号建物	W379	IK 0278		建材1027	機織台か？		未観察	クリ
5区27号建物	W9	IK 0154		建材1029	柱		分割角材	クリ
5区27号建物	W443	IK 0441		建材1053	穴あき板		未観察	マツ科
5区27号建物	W164	IK 0203		建材1082	根太		分割角材	マツ科
5区27号建物	W165	IK 0208		建材1083	根太		分割角材	マツ科
5区27号建物	W166	IK 0209		建材1084	根太か？		四方柾	マツ科
5区27号建物	W169	IK 0206		建材1087	根太		分割角材	マツ科
5区27号建物	W206-1	IK 0172	1	建材1112	階段	側板	板目	マツ科
5区27号建物	W206-2	IK 0172	2	建材1112	階段	踏板a	板目	クリ
5区27号建物	W206-2	IK 0172	2	建材1112	階段	踏板b	板目	マツ科
5区27号建物	W206-3	IK 0172	3	建材1112	階段	裏板	板目	スギ

遺構名	掲載番号	管理番号	枝番	遺物番号	資料名・内容	部位	木取り	観察結果
5区27号建物	W61	IK 0167		建材1119	根太		芯持角材	スギ
5区27号建物	W32	IK 0144		建材1160	大引		芯持丸木	クリ
5区27号建物	W33	IK 0155		建材1161	大引		芯持角材	クリ
5区27号建物	W424	IK 0365		建材1189	踏み鋤	柄	芯持材	クリ
5区27号建物	W218	IK 0268		建材1197	敷居（３本溝）		未観察	マツ科
5区27号建物	W433	IK 0509	1	建材1266	木製品		未観察	クリ
5区27号建物	W199	IK 0659		建材1272	暖簾かけ		未観察	クリ
5区27号建物	W210	IK 0224		建材1286	壁材		芯持角材	クリ
5区27号建物	W215	IK 0225		建材1287	壁		芯持角材	クリ
5区27号建物	W213	IK 0198		建材1290	壁の横板(貫か？)		板目	マツ科
5区27号建物	W214	IK 0182		建材1291	壁の横板(貫か？)		板目	マツ科
5区27号建物	W126	IK 0431		建材1307	根太		未観察	マツ科
5区27号建物	W37	IK 0485		建材1312	床束		未観察	クリ
5区27号建物	W118	IK 0151		建材1315	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W120	IK 0156		建材1318	梁		芯持角材	クリ
5区27号建物	W17	IK 0214		建材1339	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W128	IK 0218		建材1368	梁		芯持角材	クリ
5区27号建物	W189	IK 0329		建材1372	板材		未観察	クリ
5区27号建物	W51	IK 0273		建材1374	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W361	IK 0449		建材157	桶		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W7	IK 0152		建材170②	土台		芯持角材	クリ
5区27号建物	W188	IK 0484		建材179	板(厚め)		未観察	クリ
5区27号建物	W190	IK 0714		建材202	置台		未観察	マツ科
5区27号建物	W229	IK 0222		建材207	飼い馬桶		芯持角材	マツ科
5区27号建物	W452	IK 0660		建材24	板　加工有り		未観察	クリ
5区27号建物	W43	IK 0211		建材243	柱(ホゾ穴有り)		芯持角材	クリ
5区27号建物	W322	IK 0653		建材27	木製品		未観察	ツガ属
5区21号建物	W17	IK 0020		建材296	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W4	IK 0159		建材303	柱(ホゾ穴有り)		半裁角材	クリ
5区27号建物	W12	IK 0148		建材304	柱(ホゾ穴有り)		芯持角材	クリ
5区27号建物	W14	IK 0149		建材305	柱		芯持角材	クリ
5区21号建物	W15	IK 0029		建材338	大柱　南中央		芯持角材	クリ
5区27号建物	W365	IK 0405		建材339	桶	側、蓋	未観察	スギ
5区21号建物	W6	IK 0275		建材355	角材		半裁角材	クリ
5区27号建物	W398	IK 0497		建材369	天秤棒		未観察	カエデ属
5区21号建物	—	62089		建材425	仏壇　角材		柾目	マツ属複維管束亜属
5区27号建物	W273	IK 0664		建材43	わっぱ		未観察	ヒノキ科
5区27号建物	W28	IK 0271		建材494	柱(大黒柱か？)		未観察	クリ
5区21号建物	W38	IK 0088		建材495	板		板目	カツラ
5区21号建物	W37	IK 0101		建材499	板		板目	カツラ
5区21号建物	W41	IK 0085		建材503	板		板目	クリ
5区21号建物	W32	IK 0092		建材513	床板		未観察	クリ
5区27号建物	W48	IK 0158		建材515	根太		芯持角材	クリ
5区27号建物	W352	IK 0462		建材517	樽		未観察	スギ
5区21号建物	W7	IK 0017		建材536	根太か？		半裁状	クリ
5区21号建物	W27	IK 0030		建材540	根太		半裁角材	マツ科
5区21号建物	W20	IK 0041		建材552	大引に継ぎ足し材		未観察	クリ
5区21号建物	W2	IK 0016		建材557	根太(土台を転用)		半裁角材	クリ
5区21号建物	W10	IK 0270		建材558	束柱(北)		芯持角材	クリ
5区21号建物	W48	IK 0705		建材587	切台		未観察	クリ
5区27号建物	W55	IK 0267		建材601	根太か？		柾目	ケヤキ
5区27号建物	W21	IK 0240		建材639	柱		芯持角材	クリ
5区27号建物	W68	IK 0160		建材650	柱馬栓棒鍵		芯持角材	クリ
5区27号建物	W360	IK 0442	1-1	建材706	桶		未観察	スギ
5区27号建物	W174	IK 0180		建材749	棒		芯持丸木	クリ
5区27号建物	W380	IK 0434		建材790	木製品		未観察	スギ
5区27号建物	W381	IK 0436		建材791	木製品		未観察	マツ科
5区27号建物	W394	IK 0422		建材811	戸棚	横木	未観察	モミ属
5区27号建物	W38	IK 0496		建材886	床束		未観察	クリ
5区27号建物	W66	IK 0165		建材898	柱		芯持丸木	クリ
5区27号建物	W364	IK 0410	1	建材922	桶		未観察	スギ
5区27号建物	W46	IK 0185		建材951	柱(根太に転用か？)		半裁角材	クリ
5区21号建物	W112	61711		製品128	櫛		未観察	シナノキ属?
5区21号建物	W179	61731		製品134	木槌		未観察	ナシ亜科
5区21号建物	W113	61710		製品139	櫛		未観察	広葉樹
5区21号建物	W107-2	61769		製品144	箱		未観察	モミ属
5区21号建物	W109-1	61771		製品144	箱		未観察	マツ属複維管束亜属
5区21号建物	W130	61762		製品168①	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W126	61740		製品169	下駄		未観察	ハンノキ属

遺構名	掲載番号	管理番号	枝番	遺物番号	資料名・内容	部位	木取り	観察結果
5区21号建物	W127	61724		製品170	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W96-1	61751		製品175①	重箱	蓋	未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W118	61730		製品183①	櫛		未観察	ハンノキ属ハンノキ亜属
5区21号建物	W105-1	61786		製品200	浅箱		未観察	ケヤキ
5区21号建物	W77	61783		製品207	皿		未観察	カエデ属
5区21号建物	W133	61725		製品231	下駄		未観察	ハンノキ属ハンノキ亜属
5区21号建物	W132	61723		製品234	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W115	61707		製品240	櫛		未観察	カバノキ属?
5区21号建物	W131-1	61721		製品260	下駄		未観察	サクラ属
5区21号建物	W131-2	61722		製品260	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W116	61804		製品311	櫛		未観察	カツラ
5区21号建物	W121	61743		製品34	下駄		未観察	クリ
5区21号建物	W129	61737		製品8	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W123	61789		製品83	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W134	61726		製品88	下駄		未観察	ハンノキ属
5区21号建物	W198	61702	1	製品189	位牌	本体	柾目	マツ属複維管束亜属
5区51号建物	W7	IK 0215		建材104	柱		芯持角材	マツ科
5区51号建物	—	IK 0460		建材34	杭		未観察	クリ
5区51号建物	—	IK 0461		建材33	杭		未観察	クリ
5区51号建物	W84	IK 0482		建材1053	角材　仏壇		未観察	スギ
5区51号建物	W101	61484	1	171	位牌	本体	柾目	スギ
5区51号建物	W101	61484	2	171	位牌	台	分割材	キリ
5区51号建物	W65	IK 0517	1	建材38	板箱		未観察	マツ科
5区51号建物	W88	IK 0518	5	建材236	仏壇		未観察	マツ属複維管束亜属
5区51号建物	W82	IK 0609	2-1	建材238②	仏壇	底板	未観察	マツ科
5区51号建物	W64	IK 0636		建材80	木製品		未観察	クリ
5区51号建物	W46	IK 0646	1	建材76	蓋?		未観察	スギ
5区51号建物	W86	IK 0833		№111	角材　仏壇		未観察	スギ
5区51号建物	W93	IK 0837		№115	板材		未観察	マツ科
5区51号建物	W62	IK 0884		№25	箱		未観察	マツ科
5区51号建物	W80	IK 0897		№156	上蓋　箱?		未観察	マツ科
5区51号建物	W90	IK 0937		№236②	仏壇	裏板	未観察	マツ科
5区51号建物	W43	60811		141	柄杓	柄	未観察	マツ科
5区51号建物	W55	60812		94	とうじかご		未観察	ハンノキ属ハンノキ亜属
5区51号建物	W75	60814		81	鋤鍬		未観察	コナラ属コナラ節
5区51号建物	W66	60815		82	箱		未観察	マツ科
5区51号建物	W63	60827		116	弁		未観察	カツラ
5区51号建物	W42	60834		180	ワッパ		未観察	マツ科
5区51号建物	W26	60858		225	椀の蓋		未観察	ブナ属
5区51号建物	W23-3	60864	1	229	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W23-1	60864	2	229	椀		未観察	マツ科
5区51号建物	W61	60868		64	一合弁		未観察	キリ
5区51号建物	W47	60870	2	137-2	ナベフタ		未観察	スギ
5区51号建物	W45	60871	1	4	柄杓		未観察	マツ科
5区51号建物	W30-2	60873	1	227	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W57	60874		244	器		未観察	カエデ属
5区51号建物	W27	60888		60	椀		未観察	広葉樹
5区51号建物	W33	60889		61	お椀		未観察	トチノキ
5区51号建物	W36	60890		212	おひつ		未観察	ヒノキ科
5区51号建物	W72	60892		2	おひつ板		未観察	マツ科
5区51号建物	W73-1	60893	1	213	麻引		未観察	ヒノキ科
5区51号建物	W73-2	60893	2	213	麻引		未観察	ヒノキ科
5区51号建物	W73-3	60893	3	213	麻引		未観察	ハンノキ属
5区51号建物	W38	60894		219	おひつ	蓋・蓋?	未観察	ヒノキ科
5区51号建物	W35-2	60895	2	220	蓋		未観察	ヒノキ科
5区51号建物	W100-1	60913	1	208	扉		未観察	マツ科
5区51号建物	W100-2	60913	2	208	扉		未観察	マツ科
5区51号建物	W91	60914	1-1	211	箱(位牌下)		未観察	マツ科
5区51号建物	W99	60914	2	211	箱(位牌下)		未観察	マツ科
5区51号建物	W97	60916		209	扉　仏壇		未観察	マツ科
5区51号建物	W40	60918	1	138	鍋蓋		未観察	スギ
5区51号建物	W60	61186		20	重箱		未観察	モクレン属
5区51号建物	W32	61187		5	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W31	61189		7	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W28	61190		8	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W25	61191		9	椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W29	61197		45	うるし椀		未観察	ブナ属
5区51号建物	W78	61208	1	261	板		未観察	マツ科
5区51号建物	W103	61486	1		位牌	本体	柾目	マツ属複維管束亜属

遺構名	掲載番号	管理番号	枝番	遺物番号	資料名・内容	部位	木取り	観察結果
5区51号建物	W103	61486	2	173	位牌	台	柾目	マツ属複維管束亜属
5区52号建物	W457	61204		1	鍬		未観察	コナラ属コナラ節
27道	W203	IK 0824		№9	(板材)		未観察	ヒノキ科
27道	W201	60940		19	椀		未観察	ブナ属
27道	W202	61107		23	下駄		未観察	クリ
7道	W3	61501		10	硯		未観察	マツ科
1面	W1	61251		59	しゃもじ		未観察	サクラ属
1面	W2	IK 0841		№2	木製品		未観察	コナラ属コナラ節
1面	W3	IK 0842		№3	木製品		未観察	ケヤキ
5区52号建物	W455	61203	底	11	ワッパ		未観察	マツ科
6区15号建物	W6	IK 0105		№57	フタ		未観察	カツラ
6区49号建物	W1	IK 0645		建材1	くわ?		未観察	クリ
7区42号建物	W13	IK 0104		№41	板		未観察	マツ科
7区42号建物	W18	IK 0108		№23	箱		未観察	ヒノキ科
7区42号建物	W4	61261		12	椀		未観察	ブナ属
7区42号建物	W9	61270		71	しゃもじ		未観察	サクラ属
－	－	60856		4	椀		未観察	ブナ属
－	－	IK 0903		№42	倒木		芯持丸木	ナシ亜科

掲載番号＝報告書に掲載した番号　　管理番号＝整理段階での遺物番号　　遺物番号＝発掘番号での遺物取上番号

の壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－40細胞高。

・カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)　カツラ科カツラ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～30細胞高。

・サクラ属(*Prunus*)　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２－６個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－３細胞幅、１－30細胞高。

・ナシ亜科(subfam. Maloideae)　バラ科

散孔材で、道管は単独または２－３個が複合して散在し､年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は異性、１－２細胞幅、１－20細胞高。

・カエデ属(Acer)　カエデ科

散孔材で、道管は単独または２－３個が複合して散在し､年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性、１－５細胞幅、１－30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トチノキ(Aesculus turbinata Blume)　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または２－３個が複合して散在し､年輪界に向かって径を漸減させる。放射組織は同性、単列、１－15細胞高で層階状に配列する。

・アワブキ属(Meliosma)　アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または２－４個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、１－３細胞幅、１－60細胞高。

・シナノキ属?(Tilia?)　シナノキ科

散孔材で、道管は単独または２－６個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を漸減させる。放射組織は同性、１－４細胞幅、１－30細胞高。

道管配列と放射組織の大きさ等からシナノキ属の可能性があるが、低倍で道管の穿孔板、らせん肥厚の有無、木繊維の層階状配列の有無等が確認できないため、シナノキ属?とした。

・ミズキ属(Cornus)　　ミズキ科

散孔材で､道管単独または２－３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は異性、１－８細胞幅、１－30細胞高。

ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシなど7種がある。現生標本との対比では、ヤマボウシやクマノミズキに近い組織を持つが、断定はできず、ミズキ属とした。

・キリ(Paulownia tomentosa (Thunb.)Steud.)　ゴマノハグサ科キリ属

環孔材で、孔圏部は４－５列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または２－３個が放射方向に複合

して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１－４細胞幅、１－20細胞高。柔組織は翼状～連合翼状となる。

・ガマズミ属(Viburnum)　スイカズラ科

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は異性、１－４細胞幅、１－40細胞高。

４．考察

樹種同定を実施した建築部材や木製品には様々な器種や部位が含まれる。比較的点数の多い資料についてみると、建築部材ではマツ属複維管束亜属を含むマツ科やクリ、漆椀ではブナ属、下駄ではクリやハンノキ属が多い傾向がある。同様の傾向は、本遺跡の前回の調査や近接する西宮遺跡でも確認されており、本地域に共通した用材選択の傾向と考えられる。

一方、調査事例の少ない資料として、位牌が挙げられる。出土した位牌は、板状の本体を台に差すもので、本体の大きさ、厚さ、台の形状は様々である。また、木釘で台に本体を固定する資料もある。このうち、選択した２点について樹種をみると、51号建物W101は本体がスギ、台がキリ、51号建物W103は本体、台共にマツ属複維管束亜属であった。

建物脇に生育していたと考えられる樹木は、ナシ亜科に同定された。ナシ亜科には、テンノウメ属、サンザシ属、ザイフリボク属、ナナカマド属、ビワ属、シャリンバイ属、カナメモチ属、カマツカ属、ボケ属、リンゴ属、ナシ属がある。このうち、テンノウメ属、シャリンバイ属、カナメモチ属は本地域に生育していないこと、サンザシ属は小径の低木であることから除外される。ナシ亜科は、比較的強度の高い材質を持つ種類が多く、器具などに有用である。また、リンゴ属やナシ属には果実が食用可能な種類が含まれる。なお、ビワ属にはビワ、ボケ属にはカリン、リンゴ属にはワリンゴ、セイヨウリンゴ、ナシ属にはナシ(ニホンナシ)、セイヨウナシの各栽培種が含まれる。星川(1992)によれば、ビワは９世紀かそれ以前に渡来したとされる。ワリンゴは、文献記録等から平安時代中頃には日本に渡来し、鎌倉時代中期にはかなり普及していたと考えられている。また、ナシは、日本書紀において持統天皇の代(686-697)に全国に栽培を奨めたことが記されており、19世紀中葉頃までに約150の品種があったとされる。一方、セイヨウリンゴは江戸時代の文久年間(1861-1863)に初渡来し、セイヨウナシも同じ頃に伝わったと考えられている。カリンについては、渡来時期の詳細は不明である。

これらの状況から、木材の利用、花の鑑賞、果実の利用等を目的として、本地域に生育していた種類や栽培種を植栽した可能性がある。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
星川清親,1992,改訂増補　栽培植物の起源と伝播.二宮書店,311p.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

第３節　繊維製品等の素材植物について

第１項　同定委託の目的と成果

天明３(1783)年の浅間山噴火に伴い発生した泥流で埋没した、５区27号建物の屋根材、縄、ゴザ、樹皮、51号建物の屋根材、壁材、縄、縄網状製品、草木束、ゴザ、布と、７・25号道から草束が出土した。本同定委託はこれらの素材が編どのようなものぶあるかを確認し、植物繊維使用の状態を把握するため実施した。

この同定委託の結果、27号住居の屋根材はアサの茎、縄はイネの可能性があり、ゴザは縦糸がイネ等、横糸がガマ属とヨシ属、樽内のゴザの素材は特定できず、樹皮はサクラ属当であった。また51号建物の屋根材と壁材は共にアサの茎であり、縄編物はガマ属、ゴザの縦糸は不明、横糸はガマ属、草木束はヨシ属、布はアサであった。７号道と25号道の草本束は共にアサの茎であった。

第２項　繊維製品等の素材植物の同定

１．はじめに

長野原町に所在する石川原遺跡から出土した近世の樹皮や繊維製品について、樹脂包埋法による素材植物の同定を行った。

２．試料と方法

試料は、５区の１面から検出された27号建物と51号建物から出土した樹皮素材や繊維製品、草本束、25号道と７号道から出土した草本束の、計23点である。１点から２箇所の分析を行った試料もあり、分析総数は29点になった。遺構は、天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流に覆われて埋没していた。

同定の方法は、まず肉眼と実体顕微鏡で試料を観察し、樹脂包埋試料として一部を採取した。なお、樹皮素材の観察方法は、佐々木ほか(2015)を参考にした。樹脂包埋の方法は、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料はミクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。また、一部の試料については、徒手切片法によるプレパラート作製も行った。カミソリを用いて３断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。プレパラートを光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

３．結果

結果の一覧を表３に示す。以下に、試料の形状および同定根拠となった組織の記載を示し、試料写真と光学顕微鏡写真を写真図版に示す。なお、試料No.29は試料が鉄に置換しており、走査型電子顕微鏡で観察を行ったが、植物組織が観察できず同定不能とした。

(１)サクラ属　*Cerasus*　バラ科

・外樹皮：試料No.14(27号建物)

試料は、不定形に巻き込んだ樹皮素材で、幅1.0～2.7cm、厚さ0.2cmほどである。

顕微鏡観察では、横断面では細長い短冊形の細胞が密に配列し(写真12-1a)、接線断面では長軸が水平方向の紡錘形の細胞が密に配列する(写真12-1c)。放射断面では断面長方形の細胞が密集してあり、細胞径と細胞壁の厚さがわずかに違う細胞層の存在により成長輪のように見える(写真12-1d)。

以上の形質から、バラ科サクラ属(狭義)の外樹皮と同定した。形態がよく似るカバノキ属の外樹皮とは「成長輪」内での細胞径の変化がほとんど無いことにより区別される。

(２)アサ　*Cannabis sativa* L.　アサ科

・茎(苧殻)：試料No.13(27号建物)、試料No.16、17、20(51号建物)、試料No.26、27(25号道)、試料No.29(7号道)

試料は、いずれも幅0.3～1.0cm幅の草本束である。

顕微鏡観察では、試料No.29は直径7.0mmほどの丸く通直な棒状で、中心に小さな髄があるが、他の試料は半割れ、あるいは潰れて扁平になっている。年輪界は無く、道管は細く、断面は丸みを帯びた楕円形で、多くは単独、時に２～３個、放射方向に複合する(写真12-2a、3a)。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大ぶりの小孔紋で交互状に密にある(写真12-3c)。放射組織は単列～３細胞幅程度で、背が非常に高い。茎の中心に近い放射組織はほとんど単列で、非常に背の高い直立細胞のみからなる。太い茎の外周部では多列になり平伏細胞も混ざる(写真12-2c)。以上の形質から、アサ科のアサの茎と同定した。

出土遺物はいずれも樹皮(靭皮部)を欠いており、繊維を取った後の苧殻といえる。

・靭皮繊維：試料No.19(51号建物)

試料は、平織りの布で、緯糸は径0.5㎜ほどである。

顕微鏡観察では、緯糸は多数の繊維細胞塊からなり(写真12-4a)、各繊維細胞塊は偏平で潰れた部分を介して互いに横につながったものが織り込まれて一本の糸になっているようである(写真12-4b)。繊維細胞は潰れて細胞内腔はほとんど無い(写真12-4b)。以上の形態から、アサの繊維と同定した。

(３)ガマ属　Typha　ガマ科

・茎：試料No.8-2(27号建物)

ゴザ編みのヨコ材である。表面は平滑で、やや縒りが入っている。幅は1～2㎜ほどである。

顕微鏡観察では、横断面では円形の茎がゆがんで潰れたおり、同心円の構造が層状に積み重なっているように見える(写真12-5a)。試料の中心は壊れて欠落しており、髄が中実であったのかは不明である(写真12-5a)。中心の欠落部分の外にほぼ同心円に維管束が配列している。維管束は後生木部の大きな道管1本が目立ち、維管束の外側には帽状に繊維組織が発達している。この同心円構造の外側には、層の厚みがこれより薄く、維管束も細く繊維組織も少ない同様の構造がほぼ同心円状に何層かあるように見え、層と層の間には潰れた組織が介在する(写真12-5b)。

以上の構造から、ガマ科のガマ属の茎と同定した。

(４)イネ　*Oryza sativa* L.　イネ科

・茎：試料No.11-1(27号建物)、試料No.18-1、21-1、24、25-1(51号建物)

試料No.11-1はゴザ編みのタテ材で幅約１㎜、試料No.18-1、21-1、24、25-1は縄編み状敷物の表材で幅約1.0㎝である。

顕微鏡観察では、試料No.11-1は大きな髄腔のある円筒状の茎が潰れており、茎の肉は薄い(写真12-6a)。表皮のクチクラはよく観察されないがほぼ平滑である。表皮直下に間隔を置いて多数の小さい維管束が同心円状にある。この維管束の部分で表皮は飛び出るため、茎の外観には多数の縦筋がある。表皮の直下には全周にわたって繊維組織があり、小さい維管束はこの繊維組織に包まれている。試料No.11-1では繊維組織より内側の組織は欠落している。試料No.21-1では髄腔は大きいものの、茎の「肉」の部分は比較的良く保存されている(写真12-7a)。維管束は向軸側の原生木部腔、その外側両側の一対の後生木部道管、背軸側に一つの一時篩部、そしてそれらを取り囲む繊維組織という、典型的なイネ科型の維管束である(写真12-6b、7b)。

以上の形質から、これらの試料はイネの稈と同定した。なお、茎の周りにまとわりついている物体は組織形態の観察がほとんどできないが、おそらく葉鞘等と思われる。

・葉：試料No.23-2(51号建物)

葉の組織自体は潰れて細胞構造はほとんど見ることが出来ないが、イネ型機動細胞が観察されることから、イネの葉と判断した。

(５)ヨシ属　*Phragmites*　イネ科

・茎：試料No.11-2(27号建物)、試料No.18-2、21-2、25-2(51号建物)

試料は、試料No.11-2がゴザ編みのヨコ材で幅約1.0㎝、試料No.18-2、21-2、25-2が縄編み状敷物の裏材で幅約0.5㎝であった。

顕微鏡観察では、試料No.11-2は大きな髄腔を持つ丸い茎で、表皮は１細胞層で平滑だが、表皮直下に小さい維管束が横断面でほぼ等間隔にあり、その部分で表皮が出っ張ることから、茎の外観は多数の縦筋がある(写真13-9a)。表皮直下の維管束を結んで繊維組織が環状に発達する。表皮と環状の繊維組織の間には１～数細胞層の柔組織があるが、表皮直下の維管束がある部分では柔組織は無い(写真13-9b)。環状の繊維組織の内側に大きい維管束が不整に散在する(写真13-10a)。維管束は向軸側の原生木部腔、その外側両側に一対の後生木部道管、背軸側に一つの一次篩部、そしてそれらを取り囲む繊維組織という、典型的なイネ科型の維管束である(写真13-10b)。

以上の形質から、ヨシの茎であると同定した。試料No.18-2は大きな髄腔と肉薄の茎組織を持つ丸い茎で、表皮直下の小さい維管束を結ぶ繊維組織、表皮と繊維組織の間の柔組織があまり発達しておらず、茎上部で組織が「薄い」部分と判断される。

(６)広葉樹

・樹皮：試料No.３(27号建物)

横長の皮目様のものが見える樹皮(A)である。幅は

5.0cm、厚さ0.2cm。

顕微鏡観察では、横断面では大小の胞状の柔組織性の細胞が目立ち、薄く潰れた組織(おそらく篩細胞群)が接線状に短くあり、潰れた放射組織が斜め放射方向に屈曲してある(写真13-11a)。コルク層は数細胞層程度しか形成されなく、また上下、左右の広がりも狭い(写真13-11b)。放射組織はおそらく５細胞幅くらいで、接線断面では紡錘形だが形をよくとどめていない(写真13-11d)。放射断面では泡状の細胞群と縦長の繊維組織が見えるが、特段の特徴的な形態は見られない(写真13-11c)。

以上の形質から、広葉樹の樹皮と判断できるが、それ以上の詳細は不明であった。

(７)不明植物Ａ

・茎(+葉？):試料No.７(27号建物)

ゴザ編みのヨコ材で、幅2.0～4.0mm程度の偏平になった茎あるいは葉である。縦筋がほぼ等間隔で多数あることから、単子葉の茎あるいは葉と推定される。

顕微鏡観察では、試料の横断面では試料は薄く扁平で、茎や葉などのいくつかのパーツが集まったものが押しつぶされたもののように見える(写真13-12a)。試料組織の外縁部には薄く扁平な部分と、時として厚く三角形状をしている部分が認められる(写真13-12b)。この三角形状の部分にはおそらく繊維細胞と思われるものの塊があり、各細胞は潰れており、その傍らには大きな柔組織細胞あるいは細胞間隙の潰れた組織が見える(写真13-12b)。

表皮組織は潰れ細胞壁が癒合していて、細胞形態をとどめない。植物体を構成する他の部分も細胞が完全に潰れ細胞形態をほとんどとどめず､維管束も観察できない。

以上の観察結果により、単子葉類はあるいは茎(あるいはその両方)かと思われるが、何の植物かを特定するには至らなかった。

(８)不明植物Ｂ(イネ科？)

・茎葉:試料No.8-1、9(27号建物)

試料はゴザ編みのタテ材で、２～３㎜幅である。

顕微鏡観察では、試料は肉厚で、中央に髄腔を持つ丸い茎とそれを取り巻いて何層にも重なった葉鞘と葉から構成されるように見える(写真13-13a、14a)。茎はいくつも分断され、薄壁で径の大きい柔細胞から成る組織が部分的に形を保っている。イネ科型と推測される維管束が分散して散在する。葉の部分には時に何個か連続した植物硅酸体が見られる(写真13-13b、14b)。

以上の形質からはイネ科と推測されるが、組織の保存状態が悪く、植物種の特定には至らなかった。

試料No.９も試料No.8-1と同様の残存した構造が見られ、葉と思われる部分には時に植物珪酸体がある。

(９)不明植物Ｃ

・茎葉:試料No.10(27号建物)

顕微鏡観察では、試料No.10は潰れた茎とそれを取り巻く葉鞘and/or葉からなると思われるが、茎と思われる部分では薄壁で径の大きい、おそらくは柔細胞と思われる細胞が比較的整然と並んでいるのが認められるのみである。葉と思われる部分では維管束と思われる組織が間隔を置いてあり、その間には細胞間隙があったと思われる痕跡は認められない(写真13-15a)。

以上の形質から、単子葉類の茎葉で葉には維管束が間隔を置いて多数あるが、それらの間には発達した細胞間隙がない植物であるといえるが、観察できた形態は非常に限られるため、植物種の特定には至らない。

(10)不明植物Ｄ

・葉:試料No.12(27号建物)

顕微鏡観察では、試料No.12は多数の扁平な葉が「くしゃくしゃ」に織り込まれたような形状を呈し、細胞組織が原形をとどめていると判断される部分はほとんど無い。まれに植物珪酸体様の透明物質がある(写真14-16a)。

試料No.12と同じ縄編み状敷物は､No.10は不明植物Ｃ、他の４点(試料No.18-1、21-1，24、25-1)はイネであった｡試料No.10､12ともイネである可能性を排除しないが、イネであると断定する根拠が得られていない。

(11)不明植物Ｅ

・葉:試料No.22、23-1(51号建物)

試料No.22は縄(紐)で、幅は0.8cmであった。試料No.23-1はゴザ編み状敷物のタテ材である。

顕微鏡観察では、両者とも薄い膜状の葉と思われるものが幾重にも折りたたまれたような構造をしている。薄膜状の構造は表裏の表皮と思われる部分とその間の葉肉と思われる部分が認められるが、いずれも細胞構造が潰れて細胞壁が癒合しており、組織形態は観察できない。間隔を置いてやや肉厚の部分があり、葉脈のある部分か

表３　遺構別の素材同定測定

遺構	27号建物								51号建物									25号道	7号道	
位置	屋根材	－	樽下敷物		－		樽内	－	壁材・屋根材・おがら等	－	仏壇下		－			板付着	－	屋根材	－	
器種	草本束	縄	縄編み状		ゴザ編み			樹皮	草本束	縄	縄編み状					ゴザ編み	布	草本束	草本束	
分類群 部位	－	－	－		タテ	ヨコ	ヨコ	－	－	－	－	表	表：縄	裏：草本束		タテ	ヨコ	－	－	－	計
サクラ属								1													1
アサ	1								3		1							1	2	1	8
ガマ属						1					1	2	1				1				6
イネ					1																1
ヨシ属						1								3							4
広葉樹								1													1
不明植物A							1														1
不明植物B		1			1																2
不明植物C			1																		1
不明植物D			1																		1
不明植物E										1						1					2
総計	1	1	2		2	2	1	2	3	1	1	2	1	3		1	1	1	2	1	28

と思われるが組織構造は全く観察できない(写真14-17a、18a)。

以上の形質から、おそらくは平行脈を持つ単子葉類の葉と思われるが、植物種を特定するには至らなかった。これもイネである可能性は排除しない。

４．考察

遺構別の樹種同定結果を表３に示す。

27号建物では、屋根材と思われる草本束は、アサの茎であった。縄は不明植物Ｂ(イネ科？)、樽下敷物の縄編み状は不明植物ＣとＤであった。ゴザ編みのタテ材はイネと不明植物Ｂ(イネ科？)、ヨコ材はガマ属とヨシ属、樽内出土のゴザ編みのヨコ材は不明植物Ａであった。樹皮はサクラ属と、不明広葉樹であった。

51号建物では、壁材や屋根材、北壁おがらと推測される草本束は、いずれもアサの茎であった。縄は不明植物Ｅであった。縄編み状の製品はいずれもガマ属で、その裏に付着していた草本束はいずれもヨシ属であった。板付着のゴザ編みは、タテ材が不明植物Ｅ、ヨコ材がガマ属であった。布はアサの靭皮繊維であった。

７号道と25号道から出土した草本束は、アサの茎であった。

布に使用されていたアサ(Cannabis sativa L.)は、アサ科アサ属の１年生草本である。中央アジアが原産とされ、日本列島では縄文時代早期にアサの果実が確認されている(工藤・一木，2014)。青森県では、中津軽郡の川原平(１)遺跡で縄文時代後期後葉～晩期の漆漉し布の糸の素材としてアサが確認されている(鈴木ほか，2017)。また、近世では東京都新宿区の南元町遺跡や、群馬県長野原町の東宮遺跡などで布の素材としてアサの利用が確認されている(小林ほか，2015；鈴木，2012)。草本束で出土したアサの茎は樹皮(靭皮繊維)が付着していないため、布などを製作した残滓の可能性がある。

６区３面の水田跡と思われる遺構の土壌で植物珪酸体分析を行ったところ、水田遺構である可能性を支持する結果が得られ、特に地山礫層上面ではヨシの大群落が形成されていたと推測されている(植物系戦隊分析の報告参照)。植物の素材同定を行った草本束でもイネやヨシ属が確認されており、水田のイネや周辺に生育していたヨシ属を積極的に利用していたと推測される。

引用文献

小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男(2015) 南元町遺跡第３次調査出土繊維製品等の素材植物．国際文化財株式会社編「南元町遺跡Ⅲ」：248-254，住友不動産．

工藤雄一郎・一木絵理(2014)縄文時代のアサ出土例集成．工藤雄一郎編「国立歴史民俗博物館研究報告　第187集　縄文時代の人と植物の関係史」：425-440，国立歴史民俗博物館．

鈴木三男(2012)東宮遺跡出土織物の繊維素材．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡(２)－遺物編－」：478-479，群馬県埋蔵文化財調査事業団．

鈴木三男・能城修一・小林和貴・佐々木由香(2017) 木質遺物・繊維製品の素材植物同定．青森県埋蔵文化財・調査センター編「川原平(１)遺跡Ⅷ」：124-148．青森県教育委員会．

第４節　出土人骨鑑定（１）

第１項　３号人骨の取り上げと鑑定

５区11平坦面４号畑北端で、ヒトの下肢の骨が出土した。この人骨は発掘調査の中で３号人骨と名付けられたが、この骨は八ッ場ダム建設に伴う発掘調査で最初に出土した被災者と見られる人骨であった。３号人骨の過半は連なった状態で出土していたが、取上げと鑑定を委託した。

鑑定によりこれらは左側の寛骨(腰骨)と大腿骨､脛骨、腓骨及び足骨の一部であることが確認された。またこれらに並行して部位不明の骨片が確認された。

これにより、３号人骨は泥流下に押しつぶされた状態で、足を北に向け仰向けの状態で埋没したことが確認された。また、出土状況からから推してこれらの東側に並行して出土した部位不明骨は右側の寛骨及び下肢の可能性が考慮される。また復位から頭蓋にかけては確認されていないが、腐食、粗造化により失われか、切断した可能性が考慮される。

第２項　３号人骨の鑑定

はじめに

石川原遺跡(群馬県吾妻郡長野原町川原湯地内に所在)は、吾妻川右岸の下位段丘面上(現標高533～539m)に所在し、吾妻川に向かって緩やかに傾斜する段丘面上に位置する。これまでの調査で天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う約２～３ｍの泥流層(天明泥流)によって埋もれた屋敷や畑跡が確認されている。

今回、畑跡(K-25畑)を覆う天明泥流の最下部から人骨の可能性がある骨が検出された。そこで、出土骨の種類および部位を検討することにした。

１．人骨の取り上げおよび試料

平成30年４月25日、当社技師が現地におもむいて試料を採取した。試料の取り上げは､部位ごとに番号を付し、No.１～７および一括試料を取り上げた。ただし、No.４に関しては、さらに複数の部位ごとに取り上げることが可能であったため、さらに枝番分けしてNo.４－１～４－５およびNo.４一括として取り上げた(写真17～21)。

なお、出土骨は、畑跡の上端から約６cm上位にあり、天明泥流の最下部から出土している。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

２．分析方法

取り上げた骨は、湿潤で脆弱な状態であり、容易に崩れる状態であった。そこで、バインダーを数回に分けて塗布して硬化させ、自然乾燥させた後、接合できる箇所は一般工作用接着剤を用いて接合する。これらの処理を施し、肉眼で観察し、出土骨の種および部位を同定する。

３．結果および考察

出土した骨は、保存状態が極めて悪く、緻密質の薄い骨端が破損・欠落しているが、形状からみて人骨と判断できる。

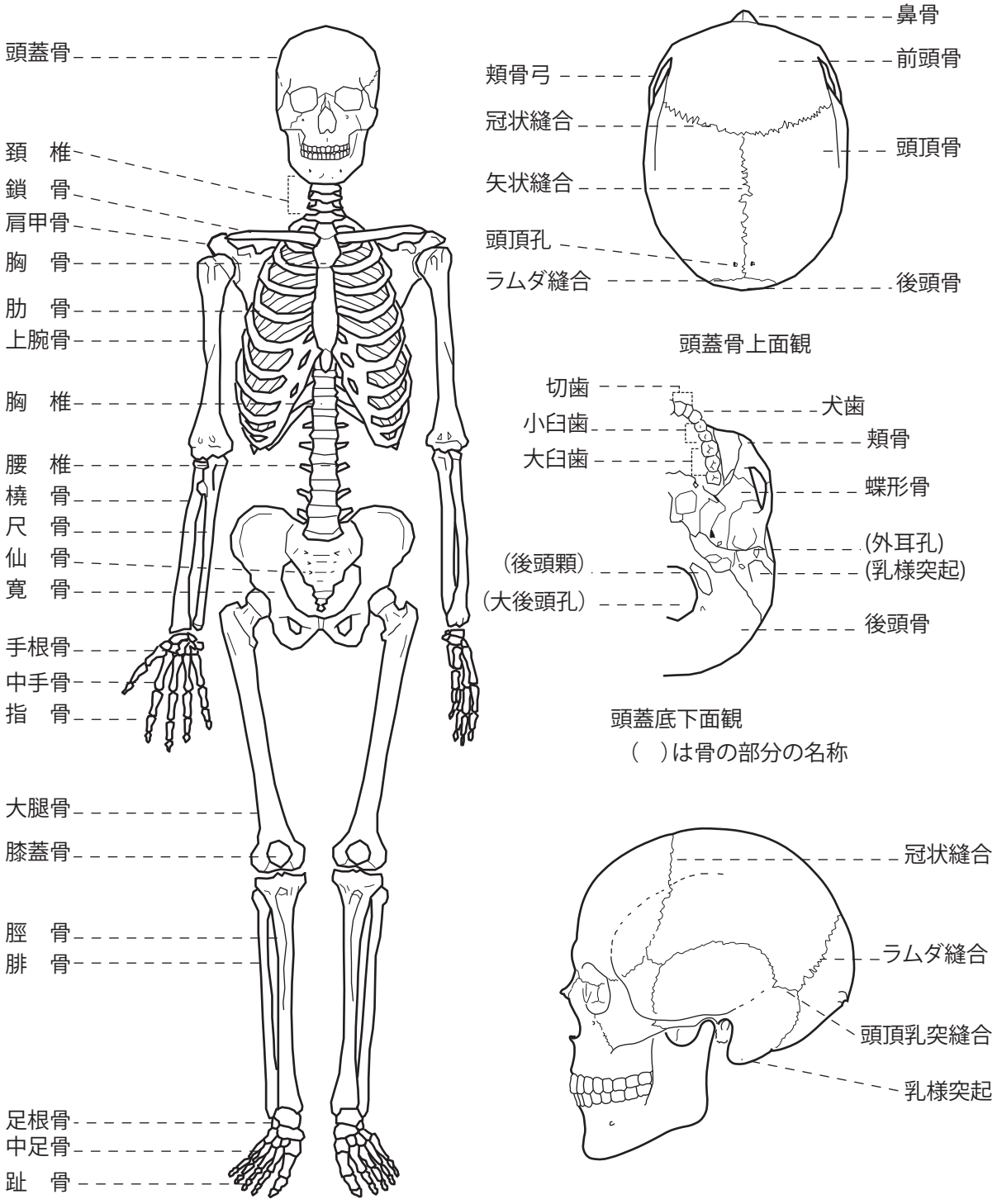
確認された部位は、No.１が左大腿骨、No.２が左脛骨・左腓骨、No.３が左寛骨、No.４が左足根骨(距骨・踵骨・舟状骨・中間楔状骨)および左中足骨、No.５～７および一括が部位不明破片である(表４)。

ヒト骨格各部位の名称を図１に示し、出土状況を図２に示す。

出土した骨の内、No.１～４は、南東側から北西側に向かい、左寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨・足根骨・中足骨で　あった｡解剖学的位置を保った状態で出土している。一方でNo.５～７は骨であったものの、部位を明らかに

表４　骨同定結果

No.	種類	部位	左 右	部分	数量	被熱	備考
1	ヒト	大腿骨	左	骨幹部	1		
	ヒト	大腿骨	左	遠位端	1		
	ヒト	大腿骨	左	破片	多数		
2	ヒト	脛骨	左	骨幹部	1　+		
	ヒト	腓骨	左	骨幹部	6		
	ヒト	腓骨	左	遠位端	1		
	ヒト	脛骨・腓骨	左	破片	多数		
3	ヒト	寛骨	左	寛骨臼	1		他植物片(多数)
	ヒト	寛骨	左	破片	多数		
4-1	ヒト	距骨	左	破片	1　+		
4-2	ヒト	踵骨	左	破片	1　+		
4-3	ヒト	舟状骨	左	破片	1		
4-4	ヒト	足根骨		破片	多数		
4-5	ヒト	中間楔状骨	左	略完	1		
4一括	ヒト	中足骨		破片	1		
	ヒト	不明		破片	17		
5	ヒト	不明		破片	多数		他植物片(5)
6	ヒト	不明		破片	3		
7	ヒト	不明		破片	10		
一括	ヒト	不明		破片	多数		



手根骨：舟状骨,月状骨,有頭骨,有鈎骨,三角骨,大菱形骨,小菱形骨,豆状骨
足根骨：距骨,踵骨,舟状骨,立方骨,内側楔状骨,中間楔状骨,外側楔状骨

図１　人体骨格各部の名称

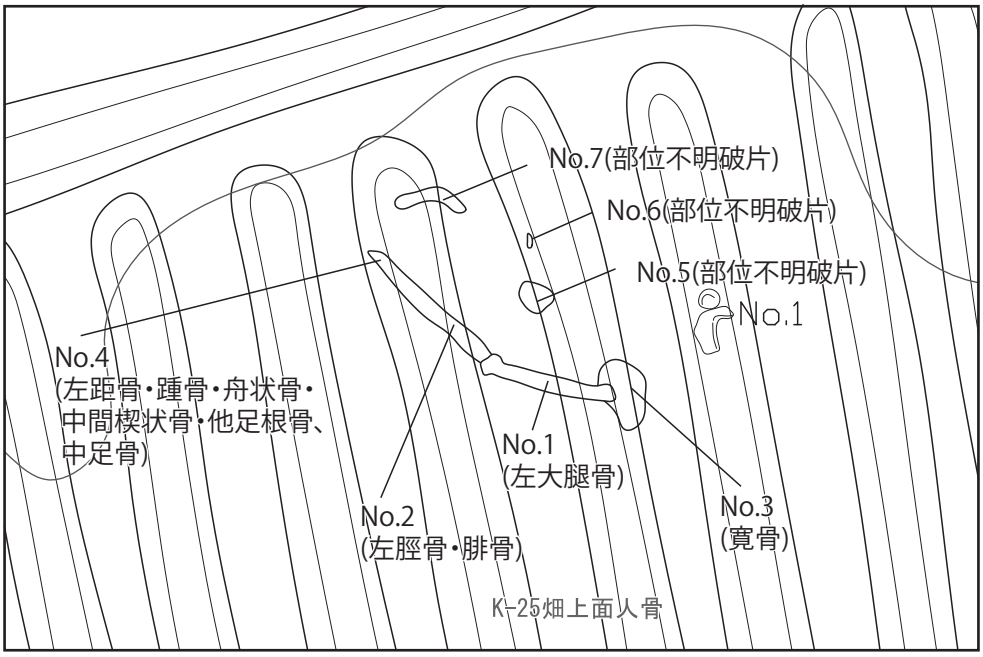


図２　試料および出土状況

できない破片であった。

これらのことから、軟質組織が残った状態で左下肢が埋まっていたと考えられ、その周辺に他部位も多少なりとも存在していたとみられ、畑跡の上位を覆う天明泥流の最下部から出土しており、泥流に被災したヒトの一部が流されてきたものと考えられる。

出土した人骨は、大腿骨や脛骨が比較的華奢であることから女性的であるものの、性別を判定する部位(寛骨大座骨切痕など)がみられないことから正確に判定することが不可能である。また、取り上げる際に破損して細片となったが脛骨遠位端が化骨化した状況が確認されたことから、少なくとも16～20歳以上の成人に達していたが左大腿骨40cm、左脛骨30cmを計る。藤井による推定式を用いて計算すると(藤井,1960)、女性と仮定した場合の推定身長が151cm以上、男性と仮定した場合の推定身長が153cm以上となる。関東地方の江戸時代の推定身長は、平均値でみると、女性が約145cm、男性が約157cmとされており(平本,1972)、女性ならばやや大柄、男性ならば平均的な身長の可能性がある。新暦８月５日昼前に発生した鎌原火砕流が岩屑なだれに変化し鎌原村を襲い、吾妻川へ注ぎ込み天明泥流として流れ下り、渋川で利根川に合流して群馬・埼玉両県境に沿う利根川を流下し、一方は銚子へ、他方は江戸川を経て江戸湾へと注ぎ、鎌原村や泥流の流下する途中の沿岸で1,490名(『浅間山焼荒一件』による)を超える犠牲者を出したとされている(中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会,2006)。今回出土した人骨は、天明泥流の実態を明らかにする上でも貴重な資料となる。

引用文献
藤井　明,1960,四肢長骨の長さと身長との関係に就いて.順天堂大学体育学部紀要,3,p.49-61.
平本　嘉助,1972,縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化.人類学雑誌,80,221-236.
中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会,2006 1783 天明浅間山噴火報告書,内閣府,188p.

第５節　出土人骨鑑定（２）

第１項　１・２・４号人骨の取り上げと鑑定

天明３(1783)年の泥流下、５区27建物の下敷きとなった状態で２個体の人骨が検出され、１・２号人骨と命名した。尚、前節で取り上げた人骨を３号人骨とした。その後、１・２号人骨について取り上げと鑑定を委託することとなった。

取上げ段階で２号人骨としたものが２個体であることを確認したため、当初見えていた頭蓋骨を２号人骨とし、四肢骨が見えていたものを４号人骨とした。この段階で４号人骨の頭蓋骨も確認されている。

鑑定の結果、１号人骨は６歳前後の小児、２号人骨は４歳前後の幼児、４号人骨は熟年後半の女性のものという所見を得た。

第２項　１・２・４号人骨の鑑定

はじめに

石川原遺跡(群馬県吾妻郡長野原町川原湯地内に所在)は、八ッ場ダム建設工事に伴う発掘調査が行われており、吾妻川右岸の下位段丘面上(現標高533～539m)に位置し、段丘面は、吾妻川に向かって緩やかに傾斜する。これまでの調査で天明３年(1783)の浅間山噴火に伴う約２～３mの泥流層(天明泥流)によって埋もれた屋敷や畑跡が確認されている。

畑跡(K-25畑(５区11平坦面４号畑))を覆う天明泥流の最下部から人骨が出土したことから鑑定を実施したが、その後に別の場所から新たに人骨２体が出土したとの連絡を受けた。これら２体が１号人骨と２号人骨と付され、前回実施したK-25畑から出土した人骨が３号人骨とされた。弊社担当者が現地に赴いて観察した結果、２号人骨と考えられていたものは頭蓋と四肢骨が別個体であると判明し、その四肢骨に伴う頭蓋骨が検出された(４号人骨)。そこで、今回は、これら計３体(１号・２号・４号人骨)について鑑定を行った。

１．人骨の取り上げおよび試料

平成30年７月10・13日の２日、当社技師が現地に赴いて試料を採取した。試料の取り上げは、部位ごとに番号を付し、取り上げ後に周辺残土を一括試料として取り上げた。なお、試料の詳細については、結果とともに表示する。

２．分析方法

取り上げた骨は、湿潤で脆弱で状態であり、容易に崩れる状態であった。ただし、後日、科学分析を実施する可能性があるため、薬剤等の補強は行わず、可能な限り土壌を除去して自然乾燥させ、肉眼で観察して部位を明らかにした。人骨骨格の各部位名称を図１に示す。なお、歯牙の計測は、藤田(1949)に基づきデジタルノギス等を用いて行ったが、砂分が固着して正確性に欠くため参考値程度である。

３．結果および考察

出土した人骨は、いずれも保存状態が悪い。出土状況は、１号人骨は頭蓋骨と四肢骨の一部、２号人骨は頭蓋骨など、４号人骨は頭蓋骨と主要四肢骨と多くの部位がみられる。

同定結果を表５に、歯式を表７に、歯牙計測値を表６に示す。以下、人骨ごとに記す。なお、年齢に関しては、幼児が１～５歳程度、小児が６～15歳程度、成人が16歳程度以上、成年が16～20歳程度、壮年が20～39歳程度、熟年が40～59歳程度、老年が60歳以上を表す。

・１号人骨

No.１～６、No.５中の計７試料を取り上げた。確認できた部位は、頭蓋骨、下顎骨、遊離歯牙、肋骨、橈骨の可能性がある破片、右大腿骨の可能性がある破片、左大腿骨、左脛骨である。頭蓋骨は、前頭骨～左頭頂骨、左側頭骨が確認できる(写真18)。

遊離歯牙では、乳歯と永久歯がみられる。乳歯では、右下顎第２乳臼歯が確認される。永久歯では、左上顎第１大臼歯、右上顎第２大臼歯、右下顎第２小臼歯、右下顎第１・２大臼歯が確認される。

永久歯はいずれも未出状態である。歯牙の形成状況をみると、右下顎第２大臼歯は歯冠部がほぼ形成されており、右下顎第１大臼歯は歯根が形成途中である。以上のことから、本人骨は、６歳前後の小児前半と考えられる。

表５　骨同定結果

人骨 No.	番号	部位	左　右	状態等	数量	備考
1号	1	橈骨?		破片	1	
	2	大腿骨?	右	破片	1	
	3	大腿骨	左	両端欠	1	
	4	脛骨	左	破片	1	
	5	頭蓋骨		前頭骨～左頭頂骨	1	
			左	側頭骨	1	
	5中	頭蓋骨		破片	1	
		下顎骨		破片	1	
		上顎第1大臼歯	左	破片	1	
		上顎第2大臼歯	右	破片	1	
		下顎第1大臼歯	右	略完	1	歯根形成途中
		下顎第2大臼歯	右	破片	1	歯根未形成
		肋骨		破片	1	
		不明		破片	1	
	6	下顎第2乳臼歯	右	略完	1	
		下顎第2小臼歯	右	略完	1	歯根未形成
2号	1	上顎第1乳切歯	左	略完	1	
	2	上顎第2乳臼歯	左	略完	1	
	3	上顎第2乳切歯	左	略完	1	
	4	上顎第2乳切歯	右	略完	1	
	5	上顎第1大臼歯	左	略完	1	歯根未形成
	6	上顎犬歯	左	略完	1	歯根未形成
	7	下顎骨	左	破片	1	di1～dm2植立,M1・2未出
		下顎第1乳切歯	右	略完	1	
		歯牙		破片	3	土塊状
	7周辺	上顎第1大臼歯	右	略完	1	歯根未形成
		第1頚椎		破片	1	
		第2頸椎		破片	1	
		肋骨		破片	1	
	8	頚椎		破片	1	
	9	頚椎		破片	1	
	10	上顎乳犬歯	左	略完	1	
	11	上顎第1乳臼歯	右	略完	1	上顎骨付着
	12	上顎第2乳臼歯	右	略完	1	
	13	上顎乳犬歯	右	略完	1	
		上顎第2切歯	右	略完	1	歯根未形成
		上顎第1小臼歯	左	略完	1	歯根未形成
	14	頭蓋骨	左	前頭骨	1	
			左	頭頂骨	1	
				後頭骨	1	
			左	側頭骨	1	
				破片	6＋	
	14周辺	頭蓋骨	右	側頭骨	1	
		第1頚椎		破片	1	
		頚椎		破片	1	
		肋骨		破片	1	
	一括	上顎第1乳臼歯	左	略完	1	
4号	1	大腿骨	右	両端欠	1	
	2	大腿骨	左	両端欠	1	
	3	脛骨	左	両端欠	1	
	4	肩甲骨	左	破片	1	
	5	上腕骨	左	近位端欠	1	
	6	尺骨	左	両端欠	1	
	7	下顎骨	左	破片	1	
		下顎第3大臼歯	左	略完	1	
		犬歯?		略完	1	咬耗顕著
		鎖骨	左	破片	1	
	8	頭蓋骨		左右頭頂骨～後頭骨	1	
			左	側頭骨	1	
			右	側頭骨	1	
		上顎第2大臼歯	左	略完	1	
		頭蓋骨		破片	6＋	
	9	肋骨		破片	1	土塊状
	10-1	上腕骨	右	遠位端欠	1	
	10-2	尺骨	右	破片	1	
	10-3	橈骨	右	破片	1	
	11	不明		破片	1	土塊状
	12	橈骨	左	両端欠	1	
	13	肩甲骨	右	破片	1	

凡例）di：乳切歯　dc：乳犬歯　dm：乳臼歯　I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯

表６　歯牙計測値

単位；mm

	歯冠幅	1号人骨 右	1号人骨 左	2号人骨 右	2号人骨 左	4号人骨 右	4号人骨 左
上顎							
	第1乳切歯 di^1				7.26		
	第2乳切歯 di^2			6.21	5.90		
	犬歯 dc			7.25	7.45		
	第1乳臼歯 dm^1			7.74	7.59		
	第2乳臼歯 dm^2			9.51	9.52		
	第1切歯 I^1						
	第2切歯 I^2			6.80			
	犬歯 C				8.04		
	第1小臼歯 P^1				6.60		
	第2小臼歯 P^2						
	第1大臼歯 M^1		－	10.75	10.80		
	第2大臼歯 M^2	10.58					9.52
	第3大臼歯 M^3						
下顎							
	第1乳切歯 di_1			4.90	4.93		
	第2乳切歯 di_2				5.10		
	犬歯 C				6.04		
	第1乳臼歯 dm_1				7.71		
	第2乳臼歯 dm_2	10.83			10.07		
	第1切歯 I_1						
	第2切歯 I_2						
	犬歯 C						
	第1小臼歯 P_1						
	第2小臼歯 P_2	7.54					
	第1大臼歯 M_1	12.39					
	第2大臼歯 M_2	12±					
	第3大臼歯 M_3						9.16
	歯冠厚	1号人骨 右	1号人骨 左	2号人骨 右	2号人骨 左	4号人骨 右	4号人骨 左
上顎							
	第1乳切歯 di^1				5.08		
	第2乳切歯 di^2			5.32	5.50		
	犬歯 dc			6.19	6.03		
	第1乳臼歯 dm^1			9.13	9.36		
	第2乳臼歯 dm^2			9.89	10.28		
	第1切歯 I^1						
	第2切歯 I^2			5.84			
	犬歯 C				7.45		
	第1小臼歯 P^1				8.94		
	第2小臼歯 P^2						
	第1大臼歯 M^1		－	11.84	11.92		
	第2大臼歯 M^2	11.79					10.71
	第3大臼歯 M^3						
下顎							
	第1乳切歯 di_1			3.95	4.19		
	第2乳切歯 di_2				4.44		
	犬歯 C				－		
	第1乳臼歯 dm_1				7.26		
	第2乳臼歯 dm_2	9.40			8.61		
	第1切歯 I_1						
	第2切歯 I_2						
	犬歯 C						
	第1小臼歯 P_1						
	第2小臼歯 P_2	8.02					
	第1大臼歯 M_1	10.75					
	第2大臼歯 M_2	9±					
	第3大臼歯 M_3						8.23

注）－：測定不可　　空欄：未検出

出土状況の概念図を図３に示す。出土した位置は、建物よりも外側にあたる。頭蓋は、顔面が山側、後頭部が川側に向き、左側を上にして埋まっている。頭蓋の右側は歯牙のみが確認される程度に留まった。

左側の下肢骨、すなわち左大腿骨・左脛骨は、関節した状態で埋まっている。一方、右大腿骨の可能性がある

表７　出土人骨の歯式

1号人骨	右								左								備考
上顎	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
		○												○			
				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
下顎				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
				○													
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
		○	○	○													
2号人骨	右								左								備考
上顎	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
			○		○		○				○	○		○			
				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
				○	○	○	○		○	○	○	○	○				
下顎				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
								○	◎	◎	◎	◎	◎				
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
														◎	◎		
4号人骨	右								左								備考
上顎	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	他C?有
															○		
下顎	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
																○	

凡例）　di：乳切歯　　dc：乳犬歯　　dm：乳臼歯　　I：切歯　　C：犬歯　　P：小臼歯　　M：大臼歯

骨は、左下肢骨と離れた場所にある。

以上、本人骨は、解剖学的位置を保持していない可能性が高い。このことから、本人骨は、遺体が損壊した状態でで移入に流されて埋まった可能性がある。

・２号人骨

No.１～14、No.７周辺一括、No.14周辺一括、一括試料、計17試料を取り上げた。頭蓋骨、下顎骨、遊離歯牙、第１頚椎、第２頸椎、頚椎、肋骨がみられる。頭蓋骨は、左前頭骨、左頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨が確認できる。遊離歯牙では、乳歯と永久歯がみられる。乳歯では、左第１乳切歯、左右上顎第２乳切歯、左右上顎乳犬歯、左右上顎第１乳臼歯、右上顎第２乳臼歯、右下顎第１乳切歯が確認される。永久歯では、右上顎第２切歯、左上顎犬歯、左上顎第１小臼歯、左右上顎第１大臼歯が確認される。なお、右上顎第１乳臼歯は、上顎骨片がみられ、その部分に未萌出の第１小臼歯が確認できる（写真19）。

第１頚椎、第２頸椎は、癒合していない。下顎骨は、左側が残り、第１乳切歯～第２乳臼歯までが植立し、第１・２大臼歯の歯槽が開いているものの萌出していない。また、第１小臼歯・第２大臼歯の歯冠が形成段階にあることが観察される。遊離した永久歯をみると、いずれも歯根が形成されていない。以上のことから、本人骨は、４歳前後の幼児後半と考えられる。

出土状況の概念図を図３に示す。頭蓋は、左側を下にし、顔面が西側に向く状態である。ただし、頭蓋右側の大半を欠く。頭蓋骨・頚椎・肋骨のみの出土であり、四肢骨が確認されない。出土位置などを考慮すると、泥流によって頭部のみが流されてきた可能性もある。なお、前回実施した３号人骨が成人個体であることから、本人骨とは明らかに別個体である。

・４号人骨

No.１～９　,10-1・2・3,11～13の計15試料を取り上げた。頭蓋骨、遊離歯牙（犬歯?・右上顎第２大臼歯・左下顎第３大臼歯）、左下顎骨、肋骨、左右肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右大腿骨、左脛骨が確認される。頭蓋骨では、左右頭頂骨～後頭骨、左右側頭骨が確認される（写真20・21）。

頭蓋骨は、環状縫合、矢状縫合とも、内側が閉じており、外側の一部が閉じかけている。また、左下顎骨では、第３大臼歯が確認できるが、他の歯槽部が吸収する。さらに犬歯とみられる歯牙は咬耗が顕著である。このことから、本人骨は熟年期後半以降と考えられる。性別は、後頭骨隆起や乳様突起が発達しておらず、四肢骨も華奢であることから女性と判断される。

出土状況の概念図を図５に示す。出土位置は建物の南側にあたり、左上肢骨と左下肢骨が川側（建物側）に位置

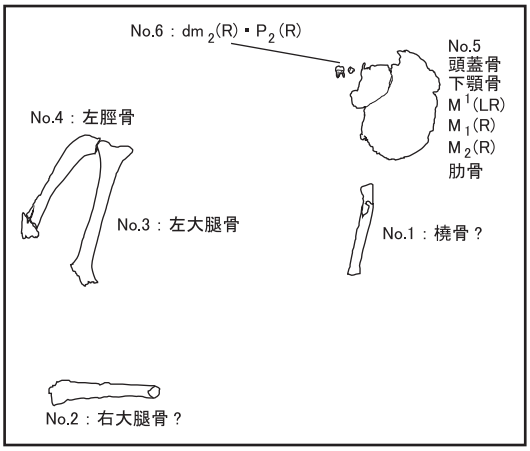


図３　１号人骨出土状況概略図

凡例）
di：乳切歯　dc：乳犬歯　dm：乳臼歯
I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯

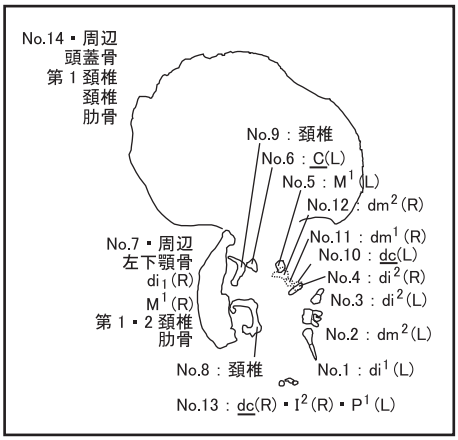


図４　２号人骨出土状況概略図

凡例）
di：乳切歯　dc：乳犬歯　dm：乳臼歯
I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯

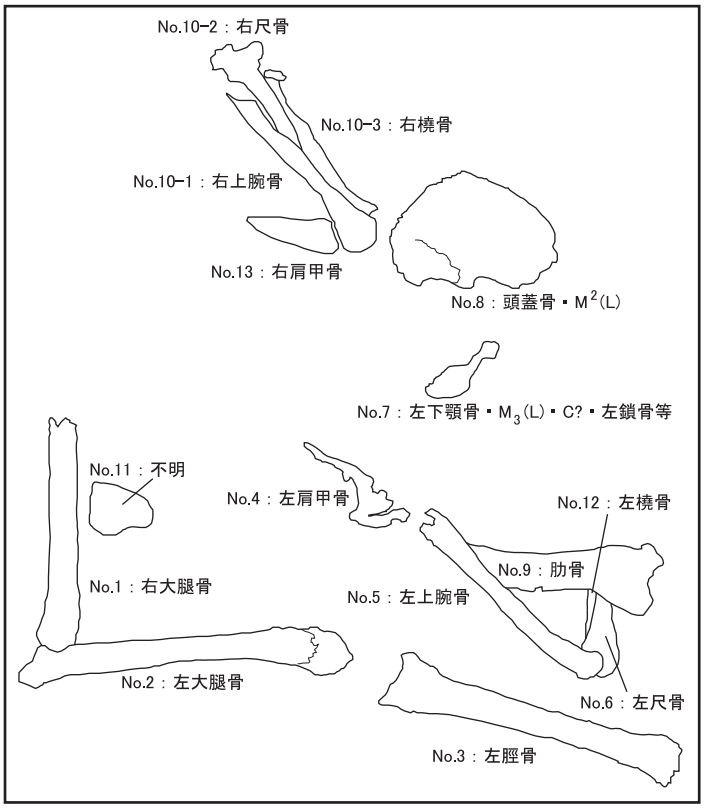


図５　４号人骨出土状況概略図

凡例）
di：乳切歯　dc：乳犬歯　dm：乳臼歯
I：切歯　C：犬歯　P：小臼歯　M：大臼歯

する。大腿骨は左右ともに背面が上を向き、左大腿骨の近位が東側、右大腿骨の近位が南側を向く。頭蓋骨は、頭頂部を下にした状態で埋まる。以上のことから、本人骨は、泥流到達時には建物側を向いた状態で泥流に被災し、建物に押しつぶされて体が背中側に折れて埋まった可能性がある。

４．まとめ

これまでの調査で、本遺跡では、計４体の人骨（１～４号人骨）が低迷泥流の最下部から検出された。各人骨についてまとめると以下の通りである。

１号人骨は、頭蓋骨と主要四肢骨などが出土し、６歳前後の小児前半であった。

２号人骨は、頭蓋骨と頚椎などが出土し、４歳前後の幼児後半であった。

３号人骨は、左下肢のみが出土し、成人以上であった。

４号人骨は、頭蓋骨と主要四肢骨などほぼ全身の骨格が出土し、熟年後半以降の女性であった。

これらの人骨は、泥流によって被災し、埋まった人骨であると思われる。家屋の付近にまとまっていることから、これらの人骨が親族関係にあった可能性もあるが、その点についてはＤＮＡ分析等で明らかにしていきたい。

引用文献
藤田　恒太郎,1949,歯の計測基準について.人類学雑誌,61,27-32.

第６節　人骨のＤＮＡ鑑定

第１項　１・２・４号人骨のＤＮＡ鑑定委託

前節で鑑定報告を掲載した１・２・４号人骨は同一の建物(27号建物)の下敷きになるような状態で出土したため､これら人骨は血縁関係にあるのではないかと思料し、ＤＮＡ鑑定を実施することとした。

第２項　ＤＮＡ鑑定委託

はじめに

石川原遺跡(群馬県吾妻郡長野原町川原湯地内に所在)は､八ッ場ダム建設工事に伴う発掘調査が行われており、吾妻川右岸の下位段丘面上(現標高533～539m)に位置し、段丘面は、吾妻川に向かって緩やかに傾斜する。これまでの調査で天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う約２～３ｍの泥流層(天明泥流)によって埋もれた屋敷や畑跡が確認されている。

この泥流の最下部より４体の人骨(１～４号人骨)が確認された。これらの人骨は、１号人骨が６歳前後の小児前半、２号人骨が４歳前後の幼児後半、３号人骨が成人個体、４号人骨が熟年後半以降女性と推定された。そこで今回の自然科学分析では、１号人骨、２号人骨、４号人骨の近縁関係を調べるためにDNA分析を実施することにした。

１．試料

分析を行った試料は既に骨同定を行った際に抽出した歯牙で、１号人骨の試料番号５中(右下顎第１大臼歯)、２号人骨が試料番号２(左上顎第２乳臼歯)、４号人骨が試料番号７(左下顎第３大臼歯)の３点である。

２．分析方法

血縁関係に関する分析は、①ヒト歯サンプルからのDNA抽出、②DNA抽出物からPCRによってミトコンドリアDNAのcontrol領域(HV1、HV2)を増幅、③増幅されたPCR産物の塩基配列を決定、④塩基配列をミトコンドリアDNAの国際標準配列であるrCRS (revised Cambridge Reference Sequence) 配列と比較、⑤歯サンプルの変異

表８　反応組成

試薬	組成量
10× PCR Buffer	5 μl(1×)
2mM dNTPs	5 μl (0.2mM)
25mM MgSO4	3 μl (1.5mM)
フォワードプライマー (2.5μM each)	6μl (0.3μM each)
リバースプライマー (2.5μM each)	6 μl (0.3μM each)
テンプレート DNA	2 μl
Taq Polymerase (1U/μl)	1 μl
滅菌超純水	22μl
Total	50μl

カッコ内は最終反応濃度

表９　プライマー組み合わせ

	プライマー名	プライマー配列(5'→3')	PCR産物(bp)	領域
①	F15989	CCCAAAGCTAAGATTCTAAT	249	mtDNA
	R16237	TGTGTGATAGTTGAGGGTTG		HV1
②	F16190	CCCCATGCTTACAAGCAAGT	221	mtDNA
	R16410	GAGGATGGTGGTCAAGGGAC		HV1
③	F34	GGGAGCTCTCCATGCATTTG	207	mtDNA
	R240	TATTATTATGTCCTACAAGC		HV2
④	F151	CTATTATTTATCGCACCTAC	227	mtDNA
	R377	GTGTTAGGGTTCTTTGTTTT		HV2

注１）mtDNA；ミトコンドリアDNA

表10　PCRプログラム

反応名	反応温度、反応時間
Pre Denature	94℃，2min.
Denature	98℃，10sec.
Annealing	48℃，30sec.
Extension	68℃，30sec.
Deanature,Annealing,ExtensionのCycle数	35or37

表11　プライマー組み合わせ

プライマー	プライマー配列(5'→3')	増幅長さ(bp)	増幅遺伝子
AmelX F	TCCCAGATGTTTCTCAAGTGG	69	X染色体
AmelX R	ATCAGAGCTTAAACTGGGAAGCTG		アメロゲニン
AmelY F	CATCCCAAATAAAGTGGTTTCTC	77	Y染色体
AmelY R	ATCAGAGCTTAAACTGGGAAGCTG		アメロゲニン

※上記プライマー配列はAmanda Fazi et al(2014)より参照

表12　リアルタイムPCRプログラム

反応名	反応温度、時間
Pre Denature	95℃，1min.
Denature	95℃，15sec.
Extension	60℃，60sec
Deanature ,ExtensionのCycle数	40

表13　各プライマー組み合わせによるPCR増幅有無結果一覧

			プライマー組み合わせ			
人骨	年齢	性別	①	②	③	④
1号人骨	6歳前後小児前半		有	有	無	無
2号人骨	4歳前後幼児後半		無	無	無	無
4号人骨	熟年後半以降	女性	有	有	無	無

した塩基配列の箇所の比較により血縁関係を判定する。一方、性別判定に関する分析は、抽出DNAを基にX染色体、Y染色体遺伝子をPCRで検出し性別を判定の順で行う。具体的な手法は、以下の通りである。

ａ)血縁関係

坂平(2007)を参考に試料調整を行い、またプライマーの配列はJohn M.Butler(福島ほか訳：2009)を参照した。また、主な試薬および使用器具は、以下のとおりである。

・TEバッファー(pH 8.0)：10mM　Tris-HCl　1 mM EDTA
・DNA AWAY(Molecular BioProducts製)
・QIAamp DNA Investigator(QIAGEN社製)
・QIAquick PCR Purification Kit(QIAGEN社製)
・QIAquick Gel Extraction Kit(QIAGEN社製)

50mlのチューブにDNA AWAYを適当量取り、試料を２分間浸けた後超純水で洗浄する。その後、試料を自然乾燥させた後，紫外線照射を片面につき30分間行い、試料をディスクカッター付きの電気ドリルで歯冠部と歯根部に切断して内部からスチールドリル付きの電気ドリルを用いて象牙質および歯髄を採取する。なお、採取した粉末サンプルは，採取時におけるDNAのコンタミネーションを極力防止するためにDNA AWAYに２分間浸けた後，数回超純水で洗浄する。

DNA抽出は、QIAamp DNA Investigatorを用いる。方法は添付プロトコールに従う。

TOYOBO社製のPCR用試薬キット『KOD Plus Neo』を用いて表１の反応組成と、表２のプライマーの組み合わせ、表3のPCRプログラムによってPCRを行う。２％アガロースゲルを用いて100V、25分間電気泳動を行い、増幅したPCR産物の確認を行う。

PCR産物の精製は、QIAquick Gel Extraction Kit(QIAGEN社製)またはQIAquick PCR Purification Kit(QIAGEN社製)を用いる。なお、分析手法は製品添付の説明書に従う。精製済みのPCR産物をダイレクトシーケンス法により塩基配列の決定する。

その他、コンタミネーション有無の確認のため、１)抽出時及びPCR操作時のコンタミ確認のためネガティブコントロールを設定、２)分析者の塩基配列も決定し、サンプルの塩基配列と分析者の塩基配列を比較しサンプルの塩基配列が分析者の配列かどうかの確認、のチェック事項を行う。

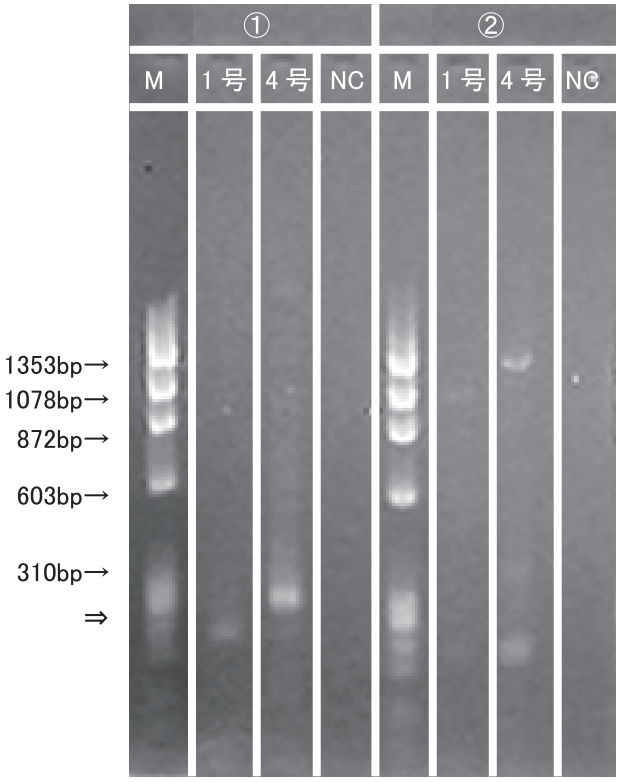


写真 15　サンプル DNA を鋳型とした mtDNA HV1 領域の PCR 増幅結果

※①: プライマー①組み合わせ
　②: プライマー②組み合わせ
※M：Maker4（ニッポンジーン社製)、
　１号：１号人骨、４号：４号人骨
　NC：ネガティブコントロール
※矢印⇒: 増幅位置

ｂ)性別判定

リアルタイムPCR装置を用いたX染色体アメロゲニン遺伝子、Y染色体アメロゲニン遺伝子の検出により性別判定を行う。

抽出したDNAを鋳型としてX染色体アメロゲニン遺伝子、Y染色体アメロゲニン遺伝子を標的にリアルタイムPCRを行う。リアルタイムPCR装置としてPikoReal Real-Time PCR System (Thermo electron社製)を用いる。プライマーは表11に挙げたものを使用する。リアルタイムPCR用試薬としてTHUNDERBIRD SYBR qPCR Mix(TOYOBO社製)を用いる。反応組成はキットのプロトコールに従う。反応プログラムは表12に示したものを用いる。なお、リアルタイムPCRは、各サンプル２反復で行う。

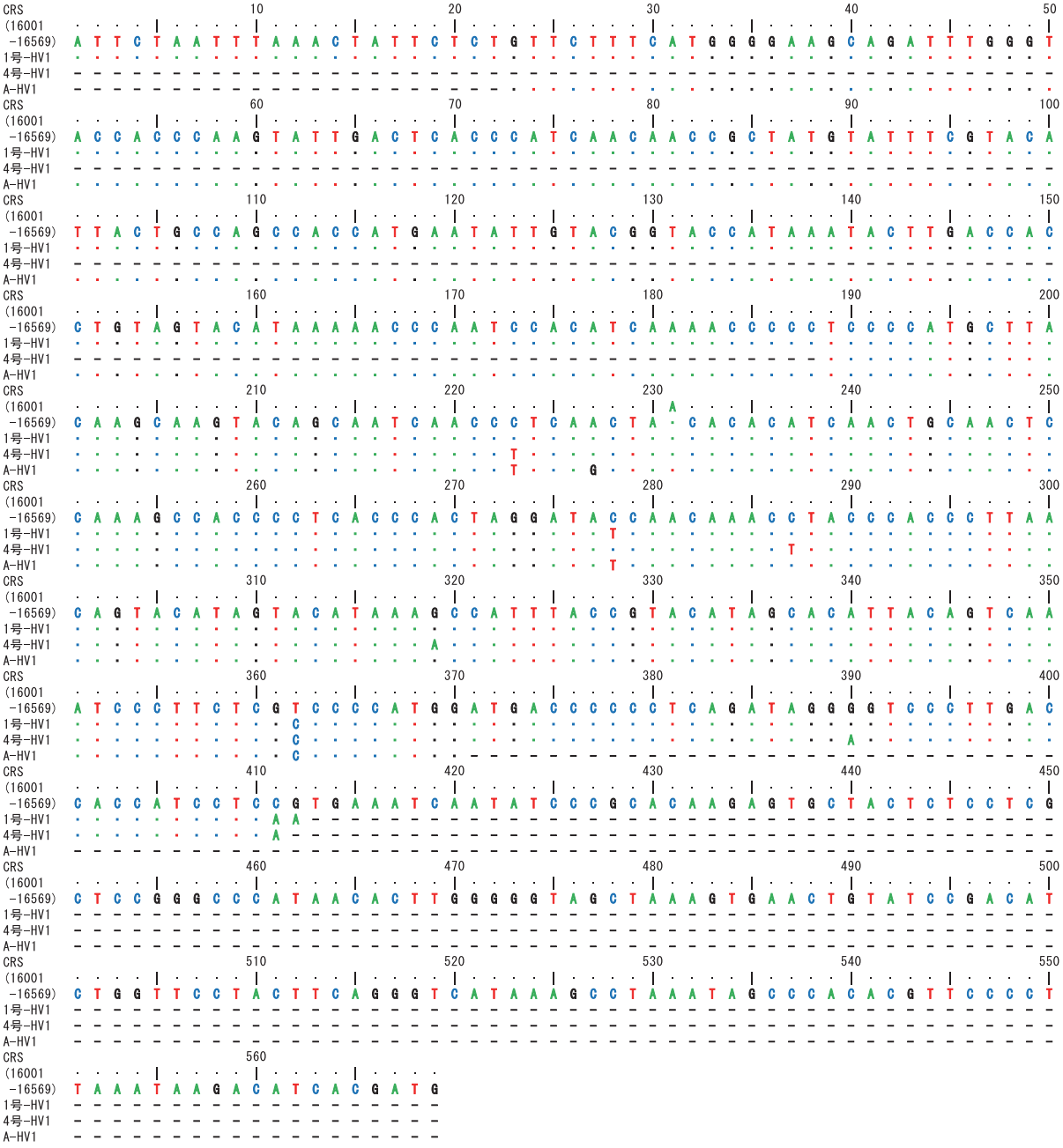


表14　HV1領域の塩基配列決定結果

※CRS：基準配列（rCRS）、A：分析者の配列
※色付の点で示した塩基はCRSの配列と一致した部位、文字で示した塩基はCRS配列と異なった部位を示す

３．結果および考察

ａ）血縁関係

表13にPCR増幅有無の結果を、写真15にPCR増幅の電気泳動結果を示す。２号人骨はPCR増幅が全く認められない。１号人骨と４号人骨はHV１領域（プライマー組み合わせ①、②）のみ増幅が確認される。

１号人骨と４号人骨のHV１領域から部分的ではあるが塩基配列が正常に決定できた。表14に決定した塩基配列を示す。分析者とサンプルでは変異箇所が異なり、決定した塩基配列はサンプル由来のものであると推定される。これより１号人骨と４号人骨のHV１領域配列の比較によりの血縁関係を検討することにした。

表15にrCRSとサンプルと分析者の塩基配列の比較を示す（表中ではｒCRS配列から変異した箇所のみ示す）。この結果をみると、rCRSと比較してみると、１号人骨では不一致箇所が４塩基、４号人骨では不一致箇所が７塩基となる。ところで、ミトコンドリアＤＮＡの可変領・塩基配列が完全一致している場合は同一人物または同一母

表15　サンプル塩基配列とｒＣＲＳ配列との比較

rCRS配列 塩基番号	rCRS配列	1号人骨	4号人骨	A
16183	A	A	－	A
16189	T	T	－	T
16223	C	C	*T*	*T*
16227	A	A	A	*G*
16278	C	*T*	C	*T*
16287	C	C	*T*	C
16319	G	G	*A*	G
16362	T	*C*	*C*	*C*
16390	G	G	*A*	G
16411	C	*A*	*A*	－
16412	G	*A*	－	－
mtDNA 配列決定範囲	160001- 16569	16001- 16412	16189- 16411	16001- 16370
ハプログループ※	－	D （16362：C）	D （16362：C）	D （16362：C）

※ ハプログループ：判定はJohn M.Butler(2009)を参考に判定した。
※ A：分析者

系家系に由来していると判断できる
・２塩基以上不一致の場合は同一人物ではない、もしくは同一母系家系に由来しないと判断できる
・１塩基のみの場合同一人物または同一母系家系に由来しているか結論を確定できない

以上の判断基準に基づくと、１号人骨と４号人骨は不一致箇所が５塩基であることから、血縁関係に無いと考えらえる。

b)性別判定

リアルタイムPCRでX、Y染色体のアメロゲニン遺伝子検出を試みた。その結果を表16に示す。

１号人骨からはX染色体のみが検出された。X、Y染色体のアメロゲニン遺伝子を標的とした性別判定は、アメロゲニン遺伝子がシングルコピーであるため、劣化の激しいDNAサンプルやごく微量のDNAサンプルを扱う場合やプライマーの位置に変異が起きた場合には検出感度が悪くなることが知られている。特にごく微量なDNAサンプルや劣化の激しいDNAサンプルの場合には、上記理由から男性を女性と誤判定する可能性する場合がある(Fazi et. Al.,2014)。以上のことから、本人骨は断定ができないものの、女性の可能性があると言える。一方、４号人骨はX、Y染色体の増幅が認められなかった。染色体DNAの分解により増幅できなかったと思われる。よって性別判定はできず、性別は不明であった。

４．まとめ

これまでの調査で計４体の人骨(１～４号人骨)が天明泥流の最下部から検出された。各人骨について骨同定とDNA分析の結果をまとめると以下の通りである。

１号人骨は、頭蓋骨と主要四肢骨などが出土し、６歳前後の小児前半であり、女性の可能性がある。

２号人骨は、頭蓋骨と頚椎などが出土し、４歳前後の幼児後半であった。性別は不明である。

３号人骨は、左下肢のみが出土し、成人以上であった。

４号人骨は、頭蓋骨と主要四肢骨などほぼ全身の骨格が出土し、熟年後半以降の女性と判断できた。

これらの人骨は、いずれも泥流によって被災し、埋まった人骨であると思われる。家屋の付近にまとまっていることから親族関係にあった可能性を考慮したが、少なくとも１号人骨と４号人骨は血縁関係がないものと判断できた。おそらく、その集落内で逃げ遅れた複数家族が流されて埋まったと考えられ、近隣に居住していた家族の可能性がある。

引用文献
Amanda Fazi, Brianne Gobeski and David Foran,2014,Development of two highly sensitive forensic sex determination assays based on human DYZ1 and Alu repetitive DNA elements. Electrophoresis,35,p.3028－3035.
John M.Butler(福島 弘文・五條堀孝監訳　藤宮 仁・玉田一生・福間義也・長　華奈子訳),2009,DNA鑑定とタイピング―遺伝学・データベース・計測技術・データ検証・品質管理―.共立出版株式会社,590p.
坂平文博,2007,古代DNA分析による中世専業集落形成過程の検討-村松白根遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析.Anthoropological Science(Japanese Series),115,p.85-95.

表16　リアルタイムPCRを用いたX染色体、Y染色体検出による性別判定

人骨	年齢	性別	X染色体 リアルタイムPCR Cq値※1 反復1	 反復2	Y染色体 リアルタイムPCR Cq値※1 反復1	 反復2	X染色体 検出※2	Y染色体 検出※2	性別判定
1号人骨	6歳前後小児前半		33.45	増幅無	増幅無	増幅無	＋	－	女性？
4号人骨	熟年後半以降	女性	増幅無	増幅無	増幅無	増幅無	－	－	不明
NC※3			増幅無	増幅無	増幅無	増幅無	－	－	-

※1リアルタイムPCR　Cq値：PCRの増幅過程において増幅産物が一定濃度に達した増幅サイクル数を示す。
　数値が低ければサンプル中のDNA量が多く存在することを表す。
※2：リアルタイムPCR結果から増幅有の場合を＋、増幅無の場合を－と示す。
※3：NC：ネガティブコントロール

第７節　獣骨の鑑定

第１項　獣骨の鑑定委託

５区15屋敷27号建物の４号人骨の北側４m地点、東側縁側の板上から小型の肉食獣と思われる獣骨が出土した。発掘調査段階でこの獣骨は、その大きさからネコと推定したが、その獣種の特定と、骨種の特定を鑑定要件として鑑定に附した。

鑑定の結果､この獣骨はネコに間違いないことが判り、全身の骨格がほぼ遺存していることも確認された。また個体として規模は小さく、四肢骨は短いものの幅広であることも確認された。

第２項　石川原遺跡出土のネコ遺体

群馬県立自然史博物館
姉崎　知子

本遺跡より保存状態の良いネコ遺体が１体出土した。左上より圧を受け、頭骨がややつぶれているが、ほぼ全身骨格が残存している(写真22)。

残存部位は、左右上顎骨を伴う頭蓋骨、左右下顎骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右頭骨、左右尺骨、左手根骨(尺側、橈側、第一、第二、第四)、右手根骨(尺側、第一、第二、第四、副)、左中手骨(第一、第二、第三、第四)、右中手骨(第一、第二、第三、第四、第五)、前肢指骨(左基節骨１点、右基節骨３点、左中節骨１点、左末節骨１点、右末節骨１点)、右寛骨、左右大腿骨、右膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨、左踵骨、右距骨、右足根骨(第一)、左中足骨(第二、第三、第四)、右中足骨(第三、第四、第五)、後肢指骨(左基節骨３点、右基節骨２点、左中節骨１点、右末節骨１点)、第一頸椎、第二頸椎、頸椎５点、胸椎13点、腰椎７点、尾保根１点、胸骨、左右肋骨である。主要部位の計測値は表17に示した。

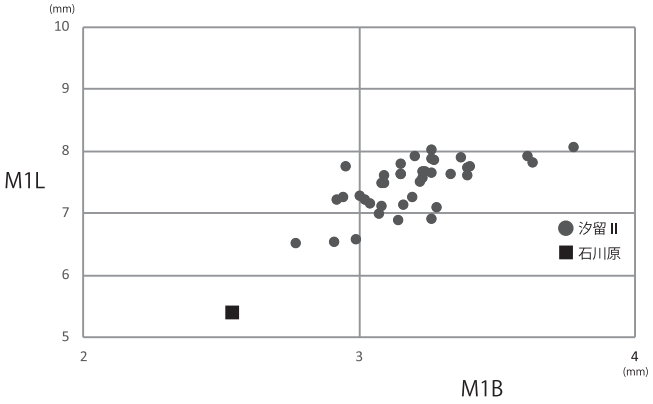


図６　下顎第１大臼歯のサイズ比較

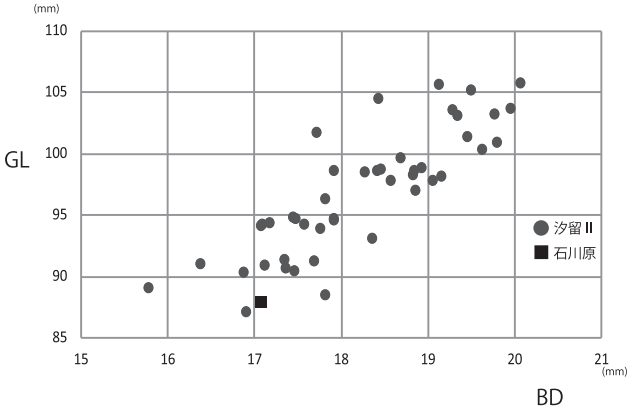


図７　上腕骨のサイズ比較

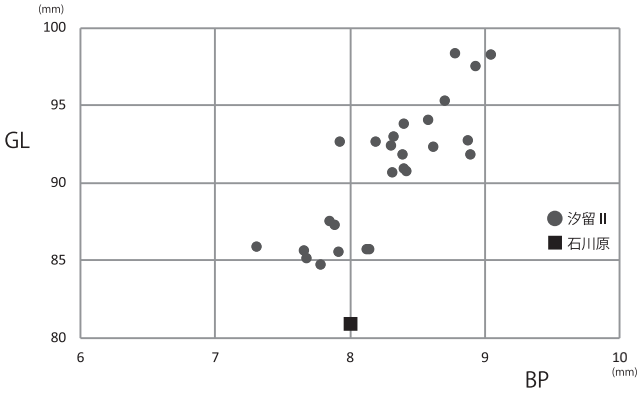


図８　橈骨のサイズ比較

表17　ネコ遺体頭骨計測値　　mm

部位		左右	点数	歯式	備考	結合部-間接突起	C-M	C 近遠	C 頬舌	M1 近遠	M1 頬舌	M2 近遠	M2 頬舌	M3 近遠	M3 頬舌
頭蓋骨	上顎	L	1	(xI23CM123)	左上より圧を受けて、左前方にややつぶれる			5.18	3.53	6.2	3.67	10.25	6.07	4.09	2.49
		R	1	(I123CM123)				5.12	3.55	6.36	3.44	10.29	6.01	3.66	1.89
下顎骨		L	1	(xxxCM123)		52.64	18.75	4.62	3.51	5.43	2.61	7.07	3.15	6.76	3.08
		R	1	(xxI3CM123)		53.66	1846	4.75	3.49	5.27	2.68	6.69	2.92	6.94	3.28

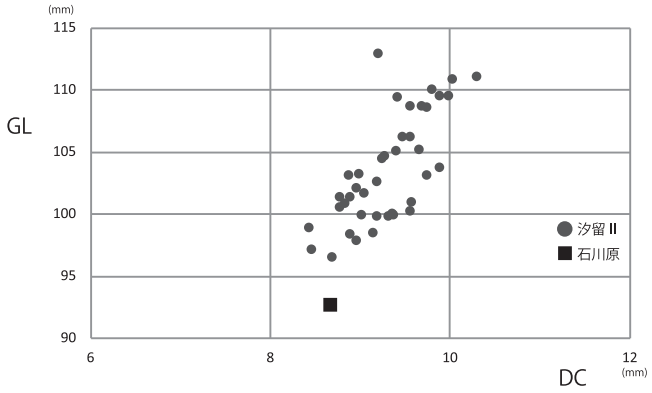


図９　大腿骨のサイズ比較

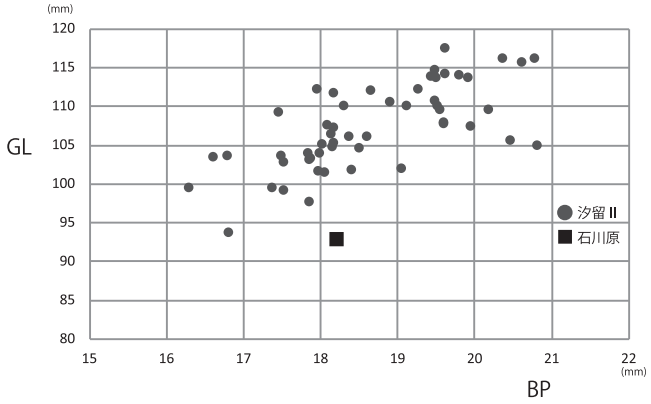


図10　頸骨のサイズ比較

上腕骨と大腿骨の大きさを汐留II遺跡出土のネコ遺体と比較したところ(図６～図10)、下顎大臼歯、四肢骨ともに当該遺跡の個体は小さいことが確認された。ただし、四肢骨については、GL(最大長)は短いものの、骨端は幅広いことも確認された。

第８節　緑色系漆椀の分析

１．はじめに

群馬県吾妻郡長野原町にある石川原遺跡より出土した緑色系漆椀(51建W-34)について元素分析をおこなった。

現在、群馬県内で確認されている緑色系漆椀は石川原遺跡より出土した今回分析を検討している資料１点のみである。江戸出土の挽物の全体における割合としても１割以下となることが多く、18世紀以降としても江戸遺跡における流通量はわずかであり非常に珍しい。

緑色系漆は黄色鉱物の「石黄」と青色の染料「藍」を漆液に混ぜて製作されたことが判明している。この中でも石黄について、天然石黄(As_2S_3)は江戸時代前期を中心とした中国や東南アジアからの輸入品が主で、一部国産で質が悪いものが流通していた推測がされている。その後、享保年間(1716～1736)に会津で亜砒酸(As_2O_3)と硫黄(S)を混合して加熱し、蒸発再結晶化して硫化砒素を回収する方法で人工石黄の製造が始まったことから、より緑色系漆が普及したことが今までの研究からわかっている。(北野　2005)

今回の分析はＸ線光電子分光でおこなった。当初はＸ線回折による化合物の分析をおこなう事を検討していたが、Ｘ線回折だと薄片資料を粉末状にして計測するため破壊分析となるが、Ｘ線光電子分光であれば比較的小さな範囲(５～10nm)のエッチングのみで分析が可能であることや、Asの組成にターゲットを絞って分析することが可能であるとの群馬大学機器分析センターの林史夫氏、坂本広太氏の助言により、今回はＸ線光電子分光をおこなう事にした。

分析をおこなうことで石川原遺跡の緑色系漆椀がいままでの研究結果に指摘されている会津で製作された人工石黄か輸入品もしくは国内産の天然石黄を利用したものかの判断ができる。

また、人工石黄であった場合、会津で享保年間(1716～1736)に成立した技術を用いて製作された漆椀が天明３(1783)年の時点で石川原遺跡に存在することになり、他の漆椀の来歴を検討する場合の好材料となる。

分析方法

Ｘ線光電子分光(XPS)をおこなった。分析は群馬大学機器分析センターに依頼し、林史夫氏(群馬大学研究・産学連携推進機構 機器分析センター 准教授)、坂本広太氏(群馬大学研究・産学連携推進機構 機器分析センター 技術職員)に分析を依頼した。

以下に測定条件を提示する。

装置名：Axis-NOVA(Kratos,US)

Ｘ線源：Al Kα(1486.6 eV)

Ｘ線出力：スペクトル分析時150 W(Emission current:10 mA,Anode:15 kV)

測定範囲：約200 μ㎡

パスエネルギー:160 eV(サーベイスペクトル),20 eV(ナロースペクトル)

取得間隔：1.0 eV(サーベイスペクトル),0.1 eV(ナロースペクトル)

エッチングによる前処理条件：5.0 nm/min(SiO_2換算)

スパッタ時間：１分

測定箇所

湾曲している外面を測定面としてエッチングした後に測定した。

解析条件

解析条件データ解析ソフト:Casa-XPS

バックグラウンド:Shirley法

エネルギー補正：C 1sのピークを284.5 eVとして補正した。

分析結果

以下に群馬大学機器分析センター坂本広太氏の報告を元に板垣が加筆した。

まず、ワイドスキャンによりFe、O、Ca、N、C、As、P、S、Si、Alの元素が検出された。As、S、Oが含まれていることが確認できたことから、より詳細な分析であるナロースキャンをおこなった。

ナロースキャンでは調べたいピークの分解能を高く分析することができる。また、カーブフィッティングという手法を用いてピークのエネルギー値から化学状態を推定する。

As 3dのスペクトルを測定したところ、As_2S_3のピークがAsの２つめのピークと重なり、更にCaスペクトルとも

重なっていたため判断がつかなかったが、確認のため測定・解析をおこなった。ピークのエネルギー値からAs(41.9 eV)およびAs_2O_3(44.1 eV)の化学状態であることが予想されたが、このスペクトル上では、存在の有無に関して確認できなかった。

そこで１つの化学状態に対して１本のピークが検出される$As\ 2p_{3/2}$スペクトルを測定したところ、それぞれAs(1323.8 eV)およびAs_2O_3(1326.0 eV)を確認することができた。

Ｓ2pスペクトルを解析したところ、金属硫化物(161.1eV)、Ｓ単体(162.9eV)のピークの検出が考えられた。As_2S_3(164.8eV)の検出は確認できなかったため、金属硫化物は他元素由来のものとし、Asスペクトルでの解析結果を裏付けることができた。

Oスペクトルを解析したところ、C-(C=O)-C（531.9eV）と金属酸化物(531.0ev)のピークがそれぞれ検出された。C-(C=O)-Cは炭素とケトン結合している0由来のピークで今回は対象にならない。As_2O_3ピークと他の酸化物のピークの結合エネルギーが近く分離して解析することができないので金属酸化物のピークとしてまとめた。

以上の結果からAsの科学状態はAs_2S_3ではなく、As_2O_3であると考えられる(図11～15)。

まとめ

今回の分析の結果、亜砒酸(As_2O_3)と硫黄(S)が検出されたことから会津で生産された人工石黄を使用した緑色系漆椀である可能性がある。会津に関係すると見られる資料が確認されたことにより、他の漆椀についても会津製が含まれている可能性がある。特に漆膜が剥がれやすい製品について会津の粗製濫造期が延享～宝暦年間(1744～1764)にあったと読める記録がある(北野　2005)ことから、他の劣化が顕著な漆椀についても会津とのつながりを検討する材料となると考えられるが、今回は詳細な調査をおこなっていないため今後の研究課題と考えられる。

参考資料
北野信彦・肥塚隆保　「近世出土漆器に使用される石黄に関する基礎的調査(Ⅰ)」『文化財保存修復学会誌44』(2000年)p70～p79
北野信彦・肥塚隆保　「近世出土漆器に使用される石黄に関する基礎的調査(Ⅱ)」『文化財保存修復学会誌45』(2001年)p118～p127
北野　信彦『近世漆器の産業技術と構造』(2005)雄山閣p62～p79
北野　信彦『近世出土漆器の研究』(2005)吉川弘文館p40～p41
本多貴之・増田隆之介・宮腰哲雄　「東京大学本郷構内の遺跡より出土した緑色系漆椀の化学分析」『東京大学構内遺跡調査研究年報10　2013・2014年度』(2017年)東京大学埋蔵文化財p257～p271
清水香　「江戸遺跡から出土した緑色系漆椀の基礎研究」『東京大学構内遺跡調査研究年報10　2013・2014年度』(2017年) 東京大学埋蔵文化財p273～p311

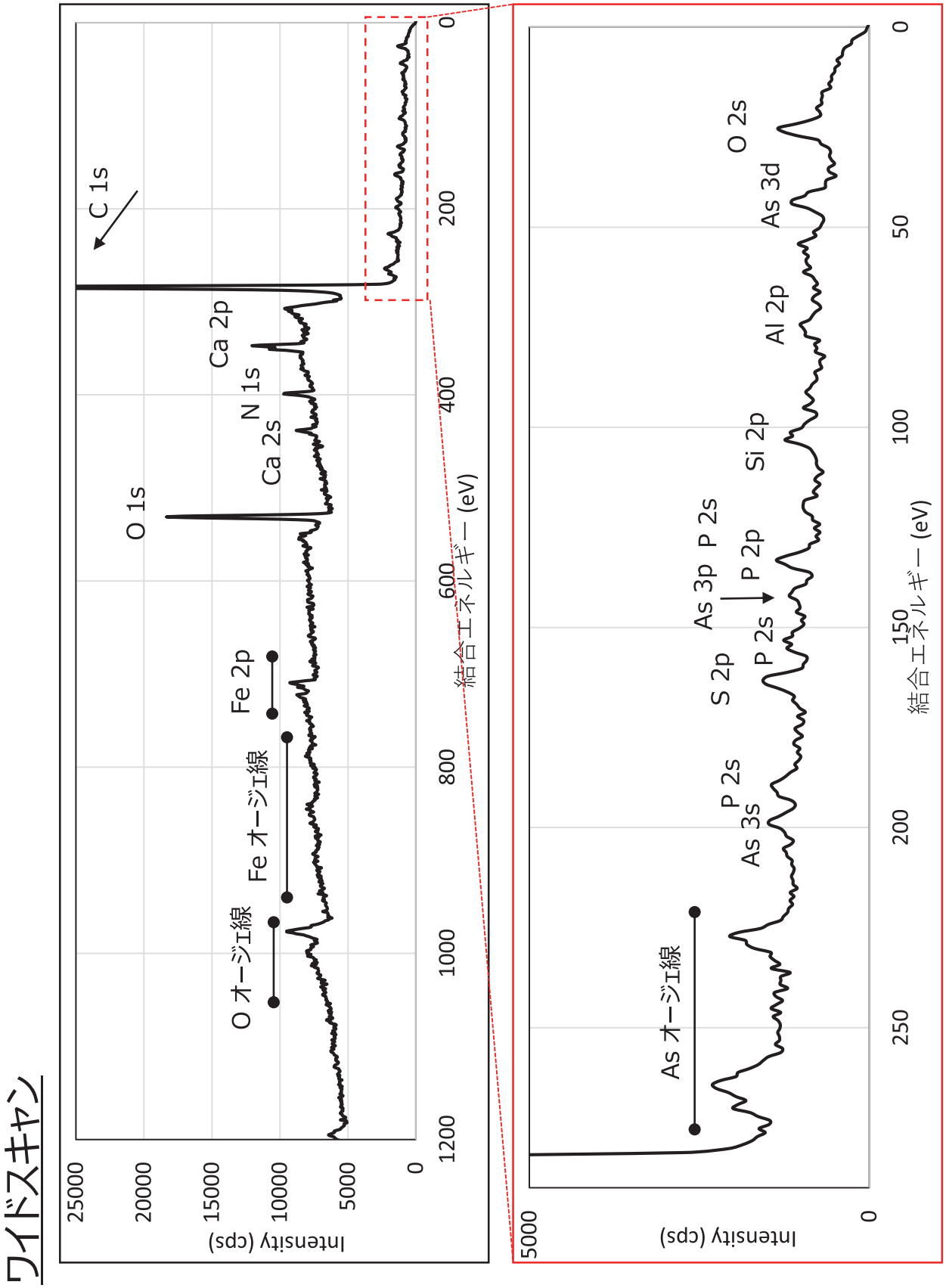


図11　X線光電子分光ワイドスキャン

As 3dスペクトル

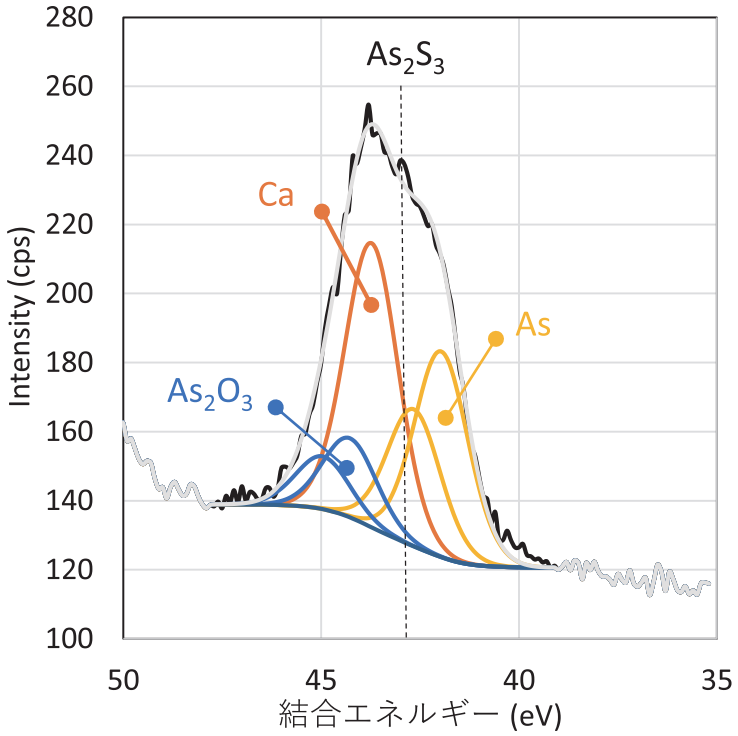


図12　X線光電子分光As 3dスペクトル

As $2p_{3/2}$スペクトル

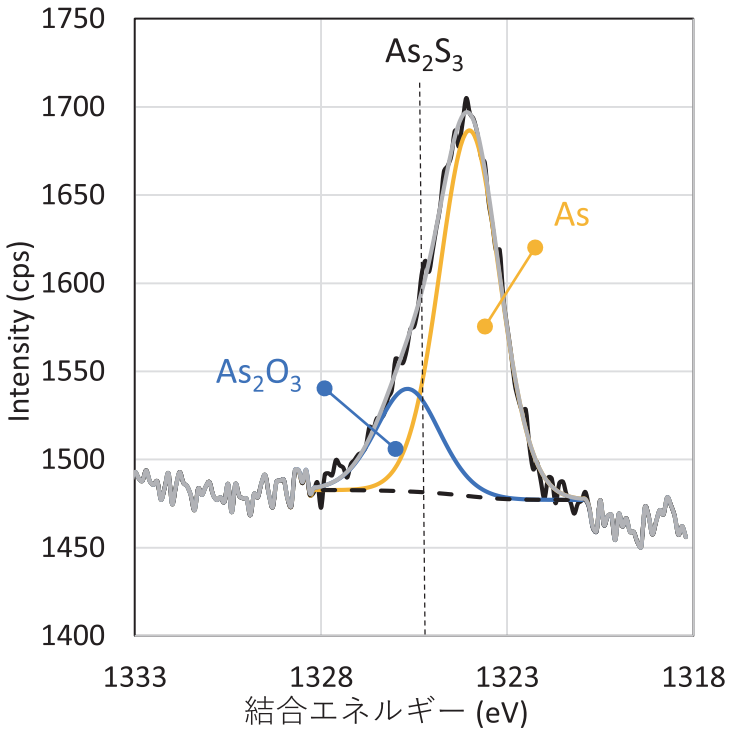


図13　X線光電子分光As $2p_{3/2}$スペクトル

S 2pスペクトル

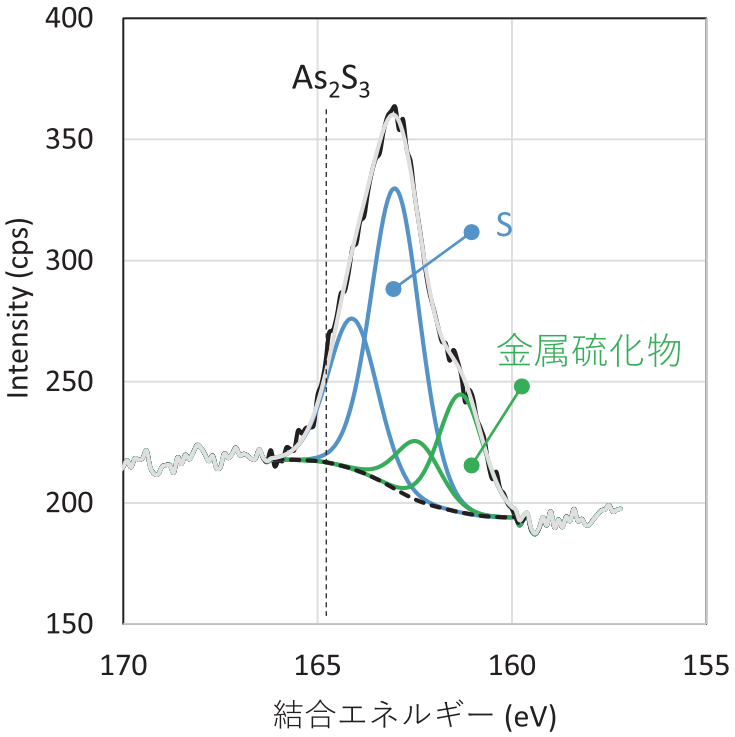


図14　X線光電子分光S 2pスペクトル

O 1sスペクトル

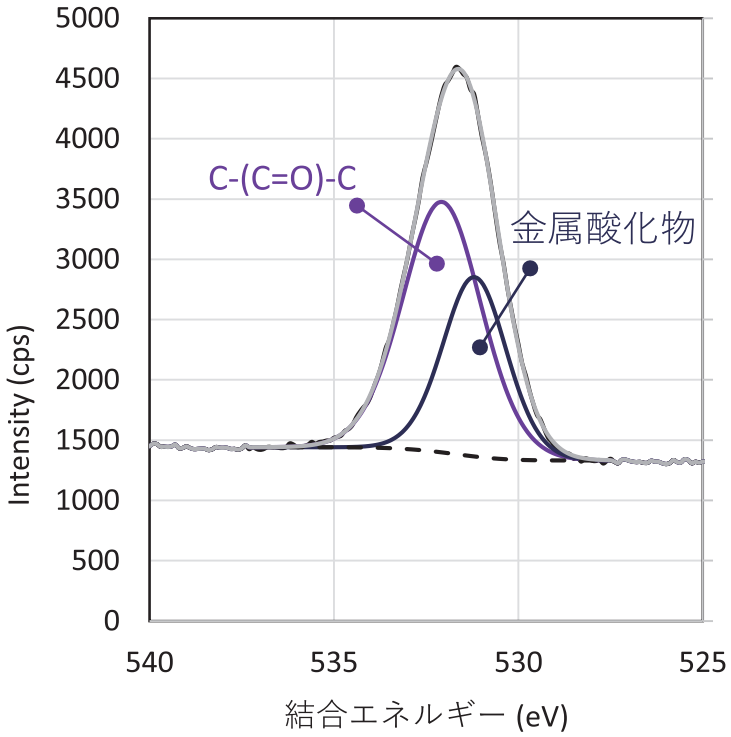
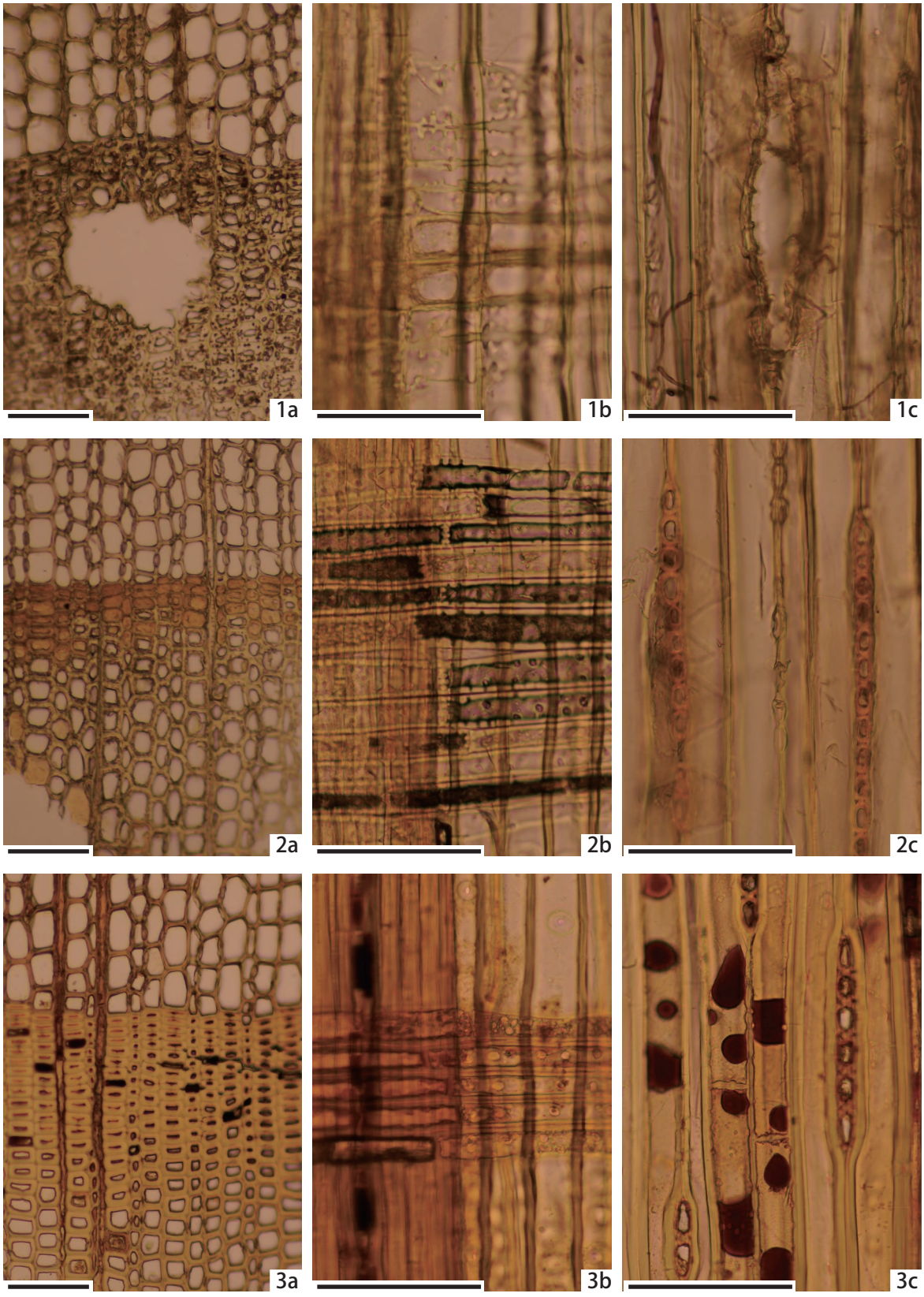


図15　X線光電子分光0 1sスペクトル

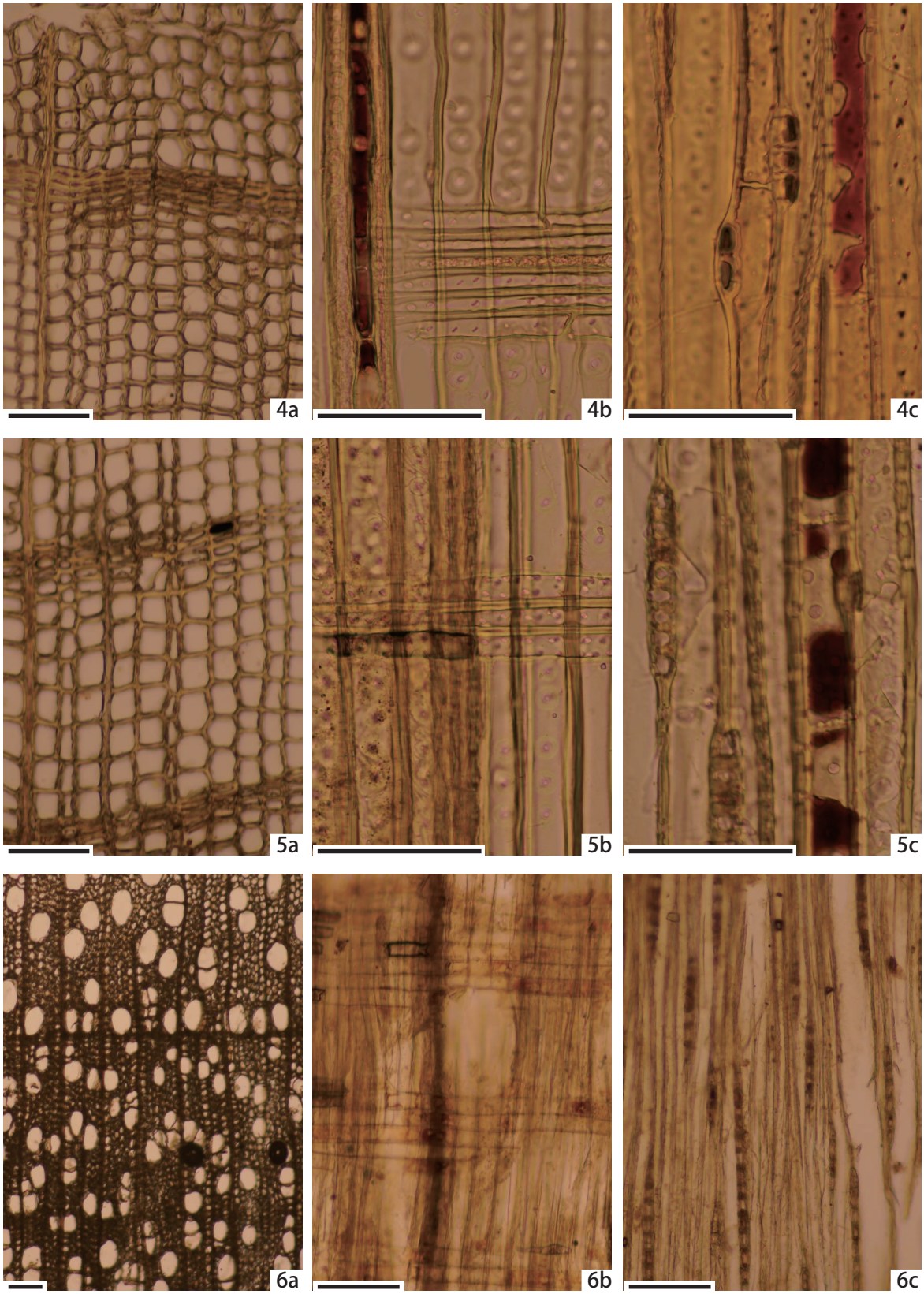
写真1



1.マツ属複維管束亜属(管理番号75)
2.モミ属(管理番号61226)
3.スギ(管理番号6135)
　a：木口, b：柾目, c：板目

各写真のスケールは100μm

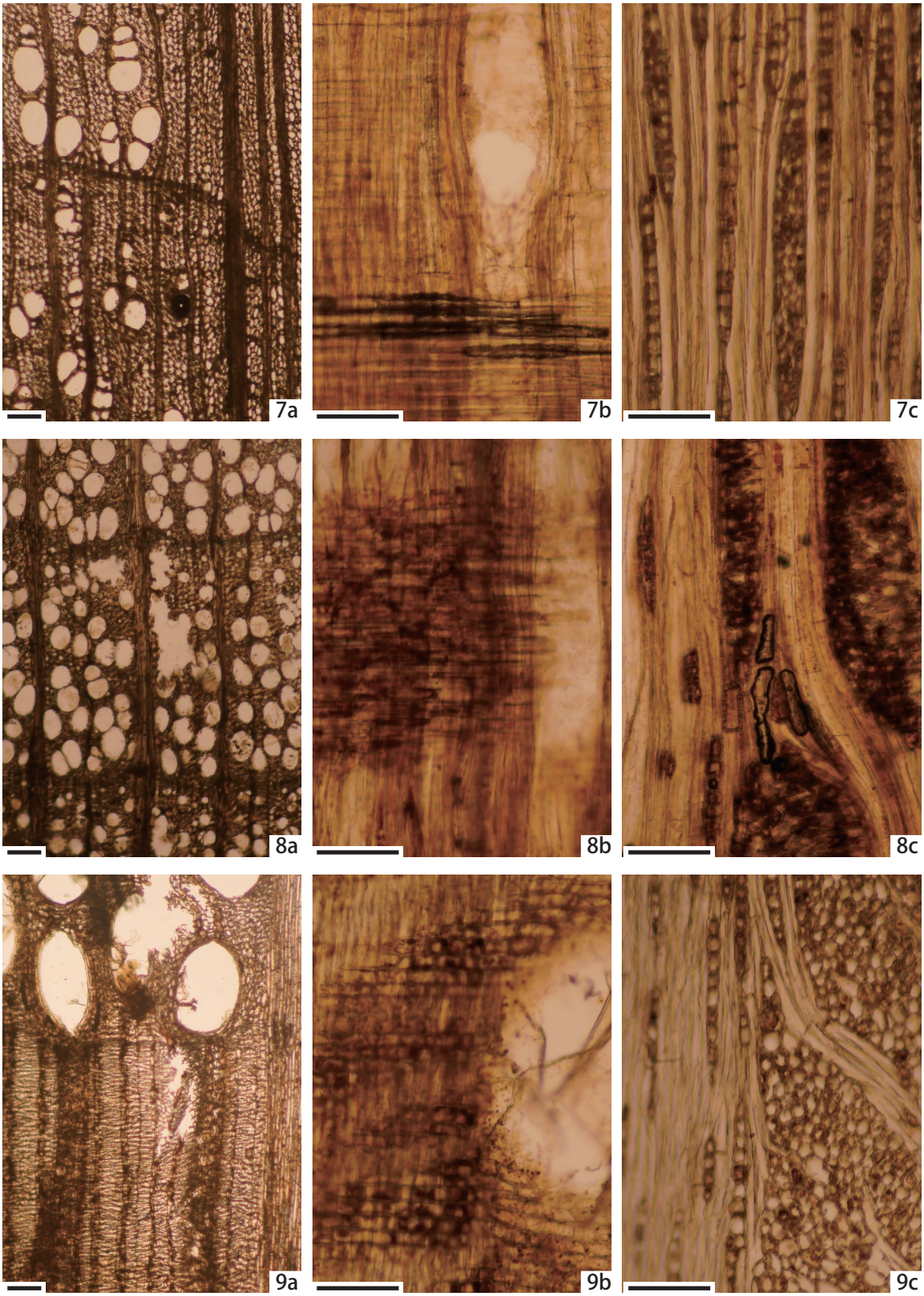
写真２



4.ヒノキ(管理番号61776)
5.サワラ(管理番号61256)
6.ヤナギ属(管理番号61746)
　a：木口, b：柾目, c：板目

各写真のスケールは100μm

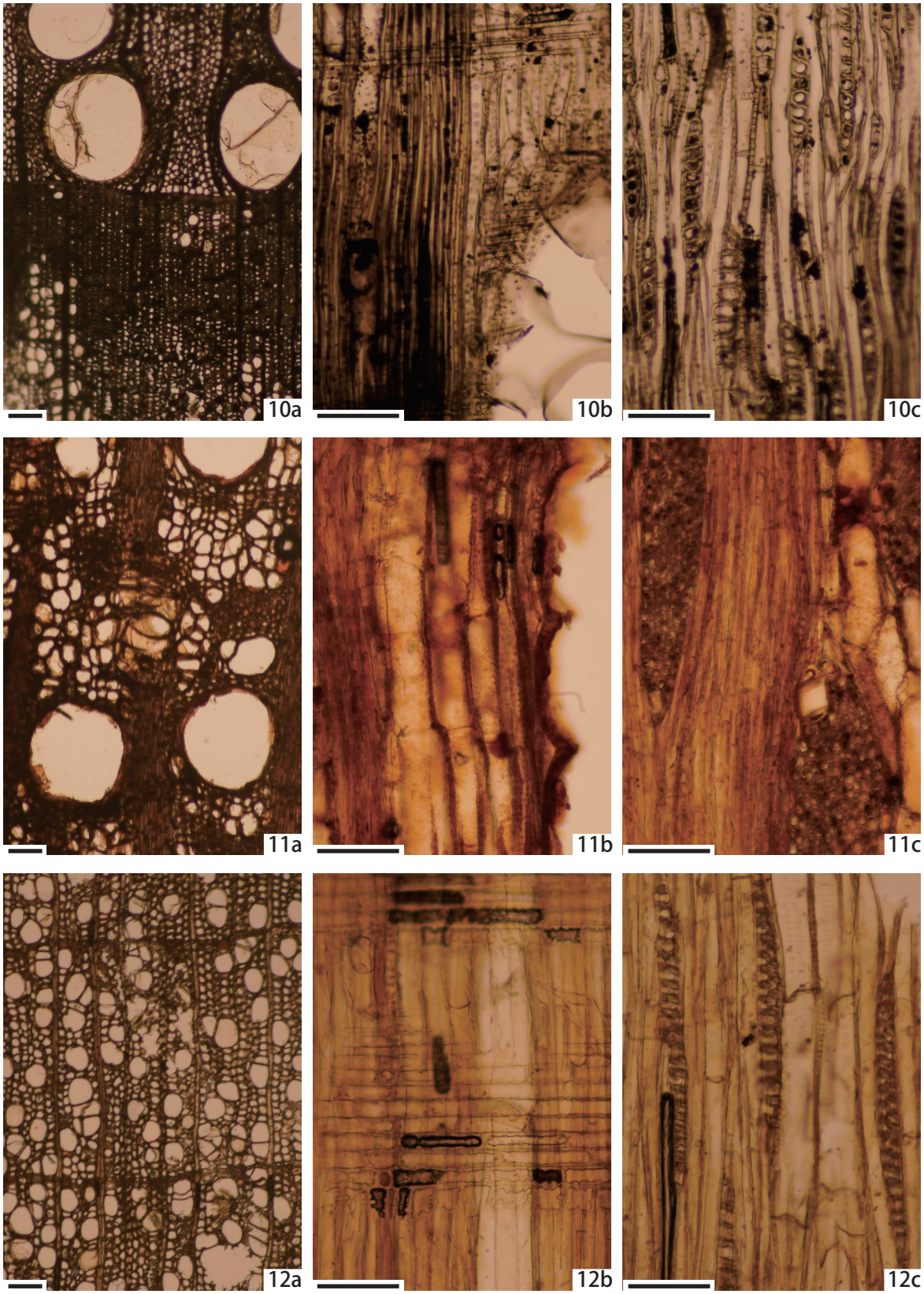
写真３



7.クマシデ属イヌシデ節(薪№92)
8.ブナ属(管理番号61696)
9.コナラ属コナラ節(管理番号61755)
　a：木口, b：柾目, c：板目

各写真のスケールは100μm

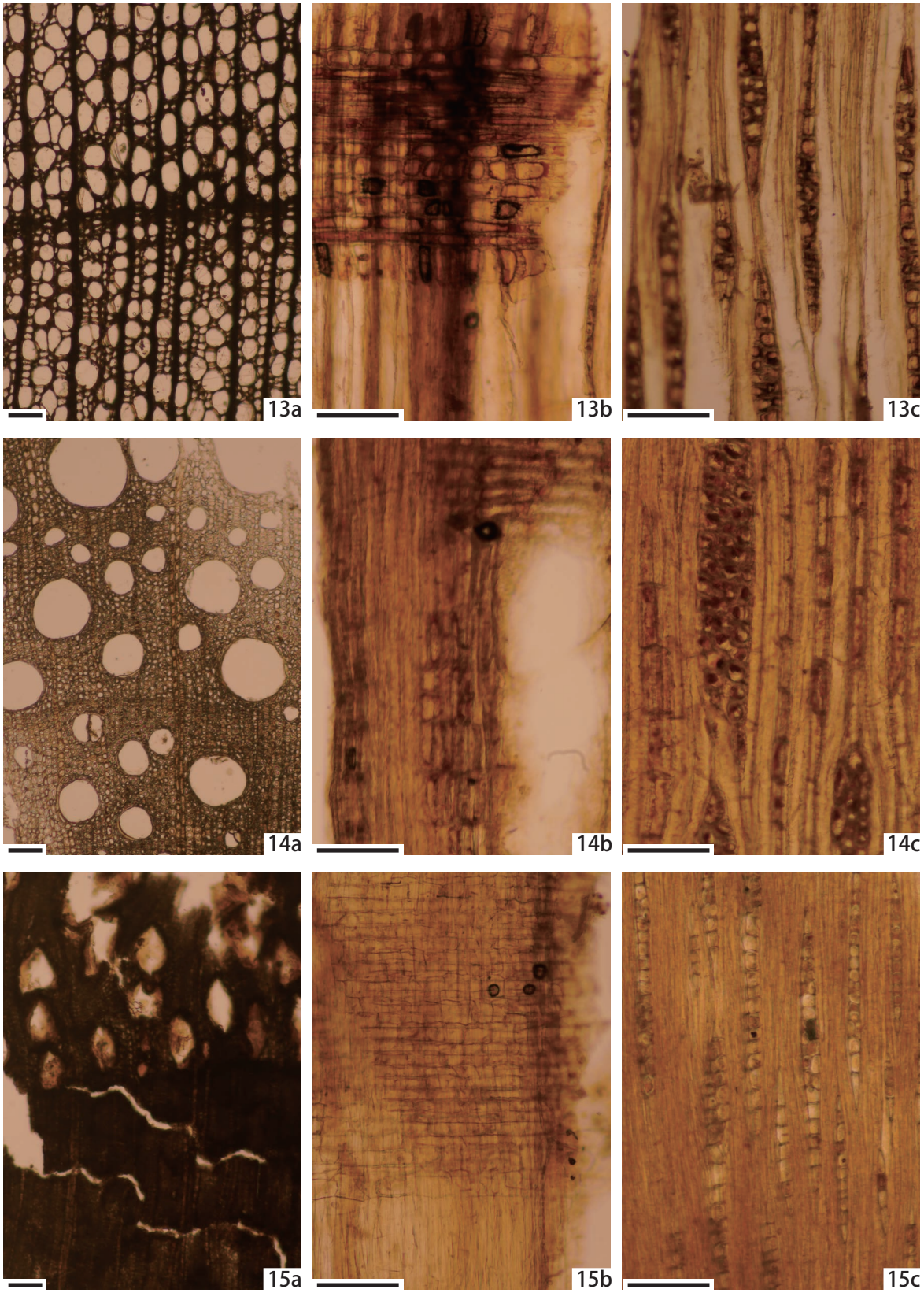
写真 4



10.クリ(管理番号1)
11.ケヤキ(管理番号61420)
12.モクレン属(管理番号61302)
　a：木口，b：柾目，c：板目

各写真のスケールは100μm

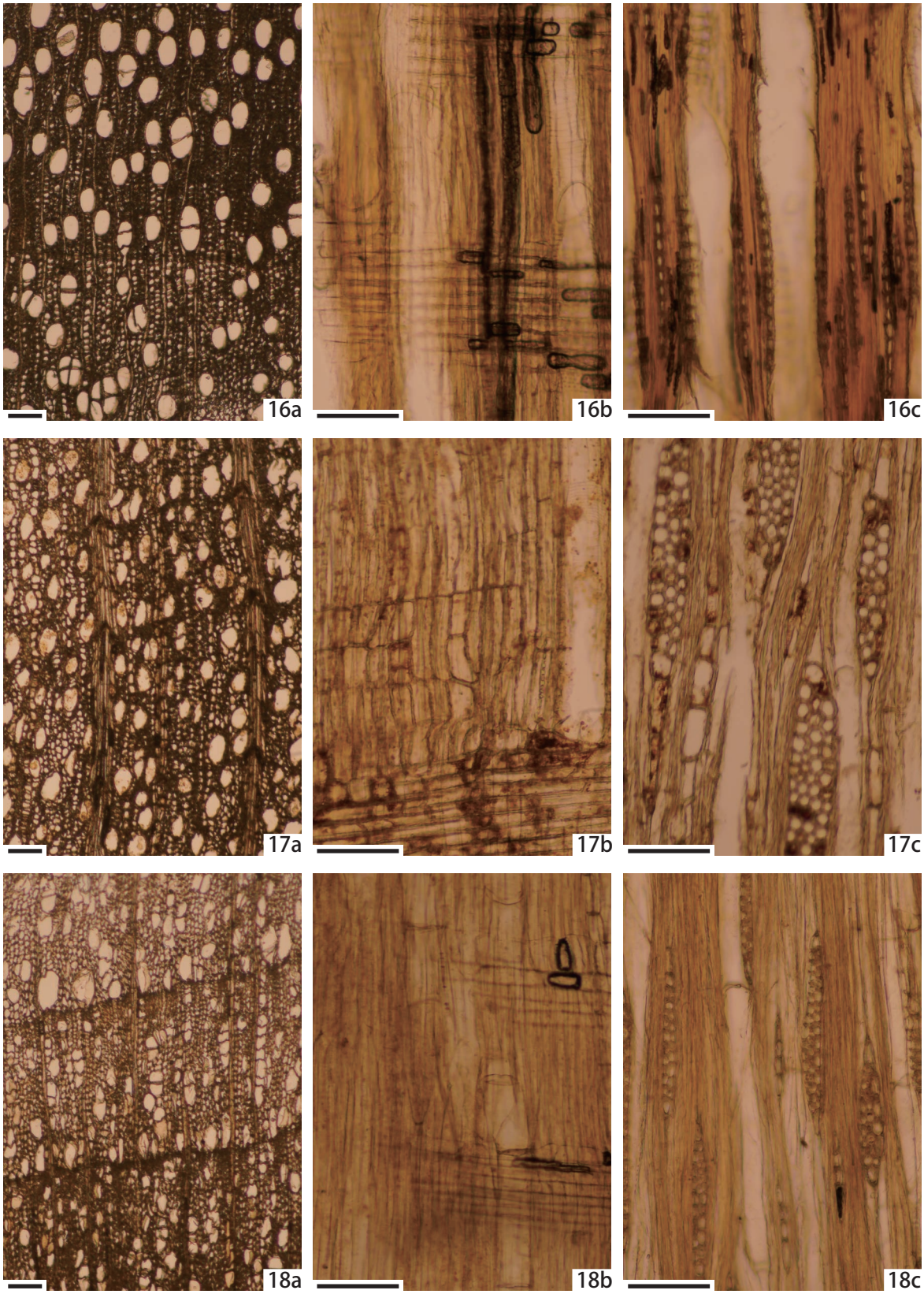
写真５



13.カツラ(管理番号61276)
14.マタタビ属(管理番号61363)
15.ウルシ属(管理番号61301)
　a：木口，b：柾目，c：板目

各写真のスケールは100μm

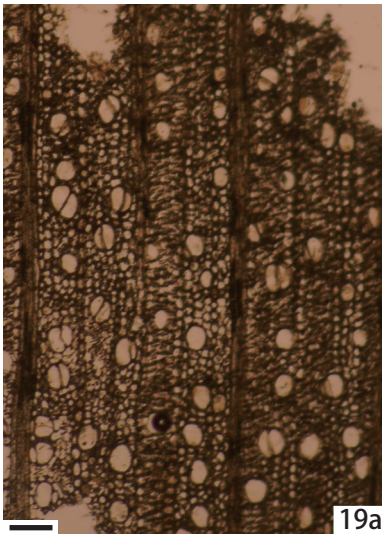
写真６

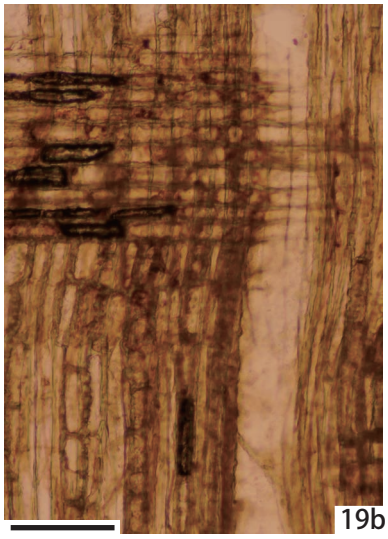


16.トチノキ(管理番号535)
17.ゴンズイ(管理番号61788)
18.タカノツメ(管理番号61257-2)
　a：木口, b：柾目, c：板目

各写真のスケールは100μm

写真７

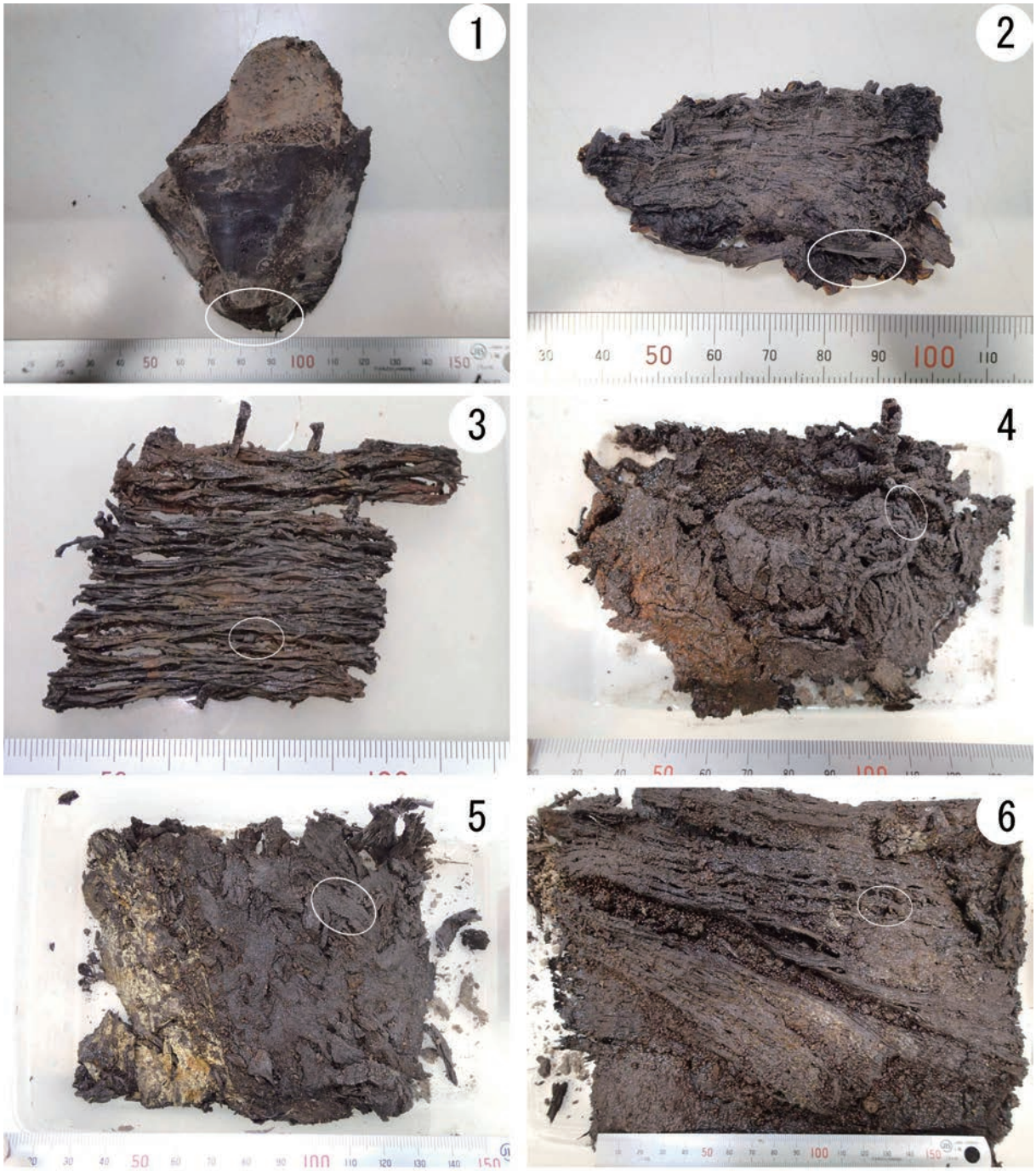




19.ガマズミ属(管理番号61747)
a：木口，b：柾目，c：板目
各写真のスケールは0.1㎜

各写真のスケールは100μm

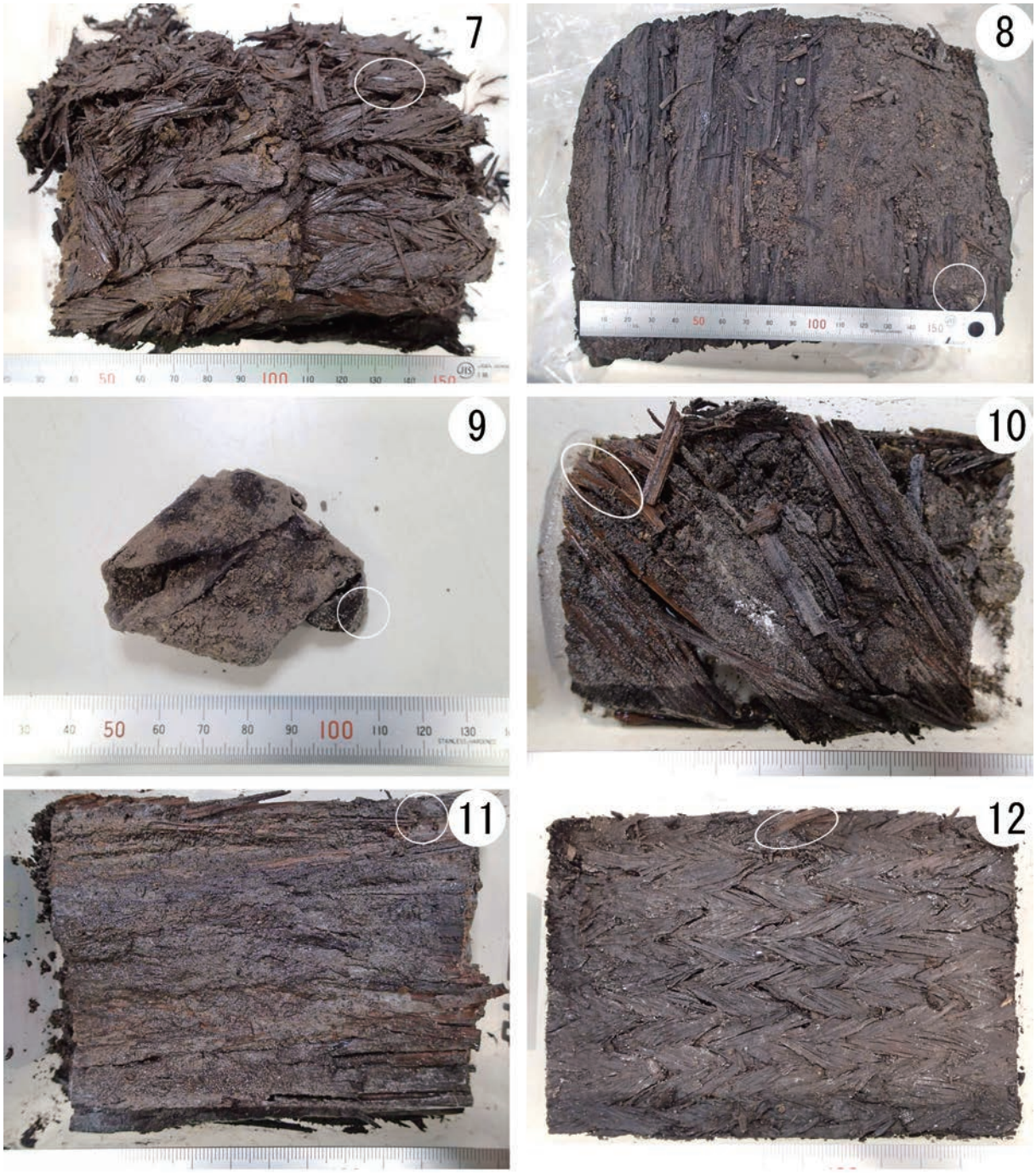
写真 8



1. 試料No.3（27号建物：樹皮）
2. 試料No.7（27号建物　樽内容物：ゴザ編み）
3. 試料No.8（27号建物：ゴザ編み）
4. 試料No.9（27号建物：縄）
5. 試料No.10（27号建物：縄編み状）
6. 試料No.11（27号建物：ゴザ編み）

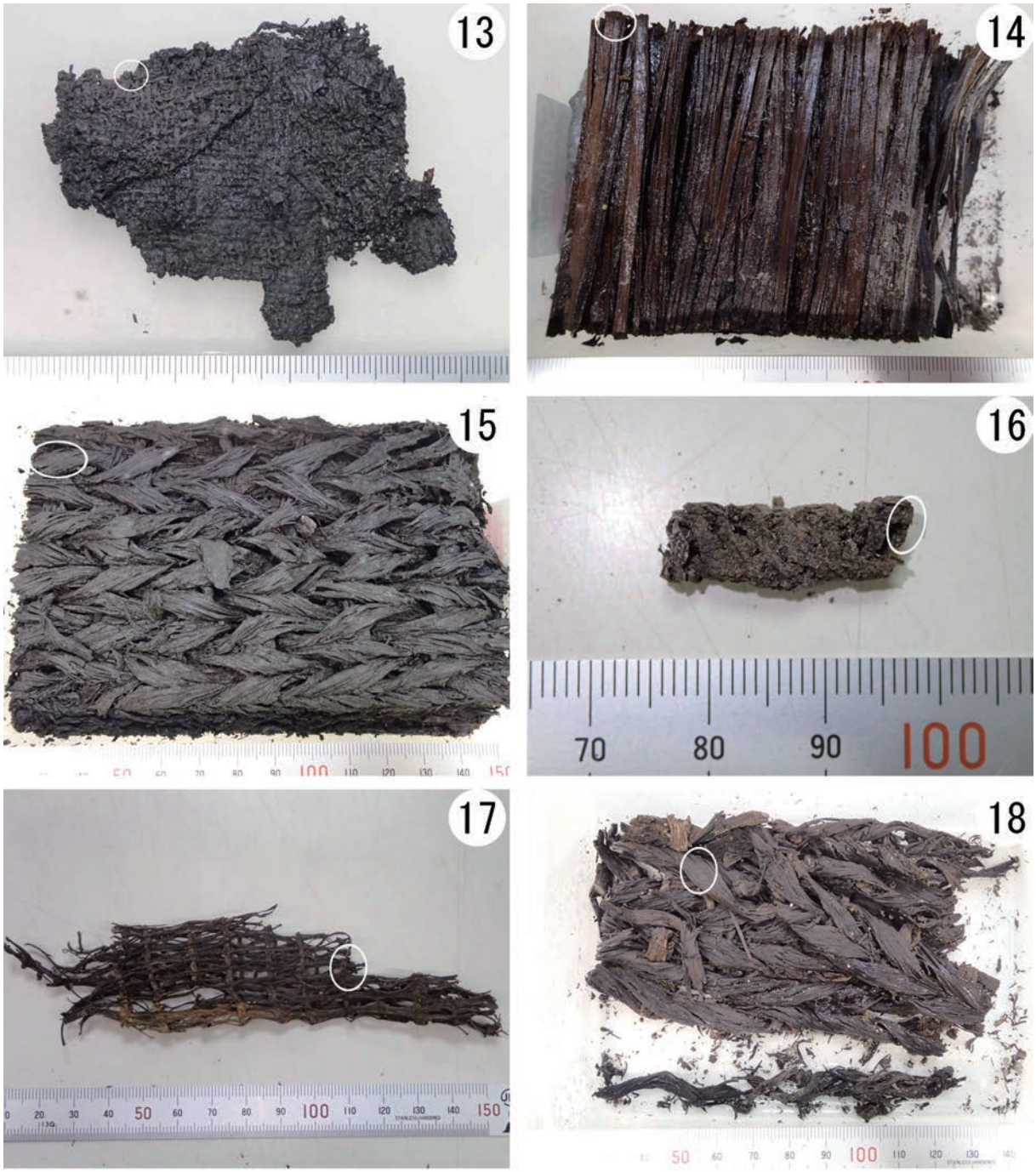
（試料採取位置：〇印）

写真９



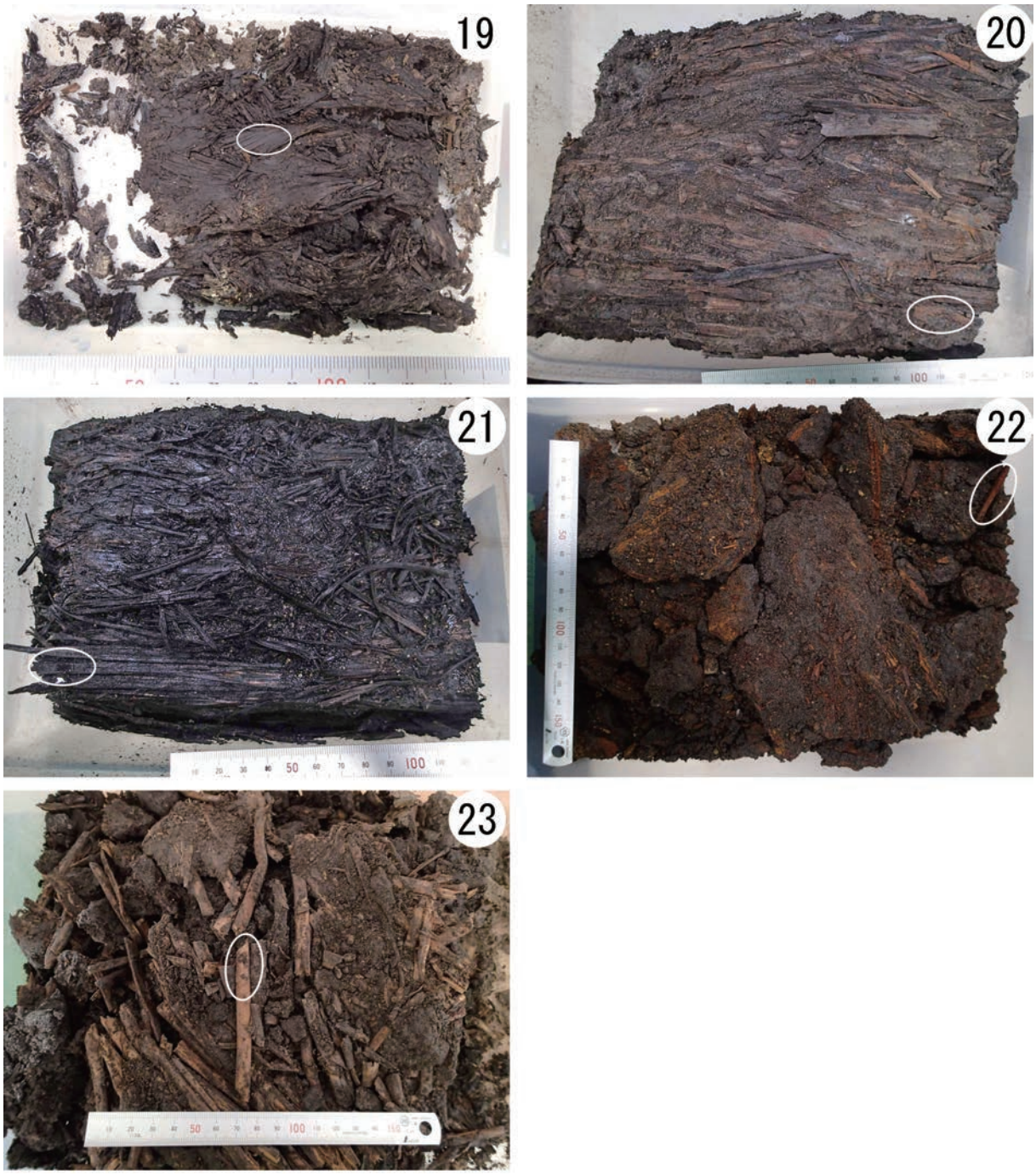
7. 試料No.12（27号建物　樽下敷物：縄編み状）
8. 試料No.13（27号建物：草本束）
9. 試料No.14（27号建物：樹皮）
10. 試料No.16（51号建物：草本束）
11. 試料No.17（51号建物：草本束）
12. 試料No.18（51号建物：縄編み状）
（試料採取位置：〇印）

写真10



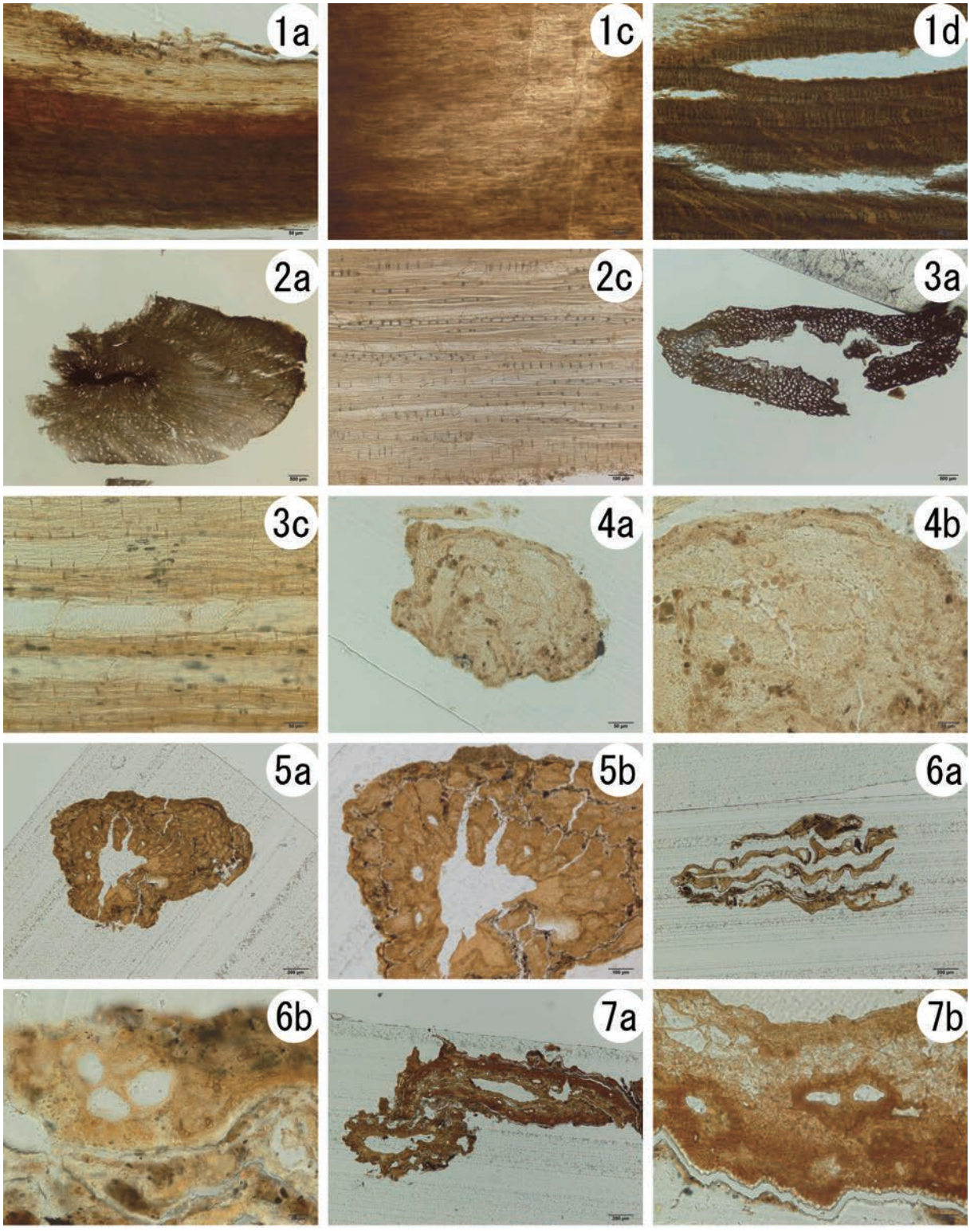
13. 試料No.19（51号建物：布）
14. 試料No.20（51号建物：草本束）
15. 試料No.21（51号建物：縄編み状製品）
16. 試料No.22（51号建物：縄）
17. 試料No.23（51号建物：ゴザ編み）
18. 試料No.24（51号建物：縄編み状製品）
（試料採取位置：〇印）

写真11



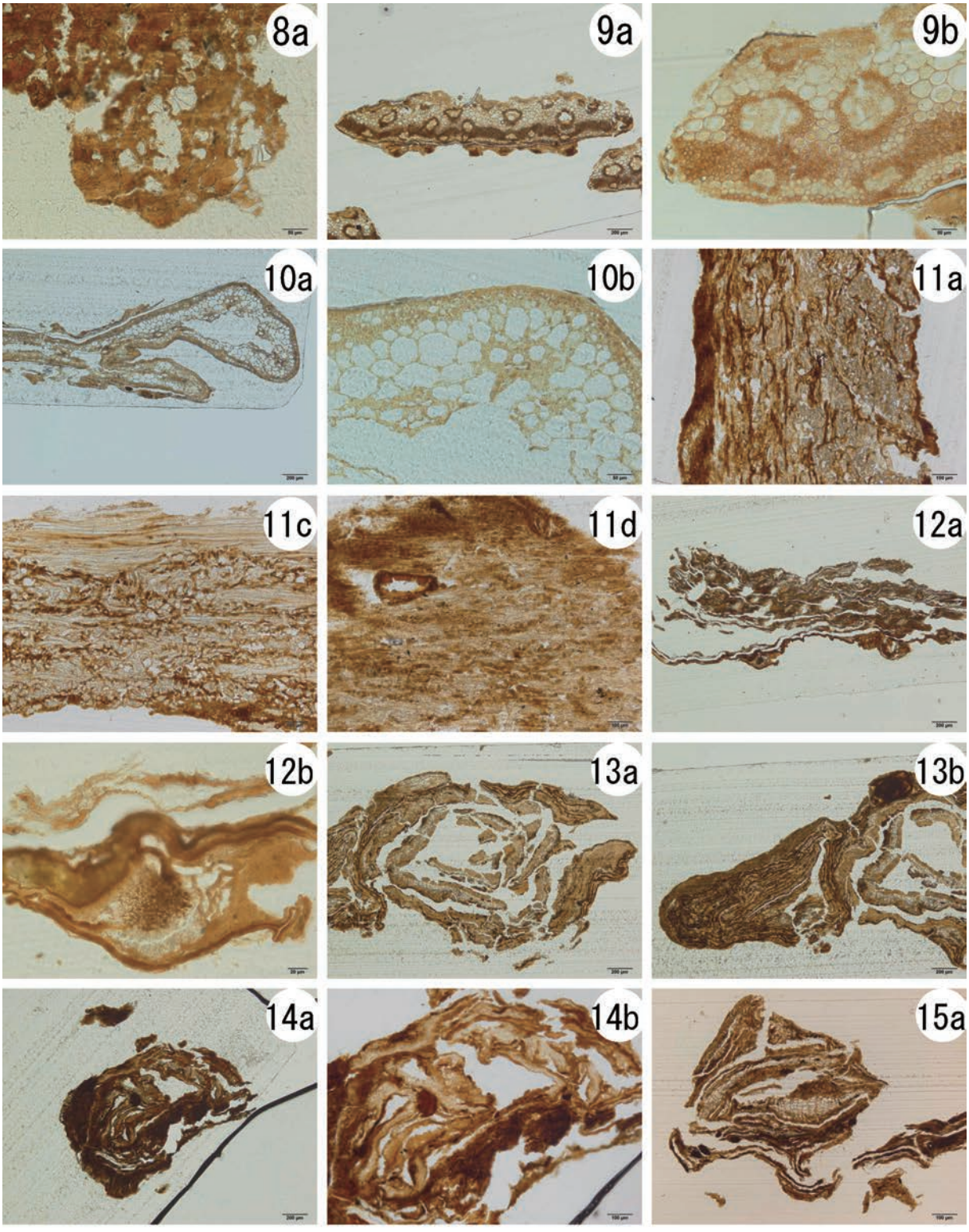
19. 試料No.25（51号建物：縄編み状製品）
20. 試料No.26（25号道：草本束）
21. 試料No.27（51号道：草本束）
22. 試料No.28（遺構不明：不明）
23. 試料No.29（7号道：草本束）
（試料採取位置：〇印）

写真12



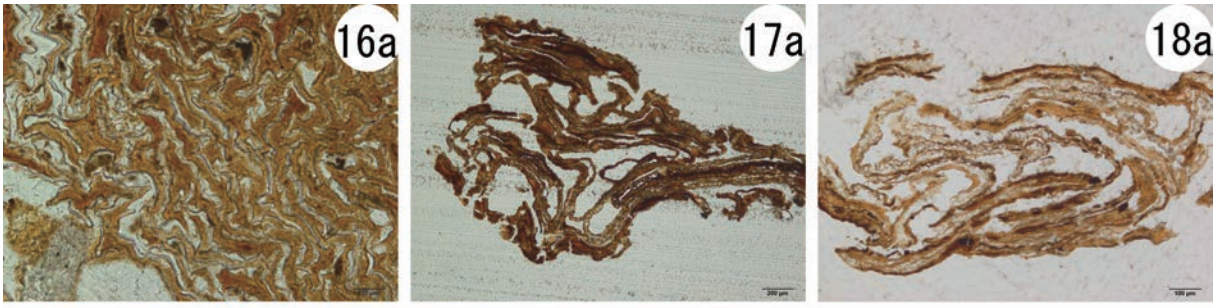
1. サクラ属　外樹皮（試料No.10：27号建物出土の縄編み状）、2. アサ　茎（試料No.29：7号道の草本束）、3. アサ　茎（試料No.20：51号建物出土の草本束）、4. アサ　靭皮繊維（試料No.19：51号建物出土の布）、5. ガマ属　茎（試料No.8-2：27号建物出土のゴザ編み）、6. イネ　稈（試料No.11-1：27号建物出土のゴザ編み）、7. イネ　稈　試料No.21-1：51号建物出土の縄編み状製品）
a：横断面、b：横断面拡大、c：接線断面、d：放射断面

写真13



8. イネ　稈　試料No.23-2：51号建物出土のゴザ編み）、9. ヨシ属　茎（試料No.11-2：27号建物出土のゴザ編み）、10. ヨシ属　茎（試料No.18：51号建物出土の縄編み状）、11. 広葉樹　樹皮（試料No.3：27号建物出土の樹皮）、12. 不明植物A　葉（試料No.7：27号建物　樽内容物出土のゴザ編み）、13. 不明植物B　茎・葉（試料No.8-1：27号建物出土のゴザ編み）、14. 不明植物B　茎・葉（試料No.9：27号建物出土の縄）、15. 不明植物C　茎・葉（試料No.10：27号建物出土の縄編み状）
a：横断面、b：横断面拡大、c：接線断面、d：放射断面

写真14



16. 不明植物D　葉（試料No.12：27号建物　樽下敷物出土の縄編み状）、17. 不明植物E　葉（試料No.22：51号建物出土の縄）、18. 不明植物E　葉（試料No.23-1：51号建物出土のゴザ編み）
a：横断面、b：横断面拡大、c：接線断面、d：放射断面

出土人骨鑑定（１）－３号人骨出土状況

写真16

1. 出土骨検出状況 (1)

2. 出土骨検出状況 (2)

3. 出土骨採取後状況

写真17

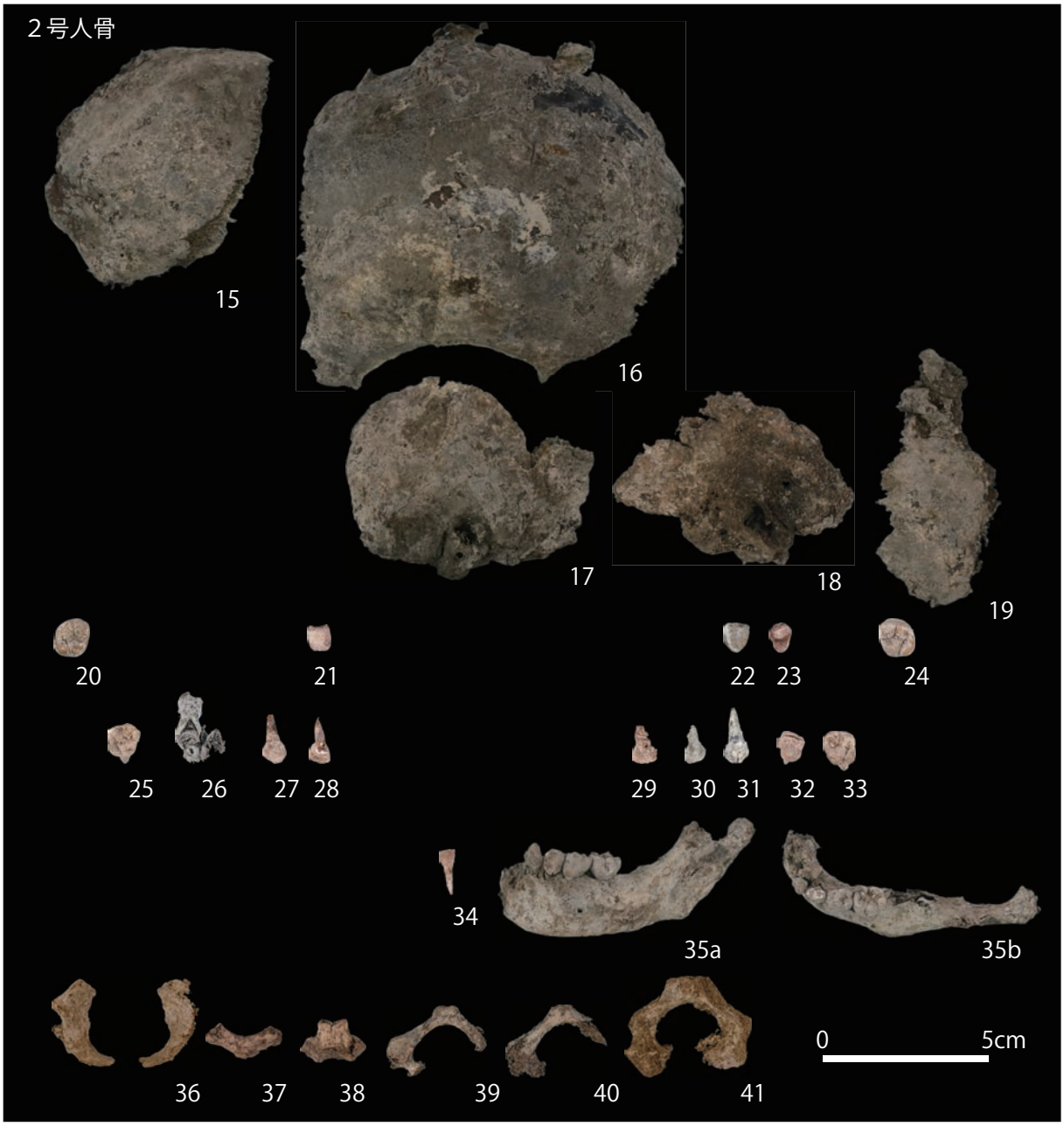
1. ヒト 左寛骨 (No.3)
2. ヒト 左大腿骨骨幹 (No.1)
3. ヒト 左大腿骨遠位端 (No.1)
4. ヒト 左脛骨骨幹 (No.2)
5. ヒト 左腓骨骨幹 (No.2)
6. ヒト 左腓骨遠位端 (No.3)
7. ヒト 左距骨 (No.4-1)
8. ヒト 左踵骨 (No.4-2)
9. ヒト 左舟状骨 (No.4-3)
10. ヒト 左中間楔状骨 (No.4-5)
11. ヒト 左中足骨 (No.4 一括)

出土人骨鑑定（２）－１号人骨

写真18

1. ヒト側頭骨 (1 号人骨：No.5)
2. ヒト前頭骨～左頭頂骨 (1 号人骨：No.5)
3. ヒト下顎骨 (1 号人骨：No.5 中)
4. ヒト頭蓋骨 (1 号人骨：No.5 中)
5. ヒト左大腿骨 (1 号人骨：No.3)
6. ヒト左脛骨 (1 号人骨：No.4)
7. ヒト橈骨 ?(1 号人骨：No.1)
8. ヒト右大腿骨 ?(1 号人骨：No.2)
9. ヒト右上顎第 2 大臼歯 (1 号人骨：No.5 中)
10. ヒト左上顎第 1 大臼歯 (1 号人骨：No.5 中)
11. ヒト右下顎第 2 乳臼歯 (1 号人骨：No.6)
12. ヒト右下顎第 2 大臼歯 (1 号人骨：No.5 中)
13. ヒト右下顎第 1 大臼歯 (1 号人骨：No.5 中)
14. ヒト右下顎第 2 小臼歯 (1 号人骨：No.6)

写真19



15. ヒト左前頭骨 (2 号人骨：No.14)
16. ヒト左頭頂骨 (2 号人骨：No.14)
17. ヒト左側頭骨 (2 号人骨：No.14)
18. ヒト右側頭骨 (2 号人骨：No.14 周辺)
19. ヒト後頭骨 (2 号人骨：No.14)
20. ヒト右上顎第 1 大臼歯 (2 号人骨：No.7 周辺)
21. ヒト右上顎第 2 切歯 (2 号人骨：No.13)
22. ヒト左上顎犬歯 (2 号人骨：No.6)
23. ヒト左上顎第 1 小臼歯 (2 号人骨：No.13)
24. ヒト左上顎第 1 大臼歯 (2 号人骨：No.5)
25. ヒト右上顎第 2 乳臼歯 (2 号人骨：No.12)
26. ヒト右上顎第 1 乳臼歯 (2 号人骨：No.11)
27. ヒト右上顎乳犬歯 (2 号人骨：No.13)
28. ヒト右上顎第 2 乳切歯 (2 号人骨：No.4)
29. ヒト左上顎第 1 乳切歯 (2 号人骨：No.1)
30. ヒト左上顎第 2 乳切歯 (2 号人骨：No.3)
31. ヒト左上顎乳犬歯 (2 号人骨：No.10)
32. ヒト左上顎第 1 乳臼歯 (2 号人骨：一括)
33. ヒト左上顎第 2 乳臼歯 (2 号人骨：No.2)
34. ヒト右下顎第 1 乳切歯 (2 号人骨：No.7)
35. ヒト左下顎骨 (2 号人骨：No.7)
36. ヒト第 1 頚椎 (2 号人骨：No.7 周辺)
37. ヒト第 1 頚椎 (2 号人骨：No.14 周辺)
38. ヒト第 2 頸椎 (2 号人骨：No.7 周辺)
39. ヒト頚椎 (2 号人骨：No.8)
40. ヒト頚椎 (2 号人骨：No.9)
41. ヒト頚椎 (2 号人骨：No.14 周辺)

出土人骨鑑定（２）－４号人骨

写真20

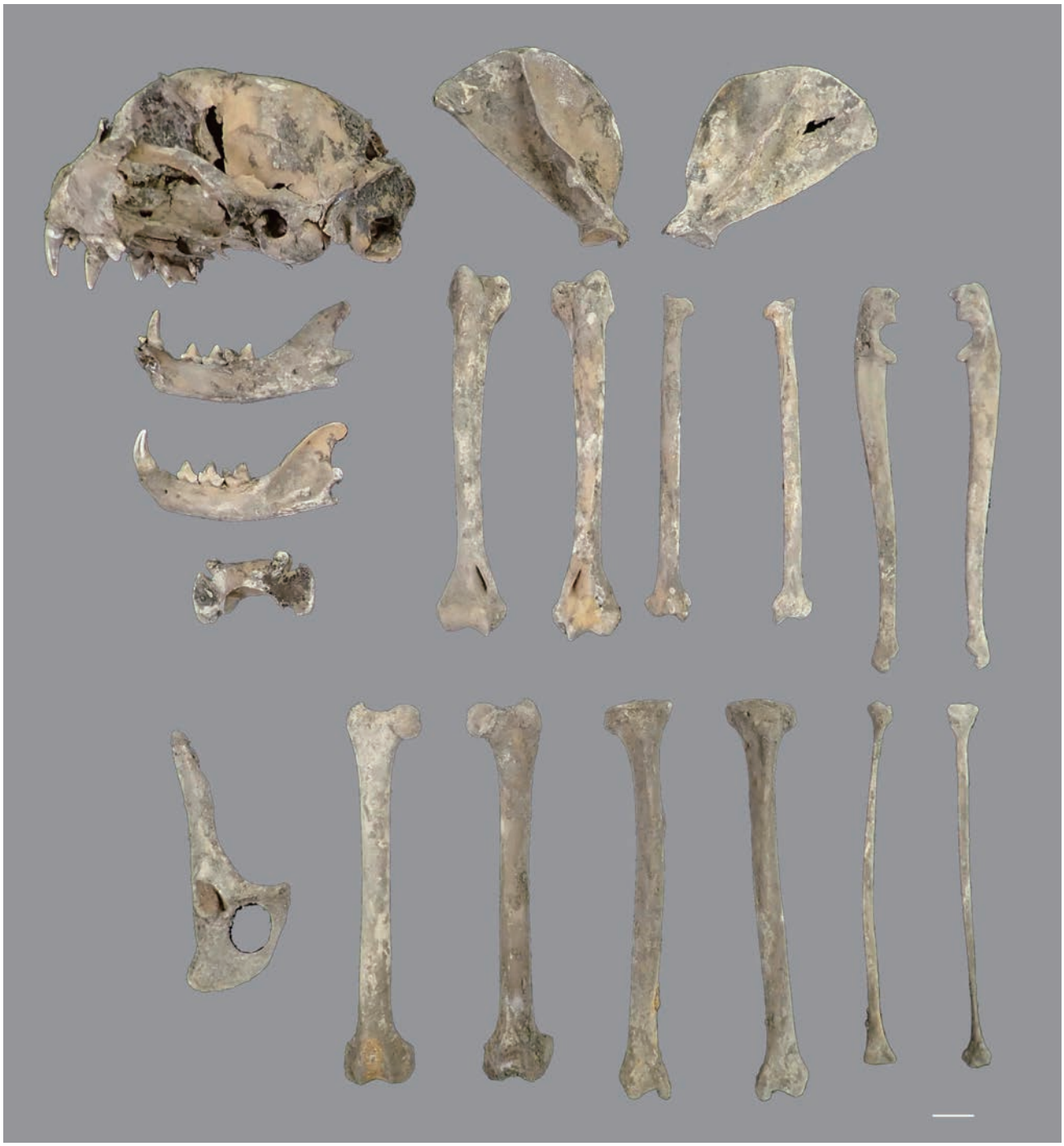
42. ヒト左右頭頂骨～後頭骨 (4 号人骨：No.8)
43. ヒト左側頭骨 (4 号人骨：No.8)
44. ヒト右側頭骨 (4 号人骨：No.8)
45. ヒト犬歯 ?(4 号人骨：No.7)
46. ヒト左上顎第 2 大臼歯 (4 号人骨：No.8)
47. ヒト左下顎第 3 大臼歯 (4 号人骨：No.7)
48. ヒト左下顎骨 (4 号人骨：No.7)
49. ヒト肋骨 (4 号人骨：No.9)

写真21

50. ヒト右肩甲骨 (4 号人骨：No.13)
51. ヒト左鎖骨 (4 号人骨：No.7)
52. ヒト左肩甲骨 (4 号人骨：No.4)
53. ヒト右尺骨 (4 号人骨：No.10-2)
54. ヒト右橈骨 (4 号人骨：No.10-3)
55. ヒト右上腕骨 (4 号人骨：No.10-1)
56. ヒト左上腕骨 (4 号人骨：No.5)
57. ヒト左橈骨 (4 号人骨：No.12)
58. ヒト左尺骨 (4 号人骨：No.6)
59. ヒト右大腿骨 (4 号人骨：No.1)
60. ヒト左大腿骨 (4 号人骨：No.2)
61. ヒト左脛骨 (4 号人骨：No.3)

27号建物出土ネコ主要部位写真

写真22



遺物観察表

・遺物は屋敷を単位に遺物番号を付けた。屋敷内に複数の建物がある場合、屋敷単位の通番とした。遺物番号は陶磁器・鉄銅製品・石器の順番とした。
・木製品は他の遺物と区分してまとめて126項以降に掲載し、遺物番号の前にWを付けた。

陶磁器・鉄銅製品・石製品遺物観察表

6区1号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第356図 PL.313	1建1	瀬戸・美濃 陶器 片口	1/3	口	(15.4)	高	8.6	夾雑物少量/灰白	口縁端部は内側に緩やかに傾き肥厚する。体部外面中位と下位に二重の沈線が巡る。内面から体部外面下位に褐色の飴釉。体部下位から高台は無釉。底部内面に3か所の重ね焼き痕。削り出し高台。	PL.4
				底	(8.6)					
第356図 PL.-	1建2	在地系土器 内耳鍋	口縁部から体部破片	口	-	高	-	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。口縁部は外側に直立気味に開く。口縁部外面と体部境に凹線が巡る。器面はヨコナデ。外面に炭素吸着。	中世
				底	-					
第356図 PL.313	洗場 3	肥前磁器 染付小碗	1/3	口	(7.5)	高	4.1	夾雑物なし/灰白	体部外面は草花文を描く。内面は無文。高台端部は鉄錆。	
				底	(2.8)					
第356図 PL.313	洗場 4	肥前陶器 陶胎染付碗	体部から高台部	口	-	高	-	夾雑物微量/灰	体部外面に不明文。体部下位と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除く内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	
				底	(4.8)					
第356図 PL.313	泥流 5	瀬戸・美濃 陶器 小碗？	体部下位から高台部破片4/5	口	-	高	-	夾雑物微量/灰白	体部下位に鉄絵の不明文。底部内面と高台境外面まで灰釉。高台は無釉で、高台内に墨書。	
				底	(3.6)					
第356図 PL.313	1建6	銅製品 煙管(雁首)	完形	長	5.2	高	1.5	-	火皿の一部が欠損している。つなぎめは横とみられるが、不明瞭。	
				幅	1.5	重	4.8			
第356図 PL.313	1建7	鉄製品 鋤または鍬	破片	長	15.0	厚	2.2	-	木質が付着している。風呂と刃の接合部分のみ残存する。	
				幅	2.7	重	43.3			
第356図 PL.313	1建8	鉄製品 鍋つる	完形	長	22.9	厚	0.3	-	鍋のつる。両端部が残り、両端で耳に引っかけるようになる。断面長方形でねじれは見られない。	
				幅	0.8	重	33.3			
第356図 PL.313	1建9	鉄製品 茶釜	1/2	直	(19.0)	高	16.0	-	底部に鋳掛けが見られる。肩に装飾の稜線が5本回る。耳が小ぶりで三角形になる。	
				口	(10.3)	重	777.1			
第356図 PL.-	1建 10	鉄製品 鍋または釜	破片	直	(18.4)	高	(2.0)	-	多くの部分で鋳掛けが多くおこなわれている。湯口は確認できるが、足については不明。鋳掛けは表と裏の2面からおこなわれている。	
				-	-	重	275.3			
第356図 PL.313	1建 11	銅製品 十能	ほぼ完形	長	24.5	厚	0.2	-	柄と皿部分が別に銅製の金属と折り返して綴じられている。木質の柄が残存し、木質に目釘で留められている。	
				幅	17.3	重	364.8			
第356図 PL.313	1建 12	銭貨 新寛永	一部欠損	外	2.0	厚	0.7	-	穿が大きく、一辺が0.7cmとなる。面の文字はかろうじて見えるが、輪、郭が細く見えづらい。背は彫が浅く不明瞭。	
				内	1.8	重	0.8			
第356図 PL.313	1建 13	石製品 搗臼の重し	4/5	長	30.7	厚	10.3	溶結凝灰岩	全体的に丁寧に整形されている。裏面には非常に滑らかな部分が散在する。2点が接合した資料であり、それぞれの接合面全体には非常に滑らかな面が形成されている。また一方の資料の接合面と予想される部分にも非常に滑らかな面が認められる。この滑らか面の形成に関しては、分割後に砥面等として利用した場合と折断したものを密着させて利用してことにより摩擦により滑らかな面が形成された場合の二つの可能性がある。	2点接合
				幅	16.0	重	8301.9			
第357図 PL.313	1建 14	石製品 唐臼	完形	長	62.0	高	42.0	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ39.0cm深さ27.0cmの内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は中心がやや下に出っ張る。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。縁上面には直線状の工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	PL.4
				幅	63.0	重	-			

7区2号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第358図 PL.313	9建1	肥前磁器 染付小碗	1/2	口	(7.6)	高	3.7	夾雑物なし/白	体部外面に草花文。内面は無文。	
				底	(3.0)					
第358図 PL.313	9建2	肥前磁器 色絵小碗	口縁部破片1/5	口	(8.1)	高	-	夾雑物なし/白	体部外面に花と葉を赤の色絵具で描く。隙間を赤の色絵具で埋める。葉の葉脈は鉄絵具で描き、失色した色絵具が塗られている。内外面に透明釉、貫入が入る。	
				底	-					
第358図 PL.-	9建3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部から体部破片	口	(9.8)	高	-	夾雑物少量/淡黄	口縁部は垂直に立ち上がり、腰が張る。内面から体部外面下位に黒色の鉄釉。体部下位は無釉。	
				底	-					
第358図 PL.313	9建4	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部破片1/3	口	10.5	高	-	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に家屋と樹木の山水文か。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	
				底	-					
第358図 PL.313	9建5	肥前陶器 陶胎染付碗	ほぼ完形	口	10.3	高	6.7	夾雑物微量/灰	小片からなる。口縁部下外面に二重圏線。体部外面に遠山と樹木や家屋を描く山水文。高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
				底	4.3					

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第358図 PL.313	9建6	肥前陶器 陶胎染付碗	1/2	口 底	(10.2) (4.0)	高	6.7	夾雑物微量/灰	口縁部外面は簡略化された四方襷文。体部外面に家屋と樹木に鳥、柳などを描く山水文。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除いて内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	
第358図 PL.313	9建7	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部から体部破片1/4	口 底	(10.0) –	高	–	夾雑物微量/灰	口縁部外面は四方襷文。体部外面に垣根か、草花などを描く。体部下位に圏線。高台境に二重圏線。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	
第358図 PL.313	9建8	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部から体部破片1/4	口 底	(10.2) –	高	–	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に梅樹文。体部下位に圏線。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	
第358図 PL.313	9建9	肥前陶器 陶胎染付碗	体部下位から高台部破片	口 底	– (5.0)	高	–	夾雑物微量/灰	体部外面に樹木を描く。体部外面下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第358図 PL.313	9建 10	肥前陶器 陶胎染付碗	1/3	口 底	(11.4) (4.8)	高	7.1	夾雑物少量/暗灰	口縁部外面を２本の圏線で区画し、花の様な不明文。体部外面に鳥を描く。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉。高台端部に鉄錆。	
第358図 PL.313	9建 11	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部破片1/5	口 底	(10.0) –	高	–	夾雑物微量/灰	口縁部外面を２本の圏線で区画し、唐草様の不明文で埋める。体部外面は草花文か。内面は無文か。内外面に透明釉、貫入が入る。	
第358図 PL.313	9建 12	肥前磁器 染付碗	口縁部破片1/4	口 底	(9.5)	高	–	夾雑物なし/白	口縁部外面から体部に二重網目文。	
第358図 PL.313	9建 13	肥前磁器 染付碗	口縁部破片1/5	口 底	(9.8) –	高	–	夾雑物なし/白	口縁部外面から体部に二重網目文。体部下位に圏線。口縁部外面に粘土小塊が付着したまま焼成。	
第358図 PL.–	9建 14	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部下位から高台	口 底	– 4.8	高	–	夾雑物少量/淡黄	内面と体部外面下位は褐色の飴釉。体部下位と高台は無釉。削り出し高台。	
第358図 PL.313	9建 15	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部下位から高台部破片	口 底	– (4.4)	高	–	夾雑物微量/灰	内面と体部外面下位に灰釉。底部内面中央は蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位と高台は無釉。	
第358図 PL.313	9建 16	京・信楽系 陶器 碗	完形	口 底	9.0 3.5	高	4.7	夾雑物微量/淡黄	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部外面に鉄絵の草花文、失色した色絵具で描かれた花びら、赤の色絵具で描かれた井桁文を施す。内面から体部外面下位に灰釉。体部下位から高台は無釉。	せんじ碗 PL.29
第358図 PL.313	9建 17	陶器 碗	口縁部破片	口 底	(9.4) –	高	–	夾雑物微量/灰	口縁部外面から体部に赤の色絵具で半菊文を描く。内外面に灰釉。	
第358図 PL.313	9建 18	肥前磁器 染付筒碗	1/3	口 底	(7.2) 3.5	高	5.6	夾雑物なし/白	口縁端部直下外面と体部下位を太い圏線で区画し、岩と花文。腰部外面にこぼれ松葉文。高台と高台境に圏線。口縁部内面に四方襷文。見込みに圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	
第358図 PL.314	9建 19	肥前磁器 染付猪口	1/2	口 底	(6.9) (4.0)	高	5.2	夾雑物なし/白	体部外面にコンニャク印判の楓と松か、不明文。体部下位に圏線、高台境に二重圏線。内面は無文で呉須の汚れが付着。高台部分に釉ハゲ。	PL.29
第358図 PL.314	9建 20	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	完形	口 底	10.6 4.5	高	2.2	夾雑物微量/淡黄	体部以下外面は回転ヘラケズリ。底部は削り込み高台。口縁部に粘土で耳を１か所貼り付け。内面と口縁部外面まで褐色の飴釉。口縁部下外面から高台部は無釉。体部外面の一部に煤が付着。底部内面に３か所の重ね焼き痕。	PL.30
第358図 PL.314	9建 21	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	1/2	口 底	9.3 4.2	高	1.9	夾雑物微量/灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と口縁部外面まで錆釉。口縁部下外面から底部は錆釉を拭う。底部内面に重ね焼き痕。	
第358図 PL.314	9建 22	瀬戸・美濃 陶器 片口	4/5	口 底	19.9 10.8	高	10.2	夾雑物少量/灰白	口縁端部は平坦で外側に肥厚する。内外面に灰釉、底部高台周辺は無釉。削り出し高台。底部内面に重ね焼き痕と３か所に無釉の範囲が存在する。	
第358図 PL.314	9建 23	瀬戸・美濃 陶器 水盤	3/5	口 底	(23.8) 10.6	高	6.1	夾雑物微量/淡黄	口縁部は内側に反って立ち上がり、内側に肥厚する。口縁端部はやや平坦を呈する。内面から体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部外面下位から高台は無釉。底部内面に２か所の重ね焼き痕。底部は削り込み高台。	
第358図 PL.–	9建 24	瀬戸・美濃 陶器 水盤	口縁部破片	口 底	– –	高	–	夾雑物微量/淡黄	口縁部は内側に反って立ち上がり、内側に肥厚する。一部で内側に変形し、口縁端部はやや平坦を呈する。内外面に灰釉、貫入が入る。	
第359図 PL314	9建 25	瀬戸陶器 水甕	完形	口 底	27.5 断面～器形 29.0	高 底	21.0 中央部 19.0	夾雑物少量/灰白	口縁端部は平坦で内側に肥厚する。内外面に灰釉を施し、銅緑釉と鉄釉を流し掛ける。体部に丸ノミ状工具で流水文を彫り込み、複数の孔からなる刺突文を施す。底部高台周辺は無釉。削り出し高台。底部内面に３か所の重ね焼き痕。	水甕A類 PL.30

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第359図 PL.314	9建 26	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部	口 底	－ 5.3	高	－	夾雑物微量/淡黄	底部内面は褐色の飴釉。高台は飴釉を拭う。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第359図 PL.314	9建 27	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部から体部 破片	口 底	(28.8) 11.6)	高	11.4	白色片を含む/淡黄	口縁部は外側に肥厚し、逆「く」字状に弱く変形する。体部外面は回転ヘラケズリ調整。底部内面は18本一単位のクシ目。底部は回転糸切り離し後無調整。内外面に錆釉。	
第359図 PL.314	9建 28	瀬戸陶器 すり鉢	4/5	口 底	18.8 7.7	高	5.9	夾雑物少量/淡黄	口縁部は外側に開き、体部との境界は段をなす。体部外面は回転ヘラケズリ調整。底部は回転糸切り離し後無調整。内面には10本一単位のクシ目。内外面に錆釉を丁寧に施す。	
第359図 PL.－	9建 29	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/淡黄	口縁部は外側に斜めに立ち上がり、体部との境界は段をなして屈曲する。体部外面は回転ヘラケズリ調整。内面にはクシ目。内外面に錆釉。	
第359図 PL.314	9建 30	丹波陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	－ －	高	－	白色片を含む/灰	口縁端部は溝が刻まれ二重になる。口縁部は内側に肥厚する。体部との境界は段をなす。体部外面は回転ヘラケズリ調整。内面には10本一単位のクシ目。内外面は無釉で焼しめられている。	
第359図 PL.314	9建 31	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	3.8 1.6	高 重	1.8 6.4	－	肩を持つ煙管。つなぎ目は上に確認出来る。肩の長さは1.7cm。	
第359図 PL.314	9建 32	銅製品 煙管(雁首)	1/2	長 幅	2.7 1.45	高 重	2.1 2.6	－	火皿と首の一部が残る。首は細めである。つなぎ目は不明瞭。	
第359図 PL.314	9建 33	銅製品 煙管(吸口)	一部欠損	長 幅	7.2 1.2	高 重	0.8 3.1	－	一部欠損する吸口。小口に近い部分が破損する。つなぎ目は不明瞭。	
第359図 PL.314	9建 34	銅製品 煙管(吸口)	一部欠損	長 幅	3.6 0.9	高 重	0.9 1.9	－	口付部分が欠損する。銀色の光沢が見える。わずかに角があるように見える。	
第359図 PL.314	9建 35	鉄製品 不明	完形	長 幅	3.3 3.0	厚 重	0.5 5.3	－	口金になるか。	
第359図 PL.314	9建 36	鉄製品 蓋	2/3	径 高	13.5 3.4	厚 重	0.2 183.3	－	２か所に鋳掛けがされており、修復しているようすが見られる。鈕は、山形で中心に穴が開き、金属製の持ち手紐が残存している。内側に突起をめぐらし、蓋を引っかける。	
第359図 PL.314	9建 37	鉄製品 蓋	3/4	径 幅	17.9 18.0	厚 重	1.3 293.6	－	中心部が欠損する。蓋の引っかかりの部分は0.5cmとなる。鋳造のため、劣化部分は粉状に劣化している。	
第359図 PL.314	9建 38	鉄製品 蓋	ほぼ完形	径 －	16.8 －	厚 重	2.4 409.2	－	摘部分は金属製の角棒を曲げたものを持つようになっている。摘の穴の形状は錆に覆われており、判断できない。ツルの破片が混ざっており、同一固体のツルとみられる。	
第360図 PL.314	9建 39	鉄製品 つる	2/3	長 幅	(37.4) 0.7	厚 重	0.3 118.8	－	断面長方形で、端部までねじれは見られない。ゆがみが見られるが、埋蔵時のゆがみと思われる。	
第360図 PL.314	9建 40	鉄製品 鉄鍋	底部のみ	長 幅	(25.4) (14.5)	厚 重	0.3 372.7	－	鍋の底部。湯口と足が１か所残存している。足の高さは2.1cm、湯口の径は4.0cmとなる。	
第360図 PL.314	9建 41	鉄製品 火ばし	2/3	長 幅	(33.6) 1.8	厚 重	0.9 74.4	－	断面四角形。１本は箸先まで残存している。一部欠損し、錆に覆われ上端部は確認できない。ねじれ等は見られない。	
第360図 PL.314	9建 42	鉄製品 不明	一部	長 幅	5.9 1.1	厚 重	0.4 10.6	－	鍋の弦か。細い板状の形状から、断面が丸くなり、先端が「し」の字状に丸められている。	
第360図 PL.314	9建 43	鉄製品 鎌	1/2	長 幅	(6.7) (15.8)	厚 重	2.6 50.3	－	木質の柄が一部残存している。片刃で柄から棟に曲がるところで手前に折り返される。反りはほとんど見られない。	
第360図 PL.314	9建 44	銅製品 金具	完形	長 幅	1.9 0.7	厚 重	0.2 0.3	－	S字の銅線状の金属。両端は細くなり、中心部は直径0.15cm。	
第360図 PL.314	9建 45	銭貨 新寛永	1/2	内 外	－ －	厚 重	0.1 0.7	－	「通」、「永」が欠損する。面の彫は深く、背は彫が浅い。面、背ともに明瞭。	
第360図 PL.314	9建 46	銭貨 古寛永	完形	内 外	1.8 2.5	厚 重	0.2 3.5	－	面の彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや彫が浅いが、明瞭。背の肌がやや荒れている。	
第360図 PL.314	9建 47	銭貨 古寛永	完形	内 外	2.0 2.5	厚 重	0.1 2.7	－	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。「寛」が鋳詰まりしている。	
第360図 PL.314	9建 48	銭貨 古寛永	完形	内 外	1.9 2.3	厚 重	0.2 2.4	－	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや不明瞭。背に小さな孔があく。	
第360図 PL.314	9建 49	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.1	－	背文。面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第360図 PL.314	9建 50	銭貨 新寛永	完形	内 外	2.0 2.5	厚 重	1.2 2.1	－	背文。面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭は明瞭。背の郭がやや右下にずれる。	
第360図 PL.315	9建 51	銭貨 新寛永	完形	内 外	2.0 2.6	厚 重	0.2 3.2	－	背文。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第360図	9建	銭貨		内	2.0	厚	0.1	–	面、背ともに明瞭。背の彫はやや浅い。一部にひびが入る。	
PL.315	52	新寛永	完形	外	2.4	重	2.7			
第360図	9建	銭貨		内	2.0	厚	0.2	–	背文。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
PL.315	53	新寛永	完形	外	2.5	重	3.1			
第360図	9建	銭貨		内	1.9	厚	0.1	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の郭が一部欠ける。	
PL.315	54	新寛永	完形	外	2.2	重	1.6			
第360図	9建	銭貨		内	1.8	厚	0.1	–	面の文字、輪郭は明瞭。背は背文が見えづらい。	
PL.315	55	新寛永	完形	外	2.2	重	1.9			
第360図	9建	銭貨		内	1.7	厚	0.1	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く不明瞭。面に縦ヤスリが見られる。	
PL.315	56	新寛永	完形	外	2.2	重	2.4			
第360図	9建	銭貨		内	–	厚	(0.1)	–	５片に割れ、「永」の字が欠ける。「寛」、「永」が鋳詰まりしている。	
PL.315	57	新寛永	2/3	外	–	重	1.6			
第360図	9建	銭貨		内	1.9	厚	0.2	–	面の彫はやや深いが、錆によりやや見えづらい。背は不明瞭。	
PL.315	58	新寛永	完形	外	2.3	重	2.2			
第360図	9建	銭貨		内	2.0	厚	0.1	–	面は錆が多く覆っており、文字が見えづらい。面、背ともにやや彫は浅い。	
PL.315	59	新寛永か	3/4	外	2.4	重	1.8			
第360図	9建	銭貨		内	–	厚	0.9	–	２枚の鉄銭が癒着しているものとみられる。全体がさびに覆われて詳細不明。	
PL.315	60	鉄銭	完形	外	2.9	重	9.3			
第360図	9建	銭貨		内	–	厚	–	–	鉄銭か。全体が錆でおおわれており、詳細不明。	
PL.315	61	鉄銭か	完形	外	2.6	重	3.3			
第360図	9建	銭貨		内	–	厚	0.7	–	全体が錆に覆われており、詳細不明。	
PL.315	62	鉄銭	完形	外	2.7	重	4.8			
第360図	9建	銭貨		内	–	厚	0.4	–	全体がさびに覆われており、詳細は不明。	
PL.315	63	鉄銭	完形	外	2.5	重	2.0			
第361図	10建	銅製品		長	6.6	高	1.1	–	つなぎ目は明瞭。口付部分が一部欠損している。	
PL.–	64	煙管(吸口)	一部欠損	幅	1.1	重	11.3			
第361図	10建	鉄製品		長	15.0	厚	1.5	–	舌状で厚さはほとんど変化しない鉄板状。	
PL.315	65	不明鉄製品	一部	幅	4.5	重	117.2			
第361図	11建	鉄製品		長	1.9	厚	0.2	–	小さめの釘。頭部は折り返されている。	
PL.315	66	釘	完形	幅	0.7	重	0.3			
第361図	9建	石製品		長	(8.4)	厚	1.5	砥沢石	表面に砥面が認められ横方向の細かい線条痕がわずかに認められる。裏面と左右両側面及び下部小口面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められる。	
PL.315	67	砥石	1/2	幅	3.0	重	57.4			
第361図	9建	石製品	囲炉裏２	長	6.9	厚	3.1	流紋岩	表面の稜上に微細剥離痕とつぶれ痕が集中する。表面に自然面が認められ円礫を利用する。厚手の剥片を素材とし裏面側は素材剥片の主要剥離面である。	
PL.315	68	火打石	完形	幅	4.9	重	104.4			
第361図	9建	石製品		径	34.6	高	15.5	粗粒輝石安山岩	わずかに片減りする。底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が認められる。側面には棒状の工具痕が残り矩形の挽き手孔が認められる。側面の挽き手孔に対向する位置には逆三角の持ち手が認められる。供給孔は中央付近に段差が認められ両面穿孔と考えられる。軸受孔の直径約３㎝。供給孔の直径約４㎝。	PL.15
PL.315	69	石臼(上)	完形	幅	–	重	25500			
第361図	9建	石製品		径	34.5	高	15.6	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔は中央付近で段違いになっており両面穿孔と考えられる。軸孔の直径約４㎝。	PL.15
PL.315	70	石臼(下)	完形	幅	–	重	29860			
第361図	9建	石製品		長	49.0	厚	26.5	粗粒輝石安山岩	沓石の礎石。№73がのるものと考えられる。上面に24㎝×24㎝、深さ２㎝の浅い凹みを有する。上面は平坦で細かい工具痕が、側面には剥離痕が残る。	PL.30
PL.315	71	礎石	完形	幅	55.0	重	–			
第361図	9建	石製品		長	11.9	厚	5.3	粗粒輝石安山岩	表面に浅鉢状の窪みが認められ底面はほぼ平坦であるが細かい凹凸が認められる。それ以外は全体的に滑らかであり非常に丁寧に整形されている。	
PL.315	72	–	ほぼ完形	幅	13.4	重	641.3			
第362図	9建	石製品		長	23.5	厚	35.0	粗粒輝石安山岩	礎石の上、柱の下に据える石。上面に幅４㎝×高さ2.5㎝の下駄の歯状突起、柱に溝を切って組み合わせたものと考えられる。下に№71が位置するものと考えられる。	PL.30
PL.315	73	沓石	完形	幅	23.0	重	–			
第362図	9建	石製品		長	91.0	厚	18.0	粗粒輝石安山岩	石垣に利用。四角柱状割石。幅５㎝程の楔を４～５㎝の間隔で打ち込んで割り取られている。	
PL.316	74	割石	完形	幅	18.0	重	–			
第362図	10建	石製品		長	14.2	厚	2.5	砥沢石	表面は全体的に非常に滑らかであり砥面と判断され細かい線条痕がわずかに認められる。表面は中央がわずかに膨らみ上下方向に研ぎ減りする。左右両側面と上下小口面及び裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	PL.30
PL.316	75	砥石	完形	幅	3.6	重	196.2			

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第362図 PL.316	12建 76	石製品 砥石	2/3	長 幅	(9.8) 5.0	厚 重	2.0 197.1	珪質粘板岩	表面が主要な砥面と判断され細かい線状痕が多数認められる。裏面も全体的に滑らかであり砥面と判断される。左右両側面には部分的に滑らかな面が認められ便宜的な砥面と考えられる。左右両側面には表裏面に平行する細かい線条痕がわずかに認められ素材の切断痕の可能性がある。下部小口面には同様の痕跡が明瞭に認められる。	
第362図 PL.316	2屋 敷77	石製品 砥石	フク土 4/5	長 幅	(12.0) 3.8	厚 重	4.2 201.6	砥沢石	表面が主要な砥面と考えられ中央が窪み研ぎ減りする。右側面の中央もわずかに窪み研ぎ減りする。左側面の上方には断面Ｖ字形の比較的幅の広い溝状痕跡が認められる。裏面の中央には敲打痕が集中する。下部小口面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められる。	
第362図 PL.316	2屋 敷78	石製品 切飛石	完形	長 幅	35.0 35.0	厚 重	18.5 －	粗粒輝石安山岩	方形の切飛石を対角線上に並べている。対角線の長さは68.0cm。三角形のものよりもやや小さい。表面に工具痕が、側面には剥離痕が残る。	
第362図 PL.316	2屋 敷79	石製品 切飛石	完形	長 幅	45.0 43.0	厚 重	23.0 －	粗粒輝石安山岩	方形の切飛石を対角線上で半裁している。対角線の長さは62.0cm。表面に工具痕が、側面には剥離痕が残る。	
第363図 PL.316	11建 80	石製品 換気口石	完形	長 幅	42.0 59.0	厚 重	20.0 －	粗粒輝石安山岩	上面に幅15cm×深さ3.5cmの溝が刻まれ、上端から15cmの位置に両脇に伸びる細い溝が刻まれるが、枠材を固定するためのものか？	
第363図 PL.316	11建 81	石製品 煙返石	完形	長 幅	124.0 26.5	厚 重	24.0 －	粗粒輝石安山岩	蔵の入口扉下の石。長さ111cm×幅1.5cm×深さ1.5cmの溝と３cm×３cmの方形の凹みを有する。左側面にはφ3.0cmの孔が２つ並ぶ。№82と連結するためのものと考えられる。	
第363図 PL.316	11建 82	石製品 煙返石	一部欠損	長 幅	91.0 29.0	厚 重	25.0 －	粗粒輝石安山岩	蔵の入口扉下の石。長さ52cmと38cmの２点。長さ91cm×幅1.5cm×深さ1.5cmの溝を有する。両側面にはφ3.0cmの孔が２つずつ並ぶ。№81と連結するためのものと考えられる。	

５区３号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第364図 PL.317	16建 1	肥前磁器 染付小碗	1/2	口 底	(9.7) (3.9)	高	4.9	夾雑物なし/灰白	小片からなる。体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	PL.54
第364図 PL.317	16建 2	肥前陶器 陶胎染付碗	完形	口 底	10.2 4.8	高	6.9	夾雑物少量/灰	口縁部外面に二重圏線。体部外面に山水文を描く。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第364図 PL.317	16建 3	肥前陶器 陶胎染付碗	ほぼ完形	口 底	10.8 4.9	高	6.8	夾雑物少量/灰	口縁部外面に二重圏線。体部外面に山水文を描く。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第364図 PL.317	16建 4	肥前陶器 陶胎染付碗	4/5	口 底	(10.8) (4.3)	高	6.7	夾雑物少量/灰	口縁部外面に崩れた四方襷文。体部外面は鳥と遠山を描く山水文か。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第364図 PL.317	16建 5	肥前陶器 陶胎染付碗	3/4	口 底	10.4 4.2	高	6.9	夾雑物少量/灰	口縁部外面を２本の圏線で区画し、草原文。体部外面には山水文を描く。体部下位に圏線。高台に二重圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。口縁部の一部に釉はげ。高台端部に鉄錆。	
第364図 PL.317	16建 6	肥前陶器 陶胎染付碗	1/3	口 底	(11.7) (5.2)	高	7.8	夾雑物少量/灰	口縁部外面に崩れた四方襷文。体部外面は樹木と家屋を描く山水文か。体部下位と高台境に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第364図 PL.317	16建 7	肥前陶器 陶胎染付碗	1/5	口 底	(10.2) －	高	－	夾雑物少量/灰	口縁部外面に二重圏線。体部に花唐草文。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	
第364図 PL.317	16建 8	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4	口 底	(10.1) －	高	－	夾雑物なし/灰白	外面は二重網目文、内面は斜線交叉文を描く。	
第364図 PL.317	16建 9	肥前磁器 染付皿	1/6	口 底	(18.8) (12.5)	高	2.7	夾雑物なし/灰白	体部外面に唐草文。体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に圏線、中央に「渦福」銘。口縁部内面から体部に不明文。見込みに二重圏線、中央に牡丹文。	
第364図 PL.317	16建 10	肥前磁器 染付筒碗	1/3	口 底	(7.6) (4.0)	高	6.1	夾雑物なし/白	口縁端部直下外面と腰部を圏線で区画し、木葉文。腰部下位と高台境、高台に圏線。口縁部下内面は四方襷文。見込みに二重圏線、中央に五弁花か。	PL.54
第364図 PL.317	16建 11	肥前磁器 染付筒碗	底部のみ	口 底	－ 4.0	高	－	夾雑物なし/白	体部外面に不明文。内面は無文。	
第364図 PL.317	16建 12	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部1/4	口 底	(8.2) －	高	－	白色粒入る/灰	体部外面下位に回転施文具による連続文、鉄釉を化粧がけ。内面から口縁部外面は鉄釉。	鎧碗

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第364図 PL.317	16建 13	肥前磁器 染付仏飯器	口縁部は3/4	口 底	(7.6) 4.0	高	5.0	夾雑物なし/灰白	小片からなる。坏部外面に笹文。内面から高台付近まで透明釉。	
第364図 PL.317	16建 14	肥前磁器 染付仏飯器	脚部のみ	口 底	 4.3	高	−	夾雑物なし/白	脚部のみ残存。高台は施釉した透明釉を拭う。高台は低く、凹型に削り出し、中央を施釉。脚部上部に圏線。	
第364図 PL.317	16建 15	肥前磁器 仏飯器	脚部	口 底	 3.5	高	−	夾雑物なし/白	坏底部と脚部のみ残存。高台は低く、凹型に削り出す。	
第364図 PL.317	16建 16	肥前磁器 二次加工品	高台部	口 底	− 4.3	高	−	夾雑物なし/白	高台に二重圏線。高台内に圏線、中央に「大明年製」のかなり崩れた銘。体部と高台の一部を打ち欠いて二次加工を施す。	染付碗
第364図 PL.317	16建 17	肥前磁器 二次加工品	高台部	口 底	− −	高	−	夾雑物なし/灰白	外面の高台境と高台に圏線。高台内に不明銘。体部と高台を打ち欠いて二次加工を施す。	染付碗
第364図 PL.−	16建 18	瀬戸陶器 すり鉢	底部破片	口 底	− (14.4)	高	−	黒色片含む/淡黄	体部外面は回転ヘラケズリ調整。底部は回転糸切り無調整。内面には10本一単位のクシ目。内外面に錆釉。	
第364図 PL.−	16建 19	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	− −	高	−	黒色片含む/淡黄	口縁部は外側に肥厚する。口縁端部直下内面に２条の凹線が巡る。体部外面は回転ヘラケズリ。内面には８本一単位のクシ目。内外面に錆釉。	
第364図 PL.317	16建 20	瀬戸陶器 すり鉢	胴部破片	口 底	−	高	−	黒色片含む/淡黄	体部外面は回転ヘラケズリ調整。内面にはクシ目。内外面に錆釉。胴部破片の５面は研磨。	二次加工品か
第364図 PL.−	16建 21	在地系土器 鉢か？	口縁部破片	口 底	− −	高	−	黒色鉱物含む/褐	口縁部は内側に肥厚する。内面は回転ナデ調整。外面に炭素吸着。	
第364図 PL.−	17建 22	瀬戸・美濃 陶器 碗	胴から底部破片 1/3	口 底	− −	高	−	黒色・白色片含む /淡黄	体部内外面は灰釉。体部外面下位は無釉。高台は欠損。	
第364図 PL.317	18建 23	磁器 白磁人形	頭部から胸部像 破片	口 底	− −	高	−	夾雑物なし/白	内部は空洞、白磁の西洋婦人像。鋳込み成形か。	PL.54
第365図 PL.317	16建 24	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	4.0 1.2	高 重	2.0 8.7	−	銀色の光沢が見られる。肩部分に平行の細かい刻みが見られ、首の断面は四角形になる。つなぎ目は確認できない。	
第365図 PL.317	16建 25	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	6.7 1.0	高 重	1.0 5.3	−	つなぎ目は明瞭。羅宇の一部が残存する。表面に有機質が付着しているが、使用状況とは関係は無いとみられる。	
第365図 PL.317	16建 26	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	5.7 0.8	高 重	0.9 4.9	−	金色光沢が確認できる。肩を持ち、つなぎ目は明瞭。細めの吸口である。	
第365図 PL.317	16建 27	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	6.8 0.9	高 重	0.9 4.7	−	つなぎ目は明瞭。口付に近い部分でつなぎ目に沿って破損する。	
第365図 PL.317	16建 28	鉄製品 鉄釜	1/3	底 口	40.4 −	高 重	12.6 5720	−	足はなく、口が外に大きく広がるタイプの釜と見られる。底部に張り出しを持ち、湯口の膨らみは少ない。底部と体部の一部に煤が付着する。体部にヨコナデの成形痕が見られる。	
第365図 PL.317	16建 29	鉄製品 火打金	完形	長 幅	5.2 1.6	厚 重	0.6 9.7	−	小型の山形の火打金。全体が錆に覆われている。	
第365図 PL.317	16建 30	鉄製品 鎌	完形	長 幅	20.4 5.2	厚 重	0.2 141.1	−	茎部分は「し」の字状に折り返す形で目釘を打つ場所が作られる。棟近くに井桁のような文様が打たれている。反りは0.3㎝。	
第365図 PL.317	16建 31	銭貨 古寛永か	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.2 3.1	−	「寛」の字が錆などで不明瞭だが、「寶」の字は古寛永のス貝寶と見られる。背の輪、郭は明瞭。	
第365図 PL.317	16建 32	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.2	−	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く、輪、郭は不明瞭。	
第365図 PL.317	16建 33	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.8	−	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫がやや浅いが明瞭。	
第365図 PL.317	16建 34	銭貨 新寛永	ほぼ完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 1.9	−	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。「寶」の字が鋳不足による欠けが見られる。	
第365図 PL.317	16建 35	銭貨 新寛永	ほぼ完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.3	−	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。鋳不足により２か所が欠ける。	
第365図 PL.317	16建 36	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.7	−	面、背のともに文字、輪、郭は明瞭。やや折り曲げられている。	
第365図 PL.317	16建 37	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	1.1 2.4	−	面、背ともに彫が深く文字、輪、郭が明瞭。凹みの部分と文字などの部分で肌の雰囲気が異なる。	
第365図 PL.317	18建 38	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	6.3 1.2	高 重	1.4 8.0	−	体部が六角形になっており、桜、もしくは梅と見られる装飾が見られる。つなぎ目は側面。火皿が変形している。	
第365図 PL.317	18建 39	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	4.2 1.3	高 重	1.5 4.8	−	上面につなぎ目が見られる。火皿内部の首接続部の穴が大きい。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第365図 PL.317	18建 40	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	6.1 1.0	高 重	1.1 6.4	_	一部口付け近くに金色の光沢が確認出来る。割れている部分がつなぎ目と思われるが、不明瞭。	
第366図 PL.317	16建 41	石製品 砥石	1/2	長 幅	(7.1) (3.0)	厚 重	(82.9) 92.5	砥沢石	表面が主要な砥面と判断され細かい線状痕が多数認められる。表面の中央には断面U字形の浅い溝状痕跡が横断し、上方には断面コの字形の浅い溝状痕跡が縦方向に認められる。裏面も全体的に滑らかであり砥面と判断される。左右両側面には部分的に滑らかな面が認められ便宜的な砥面と考えられる。左右両側面には櫛歯タガネ痕が部分的に認められる。上部小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第366図 PL.317	16建 42	石製品 砥石	2/3	長 幅	(8.3) 2.1	厚 重	2.8 102.8	砥沢石	表面に砥面が認められる。裏面は滑らかな面と櫛歯タガネ痕がわずかに認められ便宜的な砥面と考えられる。左右両側面と上部小口面には全体的に櫛歯タガネ痕が認められる。	
第366図 PL.317	16建 43	石製品 砥石	4/5	長 幅	(10.3) 3.1	厚 重	2.3 100.3	砥沢石	表面が主要な砥面と判断され上方に向かい研ぎ減りする。裏面は全体的に滑らかであり砥面と判断される。	
第366図 PL.317	16建 44	石製品 砥石	完形	長 幅	8.3 4.3	厚 重	2.3 72.3	粗粒輝石安山岩	多孔質な石材である。表裏面は全体的に滑らかであり砥面と判断される。裏面には線条痕がわずかに認められる。左右両側面も比較的滑かであり砥面として機能した可能性がある。表裏面と側面部との境界には研ぎ減りによって稜が形成される。	
第366図 PL.317	16建 45	石製品 ひで鉢	完形	長 幅	7.5 7.9	厚 重	6.4 262.9	粗粒輝石安山岩	表面の中央に漏斗状の孔が認められ内面は全体的に滑らかである。外面は全体的に滑らかな曲面で構成され自然面であるか整形されているか判断できない。	
第366図 PL.318	16建 46	石製品 唐臼上枠	完形	長 幅	62.5 61.5	厚 重	13.5 –	粗粒輝石安山岩	唐臼の上に置く枠。φ54.0cmの内傾する部分の内側に下の唐臼に続くφ36.0cmの孔有り。下面側はやや丸味が出るように加工されているが、上面は平坦である。下面には剥離痕、側面には線状の工具痕がよく残る。	
第366図 PL.318	16建 47	石製品 唐臼	完形	長 幅	59.0 56.0	高 重	44.5 –	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ38.0cm深さ27.0cmの内彎する凹み、最大径は上端よりも下に位置する。内面の底は滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は内傾せず幅狭平坦で線状の工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	
第367図 PL.318	16建 48	石製品 唐臼上枠	完形	長 幅	63.0 63.0	厚 重	16.0 –	粗粒輝石安山岩	唐臼の上に置く枠。φ54.0cmの内傾する部分の内側に下の唐臼に続くφ35.5cmの孔有り。下面側はやや丸味が出るように加工されているが、上面は平坦である。下面には剥離痕、側面には線状の工具痕がよく残る。下面に「十」字状の線刻がある。№２とセットになるものか。	
第367図 PL.318	16建 49	石製品 唐臼	完形	長 幅	61.5 61.0	高 重	41.5 –	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ41.0cm深さ26.5cmの内彎する凹み、最大径は上端よりも下に位置する。内面の底はやや尖るが滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅狭で平坦で工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。口縁右上に「十」字状の線刻が入る。№８とセットになるものか。	
第367図 PL.318	18建 50	砥石	完形	長 幅	17.8 4.3	厚 重	4.0 461.5	粗粒輝石安山岩	荒砥。表面はほぼ平坦で全体的に滑らかであり砥面と考えられる。表面には細かい線条痕がわずかに認められる。表面以外はすべて自然面と判断され亜角礫を利用する。	
第367図 PL.318	18建 51	石製品 不明	4/5	長 幅	57.6 (38.2)	厚 重	19.6 22250	粗粒輝石安山岩	全体的に棒状あるいは平ノミ状の工具痕が明瞭に認められ丁寧に整形する。正面は浅い窪みを呈しているが内面は滑らかでなく棒状あるいは平ノミ状の工具痕が明瞭に残る。裏面には脚が３箇所に認められ器体はわずかに傾いた状態になる。用途不明。	

５区４号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第368図 PL.318	20建 1	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	体部2/3から脚部	口 底	7.2 4.7	高	4.7	夾雑物少量/灰	脚台部はロクロ成形で広く開く、高台縁は低く尖る。体部外面から脚部の上位に灰釉、脚台部の高台は無釉。	
第368図 PL.318	20建 2	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部破片	口 底	– 4.6	高	–	夾雑物少量/淡黄	内面は飴釉。高台脇を打ち欠いて円盤状に加工。	碗

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第368図 PL.319	20建 3	銅製品 煙管(雁首)	完形	長	5.6	厚	1.8	–	羅宇が残存する。つなぎ目は上部に見られる。	
				幅	1.6	重	11.5			
第368図 PL.318	20建 4	鉄製品 茶釜	1/3	長	20.5	厚	12.0	–	口縁から体部までが残存する。耳はやや小さく、孔が３つ空けられている。体部の上部と下部の接合は上部の方が上に来る。体部に横方向の整形痕が見られる。	
				幅	22.2	重	960.3			
第368図 PL.319	20建 5	鉄製品 火ばし	ほぼ完形	長	46.0	厚	0.8	–	２本の箸をつなげてある金属製の固定具が欠損している。箸の形状は頭部から15㎝ぐらいまでは断面が丸く、そこから先は断面四角形。	
				幅	0.8	重	210.1			
第368図 PL.319	20建 6	鉄製品 火箸	一部欠損	長	(30.0)	厚	0.8	–	上部は断面が四角径。先端にいくにつれて断面が丸くなる。火箸の１本のみ残る。	
				幅	0.8	重	50.9			
第368図 PL.318	20建 7	銭貨 古寛永	完形	外	2.5	厚	0.1	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
				内	2.0	重	3.8			
第368図 PL.318	20建 8	銭貨 古寛永	1/3	外	2.5	厚	(0.4)	–	一部の文字と輪のみが残存する。面から背の方向に強い力がかかって破損している。	
				内	2.0	重	2.5			
第368図 PL.319	20建 9	石製品 砥石	2/3	長	(11.0)	厚	3.3	粗粒輝石安山岩	荒砥。表面と左側面に滑らかな部分が認められ砥面と判断される。表面の下方には浅い窪み状の痕跡が認められ内面は滑らかである。	
				幅	3.4	重	228.7			
第368図 PL.319	20建 10	石製品 石臼(下)	完形	径	35.6	高	16.3	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡は認められず棒状の工具痕が明瞭に残る。片減りも認められず挽き目が刻まれる前段階の可能性がある。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔の直径約４㎝。	
				幅	–	重	32100			
第368図 PL.319	20建 11	石製品 石臼(下)	1/4	長	(16.9)	高	(11.3)	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の一部が認められる。軸孔の直径約３㎝。	
				幅	(26.1)	重	4950			

５区５号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第369図 PL.319	21建 1	肥前磁器 染付小碗	1/3	口	(7.6)	高	4.0	夾雑物少量/灰	体部外面に雁文。高台境と高台に圏線。内面は無文。	紅猪口 PL.95
				底	(3.5)					
第369図 PL.319	21建 2	肥前磁器 染付碗	1/2	口	(9.7)	高	5.4	夾雑物なし/灰白	体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境､高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	
				底	(4.3)					
第369図 PL.319	21建 3	肥前陶器 陶胎染付碗	1/4	口	(11.0)	高	7.0	夾雑物少量/灰	体部外面は松と家屋からなる山水文を描く。体部下位と高台境に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
				底	(4.5)					
第369図 PL.319	21建 4	肥前磁器 染付碗	1/4	口	(10.1)	高	5.4	夾雑物少量/灰	体部外面にコンニャク印判の桐文。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。	
				底	(4.0)					
第369図 PL.319	21建 5	瀬戸・美濃 陶器 碗	ほぼ完形	口	9.7	高	4.8	夾雑物少量/暗灰	口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面を半分ずつ鉄釉と灰釉で掛け分ける。高台内部まで丁寧に施釉。灰釉は貫入が入る。	せんじ碗
				底	3.8					
第369図 PL.319	21建 6	瀬戸・美濃 陶器 碗	4/5	口	10.3	高	5.6	夾雑物少量/白	内面から体部外面下位は柿色の鉄釉。体部外面下位から高台は無釉。	
				底	4.1					
第369図 PL.-	21建 7	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部破片1/2	口	–	高	–	白色片含む/灰	体部外面下位は螺旋状沈線が巡る。底部内面にも沈線を施す。内外面は褐色の飴釉。体部下位から高台は無釉。	
				底	(4.5)					
第369図 PL.319	21建 8	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部破片2/3	口	–	高	–	夾雑物少量/灰	内外面は褐色の飴釉。体部下位から高台は無釉。底部内面に赤褐色の鉄分が付着。	
				底	4.7					
第369図 PL.319	21建 9	肥前磁器 染付筒碗	ほぼ完形	口	7.6	高	6.6	夾雑物少量/白	小片からなる。体部外面に岩山草花文。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。	PL.95
				底	4.0					
第369図 PL.319	21建 10-1	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口	12.1	高	2.4	夾雑物少量/灰白	№10-7に同じ	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
				底	6.1					
第369図 PL.319	21建 10-2	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口	11.8	高	2.2	夾雑物少量/灰白	№10-7に同じ	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
				底	6.2					
第369図 PL.319	21建 10-3	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口	12.2	高	2.5	夾雑物少量/灰白	№10-7に同じ	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
				底	6.2					
第369図 PL.319	21建 10-4	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口	11.6	高	2.6	白色礫含む/灰白	内面中央に鉄絵で型紙摺りによる不明文。内面に３か所の重ね焼きの痕。内面から外面高台際まで灰釉、貫入が入る。高台は無釉。高台内に「六十」の墨書。	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
				底	5.9					

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第369図 PL.319	21建 10-5	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口 底	12.2 6.3	高	2.5	夾雑物少量/灰白	№10-7に同じ	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
第369図 PL.319	21建 10-6	瀬戸・美濃 陶器 皿	4/5	口 底	11.9 6.0	高	2.5	夾雑物少量/灰白	№10-7に同じ	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
第369図 PL.319	21建 10-7	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口 底	12.1 6.2	高	2.5	白色礫含む/灰白	小片からなる。内面中央に鉄絵で型紙摺りによる不明文。内面に３か所の重ね焼きの痕。内面から体部外面下位は灰釉、貫入が入る。体部下位から高台は無釉。	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
第369図 PL.320	21建 10-8	瀬戸・美濃 陶器 皿	1/2	口 底	(12.7) (6.0)	高	2.5	夾雑物少量/灰白	小片からなる。内面の中央に鉄絵で型紙摺りによる不明文。内面に２か所の重ね焼き痕。内面から体部外面下位は灰釉、貫入が入る。体部下位から高台は無釉。	御深井製品 №10-1～№10-8は揃い
第369図 PL.-	21建 11	京・信楽系 陶器 碗	口縁部破片	口 底	- -	高	-	夾雑物少量/灰	内外面は灰釉、貫入が入る。	
第369図 PL.320	21建 12	瀬戸・美濃 陶器 ひょうそく	完形	口 底	5.1 4.0	高	4.4	夾雑物少量/灰	内面と腰部外面まで鉄釉。底部は回転糸切後に無調整。底部中央に固定用の円孔あり。	
第369図 PL.-	21建 13	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	口縁部から体部破片	口 底	(10.4) (4.0)	高	2.2	夾雑物微量/暗灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内外面に錆釉。体部外面から底部は釉を拭う。	
第369図 PL.320	21建 14	瀬戸・美濃 陶器 灯明受皿	完形	口 底	10.6 4.4	高	2.1	夾雑物微量/褐灰	受け部端部は口縁部より背が低い。焼成前に１か所が切り取られる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に錆釉。体部外面から底部は釉を拭う。	
第369図 PL.320	21建 15	志戸呂陶器 灯明受皿	完形	口 底	11.6 5.0	高	2.6	夾雑物微量/にぶい赤褐	受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に２か所切り取られ孔が穿たれる。孔付近には煤が付着。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に錆釉。体部外面から底部は錆釉を拭う。	PL.95
第370図 PL.320	21建 16	瀬戸・美濃 陶器 仏花瓶	ほぼ完形	口 底	7.2 6.4	高	15.0	夾雑物少量/暗灰	口縁部は外側に開いて端反る。口縁部外面に沈線が巡る。胴部上半部に一対の粘土小塊で付けられた耳。口縁部内面付近から脚部外面にかけて灰釉、貫入が入る。脚部は鉄釉。脚底部は回転糸切後に無調整､鉄釉を拭う。	PL.95
第370図 PL.320	21建 17	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	完形	口 底	6.5 3.9	高	4.6	夾雑物少量/灰	脚台部はロクロ成形で広く開く、高台縁は低く尖る。体部外面から脚部上位に灰釉、貫入が入る。脚台部の高台は無釉。	
第370図 PL.320	21建 18	肥前磁器 染付仏飯器	1/2	口 底	- 4.1	高	-	夾雑物少量/灰	脚台部はロクロ成形。体部と体部下位、脚台部境界に圏線。体部に不明文。体部から脚部外面上位に透明釉、脚台部の高台は無釉で低く削り出す。	
第370図 PL.320	21建 19	瀬戸・美濃 陶器 水注	体部と蓋	口 底	3.8 6.3	高	8.9	夾雑物少量/褐色	口縁部は外側に肥厚する。口縁と体部境付近にクシ目が入る。体部中位に沈線が巡る。注ぎ口は貼り付け。内外面に灰釉。体部下位と高台は無釉。蓋は無釉で摘みは摩耗している。蓋の底部は回転糸切後に無調整。	PL.101
第370図 PL.320	21建 20	瀬戸・美濃 陶器 水注	完形	口 底	4.4 6.5	高	9.4	夾雑物少量/浅黄	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁と体部境付近にクシ目が入る。体部中位に沈線が巡る。取っ手と注ぎ口は貼り付け。内外面に褐色の飴釉。体部下位と高台は無釉。蓋は錆釉を施し、表面を拭う。蓋の底部は回転糸切後に無調整。	PL.95
第370図 PL.320	21建 21	瀬戸・美濃 陶器 水注	注ぎ口と体部	口 底	4.1 6.8	高	10.5	夾雑物少量/淡褐	口縁部は外側に肥厚する。口縁と体部境に沈線が巡り、体部上位にクシ目が入る。取っ手と注ぎ口は貼り付け。内外面に褐色の飴釉。体部下位と高台は無釉。	
第370図 PL.320	21建 22	瀬戸・美濃 陶器 片口か	口縁部から体部1/4	口 底	(20.1) (10.7)	高	10.8	夾雑物少量/浅黄	口縁部は外側に肥厚する。口縁部下に凹線が巡る。内外面に灰釉、高台周辺の底部は無釉。削り出し高台。	
第370図 PL.320	21建 23	瀬戸陶器 すり鉢	底部破片1/5	口 底	- (11.0)	高	-	黒色・白色片含む/暗灰	体部外面は回転ヘラケズリ調整。底部は回転糸切り離し後無調整。体部外面下位から底部は釉を拭う。内面には10本一単位のクシ目。内外面に鉄釉。	
第370図 PL.320	21建 24	瀬戸陶器 すり鉢	3/4	口 底	(30.8) 12.8	高	14.8	夾雑物少量/淡黄	口縁部は内側に屈曲し、外側に肥厚する。底部は回転糸切り離し後無調整。内面に15本一単位のクシ目。底部内面付近から体部外面下位に錆釉。体部外面下位から底部は、錆釉を拭う。底部内面は無釉。	PL.95
第370図 PL.320	21建 25	土製品 土人形	底部欠損2/3	口 底	- -	高	- -	夾雑物少量/褐	前後の型を合わせて成形。和装の女性立像(太夫像)か。	PL.95
第371図 PL.320	21建 26	土製品 土人形	頭部欠損	口 底	- -	高	-	夾雑物少量/褐	前後の型を合わせて成形。和装の女性座像。背面に赤色及び黒色の塗彩痕跡。	PL.95

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第371図 PL.320	洗場 27	肥前陶器 陶胎染付碗	 2/3	口 底	(10.2) (4.5)	高	7.3	黒色片を含む/暗灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に樹木か。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台内に焼成時のひび割れ状の釉むら。	
第371図 PL.320	21建 28	金属製品 おりん	 完形	長 幅	4.5 –	高 重	2.7 35.8	–	外面に布痕が残存している。底部に小さな穴が空き、口縁部は内側に張り出す。横方向の成形痕が見られる。	PL.94
第371図 PL.321	21建 29	金属製品 鈴棒	 完形	長 幅	10.3 0.7	厚 重	0.3 8.0	–	端部の一方が円形に打ち伸ばされる。円形の中心をはずれて穴が開けられている。穴は片面から鏨などの工具で穴が開けられたと思われ、片面に凹みがある。棒部分の断面円形。	
第371図 PL.321	21建 30	銅製品 鉦鼓	 一部欠損	直 高	8.8 2.9	厚 重	– 163.0	–	一部に金色の光沢が見られる。耳部分に紐が残存する。打面は外側から中心に向かって外縁、７㎜ほど１㎜下がり、また中心部が盛り上がる。	PL.97
第371図 PL.321	21建 31-1	銅製品 墨壺	 完形	長 幅	2.15 0.8	厚 重	0.05 3.0	–	蓋と身に分かれる。内容物は炭とみられる。身にかぶせる形で蓋が作られており、蓋の厚さは２㎜である。蓋上面と底部に円状の成形痕が確認できる。	
第371図 PL.321	21建 31-2	銅製品 墨壺	 完形	長 幅	2.15 0.8	厚 重	0.05 3.0	–	蓋と身に分かれる。内容物は炭とみられる。身にかぶせる形で蓋が作られており、蓋の厚さは２㎜である。蓋上面と底部に円状の成形痕が確認できる。	
第371図 PL.321	21建 32-1	鉄製品 環状製品	 完形	長径 –	4.0 –	高 重	3.6 23.2	–	２個の金属の輪が癒着して出土している。環の厚さは１㎝。似ている遺物として鉈等の口金がある。やや楕円形になっているが、使用時の形状かは不明。明瞭なつなぎ目等は見られない。	
第371図 PL.321	21建 32-2	鉄製品 環状製品	 完形	直 –	3.5 –	厚 重	1.0 14.2	–	円環状の製品。つなぎ目などは見られず、加工時の状態も不明。	
第371図 PL.321	21建 32-3	鉄製品 環状製品	 完形	直 –	2.6 –	厚 重	0.2 2.4	–	ワッシャー状の薄い円環状の製品。加工痕等はみられない。やや内径内にバリが見られる。	
第371図 PL.321	21建 32-4	鉄製品 環状製品	 完形	直 –	2.6 –	厚 重	0.2 1.8	–	ワッシャー状の薄い円環状の製品。加工痕等はみられない。	
第372図 PL.–	21建 33	銅製品 煙管(雁首)	 一部欠損	長 幅	8.2 0.9	高 重	0.9 5.3	–	火皿が欠損する。やや長めの雁首。つなぎ目は側面に見られる。羅宇の一部が残存する。	
第372図 PL.321	21建 34	銅製品 煙管(雁首)	 一部欠損	長 幅	6.5 1.5	高 重	1.5 10.2	–	有機質痕跡が表面に残る。つなぎ目は確認できない。下部分が欠損する。上からの圧力で首がつぶれたものとみられる。	
第372図 PL.321	21建 35-1	鉄製品 煙管(雁首)	 完形	長 幅	5.9 1.3	高 重	1.9 7.5	–	側面につなぎ目が確認できる。断面は角はやや丸いが六角形。火皿が小ぶり。	
第372図 PL.321	21建 35-2	鉄製品 煙管(雁首)	 完形	長 幅	5.0 1.5	高 重	1.9 6.7	–	つなぎ目は不明瞭。小口近くで潰れる。	
第372図 PL.321	21建 35-3	鉄製品 煙管(吸口)	 完形	長 幅	3.9 0.9	高 重	0.9 3.3	–	肩を持つ小ぶりの吸口。肩の長さは1.7㎝。	
第372図 PL.321	21建 35-4	鉄製品 煙管(吸口)	 完形	長 幅	5.8 0.4	高 重	0.4 6.4	–	つなぎ目がわずかに確認できる。魚子による文様が見られる。	
第372図 PL.321	21建 35-5	鉄製品 煙管	 完形	長 幅	4.2 1.7	高 重	1.7 6.9	–	肩を持つ吸口か。小口が太すぎるため、煙管ではない可能性も考えられる。	
第372図 PL.321	21建 36	銅製品 煙管(吸口)	 完形	長 幅	6.2 1.0	高 重	1.0 3.6	–	つなぎ目が明瞭。黒色に近い金属光沢が見られる。	
第372図 PL.321	21建 37	鉄製品 鉄鍋(表)		径 幅	34 17	厚 重	0.3 2470.7	–	蓋と鍋､弦が残存する。蓋は中心に紐で留める穴が空き、持ち手を固定している。耳の穴は３か所空き、耳の口縁は飛び出している。内部には有機質が付着している。外面に煤が付着する。湯口は明瞭。	PL.101
第372図 PL.321	21建 38	銅製品 蓋	 完形	長 幅	12.9 12.7	厚 重	3.0 72.4	–	薬缶のふたと見られる。摘の径は1.8㎝、摘の上下が外れておらず、状態がよい。	
第372図 PL.321	21建 39	鉄製品 包丁	 1/3	長 幅	(15.3) (4.2)	厚 重	0.3 34.3	–	柄と背部分が主に残存している。刃部分がなく全体の形状は不明。	
第373図 PL.321	21建 40	鉄製品 包丁	 一部欠損	長 幅	32.4 6.3	厚 重	1.9 113.0	–	柄が残存する。柄の断面は四角形。刃部分に有機質が残存している。	PL.97
第373図 PL.321	21建 41	鉄製品 鍋	 一部欠損	底 口	32.4 39.5	高 重	23.6 3500	–	吊り手はねじれが無い。耳は穴が３つ空いており、耳部分の口縁は厚くなる。底部に煤が付着し、内部には有機物が残存するが、使用時との関係は不明。	PL.97
第373図 PL.321	21建 42	鉄製品 火打金	 完形	長 幅	12.4 3.9	厚 重	2.1 30.5	–	木質の持ち手が付いている。手作りの持ち手と見られ中心に開けてある穴は片側から空けられ、前後でずれている。れている。指の痕跡のような跡が確認される。	
第373図 PL.321	21建 43	鉄製品 火打ち金	 一部欠損	長 幅	7.6 1.4	厚 重	0.3 5.2	–	中央山形のかすがい形。端部に劣化が見られ、一部剥離している。	
第373図 PL.321	21建 44-1	鉄製品 火打ち金	 完形	長 幅	5.7 2.7	厚 重	2.0 22.5	–	２つの火打ち金が癒着している。２点ともねじり鎌形となる。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第373図 PL.321	21建 44-2	鉄製品 鍵と釘	 ほぼ完形	長 幅	5.5 2.0	厚 重	1.3 10.4	–	鍵と釘と見られる金属製品が癒着している。釘と見られる製品の頭が２つに分かれ折れが見られない。	
第373図 PL.321	21建 45	鉄製品 吊金具か	 完形	長 幅	7.0 1.7	厚 重	– 45.1	–	上部は断面が丸く、折り曲げて円形にする。吊り手部分は断面形状は長方形。折り返してやや端部は外反する。	
第373図 PL.321	21建 46	鉄製品 吊金具か	 完形	長 幅	7.5 1.7	厚 重	– 26.1	–	上部は断面が丸く、折り曲げて円形にする。吊り手部分は断面形状は長方形。折り返してわずかに外反する。	
第374図 PL.321	21建 47	鉄製品 鉄釜	 2/3	底 口	33.6 59.8	高 重	33.4 7900	–	大型の釜。体部の上から2/3のところで大きく広がる。口縁部は内側に突起が付き、体部の途中から広がって1/2のところで、つなぎ目のような線が確認できる。底部に近いところに鋳掛けがおこなわれている。湯口は明瞭。	
第375図 PL.322	21建 48	鉄製品 釘	 完形	長 幅	7.6 0.9	厚 重	0.6 8.5	–	頭部を折り返している釘。断面長方形。脚部がわずかに欠損する。	
第375図 PL.322	21建 49	鉄製品 鎌	 完形	長 幅	42.6 27.7	厚 重	2.9 236	–	柄が残存する鎌。口金や目釘等も良好に残存している。刃の途中から折れ曲がる。柄は34cmとなる。	PL.96
第375図 PL.322	21建 50	鉄製品 鎌	 完形	長 幅	45.7 27.4	厚 重	3.0 161.7	–	柄が残存している鎌。柄は劣化により状態が悪い。鎌に口金が錆で癒着している。	PL.96
第375図 PL.322	21建 51	鉄製品 鉈	 完形	長 幅	43.7 5.3	厚 重	3.3 380.6	–	鼻付きの鉈。口金、目釘、柄等が良好に残存する。	
第375図 PL.322	21建 52	鉄製品 鉈	 ほぼ完形	長 幅	61.2 9.7	厚 重	3.5 255.2	–	口金と柄が残存するが、目釘は見られない。自然乾燥してしまっているが、19cmほどの柄が装着される。鼻が先端に付き、片刃で裏すきが見られる。	
第375図 PL.322	21建 53	鉄製品 錐	 ほぼ完形	長 幅	29.2 2.0	厚 重	1.8 25.6	–	柄の端部がわずかに欠損する。刃元は断面四角形で、柄の劣化の影響か斜めに突き刺さっている。柄は刃に近い方は断面四角形、上部になるにつれ断面円形で細くなる。	PL.96
第375図 PL.322	21建 54	鉄製品 錐	 ほぼ完形	長 幅	(17.1) 3.5	厚 重	1.6 11.2	–	木製の柄が残存している。金属部分は四角形で２cmが残存している。先端は尖っているが劣化による欠けの可能性もある。	PL.96
第376図 PL.322	21建 55	鉄製品 斧	 完形	長 幅	8.6 16.4	厚 重	7.2 1077	–	柄が残存している斧。中心部に刻みが４本、反対には３本刻まれ、刃に近いところに両面７本ずつ刻みが入る。	PL.96
第376図 PL.322	21建 56	鉄製品 斧	 ほぼ完形	長 幅	17.9 4.6	厚 重	6.8 1080	–	両側面に３本と４本の刻みが確認できる。刃先にも刻みがあり、片面が10本、反対面は劣化により６本ほどが確認できる。柄が一部残存しており、クリ材を使用している。頭側からくさびが打ち込まれている。	PL.96
第376図 PL.322	21建 57	鉄製品 斧	 完形	長 幅	17.4 6.4	厚 重	4.4 1071	–	両側面に４本、３本の刻みが付けられている。柄の装着部の４本の刻み側につなぎ目が残り、上部の柄の装着部の刃側につなぎ目の線が確認できる。	PL.96
第376図 PL.322	21建 58	鉄製品 鋤先	 一部欠損	長 幅	26.3 17.2	厚 重	2.4 1364.5	–	金属光沢が見られる。布痕跡が残存する。風呂にあたる木質は確認できない。	PL.96
第377図 PL.323	21建 59-1	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.7 2.4	厚 重	0.4 8.6	–	３枚癒着の内、その内２枚が新寛永と確認出来る。文字、輪、郭は明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-2	銭貨 古寛永、新寛永	 完形	外 内	2.8 2.5	厚 重	0.4 7.7	–	３枚が癒着する。古寛永、新寛永が確認出来る。文字、輪、郭は明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-3	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 2.5	厚 重	0.3 5.6	–	２枚が癒着する。一部文字がつぶれているが、輪、郭ともに明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-4	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.7 2.4	厚 重	0.3 5.2	–	２枚が癒着する。文字、輪、郭が明瞭。もう一枚は背側を向いており、やや錆が多い。	
第377図 PL.323	21建 59-5	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 3.3	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-6	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 3.3	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-7	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 3.3	–	面はやや文字がつぶれているが、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く、輪、郭が不明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-8	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 2.1	厚 重	0.1 3.5	–	やや文字が見えづらい。輪、郭は明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-9	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.2 1.7	厚 重	0.1 2.5	–	背元か。背の文字、郭が不明瞭。面は文字、輪、郭が明瞭。郭の内部の角に鋳バリが見られる。	
第377図 PL.323	21建 59-10	銭貨 古寛永か	 完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 2.3	–	「寶」の字がス貝寶か。背の彫が浅く、輪、郭が不明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59-11	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.2 2.0	–	黄色みの強い文字。凹みの部分の一部に欠けが見られ、鋳不足になっているか。背の輪は不明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第377図 PL.323	21建 59- 12	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.9	–	面、背のともに文字、輪、郭は明瞭。やや背の彫は浅い。	
第377図 PL.323	21建 59- 13	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.1 1.8	厚 重	0.1 1.8	–	やや小ぶりとなる。面の文字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く不明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59- 14	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.2	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫は浅いが、輪、郭が明瞭。背は縦ヤスリか。	
第377図 PL.323	21建 59- 15	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.4	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。やや背の彫は浅い。	
第377図 PL.323	21建 59- 16	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 3.3	–	背佐。面のやや文字は潰れるが、輪、郭は明瞭。背は、彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。背は縦ヤスリか。	
第377図 PL.323	21建 59- 17	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.7	厚 重	0.1 2.2	–	背元。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	
第377図 PL.323	21建 59- 18	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.0	–	彫が非常に浅く、文字は不明瞭。輪、郭も見えづらい。背も彫が浅く、輪、郭が不明瞭。	
第377図 PL.323	21建 60	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.4 1.8	厚 重	0.1 3.1	–	面、背ともに彫が浅く、文字、輪、郭が不明瞭。「寶」のみやや確認できる。	
第377図 PL.323	21建 61	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 3.3	–	全体が劣化している。面は文字、輪、郭が明瞭だが、背は不明瞭。	
第377図 PL.323	21建 62	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.6	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第377図 PL.323	21建 63	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.8 2.1	厚 重	0.1 4.9	–	四文銭、11波。面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。面に横ヤスリがみられる。	
第378図 PL.323	21建 64-1	銭貨 新寛永	完形	外 内	3.2 2.7	厚 重	3.4 57.9	–	23枚癒着。面は新寛永のみ確認できる。錆に覆われており、文字の一部はつぶれる。輪、郭は明瞭。板状の有機質が残存する。	
第378図 PL.324	21建 64-2	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.2	–	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや彫が浅いが、文字、輪、郭が明瞭。	
第378図 PL.324	21建 64-3	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.9	厚 重	4.4 77.7	–	28枚が癒着する。面は新寛永のみ確認できる。彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。板状の有機質が一部に残存する。	
第378図 PL.324	21建 64-4	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.7 2.6	厚 重	1.5 32.7	–	12枚癒着する。面は新寛永のみ確認できる。文字、輪、郭は明瞭。	
第378図 PL.324	21建 64-5	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.6 2.6	厚 重	1.6 29.6	–	11枚癒着。面は新寛永のみ確認できる。文字、輪、郭が明瞭。	
第378図 PL.324	21建 65-1	銭貨 新寛永	完形	外 内	1.8 2.3	厚 重	0.9 16.8	–	長方形の4.5㎝の金属板を山形に折り曲げたものと出土。７枚癒着し、内２枚は新寛永。	
第378図 PL.324	21建 65-2	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.3 2.0	厚 重	1.9 2.2	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第378図 PL.324	21建 65-3	銭貨 古寛永か	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.2 1.5	–	癒着していたものと見られ、全体的に劣化が見られる。	
第378図 PL.324	21建 66-1	銭貨 新寛永	完形	外 内	3.7 2.9	厚 重	3.5 6.7	–	26枚が癒着している。その内、１枚の面の文字、輪、郭は明瞭。	
第378図 PL.324	21建 66-2	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.7	厚 重	0.6 11.4	–	４枚が癒着する。１枚は面が確認でき、文字、輪、郭は明瞭。背が見えている１枚は輪、郭が明瞭。輪が右の方がやや太い。	
第378図 PL.324	21建 66-3	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.8 2.8	厚 重	1.15 19.9	–	さびで覆われている部分もあるが、８枚程度が癒着する。その内１枚が面を向いており、文字、輪、郭は明瞭。	
第378図 PL.324	21建 66-4	銭貨 銭種不明	完形	外 内	3.6 3.0	厚 重	3.2 59.0	–	一部に鉄銭が混じるため正確な枚数はわからないが25枚程度癒着している。内部に紐が残存する。面側が見えないため、銭種は不明。	
第378図 PL.324	21建 66-5	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 2.0	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫がほとんど無いが、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.324	21建 67-1	銭貨 古寛永、新寛永	完形	外 内	2.4 2.6	厚 重	0.5 11.7	–	３枚が癒着し、内２枚が面を向いている。古寛永の彫は深く、文字、輪、郭は明瞭。新寛永は文字の一部が劣化し見えづらい。	PL.96
第379図 PL.324	21建 67-2	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.2 2.4	厚 重	0.4 7.7	–	３枚が癒着している。１枚について面が確認でき、文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.324	21建 67-3	銭貨 古寛永、新寛永	完形	外 内	2.5 2.5	厚 重	0.3 6.3	–	２枚が癒着している。古寛永と新寛永が確認でき、どちらも文字、輪、郭は明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第379図 PL.324	21建 67-4	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.5	厚 重	0.5 9.5	–	４枚が癒着する。１枚について面が確認でき、文字、輪、郭は明瞭。背側が見えているものは鋳不足で欠けているか。	
第379図 PL.324	21建 67-5	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.6 2.6	厚 重	0.8 16.9	–	６枚が癒着する。内、１枚は新寛永。文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.324	21建 67-6	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.5	厚 重	0.5 7.9	–	３枚が癒着している。２枚について面側が見えている。１枚は文字、輪、郭が明瞭。もう１枚は文字はやや劣化で見えづらい。	
第379図 PL.324	21建 67-7	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.5	厚 重	0.3 6.7	–	２枚が癒着し、どちらも面側が確認できる。２枚とも彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第379図 PL.324	21建 67-8	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 2.4	厚 重	0.3 5.1	–	２枚癒着。面の文字、輪、郭は明瞭。もう１枚の背も輪、郭が明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-9	銭貨 古寛永、新寛永	完形	外 内	2.5 2.5	厚 重	0.5 9.9	–	４枚が癒着する。内１枚が古寛永。劣化により、一部文字が不明瞭。輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-10	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.4 7.6	–	３枚が癒着する。「永」の左側に鋳不足が見られる。文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-11	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.5	厚 重	0.2 5.7	–	２枚が癒着し、１枚が面を向いている。面の文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-12	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 2.3	厚 重	0.2 4.5	–	２枚が癒着し、２枚とも面を向いている。１枚の面の彫は深く文字、輪、郭が明瞭。もう１枚も彫がやや浅いが明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-13	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.5	厚 重	0.3 5.6	–	２枚が癒着し、１枚が面を向いている。面の彫は深く、文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-14	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.4	厚 重	0.3 6.2	–	２枚が癒着し、１枚が面を向いている。面の彫は深く、文字、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-15	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.3	厚 重	0.3 5.2	–	２枚癒着。１枚は新寛永で彫深く、文字、輪、郭が明瞭。もう１枚は背側で彫は浅いが輪、郭の確認はできる。	
第379図 PL.325	21建 67-16	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.3 4.5	–	２枚癒着。面の文字、輪、郭は明瞭。もう１枚の背は彫が浅く不明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-17	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.5 7.4	–	３枚が癒着し、どちらも背を向いている。２枚ともやや彫が浅いが、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-18	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.3 6.0	–	２枚が癒着し、面同士で癒着する。２枚とも背の輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-19	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.5 2.4	厚 重	0.6 8.0	–	３枚癒着し、背側のみが見えている。背の彫は浅いが、輪、郭は明瞭。その内１枚の郭がずれている。	
第379図 PL.325	21建 67-20	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.3 4.4	–	２枚が面同士で癒着している。２枚の背はやや彫が浅いが、輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-21	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.5 2.6	厚 重	0.3 6.4	–	２枚の面が癒着しているため、銭種不明。１枚の背の彫は浅く、輪、郭は不明瞭。もう一枚は輪、郭は明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-22	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.4 2.4	厚 重	0.4 7.4	–	２枚が癒着する。どちらも背側が見えている。背の輪、郭は２枚とも明瞭。	
第379図 PL.325	21建 67-23	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.2 2.9	–	背文。面の彫は深く明瞭だが、背はやや彫が浅く見えづらい。	
第379図 PL.325	21建 67-24	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.3	–	背文。面の彫は深く明瞭。背の文字は見えづらいが輪、郭は明瞭。	
第380図 PL.325	21建 67-25	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.5	厚 重	0.4 9.6	–	３枚癒着。面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背側が見えている１枚の輪、郭が太い。	
第380図 PL.325	21建 67-26	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 2.7	–	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅く不明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第380図 PL.325	21建 67- 27	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 3.1	–	面の文字はつぶれており見えづらい。背は彫が浅く、不明瞭。	
第380図 PL.325	21建 67- 28	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 3.5	–	面、背ともに彫が深く文字、輪、郭が明瞭。	
第380図 PL.325	21建 67- 29	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 4.3	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	
第380図 PL.325	21建 67- 30	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.2 3.0	–	面の文字はやや錆で覆われるが、輪、郭は明瞭。背は彫がやや浅く。輪、郭が見えづらい。	
第380図 PL.325	21建 67- 31	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 3.9	–	背文。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	
第380図 PL.325	21建 67- 32	銭貨 新寛永か	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.2 3.1	–	文字がつぶれており不明瞭。背は肌が荒れているが輪、郭は判別可能。文字は不明瞭なため確認できない。	
第380図 PL.326	21建 67- 33	銭貨 寛永通寶	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.2	–	劣化および鋳詰まりのため、新寛永か古寛永か判断できない。背の彫は浅く不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 34	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.4	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背はやや彫が浅く、劣化により不明瞭な部分が見られる。	
第380図 PL.326	21建 67- 35	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.2 3.2	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、輪、郭がやや不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 36	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.5	–	面の文字は劣化により、やや不明瞭。背は輪、郭が明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 37	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 2.7	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。輪の一部が欠ける。	
第380図 PL.326	21建 67- 38	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.2 2.9	–	面の文字は錆により、一部不明瞭。輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、一部不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 39	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.5	–	面の一部が錆によりやや不明瞭。輪、郭は明瞭。背の彫は浅くやや不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 40	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.8	厚 重	0.1 2.4	–	背元か。面は彫が深く明瞭だが、背は彫が浅く不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 41	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.8	–	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背も輪、郭が明瞭。郭がやや右上にずれる。	
第380図 PL.326	21建 67- 42	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.2 3.5	–	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅くやや不明瞭。郭の内側に鋳バリが残る。	
第380図 PL.326	21建 67- 43	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 1.7	–	面は劣化が見られるが文字、輪、郭が判別可能。背は彫が浅く、輪、郭が不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 44	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.9	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背に癒着痕が見られる。背の彫は浅く不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 45	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.4	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は郭の一部が鋳不足で欠ける。輪は明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 46	銭貨 新寛永か	完形	外 内	2.4 1.8	厚 重	0.1 2.2	–	面、背ともに彫が浅く、文字、輪、郭が不明瞭。	
第380図 PL.326	21建 67- 47	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 2.0	厚 重	0.1 3.3	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の郭がやや右下にずれる。	
第380図 PL.326	21建 67- 48	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.9	厚 重	0.1 2.1	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。郭がややゆがむ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第381図 PL.326	21建 67- 49	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.2	–	文字がつぶれており不明瞭。輪、郭は明瞭。背は肌が荒れており、やや不明瞭。	
第381図 PL.326	21建 67- 50	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.2 4.4	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。彫は背の方が浅い。	
第381図 PL.326	21建 67- 51	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 3.0	–	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや彫が浅いが、明瞭。	
第381図 PL.326	21建 67- 52	銭貨 新寛永か	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 3.3	–	面の彫が一部浅く、文字の判読が困難。鋳詰まりと見られる。背も輪、郭など不明瞭	
第381図 PL.326	21建 67- 53	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 3.5	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。「永」の左に小さな穴があく。	
第381図 PL.326	21建 67- 54	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 3.2	–	「寛」の字の横に欠けが見られる。鋳不足によるものか。面、背ともに文字、輪、郭ともに明瞭。	
第381図 PL.326	21建 67- 55	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.5	–	「永」の字に欠けが見られる。劣化によるものか。面の文字は錆で一部見えづらい。輪、郭は面、背ともに明瞭。	
第381図 PL.326	21建 67- 56	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.7	–	背に文字があるように見えるが、判読不能。面の文字、輪、郭は明瞭。	
第381図 PL.327	21建 68	石製品 砥石	完形	長 幅	13.5 4.7	厚 重	1.7 202.7	珪質粘板岩	表面に砥面が認められる。砥面はほぼ平坦で全体的に滑らかであり主に縦方向の細かい線条痕が多数認められる。側面部は表裏面に平行する方向の小さな段差が累積しており製作時の切断痕の可能性がある。裏面全体には平ノミ状の工具痕が明瞭に認められる。	
第381図 PL.327	21建 69	石製品 砥石	完形	長 幅	18.5 3.5	厚 重	5.2 613.4	砥沢石	表面は全体的に非常に滑らかであり砥面と判断され細かい線条痕がわずかに認められる。左右両側面と上下小口面及び裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	PL.97
第381図 PL.327	21建 70	石製品 砥石	完形	長 幅	19.6 4.9	厚 重	5.5 930.2	粗粒輝石安山岩	荒砥。表面は全体的に滑らかであり主要な砥面と考えられる。裏面もわずかに滑らかであり砥面として利用された可能性がある。左右両側面と上下小口面は打割面で構成されると考えられる。	
第382図 PL.327	21建 71	石製品 砥石	ほぼ完形	長 幅	15.9 5.2	厚 重	1.9 320.2	珪質粘板岩	表面が主要な砥面と判断され線状痕が多数認められる。裏面は砥面と剥離面が混在する状況である。裏面の砥面部分には比較的細かい線条痕が多数認められる。裏面の剥離面の一部には研ぎが及んでいる箇所が認められる。裏面の中央には円形の孔が認められる。左右両側面と上下小口面には表裏面に平行する細かい線条痕が累積しており素材の切断痕の可能性がある。	
第382図 PL.327	21建 72	石製品 砥石	ほぼ完形	長 幅	13.5 4.7	厚 重	10.5 114.3	珪質粘板岩	表面が主要な砥面と判断され線状痕が多数認められる。表面は中央部がわずかに窪み研ぎ減りする。裏面には滑らかな部分が認められ便宜的な砥面と判断される。左右両側面と上下小口面には表裏面に平行する細かい線条痕が累積しており素材の切断痕の可能性がある。	PL.106
第382図 PL.327	21建 73	石製品 砥石	4/5	長 幅	(14.3) 5.8	厚 重	2.8 412.6	粗粒輝石安山岩	荒砥。表面は全体的に滑らかであり上方左側に断面V字状の溝状痕跡が集中する。裏面には部分的に滑らかな面が認められ砥面の可能性がある。	
第382図 PL.327	21建 74	石製品 砥石	完形	長 幅	13.5 2.7	厚 重	1.5 72.7	砥沢石	表裏面は全体的に滑らかであり砥面と判断される。左側面には部分的に滑らかな面が認められ便宜的な砥面と考えられる。左側面には櫛歯タガネ痕が部分的に認められる。右側面と上下小口面には全体的に櫛歯タガネ痕が認められる。	
第382図 PL.327	21建 75	石製品 砥石	2/3	長 幅	(9.9) 2.5	厚 重	2.2 76.8	砥沢石	表面が主要な砥面と判断され細かい線状痕が認められる。裏面には「イ」の文字が線刻される。左右両側面と裏面は櫛歯タガネ痕と滑らかな面が混在しており便宜的な砥面として利用されたと考えられる。下部小口面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められる。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第382図 PL.327	21建 76	石製品 砥石	4/5	長 幅	(8.0) 3.1	厚 重	1.4 38.2	砥沢石/	表面が主要な砥面と判断され中央が膨らんだ形態であり上下方に向かい研ぎ減りする。左側面は全体的に滑らかであり砥面と判断される。裏面には縦方向に明瞭な稜が認められ稜の左側には櫛歯タガネ痕が全体的に認められる。稜の右側は全体的に滑らかであり砥面と判断されれる。	
第382図 PL.327	21建 77	石製品 石臼(上)	4/5	径 幅	33.0 -	高 重	14.4 22000	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が残る。側面には棒状の工具痕が明瞭に認められ矩形の挽き手孔が認められる。供給孔は中央やや下方が狭くなっており両面穿孔と考えられる。軸受孔の直径約３cm、供給孔の直径約４cm。	
第382図 PL.327	21建 78	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	32.4 -	高 重	11.4 17700	粗粒輝石安山岩	わずかに片減りする。上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が認められる。軸孔の直径約４cm。	PL.97
第382図 PL.327	21建 79	石製品 石臼(下)	1/2	長 幅	(33.4) (21.0)	高 重	(15.6) 12700	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔は中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。軸孔の直径約４cm。	PL.97
第383図 PL.327	21建 80	石製品 搗臼の重し	完形	長 幅	28.2 16.0	厚 重	11.2 10100	粗粒輝石安山岩	表裏面はほぼ平坦であり全体的に滑らかである。側面部も全体的で平坦であるが棒状の工具痕が明瞭に認められる。中央に矩形の孔が認められ木材が差し込まれた状態である。孔からの脱落を防止するためのかんぬき様の木材が認められる。	
第383図 PL.328	21建 81	石製品 唐臼	完形	長 幅	60.0 65.0	高 重	51.0 -	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ39.0cm深さ30.0cmの内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は中心がやや下に出っ張る。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。縁上面には直線状の工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	
第384図 PL.327	21建 82	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.2	-	背足か。背の文字が鋳詰まりしており見えづらい。面の文字、輪、郭は明瞭。	
第384図 PL.328	21建 83	石製品 唐臼	完形	長 幅	61.5 58.0	高 重	48.5 -	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ38.0cm深さ27.5cmの外に開く凹み、最大径は上端に位置する。内面の底はやや滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅狭で平坦で工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	

6区6号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第385図 PL.328	15建 1	肥前磁器 染付小碗	1/3	口 底	(6.8) (3.0)	高	3.7	夾雑物なし/白	体部外面に笹文。内面は無文。	紅猪口か
第385図 PL.-	15建 2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部1/5	口 底	(6.8) -	高	-	夾雑物微量/灰白	内外面に灰釉、貫入が入る。	
第385図 PL.328	15建 3	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.4 3.8	高	5.1	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境､高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	PL.118
第385図 PL.328	15建 4	肥前磁器 染付碗	口縁部が一部欠損、ほぼ完形	口 底	9.1 3.5	高	5.0	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境､高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	
第385図 PL.328	15建 5	肥前陶器 陶胎染付碗	4/5	口 底	11.2 4.2	高	7.3	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に崩れた四方襷文。体部外面に樹木や家屋からなる山水文を描く。体部下位と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉､貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第385図 PL.328	15建 6	肥前磁器 染付碗	1/2	口 底	9.7 3.6	高	5.0	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境､高台に圏線。内面は無文。焼成がやや不良。	
第385図 PL.328	15建 7	肥前磁器 染付碗	4/5	口 底	9.7 3.7	高	5.0	夾雑物なし/白	小片からなる。体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。	
第385図 PL.328	15建 8	肥前陶器 陶胎染付碗	3/5	口 底	9.9 4.1	高	6.2	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に山水文か。体部下位と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第385図 PL.328	15建 9	肥前磁器 染付碗	口縁部破片1/3	口 底	(9.8) -	高	-	夾雑物なし/白	体部外面に丸文の中にコンニャク印判の蔦の葉文。内面は無文。	
第385図 PL.328	15建 10	瀬戸・美濃 陶器 碗	1/2	口 底	(10.1) (4.0)	高	4.7	夾雑物少量/暗灰	口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面を半分ずつ鉄釉と灰釉で掛け分け、高台内部まで丁寧に施釉。灰釉は貫入が入る。	せんじ碗

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第385図 PL.328	15建 11	瀬戸・美濃 陶器 碗	2/3	口 底	10.3 4.9	高	6.8	夾雑物微量/淡黄	小片からなる。内外面には灰釉。体部外面下位から高台は無釉、褐色の焼けがある。	PL.118
第385図 PL.328	15建 12	瀬戸・美濃 陶器 碗	4/5	口 底	10.8 4.3	高	6.8	夾雑物少量/淡黄	内外面に褐色の飴釉。体部外面下位から高台は無釉、褐色の焼けがある。破断面に漆が付着、漆継ぎか。	
第385図 PL.328	15建 13	肥前磁器 白磁猪口	体部から高台部	口 底	－ (3.5)	高	－	夾雑物なし/白	高台端部を除き、内外面に透明釉。	18世紀前半
第385図 PL.328	15建 14	肥前磁器 染付筒型香炉	体部から高台部 破片1/4	口 底	(6.6) －	高	－	夾雑物微量/灰白	脚が２か所残存。体部外面に３条の横線文が巡る。口縁部内外面は透明釉、貫入が入る。体部内面から底部は無釉で砂が付着。	
第385図 PL.328	15建 15	肥前磁器 色絵製品	破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物なし/白	外面は透明釉に赤の色絵具を施した一重網目文。内面は無釉。付けられた飾りに緑の色絵具が塗彩されている。	№15～№18は同一個体か
第385図 PL.328	15建 16	肥前磁器 色絵製品	破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物なし/白	内部が空洞の未詳磁器製品。尾のような突起は赤の色絵具で塗彩されている。	№15～№18は同一個体か
第385図 PL.328	15建 17	肥前磁器 色絵製品	破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物なし/白	内部が空洞の未詳磁器製品。亀のような動物の頭部が形作られ、口が開いている。目の部分は色絵具の赤線で塗られ、緑の模様が左右で対になる。	№15～№18は同一個体か
第385図 PL.328	15建 18	肥前磁器 色絵製品	破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物なし/白	内部が空洞の未詳磁器製品。筒状で内部は、孔が貫通している。筒の先には赤の色絵具で連弁状に塗彩されている。筒には貼り付けられた飾りには緑の色絵具が塗彩されている。	№15～№18は同一個体か
第385図 PL.328	15建 19	瀬戸・美濃 陶器 蓋	完形	直 摘	7.4 1.1	高	1.5	夾雑物少量/灰白	摘みは丸みを帯びた粘土小塊を貼り付け。表面は灰釉を施し、裏面は無釉で回転ヘラケズリ。	
第385図 PL.－	15建 20	瀬戸・美濃 陶器 小碗か	口縁部破片	口 底	(6.5) －	高	－	夾雑物微量/白	内外面には灰釉。	
第385図 PL.328	15建 21	陶器　鉄製品 茶釜のふた	一部欠損	径 －	14.3 －	高 重	1.9 178.0	－	内面の外形から1.2㎝内に入った所で径に合わせて突起がつく。上面には穴の空いた摘がつき、金属錆で紐状痕跡が確認できる。	
第385図 PL.328	15建 22	銅製品 銅線	一部	長 幅	23.5 0.1	厚 重	0.1 3.5	－	丸まっている状態の銅線。	
第385図 PL.328	15建 23	銅製品 不明	完形	長 幅	5.5 0.45	厚 重	0.1 1.6	－	細く薄い銅の金属片。変形等はない。用途不明。	
第386図 PL.329	15建 24	鉄製品 茶釜	2/3	径 口	(22.2) 12.8	高 重	17.1 1618	－	弦が耳に残存している。耳は台形で穴は三か所空く。内部側面に布痕が残存している。内容物等は確認できない。	PL.118
第386図 PL.329	15建 25	鉄製品 鍋	2/3	底 口	25.3 30.0	高 重	18.1 1360	－	底部に鋳掛けが残存する。接合できなかった破片にも鋳掛けがあり、口縁部に近いところの破片とみられる。湯口はやや凹み、ヨコナデの成形痕が底部と体部に残る。耳の孔は３つ。	PL.118
第387図 PL.329	15建 26	銭貨 新寛永	ほぼ完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 2.5	－	背文。面､背ともに文字､輪､郭が明瞭。輪の一部が欠け、一部に強い力が加わった事による亀裂が見られる。	
第387図 PL.329	15建 27	銭貨 新寛永	3/4	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 1.8	－	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。厚さが場所によって異なる。｢通｣の字が欠損する。	
第387図 PL.329	15建 28	銭貨 新寛永	2/3	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 1.5	－	｢寛｣の字と郭の一部が欠損している。作りが悪く、鋳不足による欠けと考えられる。	
第387図 PL.329	15建 29	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.2 2.3	厚 重	0.3 2.6	－	面、背の文字、輪、郭ともに不明瞭。全体が厚く、表面が不規則に盛り上がる。	
第387図 PL.329	15建 30	銭貨 鉄銭	完形	外 内	2.4 －	厚 重	0.2 2.3	－	全面がさびに覆われている。一部、郭が確認できる。	
第387図 PL.329	15建 31	石製品 砥石	完形	長 幅	13.2 3.0	厚 重	2.0 117.6	砥沢石	表面が砥面であり上下方向に向かいにわずかに研ぎ減りする。裏面と左右両側面及び上部小口面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められる。	PL.118
第387図 PL.329	15建 32	石製品 石臼(上)	1/2	径 幅	32.8 －	高 重	13.1 6000	粗粒輝石安山岩	片減りが認められる。底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに残る。底面のすり合わせ面には矩形の挽き手の孔の一部が認められる。片減りしたことにより挽き手孔が底面に露出し新たな挽き手孔を側面に作成したと考えられる。供給孔の一部が認められる。軸受孔の直径約３㎝。	
第387図 PL.329	15建 33	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	35.0 －	高 重	12.4 22300	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の直径約３㎝。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第387図 PL.329	15建 34	石製品 火打石	完形	長 幅	2.1 1.8	厚 重	1.0 3.4	流紋岩	稜上に微細剥離痕とつぶれ痕が集中する。全体的に剥離面で構成されており剥片を素材とする。	

6区7号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第387図 PL.329	13建 1	肥前磁器 碗	4/5	口 底	9.8 4.1	高	5.4	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部下位と高台境、高台に圏線。口縁部内面に呉須が付着。高台内に不明銘。内面は無文。	
第387図 PL.329	13建 2	肥前磁器 染付皿	1/3	口 底	(8.3) (4.0)	高	1.8	夾雑物なし/白	体部外面に梅花文。体部下位、高台境と高台に圏線。高台内に二重圏線。内面に松竹梅文。高台端部を除き、内外面に透明釉。風化による透明釉の白濁化。	
第387図 PL.329	13建 3	丹波陶器 すり鉢	口縁部から底部破片	口 底	(26.1) (13.6)	高	10.1	黒・白色片を含む/灰	口縁端部は二重の稜をなし、内側に肥厚する。内面に10本一単位のクシ目。内外面は無釉の焼き締め陶器。	650土坑出土すり鉢と接合
第387図 PL.329	13建 4	在地系土器 すり鉢	口縁部から体部破片	口 底	– –	高	–	白色片含む/褐	口縁端部は平坦をなし、内側にゆるく反る。内面には15本一単位のクシ目。体部外面はナデ。	
第388図 PL.329	13建 5	銅製品 煙管	一部欠損	長 幅	5.4 1.2	高 重	1.1 4.6	–	火皿が欠損する。つなぎ目が側面にある小口近くでつなぎ目からわずかに破損する。	
第388図 PL.–	13建 6	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	7.3 1.3	高 重	1.3 10.7	–	全体が硬い錆に覆われているため、表面の状態が確認できない。	
第388図 PL.329	13建 7	銅製品 煙管	一部欠損	長 幅	4.5 1.0	高 重	1.0 3.0	–	肩を持つ吸口。つなぎ目は明瞭。小口部分が破損している。	
第388図 PL.329	13建 8	鉄製品 鉄釜	一部	底 口	35.5 –	高 重	12.1 547.8	–	底部が外側に張り出す釜にあたると見られる。16建より同様の特徴を持つ釜が確認されている。体部にヨコナデの成形痕が残存する。	
第388図 PL.329	13建 9	石製品 砥石	完形	長 幅	13.9 2.9	厚 重	4.0 282.8	砥沢石	表面は全体的に非常に滑らかであり砥面と判断され細かい線条痕がわずかに認められる。左右両側面と上下小口面及び裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第388図 PL.329	13建 10	石製品 砥石	不明	長 幅	(6.2) (3.7)	厚 重	2.0 75.7	珪質粘板岩	表面が主要な砥面と判断され細かい線状痕が多数認められる。裏面も全体的に滑らかであり砥面と判断される。左側面には表裏面に平行する細かい線条痕が累積し素材の切断痕の可能性がある。上部小口面は残存状態が悪く観察できない。	
第388図 PL.329	13建 11	石製品 石臼(上)	完形	径 幅	30.5 –	高 重	13.0 19450	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が認められず供給孔から続く配給の溝状痕跡が明瞭に認められる。側面には矩形の挽き手孔が残る。供給孔は中央付近に段差が認められ両面穿孔と考えられる。軸受孔及び供給孔の直径約3㎝。	PL.125
第388図 PL.330	13建 12	石製品 唐臼	完形	長 幅	56.5 56.5	高 重	49.3 –	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ39.0cm深さ26.5cmの内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は中心がやや下に出っ張る。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。縁上面には直線状の工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	PL.125

8区8号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第389図 PL.–	30建 1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部破片1/5	口 底	(6.7) –	高	–	夾雑物微量/灰白	内外面に灰釉、貫入が入る。	
第389図 PL.330	30建 2	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部から体部破片	口 底	(10.0) –	高	–	夾雑物微量/暗灰	口縁部下外面に螺旋状の圏線。体部には唐草文か。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	
第389図 PL.330	30建 3	瀬戸・美濃 陶器 碗	4/5	口 底	(9.9) 4.4	高	7.3	夾雑物少量/暗灰	内面から体部外面下位に灰釉。口縁部下外面に窯キズ。体部外面下位と高台は無釉。口縁部の一部は内側に反り、形が少し歪んでいる。	
第389図 PL.330	30建 4	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から高台部	口 底	(9.1) (4.5)	高	5.7	夾雑物微量/灰	内面から口縁部下外面に灰釉。体部上位に太い螺旋状凹線をが巡り、体部上位から高台端部を除く高台には褐色の鉄釉。高台内は沈線で小さな円を描く。	腰錆碗
第389図 PL.330	30建 5	瀬戸・美濃 陶器 蓋	摘みが欠損	口 底	7.6 –	高	–	夾雑物少量/灰白	摘みは欠損。表面は灰釉を施し、裏面は無釉で回転ヘラケズリ。中央の摘み付近を円形に削っている。	
第389図 PL.330	30建 6	肥前磁器 染付仏飯器	脚部	口 底	– 3.9	高	–	夾雑物なし/白	脚部のみ残存。高台は施釉した透明釉を拭う。高台は低く、凹型に削り出して中央を施釉。脚部中位に沈線が巡る。脚部と体部境に圏線か。	PL.138

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第389図 PL.330	30建 7	瀬戸・美濃 陶器 水注	体部と注ぎ口の一部	口 底	4.6 7.8	高	11.4	夾雑物少量/灰	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部と体部境付近にクシ目が入る。体部中位に沈線が巡る。取っ手と注ぎ口は貼り付けで一部が残存する。内外面に褐色の飴釉。体部下位と高台は無釉で一部に炭化物が付着。	PL.138
第389図 PL.330	30建 8	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部下位から高台部破片	口 底	－ 3.6	高	－	夾雑物微量/灰白	底部内面と体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部外面下位と高台は無釉。	せんじ碗
第389図 PL.330	30建 9	土製品 土人形類	完形	口 底	－ 2.4	高	4.5	夾雑物少量/橙褐	前後の型を合わせて成形。ミニチュアの石灯篭像。底部に固定のための孔があく。	PL.138
第389図 PL.330	30建 10	陶器 唐子人形	頭部から体部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物微量/灰	唐子人形の頭部から体部で内部は空洞。鉄絵具で眉と目を描く。背中側に紐などによる固定のため、２か所の孔を開けてから、灰釉を施釉している。	
第389図 PL.330	31建 11	肥前磁器 染付皿	1/2	口 底	12.1 4.0	高	3.3	夾雑物なし/灰白	体部内面には松葉文か。底部は蛇の目釉剥ぎ。内面から体部外面下位に透明釉。体部下位と高台は無釉。	
第389図 PL.－	31建 12	瀬戸・美濃 陶器 碗	高台部	口 底	－ 5.2	高	－	夾雑物微量/灰	底部内面と体部外面下位に褐色の飴釉。体部外面下位と高台は灰釉。高台境と高台の一部に沈線が巡る。	
第389図 PL.330	32建 13	肥前陶器 陶胎染付碗	1/4	口 底	(10.2) (4.5)	高	6.0	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に草花文。体部下位と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉。高台端部は鉄錆。	
第389図 PL.330	34建 14	肥前陶器 陶胎染付碗	1/3	口 底	(10.8) (4.9)	高	6.9	夾雑物少量/灰	口縁部下外面に二重圏線。体部外面に不明文。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉。	
第389図 PL.330	34建 15	瀬戸・美濃 陶器 碗	高台部	口 底	－ (5.1)	高	－	夾雑物微量/灰白	底部内面は灰釉、貫入が入る。高台端部を除き、体部外面下位と高台は鉄釉を施し、油滴状に長石釉を散らす。	長石散らし碗
第389図 PL.330	30建 16	銅製品 煙管	完形	長 幅	8.8 1.2	高 重	1.1 7.9	－	全体が錆で覆われている。羅宇が一部残存する。	
第389図 PL.330	30建 17	銅製品 飾り金具	2/3	径 －	(2.2) －	厚 重	1.3 1.3	－	皿状の金属製品で内部に引っかけるための棒状の金属が折り曲げられて取り付けられている。	
第389図 PL.330	30建 18	鉄製品 おろし金	2/3	長 幅	15.3 11.8	厚 重	0.8 125.9	－	表面が劣化し、刃が不明瞭。片面のみに脇の立ち上がりが見られるが両面に刃があるとみられる。表面に板状の銅製品が付着するが、詳細不明。	PL.138
第389図 PL.330	30建 19	鉄製品 火打ち金	完形	長 幅	4.9 2.2	厚 重	0.8 9.5	－	ねじり鎌形の火打ちがねか。全体が厚く錆に覆われており、詳細不明。	
第389図 PL.－	30建 20-1	鉄製品 火打ち金	2/3	外 内	3.8 4.1	厚 重	2.0 35.7	－	ねじり鎌形の火打ちがね。	
第389図 PL.330	30建 20-2	銭貨 新寛永	完形	外 内	3.8 4.1	厚 重	2.0 35.7	－	６枚が癒着する。内１枚が寛永通寶の径が大きいため、四文銭と見られる。	
第389図 PL.330	34建 21	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.4	厚 重	3.5 4.3	－	２枚が癒着する。１枚は鉄銭でさびに覆われており、詳細不明。もう１枚の面は文字、輪、郭ともに明瞭。	
第390図 PL.330	30建 22	石製品 砥石	完形	長 幅	22.4 5.2	厚 重	5.1 968.7	砥沢石	表面に砥面が認められ中央付近が研ぎ減りにより窪んだ形態である。砥面には横方向の細かい線条痕が多数認められ、砥面中央付近の左右縁辺部には横方向に断面Ｕ字形の幅が広く浅い溝状痕跡が集中している。裏面と側面部には加工時の明確な工具痕は認められない。裏面の中央には斜め方向の断面Ｖ字形の溝状痕跡が累積する。	PL.138
第390図 PL.330	30建 23	石製品 石臼(上)	1/2	長 幅	(26.2) (32.2)	高 重	(14.4) 17250	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が残る。側面には矩形の挽き手孔の一部が認められる。供給孔は中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。軸受孔及び供給孔の直径約４㎝。	
第390図 PL.330	30建 24	石製品 搗臼の重し (石臼(下))	完形	長 幅	31.1 23.9	厚 重	9.4 11050	粗粒輝石安山岩	表面には挽き目の痕跡が明瞭に認められ石臼(下)を搗臼の重しに転用したと考えられる。当初は下臼であったものに中央に矩形の孔をあけ左右両側面には平坦面を再加工している。	
第390図 PL.331	30建 25	石製品 唐臼	完形	長 幅	76.9 70.4	高 重	55.7 －	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ40.0㎝深さ29.5㎝の内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は中心がやや滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅広で外面には「U」字状の工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。上から見ると隅丸方形であり、角柱状の石材から加工したことが分かる。	PL.138
第391図 PL.330	30建 26	石製品 ひで鉢	2/3	径 幅	11.4 －	厚 重	6.1 300	粗粒輝石安山岩	全体的に滑らかであり丁寧に整形されている。正面は浅鉢状に整形されており内面から縁にかけて黒色物質がわずかに付着する。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第391図 PL.331	34建 27	石製品 石臼(上)	1/2	長 幅	(28.0) (17.2)	高 重	(14.7) 9000	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残る。側面には矩形の挽き手孔の一部が認められる。供給孔は中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。底面に軸受孔の一部が認められ直径約3㎝。	
第391図 PL.330	31建 28	石製品 石臼(上)	1/4	長 幅	(23.0) (13.7)	高 重	(9.3) 2900	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに残り供給孔から続く配給の溝状痕跡がわずかに認められる。軸受孔の一部が認められる。	

8区9号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第392図 PL.331	14建 1	肥前磁器 染付小碗	1/4	口 底	(7.3) (2.9)	高	3.3	夾雑物なし/白	体部外面は笹文。内面は無文。	紅猪口
第392図 PL.331	14建 2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	ほぼ完形	口 底	6.5 2.6	高	3.9	夾雑物微量/灰	小片からなる。内面から体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部下位と高台は無釉。	
第392図 PL.331	14建 3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	1/2	口 底	(6.2) (2.9)	高	3.8	夾雑物微量/灰	内面から体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部中位に沈線が巡る。体部下位と高台は無釉。	
第392図 PL.−	14建 4	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部から体部破片	口 底	(6.2) −	高	−	夾雑物微量/灰	内面から体部外面下位に灰釉。体部下位は無釉。	
第392図 PL.331	14建 5	肥前陶器 陶胎染付碗	4/5	口 底	9.9 4.3	高	6.9	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に四方襷文。体部外面は鳥や樹木を描く山水文か。体部下位と高台境に圏線。内面は無文。高台端部を除く内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	
第392図 PL.331	14建 6	肥前磁器 染付碗	体部破片1/4	口 底	(10.4)	高	−	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文。体部下位と高台境に圏線。内面は無文で底部に釉ハゲ。	
第392図 PL.331	14建 7	肥前磁器 染付碗	口縁部破片1/3	口 底	(10.9) −	高	−	夾雑物なし/白	小片からなっていた。体部外面に雪輪梅樹文。内面は無文。	
第392図 PL.331	14建 8	肥前磁器 染付碗	高台部	口 底	− (4.5)	高	−	夾雑物なし/白	体部外面は不明文。体部下位、高台境と高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。高台端部に砂が付着。	
第392図 PL.331	14建 9	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から体部破片1/2	口 底	10.0 −	高	−	夾雑物微量/灰白	内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部中位に太い螺旋状凹線が巡り、体部外面中位から腰部は褐色の鉄釉。	腰錆碗
第392図 PL.331	14建 10	瀬戸・美濃 陶器 碗	1/2	口 底	(9.5) (3.7)	高	5.5	夾雑物微量/灰白	口縁端部はわずかに内反し、内面から体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部外面に鉄絵の不明文。体部下位と高台は無釉。	
第392図 PL.−	14建 11	肥前陶器 皿	高台部破片1/2	口 底	− (6.0)	高	−	夾雑物少量/灰	底部内面は蛇の目釉剥ぎ、炭化物が付着。底部内面と底部外面から高台に灰釉、貫入が入る。高台内は無釉	
第392図 PL.331	14建 12	瀬戸・美濃 陶器 皿	1/5	口 底	(25.4) (11.0)	高	5.1	夾雑物微量/灰	口縁部は外側に緩やかに立ち上がり、体部との境は段をなす。口縁部内面と体部境に二重凹線が巡る。底部内面に鉄絵で渦巻き文を描き、灰釉を施す。口縁部から体部に銅緑釉を掛け流す。灰釉は貫入が入る。口縁部外面から体部にも灰釉と銅緑釉を掛け流し、体部から高台は無釉。体部から高台の無釉部や割口などの胎土に炭化物が付着する。	織部鉄絵皿
第392図 PL.−	14建 13	瀬戸・美濃 陶器 片口か	高台部破片1/2	口 底	− (9.2)	高	−	夾雑物微量/灰	底部内面と体部外面下位は灰釉。体部下位から高台は無釉。底部内面に2か所の重ね焼き痕。削り出し高台。	
第392図 PL.331	14建 14	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部	口 底	− 4.7	高	−	夾雑物少量/灰	底部内面は褐色の飴釉。体部外面下位と高台は無釉。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第393図 PL.331	14建 15	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	体部から底部	口 底	− 14.0	高	−	夾雑物少量/褐灰	口縁部は細かく打ち砕かれ欠損。体部外面は回転ヘラケズリ調整。底部は回転糸切後に無調整。内面には11本一単位のクシ目。内外面に錆釉。	
第393図 PL.331	14建 16	在地系土器 内耳鍋	口縁部破片	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。内外面はナデ、外面は熱による表面剥離か。	中世
第393図 PL.331	14建 17	銅製品 煙管	完形	長 幅	3.5 1.5	高 重	1.6 3.1	−	雁首と吸口の破片。雁首のつなぎ目は上に見られる。やや小ぶりか。吸口は口付部分が残り、口付部分で太くなっている。	
第393図 PL.−	14建 18	銭貨 新寛永	ほぼ完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.2 1.6	−	面の彫は深く、文字、輪、郭は明瞭。背はやや劣化が見られる。背の輪、郭はやや右にずれる。	
第393図 PL.331	14建 19	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.6	−	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第393図 PL.331	14建 20	銭貨 古寛永	一部欠損	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 1.1	−	輪が全体的に欠けている部分が多い。面､背の彫は浅く､文字、輪、郭が明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第393図 PL.331	14建 21	銭貨 銭種不明	 完形	外 内	2.5 –	厚 重	0.3 2.9	–	有機物の痕跡が残存する。文字が確認できず、銭種不明がわからない。	
第393図 PL.331	14建 22	銭貨 銭種不明	 一部欠損	外 内	– –	厚 重	2.3 1.8	–	全体が厚く錆に覆われ、内部で劣化も起きているため文字等の詳細は確認できない。	
第393図 PL.331	14建 23	石製品 砥石	 完形	長 幅	14.0 3.2	厚 重	2.9 220.6	砥沢石	表面に砥面が認められる。裏面と左右両側面及び上下小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	

8区10号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第394図 PL.–	36建 1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 1/5	口 底	(7.6) (4.0)	高	3.4	夾雑物微量/灰褐	内面と体部外面下位に灰釉。体部下位と高台は無釉。	
第394図 PL.332	36建 2	肥前磁器 染付碗	 1/2	口 底	11.4 4.5	高	5.4	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文か。体部下位に圏線。高台境に二重圏線。高台内に圏線。内面は無文で、見込みに蛇の目釉剥ぎ。	
第394図 PL.332	36建 3	瀬戸・美濃 陶器 髪盥	 口縁部から底部破片	口 底	– –	高	3.0	夾雑物微量/灰	内外面は灰釉。底部は無釉で炭化物が付着。	御深井製品
第394図 PL.332	36建 4	肥前陶器 二次加工品	 高台部	口 底	– 4.2	高	–	夾雑物微量/灰	高台に圏線。高台端部を除き底部内面と体部外面下位から高台に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	陶胎染付碗
第394図 PL.332	36建 5	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	 高台部	口 底	– 4.3	高	–	夾雑物微量/浅黄	高台端部を除く底部内面と高台に灰釉、貫入が入る。高台端部は無釉。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第394図 PL.332	36建 6	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	 高台部	口 底	– 3.4	高	–	夾雑物微量/灰	底部内面は褐色の飴釉。高台は無釉で炭化物が付着。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	小碗
第394図 PL.332	36建 7	その他 ベッコウ	 1/4 ？	長 幅	4.3 1.5	厚	–	–	櫛？歯の部分は欠損しているものと思われる。	櫛？
第394図 PL.332	36建 8	石製品 砥石	 4/5	長 幅	(8.9) 2.9	厚 重	1.8 46.2	砥沢石	表面が砥面であり上下方向に著しく研ぎ減りする。表面の砥面下方には断面Ｖ字状の幅の広い溝状痕跡が認められる。裏面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められるが部分的に滑らかな面が認められ便宜的な砥面と考えられる。左右両側面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第394図 PL.332	36建 9	石製品 唐臼	 2/3	長 幅	64.0 62.9	高 重	32.0 –	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ40.0cm深さ22.0cmの外に開く凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は中心は使用により抜けている。外面側～底に欠けて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅狭で外面には工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。他のものに比べやや小形で石材もやや柔らかい。	

7区12号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第394図 PL.332	42建 1	肥前磁器 染付小碗	 体部下位から高台1/2	口 底	– 2.5	高	–	夾雑物なし/白	体部外面は草花文。高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部は砂が付着。	
第394図 PL.–	42建 2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 口縁部破片/	口 底	(7.2) –	高	–	夾雑物微量/灰	内面から体部外面下位に灰釉。体部下位は無釉。	
第394図 PL.332	42建 3	肥前磁器 染付碗	 ほぼ完形、口縁部が一部欠損	口 底	10.0 3.7	高	5.2	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文。体部下、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台内に不明銘。高台端部に砂が付着。	
第394図 PL.332	42建 4	肥前磁器 染付碗	 完形	口 底	9.8 3.9	高	5.4	夾雑物なし/灰白	体部外面は唐草文。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文で、底部には焼成時に砂が付着して釉ハゲ。高台内に不明銘。高台端部に砂が付着。	PL.163
第394図 PL.332	42建 5	肥前陶器 陶胎染付碗	 完形	口 底	11.0 4.8	高	7.1	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に四方襷文。体部外面は遠山と家屋に柳と松を描く山水文。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉。高台端部は鉄錆。	PL.163
第394図 PL.332	42建 6	肥前磁器 染付碗	 ほぼ完形	口 底	9.8 4.0	高	5.9	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文。体部下位､高台境と高台に圏線。内面は無文。高台内中央に釉ハゲ。	
第395図 PL.–	42建 7	瀬戸・美濃 陶器 碗	 体部下位から高台部	口 底	– (5.0)	高	–	夾雑物少量/灰	底部内面と体部外面下位は褐色の飴釉、貫入が入る。体部下位から高台は無釉。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第395図 PL.332	42建 8	瀬戸・美濃 陶器 筒碗	体部下位から高台	口 底	－ 4.0	高	－	夾雑物微量/淡黄	底部内面と体部外面下位に銅緑釉。高台端部を除く、体部下位から高台は灰釉。高台端部は無釉。腰から上位を細かく打ち砕いている。	
第395図 PL.332	42建 9	生産地未詳 陶器 碗	4/5	口 底	9.1 3.5	高	5.3	夾雑物微量/灰白	口縁部は直立気味に立ち上がる。腰部外面は外側に突き出している。内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台は無釉。	せんじ碗 PL.163
第395図 PL.－	42建 10	生産地未詳 陶器 皿	口縁部破片	口 底	(20.8) －	高	－	夾雑物少量/黒	内面から体部外面下位まで長石釉を施し、体部外面の釉の一部を拭う。内面中央と体部外面下位は無釉。	
第395図 PL.332	42建 11	瀬戸・美濃 陶器 瓶	4/5	口 底	3.9 8.0	高	20.9	夾雑物微量/灰	口縁部は外側に開き、口縁端部は平坦をなす。口縁部内面から体部外面中位に灰釉。口縁部以外の内面は無釉。体部中位から高台に錆釉を施し、高台境と高台内の一部を拭う。	
第395図 PL.332	42建 12	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	3.75 1.5	高 重	1.9 7.7	－	肩を持ち､つなぎ目は上面。内部に羅宇が残存している。吸口とともに残る。	PL.164
第395図 PL.332	42建 13	銅製品 煙管	完形	長 幅	3.7 1.5	高 重	1.8 6.0	－	肩を持つ雁首。上面につなぎ目があり明瞭。	
第395図 PL.332	42建 14	銅製品 煙管	ほぼ完形	長 幅	(23.2) 1.5	高 重	2.0 10.1	－	周辺を切り出して羅宇痕跡が残存したため推定長となる。雁首、吸口のみを図化した。表面は錆、劣化が多く見られる。つなぎ目は上となる。	
第395図 PL.332	42建 15-1	銅製品 やかんの蓋	完形	長 幅	7.5 12.5	厚 重	2.6 71.3	－	圧力により一部変形している。摘の状態はよく、全体が１本の銅製の棒で留められている。上から内部が空洞の半円形の部品２点で球を作り、その下に薄くて細い鉄板をＣ字状に丸めたものをはめ込み、五枚の花状の台座がつく。	PL.163
第395図 PL.332	42建 15-2	銅製品 やかんのつる	完形	長 幅	12.5 16.7	厚 重	3.25 84.0	－	つると本体への接続金具が１点出土している。つるの両端部はやや捻れているが、本体が圧力により変形しているため、圧力の影響と思われる。つると接続金具は３か所で銅の釘で留められている。	
第395図 PL.332	42建 15-3	銅製品 やかん	ほぼ完形	長 幅	17.7 20.4	厚 重	8.8 352.8	－	大きくひしゃげたやかん。内部に葉が残存しており、茶葉の可能性もある。葉の形状は広がっている。つるを接続する部品が体部に接続している。接続部品には穴が四か所に開いている。	
第395図 PL.332	42建 16	銅製品 匙状銅製品	ほぼ完形	長 幅	4.5 3.75	高 重	3.4 9.8	－	煙管吸口の小口側をつなぎ目から広げ、使用していたか。丁寧に平らに延ばされている。表面に金色の光沢が確認できる。	PL.164
第395図 PL.332	42建 17	鉄製品 鉈	ほぼ完形	長 幅	69.1 12.6	厚 重	1.1 414.4	－	木質の柄、口金が残存する。表面にネコ状の有機質が付着している。片刃で裏すきが見られる。目釘は確認できない。	PL.164
第396図 PL.332	42建 18	鉄製品 火打ち金	ほぼ完形	長 幅	9.0 (1.1)	厚 重	0.4 6.6	－	山形の火打金。山の部分が欠損している。	
第396図 PL.333	42建 19-1	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.5 4.8	－	３枚癒着している。内２枚に鉄銭を含んでいる。銅銭の文字、輪、郭は明瞭。	
第396図 PL.333	42建 19-2	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.6 2.1	厚 重	0.1 2.3	－	背文。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背は縦ヤスリが見られる。	
第396図 PL.333	42建 19-3	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.6	－	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背の輪、郭がわずかに下にずれる。	
第396図 PL.333	42建 19-4	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.8	厚 重	0.2 2.2	－	面の文字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、輪が太くなり特に不明瞭になっている。	
第396図 PL.333	42建 19-5	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 2.8	－	面の文字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅く、輪、郭がやや不明瞭。	
第396図 PL.333	42建 19-6	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 2.0	－	面の文字、輪、郭は明瞭。背は不明瞭で平滑になっている。	
第396図 PL.333	42建 19-7	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 3.0	－	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く、一部鋳溜まりが見られる。	
第396図 PL.333	42建 19-8	銭貨 新寛永	一部欠損	外 内	2.4 1.8	厚 重	0.1 2.0	－	「寶」の字の下の部分と「通」の字が一部欠ける。文字､輪､郭は明瞭。	
第396図 PL.333	42建 19-9	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.1	－	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	
第396図 PL.333	42建 19-10	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 1.9	－	面､背ともに文字､輪､郭は明瞭。背のの彫はやや浅い。	
第396図 PL.333	42建 19-11	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.7	－	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の彫が深い。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第396図 PL.333	42建 20	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	1.7 3.9	–	全体に有機質が付着している。面の文字、輪、郭は明瞭。	
第397図 PL.333	42建 21	石製品 砥石	完形	長 幅	16.9 3.4	厚 重	2.3 194.4	砥沢石	表面が砥面であり上下方向に向かいに研ぎ減りする。裏面と左右両側面及び上下小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	PL.156
第397図 PL.333	42建 22	石製品 石臼(上)	完形	径 幅	31.8 –	高 重	14.2 19350	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。軸受孔は底面の周辺部が溝状に窪んでいる。供給孔は下端近くに段差があり両面穿孔と考えられる。軸受孔及び供給孔の直径約３㎝。	PL.158
第397図 PL.333	42建 23	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	33.0 –	高 重	13.5 19820	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔の直径約４㎝。	PL.158
第397図 PL.333	42建 24	石製品 唐臼	完形	長 幅	61.2 59.1	高 重	42.9 –	粗粒輝石安山岩	隅丸円柱状の中央にφ40.0㎝深さ27.0㎝の内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底はやや下に出っ張る。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅狭で外面には工具痕が明瞭に残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	PL.157

6区11号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第398図 PL.–	38建 1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	1/3	口 底	(6.4) –	高	–	夾雑物少量/灰	内外面に灰釉、貫入が入る。	
第398図 PL.334	38建 2	肥前陶器 陶胎染付碗	3/5	口 底	(11.0) (4.4)	高	–	夾雑物微量/灰	口縁部外面を圏線で区画し、不明文。体部外面に樹木などの山水文を描く。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。	
第398図 PL.334	38建 3	瀬戸・美濃 陶器 碗	1/2	口 底	(8.5) (4.3)	高	–	夾雑物少量/灰白	内面と体部外面下位に柿色の鉄釉。体部外面下位から高台は無釉。	
第398図 PL.–	38建 4	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部下位から高台部	口 底	– (4.3)	高	–	夾雑物微量/暗灰	底部内面と体部外面下位に飴釉。体部外面下位から高台は無釉。	
第398図 PL.–	38建 5	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部下位から高台部	口 底	– 4.2	高	–	夾雑物微量/暗灰	底部内面と体部外面下位に飴釉。底部内面に沈線が巡る。体部外面下位から高台は無釉。	
第398図 PL.334	38建 6	肥前磁器 染付皿	1/2	口 底	13.4 8.1	高	3.1	夾雑物なし/白	小片からなる。体部外面は唐草文。体部下位、高台境と高台に圏線。高台内に圏線、中央に不明銘。口縁端部は鉄錆、口縁部内面から体部に扇と花唐草文。見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。口縁部に細かな叩打痕。	
第398図 PL.–	38建 7	瀬戸・美濃 陶器 片口か	1/6	口 底	(15.5) (6.6)	高	9.9	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に肥厚する。内面と体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部下位と高台は無釉。	
第398図 PL.–	38建 8	瀬戸・美濃 陶器 蓋	破片	口 底	– –	高	2.2	夾雑物少量/暗灰	摘みは上位に太く、端部を削り、上面は平坦を呈する。表面は鉄釉を施し、裏面は無釉。	PL.172
第398図 PL.334	38建 9	銅製品 煙管(雁首)	一部欠損	高 幅	6.5 1.2	高 重	1.6 6.2	–	火皿の体部の一部が欠損している。側面につなぎ目がある。羅宇の一部が残存する。	
第398図 PL.334	38建 10	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	5.0 1.7	高 重	1.7 5.2	–	つなぎ目は上部に見られる。火皿の縁が厚い。羅宇が内部に一部残存している。	
第398図 PL.334	38建 11	鉄製品 蓋	1/4	径 幅	(11.0) (6.5)	厚 重	0.7 –	–	茶釜の蓋と見られる。0.4㎝の縁に引っかける突起が付いている。	
第398図 PL.334	38建 12	鉄製品 鍬・鋤先	完形	長 幅	35.3 11.8	厚 重	3.15 733.4	–	刃先は丸く、表面にむしろ状の有機質が付着している。風呂の木質痕跡が確認できる。	
第398図 PL.334	38建 13-1	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 2.5	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。わずかに背の郭の左側が太い。	
第398図 PL.334	38建 13-2	銭貨 新寛永	一部欠損	外 内	2.2 1.7	厚 重	0.1 1.2	–	一部、郭が欠損する。鋳造時からの欠けと見られる。面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅く、輪は明瞭。郭は確認できない。	
第398図 PL.334	38建 13-3	銭貨 鉄銭	ほぼ完形	外 内	2.9 –	厚 重	2.1 15.3	–	５枚程度の鉄銭が癒着している。全体が錆に覆われており、詳細不明。やや大きめの外形が見られることから、鉄四文銭が含まれる可能性が大きい。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第398図 PL.334	38建 13-4	銭貨 鉄銭	 一部欠損	外 内	3.0 -	厚 重	0.5 5.4	-	鉄銭２枚が癒着している。全体に劣化がひどく、詳細不明。やや大きめの外形が見られることから、鉄四文銭の可能性が大きい。	
第399図 PL.334	38建 13-5	銭貨 新寛永	 一部欠損	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 1.8	-	輪と郭の一部が欠損する。背に有機物が付着しているが、使用時の状態とは関係ないものと思われる。	
第399図 PL.334	38建 13-6	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 2.2	-	鉄銭。全体が錆びており状態はよくない。文字、輪、郭の判別は可能。	
第399図 PL.334	38建 13-7	銭貨 鉄銭	 ほぼ完形	外 内	2.5 -	厚 重	0.3 4.7	-	銭種不明。全体が錆で覆われており、文字、輪、郭は確認できない。	
第399図 PL.334	38建 14-1	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.2 1.9	厚 重	0.1 1.6	-	面は文字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅く不明瞭。	
第399図 PL.334	38建 14-2	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.1	-	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第399図 PL.334	38建 14-3	銭貨 新寛永	 1/2	外 内	- -	厚 重	0.2 0.9	-	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫は浅いが輪、郭が確認できる。	
第399図 PL.334	38建 15	銭貨 鉄銭	 ほぼ完形	外 内	2.9 -	厚 重	2.1 15.3	-	５枚程度の鉄銭が癒着している。全体が錆に覆われており、詳細不明。やや大きめの外形が見られることから、鉄四文銭が含まれる可能性が大きい。	
第399図 PL.334	38建 16	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.8 2.7	厚 重	0.3 4.7	-	２枚が癒着している。１枚は面が確認でき、文字、輪、郭が明瞭。郭の一部が欠損する。もう１枚の背はやや彫が浅いが、輪、郭が明瞭。	
第399図 PL.334	38建 17	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.2 1.68	-	全体が劣化し、もろくなっている。面、背ともに一部錆に覆われているが、文字、輪、郭は確認できる。	
第399図 PL.334	38建 18	銭貨 新寛永	 ほぼ完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 1.6	-	輪が一部欠ける。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第399図 PL.334	38建 19	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.7	厚 重	0.1 2.0	-	背元か。背の文字部分が不明瞭。面の文字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭がやや左にずれる。	
第399図 PL.334	38建 20-1	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 2.4	-	面、背ともに彫が深く文字、輪、郭が明瞭。わずかに背の輪、郭が左上にずれる。	
第399図 PL.334	38建 20-2	銭貨 古寛永	 ほぼ完形	外 内	2.3 2.0	厚 重	0.1 1.7	-	面の彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。背の彫は浅く、輪、郭が不明瞭。	
第399図 PL.335	38建 20-3	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.8	-	面の彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。背はやや彫は浅いが、輪、郭は明瞭。	
第399図 PL.335	38建 20-4	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.8 2.1	厚 重	0.1 3.8	-	四文銭11波。面、背ともに錆が付着しているが、文字、輪、郭が明瞭。	
第399図 PL.335	38建 20-5	銭貨 新寛永	 ほぼ完形	外 内	- 2.0	厚 重	0.1 1.5	-	輪が多く欠損する。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背の彫はやや浅い。	
第399図 PL.335	38建 21	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.6 2.0	厚 重	0.1 2.3	-	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。もう１枚、文字がつぶれており、劣化している銭種不明の銭貨が出土している。	
第399図 PL.335	38建 22	銭貨 鉄銭	 完形	外 内	2.8 2.6	厚 重	0.7 5.4	-	錆に有機質の痕跡が残存する。全体が厚いさびに覆われ、詳細不明。	
第400図 PL.335	38建 23	石製品 砥石	 2/3	長 幅	(8.8) 2.5	厚 重	1.8 59.4	砥沢石	表面と右側面は全体的に非常に滑らかであり砥面と判断される。左側面と下部小口面には櫛歯タガネ痕が認められる。裏面には櫛歯タガネ痕がわずかに残り滑かな部分が広範囲に認められ便宜的な砥面と考えられる。	
第400図 PL.335	38建 24	石製品 石臼(上)	 2/3	径 幅	32.0 -	高 重	15.0 17200	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が認められる。側面には棒状の工具痕がわずかに認められ矩形の挽き手孔が残る。供給孔の一部が認められる。軸受孔の直径約３㎝。	
第400図 PL.335	38建 25	石製品 ひで鉢	 1/4	長 幅	(10.4) (15.7)	厚 重	(9.5) 707.3	粗粒輝石安山岩	多孔質な石材である。全体的に丁寧に整形される。鉢内面の底部は細かい凹凸で構成され滑らかではない。	
第400図 PL.335	38建 26	石製品 石鉢	 1/3	径 幅	24.4 -	厚 重	14.0 3350	粗粒輝石安山岩	鉢内面は全体的に滑らかであり底部は特に滑らかである。底面はほぼ平坦で全体的に滑らかである。側面部には棒状あるいは平ノミ状の工具痕がわずかに認められる。	
第400図 PL.335	38建 27	石製品 碁石(白)	 完形	長 幅	2.2 2.3	厚 重	0.4 3.2	珪質粘板岩	表裏は非常に滑らかであり細かい線条痕がわずかに認められる。	
第400図 PL.335	38建 28	石製品 唐臼	 完形	長 幅	60.0 59.0	高 重	49.0 -	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ38.0㎝深さ27.5㎝の内彎する凹み、最大径は上端に位置する。内面の底はやや滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は内傾せず幅狭平坦で線状の工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	PL.169

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第401図 PL.335	47建 29	石製品 石臼(上)	ほぼ完形	径 幅	30.2 −	高 重	13.2 16600	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が明瞭に認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。供給孔は上面では矩形であるが底面のすり合わせ面では円形である。軸受孔の直径約３cm。	
第401図 PL.335	47建 30	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	33.0 −	高 重	10.0 16450	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面と底面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔の直径約４cm。	
第401図 PL.335	48建 31	石製品 砥石	1/3	長 幅	(6.5) 2.7	厚 重	2.2 63.1	砥沢石	表面と左側面に砥面が認めらる。表面の砥面は上下方向に向かい研ぎ減りし左側面の砥面はほぼ平坦である。右側面と裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第401図 PL.335	48建 32	石製品 石臼(上)	1/4	長 幅	(21.8) (21.7)	高 重	(13.3) 6350	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が残る。側面には矩形の挽き手孔の一部が認められる。底面に軸受孔の一部が認められ直径約３cm。	

６区14号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第401図 PL.336	41建 1	肥前磁器 染付碗	口縁部が一部欠損、ほぼ完形	口 底	9.9 4.4	高	5.4	夾雑物なし/白	小片からなる。体部外面に雪輪梅樹文。体部下位に圏線、高台に二重圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	
第401図 PL.336	41建 2	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.6 3.8	高	5.0	夾雑物なし/白	小片からなる。体部外面にコンニャク印判の蔦の葉文とこぼれ松葉文。体部下位に圏線、高台に二重圏線。内面は無文。高台端部を除く内外面に透明釉、貫入が入る。	
第401図 PL.336	41建 3	肥前磁器 染付皿	口縁部から底部破片	口 底	(13.5) (5.6)	高	2.7	夾雑物なし/白	口縁部は緩やかに斜め上に立ち上がる。底部との境界は段になる。内面中央に花唐草文か。	№3～№5は同種の皿か
第401図 PL.336	41建 4	肥前磁器 染付皿	口縁部から底部1/3	口 底	(13.7) (6.1)	高	2.4	夾雑物なし/白	口縁部は緩やかに斜め上に立ち上がる。底部との境界は段になる。口縁部下内面に二重沈線、見込みに沈線が巡る。中央に花唐草文か。高台端部は砂が付着する。	№3～№5は同種の皿か
第401図 PL.336	41建 5	肥前磁器 染付皿	底部から高台部破片	口 底	− (5.6)	高	−	夾雑物なし/白	内面中央に花唐草文か。高台端部は砂が付着。	№3～№5は同種の皿か
第401図 PL.−	41建 6	肥前磁器 皿	口縁部破片	口 底	(12.5) −	高	−	夾雑物なし/白	口縁部は緩やかに外側に傾き、底部との境界は段になる。口縁部下内面に沈線が巡る。見込みに二重沈線。	
第401図 PL.336	41建 7	志戸呂陶器 灯明皿	1/2	口 底	10.1 5.0	高	2.2	夾雑物少量/黒	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と体部外面上位まで錆釉。体部外面下位から底部は無釉。口縁部に煤が付着。	
第401図 PL.−	41建 8	陶器 ひょうそく	口縁部破片	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/灰	内面と体部外面は鉄釉。体部下位は無釉。	
第401図 PL.336	41建 9	陶器 ひょうそく	脚台部	口 底	(5.2) −	高	−	夾雑物少量/灰	中央の孔の周りに鉄釉。脚部は無釉。底部は回転糸切後に無調整。底部中央に円孔あり。	
第401図 PL.336	41建 10	瀬戸・美濃 陶器 水注	取っ手、注ぎ口、口縁部が欠損	口 底	− 7.8	高	−	夾雑物少量/浅黄	体部上位にクシ目が入る。取っ手と注ぎ口は欠損。内外面に褐色の飴釉、取っ手と注ぎ口周囲は銅緑釉を流し掛ける。体部外面下位と高台は無釉。	
第401図 PL.336	41建 11	肥前磁器 二次加工品	高台部	口 底	− 4.2	高	−	夾雑物なし/白	高台境と高台に圏線。高台内に圏線、中央にかなり崩れた「大明年製」銘。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	染付碗
第401図 PL.−	41建 12	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	(27.0) −	高	−	夾雑物少量/褐灰	口縁部は外側に肥厚する。内面に17本一単位のクシ目。内外面に錆釉。	
第402図 PL.336	41建 13	銅製品 煙管	4/5	長 幅	(22.7) 1.5	厚 重	0.9 16.5	−	羅宇がほぼ完形で残存している。雁首はつなぎ目が上部に見られ、火皿には土砂が残存している。	
第402図 PL.336	41建 14	銅製品 煙管(雁首)	一部欠損	長 幅	7.1 1.5	高 重	1.6 5.7	−	肩を持つ雁首。首部分が短い。側面につなぎ目がある。表面に魚子での文様が見られるが、劣化によりはっきりとしない。羅宇が一部残存している。	
第402図 PL.336	41建 15	鉄製品 蓋	ほぼ完形	径 −	16.5 −	厚 重	2.2 184.4	−	茶釜の蓋。摘部分は欠損している。内側の突起の高さは0.5cm。	
第402図 PL.336	41建 16	鉄製品 鉄釜	30%	底 口	39.4 66.6	高 重	34.0 3820	−	底部、体部、口縁の一部が残存している。体部の一部に鋳掛けの可能性のある金属の盛り上がりが確認できる。底部は湯口の痕跡が良好。	PL.173
第402図 PL.000	41建 17	鉄製品 包丁	1/3	長 幅	(13.0) 4.5	厚 重	3.2 78.8	−	木製の柄の一部が残存している。柄は包丁の棟部分にかかるように作られている。刃は錆で覆われており、欠損が多い。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第403図 PL.336	41建 18	鉄製品 鉈	 一部欠損	長 幅	29.7 6.6	厚 重	0.8 379	－	片刃の鼻付きの鉈、裏すきが明瞭。一部口金から柄の木質、目釘が残存する。刃の表面に有機質が付着しており、保管状況の影響が考えられる。	
第403図 PL.336	41建 19	鉄製品 轡	 完形	長 幅	22.0 5.5	厚 重	－ 150.3	－	円環４点、ハミ身３点が確認できる。環、ハミ身、環、ハミ身２点、環の順で接続されている。環の一つはハミ身が２点接続されている所に通されており、使用状況がわからない。	
第403図 PL.336	41建 20	銭貨 新寛永	 1/2	外 内	－ －	厚 重	0.2 1.3	－	面の文字、輪、郭は明瞭。背は錆が多く輪、郭が見えづらい。	
第403図 PL.336	41建 21	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.2 2.0	－	面は文字、輪、郭が明瞭。背は錆が多く、不明瞭。中心の穴が一辺が0.823cmと他と比較して大きい。	
第403図 PL.336	41建 22	石製品 砥石	 2/3	長 幅	(8.9) (5.0)	厚 重	(1.2) 77.4	珪質粘板岩	表裏面に砥面が認められる。表面は研ぎ減りにより中央付近がわずかに窪み全体的に細かい線条痕が認められ裏面より滑らかであり主要な砥面と考えられる。側面部は表裏面に平行する方向の小さな段差が累積しており製作時の切断痕と考えられる。	
第403図 PL.336	41建 23	石製品 石臼(上)	 ほぼ完形	径 幅	32.4 －	高 重	13.3 14750	粗粒輝石安山岩	著しく片減りする。底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。供給孔は下端近くに段差があり両面穿孔と考えられる。軸受孔及び供給孔の直径約４cm。	PL.177
第404図 PL.336	41建 24	石製品 唐臼	 完形	長 幅	76.5 71.5	高 重	49.0 －	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ40.0cm深さ30.0cmの内彎する凹み、最大径は上端よりも下に位置する。内面の底はやや尖りぎみであるが滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は内傾する幅広平坦で線状の工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	PL.175

６区13号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第404図 PL.337	39建 1	肥前磁器 染付小碗	 完形	口 底	7.1 2.2	高	3.7	夾雑物なし/白	体部外面に笹文と雁か。内面は無文。口縁部内面に油膜状の汚れが付着。	紅猪口か
第404図 PL.337	39建 2	肥前磁器 染付小碗	 1/3	口 底	(7.5) 2.6	高	3.9	夾雑物なし/白	体部外面に小松原文。低い高台。	
第404図 PL.337	39建 3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 完形	口 底	6.6 3.3	高	4.1	夾雑物微量/淡黄	内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台部は無釉。口縁部外面に呉須が付着。	No.3～No.7は揃い
第404図 PL.337	39建 4	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 完形	口 底	6.5 3.4	高	4.1	夾雑物微量/淡黄	小片からなる。内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台部は無釉。	No.3～No.7は揃い
第404図 PL.337	39建 5	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 4/5	口 底	6.3 2.8	高	4.1	夾雑物微量/淡黄	小片からなる。内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台部は無釉。	No.3～No.7は揃い
第404図 PL.337	39建 6	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 ほぼ完形	口 底	6.3 3.2	高	4.1	夾雑物微量/淡黄	小片からなる。内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台部は無釉。口縁部外面に呉須が指頭状に付着。	No.3～No.7は揃い
第404図 PL.337	39建 7	瀬戸・美濃 陶器 小碗	 4/6	口 底	6.6 3.3	高	4.3	夾雑物微量/淡黄	内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。体部下位から高台部は無釉。体部外面中位に青黒色の釉だれ。	No.3～No.7は揃い
第404図 PL.-	39建 8	陶器 小碗か	 口縁部破片1/5	口 底	(7.3) －	高	－	夾雑物微量/灰	内面から体部外面下位に灰釉。体部下位は無釉。	
第404図 PL.337	39建 9	肥前磁器 染付碗	 完形	口 底	9.7 4.0	高	5.4	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。雪輪内に扇形。体部下位に圏線。高台に二重圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	
第404図 PL.337	39建 10	肥前磁器 染付碗	 1/4	口 底	(10.1) (3.8)	高	4.8	夾雑物なし/白	体部外面に花を描き、隙間を大小の丸文が埋める。内面は無文。	
第404図 PL.337	39建 11	肥前陶器 陶胎染付碗	 底部破片1/2	口 底	－ (5.0)	高	－	夾雑物微量/灰	体部外面に樹木からなる山水文か。体部の下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄錆。体部の下位に焼成時の縮みによる釉はげ。	
第404図 PL.337	39建 12	肥前陶器 陶胎染付碗	 口縁部破片1/3	口 底	(8.6) －	高	－	夾雑物微量/灰	口縁端部直下外面に圏線。体部外面に梅樹か、不明文。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。	
第404図 PL.337	39建 13	瀬戸・美濃 陶器 碗	 4/5	口 底	12.7 6.1	高	8.6	夾雑物微量/淡黄	小片からなる。内面から高台境外面まで灰釉、貫入が入る。高台部は無釉。高台の一部に焼成時の窯キズ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第404図 PL.337	39建 14	瀬戸・美濃 陶器 碗	3/4	口 底	(10.4) 4.7	高	6.9	夾雑物微量/淡黄	内面から体部外面下位は飴釉。体部下位と高台は無釉。口縁部は藁灰釉を漬け掛け。	尾呂碗
第404図 PL.337	39建 15	肥前磁器 青磁染付筒 碗	2/3	口 底	7.5 3.8	高	5.5	夾雑物なし/白	高台端部を除いた体部外面に青磁釉。低い高台端部に粘土小塊が付着。口縁部下内面は四方襷文。見込みに二重圏線、中央に五弁花。	
第404図 PL.337	39建 16	肥前磁器 染付筒碗	完形	口 底	(7.5) (4.0)	高	6.2	夾雑物なし/白	体部外面に柳と如意頭様の花文。体部の腰から高台までにこぼれ松葉文。低い高台に二重圏線。口縁部下内面は四方襷文。見込みに圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	
第404図 PL.337	39建 17	瀬戸・美濃 陶器 碗か	口縁部から体部の破片	口 底	(11.7) −	高	−	夾雑物微量/灰白	口縁部は直立気味に立ち上がり、体部外面に緑の色絵具で半菊文を描く。内外面に灰釉。底部外面は無釉か。	せんじ碗か
第404図 PL.337	39建 18	瀬戸･美濃 陶器 碗	底部から高台部	口 底	− 4.3	器	−	夾雑物微量/淡黄	底部内面は灰釉、貫入が入る。外面は高台端部を除いて褐色の鉄釉。	
第405図 PL.337	39建 19	肥前陶器 皿	1/3	口 底	(20.6) 6.3	高	6.4	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜めに立ち上がる。内面に灰釉と銅緑釉を掛け分ける。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。口縁部外面から体部下位は灰釉。体部下位から高台は無釉。	
第405図 PL.337	39建 20	肥前陶器 皿	ほぼ完形	口 底	16.8 5.7	高	5.6	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜め内側に立ち上がる。内面は褐色の飴釉と灰釉を掛け分ける。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。口縁部外面から体部下位は灰釉。体部下位から高台は無釉。	
第405図 PL.337	39建 21	肥前陶器 皿	3/4	口 底	12.6 4.5	高	4.1	夾雑物微量/灰白	口縁部内面から底部に銅緑釉を施し、貫入が入る。見込みは蛇の目釉剥ぎ。外面は無釉。体部内面中位に焼成時の釉むら。	
第405図 PL.337	39建 22	肥前陶器 皿	4/5	口 底	16.8 4.4	高	3.6	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜めに立ち上がる。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位から高台は無釉。	№22～№25は揃い
第405図 PL.337	39建 23	肥前陶器 皿	4/5	口 底	11.8 4.2	高	3.5	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜めに立ち上がる。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位から高台は無釉。	№22～№25は揃い
第405図 PL.338	39建 24	肥前陶器 皿	ほぼ完形	口 底	11.6 4.5	高	3.5	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜めに立ち上がる。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位から高台は無釉。	№22～№25は揃い
第405図 PL.338	39建 25	肥前陶器 皿	完形	口 底	11.6 4.1	高	3.5	夾雑物微量/灰白	口縁部は外側に斜めに立ち上がる。内面から体部外面下位に灰釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位から高台は無釉。	№22～№25は揃い
第405図 PL.338	39建 26	肥前磁器 染付皿	底部破片	口 底	− 5.6	高	−	夾雑物なし/白	内底部内面に花唐草文か。高台端部は砂が付着。	
第405図 PL.338	39建 27	瀬戸・美濃 陶器 皿	4/5	口 底	12.7 6.7	高	3.2	夾雑物微量/灰白	内面から底部外面と高台内の一部に灰釉。高台端部は釉を拭う。底部と高台内の一部は無釉。内面中央に輪状の重ね焼き痕。	
第405図 PL.−	39建 28	瀬戸・美濃 陶器 皿	底部破片1/2	口 底	− (6.0)	高	−	夾雑物微量/灰	底部内面は飴釉。見込みは蛇の目釉剥ぎ。底部外面は藁灰釉。底部から高台は無釉。削り出し高台。	
第405図 PL.−	39建 29	陶器 輪花皿	口縁部破片	口 底	(13.3) −	高	−	夾雑物少量/灰	口縁部はヘラで凹凸に整形。内面から口縁部外面に灰釉。体部外面は無釉。	
第405図 PL.338	39建 30	肥前磁器 染付猪口	ほぼ完形	口 底	7.4 4.5	高	5.4	夾雑物なし/白	小片からなる。体部外面に竹と若草文。体部と高台の境に二重圏線。高台内に「福」銘。内面は無文。	
第405図 PL.338	39建 31	瀬戸・美濃 陶器 香炉	完形	口 底	11.4 8.0	高	6.3	夾雑物なし/灰白	口縁部は平坦でゆるく内側に傾く。口縁部下外面と腰部に沈線が巡る。体部外面は丸ノミ削ぎで半菊文を施す。口縁部外面から腰部は褐色の飴釉。内面と底部外面は無釉で、脚が３か所残存。	
第405図 PL.338	39建 32	在地系土器 灯明皿	完形	口 底	9.5 7.4	高	2.8	黒色片含む/褐	内外面はナデ調整。口縁部の２か所に炭化物が付着。	PL.184
第406図 PL.338	39建 33	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	脚台部	口 底	− (4.3)	高	−	夾雑物微量/灰	脚台部はロクロ成形で広く開く。脚部外面上位に灰釉、貫入が入る。脚台部の高台は無釉。	
第406図 PL.338	39建 34	肥前磁器 染付瓶	ほぼ完形、口縁部が一部欠損	口 底	3.7 5.0	高	15.3	夾雑物微量/灰	口縁部は外側に開く。体部外面上位に二重圏線。体部中位に菊花草文。体部下位に二重圏線。口縁部内面から高台端部を除く外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は無釉で、砂が付着。	
第406図 PL.338	39建 35	瀬戸・美濃 陶器 片口	口縁部から体部 2/3	口 底	(17.4) −	高	−	夾雑物微量/灰	口縁部は平坦でやや肥厚する。体部外面上位に３条の沈線が巡る。内外面に鉄釉、体部外面下位は無釉。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第406図 PL.338	39建 36	瀬戸・美濃 陶器 不明	脚部破片	口 底	－ 2.7	高	－	夾雑物微量/灰	円形の脚部片で一部分が破損。外面は灰釉、底部と内面は無釉。	
第406図 PL.338	39建 37	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部	口 底	－ 4.8	高	－	夾雑物微量/灰	高台端部を除き底部内面と高台は灰釉、貫入が入る。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第406図 PL.338	39建 38	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部	口 底	－ 4.9	高	－	夾雑物微量/灰	底部内面は飴釉。高台は鉄釉を施し、釉を拭う。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第406図 PL.338	39建 39	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	高台部	口 底	－ 4.8	高	－	夾雑物微量/灰	底部内面は飴釉。高台は鉄釉を薄く施し、釉を拭う。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	碗
第406図 PL.338	39建 40	瀬戸陶器 すり鉢	1/3	口 底	(34.6) (13.8)	高	15.7	夾雑物少量/淡黄	口縁部は外側に屈曲し、肥厚する。内面に15本一単位のクシ目。内外面に錆釉。底部内面は摩耗による摺り減り。体部外面は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り離し後無調整。	
第406図 PL.338	39建 41	産地未詳陶器 人形	完形	口 底	－ 1.9	高	5.2	夾雑物微量/灰白	前後の型を合わせて成形し接合部はヘラで削る。編笠をかぶり、袈裟を掛け男帯を前に締め、尺八を吹く虚無僧立像。全体に黄色釉を施し、頭部と前帯に銅緑釉を掛ける。	
第406図 PL.338	39建 42-1	銅製品 煙管	完形	長 幅	6.8 1.05	高 重	1.05 6.5	－	金属の筒に吸口がはめ込まれている。金属筒は一部欠損しているか。つなぎ目はわずかに確認できる。	
第406図 PL.338	39建 42-2	銅製品 煙管	完形	長 幅	5.9 1.1	高 重	1.1 7.6	－	小口部分から内部に別な金属が約1/3入り込んでいる。内部の金属はねじが切ってあるようにも見えるが、錆により不明瞭。つなぎ目は不明瞭。	
第406図 PL.338	39建 43	鉄製品 鍋か	1/7	長 幅	(5.0) (6.2)	厚 重	0.2 29.1	－	口縁部から体部の一部のみが残る。やや小ぶりの鍋になるか。	
第406図 PL.338	39建 44	鉄製品 鍋	一部	長 幅	11.3 15.0	厚 重	3.7 250.4	－	口縁からわずかに底部が残存する。やや小さめの鍋になるか。	
第406図 PL.338	39建 45	鉄製品 鉄鍋	一部残存	縦 横	(6.6) (8.5)	厚 重	0.45 45.5	－	耳とから体部の一部が残存する。口縁部が広い段を持ち、わずかに外に出る。耳の形状は下部で内側に凹み上部は平らである。孔は３か所に開けられている。	
第406図 PL.338	39建 46	鉄製品 鉄鍋	一部残存	長 幅	(9.6) (10.0)	厚 重	0.2 59.4	－	底部から体部にかけて残存する。やや小ぶりの鍋の破片とみられる。横方向の成形痕が見られる。	
第406図 PL.338	39建 47	鉄製品 包丁	1/2	長 幅	(17.1) (5.8)	厚 重	1.4 147.8	－	柄の木質が残存する。刃の残りも悪いが、非常に薄いため包丁とみられる。	
第407図 PL.338	39建 48	鉄製品 火箸	2/3	長 幅	30.0 2.0	厚 重	0.9 102.9	－	２本が癒着している。一部有機質痕が残存している。断面は四角形と円形の２種類があるか。	
第407図 PL.339	39建 49	鉄製品 刀	ほぼ完形	長 幅	48.5 4.0	厚 重	3.0 524.6	－	全体が劣化している。鞘に収まっていたと見られ、刀身に沿って柾目方向の木質が残存している。鍔も劣化し剥離し２枚になっている。流水に菊の文様がわずかに残る。柄の皮、木質が確認できるが、柄の途中から欠損している。	
第407図 PL.338	39建 50	鉄製品 鎌	一部欠損	長 幅	24.5 15	厚 重	2.4 113.1	－	柄と口金、目釘の破片が残存する。茎の端部は「し」の字状に曲げられ、目釘で固定する。全体がさび付き、刃の状態は確認できない。	
第407図 PL.339	39建 51-1	鉄製品 鎌	2/3	長 幅	(14.2) (3.5)	厚 重	0.5 55.2	－	劣化が多く見られる。口金や木製の柄、目釘が残存している。刃の残存状態が良くない。	
第407図 PL.339	39建 51-2	鉄製品 鎌	1/3	長 幅	(14.0) 4.0	厚 重	0.5 44.1	－	二つ折りの状態に曲がっている。刃が欠けており、茎も目釘を打つ部分が欠損している。全体に錆や劣化が見られる。	
第407図 PL.339	39建 52-1	鉄製品 鎌の柄	一部	長 幅	10.0 7.4	厚 重	1.9 68.9	－	柄にあたる部分が残存しているが、全体がさび付いているため、詳細不明。	
第407図 PL.339	39建 52-2	鉄製品 鎌	1/3	長 幅	14.5 12.6	厚 重	0.7 76.4	－	刃や柄の一部が欠損する鎌。劣化が激しく、形状が確認しづらい。出土時には多くが破損していると考えられる。	
第407図 PL.339	39建 52-3	鉄製品 鎌	一部	長 幅	8.7 8.7	厚 重	1.3 53.4	－	鎌の刃部分と長方形の金属片が癒着している。刃の残存がなく、確認が難しい。付着の金属片は柄の一部か。	
第407図 PL.339	39建 52-4	鉄製品 鎌の柄か	一部	長 幅	7.6 4.0	厚 重	1.0 23.4	－	柄の部分の一部が欠損する。錆が多く、全体が劣化している。	
第407図 PL.339	39建 52-5	鉄製品 斧	2/3	長 幅	16.8 6.8	厚 重	1.8 639.0	－	全体に劣化が見られる。柄の装着部分が欠けている。劣化により刃や側面の様子は見られない。	
第407図 PL.339	39建 52-6	鉄製品 とび口	一部	長 幅	12.1 8.6	厚 重	(3.2) 248.8	－	柄の木製品の一部が残存している。先端に向けて尖っていく。柄の装着部分が割れているか。	
第407図 PL.339	39建 52-7	鉄製品 鉋の刃か	完形	長 幅	8.8 5.6	厚 重	1.2 169.1	－	板状の鉄製品。端部が斜めになり刃が付けられているように見える。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第407図 PL.339	39建 52-8	鉄製品 くさびか	 完形	長 幅	5.8 4.3	厚 重	1.3 92.4	–	三角柱状の鉄製品。全体が劣化し、加工や使用痕などは確認できない。	
第407図 PL.339	39建 52-9	鉄製品 くさびか	 完形	長 幅	5.9 4.6	厚 重	2.1 179.5	–	全体が劣化している台形状の金属の塊。詳細不明。	
第408図 PL.339	39建 53	鉄製品 斧	 ほぼ完形	長 幅	15.9 3.7	厚 重	6.3 772.4	–	木質の柄、くさびが錆を巻き込みながら残存している。斧の背部分が割れているが、制作時のつなぎ目の部分から割れていると考えられる。表面にはわずかにむしろ状の有機質が残り、保管状況を示す可能性がある。	
第408図 PL.339	39建 54	鉄製品 斧	 完形	長 幅	19.1 7.5	厚 重	4.1 1081.3	–	柄とくさびがさび付いて木質が残存している。一面は刃の様子が確認できるが、もう一面は不明瞭。錆が多く付着している。	
第408図 PL.339	39建 55	鉄製品 鍬	 ほぼ完形	長 幅	33.7 13.1	厚 重	2.7 735.7	–	木質の風呂の破片が残存する。片面の刃先と風呂の接続部分は後付けで接続されている。風呂から刃先までが11.0cm。	PL.183
第408図 PL.339	39建 56	鉄製品 鍬	 完形	長 幅	36.6 13.2	厚 重	2.5 853.8	–	木質の風呂の破片が残存する。刃と風呂との接続部分は別作りで後付けで接続している。風呂から刃先まで13.3cm。	PL.183
第408図 PL.339	39建 57-1	銭貨 銭種不明	 完形	外 内	2.9 3.0	厚 重	1.5 17.0	–	５枚が癒着している。紐の痕跡が残存し、一部鉄銭が混じる。そのため、面が見えないが１枚は鉄銭の寛永通寶と思われる。	
第408図 PL.339	39建 57-2	銭貨 銭種不明	 完形	外 内	2.9 2.8	厚 重	2.5 22.4	–	８枚前後が癒着している。一部に有機質痕跡があるが、使用時との関係は不明。紐痕跡も見られる。鉄銭が含まれる。	
第408図 PL.339	39建 58	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.6 2.1	厚 重	0.2 2.9	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は錆による劣化と有機物痕で不明瞭。	
第408図 PL.339	39建 59	銭貨 雁首銭	 ほぼ完形	外 内	2.3 –	厚 重	0.3 3.3	–	有機質が付着する雁首銭。火皿の底で頸接続部分が周辺より凹んでいる。	
第409図 PL.339	39建 60-1	銭貨 熙寧元寶	 完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	4.6 8.4	–	３枚が癒着している。２枚について面が見えるが、１枚は文字が潰れて銭種不明(下の文字が「元」か)。もう１枚は篆書体で彫は深く、文字は潰れているが輪、郭は明瞭。有機質が多く付着する。	
第409図 PL.339	39建 60-2	銭貨 銭種不明	 3/4	外 内	2.3 –	厚 重	0.2 1.4	–	有機質が付着し、文字が確認できない。輪、郭も劣化が多く不明瞭。	
第409図 PL.339	39建 61	石製品 砥石	 完形	長 幅	8.0 8.3	厚 重	4.0 351.8	粗粒輝石安山岩	表裏面は全体的に滑らかであり断面Ｕ～Ｖ字形の比較的幅の広い線条痕が多数認められる。側面部には小さな凹凸が多数認められ敲打により整形されたと考えられる。	
第409図 PL.340	39建 62	石製品 砥石	 ほぼ完形	長 幅	(15.4) (3.1)	厚 重	2.4 163.6	砥沢石	表面に砥面が認められ上方向に向かい研ぎ減りする。裏面と左右両側面及び下部小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第409図 PL.340	39建 63	石製品 砥石	 完形	長 幅	15.0 5.3	厚 重	2.9 376.3	デイサイト	表面は全体的に滑らかであり砥面と判断される。表裏面と左右両側面は自然面あるいは節理面と判断され角礫を利用する。柱状節理の露頭から石材を採取している可能性がある。荒砥。	
第409図 PL.340	39建 64	石製品 砥石	 4/5	長 幅	(11.9) 5.0	厚 重	1.0 78.5	珪質粘板岩	表面に砥面が認められ線条痕が多数認められる。裏面は滑らかな部分が広範囲に認められ便宜的な砥面と考えられる。側面部には斜め方向の線条痕が多数認められ製作時の切断痕の可能性がある。	
第409図 PL.340	39建 65	石製品 砥石	 不明	長 幅	(11.2) 5.1	厚 重	3.4 318.9	デイサイト	表裏面は全体的に滑らかであり砥面と考えられる。表面の上方には比較的幅の広い底面が平坦な溝状痕跡が多数認められる。左右両側面は打割面で構成される。表面にはかすかに墨書が認められるが判読不能である。裏面には文字線刻があり「本参界有」と判読できる。荒砥。	
第409図 PL.340	39建 66	石製品 火打石	 完形	長 幅	2.4 2.3	厚 重	1.3 6.4	流紋岩	縁辺部に微細剥離痕とつぶれ痕が集中する。全体的に剥離面で構成されており剥片を素材とすると考えられる。	
第409図 PL.340	39建 67	石製品 不明	 完形	長 幅	6.7 6.3	厚 重	2.8 74.7	粗粒輝石安山岩	表面の中央に漏斗状の孔が認められ内面は全体的に滑らかである。外面は全体的に滑らかな曲面で構成され整った形態であることから整形されている可能性が高い。	
第409図 PL.340	39建 68	石製品 石臼(下)	 完形	径 幅	33.6 –	高 重	12.5 23000	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。側面と底面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔の直径約４cm。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第410図 PL.340	39建 69	石製品 石臼(上)	完形	径 幅	32.6 –	高 重	14.0 21500	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が認められる。配給の溝状痕跡の内部には細かい線条痕が多数認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。上面と側面には棒状の工具痕が明瞭に残る。軸受孔及び供給孔の直径約4㎝。	
第410図 PL.340	39建 70	石製品 石臼(上)	ほぼ完形	径 幅	34.2 –	高 重	14.7 23860	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。軸受孔及び供給孔の直径約4㎝。	
第410図 PL.340	39建 71	石製品 唐臼	完形	長 幅	66.0 64.5	高 重	48.0 –	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ39.0cm深さ26.5cmの内彎する凹み、最大径は上端よりも下に位置する。内面の底はやや下に出っ張るが滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は内傾し幅広平坦で線状の工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	

6区15号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第410図 PL.341	27建 1	肥前磁器 染付小碗	ほぼ完形	口 底	7.3 2.9	高	3.5	夾雑物なし/灰白	５点の破片からなる。体部外面に笹と草を描く。内面下半部に油脂状の汚れが付着。	紅猪口か
第410図 PL.341	27建 2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	1/2	口 底	7.4 4.1	高	4.0	夾雑物微量/灰白	内面と体部外面下位に黄褐色の飴釉、体部外面下位から高台は無釉。	
第410図 PL.341	27建 3	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.4 3.9	高	5.4	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部外面下位に圏線、高台内に二重圏線。内面は無文。	
第410図 PL.341	27建 4	肥前磁器 染付碗	完形	口 底	9.4 3.7	高	4.8	夾雑物なし/白	体部外面にコンニャク印判の蔦の葉文と井桁と蔦の葉文。体部外面下位に圏線、高台内に二重圏線。高台にかなり崩れた「福」字の様な不明銘。内面は無文。	
第410図 PL.341	27建 5	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.5 3.5	高	5.1	夾雑物なし/白	体部外面に雪輪梅樹文。体部外面下位に圏線、高台内に二重圏線。高台内に「μ」の様な不明銘。内面は無文。	
第410図 PL.341	27建 6	肥前磁器 染付碗	口縁部破損4/5	口 底	9.0 3.7	高	5.0	夾雑物なし/白	体部外面に二重網目文。体部外面下位と高台境、高台内に圏線。体部内面は乱雑な網目文。底部中央にコンニャク印判の丸に菊花文。	
第410図 PL.341	27建 7	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部が破損	口 底	10.6 4.5	高	6.8	夾雑物微量/褐灰	口縁端部直下の外面にかなり崩れた四方襷文。体部外面に遠山と家屋や樹木を描く山水文。体部外面下位と高台境､高台内に圏線。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	
第410図 PL.341	27建 8	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.4 4.0	高	5.2	夾雑物なし/白	体部外面にコンニャク印判の蔦の葉とこぼれ松葉文。体部外面下位と高台境、高台内に圏線。内面は無文。	
第410図 PL.341	27建 9	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	11.4 4.8	高	7.9	夾雑物微量/灰白	29点の小片からなる。内面から体部外面下位に灰釉、体部下位から高台は無釉。	№9～№11は揃い
第410図 PL.341	27建 10	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	11.2 5.7	高	7.6	夾雑物微量/灰白	23点の小片からなる。内面から体部外面下位に灰釉、体部下位から高台は無釉。	№9～№11は揃い
第410図 PL.341	27建 11	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	11.2 4.6	高	7.6	夾雑物微量/灰白	26点の小片からなる。内面から体部外面下位に灰釉、体部下位から高台は無釉。	№9～№11は揃い
第411図 PL.341	27建 12	肥前磁器 染付皿	完形	口 底	19.8 6.2	高	6.1	夾雑物なし/白	体部内面に矢羽根文と不明文。見込みに二重圏線。底部中央は蛇の目釉剥ぎ。高台端部を除き内外面に透明釉。高台内に焼成時の縮みによるひび。	PL.227
第411図 PL.341	27建 13	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 底	12.2 5.4	高	3.3	夾雑物微量/灰白	36点の小片からなる。高台端部を除き内外面に灰釉、貫入が入る。底部内面に呉須で型紙摺りの草花文。	御深井製品 №13～№15は揃い。
第411図 PL.341	27建 14	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 底	11.6 5.4	高	3.7	夾雑物微量/灰白	29点の小片からなる。高台端部を除き内外面に灰釉、貫入が入る。底部内面に呉須で型紙摺りの草花文。	御深井製品 №13～№15は揃い。
第411図 PL.341	27建 15	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 底	11.9 5.3	高	3.6	夾雑物微量/灰白	21点の小片からなる。高台端部を除き内外面に灰釉、貫入が入る。底部内面に呉須で型紙摺りの草花文。	御深井製品 №13～№15は揃い。
第411図 PL.341	27建 16	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口 底	16.7 6.8	高	4.7	夾雑物微量/灰白	43点の小片からなる。口縁部は水平に開く。内面から体部外面下位に灰釉、貫入が入る。内面底部は歪んだ蛇の目釉剥ぎ。体部外面下位から高台は無釉。	PL.227

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第411図 PL.341	27建 17	瀬戸・美濃 陶器 型打皿	ほぼ完形	口 底	14.8 6.4	高	4.3	夾雑物微量/灰白	18点の小片からなる。内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部外面中位から高台は無釉。	御深井製品 №17～№20 は揃い。
第411図 PL.341	27建 18	瀬戸・美濃 陶器 型打皿	ほぼ完形	口 底	15.3 6.2	高	4.2	夾雑物微量/灰白	23点の小片からなる。内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部外面中位から高台は無釉。口縁の一部は漆継ぎで補修。	御深井製品 №17～№20 は揃い。
第411図 PL.341	27建 19	瀬戸・美濃 陶器 型打皿	2/3	口 底	－ 5.6	高	4.1	夾雑物少量/灰	内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部外面中位から高台は無釉。	御深井製品 №17～№20 は揃い。
第411図 PL.341	27建 20	瀬戸・美濃 陶器 型打皿	ほぼ完形	口 底	14.6 6.3	高	3.8	夾雑物微量/灰白	32点の小片からなる。内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部外面中位から高台は無釉。	御深井製品 №17～№20 は揃い。
第411図 PL.342	27建 21	瀬戸・美濃 陶器 髪盥	4/5	口 底	(18.1) (18.0)	高	3.6	夾雑物微量/灰白	26点の小片からなる。底部の粘土板に粘土板を曲げながら、内反り気味に貼り付けて体部から口縁部を成形。内面から体部外面下位まで灰釉、貫入が入る。底部外面は無釉。	御深井製品
第411図 PL.342	27建 22	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	1/8	口 底	9.7 5.0	高	2.8	夾雑物少量/暗灰	口縁端部に小さな粘土紐を貼り付けた耳が付く。内面から体部外面に黄褐色の飴釉を施す。体部外面中位から高台は無釉。削り込み高台。口縁部内面に煤が付着。	
第411図 PL.342	27建 23	瀬戸・美濃 陶器 香炉	ほぼ完形	口 底	9.3 7.0	高	5.7	夾雑物少量/灰白	口縁部は内側に傾く。腰部に沈線が巡る。体部外面は丸ノミ削ぎで半菊文を施す。口縁端部外面から腰部は褐色の飴釉。内面と底部外面は無釉で、脚が３か所残存。底部外面に「ふく正」の墨書。	
第412図 PL.342	27建 24	瀬戸・美濃 陶器 片口	完形	口 底	15.4 8.0	高	18.8	夾雑物微量/灰白	22点の小片からなる。口縁端部は内側にゆるく傾き、外側に肥厚する。口縁端部直下外面に凹線が巡る。内面から体部外面下位に褐色の飴釉、体部下位から高台は無釉。底部内面に３か所の重ね焼き痕。	
第412図 PL.342	27建 25	瀬戸・美濃 陶器 水注	4/5	口 底	3.8 6.3	高	5.3	夾雑物微量/灰白	37点の小片からなる。口縁部は直立気味に立ち上がる。取っ手と注ぎ口は貼り付けだが大部分が欠損する。内外面に褐色の飴釉。体部下位と高台は無釉。	
第412図 PL.342	27建 26	肥前陶器 瓶	口縁部欠損	口 底	－ 4.3	高	－	夾雑物微量/灰	口縁部外面から体部中位に藁灰釉を掛け流し、貫入が入る。高台端部を除き、体部中位から高台内に鉄釉。高台端部に砂が付着。	
第412図 PL.342	27建 27-1	瀬戸・美濃 陶器 瓶	完形	口 底	3.7 7.4	高	23.0	夾雑物微量/浅黄	口縁端部は平坦で外側に肥厚する。口縁部内面から高台端部と高台内の一部を除き外面に黄褐色の飴釉。体部上位に螺旋状の沈線。体部下位から高台境に回転ヘラケズリ。	PL.227
第412図 PL.342	27建 27-2	木製栓	完形	直 長	2.8 6.0	高	－	－	栓の上・下面は炭化。上位2/5に段があり、栓の把手になる。	PL.227
第412図 PL.342	27建 28	瀬戸・美濃 陶器 三耳壺	ほぼ完形	口 底	10.6 14.2	高	18.0	夾雑物微量/灰白	口縁端部は平坦をなし、外側に肥厚する。肩には３か所の耳が付くが欠損する。内面から体部外面下位と底部の一部に黒褐色の鉄釉、体部外面下位から底部は錆釉を施す。体部外面中位から下位に螺旋状沈線。底部は輪状の重ね焼き痕。	
第412図 PL.342	27建 29	肥前磁器 二次加工品	高台部	口 底	－ 4.0	高	2.6	夾雑物微量/灰白	体部外面下位の高台際と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。高台脇を荒い叩打により円盤状に加工。染付碗か。	
第412図 PL.－	27建 30	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	(28.4) －	高	－	夾雑物少量/にぶい黄橙	口縁部と体部境は内側に「く」の字形に屈曲する。内面に11本一単位のクシ目。内外面に錆釉。体部外面は回転ヘラケズリ。	
第412図 PL.342	27建 31	在地系土器 火鉢	1/2	口 底	(26.2) (20.0)	高	16.5	白色粒を含む/暗灰褐	口縁端部は平坦をなし内外に肥厚する。口縁部外面は２条の突帯状の高まり、肩部にヘラで削った連続文を施す。ロクロ成形後に口縁部外面はナデ、胴部外面はヘラミガキ、口縁部内面から体部内面はナデ。底部は器肉が薄く、別づくりの口縁部から胴部に貼り付けて成形。部は砂底で、脚が３か所残存する。	
第412図 PL.342	27建 32	在地系土器 火鉢	2/5	口 底	(33.0) (28.6)	高	12.3	白色粒を含む/暗灰褐	口縁端部は平坦をなし内外に肥厚する。口縁部から体部外面はロクロ成形後に粗いヘラミガキ、内面はナデ調整。底部は器肉が薄く、別づくりの口縁部から胴部に貼り付けて成形。底は砂底で、脚が１か所残存する。	
第412図 PL.342	27建 33	土製品 土人形	完形	口 底	－ 2.2	高	3.7	夾雑物微量/灰白	前後の型を合わせて成形。台座に座り左足を出し、左わきに鯛を抱えた恵比寿座像。底部に固定のための円孔が開く。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第412図 PL.342	27建 34	土製品 土人形	 完形	口 底	－ 1.5	高	3.5	夾雑物微量/灰白	前後の型を合わせて成形。米俵に座り、右手に小槌左手に袋を背負った大黒座像。顔面の成形は失われている。底部に固定のための円孔が開く。	
第413図 PL.343	27建 35	土製品 土人形	 4/5	口 底	－ －	高	11.7	夾雑物少量/にぶい黄橙	30点の小片からなる。前後の型を合わせて成形。和装の婦人座像。	
第413図 PL.343	27建 36	木製品 塑像②		長 幅	6.2 6.5	高 重	6.45 14.9	－	背中に帯の表現を持ち、裾が広がっている。頭部の左側が一部欠損する。頭部は別作りになっており、内部に木質が残存することからも３㎜角の木芯を使用したとみられる。内部は空洞。土が主な素材のため、残存状態は良くない。	
第413図 PL.343	27建 37	木製品 塑像①	 一部欠損	長 幅	5.6 5.9	高 重	3.6 13.6	－	背中に帯の表現を持ち、裾が広がっている。頭部は後頭部のみ残存する。内部は空洞で表面には白色の胡粉のようなものが確認できる。	
第413図 PL.343	27建 38	土製品 土人形	 2/3	口 底	－ 2.3	高	－	夾雑物微量/灰白	前後の型を合わせて成形。荷駄を摘み､鞍に乗る人馬像。底部に固定のための円孔が開く。	
第413図 PL.343	27建 39	土製品 土人形	 完形	口 底	－ (4.1)	高	(2.8)	夾雑物微量/灰白	前後の型を合わせて成形。岩に根を張る４本の松の木と鳥居。底部に固定のための円孔が開く。	
第413図 PL.343	27建 40	煙管(雁首)	 1/2	長 幅	(3.0) 2.5	高 重	1.3 4.8	－	羅宇が劣化して、火皿が破損している。小口に近い部分に小口に平行して刻みがついている。つなぎ目は確認できない。有機質とともに出土する。	
第413図 PL.343	27建 40	煙管(吸口)	 完形	長 幅	9.65 1.0	高 重	1.65 4.2	－	つなぎ目は確認できない。羅宇の一部が劣化して残存している。	
第413図 PL.343	27建 41	煙管(雁首)	 完形	長 幅	6.4 1.5	高 重	1.3 10.7	－	つなぎ目が側面のやや上側につく。火皿の首からの穴が斜めに取り付けられている。	
第413図 PL.343	27建 41	煙管(吸口)	 完形	長 幅	7.9 1.1	高 重	1.1 8.7	－	羅宇の一部が残存する。つなぎ目は明瞭。口付部分が一部欠損する。	
第413図 PL.343	27建 42	煙管(雁首)	 完形	長 幅	3.8 1.6	高 重	1.7 3.9	－	一部に金色光沢を持つ。つなぎ目は上に確認でき、火皿の内部に灰が残存しているか。	
第413図 PL.343	27建 42	煙管(吸口)	 完形	長 幅	10.9 3.2	高 重	1.8 5.4	－	小口がつぶれている。内部に羅宇が残存する。つなぎ目は明瞭。	
第413図 PL.343	27建 43	煙管(雁首)	 完形	長 幅	3.8 1.5	高 重	1.9 4.5	－	上部につなぎ目が確認できる。火皿内に灰が残存しているか。	
第413図 PL.343	27建 44	煙管(吸口)	 完形	長 幅	7.1 2.7	高 重	1.2 14.3	－	２点が癒着している。全体が錆に覆われており、詳細不明。径は２点とも約1.1㎝。短い煙管は長さ6.4㎝。	
第413図 PL.343	27建 45	煙管(吸口)	 ほぼ完形	長 幅	5.1 0.4	高 重	0.5 3.2	－	口付の一部が欠損する。小口からつなぎ目で一部割れる。	
第413図 PL.－	27建 46	煙管(吸口)	 完形	長 幅	7.2 1.1	高 重	1.1 8.2	－	肩を持つ吸口。内部に羅宇が残存している。肩の長さは2.8㎝。	
第413図 PL.343	27建 47	煙管(吸口)	 完形	長 幅	7.0 0.9	厚 重	0.9 5.1	－	金色の光沢を持つ。小口と直交方向に細かな線が刻まれる。一部つなぎ目が見えづらくなる。	
第414図 PL.343	27建 48	煙管(吸口)	 ほぼ完形	長 幅	6.4 0.8	高 重	0.8 4.9	－	つなぎ目は明瞭。小口部分がわずかに欠ける。一部金色の光沢が確認できる。	
第414図 PL.－	27建 49	銅製品 煙管(吸口)	 一部欠損	長 幅	(6.4) 1.5	高 重	0.5 4.3	－	小口が一部欠損する吸口。小口から1.7㎝のところで段がつく。錆の内部に布痕跡が見られ、布に包まれていた可能性がある。	
第414図 PL.343	27建 50	煙管(吸口)	 ほぼ完形	長 幅	4.1 0.8	高 重	0.8 1.6	－	小口がわずかに欠ける金色光沢を持つ短めの吸口。つなぎ目は明瞭。	
第414図 PL.343	27建 51	煙管(吸口)	 完形	長 幅	4.5 0.9	厚 重	0.9 2.2	－	つなぎ目は明瞭。口付に近い部分で反り上がっているようにも見え、雁首の可能性もある。	
第414図 PL.343	27建 52	銅製品 煙管(吸口)	 完形	長 幅	4.1 1.0	厚 重	1.0 3.1	－	金色の光沢を持つ吸口か。口付部分から肩になると見られる部分までが残る。つなぎ目は明瞭。	PL.230
第414図 PL.343	27建 53	銅製品 蓋	 完形	径 －	10.4 －	厚 重	2.2 36.6	－	径1.3㎝の摘がつく。一部はげてしまっているが、元々全体に表面の金色の光沢があったと思われる。座金が下に置かれ、摘から下まで留め金が留められている。	PL.229
第414図 PL.343	27建 54	銅製品 ヤカン	 完形	長 幅	58.4 15.1	厚 重	0.1 255.4	－	やや小ぶりで底部、体部に丸みを持つ。口縁部は垂直に立ち上がる。	
第414図 PL.343	27建 55	鉄製品 茶釜	 2/3	径 －	23.0 －	高 重	17.9 1880	－	側面に２か所鋳掛け跡が残る。吊り手が残存し釣り手の形状は正方形。耳に２つ穴が空く。	
第415図 PL.343	27建 56	鉄製品	 一部欠損	底 －	29.2 －	高 重	22.2 2920	－	やや大きめの茶釜。耳には２か所穴が空く。吊り手はねじれがない、断面長方形のもの。肩部分に鋳掛けの痕跡が残る。	
第415図 PL.343	27建 57	鉄製品 蓋		径 －	17.9 －	厚 重	2.8 571.4	－	外径から1.2㎝の所に１周する突起がつく。摘に紐が通っていた様子が錆痕跡として残る。	
第415図 PL.－	27建 58	鉄製品 鉄鍋の破片	 一部	長 幅	15.3 6.6	高 重	3.7 125.8	－	ほぼ接合関係が確認できない。浅い鍋で底部は平らと見られる。つるの一部が癒着している。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第416図 PL.344	27建 59	鉄製品 鍋		底 口	29.5 37.7	高 重	19.7 2800	_	耳には穴が３つ空き、その部分の口縁はバリ状に飛び出している。足は１か所のみ残存する。	
第416図 PL.344	27建 60	鉄製品	2/3	底 口	28.5 35.6	高 重	15.5 1900	_	底部から口縁まで残存するが耳と足１点が欠損している。底部の湯口は大きく盛り上がる。口縁の反りはやや浅い。内部に一部有機質痕が残存している。	
第416図 PL.343	27建 61	鉄製品 つる	破片	長 幅	(45.0) 1.5	厚 重	0.4 79.8	_	両端部が捻れている。鍋などの耳に引っかける端部は欠損している。	
第416図 PL.-	27建 62	鉄製品 つる	一部欠損	長 幅	- 1.1	厚 重	0.4 87.9	_	２点のつるが接合できないが、同一個体と考えられる。つるの捻れがなく、鍋などの耳に引っかける。断面は長方形。	
第416図 PL.343	27建 63	鉄製品	1/6	底 -	27.3 -	厚 重	0.2 708.0	_	底部からやや立ち上がりまで残存する。底部の足、湯口の残存は良好。	
第417図 PL.344	27建 64	銅製品	不明 完形	口 高	26.0 24.6	厚 重	- 2324.3	_	大型の鍋状の銅製品。、底は丸くなっており、中段に段が付き、そこから円筒状に上に伸びる。口縁としての加工は見られない。	PL.229
第417図 PL.344	27建 65	鉄製品 鍋	2/3	底 口	32.0 42.7	高 重	22.3 2780	_	底部に煤が残る。耳には穴が３つ空き、耳部分の口縁は周辺より張り出す。つるが残存するが、変形して曲がる。	
第418図 PL.344	27建 66	鉄製品 釜	ほぼ完形	底 口	36.6 64.0	高 重	32.4 12220	_	体部の1/3の所から大きく広がる。底部の周囲に張り出しを持ち、底部の湯口は明瞭。一部すすが残存する。口縁部の内側に突起がつき、体部にヨコナデの成形痕が確認できる。	
第419図 PL.344	27建 67	鉄製品 包丁	ほぼ完形	長 幅	26.4 5.2	厚 重	0.3 60.8	_	柄が残存する包丁。柄の形状は四角形。使用痕である凹みがついているか。先端部がやや欠損している。	PL.230
第419図 PL.-	27建 68	不明 刃物	一部残存	長 幅	(14.5) 1.8	厚 重	2.1 21.8	_	柄と棟の一部が残存する。柄には目釘はなく、関は上下に確認できる。	
第419図 PL.344	27建 69	鉄製品 包丁	2/3	長 幅	(19.4) 4.3	厚 重	1.6 44.3	_	木製の柄が残る。柄の中に茎を差し込んでいる。刃は一部のみ残り、非常に薄い。	
第419図 PL.344	27建 70	鉄製品 包丁	1/2	長 幅	20 6.1	厚 重	2 49.2	_	柄が残存する包丁。刃は劣化が見られ、一部破損している。柄の断面は６面で面取りがされている楕円形。	
第419図 PL.344	27建 71	鉄製品 匙	完形	長 幅	21.4 3.0	厚 重	0.16 12.4	_	前後で大きさが異なる。大きい匙が長5.0×最大幅3.1×深さ0.1の楕円形、小さい匙は長1.1×最大幅0.8で深さはほとんどない。	
第419図 PL.344	27建 72	鉄製品 杓子	ほぼ完形	長 幅	(37.0) 7.7	厚 重	7.7 118.7	_	木製の柄が残存していたが、劣化変形している。幅の大きな浅めの杓子。持ち手から杓子部分まで角度が付いている。	PL.231
第419図 PL.344	27建 73	銅製品 鑵	ほぼ完形	長 幅	3.2 1.4	厚 重	0.8 4.0	_	一部欠けている。薄い金属板を下部の接続部分を合わせて作られている。	PL.230
第419図 PL.344	27建 74	銅製品 毛抜き	一部欠損	長 幅	3.8 0.1	厚 重	0.6 2.4	_	薄く細い金属板が上部が折り曲げられている。先端部が欠損し、確認できない。	
第419図 PL.344	27建 75	銅製品 棒状銅製品	完形	長 幅	11.5 0.3	厚 重	0.4 8.7	_	上から1.8㎝の所に、0.5㎝の幅の切り込みが入っている。下部の先端は細くなっている。	
第419図 PL.344	27建 76	鉄製品 火箸か	破片	長 幅	(15.1) 6.0	厚 重	7.0 14.9	_	両端部が欠損している断面四角形の棒状鉄製品。比較的長く、一方が細くなっていることから、火箸の可能性が高い。	
第419図 PL.344	27建 77	鉄製品 おろし金	完形	長 幅	25.3 12.1	厚 重	0.6 192.0	_	金色光沢が残る。両面に突起があり、目が細かい面と粗い面が確認できる。持ち手部分には穴が空けられる。	PL.230
第420図 PL.345	27建 78	鉄製品 小刀	完形	長 幅	22.3 2.3	厚 重	1.6 23.4	_	劣化した柄が残存している。刃の部分が長く、片刃とみられる。	
第420図 PL.345	27建 79	鉄製品 小柄	1/2	長 幅	5.75 1.4	厚 重	0.4 12.8	_	表面に浮彫がなされている。模様の内容は不明。内部に残存はしていない。	
第420図 PL.345	27建 80	鉄製品 小柄	一部欠損	長 幅	(8.7) 1.4	厚 重	0.3 11.4	_	小柄の柄部分が残存している。表面の装飾等は確認できない。つなぎ目が棟部分の角に見られる。	
第420図 PL.345	27建 81	鉄製品 かすがい	完形	長 幅	14.1 1.0	厚 重	0.5 35.1	_	両足がやや開いている。体部では断面長方形だが、脚部への曲がる所から脚部の先端に行くにつれ細くなり、断面が正方形になり尖る。	PL.231
第420図 PL.345	27建 82	鉄製品 釘	完形	長 幅	3.1 0.6	厚 重	0.6 1.1	_	大戸に使用されていた釘。戸板を固定するための釘か。	
第420図 PL.345	27建 83-1	鉄製品 釘	完形	長 幅	4.3 0.3	厚 重	0.4 2.4	_	建築材に打ち込まれていた釘。頭部は欠損し、脚部はL字に曲がっている。	
第420図 PL.345	27建 83-2	鉄製品 釘	完形	長 幅	4.6 0.3	厚 重	0.4 2.3	_	建築材に打ち込まれていた釘。頭部は折れがなく、叩きつぶされている。脚部は「し」の字に曲がっている。	
第420図 PL.345	27建 83-3	鉄製品 釘	完形	長 幅	4.1 0.4	厚 重	0.4 2.1	_	建築材に打ち込まれていた釘。頭部は折れがなく、脚部は一部欠損する。	
第420図 PL.345	27建 83-4	鉄製品 釘	完形	長 幅	4.3 0.6	厚 重	0.5 2.6	_	建築材に打ち込まれていた釘。頭部は折れは確認できないが、体部より幅が広く作られている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第420図 PL.345	27建 84	鉄製品 ノミ	 完形	長 幅	19.7 1.6	厚 重	1.6 66.4	－	木質と口金が残存する。柄に取り付ける部分は木質の柄に被さるように接続される。刃の幅は0.7cm。	
第420図 PL.345	27建 85	鉄製品 ノミ	 完形	長 幅	21.8 1.0	厚 重	1.0 98.1	－	木質の柄が残存する。関部分は断面が丸く、茎は断面四角形。刃の幅は1.1cm。	PL.231
第420図 PL.345	27建 86	鉄製品 火箸	 一部欠損	長 幅	(30.0) 0.5	厚 重	0.5 47.2	－	持ち手側に環が付き、２本の箸をつなげている。一部ねじれる所があるが、持ち手近くでは見られない。	
第420図 PL.345	27建 87	鉄製品 火打金	 ほぼ完形	長 幅	10.7 1.9	高 重	0.6 15.6	－	かすがい形の火打金。中央部は膨らみ。３か所で木に接続していたとみられる。	
第420図 PL.345	27建 88	木製品 竿秤	 完形	長 －	41.8 －	径 重	0.7 28.4	－	３方向に金属による重量を量る印が付けられている。吊すための銅製の取り付け具が４か所にある。内２か所には環が残存する。	
第421図 PL.345	27建 89	鉄製品 馬具	 2/3	長 幅	10.7 4.8	厚 重	1.6 28.9	－	丸鐙とハミ身で構成される。ハミ身は両端が互い違いに接続するようになっている。丸鐙は一部が細くなっていることから、使用痕の可能性がある。	
第421図 PL.345	27建 90-1 ～3	鉄製品 轡	 一部欠損	長	－	重	－	－	紐が残存し、轡に絡まっている。環状の金属６点、両端が円環状になっている棒状の金属２点、環状の金属をねじった金属製品２点が癒着している。１個体ではない可能性がある。	PL.232
第421図 PL.345	27建 91	鉄製品 刃物の柄	 柄のみ	長 幅	28.2 3.1	厚 重	2.2 69.4	－	木質の柄と口金が残るが、刃の形状が欠損しており不明。柄の断面形状は小判形、刃は薄く鎌などの可能性がある。	
第421図 PL.346	27建 92	鉄製品 鎌	 完形	長 幅	56.0 26.0	厚 重	3.0 232.5	－	木製の柄があり、口金も残存する。柄を装着後、くさびを打ち込み固定している様子が見られる。目釘が２か所に打ち込まれているが、上の目釘は効いておらず、補修した可能性がある。刃は反りがほとんどない。板にかけられた状態で発見される。	
第421図 PL.345	27建 93	鉄製品 鎌	 1/3	長 幅	(16.7) 3.0	厚 重	0.2 97.1	－	全体がさび付き非常に劣化している。刃の残存状況が悪く、柄の錆の形状で柄の太さが確認できる。	
第421図 PL.345	27建 94	鉄製品 鎌	 2/3	長 幅	41.2 6.0	厚 重	0.35 108.7	－	口金と柄が残る。目釘位置に鎌が当たらず、ツルのような有機質を巻いて固定している。刃部分は根元でややねじれる。	PL.229
第421図 PL.345	27建 95	鉄製品 銑	 完形	長 幅	35.5 5.0	厚 重	1.2 369.2	－	片刃で裏すきがある。裏側が湾曲し、0.2cmの反りがある。持ち手部分に穴などはなく、柄も残存していない。	
第421図 PL.345	27建 96	鉄製品 鉈	 一部欠損	長 幅	(44.9) 3.5	厚 重	3.0 241.7	－	鼻付き、片刃で裏すきがある。柄の一部は保存処理をおこない、目釘が柄に残存する。鼻は長さ1.9cm、幅0.7cm全体に劣化が見られる。	
第422図 PL.346	27建 97	鉄製品 片ツルハシ	 一部欠損	長 幅	55.5 24.4	厚 重	4.1 1298.8	－	木製の柄とくさびが残存する。反りは１cm。先端から1.5cmで片方の測面が削れて尖るようになる。	PL.229
第422図 PL.346	27建 98	鉄製品 斧	 完形	長 幅	69.0 15.8	厚 重	4.0 890.4	－	刃先８cm。柄が残存している。柄の装着部分はやや太くなり、くさびで固定されている。柄の径は長径3.3cm、短径2.5cm。	PL.230
第422図 PL.345	27建 99	鉄製品 鉈	 ほぼ完形	長 幅	47.0 7.0	厚 重	4.0 432.1	－	裏すきがあり、鼻が付く鉈。口金、目釘が残存している。木製の柄は目釘から	PL.229
第422図 PL.345	27建 100	木製品 鉈(柄)	 ほぼ完形	長 幅	40.5 7.0	厚 重	3.0 231.3	－	鼻付きの鉈。片刃、裏すきが確認出来る。口金、柄の目釘がわずかに残る。柄の根元が建材に押しつぶされていたとみられる。	PL.231
第423図 PL.347	27建 101	鉄製品 斧	 完形	長 幅	75.0 18.2	厚 重	4.4 1040.2	－	刃先７cm。柄が残存し、くさびが残る。柄は一部がへこみ。つぶれている。柄の径は長径３cm、短径2.2cm。	
第423図 PL.347	27建 102	鉄製品 斧	 完形	長 幅	83.0 8.7	厚 重	4.0 1002.7	－	本体の長さ19cm、刃の長さ6.5cm。柄とくさびが錆に巻き込まれて残存する。両側面に刻みが３本と６本確認できる。	
第424図 PL.－	27建 103	木製品+金属製品 籠	 ほぼ完形	縦 横	22.0 18.4	高 重	11.0 －	－	カゴ内下部にキセル吸い口と銭貨、火打ちがねが入っていた。竹を編んだ籠。口の部分は横方向に10本程度まとめてねじられた竹材に縦方向の竹材を絡ませて整形している。体部はござ目編み。底部は崩れており、詳細不明。	
第424図 PL.348	27建 104- 1	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.3 8.2	－	輪郭が明瞭。面の彫は深い。	
第424図 PL.348	27建 104- 2	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.9 2.1	厚 重	0.3 8.2	－	四文銭。輪郭が明瞭。面の彫は深い。	
第424図 PL.348	27建 105	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	1.4 3.1	－	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背はさびに覆われており、やや背の輪と郭は左上にずれる。	
第424図 PL.348	27建 106	銭貨 古寛永	 完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.1 3.4	－	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背の輪、郭がやや右上にずれる。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第424図 PL.348	27建 107	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5. 2.0	厚 重	0.1 3.8	–	背文。面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第424図 PL.348	27建 108	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.1	–	背文。面､背ともに文字､輪､郭が明瞭。面は縦ヤスリか。	
第424図 PL.348	27建 109– 1	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 3.7	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第424図 PL.348	27建 109– 2	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5. 2.0	厚 重	0.2 3.0	–	彫が浅く、面、背ともに不明瞭。	
第424図 PL.348	27建 109– 3	銭貨 新寛永か	完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.2 4.4	–	文字がつぶれて不明瞭。面、背の輪、郭は明瞭。	
第424図 PL.348	27建 109– 4	銭貨 古寛永	完形	外 内	2.5 2.1	厚 重	0.2 4.3	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅くやや不明瞭。	
第424図 PL.348	27建 110	銭貨 寛永通寶	完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.7	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第424図 PL.348	27建 111	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 2.0	厚 重	0.1 2.1	–	一部に金色の光沢が残存する。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。穿内にややバリが見られる。	
第424図 PL.348	27建 112	銭貨 新寛永	完形	外 内	24.5 1.7	厚 重	0.2 2.0	–	鋳不足が見られる。面、背の文字、輪、郭は明瞭。	
第424図 PL.348	27建 113	銭貨 銭種不明	一部欠損	外 内	2.5 2.2	厚 重	0.2 2.3	–	上の「元」と左の「寶」は確認できるが、その他の文字が潰れており、確定できない。穿が丸みを帯びている。	
第424図 PL.348	27建 114	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.2 2.3	–	面の彫は浅く､文字､輪､郭が見えづらい。背は彫がなく､輪、郭が不明瞭。一部に鋳不足が見られる。	
第424図 PL.348	27建 115	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.8	–	背足。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第424図 PL.348	27建 116	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 1.4	–	面、背ともにやや不明瞭。輪の状態が悪く、穿もゆがんでいる。	
第424図 PL.348	27建 117	銭貨 鉄銭	完形	外 内	2.8 –	厚 重	0.5 5.1	–	全体が厚いさびに覆われており、詳細不明。	
第424図 PL.348	27建 118	銭貨 雁首銭か	1/4	外 内	– –	厚 重	(0.3) 0.7	–	全体に劣化が激しい。周囲が折りかえっているように見えることと、文字が確認出来ないことから、雁首銭とした。	
第425図 PL.348	53建 119– 1･2	鉄製品 鍋	2/3	底 口	20.0 28.2	高 重	15.1 1560	–	耳が１点欠損する。耳の穴は３か所になる。口縁は張り出しが少ない。湯口は凹凸がほとんどないが、足の接続部分は飛び出している。弦が一部残存する。	
第425図 PL.348	27建 120	石製品 砥石	完形	長 幅	19.5 5.3	厚 重	2.2 423.8	珪質粘板岩	表面が砥面であり上下方向に著しく研ぎ減りする。砥面には主に縦方向の細かい線条痕が多数認められる。側面部には全体的に底面と平行する方向のわずかな段差が多数認められ製作時の切断痕の可能性がある。裏面はほぼ平坦で全体的に滑らかである。	
第425図 PL.348	27建 121	石製品 砥石	完形	長 幅	(12.9) 3.1	厚 重	3.2 101.9	砥沢石	表面が砥面であり上下方向に向かいに著しく研ぎ減りする。裏面には「へ(やま)吉」の文字が線刻される。裏面と左右両側面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第425図 PL.348	27建 122	石製品 砥石	ほぼ完形	長 幅	(10.6) 4.0	厚 重	3.0 113.8	砥沢石	表裏面に砥面が認めらる。表面は上下方向に向かい研ぎ減りし主要な砥面と考えられるる。左右両側面には平ノミ状の工具痕が明瞭に認められる。	
第425図 PL.348	27建 123	石製品 磨石	完形	長 幅	4.4 4.1	厚 重	3.9 96.8	粗粒輝石安山岩	全面が非常に滑らかである。	
第426図 PL.349	27建 124	石製品 石臼(上)	完形	径 幅	32.2 –	高 重	13.6 21100	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められ棒状の工具痕が明瞭に残る。軸受孔及び供給孔の直径約４㎝。	
第426図 PL.349	27建 125	石製品 石臼(上)	1/2	径 幅	33.2 –	高 重	(14.2) 9750	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が明瞭に認められる。側面には矩形の挽き手孔の一部が残る。軸受孔と供給孔の一部が残る。	
第426図 PL.–	27建 126	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	35.0 –	高 重	15.0 31140	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の直径約４㎝。	PL.228
第426図 PL.349	27建 127	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	33.2 –	高 重	12.0 21740	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔は中央付近で段違いになっており両面穿孔と考えられる。軸孔の直径約４㎝。	

挿図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第426図 PL.349	27建 128	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	33.8 –	高 重	14.0 25740	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の直径約４cm。	
第426図 PL.349	27建 129	石製品 火打石	完形	長 幅	7.9 5.9	厚 重	5.1 239.5	流紋岩	右側面に広範囲に自然面が認められ比較的大形の円礫を利用する。稜上に微細剥離痕とつぶれ痕が広範囲に認められる。	
第426図 PL.349	52建 130	石製品 石臼(上)	1/2	径 幅	32.8 –	高 重	13.8 7450	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。矩形の供給孔の一部が認められる。軸受孔は上方に向かい狭くなっており尖塔状を呈する。	
第426図 PL.349	52建 131	石製品 石臼(上)	完形	径 幅	32.4 –	高 重	12.2 16850	粗粒輝石安山岩	わずかに片減りする。底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに残り供給孔から続く配給の溝状痕跡が明瞭に認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。軸受孔の直径約３cm。供給孔の直径約４cm。	
第426図 PL.349	52建 132	石製品 石臼(下)	完形	径 幅	33.8 –	高 重	14.0 25740	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の直径約４cm。	
第427図 PL.–	27建 133	石製品 搗臼の重し	完形	長 幅	34.8 14.6	厚 重	10.2 8800	変質安山岩	表面の上方は全体的に滑らかである。表面の下方と裏面及び側面部には全体的に棒状の工具痕が明瞭に認められる。中央に矩形の孔が認められる。表面中央には横方向に溝状痕跡が認められるが中央の矩形孔に差し込まれた木材の脱落を防止するためのかんぬき様の木材の痕跡と考えられる。	
第427図 PL.349	27建 134	石製品 唐臼	完形	長 幅	63.0 54.0	高 重	49.0	粗粒輝石安山岩	碗形の中央にφ39.0cm深さ29.0cmの内彎する凹み、最大径は上端よりもやや下に位置する。内面の底は下にやや出っ張るが滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は内傾せず幅狭平坦で線状の工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。幅がやや狭く素材一杯一杯まで使用されている。	

６区16号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第428図 PL.349	40建 1	石製品 砥石	1/2	長 幅	(7.4) 2.7	厚 重	2.6 79.0	砥沢石	表面に砥面が認めら細かい線条痕がわずかにある。裏面と左右両側面及び下部小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	

屋敷以外の建物

挿図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第428図 PL.–	22建 1	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	高	–	白色片を多く含む /褐	破片の状態で出土。内面はナデ調整。外面には黒色の付着物。	
第428図 PL.349	22建 2	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	3.6 1.45	高 重	2.3 4.1	–	側面につなぎ目を持つ。体部が短い。小口が一部つぶれている。	
第428図 PL.349	22建 3	石製品 石臼(上)	1/6	長 幅	(15.2) (19.3)	高 重	(11.7) 3250	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面には矩形の挽き手孔の一部が残る。	
第428図 PL.350	43建 1	銭貨 銭種不明	完形	外 内	3.1 2.55	厚 重	0.95 8.1	–	３枚が癒着する。２枚とも文字、輪、郭は不明瞭。２枚について上の文字だけが確認できるが、１枚は「天」、もう１枚は篆書で「元」が確認できる。	
第428図 PL.350	43建 2	石造物 空風輪	ほぼ完形	長 幅	(19.4) 16.3	厚 重	16.0 2350	粗粒輝石安山岩	成形は均質、表面は丁寧な整形を施す。底面は突起が認めらる。くびれ部は比較的明瞭であり、風輪上部と空輪下部とはＶ字状のくびれが認められる。先端はわずかに突出する。風輪側面には「丁」「十」の線刻が認められる。	
第428図 PL.350	43建 3	石製品 風空輪	完形	長 幅	24.8 16.6	厚 重	15.9 –	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の風空輪。宝珠の形はかなり形式化しており、側面に桃のような丸味はない。頂部の先端は一部欠損している。下面に火輪と組み合わせるためのφ7.0cm長さ5.0cmの凸形突起あり。	
第428図 PL.350	43建 4	石製品 風空輪	完形	長 幅	25.3 14.1	厚 重	13.3 –	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の風空輪？。宝珠の形は丸味はあるが、やや細長くやや形式化している。頂部の先端は一部欠損している。下面は13.0cm×13.0cmの方形のままで、火輪と組み合わせるための凸形突起はない。上に置くだけものか。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第429図 PL.350	43建 5	石製品 火輪	完形	長 幅	22.4 22.1	厚 重	14.0 –	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の火輪。高さは高めで、反り屋根であるが、断面を見ると屋弛みはやや強い。屋根に鑿による線状工具痕が明瞭に残る。軒は6.0～6.5㎝と厚く僅かに反っている。上面に12.5㎝×12.5㎝の中にφ9.5㎝深さ3.5㎝の風空輪をのせるための孔有り。	
第429図 PL.350	43建 6	石製品 火輪	完形	長 幅	22.7 22.5	厚 重	12.4 –	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の火輪。高さはやや高めで、反り屋根であるが、屋弛みは弱い。軒は3.5～4.0㎝と薄く反りが無く直線的である。上面に10.5㎝×10.5㎝の中にφ7.0㎝深さ4.5㎝の風空輪をのせるための孔有り。	
第429図 PL.350	43建 7	石製品 火輪	完形	長 幅	21.3 21.2	厚 重	12.5 –	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の火輪。高さはやや高めで、反り屋根であるが、屋弛みは№13に比べやや強い。屋根に鑿による線状工具痕が明瞭に残る。軒は3.0～3.5㎝と薄く若干反っている。上面に11.0㎝×11.0㎝の中にφ7.5㎝深さ3.5㎝の風空輪をのせるための孔有り。	
第429図 PL.350	43建 8	石製品 墓標(墓石)	完形	長 幅	65.1 28.9	厚 重	22.9 –	粗粒輝石安山岩	光背形墓標。表面に頭書「歸(帰)本」戒名「混叟禅定門」下置字「灵(霊)位」右側に「宝暦十二壬午天」左側に「十月初四日」。「叟」はおきな、老翁の意味であり、「混」は白髪の意味？表面は丁寧に研磨され平坦になっているが、側面～背面には工具痕がよく残る。尖頭部背面は緩やかにカーブする。額縁上部の宝珠状突起は一体化している方柱の墓標と同じ形式のもの。額縁の下の両角はやや丸味を持つ。光背形墓標であるが、上も「Ω」形ではなく一体化しており、比較的新しいものと考えられる。	
第429図 PL.350	43建 9	石製品 笠塔婆の笠	ほぼ完形	長 幅	42.0 41.0	厚 重	22.4 –	粗粒輝石安山岩	笠塔婆の笠。屋根は厚く急角度で屋垂れは無く直線的。破風は反りが深く、半円形。上の宝珠は失われている。下には22.0㎝×21.0㎝の工具痕があり、方柱の棹石が来るものと思われる。	
第429図 PL.351	43建 10	石製品 墓標(墓石)	完形	長 幅	59.8 27.6	厚 重	25.5 –	粗粒輝石安山岩	光背形墓標。表面に頭書「皈(帰)元」戒名「昌山禅定門」下置字「位」右側に「明和六(1769)丑十月九日」左側にもう１名分(妻)の空白有り。「昌」は「明るい。さかん。堂々として包み隠さないさま。公明正大。」などの意味があり、明るく堂々として公明正大な山のような人(男性)というような戒名であろうか。表面は丁寧に研磨され平坦になっているが、側面～背面には工具痕がよく残る。背面尖頭部は緩やかにカーブするものの他の光背形墓標よりもやや直線的。額縁上部の宝珠状突起は一体化している方柱の墓標と同じ形式のもの。額縁の下の両角はやや丸味を持つ。光背形墓標であるが、上も「Ω」形ではなく一体化しており、比較的新しい形式のものと考えられる。	
第430図 PL.350	43建 11	石製品 供養塔	完形	長 幅	113.3 42.5	厚 重	32.9 –	粗粒輝石安山岩	表面に「阿弥陀三尊の種子、奉念佛供養塔、當村、女中」の文字と七弁の「蓮華文」彫刻」右側面に「安永二巳天、十月日」の文字。「女中」とは「女人講中」の略？安永二(1773)年10月に当村の女衆が建てた念仏供養塔であることが分かる。江戸前期には個人名が列記されていたが、中期後半にはそれが無くなるのでこれに合致している。梵字３文字と當村及び女中と蓮華の花弁１枚置き３枚には赤色塗彩がよく残る。№15が基礎部分。	PL.276
第430図 PL.351	43建 12	石製品 基礎	完形	長 幅	57.5 52.0	厚 重	33.4 –	粗粒輝石安山岩	基礎。方形の上面に39.0㎝×34.0㎝×19.0㎝×深さ4.5㎝の三角柱の凹みがある。上に№11がのるものと考えられる。	
第430図 PL.351	43建 13	石製品 墓標(墓石)	完形	長 幅	61.3 26.0	厚 重	19.5 –	粗粒輝石安山岩	光背形墓標。２点接合。表面に頭書「歸(帰)真」戒名「草長禅定尼」下置字「霊位」右側に「延宝九(1681)天」左側に「酉四月十日」下に蓮華文の線刻。「草」＝「笑」、「草結ぶ＝草と草を結び合わせ、そこに霊魂を込めて互いの心が永久に離れないように祈ったり、旅の安全・幸運などを願ったりする」などの意味があり、笑顔の絶えない人(女性)で死出の旅路の安全や幸運を祈ったというような戒名であろうか。表面は丁寧に研磨され平坦になっているが、側面～背面には工具痕がよく残る。尖頭部背面は緩やかにカーブする。額縁上部は「Ω」形であり、段はないが、光背形墓標としてはやや古い形式のもの。額縁の四角は角が立つ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第430図 PL.351	43建 14	石製品 墓標(墓石)	完形	長 幅	62.9 25.2	厚 重	19.7 –	粗粒輝石安山岩	光背形墓標。表面に頭書「歸(帰)本」戒名「白牛禅定門」下置字「霊位」右側に「享保十(1725)巳天」左側に「四月二日」。下に蓮華文の陽刻。「白牛」は「毛色の白い牛」「乳牛」「酪農牛」を指す。白い牛を飼って酪農をやっていた人(男性)というような戒名であろうか。酪農は八代将軍徳川吉宗が1728年にインドから白牛３頭を輸入し、「白牛酪」を造ったことで江戸時代の酪農が始まったとされるが、それよりも古いことになり、この戒名の解釈が問題となる。表面は丁寧に研磨され平坦になっているが、側面～背面には工具痕がよく残る。尖頭部背面は緩やかにカーブする。額縁上部は「Ω」形であり、№８に比べ厚みがあり長方形よりも方形に近く、光背形墓標としてはそれよりもやや新しい形式のもの。額縁の四角は角が立つ。	
第431図 PL.351	43建 15	石製品 請花(蓮台)	完形	長 幅	43.2 43.0	厚 重	16.7 –	粗粒輝石安山岩	請花。蓮華文が浮き彫りされ、上面には23.0㎝×23.0㎝の四角柱の枘石を置くための凹みがある。下面には21.0㎝×21.0㎝の方形に加工痕の残る部分がある。下の基礎も方形と考えられる。時期的に近世でも新しいものか？	PL.276
第431図 PL.351	43建 16	石製品 請花(蓮台)	完形	長 幅	37.1 36.8	厚 重	16.6 –	粗粒輝石安山岩	請花。蓮華文は全面のみに浮き彫りされ、上面には22.0㎝×16.5㎝の楕円形のものを置くための調整痕と正面にφ2.5㎝深さ2.5㎝の凹みがある。下面には23.0㎝×22.5㎝の円形に工具痕の残る部分があり、敷茄子を置くためのものと考えられる。	
第431図 PL.351	43建 17	石造物 石仏	4/5	長 幅	(33.9) 13.8	厚 重	12.3 9350	粗粒輝石安山岩	全体的に滑らかであり丁寧に整形される。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。頭部欠損。	PL.277
第431図 PL.351	43建 18	石製品 石仏	頭欠損	長 幅	41.8 16.7	厚 重	14.0 –	粗粒輝石安山岩	地蔵菩薩。２点接合。頭部は欠失しているが、手に長方形の箱状のもの(香筥)を持っているものと考えられる。手の指や足の指も表現されている。直方体の石材から彫刻されたものと思われる。童子・童女などの墓標(墓石)の場合合掌しているものが多く、持物からすると墓に置かれた六地蔵の可能性が高い。	PL.276
第432図 PL.352	51建 1	肥前磁器 染付小碗	完形	口 底	8.0 3.0	高	3.9	夾雑物なし/白	体部外面は笹文と鳥か、体部下位と高台に圏線。内面は無文で片面の体部から底に暗灰色の油脂状の汚れ。	紅猪口 №1～№4は揃い PL.259
第432図 PL.352	51建 2	肥前磁器 染付小碗	ほぼ完形	口 底	7.1 2.8	高	3.8	夾雑物なし/白	体部外面は笹文。内面は無文で片面の体部から底に黒色の油脂状の汚れ。	紅猪口 №1～№4は揃い
第432図 PL.352	51建 3	肥前磁器 染付小碗	ほぼ完形	口 底	7.5 2.7	高	3.8	夾雑物なし/白	体部外面は笹文と鳥か、体部下位と高台に圏線。内面は無文で片面の体部から底に暗灰色の油脂状の汚れ。	紅猪口 №1～№4は揃い
第432図 PL.352	51建 4	肥前磁器 染付小碗	ほぼ完形	口 底	7.3 3.0	高	3.9	夾雑物なし/白	体部外面は笹文と鳥か、体部下位と高台に圏線。内面は無文で片面の体部から底に暗灰色の油脂状の汚れ。	紅猪口 №1～№4は揃い
第432図 PL.352	51建 5	肥前磁器 染付碗	完形	口 底	12.7 4.4	高	6.4	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文、体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に「μ」の様な不明銘。内面の見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	
第432図 PL.352	51建 6	肥前磁器 染付碗	完形	口 底	9.0 3.4	高	5.0	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文、体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文で、体部に輪状の暗灰色油脂状汚れが付着。	№6～№9は揃いか
第432図 PL.352	51建 7	肥前磁器 染付碗	完形	口 底	9.5 3.7	高	4.9	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文、体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文で、体部に輪状の暗灰色油脂状汚れが付着。	№6～№9は揃いか
第432図 PL.352	51建 8	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.6 3.5	高	5.1	夾雑物なし/白	９点の小片からなる。体部外面は雪輪梅樹文、体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	№6～№9は揃いか
第432図 PL.352	51建 9	肥前磁器 染付碗	ほぼ完形	口 底	9.0 3.3	高	4.5	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文、体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文で底に暗灰色の油脂状の汚れ。	№6～№9は揃いか
第432図 PL.352	51建 10	肥前陶器 陶胎染付碗	完形	口 底	8.9 3.4	高	6.2	夾雑物微量/暗灰	口縁部外面に二重圏線、体部外面に樹木と家屋や遠山を描く山水文。高台端部を除き内外面は透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	
第432図 PL.352	51建 11	肥前陶器 陶胎染付碗	完形	口 底	9.4 3.8	高	5.8	夾雑物微量/暗灰	口縁部外面に二重圏線、体部外面に樹木と家屋や遠山を描く山水文。高台端部を除き内外面は透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第432図 PL.352	51建 12	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	12.1 4.6	高	8.4	夾雑物微量/灰白	口縁部は直立気味に立つ。内面から体部外面下位まで灰釉、体部外面下位から高台は無釉。	
第432図 PL.352	51建 13	肥前磁器 染付皿	完形	口 底	12.7 7.6	高	3.1	夾雑物なし/白	体部外面はかなり崩れた唐草文、体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に「大明年製」様のかなり崩れた銘。内面の体部は半菊文を描き、見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	PL.261
第432図 PL.352	51建 14	肥前磁器 染付皿	ほぼ完形	口 底	18.0 10.4	高	3.8	夾雑物なし/白	口縁端部は緩やかに輪花状。体部外面は唐草文。体部下位に圏線。高台に二重圏線、高台内に１か所のハリ支え痕。体部内面に松や竹、梅を描く。見込みに二重圏線、中央に丸に芋柏か。	
第432図 PL.352	51建 15	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口 底	12.8 5.8	高	3.7	夾雑物微量/灰白	26点の小片からなる。内面中央に呉須で型紙摺りによる梅樹文か。高台端部を除き内外面と高台内の一部は灰釉、貫入が入る。	御深井製品
第432図 PL.352	51建 16	瀬戸・美濃 陶器 皿	2/3	口 底	12.2 5.6	高	3.5	夾雑物微量/灰白	15点の小片からなる。内面中央に呉須で型紙摺りによる梅樹文か。高台端部を除き内外面と高台内の一部は灰釉、貫入が入る。２片に漆による補修痕。	御深井製品
第433図 PL.353	51建 17-1	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	完形	口 底	2.5 9.3	高	2.3	夾雑物微量/灰	６点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 17-2	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	完形	口 底	3.6 9.8	高	2.4	夾雑物微量/灰	14点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 17-3	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	完形	口 底	3.7 9.5	高	2.3	夾雑物微量/灰	７点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 17-4	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	完形	口 底	3.3 9.6	高	2.1	夾雑物微量/灰	７点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-1	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	完形	口 底	3.4 9.4	高	2.3	夾雑物微量/灰	11点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-2	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	ほぼ完形	口 底	3.6 9.6	高	2.4	夾雑物微量/灰	14点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-3	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	ほぼ完形	口 底	3.4 9.2	高	2.2	夾雑物微量/灰	31点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-4	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	ほぼ完形	口 底	3.6 9.3	高	2.3	夾雑物微量/灰	33点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-5	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	ほぼ完形	口 底	3.6 9.7	高	2.3	夾雑物微量/灰	23点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 18-6	瀬戸・美濃 陶器か 蓋	ほぼ完形	口 底	3.5 9.4	高	2.4	夾雑物微量/灰	28点の小片からなる。体部外面に鉄絵の樹木、柳か。内外面に灰釉、摘みは丁寧に削り出し、無釉。	№17-1～18-6は10客揃い
第433図 PL.353	51建 19	瀬戸・美濃 陶器 灯明受皿	完形	口 底	11.0 5.0	高	1.9	夾雑物微量/灰黄	受け部端部は口縁部より背が低い。焼成前に１か所が切り取られる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に錆釉。体部外面から底部は錆釉を拭う。	
第433図 PL.353	51建 20	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	ほぼ完形	口 底	8.5 4.0	高	2.0	夾雑物微量/灰白	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面および体部の一部に錆釉。体部外面から底部は釉を拭う。口縁端部に煤が付着。	
第433図 PL.353	51建 21	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	ほぼ完形	口 底	10.6 4.4	高	7.4	夾雑物微量/暗灰	内面と体部外面下位まで錆釉。体部外面下位から底部は錆釉を拭う。底部内外面に輪状の重ね焼き痕。	
第433図 PL.353	51建 22	志戸呂陶器 灯明受皿	ほぼ完形	口 底	11.4 4.4	高	2.3	夾雑物微量/灰褐	受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に２か所切り取られ孔が穿たれる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面に錆釉。外面は無釉。	
第433図 PL.353	51建 23	肥前磁器 染付瓶	完形	口 底	4.3 6.0	高	24.3	夾雑物なし/灰白	口縁端部は外側に開く。体部に雪輪梅樹文。底部は削り込み高台。	PL.265
第433図 PL.353	51建 24	肥前磁器 染付瓶	ほぼ完形	口 底	1.7 5.0	高	14.8	夾雑物なし/灰白	細長い頸を有する瓶で、体部外面に若松と竹や梅を描き、裏側の草は蘭か。体部下位に圏線と鋸歯状の文様。高台境と高台に圏線。	御神酒徳利 №25と揃い

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第433図 PL.353	51建 25	肥前磁器 染付瓶	完形	口 底	1.8 5.0	高	15.5	夾雑物なし/灰白	細長い頸を有する瓶で、体部外面に若松と竹や梅を描き、裏側の草は蘭か。体部下位に圏線と鋸歯状の文様。高台境と高台に圏線。	御神酒徳利 №24と揃い
第433図 PL.353	51建 26	瀬戸・美濃 陶器 仏花瓶	ほぼ完形	口 底	5.3 4.9	高	11.1	夾雑物微量/灰黄	口縁部は外側に開いて端反る。胴上部に一対の粘土小塊で付けられた耳。口縁部内面付近から脚部外面にかけて灰釉、貫入が入る。脚部は鉄釉。脚底部は回転糸切後に無調整、鉄釉を拭う。	PL.263
第433図 PL.353	51建 27	瀬戸・美濃 陶器 ひょうそく	完形	口 底	5.7 4.2	高	4.8	夾雑物微量/灰白	内面と腰部外面まで鉄釉。底部は回転糸切後に無調整。底部中央に固定用の円孔あり。	PL.259
第433図 PL.353	51建 28	瀬戸・美濃 陶器 水注	完形	口 底	9.2 6.4	高	11.0	夾雑物微量/灰白	口縁端部は平坦をなし直立気味に立ち上がる。体部は垂直の筒形をなし体部外面に鉄絵の梅樹を描く。取っ手と注ぎ口は貼り付け、外面に灰釉。内面と腰部外面から高台は無釉。高台は丁寧に削り出されている。蓋は灰釉を施し、摘みは丁寧に作られる。蓋の底部は回転ヘラケズリで無釉。	PL.265
第434図 PL.353	51建 29-1	瀬戸・美濃 陶器 瓶	完形	口 底	3.2 5.8	高	21.0	夾雑物微量/灰黄	口縁端部は平坦をなし、直下に延伸して内傾する。口縁部内面から体部外面下位に灰釉。口縁部以外の内面は無釉か。体部下位から高台に薄く錆釉を施し釉を拭う。	PL.259
第434図 PL.353	51建 29-2	木製品 徳利の栓		長 厚 重	4.2	厚 重	1.6 –	–	とっくりの栓と思われる。敷物であるネコの上から出土。裏面にネコの植物繊維付着。中栓は正円に削っていない。	
第434図 PL.354	51建 30	瀬戸・美濃 陶器 瓶	完形	口 底	1.7 2.2	高	5.8	夾雑物微量/浅黄	口縁部は外側に開き肥厚する。口縁部から体部外面下位に灰釉、体部下位から底部は無釉。底部は回転糸切り離し後無調整。	御神酒徳利か №31と揃い PL.265
第434図 PL.354	51建 31	瀬戸・美濃 陶器 瓶	完形	口 底	1.6 2.4	高	5.7	夾雑物微量/浅黄	口縁部は外側に開き肥厚する。口縁部から体部外面下位に灰釉、体部下位から底部は無釉。底部は回転糸切り離し後無調整。	御神酒徳利か №30と揃い PL.265
第434図 PL.354	51建 32	瀬戸・美濃 陶器 片口	2/3	口 底	– –	高	–	夾雑物微量/灰黄	18点の小片からなる。口縁端部は平坦をなし、内外に肥厚する。内面から体部外面下位に黄褐色の飴釉、体部下位から高台は無釉。底部内面に３か所、体部外面中位に輪状の重ね焼き痕。	
第434図 PL.354	51建 33	瀬戸・美濃 陶器 片口	ほぼ完形	口 底	12.3 7.1	高	6.6	夾雑物微量/灰黄	28点の小片からなる。口縁端部は平坦をなし、直下外面に沈線が巡る。内面から体部外面下位に黄褐色の飴釉、体部下位から高台は無釉。底部内面に３か所の重ね焼き痕。	
第434図 PL.354	51建 34	産地未詳土器 坩堝	完形	口 底	5.0 3.8	高	3.2	夾雑物微量/淡紫灰	口縁部は直立し、把手が残存する。腰部はナデ、底部は回転糸切後に無調整。口縁部に濃緑青色の鉱滓が付着し、内面から体部外面下位まで被熱により器表が発泡、変色している。	鳥の餌入れや水入れの転用か
第434図 PL.354	51建 35	瀬戸・美濃 陶器 不明	1/3	口 底	2.5 2.5	高	2.6	夾雑物微量/にぶい黄橙	コップ状の筒形製品。外面は灰釉、口縁端部と内面は無釉。	
第434図 PL.–	51建 36	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	(28.4) –	高	–	夾雑物少量/灰白	口縁端部は内側に肥厚し、体部上方はくびれ、外面は回転ヘラケズリ。内面にクシ目、内外面に錆釉。	
第434図 PL.354	51建 37	銅製品 御鈴	完形	長 幅	6.2 6.2	高 重	3.5 59.4	–	やや大きめの御鈴。底部に半月状の穴が開いている。口縁部の反はわずかである。	PL.263
第434図 PL.354	51建 38	銅製品 煙管(雁首)	一部	径 –	1.8 –	高 重	1.0 3.0	–	火皿のみが残る。	
第434図 PL.354	51建 39	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	5.1 1.5	高 重	1.6 20.6	–	上面につなぎ目が見られる。表面に魚子による文様がつけられる。一部に金色光沢、内部には羅宇の一部が残存する。	
第434図 PL.354	51建 39	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	7.0 1.5	高 重	1.0 –	–	上面につなぎ目が見られる。№39雁首と同一と思われる。	
第434図 PL.354	51建 40	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	5.0 1.5	高 重	1.5 7.5	–	金色の光沢を持つ。肩を持ち、つなぎ目は肩部分は側面、首の部分は上面に見られる。魚子による文様が肩につけられている。火皿内部に灰が残存しているか。	
第434図 PL.354	51建 41	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	7.0 1.1	厚 重	1.1 8.9	–	断面六角形の筒状のものに断面円形の煙管が通っている。つなぎ目は明瞭。	PL.266
第434図 PL.354	51建 42	銅製品 煙管(雁首)	完形	長 幅	5.5 1.5	高 重	2.1 11.7	–	つなぎ目が側面に見られる。脂反しがはっきりとする。内部には羅宇の痕跡が見られる。	
第434図 PL.354	51建 43	銅製品 煙管(吸口)	完形	長 幅	5.5 0.9	高 重	1.0 2.4	–	つなぎ目は明瞭。金色の光沢が見られる。つなぎ目からやや欠ける。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第434図 PL.354	51建 44	銅製品 煙管(吸口)	 完形	長 幅	6.2 1.0	高 重	1.0 6.6	_	つなぎ目はわずかに確認できる。内部に羅宇の一部が残存する。	
第435図 PL.354	51建 45	鉄製品 茶釜	 完形	底 口	23.0 13.1	高 重	18.7 3281.6	_	蓋がされた状態で埋蔵されたため内部に葉が入った袋が確認出来る状態であった。蓋はクリーニング作業中に外している。ツルは途中からねじれる。耳は穴は２つで耳の形状が六面に角がつけられるように面取りがなされている。底部には囲炉裏の灰が付着しており、足の状態や湯口は確認はしきれていない。袋は取り出して観察をおこなえなかったが、口が紐で厳重に結ばれている様子が確認できる。	
第436図 PL.354	51建 46	鉄製品 鉄鍋	 完形	底 口	27.2 29.9	高 重	9.1 1757.6	_	底面は平らで浅い鍋。弦が途中で捩れる。弦が一部欠損。耳の穴は錆により覆われている。底部の湯口は明瞭。一部すすが残る。	PL.266
第436図 PL.354	51建 47	鉄製品 鉄鍋	 2/3	底 口	21.7 28.7	高 重	15.6 1440	_	口縁から1.3cm下がったところに段が付く。耳の孔は３か所にあく。形状は口縁部分からくびれ、外側に膨らんだのちに耳の頂部が平らになる。湯口は膨らみ、弦の破片が残存する。体部にヨコナデの成形痕が見られる。	PL.266
第437図 PL.354	51建 48	銅製品 おろし金	 完形	長 幅	20.5 9.9	厚 重	0.9 85.7	_	両面に目が立っており、荒さが異なる。持ち手部分に目の細かい方から穴を開けている。	
第437図 PL.354	51建 49	銅製品 匙	 完形	長 幅	29.7 7.5	重 重	0.2 40.6	_	柄の端部に小さな穴があき、匙の先が圧力により変形している。	
第437図 PL.354	51建 50	鉄製品 包丁	 ほぼ完形	長 幅	17.5 6.7	厚 重	0.6 82.3	_	先端が欠ける。片刃で三角形の形状を持つ。茎は別づくりで刃に取り付けている様子が見られる。木製の柄が残存していた。	
第437図 PL.355	51建 51	鉄製品 包丁	 ほぼ完形	長 幅	30.9 7.2	高 重	2.0 148.8	_	柄の一部が欠損している。全体が錆に覆われ、やや刃が曲がり､変形が見られる。柄の下部に金属が見られる。	
第437図 PL.355	51建 52	鉄製品 包丁	 ほぼ完形	長 幅	29.5 7.1	厚 重	2.4 91.8	_	木質の柄が残り､一部刃も欠ける。アゴが柄側に延びる。刃が全体的に剥離が見られ、劣化している。	
第437図 PL.355	51建 53	鉄製品 刀子	 一部	長 幅	(23.1) 3.4	厚 重	2.2 54.5	_	柄と刃の破片が残存する。刃の形状は刀子とみられるが、木製の柄に穴があいているようだが、茎が留まっておらず目釘はない。柄の接続部分を固定した痕跡が見られる。柄の全面に漆が塗られる。	
第437図 PL.-	51建 54	鉄製品 火箸	 完形	長 幅	39.7 0.5	厚 重	0.5 142.7	_	鉄製の円環で２本の箸がつながれている。箸の上部は丸められ、円環に接続する。箸の上部は断面が丸く、約半分のところでねじられている。ねじられている部分より下は断面が四角形になる。	PL.267
第437図 PL.355	51建 55	鉄製品 刀子	 完形	長 幅	20.4 3.0	厚 重	0.9 26.4	_	柄は9.5cm。関は上下両方にある。刃は10.4cm､幅1.9cm､刃のみが1.3cm反る。	
第437図 PL.355	51建 56	鉄製品 小柄	 2/3	長 幅	11.45 1.6	厚 重	0.4 31.2	_	大刀と見られる図案が肉彫りされている。表面には金色の光沢を持っている。刀身がわずかに残存している。	
第437図 PL.355	51建 57	鉄製品 ノミ	 完形	長 幅	17.7 1.4	厚 重	0.8 112.3	_	木質の柄は残存している。先端は片刃でやや反りが見られる。首部分でやや細くなり、柄にかけて広がっていく。首の断面は丸く、茎の断面はほぼ正方形。	
第437図 PL.355	51建 58	鉄製品 環状製品	 完形	縦 横	3.0 4.3	厚 重	- 5.7	_	２個の円環が連なっている。直径3.9cmと長径2.7c、短径2.5cmの楕円形の環が連結した状態。	
第438図 PL.355	51建 59	鉄製品 台鉋	 完形	長 幅	24.8 6.6	厚 重	2.7 248.3	_	台が残存する。台の前方から5.9cmで刃の取り付け部分に落ち込み、刃に残る木質痕跡から、約0.2cm台から刃が出ていたようである。刃は上部が丸く、片刃。	PL.269
第438図 PL.355	51建 60	鉄製品 鋤・鍬先	 一部	長 幅	10.8 5.0	厚 重	2.2 137.7	_	一部金属光沢が見られ、風呂と刃の接続部分の側面が残存している。先端部が欠損しているため。詳細不明。	
第438図 PL.-	51建 61	鉄製品 鉈	 完形	長 幅	53.0 5.0	厚 重	3.4 350.2	_	鼻付きの鉈。片刃で裏すきが見られる。刃は研ぎ減りが見られ、鼻が細くなっている。表面には保管状況を反映していると思われるネコ状の有機質が付着している。柄は33.5cmで目釘、口金が確認できる。	PL.266
第438図 PL.355	51建 62	鉄製品 鉈	 完形	長 幅	50.0 7.4	厚 重	3.5 376.1	_	鼻付きの鉈。口金はわずかに残る。片刃で裏すきがある。木製の柄が関係で、目釘が残存している。出土時、表面にむしろ状の有機物が多く付着していた。	PL.266
第439図 PL.355	51建 63	鉄製品 鎌	 ほぼ完形	長 幅	37.4 (13.7)	厚 重	3.2 212.6	_	径2.3cmの柄が残存している。柄の末端部分が斜めにカットされている。目釘が２か所に打たれ、口金も残存する。刃はやや小さく、幅3.8cm、背側の厚さ0.3cm、反りは0.8cm。	
第439図 PL.355	51建 64-1	鉄製品 錠前	 完形	長 幅	3.0 5.3	高 重	1.1 26.4	_	鍵の穴が全面に付けられている回転鍵形の錠。鍵の破片が内蔵している状態で出土しているとみられる。	
第439図 PL.355	51建 64-2	銭貨 天聖元寶	 完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.3 10.2	_	３枚が癒着している。内、１枚は面が確認できる。文字は鋳詰まりしており不明瞭。輪、郭は明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第439図 PL.355	51建 64-3	銭貨 銭種不明	完形	外 内	2.0 –	厚 重	0.2 2.3	–	文字が鋳詰まりしているとみられ、劣化も激しく銭種が確認できない。	
第439図 PL.355	51建 65	銭貨 寛永通寶	完形	外 内	2.3 2.0	厚 重	0.2 2.2	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。面の輪はやや細い。一部変形が見られる。	
第439図 PL.355	51建 66	銭貨 熙寧元寶	1/2	外 内	– –	厚 重	(0.2) 1.6	–	文字が鋳詰まりしており、見えづらい。背の彫は浅い。	
第439図 PL.355	51建 67	石製品 砥石	完形	長 幅	13.3 3.0	厚 重	2.6 142.8	砥沢石	表面が砥面であり上方向に向かいに研ぎ減りする。裏面と左右両側面及び下部小口面には櫛歯タガネ痕がわずかに認められる。裏面と上部小口面には滑らかな部分が広範囲に認められ便宜的な砥面と考えられる。	PL.267
第439図 PL.355	51建 68	石製品 砥石	2/3	長 幅	(11.5) 2.6	厚 重	1.5 62.2	砥沢石	表面と左右両側面に砥面が認められる。表面は上下方向に向かい研ぎ減りし主要な砥面と考えられるる。裏面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第439図 PL.355	51建 69	石製品 石臼(下)	1/4	長 幅	(22.4) (17.7)	高 重	(15.3) 7500	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。底面の加工は比較的粗い。軸孔の一部が残り中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。	
第439図 PL.355	51建 70	石製品 硯	4/5	長 幅	15.2 6.1	厚 重	2.2 230.7	頁岩	全体的に炭化物が付着し表面観察に限界がある。硯面の陸部分は下方に向かい傾斜し縦方向の小さな段差と線条痕が多く認められる。硯から砥石に機能変化したと考えられる。	PL.267

1区不動院(本堂)

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第440図 PL.356	6建 1	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	1/3	口 底	(10.5) 5.0	高	2.2	夾雑物微量/灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から体部外面に錆釉。体部外面から底部は釉を拭う。内面に輪状の重ね焼き痕。	4号溝1と接合 3点接合
第440図 PL.356	6建 2	在地系土器 内耳鍋	底部破片	口 底	– (27.0)	高	–	白色片を含む/にぶい赤褐	体部内外面はナデ調整。底部は平底で砂底状。	24点接合
第440図 PL.356	6建 3	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 4	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	1.4～1.8	白色片を含む/にぶい褐	同一個体と考えられるものが7点、破片の状態で出土。一端には断面台形の縁が付く。他方、縁部がヘラ切り調整されている部分も見られる。器面はナデ、ミガキ調整。上面、外側面には黒色の付着物。摩耗して平滑になっている。	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 5	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 6	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 7	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 8	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.356	6建 9	在地系土器 不明	破片	口 底	– –	厚	–	白色片を含む/にぶい褐	No.4に同じ	No.3～No.9は同一個体か
第440図 PL.–	6建 10	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	口縁部破片	口 底	– –	高	–	夾雑物少量/灰褐	口縁部は逆「く」字状に外側に開き、肥厚する。体部との境界は段を、口縁端部は平坦をなす。体部外面は回転ヘラケズリ調整。内面にはクシ目。内外面に錆釉を施し、口縁部は釉を拭う。	
第440図 PL.356	6建 11	銅製品 煙管(雁首)	一部欠損	長 幅	– –	厚 重	– –	–	火皿が欠損している雁首。内部に羅宇が残存する。全体が錆に覆われており、つなぎ目は不明瞭。	
第440図 PL.356	6建 12	鉄製品 刀子	破片	長 幅	– –	厚 重	– –	–	刃とわずかに茎の一部が残るか。茎部分は劣化と破損により、不明瞭。	
第440図 PL.356	6建 13	銅製品 銅線	1/3	長 幅	– –	厚 重	– –	–	円状になるとみられる銅線の一部。断面円形。	
第440図 PL.356	6建 14	鉄製品 釘か	上部欠損	長 幅	– 0.5	厚 重	0.4 –	–	断面四角形の棒状金属製品。両端が欠損しており、詳細不明。	
第440図 PL.356	6建 15	銭貨 新寛永	完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.1	–	背文。面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第440図 PL.–	6建 16	石製品 唐臼	完形	長 幅	61.5 58.0	高 重	48.5 –	粗粒輝石安山岩	砲弾形の中央にφ38.0cm深さ27.5cmの外に開く凹み、最大径は上端に位置する。内面の底はやや滑らか。外面側～底にかけて剥離痕が明瞭に残る。口縁は幅狭で平坦で工具痕が残る。内面に丸い細かい工具痕が残る。	H30業者委託 No.1
第440図 PL.356	6建 17	石製品 石製品	完形	長 幅	0.9 0.9	厚 重	0.5 0.2	琥珀	褐色のこはく。表面は滑らかな曲面で構成されており研磨整形されたと考えられる。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第440図 PL.356	6建 18	石製品 下臼	完形	径 内	31.5 –	高 重	10.0 –	粗粒輝石安山岩	粉引臼下臼。擦り合わせ面が３cm出る凸形の東国形。６分画主副溝７～８本。厚さ７cmとかなり薄い。心棒孔φ２cm貫通。丁寧に加工されているが､側面一部欠損。	
第440図 PL.356	6建 19	石製品 上臼	2/3	径 内	32.0 22.0	高 重	14.0 –	粗粒輝石安山岩	粉引臼上臼。擦り合わせ面が凹む東国形。６分画主副溝　本。かなり片減りしている。もの入れφ３cm。丁寧に加工されているが、側面に工具痕残る。上部は廃棄の際に欠いたものと考えられる。	PL.290
第440図 PL.356	6建 20	石製品 沓石	完形	長 幅	35.0 35.0	厚 重	32.0 –	粗粒輝石安山岩	礎石の上、柱の下に据える石。天面は28cm×28cm、地面は35cm×35cm。上面に長さ６cm×幅６cm×深さ６cmの立方体の凹み、柱中央の突起と組み合わせたものと考えられる。丁寧に加工され、工具痕が残る。	

１区不動院(庫裏)

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第441図 PL.356	5建 1	肥前磁器 染付小碗	完形	口 底	8.2 2.6	高	3.8	夾雑物なし/白	53点の小片からなる。内外面に菊花文、間隙を斜線交叉文が埋める。高台は低く小さい。	PL.300
第441図 PL.356	5建 2	肥前磁器 染付碗	3/4	口 底	9.3 4.0	高	6.7	夾雑物なし/白	17点の小片からなる。体部外面は無文で青磁釉。高台内に不明銘。内面は見込みに二重圏線と菊花文。	
第441図 PL.356	5建 3	肥前磁器 染付碗	2/3	口 底	9.8 4.0	高	5.6	夾雑物なし/白	56点の小片からなる。体部外面に五葉若葉文。体部下位に圏線。高台境に二重圏線。高台内に崩れた「福」銘。内面は無文。	
第441図 PL.356	5建 4	肥前磁器 染付碗	3/4	口 底	9.4 (3.5)	高	6.7	夾雑物なし/白	58点の小片からなる。口縁部下外面に四方襷文。体部に樹木と家屋や遠山を描く山水文。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。内外面に透明釉､貫入が入る。	
第441図 PL.356	5建 5	肥前陶器 陶胎染付碗	2/3	口 底	(9.8) (4.2)	高	6.3	夾雑物少量/黄灰	34点の小片からなる。口縁端部直下外面に二重圏線、体部に唐草文。体部下位に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉､貫入が入る。高台端部は鉄錆。	PL.300
第441図 PL.356	5建 6	瀬戸・美濃 陶器 碗	2/3	口 底	14.6 5.6	高	9.2	夾雑物少量/灰	10点の小片からなる。内面から体部外面下位に灰釉。体部下位から高台は無釉。	№8と接合
第441図 PL.356	5建 7	肥前磁器 染付筒碗	2/3	口 底	8.0 3.7	高	5.9	夾雑物なし/白	24点の小片からなる。体部外面は瓢箪形の窓絵に雲や雁を描き、隙間を斜線交叉文が埋める。腰部外面下位、高台に圏線。口縁部下内面は四方襷文、見込みに二重圏線。中央に崩れた五弁花。	
第441図 PL.–	5建 8	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部破片	口 底	– –	高	–	夾雑物微量/灰	40032に同じ	№6と接合
第441図 PL.356	5建 9	肥前磁器 染付蓋	ほぼ完形	口 底	4.8～ 6.3 –	高	(2.4)	夾雑物なし/白	外面の中央に摘みの一部が残存。天井部中央に二重圏線、外面縁圏線、半菊と如意頭を描き隙間を斜線交叉文が埋める。内面にかえり。２か所に小さな切り込みが見られる。縁辺内面とかえりは無釉。	№15と揃いで灰吹 3点接合
第441図 PL.357	5建 10	肥前磁器 染付皿	完形	口 底	14.0 7.4	高	3.1	夾雑物なし/白	14点の小片からなる。外面は無文。内面は蛇の目釉剥ぎ。体部内面に岩と唐草文。見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	内面にベンガラが付着する
第441図 PL.357	5建 11	肥前磁器 染付皿	完形	口 底	13.5 7.6	高	3.8	夾雑物なし/白	31点の小片からなる。文様構成は№12と同じ。	№12と揃い
第441図 PL.357	5建 12	肥前磁器 染付皿	ほぼ完形	口 底	13.2 7.8	高	3.6	夾雑物なし/白	16点の小片からなる。体部外面にかなり崩れた唐草文。体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に圏線、中央に「渦福」銘。体部内面に岩と葡萄や雲と鳥を描く。見込みに二重圏線、中央は五弁花。	№11と揃い 4号建物出土破片と接合
第441図 PL.357	5建 13	肥前磁器 染付皿	2/3	口 底	10.8 6.4	高	3.0	夾雑物なし/白	５点の小片からなる。口縁端部に鉄錆の金線。体部外面は唐草文。体部下位に圏線。高台境に二重圏線。高台内に圏線、中央にかなり崩れた「大明年製」の銘。体部内面に鳳凰や雲を描く。見込みに二重圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	
第441図 PL.357	5建 13	在地系土器 皿	完形	口 底	7.5 4.5	高	1.4	夾雑物少量/橙	20点の小片からなる。ロクロ成形。底部は右回転糸切り離し後無調整。底部に炭化物が付着､墨書か。	PL.301
第441図 PL.357	5建 15	肥前磁器 染付小筒碗	完形	口 底	5.8 3.8	高	5.5	夾雑物なし/白	34点の小片からなる。口縁部内面付近は無釉。口縁端部直下外面と体部下位を圏線で区画し、半菊と如意頭を描き､隙間を斜線交叉文が埋める。高台境に二重圏線。内面は無文。口縁端部に細かな欠損がみられる。	№9と揃いで灰吹 PL.300
第442図 PL.357	5建 16	肥前磁器 染付仏飯器	口縁部は2/3	口 底	6.7 4.0	高	6.8	夾雑物なし/白	16点の小片からなる。体部外面にコンニャク印判の一対の菊花文。ロクロ成形で底部は削り出しており、刳り込みが浅い。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第442図 PL.357	5建 17	肥前磁器 染付仏飯器	脚柱部	口 底	－ 4.2	高	－	夾雑物微量/白	脚柱部外面に圏線。ロクロ成形、底部は削り出しているが、高台内の刳り込みは浅い。	
第442図 PL.357	5建 18	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	ほぼ完形	口 底	11.5 4.5	高	2.5	夾雑物小量/浅黄 灰	16点の小片からなる。口縁端部の１か所に粘土紐を貼り付けた耳が付く。内面から体部外面中位に黄褐色の飴釉を施す。体部外面中位から高台は無釉。削り込み高台。内面の底部に３点の重ね焼き痕。	
第442図 PL.357	5建 19	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	完形	口 底	9.7 4.6	高	2.5	夾雑物少量/灰黄・ 黄褐	体部外面から底部にかけて回転ヘラケズリ。削り込み高台で、中央が突起。内面から口縁部外面に灰釉。内面に３か所の重ね焼き痕。外面に煤が付着。	№22と揃い PL.300
第442図 PL.357	5建 20	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	完形	口 底	10.5 5.0	高	2.6	夾雑物微量/にぶい黄橙	11点の小片からなる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。底部内面に重ね焼き痕。内面から口縁部外面および体部の一部に錆釉。体部外面から底部は釉を拭う。	
第442図 PL.357	5建 21	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	完形	口 底	10.9 4.5	高	1.9	夾雑物微量/浅黄	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と口縁部外面から体部の一部に錆釉、体部外面から底部は釉を拭う。内外面に重ね焼き痕。	
第442図 PL.357	5建 22	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	1/3	口 底	(10.7) (5.0)	高	2.0	夾雑物少量/浅黄	体部外面から底部にかけて回転ヘラケズリ。削り込み高台。内面から口縁部外面に灰釉。体部外面から底部、割れた断面に煤が付着。	№19と揃い 3点接合
第442図 PL.357	5建 23	志戸呂陶器 灯明受皿	3/4	口 底	7.5 5.1	高	2.7	夾雑物微量/にぶい赤褐	25点の小片からなる。受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に２か所切り取られ孔が穿たれる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に錆釉。体部外面から底部は無釉。	
第442図 PL.357	5建 24	志戸呂陶器 灯明受皿	ほぼ完形	口 底	(7.5) 5.6	高	2.3	夾雑物微量/橙	71点の小片からなる。受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に２か所切り取られ孔が穿たれる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から口縁部外面に錆釉。体部外面から底部は無釉。	PL.300
第442図 PL.357	5建 25	志戸呂陶器 灯明受皿	ほぼ完形	口 底	5.7 3.8	高	2.3	夾雑物微量/浅黄	14点の小片からなる。受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に１か所切り取られ孔が穿たれる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面から体部外面に錆釉。体部外面から底部は無釉。	PL.301
第442図 PL.357	5建 26	瀬戸・美濃 陶器 灯明受皿	ほぼ完形	口 底	7.9 4.0	高	1.7	夾雑物微量/にぶい黄橙・橙	小径。受け部端は口縁部より背が低い。１か所、U字状に切り込みが設けられている。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内外面に柿色の鉄釉を施し、体部外面から底部は釉を拭う。底部外面に輪状の重ね焼き痕。	5点接合
第442図 PL.357	5建 27	志戸呂陶器 灯明受皿	1/3	口 底	(7.1) (5.6)	高	2.5	夾雑物微量/にぶい黄褐	受け部端部は口縁部より背が高い。焼成前に２か所切り取られ孔が穿たれる。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と口縁部外面から底部の一部に錆釉。体部外面から底部は無釉。	
第442図 PL.357	5建 28	肥前磁器 青磁香炉	ほぼ完形	口 底	11.1 7.2	高	8.4	夾雑物なし/灰白	76点の小片からなる。口縁端部は平坦をなし、内側に肥厚する。口縁部内面から外面は青磁釉。高台は蛇の目凹形高台。体部内面と底部外面は無釉。	17隻末から 18世紀前半 波佐見窯Ⅴ－ 1期
第442図 PL.357	5建 29	瀬戸・美濃 陶器 片口	ほぼ完形	口 底	16.8 9.3	高	10.8	夾雑物少量/浅黄	66点の小片からなる。口縁端部直下外面に凹線が巡り、体部中位に螺旋状沈線が巡る。内面から体部外面下位に褐色の飴釉、体部下位から高台は無釉。底部内面に３か所の重ね焼き痕。	
第442図 PL.358	5建 30	瀬戸・美濃 陶器 片口	1/2	口 底	(19.0) (11.9)	高	13.3	夾雑物少量/淡黄	54点の小片からなる。口縁部下に沈線が巡る。口縁部内面から体部外面および高台際に灰釉。体部内面から底部、高台は無釉。底部は低い高台が削り出される。体部内面の底部寄りに指押さえの痕跡。	
第442図 PL.357	5建 31	肥前磁器 染付小香炉	1/3	口 底	(6.4) －	高	－	夾雑物なし/白	10点の小片からなる。口縁端部は平坦をなし、内側に肥厚して、かえりを形作る。体部に不明文。口縁部内面から外面に透明釉。体部内面は無釉。	1D区出土破片と接合 5号建物に直接伴わないか
第442図 PL.357	5建 32	肥前磁器 白磁猪口	3/4	口 底	7.2 3.3	高	5.5	夾雑物なし/白	24点の小片からなる。口縁部外面に螺旋状細線が巡る。高台に砂が付着。内外面に透明釉、貫入が入る。	18世紀前半 南側石列中 出土破片と 接合
第442図 PL.357	5建 33	肥前磁器 白磁御神酒 徳利	口縁部	口 底	1.7 －	高	－	夾雑物なし/白	無文で円柱状、口はやや開く。	2点接合
第442図 PL.357	5建 34	肥前磁器 染付雛徳利	下半部1/2	口 底	－ 2.8	高	－	夾雑物なし/白	体部外面に梅花や笹を描く。内面は無釉。	2点接合

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第442図 PL.358	5建 35	瀬戸・美濃 陶器 甕	胴部下位破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/灰黄	胴部下位は無釉。内外面に柿色の鉄釉。	4点接合
第442図 PL.358	5建 36	産地不詳陶器 鉢	口縁部～体部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/灰白	15点の小片からなる。口縁部下外面は凹線が数条巡り、指頭圧痕による歪み。口縁部内面から外面は灰釉、貫入が入る。体部内面上半は薄く灰釉を施す。	
第442図 PL.358	5建 37	在地系土器 火鉢か	3/4	上 下	23.5 20.4	高	10.7	白色片を含む/橙	125点の小片からなる。箱形を呈する。平面形は正方形に近く、側面形は上方に向けてわずかに外傾する。口縁端部は平坦をなす。各側面には墨が付いている。底部内面中央に押し型の菊花文と「京」の銘。	PL.301
第443図 PL.358	5建 38	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.9 4.0	高 重	4.0 146.0	－	口縁がやや丸みを帯びる。高大の高さは0.8cm。口縁部の立ち上がりが高く、一回り小さい銅鋺が内側に癒着していた。	PL.295
第443図 PL.358	5建 39	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.8 3.9	高 重	4.2 131.0	－	口縁はやや丸みを帯びる。高台の高さは0.8cm。一部に金色光沢が見える。わずかに紙とみられる有機質が残存する。	PL.295
第443図 PL.358	5建 40	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.8 3.9	高 重	4.0 115.3	－	劣化により、表面は一部剥離している。口縁端部がやや丸みを帯びる。口縁の外反の位置が上から0.4cm。高台の高さは0.8cm	PL.295
第443図 PL.－	5建 41	銅製品 銅鋺	完形	口 台	(9.3) 4.0	高 重	4.2 145.8	－	体部から口縁部にかけて潰れて変形している。口縁端部はやや丸みを帯びている。高台の高さは0.8cm。	PL.295
第443図 PL.358	5建 42	銅製品 銅鋺	完形	口 台	(3.5) 4.0	高 重	(3.4) 130.7	－	外面の一部に木質が付着しており、収納していた箱の破片とみられる。口縁部には紙が付着している。口縁部が扁平に押しつぶされて変形している。高台の高さは0.8cm。	PL.295
第444図 PL.358	5建 43	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.7 4.0	高 重	3.3 112.1	－	一回り大きい銅鋺に入って出土している。口縁は平らで、口縁部がやや急に開く。高台の高さは0.6cmとなる。	PL.295
第444図 PL.358	5建 44	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.6 4.3	高 重	3.1 105.7	－	口縁端部が平らになっている。他の鋺と重なって出土しており、わずかにゆがみが見られるが、ほぼ形状を維持している。高台の高さは0.5cm。	PL.295
第444図 PL.358	5建 45	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.5 4.4	高 重	3.2 90.3	－	口縁が他よりやや低い位置で外反し、口縁端部はほぼ平ら。高台は高さ0.5cm。	PL.295
第444図 PL.358	5建 46	銅製品 銅鋺	一部欠損	口 台	7.5 4.4	高 重	2.6 76.0	－	一方から強い力を受けて内側に入り込むように、１側面が潰れて破損している。高台の高さは0.5cm	PL.295
第444図 PL.358	5建 47	銅製品 銅鋺	完形	口 台	(7.4) 3.5	高 重	(3.9) 129.6	－	４本の沈線の帯が入り、他の沈線がまわっている銅鋺が小さいことから灑水器とみられる。高台の高さは１cm。高台の一部が底部にめり込み変形している。	PL.295
第444図 PL.358	5建 48	銅製品 銅鋺	完形	口 台	7.1 3.1	高 重	3.0 85.1	－	沈線を持つ銅鋺２点の内、小型であるため塗香器と見られる。沈線が５本回っており、上から２番目の沈線が接近している。高台の高さは0.6cm。	PL.295
第445図 PL.358	5建 49	銅製品 受台	完形	直 底	7.6 5.7	高 重	3.2 116.7	－	高台が変形し、皿部分がもゆがみが生じている。高台部分に木質が付着している。箱の破片とみられる。皿の中心部に円状の突起がまわるが、ゆがんでいるが直径は3.0cm。	PL.295
第445図 PL.358	5建 50	銅製品 受台	完形	直 底	7.6 5.0	高 重	3.2 117.6	－	わずかに高台内部の皿底部に金色の光沢が確認でき、挽物の痕跡もわずかに確認できるか。皿の中心部には円状の突起がまわり、直径は3.1cm。	PL.295
第445図 PL.358	5建 51	銅製品 受台	完形	直 底	7.8 5.2	高 重	3.15 118.1	－	一部、端部が変形し、箱の残片とみられる木質が残存する。皿の中心部には円状の突起がまわり、その直径は3.1cm。	PL.295
第445図 PL.359	5建 52	銅製品 受台	完形	直 底	8.1 5.5	高 重	3.4 114.9	－	高台が鋺内に入り、重なっている状態で出土している。箱の残片の木質が付着している。皿の縁は上にめくれて変形し、皿の中心部に直径3.1cmの突起が巡らされている。	PL.295
第445図 PL.359	5建 53	銅製品 受台	完形	直 底	7.6 4.7	高 重	3.2 114.5	－	側面、上面に木片が付着している。収納していた箱の破片とみられる。皿の中心部に直径3.1cmの円形の突起がまわっている。	PL.295
第445図 PL.359	5建 54	銅製品 受台	完形	直 底	7.7 5.2	高 重	3.0 119.5	－	皿の接続部から高台がわずかに広がる。中心部に直径3.1cmの円形の突起がまわっている。一部変形が見られる。	PL.295
第446図 PL.359	5建 55	銅製品 受台	完形	直 底	6.8 4.4	高 重	2.4 88.8	－	やや小さめの受台である。皿の中心部に円状の突起がまわるが、直径2.4cmと小さい。塗香器に対応するものとみられる。皿の口縁部の立ち上がりは緩やかである。	PL.295
第446図 PL.359	5建 56	銅製品 蓋	完形	直 摘	7.6 0.9	高 重	2.7 54.5	－	紐状が摘に巻き付けられている。木質破片が付着しているが、箱の破片とみられる。やや大きさが小ぶりな事から、塗香器に付随するものと思われる。	PL.295

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第446図 PL.359	5建 57	銅製品 五鈷鈴	完形	長 径	14.4 6.5	高 重	14.4 321.2	–	鬼目式素文鈴である。嘴形は小さく、中鈷と脇鈷が一体化している。内部に円錐径の舌が残り、吊り手部分に有機質の紐痕跡が残存している。鈷部の一部に紙状の有機質が付着している。	PL.295
第446図 PL.359	5建 58	銅製品 三鈷杵	完形	長 幅	10.5 3.0	厚 重	0.9 44.4	–	中鈷と脇鈷が完全に一体化している。脇鈷の下部にわずかに嘴形が見られる。把部は錆で劣化し不明瞭。	PL.295
第446図 PL.359	5建 59	木製品 不明	破片	長 幅	2.15 5.5	厚 重	0.45 0.7	–	六器などが入っていた箱の縁部分か。詳細不明。	PL.295
第446図 PL.359	5建 60	鉄製品 釘	完形	長 幅	4.85 1.2	厚 重	0.9 3.9	–	錆に覆われている。頭部の折り返されている様子が明瞭である。	PL.295
第446図 PL.359	5建 61	鉄製品 釘か	一部欠損	長 幅	5.05 0.7	厚 重	0.45 4.9	–	断面長方形の釘とみられる。両端部が欠損しており、詳細不明。	
第446図 PL.359	5建 62	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.6 1.6	厚 重	0.55 3.0	–	頭部が欠損する。頭部に近い体部で折れ曲がる。	
第447図 PL.359	5建 63	銅製品 金剛盤	完形	縦 横	20.7 14.7	高 重	3.5 357.9	–	印が書かれている折本が中心に錆によって付着している。形状は大きくはひし形でそれぞれの角が心葉形となる。縁には稜がめぐり、周囲を縁に沿って２重の毛彫りが見られる。足は猫足で底面から接続し、盤上でカシメられている。底部には「信州小県郡塩田組ヵ町屋村盛法院」の文字が彫られている。	PL.295
第448図 PL.–	5建 64	紙製品 残片						–	折本の一種とみられる。印と文章が描かれている。金剛盤に重なって付着していた文書がはがれた分について実測をおこなっている。箱の木材に文書が張り付いている状況が確認できる。	
第449図 PL.–	5建 64	紙製品 残片						–	上記と同様になっている。	
第450図 PL.359	5建 65	銅製品 柄香炉(蓋)	一部破損	径 –	7.3	厚 重	3.5 25.1	–	蓋は花の文様の透かしがあり、花弁のが彫られ表現されている。周辺にも葉が彫られている。	
第450図 PL.360	5建 66	銅製品 柄香炉	一部破損	長 幅	28.8 8.5	厚 重	4.0 –	–	底部が抜けており、蓋も一部欠損する。鎮子の装飾はない。台座の形状は丸い。蓋は花の文様の透かしがあり、花弁のが彫られ表現されている。周辺にも葉が彫られている。	PL.298
第450図 PL.359	5建 67	銅製品 花瓶	一部欠損	長 幅	– –	厚 重	– –	–	底部が抜けている。体部がくびれ、上部が小さくなり、頂部には穴があいている。	
第451図 PL.360	5建 68	銅製品 不明	完形か	長 幅	18.7 18.6	厚 重	4.6 238.1	–	円形の銅板の縁を立ち上がらせたもの。円周に穴が開けられ、固定できるようにしてある。全体が変形しており、付着物等も確認できないことから、使用用途不明。	
第451図 PL.360	5建 69	鉄製品 釜	ほぼ完形	長 幅	31.8 31.2	厚 重	9.7 1970.7	–	口縁部裏に木質が残存する。また、底部にすすがないことから口縁部で木製枠にかけたとみられる。全体がさびで覆われており、湯口などは不明瞭。	
第452図 PL.360	5建 70	銅製品 柄鏡	完形	長 幅	26.5 17.5	厚 重	0.4 302.6	–	背の文様は、三割銀杏、変わり折熨斗、丸に花菱。その他に牡丹、菊、紅葉が描かれている。銘は藤原光長。鏡面には紙状の有機質が付着している。持ち手部分は劣化が見られる。	PL.298
第452図 PL.360	5建 71	銅製品 不明	ほぼ完形	長 幅	– –	厚 重	– –	–	内部が空洞の銅製品。底部とみられる部分は内側円周に薄い金属の突起を持つ。	
第452図 PL.360	5建 72	銅製品 花瓶か	一部	長 幅	– –	厚 重	– –	–	口縁部の折り返し部分が残り、体部に膨らみとくびれを持つ。全体が圧力でつぶされており、詳細不明。一部有機質が付着している。	
第453図 PL.360	5建 73	銅製品 垂木金具	完形	長 幅	10.2 4.3	厚 重	4.3 84.2	–	木質が残存している。表は四角く、中心部に穴が開いている。銅板を側面は折りまげて立ち上げ、釘で３か所固定している。	
第453図 PL.360	5建 74	銅製品 不明	破片	長 幅	3.4 3.1	厚 重	0.7 4.2	–	木製品に３か所で固定すると見られる。銅製の棒に銅板をかぶせる形で棒を固定する。	
第453図 PL.360	5建 75	銅製品 蝶番金具	一部欠損	長 幅	(8.0) (3.2)	厚 重	(1.7) (7.6)	–	小さめの釘が使われ３か所で木製品に固定すると見られる。同位置で対になると思われる金具が出土している。	
第453図 PL.360	5建 76	銅製品 飾り金具	完形	長 幅	8.1 3.0	厚 重	1.0 10.3	–	木製品の端部にかぶせてある金具。木製品には４か所を鋲で固定してある。	
第453図 PL.360	5建 77	銅製品 垂木金具	一部欠損	長 幅	6.7 6.8	厚 重	4.3 43.7	–	木材の先端部に覆い被せるように付けられていた四角形の四辺を立ち上げた金具。四辺には木材に固定する釘穴が３か所ほどあき、表面の中心部にも用途不明の穴があく。圧力により、曲がってしまっている。	
第453図 PL.360	5建 78	銅製品 金具付き木製品	破片	長 幅	12.0 3.5	厚 重	1.9 9.6	–	短冊状の木材に金具が付けられ、円形の金具が取り付けられている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第453図 PL.360	5建 79	銅製品 金具付き木製品	破片	長 幅	12.8 9.6	厚 重	1.0 32.4	－	短冊状の木質を金属の金具で留めているもの。詳細不明。	
第453図 PL.360	5建 80	銅製品 吊り金具	完形	長 幅	14.2 2.3	厚 重	2.5 10.7	－	銅製の小型吊り金具が２点付く木製品の一部。木製品の表面には塗りが見られる。金具は３か所に等間隔に取り付けられていたが１点欠損する。金具は板状の細い銅の上部を丸める形で作られる。	
第453図 PL.360	5建 81	銅製品 飾り金具	完形	長 幅	11.8 1.2	厚 重	0.7 6.3	－	赤漆塗りの木製品に銅板が２か所で釘によって留めてある。銅板の両端は尖り、先端を丸くする。	
第453図 PL.360	5建 82	木製品 不明	一部	長 幅	9.0 2.0	厚 重	0.8 2.3	－	漆塗りの木製品。ほぼ破片だが、角がしっかりと立つ事から、厚みは当時の状態と見られる。	
第453図 PL.360	5建 83	木製品 不明	破片	長 幅	6.5 1.6	厚 重	1.0 1.6	－	木質に鋲の痕跡が残存している。どういった製品の部材であるかは不明。	
第453図 PL.360	5建 84	銅製品 鋲か	完形	長 幅	1.2 1.2	厚 重	0.4 0.9	－	円形の鋲状の銅製品。内側から金属の棒が伸びており、その端部は欠損している。	
第454図 PL.361	5建 85	銅製品 飾り金具	ほぼ完形	長 幅	7.0 10.1	厚 重	1.0 50.9	－	中心に心葉形の穴が開けられ、心葉形の穴の上部両側に円形の穴が開けられる。取り付けられていた板状の木質が残存しており、金具の鉄板を折り返す形で取り付けられている。	
第454図 PL.361	5建 86	木製品 敷居	破片	長 幅	(10.8) 8.0	厚 重	2.3 65.7	－	２本が確認できる敷居。長さは破損しており発見されていないため、わからない。溝の幅は2.2㎝、深さ0.4㎝。	
第454図 PL.361	5建 87	木製品 版木か	一部欠損	長 幅	(16.1) 4.2	厚 重	2.7 11.6	－	「奉請・・」との文字が確認できる。表面が劣化し、一部しか残存していない。	
第454図 PL.361	5建 88	銅製品 留め金具	一部欠損	長 幅	4.9 1.6	厚 重	0.4 4.3	－	扉や蓋などを閉めるために使用する金具か。一方に小さな銅製の釘がつけられている。反対側は四角く穴が開けられている。	
第454図 PL.361	5建 89	鉄製品 火打金か	破片	長 幅	3.4 2.2	厚 重	0.95 4.5	－	かすがい形。金属片が付着しており、使用時からのものかは不明。	
第454図 PL.361	5建 90	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	6.3 3.5	厚 重	1.3 10.4	－	頭部、脚部が欠損している。途中から曲がる。	
第454図 PL.361	5建 91	銅製品 煙管(雁首)	破片	長 幅	2.0 1.8	厚 重	0.4 1.2	－	煙管の雁首の火皿口縁部の破片。内側にめり込むように破損している。	
第454図 PL.361	5建 92	鉄製品 刀子	一部	長 幅	8.1 2.7	厚 重	0.8 15.6	－	全体が錆で覆われており、内部も劣化により空洞化している。断面形状より刀子と見られる。	
第454図 PL.361	5建 93	鉄製品 金具	一部	長 幅	－ －	厚 重	－ －	－	門扉の金具か。上部に円形の穴があり閂などを通すか。中部には横方向の木目を持つ木片が付着する。下部は先割れで固定するように先が広がる。	
第454図 PL.361	5建 94	銅製品 留め金具か	一部欠損	長 幅	7.2 3.4	厚 重	0.4 13.4	－	先割れ鋲で２枚の鉄板を接合している。折れ曲がり重なっている。	
第454図 PL.361	5建 95	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	5.2 0.7	厚 重	0.7 2.6	－	頭部が欠損する。	
第454図 PL.361	5建 96	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	4.6 1.2	厚 重	1.1 2.0	－	頭部が欠損する。縦方向の木質が錆化している。	
第454図 PL.361	5建 97	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.4 1.7	厚 重	0.9 2.8	－	頭部が欠損し、脚部が曲がる。	
第454図 PL.361	5建 98	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	2.0 －	厚 重	0.3 －	－	脚部が欠損する釘。頭部の折れは確認できる。	
第454図 PL.361	5建 99	銅製品 不明	完形	長 幅	1.9 0.65	厚 重	0.7 1.1	－	小さな釘状の銅製品。頭部は無く断面円形。	
第454図 PL.361	5建 100	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	2.7 1.5	厚 重	0.8 1.8	－	脚部が欠損する釘。横方向の木目が確認できる。頭部の形状は確認できないが割れがないため錆の中に残っているとみられる。	
第454図 PL.361	5建 101	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	5.0 －	厚 重	－ －	－	頭部の欠損する釘。横方向の木目を持つ木質が付着している。	
第454図 PL.361	5建 102	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	4.0 －	厚 重	－ －	－	頭部の欠損している釘。木質等は確認できない。	
第454図 PL.361	5建 103	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	3.0 －	厚 重	－ －	－	脚部が欠損している釘。下半分に横方向の木目を持つ木質が残存している。	
第454図 PL.361	5建 104	鉄製品 たがねか	完形	長 幅	27.9 4.3	厚 重	2.7 315.3	－	頭を持ち、体部の断面は長方形。先端部は徐々に薄くなり、尖る。刀子が癒着しているが、錆で固まっているため詳細不明。	
第455図 PL.361	5建 105	銅製品 やかん	一部欠損	長 幅	－ －	厚 重	－ －	－	小ぶりのやかん。底部が欠損している。注ぎ口、つるの状態は良好だが、全体が潰れて形状は維持していない。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第455図 PL.361	5建 106	銅製品 不明	 完形	長 幅	12.0 12.8	厚 重	8.0 –	–	円形の銅板の縁を立ち上がらせたもの。立ち上がり部分に一部釘穴が確認できる。表面にも釘穴とみられる穴がある。	
第455図 PL.–	5建 107	鉄製品 つる	 1/2	長 幅	26.1 0.6	厚 重	0.5 39.5	–	途中から折れている鍋のつる。断面長方形でねじれは見られない。耳にかける部分が片方のみ残っている。	
第455図 PL.361	5建 108	鉄製品 つる	 1/2	長 幅	– –	厚 重	– –	–	一方の端部が残存する鍋のつる。耳にかける部分でねじれはない。断面長方形。	
第455図 PL.361	5建 109	銅製品 銅鋺か	 1/2	長 幅	7.6 3.7	厚 重	2.0 33.1	–	形状が潰され変形している。口縁と見られる部分は縁を折りたたんで作られている。体部から下は欠損する。	
第455図 PL.361	5建 110	銅製品 ローソク立	 完形	長 幅	5.9 4.9	厚 重	(4.0) 12.2	–	幅0.5㎝の細い銅板を円形にして台座を作り、そのまま捻って立ち上げる。	PL.299
第455図 PL.361	5建 111	銅製品 灯芯おさえ	 完形	長 幅	– –	厚 重	– –	–	全体が圧力によりつぶれている。薄く細長い銅板を下部は丸く円形にし、ねじって上に立ち上げる。	
第455図 PL.361	5建 112	銅製品 ローソク立	 完形	長 幅	4.5 4.1	厚 重	4.5 10.0	–	円形の銅製品の中心に先が細くなる筒を接続している。円形の銅製品の円周部は0.2㎝で折られ、立ち上がる。	PL.299
第455図 PL.361	5建 113	銅製品 不明	 1/3	長 幅	4.8 2.2	厚 重	0.2 2.6	–	断面円形の弧状銅製品。円環状になると想定し、残存率を1/3とした。	
第455図 PL.361	5建 114	銅製品 銅線	 1/3	長 幅	– –	厚 重	– –	–	円状になるとみられる銅線の一部。端部が劣化する。	
第455図 PL.361	5建 115	鉄製品 灯明皿	 完形	長 幅	– –	厚 重	– –	–	柄部分は欠損している。湯口が明瞭で底部に高台状の突起がある。一部割れが見られる。	
第455図 PL.361	5建 116	銅製品 不明	 一部欠損	長 幅	8.6 0.6	厚 重	0.4 3.0	–	銅の棒。一方が細くなっている。断面形状は丸い。	
第455図 PL.361	5建 117	銅製品 鈴棒か	 完形	長 幅	7.4 1.2	厚 重	1.2 33.3	–	先端が太くなり、段がつけられる。先端に何か付けられていたと思われる。	
第456図 PL.362	5建 118	鉄製品 鎌	 2/3	長 幅	– –	厚 重	– –	–	木質の柄の一部が残存する。目釘、口金の残存状況は良好。刃先が欠け、刃の様子は確認できない。	
第456図 PL.362	5建 119	鉄製品 鎌	 1/3	長 幅	– –	厚 重	– –	–	ほぼ刃が欠ける鎌。口金は確認できるが、柄や目釘などは木質に覆われ、確認できない。	
第456図 PL.362	5建 120	銅製品 十能か	 1/3	長 幅	– –	厚 重	– –	–	木質の柄が残存し、それを包むように銅板をかぶせて反対側から目釘のようなもので留めていたと見られる。柄から先は薄い銅板を広げ伸ばしているため、十能であると推定した。	
第456図 PL.362	5建 121	鉄製品 鍵	 完形	長 幅	5.0 2.9	厚 重	1.0 5.9	–	上部に円環を持ち、下部は２か所突起が出る。下部の内部は空洞となっている。	
第456図 PL.362	5建 122	銅製品 金具	 完形	長 幅	2.9 1.9	厚 重	1.1 4.8	–	木質に穴が開いているに取り付けられていた金具と見られる。木製品が残存していないため、詳細は不明。留め具の足部分は欠損しているか。	
第456図 PL.362	5建 123	鉄製品 不明	 完形か	長 幅	– –	厚 重	– –	–	全体が錆に覆われていて詳細不明。棒状の金属製品に環状の金属製品が癒着している。	
第456図 PL.361	5建 124	鉄製品 不明	 完形	長 幅	– –	厚 重	– –	–	端部に縦方向の木目を持つ有機質が付着している。断面長方形の棒状の鉄製品。用途不明。	
第456図 PL.362	5建 125	鉄製品 刀子	 一部欠損	長 幅	9.6 1.9	厚 重	1.3 14.7	–	茎の一部と刃先が欠損する。木製の柄、柄の元部分の刀子に直交する有機質痕が錆と一体になり確認できる。責金具の一部も残存する。	
第456図 PL.362	5建 126	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.2 1.7	–	文字、輪、郭は不明瞭。やや面側に曲がり、ゆがんでいる。	
第456図 PL.362	5建 127	銭貨 新寛永	 ほぼ完形	外 内	2.0 1.7	厚 重	0.1 0.9	–	輪の一部が欠損している。彫は浅く、径が小さい。文字は不明瞭。	
第456図 PL.362	5建 128	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 2.3	–	背文。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	
第456図 PL.362	5建 129	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 1.5	–	背足。彫はやや浅いが文字、輪、郭は明瞭。錆がやや多く見られる。	
第456図 PL.362	5建 130	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.3 1.7	厚 重	0.1 1.4	–	背元。面、背の文字、輪、郭は明瞭。輪の一部がわずかにかける。	
第456図 PL.362	5建 131	銭貨 洪武通寶	 1/3	外 内	– –	厚 重	0.2 0.8	–	背の彫は非常に浅い。面の「武」の文字が確認でき、洪武通寶とした。面はやや明瞭。	
第456図 PL.362	5建 132	銭貨 新寛永	 ほぼ完形	外 内	2.2 1.7	厚 重	0.1 1.3	–	背元。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。横やすりが見られる。一部割れてねじれる。	
第456図 PL.362	5建 133	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 1.5	–	２片に割れ、劣化が見られる。面、背ともに劣化によりやや不明瞭。	
第456図 PL.362	5建 134	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.5 1.9	厚 重	0.2 2.2	–	一部割れが生じている。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第456図 PL.362	5建 135	銭貨 新寛永	 ほぼ完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.2 1.4	–	背元。背に斜め方向のやすり目が見られる。輪の一部が欠損し、変形している。面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第457図 PL.362	5建 136	石製品 温石	4/5	長 幅	12.6 6.5	厚 重	2.1 288.2	蛇紋岩	表裏面には広範囲に表層的な剥落が認められるがそれ以外の部分は全体的に非常に滑らかであり研磨整形される。上方に認められる孔は中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。	
第457図 PL.362	5建 137	石製品 硯	4/5	長 幅	24.7 12.2	厚 重	3.8 2069.1	頁岩	硯面は非常に滑らかであり主に縦方向の線条痕が多く認められる。縁から硯側にかけては黒色物質の付着が認められ色付け塗装の可能性がある。硯背の下半部には浅い内刳が認められる。内刳の中央には「極上虎班石」の文字線刻が認められる。「班」は「斑」の誤記であろう。	PL.300
第457図 PL.362	5建 138	石製品 石鉢	2/3	径 内	40.0 33.0	高 重	23.0 –	粗粒輝石安山岩	石鉢。蓋を置くための段があり、底部よりもやや上の側面に斜めに内径4.0㎝・外径3.0㎝の孔が開く。底径21.5㎝。植木鉢は底に孔が開くが、これは斜めに開いている。また、蓋付きで猫や鳥に中のものが食べられない工夫がされており、建物外側の入口脇に設置されていたことを考慮すると金魚鉢の可能性も否定できない。	
第457図 PL.–	5建 139	礫 円礫	完形	長 幅	24.0 22.0	厚 重	5.0 –	–	扁平な円礫素材。研磨されているものと思われる。	
第457図 PL.363	5建 140	礫 礎石	完形	長 幅	64.0 39.0	厚 重	10.0 –	粗粒輝石安山岩	大形扁平円礫利用。礎石としてはかなり大きい。両面とも比較的平坦である。「又八」の墨書有り。西側にしゃがみ込んで書いたものと思われる。	
第457図 PL.363	5建 141	礫 礎石	完形	長 幅	49.0 13.5	厚 重	13.5 –	粗粒輝石安山岩	大形扁平円礫利用。遺跡から運んだ礎石の中では最も小さいが、礎石としてはかなり大きい。ごろっとした感じではあるが、表裏両面とも比較的平らである。「又四」の墨書有り。西側にしゃがみ込んで書いたものと思われる。	
第458図 PL.363	5建 142	礫 礎石	完形	長 幅	65.0 56.0	厚 重	17.5 –	粗粒輝石安山岩	大形角礫利用。礎石としてはかなり大きい。上面は平坦であるが、下面は下に出っ張った形となり、埋めて水平にした可能性が高い。「又三」の墨書有り。西側にしゃがみ込んで書いたものと思われる。	
第458図 PL.363	5建 143	礫 礎石	完形	長 幅	60.0 38.0	厚 重	11.5 –	粗粒輝石安山岩	大形扁平円礫利用。礎石としてはかなり大きい。表裏両面とも比較的平坦である。墨書なし。柱の並びを見ると墨書のある礎石並びよりは外側にズレるので元々墨書が無かった可能性がある。	

池状遺構・築山・３号石垣

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第458図 PL.363	池1	肥前陶器 陶胎染付碗	下半部1/3	口 底	– (5.0)	高	–	夾雑物なし/灰	体部外面に樹木を描く山水文か。体部下位と高台境、高台に圏線。高台端部を除き内外面は透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	18世紀 2点接合
第458図 PL.363	築山 1	肥前磁器 青磁染付筒碗	口縁部1/3	口 底	(9.0) –	高	–	夾雑物なし/白	外面は青磁釉。口縁部下内面に四方襷文、透明釉。	18世紀 3点接合
第458図 PL.363	築山 2	瀬戸・美濃 陶器 天目碗	口縁部破片	口 底	– –	高	–	夾雑物微量/灰白	口縁端部は内側に反り、先端は尖る。内外面に鉄釉。	17から18世紀
第458図 PL.363	築山 3	石製品 下臼	1/2	径 内	29.5 –	高 重	12.5 –	粗粒輝石安山岩	粉引臼下臼。擦り合わせ面が３㎝出る凸形の東国形。底面中央も３㎝凹む。６分画主副溝７～８本。厚さ9.5㎝と薄い。心棒孔φ２㎝貫通。丁寧に加工されているが、側面一部欠損。	
第458図 PL.–	石垣 1	肥前磁器 染付碗	1/4	口 底	(10.4) 3.8	高	5.2	夾雑物微量/灰白	外面に雪輪梅樹文か。体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文か。	底部内面に酸化鉄様の付着物 5点接合
第458図 PL.–	石垣 2	肥前磁器 染付碗	口縁部1/3	口 底	(9.8) –	高	–	夾雑物なし/灰白	外面に雪輪梅樹文、内面は無文か。	18世紀後半 6点接合
第458図 PL.–	石垣 3	肥前磁器 染付碗	口縁部1/3	口 底	(10.8) –	高	–	夾雑物微量/灰白	外面に植物の花を描く、内面は無文か。	2点接合
第458図 PL.363	石垣 4	京・信楽系 陶器 碗	体部下位～高台部	口 底	– 4.8	高	–	夾雑物微量/淡黄	底部内面に鉄絵具で線状の不明文を描く。内面から高台際に透明釉、貫入が入る。高台は無釉で削り出している。	9点接合
第458図 PL.363	石垣 5	瀬戸・美濃 陶器 皿	2/3	口 底	11.0 6.6	高	2.3	夾雑物少量/灰黄	体部以下外面は回転ヘラケズリ。高台は低い。内面は無文。内面から高台内の一部に長石釉、貫入が入る。	江戸時代 志野皿 5点接合

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第458図 PL.363	石垣 6	瀬戸・美濃 陶器 皿	ほぼ完形	口 底	9.9 6.0	高	2.2	夾雑物少量/浅黄	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と口縁部外面に黄褐色の飴釉。内面に５か所の重ね焼き痕。	江戸時代 2点接合
第459図 PL.363	石垣 7	瀬戸・美濃 陶器 瓶	体部破片	口 底	− −	高	−	夾雑物微量/淡黄	外面に鉄絵で不明文、長石釉を掛ける。内面は無釉。	17世紀か 3点接合
第459図 PL.363	石垣 8	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	1/2	口 底	(11.4) (4.6)	高	2.0	夾雑物微量/褐灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面に重ね焼き痕。内外面に錆釉を施し、外面は釉を拭う。	8点接合
第459図 PL.−	石垣 9	肥前磁器 青磁香炉	体部下位～底部破片	口 底	− 3.5	高	−	夾雑物微量/灰白	体部外面から腰部と底部内面に青磁釉。腰部外面に脚が１か所付き無釉。底部は削り出して、中央がへこむ。高台は無釉。	江戸時代
第459図 PL.363	石垣 10	瀬戸陶器 すり鉢	1/3	口 底	(29.8) (12.0)	高	10.6	夾雑物少量/淡黄	口縁部は内側に逆「く」の字形に屈曲。体部外面は回転ヘラケズリ。底部は右回転糸切り離し後無調整。内面には15本一単位のクシ目。内外面に錆釉。器面は使用によりやや磨滅している。割れ口に漆継ぎの痕跡が見られる。	18世紀第4四半期 瀬戸窯第3段階第8小期 12点接合
第459図 PL.−	石垣 11	銅製品 煙管(吸口)	一部欠損	長 幅	4.6 1.0	厚 重	− −	−	肩を持つ吸口。肩の長さは2.9㎝。つなぎ目は良好。	
第459図 PL.−	石垣 12	銅製品 不明	一部欠損	径	3.4	厚 重	0.2 −	−	円形の銅板。一部折り返される部分があるが、圧力で変形した戸見られる。	
第459図 PL.−	石垣 13	鉄製品 釘	完形	長 幅	− 0.4	厚 重	0.4 −	−	横方向の木目を持つ木質が付着している。頭から約3.5cmの所で折れている。	

泥流中・３号建物(薬師堂)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第459図 PL.363	泥流 1	肥前磁器 染付皿	1/3	口 底	(13.8) (7.5)	高	3.2	夾雑物なし/白	口縁部はゆるく波打ち、口縁端部を塗りつぶす。外面は型紙摺りの岩松文。体部下位と高台境に圏線。高台は蛇の目凹形高台。内面は型紙摺りの梅花文で隙間を点で埋める。見込みは笹文か。	19世紀中頃 3点接合
第459図 PL.363	泥流 2	在地系土器 鉢か	口縁部破片	口 底	− −	高	−	白色鉱物粒含む/にぶい赤褐	口縁端部は平坦面をなす。内側がそがれ、尖る。器面はヨコナデ。	
第459図 PL.363	泥流 3	鉄製品 不明	完形か	長 幅	− −	厚 重	− −	−	板状の金属製品に環状の金属と棒状の金属が接続されている。	
第459図 PL.363	泥流 4	鉄製品 不明	一部欠損	長 幅	− −	厚 重	− −	−	L字型の金属製品。両端部は欠損している。断面は丸い。	
第459図 PL.363	泥流 5	鉄製品 飾り金具か	一部欠損	長 幅	1.9 2.1	厚 重	2.2 3.8	−	半球形の金属製品。内部は空洞で中心に上下を貫く金属棒が付けられる。底面には木質痕が確認できる。	
第459図 PL.363	泥流 6	鉄製品 釘	完形	長 幅	8.0 0.6	厚 重	0.4 −	−	頭部が折り返されているが、全体が錆に覆われており詳細不明。	
第459図 PL.−	3建 1	龍泉窯系青磁 不明	口縁部片	口 底	− −	高	−	夾雑物微量/灰黄	口縁端部は平坦をなし、内側に肥厚する。口縁部外面に粘土小塊を貼り付け。	13-14世紀
第459図 PL.363	3建 2	中国製磁器 蓋	口縁部破片	口 底	(11.0) −	高	−	夾雑物なし/灰白	口縁端部は端反り、口縁端部直下内外面に圏線。外面に花を描く。	16世紀 青花碗
第459図 PL.363	3建 3	瀬戸・美濃 陶器 端反皿か	1/4	口 底	(10.2) (6.1)	高	2.0	夾雑物少量/灰白	高台は低く、断面三角形の削り出し高台。内面から高台の一部に長石釉、高台は無釉。	2点接合
第459図 PL.363	3建 4	瀬戸・美濃 陶器 皿	1/3	口 底	(11.8) (7.1)	高	2.6	夾雑物少量/灰白	内面に鉄絵具で植物を描く。高台は低く、断面三角形の削り出し高台。内面から高台の一部に長石釉、貫入が入る。被熱の痕跡か、全体に煤が付着。	17世紀 志野皿 2点接合
第459図 PL.363	3建 5	銭貨 新寛永	完形	外 内	− −	厚 重	0.2 0.9	−	面の文字、輪、郭は明瞭。背は錆に多く覆われている。	
第459図 PL.363	3建 6	銭貨 新寛永か	3/4	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.4	−	面の文字は一部不明瞭。	
第460図 PL.364	3建 7	石製品 上臼	1/3	径	(27.0)	厚 重	14.0 −	粗粒輝石安山岩	粉引臼上臼。６分画主副線合わせて５本。径が小さい割に厚く重い作りになっている。	
第460図 PL.364	3建 8	石製品 下臼未製品？	完形	径	33.5	厚 重	15.5 −	粗粒輝石安山岩	粉引臼下臼未製品？面の反りを考慮すると図は天地逆か。上面径33.5㎝、下面径28.0㎝で中央にΦ9.0㎝深さ4.0㎝の凹み有り。やや厚く重い作りになっている。	
第460図 PL.364	3建 9	石製品 水輪	完形	長 幅	22.0 22.5	厚 重	14.0 −	粗粒輝石安山岩	別石五輪塔の水輪。径が小さく敷茄子ではないと考えられる。上面と下面にφ16.0㎝×深さ1.0㎝の凹みを有する。丁寧に加工されている。	H29-1業者委託№14

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第460図 PL.364	3建 10	石製品 請花(蓮台)	完形	長 幅	36.0 37.0	高 重	13.0 –	粗粒輝石安山岩	無縫塔の請花？上面にφ18.5㎝×深さ1.0㎝の凹みがあり、無縫塔の塔身(棹石)が乗り、下面にφ22.0㎝の加工痕が明瞭な部分があり、敷茄子に重ねるためのものと思われる。	
第460図 PL.364	3建 11	石製品 蓮台	完形	長 幅	34.5 34.0	高 重	18.5 –	粗粒輝石安山岩	上にφ22.5㎝の調整部分とφ12.0㎝深さ5.5㎝の凹みがあり、上に石仏などが乗るものと思われる。請花部分とその下の台のφは20.0㎝。	
第461図 PL.364	3建 12	石製品 敷茄子(水輪？)	完形	長 幅	17.5 17.5	高 重	6.5 –	粗粒輝石安山岩	径に対して厚みがなくかなり押し潰された形をしており、五輪塔の水輪ではなく敷茄子の可能性が高い。天面φ15.0㎝、地面φ14.0㎝。天面は加工痕はやや滑らか、地面はやや粗く工具痕が残る。	
第461図 PL.364	3建 13	石造物 台座	完形	長 幅	41.1 41.4	厚 重	19.7 51500	粗粒輝石安山岩	上面はほぼ平坦であり中央に円形の孔が認められる。孔の周囲はわずかに窪んでいる。上面の下方隅には比較的幅の広い溝状痕跡が認められる。側面部も比較的丁寧に整形されており一側面には文様が線刻される。底面の加工は粗く凹凸が認められる。	
第461図 PL.365	3建 14	石製品 基礎	ほぼ完形	長 幅	66.5 68.0	厚 重	20.0 –	粗粒輝石安山岩	無縫塔の基礎。70347の上にのるものと思われる。一辺40㎝の八角形の切石。丁寧に加工され、工具痕残る。上面にφ54㎝の八角形の凹みとその中心にφ38㎝の部分がある。	
第461図 PL.365	3建 15	石製品 框？	ほぼ完形	長 幅	97.0 96.0	厚 重	20.0 –	粗粒輝石安山岩	無縫塔の基礎の下の框？。70348の下に置かれるものと考えられる。一辺40㎝の八角形の切石。丁寧に加工され、工具痕残る。上面にφ68㎝の八角形の凹みとその中心にφ60㎝の部分がある。手前左右にφ３㎝の凹みが並ぶ。左端一部欠損。	

遺構外出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第462図 PL.365	1	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	８区復旧溝 高台部	口 底	– 2.8	高	–	夾雑物微量/灰	底部内面は灰釉。高台は無釉。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	江戸時代か 碗
第462図 PL.–	2	瀬戸・美濃 陶器 皿	６区５溝 高台部破片1/2	口 底	– (6.2)	高	–	夾雑物微量/暗灰	内面に灰釉を施し、底部に重ね焼き痕。高台の一部に灰釉、高台は無釉。	17世紀後半
第462図 PL.365	3	瀬戸・美濃 陶器 皿	６区53溝 底部破片1/2	口 底	(12.6) (6.2)	高	3.0	夾雑物微量/淡黄	内面に灰釉を施し、底部に重ね焼き痕。口縁部外面から高台は無釉。高台中央に焼成時の窯キズ。	18世紀
第462図 PL.365	4	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	６区53溝 1/3	口 底	(11.2) (5.0)	高	1.9	夾雑物少量/暗灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と体部外面上位まで錆釉。体部外面下位から底部は無釉。底部内外面に重ね焼き痕。	19世紀中頃
第462図 PL.–	5	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	６区53溝 1/4	口 底	(11.1) (5.0)	高	–	夾雑物少量/暗灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と体部外面上位まで錆釉。体部外面下位から底部は錆釉を拭う。底部内面に重ね焼き痕。	19世紀
第462図 PL.365	6	瀬戸・美濃 陶器 輪花皿	８区53溝 1/4	口 底	(13.0) (7.9)	高	3.2	夾雑物少量/灰	内面から口縁部外面に灰釉。内面に銅緑釉を掛け流す。口縁部はヘラで凹凸に整形。体部下位と高台は無釉。	17世紀 菊皿
第462図 PL.–	7	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区53溝 体部から高台部	口 底	– (4.0)	高	–	夾雑物少量/灰	底部内面と体部外面下位は灰釉、貫入が入る。体部下位と高台は無釉。	江戸時代
第462図 PL.365	8	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区53溝 口縁部から体部	口 底	(9.3) –	高	–	夾雑物少量/灰白	内面から口縁部下外面に灰釉、貫入が入る。体部中位に太い螺旋状凹線が巡り、体部上位から腰部は褐色の鉄釉。	18世紀 腰錆碗
第462図 PL.365	9	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区53溝 体部から高台部	口 底	– (4.6)	高	–	夾雑物少量/灰白	内面と体部外面下位から高台境、一部高台に褐色の飴釉。高台は無釉。	江戸時代
第462図 PL.365	10	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区53溝 口縁部から体部 1/4	口 底	(11.4) –	高	–	夾雑物微量/灰白	内面と体部外面下位に褐色の飴釉。	江戸時代
第462図 PL.365	11	肥前磁器 染付碗	７区53溝 体部下位から高台部	口 底	– 3.9	高	–	夾雑物なし/白	体部外面にコンニャク印判の蔦の葉文か。体部下位と高台境、高台に圏線。内面は無文。	18世紀
第462図 PL.365	12	瀬戸陶器 すり鉢	６区53溝 1/3	口 底	(32.4) (13.5)	高	13.2	夾雑物少量/淡黄	口縁部は外側に逆「く」字状に屈曲し、肥厚する。内面に15本一単位のクシ目。内面から体部外面下位に錆釉。体部外面は回転ヘラケズリ。体部外面下位から底部は錆釉を拭う。底部は回転糸切り離し後無調整。	18世紀後半

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第462図 PL.365	13	在地系土器 内耳鍋か	6区53溝 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	黒色鉱物、白色片を含む/黒	器肉薄い。口縁端部は平坦をなす。口縁部内面と体部の間に弱い段をなす。器面はヨコナデ。	中世
第462図 PL.365	14	肥前磁器 小碗	6区57溝 口縁部から体部破片1/4	口 底	(6.7) －	高	－	夾雑物なし/白	口縁部下外面と体部に圏線で区画し、斜線交叉文。	18世紀末
第462図 PL.365	15	肥前磁器 染付碗	6区57溝 2/3	口 底	(10.7) (4.0)	高	5.9	夾雑物なし/白	体部外面に格子に花、コンニャク印判の笹文。体部下位に圏線、高台境と高台、高台内に圏線。内面は無文。高台端部に砂が付着。割れた断面に漆継ぎの痕跡。	18世紀後半
第462図 PL.365	16	肥前磁器 染付皿	6区57溝 高台部破片1/2	口 底	－ (8.4)	高	－	夾雑物なし/白	内面の見込みに二重圏線。中央に木の葉を描く。底部外面、高台境と高台に圏線。高台内に圏線。高台脇を荒い叩打により円盤状に加工か。	17世紀後半 二次加工品か
第462図 PL.365	17	瀬戸・美濃 陶器 碗	5区57溝 体部から高台部1/3	口 底	(10.5) (4.6)	高	6.8	黒色片含む/灰	底部内面から体部と体部外面下位まで褐色の飴釉。体部外面中位に沈線が巡る。体部下位から高台は無釉。	18世紀 25道3と接合
第462図 PL.365	18	瀬戸・美濃 陶器 碗	6区57溝 1/3	口 底	(12.7) (4.2)	高	6.1	夾雑物微量/灰	内面から高台境外面まで灰釉。体部外面に鉄絵の柳文。内面は無文。高台は無釉。削り出し高台。	18世紀末 柳茶碗
第462図 PL.365	19	肥前陶器 陶胎染付碗	6区57溝 1/4	口 底	(10.5) (5.0)	高	7.4	黒色片を含む/黒	口縁部下外面に二重圏線。体部に唐草文。体部下位、高台境と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。体部内外面下位に焼成時の釉ムラ。	18世紀後半
第462図 PL.366	20	肥前陶器 陶胎染付碗	6区7道 口縁部破片	口 底	(9.7) －	高	－	夾雑物微量/暗灰	口縁部外面に崩れた四方襷文。体部外面に雲を描く。	18世紀 1倒木と接合
第462図 PL.366	21	土製品 土人形	5区3号水路 ほぼ完形	口 底	－ 3.9	高	5.2	夾雑物少量/喝灰	型を使用した粘土板の焼成品か。焼きはしっかりしている。底部に固定のための円孔がある。表面は屋根と鳥居の内部に衣冠束帯の神座像。裏面は四角の凹み。屋根部分の裏側に「大」。	0
第462図 PL.366	22	瀬戸・美濃 陶器 碗	7区1号石垣 1/3	口 底	(9.8) (4.7)	高	(5.3)	夾雑物微量/灰白	内面から体部外面中位に灰釉、貫入が入る。体部中位に太い二重の沈線が巡り、高台端部を除いて体部中位から高台は褐色の鉄釉。	18世紀 腰錆碗
第462図 PL.-	23	肥前磁器 皿	6区遺構埋土 口縁部破片	口 底	(14.0) －	高	－	夾雑物なし/白	口縁部は緩やかに外側に傾き、底部との境界は段になる。底部内面境に二重沈線が巡る。	江戸時代
第462図 PL.366	24	肥前磁器 染付瓶	8区1面 口縁部から首部	口 底	1.8 －	高	－	夾雑物なし/白	口縁部は外側に緩やかに開く。体部外面は植物文か。口縁部内面から外面に透明釉。	江戸時代か
第462図 PL.366	25	肥前磁器 染付仏花器	6区泥流下 首から体部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物なし/白	頸部と胴部の境界が二段になっており、1対の耳跡があるが欠損している。頸部外面から胴部に笹竹文か。内面は無釉。	18世紀
第462図 PL.366	26	肥前磁器 染付皿	8区1面 高台部破片	口 底	－ (10.7)	高	－	夾雑物なし/白	底部内面に不明文、墨弾きで渦巻き雲か。高台内に1か所のハリ支え痕。焼き継ぎ痕あり。	18世紀
第463図 PL.366	27	肥前磁器 染付小杯	5区1面 完形	口 底	6.2 7.4	高	2.6	夾雑物なし/白	口縁部は外側に端反り、開く。体部外面に雁と笹文。内面は無文。高台端部に砂が付着。	18世紀 紅皿か
第463図 PL.366	28	肥前磁器 染付仏飯器	5区21建物 口縁部から脚部2/3	口 底	(6.6) (3.7)	高	6.0	夾雑物なし/白	口縁部直下外面と体部中位を圏線で区画し、半菊文を描き、隙間を斜線交叉文で埋める。体部下位と脚境に圏線。内面から高台外面付近まで透明釉。	18世紀後半
第463図 PL.366	29	肥前磁器 染付筒碗	8区 ほぼ完形	口 底	7.2 3.5	高	5.2	夾雑物なし/白	口縁部直下外面と腰に圏線。体部外面に縦の二重線で区画し、雪輪文、四弁花と斜線交叉文で埋める。体部下位と高台境、高台に圏線。体部下位に不明文。口縁部内面に四方襷文。見込みに圏線、中央にコンニャク印判の五弁花。	18世紀後半
第463図 PL.366	30	肥前磁器 染付碗	8区1面 ほぼ完形	口 底	9.6 3.7	高	5.1	夾雑物なし/白	体部外面は雪輪梅樹文。体部下位と高台境、高台に圏線。高台に不明銘。内面は無文。	18世紀
第463図 PL.366	31	瀬戸・美濃 陶器 香炉	7区1面 1/5	口 底	(10.0) (7.9)	高	－	夾雑物少量/灰	口縁端部は内側にゆるく傾き肥厚する。口縁部下内面から体部外面下位まで褐色の飴釉。体部下位と底部は無釉。体部下位は回転ヘラケズリ後にナデ調整。脚が1か所残存	18世紀
第463図 PL.366	32	瀬戸・美濃 陶器 香炉	5区グリッド 体部下位から高台部破片1/4	口 底	－ (8.6)	高	－	夾雑物微量/灰	脚は1箇所残存。体部外面下位に鉄釉、体部中位に藁灰釉。底部内面から体部下位は灰釉。底部外面は無釉。腰部が外側に湾曲する。	江戸時代
第463図 PL.366	33	瀬戸・美濃 陶器 香炉か	8区 口縁部から腰部	口 底	－ (3.3)	高	－	夾雑物微量/灰	口縁端部は外側に傾く。口縁端部外面から腰部は灰釉。内面は無釉。	江戸時代
第463図 PL.366	34	瀬戸・美濃 陶器 皿	7区1面 1/4	口 底	(12.0) (7.3)	高	2.1	夾雑物少量/灰白	内面から体部外面下位に長石釉。底部は無釉。内面中央に小さな凹型のくぼみ。内面には鉄絵で放射状の区画線と花びらか。	17世紀 志野皿

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第463図 PL.366	35	瀬戸・美濃 陶器 皿	５区A泥流下畑 破片	口 底	－ (5.0)	高	－	夾雑物少量/灰白	内面に灰釉を施す。底部内面は蛇の目釉剥ぎ、見込みには梅花文を陰刻。体部外面下位から高台は無釉。	17世紀
第463図 PL.366	36	瀬戸・美濃 陶器 皿	６区グリッド 2/3	口 底	(12.0) (6.0)	高	3.0	夾雑物微量/灰	口縁部は外側に斜め上に立ち上がる。内面から体部外面下位は灰釉。底部内面には鉄絵で型紙摺の不明文。体部外面下位から高台は無釉。	18世紀 御深井製品
第463図 PL.－	37	瀬戸・美濃 陶器 小型香炉	７区１面 体部破片1/4	口 底	(5.4) －	高	－	夾雑物少量/灰	口縁端部は、内側に斜め下に傾き、肥厚する。口縁部内面のから体部外面下位まで灰釉。口縁部を除く内面と体部外面下位は無釉。	18世紀
第463図 PL.366	38	瀬戸・美濃 陶器 小碗	６区１面 1/2	口 底	(7.0) (4.0)	高	3.4	夾雑物少量/淡黄	内面から体部外面下位に灰釉。体部下位から高台は無釉。	18世紀
第463図 PL.366	39	瀬戸・美濃 陶器 小碗	７区１面 ほぼ完形	口 底	8.2 4.2	高	4.1	夾雑物微量/灰白	内面から体部外面下位は褐色の飴釉。体部下位から高台は無釉。高台は削り出し、低い。	18世紀
第463図 PL.366	40	瀬戸・美濃 陶器 折縁皿	６区遺構埋土 口縁部から高台部破片	口 底	(11.2) (6.4)	高	2.7	夾雑物微量/灰	口縁部は緩やかに外側に広がる。底部との境界は段になる。低い高台端部を除いて内外面に灰釉､貫入が入る。高台内に重ね焼き痕。	16世紀中頃 87号竪穴建物
第463図 PL.－	41	瀬戸・美濃 陶器 灯明皿	６区グリッド 口縁部破片	口 底	(10.8) －	高	－	夾雑物微量/暗灰	体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面と体部外面上位まで錆釉。体部外面下位は錆釉を拭う。口縁部内面に炭化物が付着。	江戸時代
第463図 PL.366	42	瀬戸・美濃 陶器 灯明受皿	７区１面 1/3	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/灰	受け部端は口縁部より背が低い。１か所、U字状に切り込みが設けられている。体部以下外面は回転ヘラケズリ。錆釉を施し、外面は釉を拭う。	江戸時代
第463図 PL.366	43	瀬戸・美濃 陶器 碗	７区１面 体部から高台部 1/3	口 底	－ －	高	－	夾雑物微量/灰白	口縁部は直立気味に立ち上がり、腰は外側にゆるく突き出す。内面から体部外面下位に黒色の鉄釉。腰部外面には長石釉を油滴状に散らす。体部下位と高台は無釉。	18世紀 長石散らし碗
第463図 PL.366	44	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	５区泥流下 高台部	口 底	－ 5.0	高	－	夾雑物微量/灰白	高台端部と高台内部は錆釉。底部内面は褐色の飴釉。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	江戸時代 碗
第463図 PL.366	45	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	６区グリッド 高台部	口 底	－ 5.0	高	－	白色片含む/灰	底部内面は褐色の飴釉。高台は無釉。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	江戸時代 碗
第463図 PL.366	46	瀬戸・美濃 陶器 二次加工品	８区 高台部	口 底	－ 5.5	高	－	夾雑物微量/淡黄	底部内面は褐色の飴釉。体部外面下位から高台は錆釉を拭う。高台脇を細かい叩打により円盤状に加工。	江戸時代 碗
第463図 PL.366	47	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区一面 4/5	口 底	10.1 4.4	高	7.1	夾雑物微量/灰白	内面から体部外面下位に灰釉。体部外面下位と高台は無釉。	18世紀
第463図 PL.366	48	瀬戸・美濃 陶器 碗	７区21道 体部から高台部	口 底	－ 4.4	高	－	白色片を含む/灰	体部外面に螺旋状凹線が巡る。内面から体部外面中位まで灰釉、貫入が入る。体部外面中位から高台端部を除く高台に褐色の鉄釉。高台端部は無釉。	江戸時代 腰錆碗
第463図 PL.366	49	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区１面 体部から高台部	口 底	－ (4.8)	高	－	夾雑物微量/灰	底部内面と体部外面下位は褐色の飴釉。体部下位から高台は無釉。削り出し高台。体部下位の無釉部に炭化物が付着。	18世紀
第463図 PL.366	50	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区A畑１面 高台部	口 底	－ 5.7	高	－	夾雑物微量/淡黄	底部内面と体部外面下位に灰釉、貫入が入る。体部下位と高台は無釉。	18世紀
第463図 PL.－	51	瀬戸・美濃 陶器 碗	８区 体部から高台部 破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物微量/灰	高台端部を除き底部内面と体部外面下位から高台は灰釉、貫入が入る。	江戸時代
第463図 PL.366	52	瀬戸・美濃 陶器 片口	８区A下西端 3/4	口 底	(15.1) 6.4	高	8.6	夾雑物少量/灰白	口縁端部は内側に傾き肥厚する。体部外面上位に螺旋状凹線が巡る。内面から体部外面中位に灰釉。体部中位から高台は無釉。底部内面に３か所の重ね焼き痕。削り出し高台。	18世紀
第464図 PL.366	53	瀬戸・美濃 陶器 型打皿	９区畑 4/5	口 底	14.3 5.6	高	3.6	夾雑物微量/灰褐	内面から高台境と高台の一部に灰釉、貫入が入る。高台は無釉。	18世紀 御深井製品
第464図 PL.366	54	肥前陶器 皿	８区 体部から高台部	口 底	－ (6.0)	高	－	夾雑物微量/褐灰	口縁部は外側に緩やかに立ち上がる。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。内面から体部外面下位は灰釉。体部下位から高台は無釉。	17世紀後半 から18世紀
第464図 PL.366	55	肥前陶器 陶胎染付碗	６区１面 1/2	口 底	(10.2) 4.2	高	6.5	夾雑物微量/灰	口縁部下外面に簡略化された四方襷文。体部外面に遠山からなる山水文か。体部下位と高台に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部に鉄銹。	18世紀

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第464図 PL.366	56	肥前陶器 陶胎染付碗	８区１面 1/5	口 底	(10.6) (4.4)	高	5.9	夾雑物少量/暗灰	口縁部下外面は二重圏線。体部外面に山水文か。体部下位と高台境に圏線。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。高台端部は鉄錆。	18世紀
第464図 PL.366	57	肥前陶器 陶胎染付碗	８区１面 2/3	口 底	(10.3) 3.9	高	6.9	夾雑物微量/灰	口縁部外面を２本の圏線で区画し、不明文。体部外面には鳥や樹木などを描く山水文か。体部下位に圏線。高台に二重圏線。内面は無文。高台端部を除き透明釉。高台端部に鉄錆。	18世紀後半
第464図 PL.367	58	肥前陶器 陶胎染付筒碗	７区１面 4/5	口 底	6.2 4.0	高	6.0	夾雑物少量/灰	口縁部内面に四方襷文。見込みに二重圏線、中央にかなり崩れた五弁花。高台端部を除き、内外面に透明釉。底部内面と口縁部に赤色酸化鉄の汚れ。	18世紀後半
第464図 PL.367	59	瀬戸陶器 すり鉢	８区１面 口縁部破片1/3	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/褐灰	口縁端部は外側に傾き肥厚する。体部外面は回転ヘラケズリ。口縁部内面と体部境は段をなす。内面には12本一単位のクシ目。内外面に錆釉を施す。	18世紀後半
第464図 PL.367	60	瀬戸陶器 すり鉢	６区グリッド 1/5	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/淡黄	口縁部は外側に肥厚する。体部外面は回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り離し後無調整。内面には15本一単位のクシ目。内外面に錆釉。体部外面下位から底部は錆釉を拭う。	江戸時代
第464図 PL.367	61	肥前陶器 陶胎染付碗	８区A畑一面 高台部破片1/2	口 底	− 5.2	高	−	夾雑物微量/灰	体部外面は草花文を描く。体部下位、高台境と高台に圏線。高台端部を除き底部内面と体部外面下位、高台は透明釉。高台端部は鉄錆を施し、砂が付着。	江戸時代
第464図 PL.367	62	肥前陶器 陶胎染付碗	８区 口縁部から体部	口 底	(10.0) −	高	−	夾雑物微量/暗灰	口縁部直下外面に二重圏線。体部外面に遠山を描く山水文か。体部下位に圏線。内面は無文。内外面に透明釉、貫入が入る。	江戸時代
第464図 PL.367	63	萩陶器 小碗	７区１面 口縁部破片	口 底	(7.1) −	高	−	夾雑物微量/灰	口縁端部は緩やかに外側に反る。内面は白色の藁灰釉を施し、外面には黒色の鉄釉を筋状に掛け流す。	江戸時代 ビラ掛け製品
第464図 PL.367	64	肥前磁器 染付仏飯器	７区１面 口縁部から体部 破片1/3	口 底	(6.2) −	高	−	夾雑物なし/白	口縁部外面を圏線で区画し、斜線交叉文で埋める。坏部下位と脚部境に圏線。内面から脚部境まで透明釉。	18世紀末から19世紀前半
第464図 PL.367	65	肥前磁器 染付碗	７区１面 完形	口 底	9.4 3.8	高	5.0	夾雑物なし/白	体部外面は梅樹文。体部下位と高台境、高台に圏線。高台内に不明銘。内面は無文。	19世紀前半
第464図 PL.367	66	美濃磁器 不明製品	８区１面 完形	口 底	2.3 2.0	高	2.3	夾雑物なし/白	外面を縦方向に面取りした容器状の製品。高台端部を除き内外面に透明釉。高台内に陽刻で「岐168」と刻印。	現代 統制陶器
第464図 PL.367	67	在地系土器 焙烙	８区１面 口縁部から底部 破片	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/灰	口縁端部は平坦をなす。内面はヨコナデ。底部は平底。口縁部外面と体部と底部境が段になる。	江戸時代
第464図 PL.367	68	在地系土器 蓋	８区A下西端 1/2	口 底	(22.3) −	高	(3.5)	夾雑物少量/暗灰	摘みは欠損。表面は炭素を吸着し、黒色で研磨されている。表面は摘みの周囲を除き、網目状の文様が陽刻されている。裏面は回転ヘラケズリ調整。炭素が吸着。	江戸時代から近代 火消し壺
第464図 PL.367	69	陶器 灯明受皿	７区表採 体部から口縁部 破片	口 底	(11.4) (5.7)	高	1.9	夾雑物微量/喝灰	受け部端部は口縁部より背が低い。体部以下外面は回転ヘラケズリ。内面の受け部端部と体部外面下位を除き灰釉。	19世紀後半
第464図 PL.−	70	瀬戸・美濃 陶器 皿	１区畑(寺境) 高台部破片	口 底	− (6.2)	高	−	夾雑物微量/淡黄	高台部は低く、断面三角形。底部内面と高台の一部に長石釉、貫入が入る。高台は無釉。	
第464図 PL.−	71	肥前磁器 青磁不明製品	１区表採 底部破片	口 底	− (8.4)	高	−	夾雑物なし/白	底部は蛇の目凹形高台。底部内面の釉は焼成時の焼きムラによる変形あり。内外面に青磁釉。	江戸時代
第464図 PL.367	72	龍泉窯系青磁 碗か	５区２面畠 高台部破片	口 底	− (6.0)	高	−	夾雑物なし/灰白	高台端部を除き内外面に青磁釉。	13−14世紀
第464図 PL.367	73	土製品 土人形	６区１面 完形	口 底	− 3.0	高	6.7	夾雑物微量/灰褐	前後の型を合わせて成形。俵に乗った大黒天立像。底部に位置を固定するための孔があく。	
第464図 PL.367	74	土製品 土人形	６区１面 ほぼ完形	口 底	− 3.0	高	7.0	夾雑物微量/灰褐	前後の型を合わせて成形。俵に乗った大黒天立像で左背の一部が欠損。底部に位置を固定するための孔があく。	
第464図 PL.367	75	土製品 土人形	６区１面 頭部欠損	口 底	− 4.1	高	− −	夾雑物微量/灰褐	前後の型を合わせて成形。台座に乗った稲荷像で頭部が欠損。台座正面に焼成時の割れ。底部に位置を固定するための孔があく。	
第465図 PL.−	76	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 体部破片	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/にぶい赤褐	器面はナデ、外面は炭素が吸着。	中世
第465図 PL.−	77	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 口縁部から体部 破片	口 底	− −	高	−	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁部と体部境は内側に窪み、段をなす。器面はナデ、外面は炭素が吸着。	中世

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第465図 PL.367	78	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 口縁部から体部 破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。口縁部と体部境は内側にくぼむ。器面はナデ、外面は炭素が吸着。	中世
第465図 PL.－	79	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 体部から底部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	底部は平底。器面はナデ、外面は炭素が吸着。	中世
第465図 PL.－	80	在地系土器 内耳鍋	７区２面 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。器面はナデ。外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.－	81	在地系土器 内耳鍋	５区グリッド 体部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	内面はナデ、内外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.367	82	在地系土器 内耳鍋	６区グリッド 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/黒	口縁端部は平坦をなし、外側に肥厚する。器面はナデ。外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.－	83	在地系土器 内耳鍋	遺構埋土 体部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	内面はナデ、外面に炭素吸着。	中世 49号竪穴建物
第465図 PL.－	84	在地系土器 内耳鍋	７区２面 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。器面はナデ。外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.367	85	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は外側に緩やかに傾く。口縁部内面と体部境は段をなす。内面はナデ。外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.－	86	在地系土器 内耳鍋	８区グリッド 口縁部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。内面はナデ。外面に炭素吸着。	中世
第465図 PL.－	87	在地系土器 内耳鍋	９区畑 内耳部破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物少量/にぶい赤褐	内耳の一部が残存。	中世
第465図 PL.－	88	龍泉窯系青磁 不明	７区泥流下 破片	口 底	－ －	高	－	夾雑物微量/灰	外面には線状に削って文様が入る。内外面に青磁釉を施し、貫入が入る。	13-14世紀
第465図 PL.367	89	在地系土器 内耳鍋	５区27建物 1/6	口 底	(33.3) (26.4)	高	18.0	白色片を含む/にぶい赤褐	口縁端部は平坦をなす。口縁部と体部境は「く」の字状に屈曲する。内外面はナデ、口縁部内面はヨコナデ。底部は平底。体部外面下位は、胎土が火を受けて鉄分の赤色酸化が著しい。外面には全体に炭素が吸着。信濃型。	中世
第465図 PL.367	90	石製品 石臼(上)	６区53溝 1/2	径 幅	32.2 －	高 重	17.2 14050	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡は認められない。供給孔は中央付近が狭くなっており両面穿孔と考えられる。軸受孔及び供給孔の直径約４㎝。	
第465図 PL.367	91	石製品 茶臼(下)	７区53溝 1/4	長 幅	(14.8) (20.6)	高 重	(12.4) 2750	粗粒輝石安山岩	上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡わずかに認められる。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸受孔の一部が認められる。	
第465図 PL.367	92	石製品 石臼(下)	７区59溝 完形	径 幅	33.2 －	高 重	13.2 9250	粗粒輝石安山岩	著しく片減りする。上面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が認められる。底面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔は底面まで貫通していない。軸孔の直径約３㎝。	
第466図 PL.367	93	石製品 石臼(上)	５区２号畠 1/2	径 幅	32.0 －	高 重	13.0 7850	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に残る。側面には棒状の工具痕が明瞭に認められ矩形の挽き手孔の一部が残る。供給孔は矩形であり一部が認められる。底面に軸受孔の一部が残る。	
第466図 PL.367	94	石造物 火輪	６区57溝 ほぼ完形	長 幅	22.3 22.0	厚 重	12.5 4450	粗粒輝石安山岩	丁寧な成整形。上面に円形の孔があり底面には棒状の工具痕が認められる。隅棟の反りは認められず屋だるみはわずかに認められる。軒は中央がわずかに狭く両端が広い。	
第466図 PL.367	95	鉄製品 茶釜	６区53溝 1/2	径 幅	22.8 －	高 重	17.4 1254.3	－	耳は磁性がなく、金色の光沢が見られ、穴が一つで型を使用していない。耳は後から、鋳掛けによる修復跡となるか。底部の足の一つが鋳掛けで修理されている。体部はヨコナデの成形痕が見られる。	
第466図 PL.368	96	銭貨 新寛永	７区53溝 完形	外 内	2.6 1.9	厚 重	0.3 7.4	－	２枚が癒着している。面同士が癒着しており、１枚に背文が見られる。	
第466図 PL.368	97	銭貨 古寛永	７区53溝 完形	外 内	2.9 2.0	厚 重	0.5 11.8	－	３枚癒着する。紐状の有機質が残存する。面が見えているものは文字、輪、郭が明瞭。	
第466図 PL.368	98	銭貨 寛永通寶	７区53溝 完形	外 内	2.6 2.0	厚 重	0.2 3.9	－	文字の多くが錆に覆われており、新・古寛永の区別が難しい。紐状の有機物が穿を通るように残存している。	
第467図 PL.368	99	銭貨 古寛永	７区53溝 完形	外 内	2.6 (1.9)	厚 重	0.3 3.8	－	全体が錆に覆われている。面の文字は一部が確認できる。確認できる部分の文字、輪、郭は明瞭。	
第467図 PL.368	100	銭貨 新寛永	７区53溝 1/2	外 内	－ －	厚 重	0.1 2.0	－	11波。面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。上半分が欠損する。	
第467図 PL.368	101	銭貨 新寛永	７区53溝 完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.2	－	錆により、文字の一部が見えづらい。輪、郭は面、背ともに明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第467図 PL.368	102	銭貨 古寛永	７区53溝 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.2 2.8	–	劣化により、肌が荒れている。文字の一部がつぶれる。輪、郭は面、背ともに明瞭。	
第467図 PL.368	103	銭貨 新寛永	７・８区53溝 一部欠損	外 内	2.2 1.7	厚 重	0.2 1.9	–	背足。「永」の文字が欠損する。背の輪、郭がわずかに左下にずれる。表の文字、輪、郭は明瞭。背は文字が不明瞭。輪、郭は明瞭。	
第467図 PL.368	104	銭貨 雁首銭	７区53溝 一部欠損	外 内	2.4 –	厚 重	0.1 1.2	–	形状は楕円形。輪に当たる部分は場所により幅が異なり、0.402～0.623㎝の太さを持つ。	
第467図 PL.368	105	鉄製品 包丁	６区57溝 2/3	長 幅	(23.8) 3.5	厚 重	0.3 49.5	–	刃部分が多く欠けてしまっている。柄部分の	
第467図 PL.368	106	銭貨 新寛永	６区57溝 1/2	外 内	– –	厚 重	0.1 2.1	–	四文銭11波。「永」、「通」が欠損する。面、背ともに彫は深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第467図 PL.368	107	鉄製品 杓子	５区21溝 完形	長 幅	35.2 8.5	厚 重	5.0 78.0	–	銅製の杓子。大きな匙状の形状をしており、柄の上部に小さな穴が空く。	
第467図 PL.368	108	銭貨 新寛永	８区21道路 ほぼ完形	外 内	2.2 1.8	厚 重	0.1 1.7	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。やや小ぶりのものとなる。	
第467図 PL.368	109	銭貨 雁首銭	８区16道 一部欠損	外 内	2.6 –	厚 重	0.2 2.3	–	一部が欠損する。端部までしっかり折り返されている。	
第467図 PL.368	110	鉄製品 分銅	６区1281ピット 完形	長 幅	3.7 3.6	厚 重	3.3 166.1	–	沈線が側面に等間隔に６本、上面に縁に沿って２本、摘上部に３本入る。摘の穴には断面径0.1㎝の銅環が通されている。	
第467図 PL.368	111	鉄製品 刀子	６区1281ピット 1/1	長 幅	6.1 1.2	厚 重	0.7 9.8	–	茎部分とわずかに刀身が残存する。棟の関の方が大きくなる。	
第467図 PL.368	112	鉄製品 鎌	５区K25畑 2/3	長 幅	(14.0) 3.05	厚 重	1.0 87.9	–	柄の木質痕が残存する。口金は残るが、刃と茎はどちらも端部が欠損する。	
第468図 PL.368	113	鉄製品 火打金	７区グリッド 完形	長 幅	8.5 2.7	厚 重	0.9 39.0	–	山形の火打ちがね。錆に覆われている。中心に穴などは確認されない。	
第468図 PL.368	114	鉄製品 鋏	７区グリッド 1/2	長 幅	(7.7) 2.5	厚 重	0.4 10.7	–	握りの部分が欠損している鋏。刃の一つは先端が欠損する。裏すきやしのぎはわずかに確認できる。	
第468図 PL.368	115	鉄製品 不明	６区1281ピット 一部	長 幅	(8.8) 2.2	厚 重	0.6 11.2	–	薄い鉄板を山形に曲げた金属製品。折り曲げた左右で幅が異なる。	
第468図 PL.368	116	鉄製品 火打金	7区西壁トレンチ 完形	長 幅	6.5 2.8	厚 重	0.5 20.9	–	捩り鎌形。上部で両端から伸ばしてきた端部が上部で捻れ、捩りながら下に降ろされる。	
第468図 PL.368	117	銭貨 新寛永	８区グリッド 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 2.5	–	背文。やや背の文字は浅く見えづらい。面の文字、面と背の輪、郭は明瞭。	
第468図 PL.368	118	銭貨 古寛永	畠トレンチ 一部欠損	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.0	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背の輪、郭が左下にずれる。	
第468図 PL.368	119	銭貨 新寛永	6区1面グリッド 完形	外 内	2.3 1.7	厚 重	0.1 1.2	–	背元。面の文字、輪、郭は明瞭。背の文字が不明瞭だが、輪、郭は明瞭。	
第468図 PL.369	120	銅製品 鉦鼓	６区１面 ほぼ完形	直 幅	9.8 10.0	高 重	4.5 212.5	–	足は２本残存する。耳は一方が欠損し、もう一方は半分欠損している。紐の痕跡が錆化して残存する。表面の縁は立ち上がる。円周の約1.0㎝内側は0.3㎝の幅でわずかに高さがつけられ、中心部の打面も同様に高くなる。	
第469図 PL.369	121	銅製品 鉦鼓	6区1面グリッド ほぼ完形	直 –	10.5 –	高 重	3.25 311.3	–	足が３か所と耳の片方が欠損する。表面は縁と縁から0.7㎝の所に２周近接してわずかに高さがつけられる。中心部の打面も高くなっている。	
第468図 PL.368	122	鉄製品 鍋	６区１面 1/10	底 口	(20.4) –	高 重	(7.35) 98.9	–	足が１か所残る。底部から体部の一部が残存する。底部の状態がよく、足の成形痕が明瞭。	
第469図 PL.369	123	鉄製品 耳かき(かんざし)	６区１面 1/4	長 幅	4.7 2.2	厚 重	0.15 2.1	–	かんざしの足部分が欠損しているもの。耳かきが上部に付き、透かしの文様が彫られる。	
第469図 PL.369	124	鉄製品 火ばしか	６区１面 1/4	長 幅	(14.3) 0.4	厚 重	0.4 9.1	–	上部５㎝までにねじれが見られる。その下は四角形。端部が細くなっているが、劣化が進んでいる状況のため全体はわからない。	
第468図 PL.368	125	鉄製品 かすがい	７区１面 完形	長 幅	151.2 6.2	厚 重	1.4 139.4	–	脚部が90°曲がって作られている。全体が剥離し劣化している。	
第469図 PL.369	126	鉄製品 鋤又は鍬	７区１面 完形	長 幅	33.4 12.0	厚 重	2.7 839.7	–	木質の柄の一部が残存する。刃とのつなぎ目は確認できない。全体が剥離し、劣化している。	
第469図 PL.369	127	銭貨 新寛永	７区１面 完形	外 内	2.8 2.1	厚 重	0.1 3.9	–	11波。面の「寶」の字がやや鋳詰まりしている。表、背ともに輪、郭などは明瞭。	
第469図 PL.369	128	銭貨 新寛永	７区１面 ほぼ完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 1.2	–	面の文字、輪、郭は明瞭。背は彫が浅いが輪、郭は確認できる。	
第469図 PL.369	129	銭貨 古寛永	７区１面 完形	外 内	2.5 2.0	厚 重	0.1 3.3	–	面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。	
第469図 PL.369	130	銭貨 新寛永	 完形	外 内	2.4 1.9	厚 重	0.1 2.4	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。穿内の左上と右下にややバリが残る。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第469図 PL.369	131	銭貨 新寛永	８区１面 完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 1.9	–	面、背ともに、文字、輪、郭は明瞭。	
第469図 PL.369	132	銭貨 新寛永	７区１面 一部欠損	外 内	– –	厚 重	0.1 1.2	–	面、背ともに郭がはっきりとせず、鋳不足も見られる。	
第469図 PL.369	133	鉄製品 茶釜か	７区泥流中 破片	長 幅	(10.4) (7.2)	厚 重	0.5 16.3	–	鋳造品の破片。小ぶりの茶釜か。胴と底をつなぐ毛切があることから茶釜と想定した。毛切から肩、口まで短い点がやや茶釜とは言い切れない。	
第470図 PL.369	134	銭貨 古寛永	５区２面 完形	外 内	2.4 2.0	厚 重	0.1 3.1	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。背の輪と郭が左下にややずれる。	
第470図 PL.369	135	銭貨 新寛永	５区２面 完形	外 内	2.3 1.8	厚 重	0.1 2.6	–	面、背ともに文字、輪、郭が明瞭。	
第470図 PL.369	136	銭貨 新寛永	５区表土 完形	外 内	2.3 1.9	厚 重	0.1 2.1	–	面、背ともに文字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭はやや右下にずれる。	
第470図 PL.369	137	鉄製品 刀子	５区 完形	長 幅	22.8 2.6	厚 重	0.4 91.8	–	全体がさび付いている。茎から切っ先まで形状はほぼ良好。	
第470図 PL.369	138	銅製品 小柄	100-C-７ 完形	長 幅	(9.5) 1.4	厚 重	0.5 9.5	–	小口に近い1/3ぐらいのところで破損する。棟側につなぎ目がみられる。装飾は見られない。	
第470図 PL.369	139	鉄製品 鋤・鍬先	５区 完形	長 幅	35.8 11.1	厚 重	3.9 778.7	–	木製の風呂が残存している。刃先は波打っている。風呂と刃の接続部分が別作りにんはっており接続していることが確認できる。	
第470図 PL.369	140	鉄製品 釘	７区泥流中 ほぼ完形	長 幅	6.9 1.7	厚 重	1.1 11.9	–	断面四角形。脚部が一部欠損しており、頭部は大きい。全体に劣化が見られる	

木製品遺物観察表

７区２号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第471図	53溝 W1	木製品 柱		長	245.0	厚	11.0	分割材 クリ	溝で転用されているが、元々は柱材と思われる。天井部に横架材に接合するホゾあり。下端はかけているが堀立か。下端に直交に２個所貫通していないホゾ穴あり、足固めを受けるホゾ穴か。表面は荒れている部分多いが、チョウナにより平にしていると思われる。	
				幅	11.0	重	–			

５区３号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第472図	16建 W1	木製品 柱の一部か？		長	140.0	厚	27.0	芯持材 マツ	１尺(30.3)×９寸(27.3)の大きな角材である。上面は風化少ない。左右側面、底面は荒れている。上面は刃の長さ16㎝。前後の広刃斧で削られており、チョウナ等による再調整なし。上端はノコギリで切っている。下端もノコギリで切って平にしている。これ自体が製品ではなく柱等を転用した材と思われる。	
				幅	32.0	重	–			
第472図	16建 W2	木製品 柱？		長	68.0	厚	11.0	芯持材 クリ	直径12㎝前後の細い材の四隅を削って四角の柱材としている。底面はヒカリツケと思われる。底面より17㎝ほど高い位置に14×4.5㎝の大きなホゾ穴あり、貫があったものと思われる。そこより上は残っていなかった。馬屋を囲む細い柱材か。	
				幅	10.0	重	–			
第472図	16建 W3	木製品 根太か？		長	92.3	厚	7.0	分割材 マツ属複維管束亜属	根太の一部。四面とも平で、ノコギリで正確に切っている。表面にノコギリと思われる痕跡は残っていない。わずかに凸凹ある。広い面にクギ穴あり、ともに出土した根太の一部と同じものに見えるが別個体か。	
				幅	6.0	重	–			
第472図	16建 W4	木製品 根太か？		長	41.8	厚	7.4	–	短い根太の一部と思われる。４面ノコギリ痕。広い面にクギ穴あり。	
				幅	6.2	重	–			
第472図	16建 W5	木製品 根太		長	44.0	厚	5.5	–	上下にホゾ。表面、左側面ノコギリ。裏面ノコと思われるが、荒れており不明。左側面チョウナ。裏面に１か所クギ穴あり。	
				幅	7.5	重	–			
第472図	16建 W6	木製品 根太		長	63.0	厚	5.5	芯持材 マツ	根太の一部。四面とも平でノコギリで正確に切っている。表面にノコギリと思われる痕跡がわずかに残る。クギ穴も狭い面でなく広い面に残っている。	
				幅	7.0	重	–			
第473図	16建 W7	木製品 根太		長	45.6	厚	5.6	–	長さ45.6(半間)の根太である。両端にホゾがあり、大引に架けている表面にクギ穴３か所あり。表、左右側面、底面ノコギリ。裏面にも２か所クギ穴あり。端部にノコギリ切溝あり。	
				幅	7.2	重	–			
第473図	16建 W8	木製品 根太		長	44	厚	5.6	–	半間の長さの根太である。表面に３か所床板を留めるためのクギ残る。表面、右側面ノコギリ、左側面チョウナ。裏面荒れていて加工不明。裏面に表面より太いクギ穴３か所あり。	
				幅	8.0	重	–			
第473図	16建 W9	木製品 根太		長	45.4	厚	5.5	分割材 マツ属複維管束亜属	短い根太。両端は大引に架けるようにホゾ状に加工。４面は丁寧に整形しており加工痕不明。ノコで切ったものと思われる。チョウナ痕なし。	
				幅	7.0	重	–			
第473図	16建 W10	木製品 角材		長	40.0	厚	7.0	分割材 マツ	短い材である。片側のみ凸部あり。40㎝四方の組枠の一部か。断面は正方形に近い。表面チョウナ削りであるが、丁寧で平ら。名称用途不明。	
				幅	7.5	重	–			
第473図	16建 W11	木製品 角材		長	44.0	厚	10.0	分割材 マツ	短い材である。太さが９㎝四方の角材でやや太い。表面全体丁寧なチョウナ削り。	
				幅	9.5	重	–			
第473図	16建 W12	木製品 板		長	131.0	厚	3.0	– マツ科	貫の破片と思われる。表面にはノコギリと思われる痕跡がわずかに残る。	
				幅	12.0	重	–			
第474図	16建 W13	木製品 板		長	80.8	厚	2.8	–	板材。用途名称不明。表裏ノコギリ。両側面チョウナ。裏面荒れている。	
				幅	12.8	重	–			
第474図	16建 W14	木製品 木片		長	27.9	厚	5.8	–	用途名称不明。性器を模している。両側面にホゾ穴あり。	
				幅	7.0	重	–			
第474図	16建 W15	木製品 ？		長	29.1	厚	1.7	–	用途名称不明。表面に黒漆か。	PL.54
				幅	6.3	重	–			
第474図	16建 W16	木製品 囲炉裏の木枠		長	48.5	厚	10.0	–	短い丸材であるが、囲炉裏の枠木か。表面は煤けて薄く黒くなっている。ナタ等により細木を切ったときに出来たと思われる刃物キズが多くある。枝の部分を内側にして使用か。	
				幅	10.0	重	–			
第474図	16建 W17	木製品 柄　唐臼②の中		長	–	厚	–	–	鎌の柄である。タガネ部分が細く削られている。茎を固定するクギ穴あり、唐臼の中から出土。	
				幅	–	重	–			

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第475図	16建 W18	木製品 桶底板		長 幅	70.3 51.6	厚	2.7	板目 クリ	桶の底部である。楕円形、板の厚さは中央部が3.5㎝と厚く、周辺部は少し削られ2.8㎝と薄くなっいている。３枚の板を竹栓(長さ７～８㎝、太さ0.5～0.65㎝)を打って板をつないでいる。幅の狭い箇所では２か所、中央部の広い所では３か所で２個づつ、計６個竹栓を打ってつなげている。端部の上下部分を少し削っている。	
第475図	16建 W19	木製品 桶樽底板 (便所)		長 幅	73.4 55.2	厚	1.5	板目 マツ	楕円形の桶底部板。３枚をつないで作られている。３枚の板は幅約３㎝、長さ６㎝前後、厚さ１㎝前後のやとい栓でつないでいる。表面は平らで、チョウナと思われる加工痕あり。裏側はひどく荒れており、加工痕も不明。少しチョウナと思われる加工痕あり。	
第475図	16建 W20	木製品 桶底板	ほぼ完形	長 幅	112.4 88.7	厚	3.8	板目 クリ	楕円形底部の厚さは中央部で3.8、周辺部は薄くなり３㎝。４枚の板をやといホゾで接合。表面は丁寧に整形され平で、整形痕はわからない。裏面は荒くチョウナ痕が多く残る。周辺端部は上半分は垂直に切られているが、下半分は少し削られている。これまでで最も大きな桶である。	
第475図	16建 W21	木製品 漆椀蓋		口 底	－ －	高 重	1.8 －	－	内外面赤色漆、摘み上部欠損。渋下地、内外面の漆剥離多い。肩部に器肉厚く稜線あり。	
第475図	16建 W22	木製品 漆椀蓋		口 底	－ 10.0	高 重	2.4 －	－	内面赤色、外面暗赤褐色漆　外面全体に赤色で絵が描かれる。内外面とも漆の剥離多い。肩部の器肉厚く、稜線あり。摘みと口縁部先端欠損　上面に扇とそこから延びる曲線により絵が描かれている。	PL.54
第475図	16建 W23	木製品 曲物		長 幅	15.2 5.8	厚	26.6	－	篩か。側板は割れているが接合して完形となる。全て柾目。	
第476図	16建 W24	木製品 木べらの破片		長 幅	19.2 2.6	厚	0.8	－	用途名称不明。先端部が細く削られ２か所に切り込みあり。	
第476図	16建 W25	木製品 くし		長 幅	5.8 4.1	厚	0.8	－	１㎝の間隔に６本の歯。	
第476図	16建 W26	木製品 板　墨書		長 幅	13.2 3.1	厚	0.5	－ スギ	字の書かれた札と思われる。表面に墨書あり。判読不明。	
第476図	16建 W27	木製品 かんざし？		長 径	18.3 0.3	重	－	－	細長い竹製品である。下地は渋下地で黒色、その上に赤うるし、かんざしの一部か？	
第476図	16建 W28	木製品 かんざし？		長 幅	10.4 0.5	厚	0.3	－	白色で表面光沢を持つ。かんざしか。	
第476図	16建 W29	木製品 下駄		長 幅	22.2 7.1	厚	1.0	－	連馬下駄(角形)である。前壺先欠損。	
第477図	16建 W30	木製品 下駄		長 幅	23.4 7.62	厚	4.9	－ クリ	長方形の連歯下駄である。前歯の一部欠損。後歯はほぼ欠損。上面に足痕と思われる痕跡残る。左足として使用か。歯の外側にノコギリの痕跡残る。歯の内面に３連孤文の削跡あり。塗装なし。芯去材。クリ。	
第477図	16建 W31	木製品 下駄		長 幅	29.4 6.3	厚	2.8	－	破片多数。	
第477図	16建 W32	木製品 下駄		長 幅	15.3 8.8	厚	7.3	－ クリ	角型連歯ゲタ。風化により台部の多く残っていない。材はクリ。	
第477図	16建 W33	木製品 エンガ		長 幅	30.6 13.6	厚	2.7	－	エンガの一部か。	
第478図	16建 W34	木製品 工具の柄		長 幅	12.6 3.2	厚	1.7	－	材はスギか。	
第478図	16建 W35	木製品 漆椀		底	5.4	重	－	－	内外面赤色漆、高台部内面黒色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離多い。摘み内側の底部器肉厚い。	
第478図	薪集 W36	木製品 丸太大・切台		長 幅	193.6 17.0	厚 重	13.4 －	－	上面に多くの刃物の傷あり。薪を切る時の切台か。	
第479図	17建 W37	木製品 柱		長 幅	303.0 11.0	厚 重	11.0 －	－	太さ９㎝のまっすぐに延びている丸材の下半部を少し削り、下端部をクイのように削っている。下半部以外加工痕なし。	
第479図	18建 W38	木製品 土台		長 幅	119.0 17.0	厚 重	14.0 －	芯持材 クリ	６寸×５寸角の土台である。上面が幅広い。左端は土台が直交するものと思われ、柱ホゾに直交するホゾあり、柱ホゾは３本、中央の２本には割れて残ったホゾあり、柱の間に６個の間渡穴あり、土壁であった。右端は追掛大栓継と思われる加工痕あり。仕口部分の長さは32㎝と短い。２個所込柱用のホゾ穴あり、方形であるが、大きさは2.5㎝と1.5㎝と異なる。底面には礎石の上に土台をすえるために土台部分を削ってひかりつけとしている。柱と柱の間は183㎝と177㎝で同じではない。底面全体は風化が激しい。表面加工はチョウナと思われる工具痕わずかに残るが丁寧に整形されている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第480図	18建 W39	木製品 土台		長 幅	119.0 19.0	厚 重	13.0 –	芯持材 クリ	(約６寸角)17.5㎝の太い角材を用いた土台である。約94㎝間隔で柱のホゾ穴あり。ホゾは11×4.5㎝。柱間に間渡穴が３個づつある土壁であったと思われる。下半の1/3程度腐って欠損。表面の加工は荒れていて不明。	
第480図	18建 W40	木製品 土台		長 幅	267.0 16.5	厚 重	6.5 –	芯持材 クリ	全体的に風化が激しく荒れている。柱を受けるホゾ穴２か所、ホゾ穴間約94㎝。上端は他の土台とつながっていたと思われ、一部加工痕残る。下端は欠損。礎石受のため削られている場所３か所か、明確ではない。加工痕は風化により不明。６寸角に近い大きな土台である。	
第480図	18建 W41	木製品 柱		長 幅	226.0 16.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	馬屋の出入口柱右側と思われる。馬栓棒穴３個、その裏面には４本の貫穴。貫穴は馬栓棒側は半分の縦長となり半分だけ貫通している。柱は掘立柱であり、下部は埋まっていた。地表面に出ていたと思われる部分から上が残っていた。上端は梁等と繋がっていたと思われるが、中央部が空洞となっており不明。	
第481図	18建 W44	木製品 床ツカ		長 幅	53.5 8.0	厚	–	–	高さ45㎝の丸材の天に長さ8.8㎝のホゾを持つ。ほとんど加工なし。底面は平らに切られている。8.8㎝とホゾが少し長いが、大引の下にくる床ツカではないだろうか。61814建材19は２本あり、２本とも同じ大きさ。床ツカが２本か。表面３か所がU字状に削られている。	
第481図	18建 W45	木製品 床ツカ		長 幅	54.0 8.5	厚	7.8	–	高さ45㎝の丸材の天に長さ8.8㎝のホゾを持つ。ほとんど加工なし。底面は平らに切られている。8.8㎝とホゾが少し長いが、大引の下にくる床ツカではないだろうか。61814建材19は２本あり、２本とも同じ大きさ。床ツカが２本か。表面３か所がU字状に削られている。	
第481図	18建 W46	木製品 根太		長 幅	147.6 6.0	厚 重	7.0 —	分割材 クリ	四面ともチョウナ痕なし。ノコギリにより作られている。ノコギリの歯は明確ではない。左側面端に大引に架けた痕跡あり。	
第481図	18建 W47	木製品 根太		長 幅	137.0 7.0	厚 重	7.0 —	分割材 クリ	ほぼ方形に削った根太。自然面の丸い部分なし。上面は平であるが、下面の両端は大引に架ける部分を削って細くしている。ノコギリで切ったものか。チョウナ痕なし。	
第481図	18建 W48	木製品 根太		長 幅	168.3 6.0	厚 重	7.0 —	分割材 クリ	根太であり、当初から２寸×２寸３分の形としてノコギリで加工している。チョウナ痕なし。片方には大引に架けた面残っている。	
第481図	18建 W49	木製品 床板		長 幅	153.0 27.0	厚 重	1.0 —	–	厚さ1.3㎝の板。ノコギリと思われる。チョウナ痕なし。表面荒れている。	
第481図	18建 W50	木製品 床板		長 幅	188.0 30.3	厚 重	1.4 –	–	上下面は平に切ってある。左右の側面は直角に切り落とされ、お互いが組み合わされるように加工されている。表裏面はノコギリ。裏面は全面荒れている。木裏を表にしている。約45㎝間隔で根太があり、そこに打つためのクギの痕残る。	
第482図	18建 W42	木製品 屋根材か		長 幅	42.0 11.0	厚 重	0.2 –	–	28枚ほぼ完形。幅は11～12㎝、厚さ２㎜を基本。両側面の厚さは一定しないで２～４㎜。両側面はカンナ等により削って平。表裏面とも簡単にカンナをかけて表面の凹凸部分を平に加工している。両側面ともカンナをかけている。その面は波打っていることが多い。上・下端は割る前の状態であり、割った後の加工なし。	３枚実測
第482図	18建 W43	木製品 大引		長 幅	119.0 19.0	厚 重	16.0 –	芯持材 クリ	２間以上の長さを持つ大引と思われる。左右に根太受のホゾあり。中央に柱を受けるホゾあり、中央の柱左に３個、右に２個の根太受ホゾ穴があるが、さらに１個あったと思われる。折れてその部分欠損(約20㎝の長さ)。上端は柱を抱きかかえるようなホゾ下端欠損。中央柱用ホゾ穴の底部分(反対側)に加工痕なし。上面は削って平になっているが、底面はほぼ丸のまま加工なし。	
第483図	18建 W51	木製品 床板		長 幅	194.0 30.0	厚 重	– –	–	61818に同じ。表ノコギリ、裏荒れているがノコギリ。板を留めるために両端と中央部３か所、計５か所、約45㎝間隔に２本づつクギ。61818と横で接合。	
第483図	18建 W52	木製品 板(大)		長 幅	220.0 11.0	厚	3.0 —	–	貫と思われる。木表と両側面はチョウナ痕。木裏はチョウナ痕不明。ノコの痕跡らしきものあり。	
第483図	18建 W53	木製品 板戸枠木		長 幅	175.4 3.1	厚 重	3.0 —	細　分割材　マツ 太　半裁材　マツ 属複維管束亜属	この部材の上下については不明。端部スレている部分なし。横桟の間隔は異なる。	
第483図	18建 W54	木製品 板		長 幅	– –	厚	–	–	直径約８㎝の柄杓用の柄か。	
第483図	18建 W55	木製品 板		長 幅	70.0 4.5	厚 重	3.0 –	削出棒 クリ	表面にチョウナ、ノコギリ刃の痕なし。ナタ等によるものか。表面に凹凸が少し残る。用途名称不明。両面に切れ目があるが、幅は5.6～７㎝と一定ではない。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第483図	18建 W56	木製品 板　中央くびれ加工		長 幅	12.7 3.5	厚	0.6	–	表面平ら。裏面、割材のように凹凸あり。糸巻きではない。	
第484図	18建 W57	木製品 飼葉桶		長 幅	130.0 36.0	厚	22.0	芯持材 クリ	土の上に置かれていたためか、底面は特に風化している。丸木の中をくり抜いて作られ、片側に取っ手がついている。内面の大きさ横90㎝（３尺）、幅30㎝と設計して堀り始めているようである。全体的に風化が激しく加工痕不明。	
第484図	18建 W58	木製品 漆椀			– –	重	–	–	内外面赤色漆、高台部内面黒色の文字で「中佑？」。渋下地、内外面の漆剥離多い。	
第484図	18建 W59	木製品 下駄		長 幅	22.1 6.1	厚	3.6	–	刳り下駄(丸形)のほぼ完形品である。上面横緒孔中央部に焼印あり。	
第484図	18建 W60	木製品 酒樽の栓		長 幅	5.2 4.1	厚	4.0	–	栓。材はスギか。	
第485図	18建 W61	木製品 木箱		長 幅	27.2 10.1	厚	0.6	–	長さ27㎝、幅11㎝、深さ９㎝、底板厚さ１㎝の細長い箱である。クギが長軸側に各３本、短い軸側に各２本打たれていた。	
第485図	18建 W62	木製品 油絞り機土台か？		長 幅	46.9 12.1	厚	8.3	分割材 クリ	油絞り機等の土台の一部と思われる。底面が手で、安定して置ける。本来ホゾ穴となっていて、中央にクサビが打たれて固定されていたと思われる。台の一部外側が、割れていると思われる。	
第486図	18建 W63	木製品 鳥型		長 幅	31.4 13.4	厚	8.5	–	ハト車か。	

５区４号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第487図	20建 W1	木製品 土台		長 幅	119.0 13.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	角の土台で板間の土台と思われる。礎石のひかりつけが直交する別の土台と組み合わされ、その下に礎石がすえつけられる。柱は約１間間隔、片側しか掘られていない土台であり、根太受でもあった。ホゾの架ける部分は３㎝と浅く、深さは７㎝以上と細長い。表面は荒れているが、土壁に伴う間渡穴なし。中央部のホゾ中にホゾが残っている。側面はチョウナあるいは広刃斧で削り、加工痕明瞭に残る。	
第487図	20建 W2～4	木製品 土台		長 幅	183.0 13.5	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	土台と思われる大きさの角材を加工して根太としている。風化が激しい。両端を削って大引に架かるようにしている。幅11㎝と広くなっている。チョウナ痕が左右側面に明確に残っている。	
第488図	20建 W5	木製品 土台		長 幅	160.0 15.0	厚 重	15.0 –	– クリ	５寸角の土台である。表面に土壁の間渡穴両端は他の土台をつないでいたと思われる。加工痕はチョウナと思われる。丁寧に加工している。裏面は土に接していたためか荒れている。両端に礎石が置かれていたため、削って石にのせている。材はクリ。	
第488図	20建 W6	木製品 土台		長 幅	223.0 16.0	厚 重	16.0 –	芯持材 クリ	土台の角部分か。柱間は土壁か、間渡間あり。柱ホゾ穴の下に礎石受けの凹みあり。	
第488図	20建 W7	木製品 土台		長 幅	140.0 12.0	厚 重	9.0 –	芯持材 クリ	土台として取り上げられたが疑問が残る。用途名称不明。	
第489図	20建 W8	木製品 根太		長 幅	141.0 9.0	厚 重	6.0 –	分割材 クリ	幅は２寸、高さが３寸で他の根太より高い。上と左側面にノコギリ痕。右側面と下面はチョウナ痕。	
第489図	20建 W9	木製品 根太		長 幅	140.0 10.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	小さな木を利用した根太。上面は両端を削って水平にし、床板を打ちつけるためのクギ痕８か所残る。クギは残っていない。大引に架けるために端部は削って少し細くなっており、裏面はさらに削って大引に架ける部分を細くし、大引の凹部に架かるようにしている。	
第489図	20建 W10	木製品 根太		長 幅	143.9 12.0	厚 重	7.0 –	半裁材 クリ	柱12角で貫２か所あった柱を２つに割って両端を削って根太として再利用している。表面はチョウナで丁寧に削っている。	
第489図	20建 W11	木製品 根太		長 幅	96.0 12.0	厚 重	12.0 –	芯持材 クリ	丸材の四周をチョウナで削って４寸角材としている。大引にかけるため片端に蟻架け用のホゾを作っている。	
第489図	20建 W12	木製品 根太		長 幅	142.0 11.0	厚 重	9.0 –	芯持材 クリ	丸太を四面加工して根太としている。上面はほぼ水平。下面は大引に架ける部分を下面から細く削っている。太くて大きな根太。上、左右側面は丸のまま大引に架けるところのみ削っている。	
第489図	20建 W13	木製品 根太(柱を転用)		長 幅	140.4 14.0	厚 重	5.5 –	半裁材 クリ	柱を縦方向に二つに割って、根太として利用したものか。半分に割れている。	
第490図	20建 W14	木製品 床板		長 幅	215.0 14.0	厚 重	2.0 –	板目 マツ	大きな木の中央部分を柱または板として切り取った側面の端材の外側をチョウナで削って板としたもの。内面は平で荒れているが、ノコギリ痕らしきものあり、外面はチョウナ痕多数あり。断面は年輪が平行に近い。木の外側に近い。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第490図	20建 W15	木製品 床板		長	163.2	厚	1.5	–	W14とほぼ同様な加工の床板である。	
				幅	27.4	重	–			
第490図	20建 W16	木製品 床板		長	66.0	厚	3.0	板目 マツ属複維管束亜属	幅23cm、厚さ2.7cmの厚い板の端部である。端部の表裏面とも、ノコギリによる切り残し痕あり。切り残された部分の厚さ３cm、他の部分は2.7cm、ノコギリの厚さ0.3cmか。これまで１～1.2cmの厚さの板は多いが、３cmに近い厚さの板は少ない。側面にチョウナ痕。	
				幅	23.0	重	–			
第491図	20建 W17	木製品 板		長	35.0	厚	3.0	板目 マツ属複維管束亜属	長さの短い板材である。表裏ともチョウナ痕なし。ノコギリで製材した板と思われる。ノコギリ切り残し痕なし。	
				幅	19.0	重	–			
第491図	20建 W18	木製品 板		長	39.0	厚	3.0	板目 マツ	厚さ３cm前後、長さ35～38cmの厚い板。表面は雑な仕上げでチョウナ等による加工痕荒く残る。一部にごく細かい刃痕が多く残る。端部にノコギリ切残痕あり。	
				幅	16.0	重	–			
第491図	20建 W19	木製品 台		長	114.1	厚	7.2	板目 クリ	北側板間３から出土。厚さ約７cm、小さな台のような板材。裏は割った状態で凹凸あり。台として使用か。材はクリ。	
				幅	39.1	重	–			
第491図	20建 W20	木製品 漆浅椀		口	–	高	3.0	– ブナ属	内外面赤色漆、底面は上部を一部残して剥離して高台部とも残っていない。浅椀と思われるが、残りが悪く底面もゆがんでいる。	
				底	7.0	重	–			
第491図	20建 W21	木製品 漆椀		長	–	厚	–	– ブナ属	内面暗赤褐色漆。外面赤色漆。高台部外面黒色の文字で本近又は本追と墨書あり。渋下地。内面の漆は薄い漆のためか剥離はほとんどなく、外面の赤色漆は剥離が多い。口縁部上半と高台部欠損。	PL.62
				幅	–					
第491図	20建 W22	木製品 角材6		長	29.3			– スギ	頸部から下細く削られ頸部に浅いホゾ穴あり。	
				幅	6.5	重	–			
第492図	20建 W23-1	木製品 下駄		長	20.5	厚	4.2	– ブナ	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく。全体的に白い。丸型である。W23-1とは組ではない。	
				幅	8.0					
第492図	20建 W23-2	木製品 下駄		長	2.5	厚	4.0	– ブナ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく。全体的に白い。丸型である。W23-1とは組ではない。	
				幅	7.5					
第492図	20建 W24-1	木製品 下駄		長	20.6	厚	3.4	– サクラ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。	
				幅	8.0					
第492図	20建 W24-2	木製品 下駄		長	21.0	厚	3.7	– サクラ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。ノコギリ切溝残る。	
				幅	8.0					
第493図	20建 W25-1	木製品 下駄		長	21.4	厚	7.0	– クリ	刳り下駄で歯が高い。台部上と側面は渋下地と茶漆。歯部外面渋下地内面は素地のまま塗っていない。	
				幅	7.6					
第493図	20建 W25-2	木製品 下駄		長	21.2	厚	7.4	– クリ	刳り下駄で歯が高い。	
				幅	(7.4)					
第493図	20建 W26	木製品 下駄		長	21.6	厚	4.2	– クリ	丸型連歯ゲタ。角型に近いが全体に丸味を持つ。横緒穴のところで折れている。前壺には鼻緒が残っている。植物の茎に似た鼻緒が残っている、藤ツルか。台裏は平ら。丸ノミを使用している。	PL.64
				幅	8.4					
第494図	20建 W27-1	木製品 下駄		長	21.0	厚	3.0	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。一部黒色塗装あり、渋下地があったものと思われる。全体的に白い。丸型である。W27-2とほぼ同じ造りであり、セットであると思われる。	
				幅	8.0					
第494図	20建 W27-2	木製品 下駄		長	20.4	厚	2.6	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。W27-1とほぼ同じ造りであり、セットであると思われる。	
				幅	7.6					
第494図	20建 W28	木製品 木槌		長	34.8	厚	11.8	– ガマズミ属	砧または横槌か。表面全体が摩耗している。頭部に切り傷、刃物の痕あり、ナタ等で切った時のアテ材か。	
				幅	10.7					
第494図	20建 W29	木製品 エングワ		長	82.2	厚	2.75	–	踏みクワの一部と思われる。中央部が３cmと厚いが両端部は極めて薄くなっている。柄等はなし。	
				幅	16.2					

５区５号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第495図	21建 W1	木製品 地覆		長	173.0	厚	6.0	芯持材 クリ	板間東辺の北から２間目より出土。２台石上に直置きされていた。W10とW11掘立柱の間に位置する。出土時の上面は平滑に加工されている。出土時の下面は割られただけの状況で使用。上には中央に枘穴１か所と、木材の中軸より少し東にずれた位置の両端に丸い枘穴が２か所存在。	
				幅	16.0	重	–			
第495図	21建 W2	木製品 地覆		長	166.6	厚	7.54	半裁材 クリ	板間東片の北から３間目より出土。土台石上に直置きされていた。W11とW12掘立柱の間に位置する。出土時の上面は平滑になるよう丁寧に加工される。下面は割ったままの状態で一部削られるのみ。上面には中央に枘穴１か所と、木材の中軸より少し東にずれた位置の両端に丸い枘穴が２か所存在。	
				幅	14.59	重	–			
第495図	21建 W3	木製品 地覆４の一部		長	70.0	厚	4.0	–	板間南の土間南辺の地覆４の北半、南端折損しており地覆４南半は石出土時土面の中央付近には、2.5cm角ほどで深さも同程度の枘穴を穿つ。	
				幅	9.0	重	–			

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第495図	21建 W4	木製品 地覆８		長 幅	107.5 13.9	厚 重	8.2	–	板間の北面よりで出土。検出時の下面は、割肌をわずかに削るだけであるが、それ以外の面はチョウナ等で平滑に削られる。検出時の上面には枘穴が２か所施される。側面の一方にも枘穴を穿つ。大引と組み合う可能性の他、地覆に転用される以前の仕口とも考えられる。	
第495図	21建 W5	木製品 地覆		長 幅	108.2 11.8	厚 重	9.5	半裁材 クリ	土間東北脇の室の西より出土。土台石上ではなく、その南側で検出。出土時の上面は平滑に削られており、それ以外の面は加工痕不明。上面ほど平滑には加工されていないようにみられる。上面には２か所に貫通する穴が施され、出土時の北側面東端に３×５㎝の枘穴がある。柱などとして利用されていた材の一部を地覆に転用したものか。	
第495図	21建 W6	木製品 地覆５		長 幅	175.4 12.9	厚 重	9.8	半裁材 クリ	南壁③付近、南西中央のW19柱付近で出土した部材。自然木を割ったものを部分的に削って成形している。検出時の下面に接していた面に３×4.5～６㎝の枘穴が２か所施されている。一方の側面中央付近に広く削られた箇所がある。W19柱に接していたか。	
第496図	21建 W7	木製品 地覆６		長 幅	188.9 15.6	厚 重	9.1	半裁材 クリ	建物西辺の北から２間目で南北に木口を向ける形で出土。W18掘立柱７の南側に位置し、土台石上に直置きされていた。木裏を上面に使用。出土時土面は割面を平滑に削る。上面中央に４×3.5㎝、深さ２㎝の間柱を挿したとみられる枘穴が施される。	
第496図	21建 W8	木製品 地覆		長 幅	76.0 12.2	厚 重	13.5	芯持材 クリ	建物西北隅付近、W17柱とW16柱の間から出土。出土時土面は平滑である。一端に貫を通すような仕口が施されており、その先に材が継ぎ足されている。他の地覆は一材で用いられていることから、転用材を継ぎ足して用いたものか。検出時の上面には3.5×４㎝の枘穴が１か所施される。間柱を立てたものか。	
第496図	21建 W9	木製品 旧柱？	土間と土座の境	長 幅	294.5 15.2	厚 重	14.2	芯持材 クリ	建物中央付近、土間と土座の境界に南北に木口が向くような形で出土。地面の上に直接置かれている。検出時の下面は腐食して加工痕は不明瞭だが、それ以外の面はチョウナまたはヨキで加工する。南端欠損。ナタ等による無数の傷痕あり。出土時上面の北寄りに8.5×3.5㎝の枘穴、左側面(出土時西面)には９×3.5㎝の枘穴があるが、不要な仕口であり、転用材とみられる。もとは掘立柱であったものか。左側面南寄りには、ノコで切られた後、ノミで削る。何らかの仕口か。	
第497図	21建 W10	木製品 柱１		長 幅	222.0 12.0	厚 重	12.0	芯持材 クリ	掘立柱で下端が土中に埋まっていた。上端はホゾあり。出土時の上下２面に枘穴あり。高さが181㎝と低い。四面加工されている柱としては細く短い。	
第497図	21建 W11	木製品 柱２		長 幅	184.1 12.0	厚 重	11.5	芯持材 クリ	建物東辺南側より出土。表面はカンナで平滑に仕上げられている。上端に枘が造り出される。検出された時点で足元が折損している。南北側面に２か所ずつ壁下地を納めるための枘穴が施される。	
第497図	21建 W12	木製品 柱３		長 幅	242.0 14.0	厚 重	11.0	芯持材 クリ	板間東南隅より出土。表面はカンナで平滑に仕上げられている。下部54㎝までは丸太のままで、足元22㎝までは土中にあったため腐食している。地上部は断面四角に削られており、南北側面に横材を受ける枘穴が４か所施されている。竹を差し込んで草壁にしていたか。南側面はW14柱４と同様に、一番上の枘穴の下に1.5×３㎝の穴が施されている。西側面にも４か所穴あり。上端は重ね枘である。	
第498図	21建 W13	木製品 柱10		長 幅	205.0 15.0	厚 重	14.0	芯持材 クリ	板間西辺の床板の上から出土した柱材。丁度W18、W10などの柱と東西の筋を合わせる。四面とも、チョウナで削った後、カンナで平滑に成形されており、特に丁寧に加工されている。足元に仕口があり、W20大引とかみ合う状態で検出された。地上185㎝にあたる部分は厚さ５㎝の内法貫の加工が施される。天部が欠損しており、もともとは300㎝前後であったか。	
第498図	21建 W14	木製品 柱４		長 幅	213.0 13.0	厚 重	12.0	芯持材 クリ	建物東南隅から出土した柱。出土時上面(使用時北面)はチョウナにより削られ、３面カンナで平滑に成形している。上部は重ね枘が施される。足元は土中で腐食したため、欠損したとみられる。北面には約３×４㎝の枘穴が４か所あり。上から１番目の仕口の下に2.5×1.5㎝の穴が施される。	
第498図	21建 W15	木製品 柱５		長 幅	228.2 13.7	厚 重	13.0	芯持材 クリ	掘立柱。下部は土中、地上の長さは197㎝、上端は重ね枘。加工はほぼ４面カンナ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第499図	21建 W16	木製品 柱９		長 幅	215.0 14.0	厚 重	11.0 –	芯持材 クリ	建物北辺西部、W８地覆に接するように出土した柱。表面は平滑に削られている。出土時上面に２か所切削された部分がある。ノコで切れ込みを入れた後に削りとったものか。面の加工痕は不明。上部には出枘があり、桁と接合していたか。足元は端部からある程度の範囲が腐食して残る。土中に埋められた箇所と思われる。	
第499図	21建 W17	木製品 柱８		長 幅	125.5 14.6	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	建物西北隅付近、唐臼の北東から出土した柱。足元は土台石の間、地覆に挟まれて埋まっており、掘立柱であったことがわかる。他の柱に比べて著しく短く、上部が折損した可能性も考えられる。出土時上面は腐食しているものの、平滑に成形されていることがわかる。腐食が著しく、柱の上部には加工が施されるが、詳細不明。横架材のためと思われる加工が１か所施される。W16柱にも同様の加工が見られ、同じ横架材を納めたのだろうか。その上に円形の小さな穴があるが、これはW16には見られない。	
第499図	21建 W18	木製品 柱７		長 幅	234.5 15.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	建物西辺の掘立柱。枘穴表裏に各３か所。一辺は４㎝前後。下面は土中。上端は枘で梁等とつながっている。表面(使用時北面)は出土時はほぼ平に削っているが、辺部は丸くなっており削っていない。	
第499図	21建 W19	木製品 柱６		長 幅	209.7 12.6	厚 重	12.1 –	芯持材 マツ	南壁③のあたりから出土した柱。出土時表面はほぼ平らに削られ、わずかにチョウナ痕が残る。仕口は施されていない。上部には桁と接合するための出枘が造り出される。足元は土中にあったためか腐食している。W６地覆５の中央東寄りの切削部分と接していたか。その場合、21号建物のその他の柱と形式が異なっている。	
第500図	21建 W20	木製品 大引３に継ぎ足し材		長 幅	124.0 11.0	厚 重	11.0 –	– クリ	板間西辺北部、W21旧敷居の北延長部より出土。検出時の東西両側面は平滑である。出土時南端西面の木口付近は斜に削られている。北端は土台石に載せるためであると思われるが、南端は下に土台石や部材が検出されておらず、理由は不明である。出土時北端木口には出枘が施される。W27根太の西端が上に置かれる。	
第500図	21建 W21	木製品 大引３		長 幅	353.5 17.5	厚 重	14.5 –	芯持材 クリ	板間西端より出土。二本の溝が施された旧敷居。出土時の上面、下面、東側面は平滑に削られているが、西側面は丸太のままである。北端の木口はノコによって切断されたとみられる。部材の南端は腐食により欠損。東側面には６か所の根太を挿す枘穴W23大引がみられる。東側面に加工痕を残す。	
第501図	21建 W22	木製品 飼物		長 幅	22.4 8.1	厚 重	1.3 –	–	板間、上より出土。片面のみ表面を削って、先端を細くする。根太を水平に置くための高さ調整用の飼物か。	
第501図	21建 W23	木製品 大引１		長 幅	524.9 19.6	厚 重	22.6 –	芯持材 クリ	板間中央付近より出土。使用時上は根太を受ける仕口が３か所施される。使用時下側に土台石の当たりに対応した切削が２か所施され、土台石の当たり痕が１か所ある。時計回りに45°程度倒れた向きで検出された。両端の湾曲部分は切削し、直に加工している。	
第502図	21建 W24	木製品 大引２		長 幅	517.0 20.0	厚 重	20.0 –	芯持材 クリ	板間東辺より出土。自然木を削って大引としている。使用時上面は平坦に加工しており、根太を受ける加工が７か所施されている。使用時下面はほとんど加工されていないが、一部切削される。	
第503図	21建 W25	木製品 根太		長 幅	266.0 16.0	厚 重	8.0 –	半裁材 クリ	板間、大引上より出土。出土時西部の一面に貫穴が２か所存在。これらの間が削られている。下面にはさらに3.5～４×3.5㎝の枘穴が２か所存在。柱あるいは土台からの転用か。西端木口には出枘が施されW21旧敷居に挿される。大引と接する所を削っている。	
第503図	21建 W26	木製品 根太		長 幅	187.0 13.0	厚 重	8.0 –	芯持材 クリ	板間、大引上より出土。上面は平滑に削られている。出土時東部に４×９㎝の貫穴有り。そのすぐ西側の出土時上面に一段深く平らに削られている。下面は、貫穴のほかに、円形ないし六角形の枘穴が３か所ある。これらの枘穴は接地面に施されることから、転用前の加工とみられる。土台を半裁して割面を削り上面として根太へと転用したものか。また、下面の両端が平らに削られている。出土時西端の木口は、出枘が造り出され、W21旧敷居に挿されていたが折損している。出土時東端木口はノコで切り出されたものか。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第503図	21建 W27	木製品 根太		長 幅	254.1 11.2	厚 重	7.9 −	半裁材 マツ科	板間、大引上より出土。丸太を半裁し、木裏を上面に使用。上面はチョウナ痕が残るが非常に平滑である。カンナによって成形されたか。両側面は削られて平滑に整えられるが、下面はほとんど加工を施さない。大引に接する木口を削っている。	
第504図	21建 W28	木製品 根太		長 幅	262.6 11.0	厚 重	8.2 −	半裁材 広葉樹	板間、大引上より出土。木裏を上面に使用。丸材を半裁し、割った面を平滑に加工する。側面にも加工痕がみられ、平らに削られている。下面は中央西寄り、土台石が当たる箇所が削られている。西端木口には出枘が造り出されW21旧敷居に挿す。	
第504図	21建 W29	木製品 根太		長 幅	267.5 11.0	厚 重	7.5 −	分割材　マツ 楔 板目　クリ	板間、大引上より出土。上面は平滑に削られている。四面ともチョウナで丁寧に削って仕上げている。裏側には中の仕口間等に土台石等の当たり痕は確認できない。西端木口に蟻掛が施される。	
第504図	21建 W30	木製品 根太		長 幅	227.0 14.0	厚 重	8.0 −	芯持材 クリ	板間､大引上より出土｡上面は平滑に加工している｡南側面に加工痕あり｡他側面は丸太に一部加工を施す｡側面に加工があるが､用途不明｡下面には､間渡しあるいは木舞等を納める六角形の加工が等間隔で３か所施されており､転用材と考えられる｡西端木口には出枘が施されW21敷居に挿す。東端木口には貫穴があり､そこに部材が一部残存する｡根太としては不要なものと考えられるため､転用前に組まれた部材が残存したものか。	
第505図	21建 W31	木製品 床板		長 幅	252.5 19.3	厚 重	2.0 −	板目 クリ	板間より出土。木裏を上面に使用。上面には成形時のノコの痕跡が残り、カンナ等で削られる。下面は表皮に近く、刃幅８㎝のチョウナ等で削られたものか。W33、W35、W40、W41の床板と年輪・節が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	
第505図	21建 W32	木製品 床板		長 幅	250.0 20.0	厚 重	1.5 −	− クリ	W39の板と近い年輪。同じ木材からノコギリで切り出したか。木表は表皮に近く、幅が少し狭くなっている。ノコギリではなく、幅８㎝前後のチョウナと思われる工具で加工し、雑な仕上げとなっている。	
第505図	21建 W33	木製品 床板		長 幅	250.2 20.9	厚 重	1.0 −	板目 クリ	板間より出土。表面は平滑で毛羽立ちはほとんどない。南端にはノコの切り残し痕が残る。W33、W35、W40、W41の床板と年輪・節が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	
第505図	21建 W34	木製品 床板		長 幅	249.3 20.8	厚 重	1.0 −	板目 クリ	板間より出土。表面全体にノコの痕跡あり。ノコの刃を斜めに入れて切り始め､途中から刃を真横にして切っている。南側にはノコの切り残し痕が残り、歯厚が分かる。	
第506図	21建 W35	木製品 床板		長 幅	236.8 20.9	厚 重	0.9	板目 クリ	板間より出土。表面は平滑に成形される。W31、W33、W40、W41の床板と年輪・節が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	
第506図	21建 W36	木製品 床板		長 幅	225.6 29.6	厚 重	1.6 −	板目 マツ	板間より出土。上面にノコと思われる痕跡あり。表面は毛羽立つ。上・下面の北側にはノコの切り残し痕がある。側面はチョウナで成形される。W37、W38の床板と長さ、幅が同じで同一の木材から切り出したものと判断されるが、接合はしない。	
第506図	21建 W37	木製品 床板		長 幅	226.6 31.0	厚 重	1.5	板目 カツラ	板間より出土。上・下面にノコの痕跡があり、北側にはノコの切り残し痕が残る。ノコで切った後整形されておらず、表面は毛羽立つ。出土時の北部には節穴あり。W38床板と年輪・節穴が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	
第506図	21建 W38	木製品 床板		長 幅	222.6 29.9	厚 重	1.9 −	板目 カツラ	板間より出土。上面にノコと思われる痕跡あり。上面の南端にはノコの切り落とし痕が残る。出土時北部には節穴あり。側面はチョウナで成形される。下面も刃幅６㎝(２寸)のチョウナ等で整形されたものか。W37と年輪・節穴が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	
第507図	21建 W39	木製品 床板		長 幅	251.8 21.3	厚 重	1.0 −	板目 クリ	板間より出土。上面にノコの痕跡があり、毛羽立つ。下面はほぼ平らである。南端にはノコの切り残し痕が残る。W32床板と近い位置に年輪があり、同一の木材から加工したものと判断される。	
第507図	21建 W40	木製品 床板		長 幅	248.7 21.0	厚 重	1.1 −	板目 クリ	板間より出土。上面は平滑に成形される。南端にはノコの切り残し痕が残る。一部切欠がある。W31、W33、W35、W41の床板と年輪・節が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第507図	21建 W41	木製品 床板		長 幅	250.6 21.3	厚 重	1.0 –	板目 クリ	板間より出土。上面は平滑に成形される。W33、W35、W40、W41の床板と年輪・節が一致し、同一の木材から加工したものと判断される。東側面側には欠込が２か所あり、W11掘立柱２、W12掘立柱３のに対応すると思われる。	
第507図	21建 W42	木製品 床板		長 幅	84.8 25.0	厚 重	1.6 –	板目 クリ	使用状況不明。上面はチョウナによって平滑に成形されている。ノコの痕跡あり。	
第508図	21建 W43	木製品 床板		長 幅	191.4 25.6	厚 重	2.1 –	板目 不明	板間西端のW21旧敷居下側面から出土している。上面には成形時のノコによるものと思われる加工痕あり。全体的に加工が粗雑。	
第508図	21建 W44	木製品 床板		長 幅	110.0 24.8	厚 重	2.68 –	板目 クリ	土座と板間の境界、W21大引３敷居の下より出土した板材。上にノコによる加工痕あり。検出時地面に接していた箇所にノコの痕跡が残る。両側面はノコで切り出した後、チョウナで削っている。	
第508図	21建 W45	木製品 台？		長 幅	49.44 27.04	厚	5.15	板目　クリ 半裁材　クリ	内面は全て割った後、加工なし。外面も全く加工痕なし。両端の表面を斜めに切っている。何かの目的で端材を台として利用したものか。	
第508図	21建 W46	木製品 敷居		長 幅	74.9 9.1	厚 重	14.6 –	–	敷居。長さ73.5㎝と短く。幅も9.5㎝と狭い。厚さ5.7㎝と薄い。戸棚等の敷居と思われる。左側に上からの材等を受けるためのホゾ穴あり。表面は全てチョウナまたはナタ等により平に削れている。丁寧な削りである。	
第508図	21建 W47	木製品 板戸横桟木		長 幅	120.0 3.5	厚 重	2.5 –	分割材 長クリ　短マツ	前後の板戸の部品と思われる。	
第508図	21建 W48	木製品 切台		長 幅	53.0 13.0	厚 重	11.5 –	– クリ	切台。クリ？の角材の表２か所、裏１か所、深く削ってできた凹部あり。凹部周辺に大量の刃物跡あり。	
第508図	21建 W49	木製品 杭？		長 幅	67.0 9.0	厚 重	7.0 –	–	用途名称不明。丸材を４つに割って中心部分を細く削っている。上、下、両側面ともチョウナまたはナタ等により削っている。ほぼ中央に幅５㎝前後の段を２個とも持つ。先端は削って杭のようになっている。打ち込んで使用したか。	
第509図	21建 W50	木製品 唐臼柄の部品		長 幅	29.1 14.2	厚	1.03	–	キネの踏み柱と支脚部分との間にあった薄い板。	
第509図	21建 W51	木製品 唐臼柄		長 幅	122.0 12.0	厚 重	12.0 –	芯持材 マツ属複維管束亜属	先端部分のキネとキネ上の重し石がセットで石臼の上に乗った状態で出土。キネと柄の接合部分が弱いため、その部分が２つに割れている。	
第509図	21建 W52	木製品 唐臼支脚		長 幅	80.0 55.0	厚	35.0	芯持材 クリ	唐臼の支脚である。Ｙ字型の自然木の二股に分かれた部分を利用。上面より17㎝の掘り込み、深さ６㎝、横4.5㎝の凹みを堀り、唐臼のキネに打ち込まれた回転軸を受けるようになっている。支脚の半分は土の中に埋められていたと思われるが、どこまで埋まっていたかは不明。	
第510図	21建 W53	木製品 唐臼の杵		長 幅	48.5 12.4	厚	13.9	–	表面に刃物の痕跡が明瞭に残る。	
第510図	21建 W54	木製品 唐臼の置輪	完形	径 幅	56.0～63.0 11.0～13.5	厚	12.0	芯持材 クリ	木の幹を輪切りにし、中央を刳り抜いてドーナツ状にする。内面は幅の狭い手斧痕が残る。	PL.83
第510図	21建 W55	木製品 自在カギ		長 幅	90.6 2.35	厚	28.0	–	自在カギの外筒の竹と中のカギの一部。	
第511図	21建 W56	木製品 養蚕棚		長 幅	121.0 8.0	厚 重	6.5 –	芯持材 クリ	太さ８㎝前後の丸木の表面を削り、上面に約13㎝間隔で６個のホゾ穴あり、上の１個は貫通しており、他の６個とは別か。側面に小さな貫と思われるホゾ穴あり。これに対応する反対側にも同じようなものがあると思われる。	
第511図	21建 W57	木製品 養蚕棚		長 幅	189.0 8.0	厚 重	6.5 –	–	61862と同じ。	PL.91
第511図	21建 W58	木製品 養蚕棚		長 幅	192.0 9.0	厚 重	7.0 –	–	７～９㎝の九材の上面を一部削って平にしている。上面10個ホゾ穴あり、ホゾ穴間隔約16㎝、ホゾの直径３㎝前後、ホゾ穴の深さ2.5～3.5㎝最も下のホゾ穴は貫通。左側２か所ホゾ穴貫通。下面最下部に１か所ホゾ穴貫通。上端は長さ９㎝のホゾあり。竹の小片多数材と共に運び込まれていた。ホゾ穴に差し込まれたものか。	PL.91
第511図	21建 W59	木製品 養蚕棚		長 幅	64.4 7.6	厚 重	6.2 –	芯持材 クリ	細い丸材を利用。16㎝幅で横方向の穴あり。養蚕棚の柱と思われる。	PL.93
第511図	21建 W60	木製品 養蚕棚		長 幅	39.9 8.1	厚	3.7	–	最下段の横木を受けるホゾ穴が貫通している。外面は皮をとったそのままで加工なし。内側は平らに整形されているが、表面は少し荒れている。	
第512図	21建 W61	木製品 漆椀	口縁端部欠	底	5.8		–	– トチノキ	体部から底部の器壁は厚く、腰部は水平に削る。内外面共に朱漆。高台内に黒漆で屋号？を入れる。	PL.102

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第512図	21建 W62	木製品 漆椀	口縁部と高台欠		–		–	– トチノキ	腰が稜をなして張り、高台部は厚い。内面は朱漆、外面は茶色の漆。	PL.102
第512図	21建 W63	木製品 漆椀	口縁部と高台欠		–		–	– トチノキ	腰が稜をなして張り、高台部はやや厚い。内面は朱漆で外面は茶色の漆、高台内のみ黒漆。	PL.102
第512図	21建 W64	木製品 漆椀	口縁端部欠	底	5.6		–	– ブナ属	腰部に稜をなし、高台脇を水平に削る。外面は茶色漆、内面は朱漆塗り。	
第512図	21建 W65	木製品 漆椀	高台欠	口	10.8		–	– ブナ属	口縁部は一部残存。高台は欠損。内外面に朱漆。高台内に黒漆で屋号を記す。屋号は「尓ヵ」	高台内に屋号。
第512図	21建 W66	木製品 漆椀	口縁部と高台欠		–		–	– ブナ属	器壁は薄い。内外面共に朱漆。	
第512図	21建 W67	木製品 漆椀	体部1/2		–		–	– ブナ属	乾燥によりやや変形する。内外面共に下地に黒、仕上げに朱漆。高台内に黒漆で屋号らしきものを描くが判読できない。	高台内に屋号か。 PL.98
第512図	21建 W68	木製品 漆椀蓋	口縁部と高台欠		–		–	–	器壁は薄い。内外面共に朱漆。	
第512図	21建 W69-1	竹製品 竹筒(箸入れ)	ほぼ完形	長 長	全32.0 筒27.5	径	外3.9	–	節を抜いた側は4.5㎝半裁した状態。	取り上げ時に箸入れとされる。
第512図	21建 W69-2	木製品 箸	完形	長 径	24.6 0.4～0.5		–	–	黒漆塗り。棒状の素材を削り断面円形に近づける。両端は細く削っていない。	
第513図	21建 W70-1	木製品 竹筒　はし入れ		長 幅	26.6 3.4	厚	3.3	–	節内部は残っていない。残っていたのか、欠いたのかは不明。	
第513図	21建 W70-2	木製品 はし		長 幅	19.0 0.6	厚	0.4	–	表面に赤色漆が塗られいる。先端の漆は細く削っている。	
第513図	21建 W71	竹製品 匙かヘラ	完形	長 幅	15.6 2.4	厚	0.5	–	竹の表皮側を裏面とし、裏面は竹の丸味をそのまま用いる。持ち手は両側を削り、断面方形とする。先端部は裏面を削って薄く仕上げる。両面に朱漆を塗るが、つぼ両面の漆は1/2ほど剥がれる。	
第513図	21建 W72	木製品 杓子		長 幅	10.4 8.2	厚	0.7	–	杓子の身の部分、柄部分欠損。	
第513図	21建 W73	木製品 ヘラか	完形	長 幅	25.6 12.5	厚	0.8	柾目 ヒノキ科	杓文字状を呈した板であるが、先端部は欠き込みが残り段差を残す。段差の低い部分の木口面には木釘穴が１か所、高い側木口付近には２か所の木釘穴が認められる。肩部分の切り込みは左右非対称である。柄端部にも切り込みがあり、高い側に木釘穴が１か所残る。板材再利用品と考えられる。	板再利用品。
第513図	21建 W74	木製品 ヘラ	一部欠	長 幅	– –	厚	1.1	柾目 クリ	ヘラ本体の片側は欠損。柄は扁平で端部欠損。右側の本体と柄の境部分測縁の加工痕は明瞭。	
第514図	21建 W75	木製品 ヘラ	1/3欠	長 幅	50.0 柄2.3	厚	柄1.9	柾目 コナラ属コナラ節	えの断面は楕円状で端部の上下面を削り薄く仕上げる。ヘラ部は長さ14.5㎝ほどに薄く削り出す。ヘラ部上面はほぼ平坦で裏面は丸味を帯びる。ヘラ部1/3ほどは欠損。	
第514図	21建 W76	木製品 水嚢か	木部完	長 厚	– 1.2	径	柄2.1	芯持材 –	持ち手は枝材の周囲を削って仕上げる。先端部は扁平に削り孔を開ける。先端部は枝分かれ部分に穿孔し、直交方向に細い栓が残っており、穿孔部に挿入し、細い栓で留めたと思われる。	PL.103
第514図	21建 W77	木製品 皿	一部欠	口 底	17.5 10.5	高	5.0	– カエデ属	外面は粗い削りで仕上げ、内面はやや丁寧に削る。約1/2ほどは乾燥による変形が認められる。	PL.103
第515図	21建 W78	木製品 メンパ		長 幅	17.3 9.1	厚	0.7	–	メンパの蓋と身の１組である。楕円形である。蓋は長径18.2㎝、短径11㎝。身は長径17.2㎝、短径10㎝で蓋が身の上に重なるようになっている。天井板厚さ0.5㎝、底板厚さ0.7㎝。	PL.98
第516図	21建 W79-1	木製品 曲物		長 幅	20.3 9.2	厚	20.3	–	内外面全て黒漆、和紙は貼っていない。６か所、底板と側板に穴があり、ひも等で結んでいたか。柾目。木目細かい。つなぎ目に14か所、黒漆を塗ったテープ状の貼物。	PL.91
第516図	21建 W79-2	木製品 曲物		長 幅	25.4 8.4	厚	32.1	–	円の全長は直線にして81㎝。外内面黒漆。側板の上部には、3.5㎝間隔で多くのクギ穴がある。貫通している穴も10以上。綴は桜皮。側板は木目細かい。全て柾目。材は針葉樹か。	
第517図	21建 W80	木製品 曲物		長 幅	24.5 6.6	厚	0.1	–	つなぎ目は桜皮で４段。重なり部分はは20㎝と長い。	PL.101
第517図	21建 W81	木製品 曲物		長 幅	14.5 7.1	厚	16.3	–	小さな曲物である。重なった部分の幅は10㎝、外側約５か所、内側１か所を桜皮で止めている。一部、内側に折れ曲がっている。	PL.104
第517図	21建 W82	木製品 曲物		長 幅	13.6 5.7	厚	18.0	–	黒漆が塗られていたか。木目が細かい。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第517図	21建 W83	木製品 曲物		長 幅	12.2 4.4	厚	14.0	–	ワッパの側板。下部分が破損している。木目密。材はマツか。	
第517図	21建 W84	木製品 底板		長 幅	11.7 1.7	厚	11.7	–	底板と思われるが不明。丸く面取りされている。表面密。片側、下面一面に米粒状の小さな穴が多数空いている。樹脂が多く、材はマツか。	
第518図	21建 W85	木製品 曲物		長 幅	16.9 7.9	厚	19.2	–	表面の木目目立つ。柾目。クギは３か所。	
第518図	21建 W86	木製品 曲物		長 幅	31.2 4.8	厚 重	42.3	–	漆なし。側板、底板とも木目の粗い柾目取り。竹クギが10か所。	PL.99
第518図	21建 W87	木製品 曲物		長 幅	13.0 3.1	厚	12.9	–	曲物の下半分である。全体的に少し歪んでいる。底板完形。	PL.100
第519図	21建 W88	木製品 柄杓		長 幅	11.7 12.0	厚	0.8	–	漆なし。木目は荒い。柾目。１本の桜皮を穴の左右で止めている。	PL.104
第519図	21建 W89	木製品 柄杓の柄	柄のみ	長 幅	29.5 2.0	厚	1.0	–	柄杓の柄と思われる。先端から12㎝のところの片面が少し斜めに切られている。この部分に柄杓の側面が組み込まれて、柄が柄杓から抜けないように工夫されていたものと思われる。	
第520図	21建 W90	木製品 曲物		長 幅	23.9 7.0	厚	33.2	–	篩か。曲物、つなぎ目に３本の刃傷。クギは４か所ほどか。柾目。目が細かい。	PL.104
第520図	21建 W91	木製品 曲物		長 幅	30.0 2.93	厚	44.5	–	底板が残っていないがあったものと思われる。クギ８本で固定している。	PL.99
第521図	21建 W92-1	木製品 膳	側板欠	径	30.8		–	柾目 –	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。 PL.91
第521図	21建 W92-2	木製品 膳	側板と底板3/4欠	径 厚	底30.7 底1.1			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とし、一部残存する。側板の厚さは５㎜、高さは2.7㎝で底板上に1.5㎝立ち上がる。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第521図	21建 W92-3	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.7 底1.1			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第521図	21建 W92-4	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.6 底1.1			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-5	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.7 底1.1			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-6	木製品 膳	側板欠	径 厚	底306 底1.0			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-7	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.6 底1.0			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-8	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.5 底1.0			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-9	木製品 膳	側板欠	径 厚	底30.8 底0.9			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第522図	21建 W92-10	木製品 膳	側板3/4欠	径 厚	底30.8 底1.1			柾目 ヒノキ	薄板を曲げて側板とするが、側板は欠損。底板は１枚板で蟻掛け吸付きによる脚を３か所に付ける。底板下面中央に、楕円内に「吉九」若しくは「吉丸」の焼き印。全面に茶色半透明状の漆。脚畳付部分の漆はほとんど擦れる。	W92-1～10は揃い。
第523図	21建 W93	木製品 膳		長 幅	31.6 3.2	厚	31.9	–	表裏全面黒漆か。外枠に一部割れあり。重なり部分は14㎝。	PL.104
第523図	21建 W94	木製品 盆		長 幅	31.9 3.3	厚	34.2	–	板の目が非常に細かい。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第524図	21建 W95	木製品 文箱	一部欠	長 幅	29.6 22.7	高	7.3	柾目 ヒノキ科	天井板上面は亀腹状を呈し、黒漆塗り後に文様を描く。文様は金色味を帯びた細かい粉状のものを蒔いて描く。文様は不鮮明。側板は１段で４枚の板を２枚組接ぎの竹釘留めで作る。側板と天井板も竹釘で留めている。内面は赤色味を帯びた透明漆か。側板外面黒漆。	PL.94
第524図	21建 W96-1	木製品 重箱蓋	天井部	長 幅	19.0 17.0	厚	0.7	板目 ハンノキ属	外面は黒漆、内面は朱漆。外面周囲は小さい段を有する亀腹状を呈する。外面は垂れ桜文を描くが、痕跡で現状は橙色に近いが本来の色は不明。内面２か所にゲタ剥がれ痕。	PL.91
第525図	21建 W96-2	木製品 重箱	底板1/4欠	長 短	19.4 17.5	高	5.0	– ヒノキ科	木釘留め二枚組み接ぎの側板を薄い底板上に乗せ、底板を木釘留めする。内面は朱漆、側板上面から底部外面は黒漆。側板外面に金蒔絵？による垂れ桜文。底板外面に、黒漆のない範囲があわり、ゲタ痕と考えられる。	W96-3の上段。
第525図	21建 W96-3	木製品 重箱	底板一部欠	長 短	19.8 17.9	高	5.1	–	木釘留め二枚組み接ぎの側板を薄い底板上に乗せ、底板を木釘留めする。内面は朱漆、側板上面から底部外面は黒漆。側板外面に金蒔絵？による垂れ桜文。底板外面に、黒漆のない範囲があわり、ゲタ痕と考えられる。	W96-2の下段。
第526図	21建 W97	木製品 硯箱	完形	長 短	23.0 14.5	高	3.5	–	透き漆様の塗り箱で、蓋上面は櫛状工具で鋸歯文、波状文、直線文を描く。箱は部材を木釘で留める。蓋は被せ蓋。内部には小型の石製硯と墨、筆が入っている。墨に「以錦」の浮き文字。	硯と墨は個別記載する。 PL.94
第526図	21建 W98	木製品 収納箱 （１号）		長 幅	71.0 43.6	厚	26.3	–	四辺とも２枚を重ねて深い箱としている。表面は表裏ともカンナ等より丁寧に整形している。木クギが残っている。一辺に４個の木クギ穴がある。	PL.98
第527図	21建 W99	木製品 板		長 幅	19.5 8.9	厚 重	3.6 -	–	箱と思われるが不明。材はケヤキか。	
第527図	21建 W100	木製品 収納箱 （２号）		長 幅	48.0 30.0	厚	27.7	–	深い箱である。両面に墨書あり。内部から曲物とクシ２本出土。底板の表面はカンナで丁寧に整形されている。底板の底面はノコギリ。他の表裏は全てカンナで丁寧に整形されている。横板は上と下で組み方を変えている。クギは全て木クギ。材はマツ材か。	
第528図	21建 W101	木製品 箱		長 幅	59.3 26.7	厚	6.3	–	乱箱か。浅い箱である。複数を重ねて使用も可能。底板は２枚。クギは底板長軸に３本、短軸は板１枚に１本。クギ穴あり。全て板目。材はクリ材か。	
第528図	21建 W102	木製品 箱		長 幅	20.3 10.8	厚	2.2	–	内面が黒く焦げている、線香立てか。木クギと思われるものが横から２本、縦から２本ずつ残っている。	
第528図	21建 W103	木製品 枡か	完形	長 幅	10.4 10.2	高	5.8	柾目、板目 ヒノキ科	１枚の底板上に２枚組接ぎを竹釘で留めた側板を竹釘で留める。内寸は8.0×7.8×5.0である。容量としては概ね１合８勺。	PL.100
第529図	21建 W104	木製品 板	完形	長 幅	35.5 28.3	厚	1.7	柾目 マツ属複維管束亜属	隅切りをした板。一方の長辺に釘痕のような小穴２箇所。他に木釘痕も見受けられない。用途不明。	
第529図	21建 W105-1	木製品 折敷か	底板	長 短	21.0 20.9		–	板目 ケヤキ	下面の周囲を面取りし、角を落とした薄板上に側板木釘留めする。側板は欠損。内外面は茶色半透明の漆塗り。	
第529図	21建 W105-2	木製品 折敷か	側板一部欠	長 短	21.3 20.7	高	1.8	板目 ヒノキ科	下面の周囲を面取りし、角を落とした薄板上に高さ1.2㎝の側板を巡らし、木釘留めする。角を落とした部分の側板は、切り込みを入れて底板に沿わせる。内外面は茶色半透明の漆塗り。	
第529図	21建 W106	木製品 膳	1/2	長 厚	28.0 1.0		–	板目 マツ属複維管束亜属	取り上げ時には側板か脚と推定される板材が存在したが、実測可能な部分のみ図示した。端部際には木釘穴と板痕が残る。また、円形の圧痕が認められるが、端部にまで達しており、被災時に生じた痕跡と考えられる。	PL.106
第530図	21建 W107-1	木製品 箱か	完形	長 幅	– –	厚	–	板目 マツ属複維管束亜属	二枚及び三枚組み接ぎの板材。一方の側面にダボに近いような木釘が残る。二枚組み接ぎ側の端部には、鋸で小さく挽いたような溝が残る。	板材。
第530図	21建 W107-2	木製品 箱か		幅 厚	30.6 1.3		–	板目 モミ属	二枚組み接ぎ木釘留めの部材。下部は欠損し、底板の有無は不明。上部に釘痕はない。表面に「長月吉五日湯原乃件　久面本　饗より　但被仰可御　松屋㐂右衛(門)」の墨書。この墨書以外にも屋号状の墨書がある。	墨書。
第530図	21建 W108	木製品 盆か	1/4欠	底	30.8		–	– モミ属	短辺の板に把手穴を有するお盆。節を有する板目底板上に外傾する側板を置き、底部がわから木釘留めする。短辺の側板は長辺側板で挟み、木釘留めで固定する。一方の短辺側板がなく、残存する側板も把手穴上部が欠損。乾燥による変形が著しい。	乾燥により変形。
第530図	21建 W109-1	木製品 構築部材	ほぼ完形	長 幅	46.0 8.2	厚	1.4	柾目に近い マツ属複維管束亜属	板材。二枚組み接ぎの板で組み接ぎ部には二つずつの木釘や痕跡が残る。一方の側面には５～10㎝間隔で木釘や木釘痕が残る。木釘径が約４㎜と太い。	W109-2と組み合う可能性あり。

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第530図	21建 W109- 2	木製品 構築部材		長 幅	73.5 8.8	厚	1.3	柾目に近い マツ属複維管束亜属	板材。二枚組み接ぎを木釘で留める。片側側面には木釘や木釘穴が６～13cm間隔で認められる。木釘径は約４㎜と太い。	W109-1と組み合う可能性あり。
第531図	21建 W110	木製品 櫛	櫛歯一部欠	長 幅	11.7 4.0	厚	1.0	板目 –	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口はやや内傾する。現状で白木。乾燥によりやや変形する。	解かし櫛。
第531図	21建 W111	木製品 櫛	ほぼ完形	長 幅	12.1 3.8	厚	0.9	柾目 –	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口はやや内傾する。やや櫛目は粗い。現状で白木。1/2ほどは乾燥による変形で薄くなる。	解かし櫛。 PL.103
第531図	21建 W112	木製品 櫛	ほぼ完形	長 幅	12.5 4.7	厚	1.0	柾目 シナノキ属	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口はやや内傾する。やや櫛目は粗い。現状で白木。	解かし櫛。 PL.103
第531図	21建 W113	木製品 櫛	一方の木口欠	長 幅	– 3.2	厚	1.0	板目か 広葉樹	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口は僅かに内傾する。現状で白木。欠損部付近は乾燥により薄く変形する。	解かし櫛。
第531図	21建 W114	木製品 櫛	完形	長 幅	12.3 4.7	厚	1.1	板目 –	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口はやや内傾する。現状で白木。	解かし櫛。
第531図	21建 W115	木製品 櫛	ほぼ完形	長 幅	12.8 4.0	厚	0.6	板目 カバノキ属	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部に節が認められる。現状で白木。	解かし櫛。
第531図	21建 W116	木製品 櫛	一部欠	長 幅	10.2 5.1	厚	1.1	板目 カツラ	湾曲した峰から角をもって木口に至る。峰部は厚く、木口は直立する。現状で白木。乾燥によりやや変形する。	
第531図	21建 W117	木製品 櫛		長 幅	10.15 4.68	厚	1.02	–	櫛歯の数は１cm幅につき７本。	PL.102
第531図	21建 W118	木製品 櫛		長 幅	6.14 3.27	厚	0.52	– ハンノキ属ハンノキ亜属	櫛歯の数は１cm幅につき10本。非常に密な櫛である。これまで、51号建物で１本出土しているだけである。	
第531図	21建 W119	竹製品 梳櫛	一部欠	長 幅	10.1 5.0	厚	1.0	–	竹製梳櫛。竹製櫛歯を挟む竹は、径の異なる割竹を使用し、内面側で歯を挟む。内側には４条の溝を刻む。歯を挟む竹の内面には歯痕が残り、歯間は0.2～0.3㎜。一方の中央外面に不明焼印。両端に小孔があり、片側に細い金属が残る。両端の櫛歯枠と片側を覆うカバーは欠損。	竹製梳櫛、唐櫛。 PL.102
第532図	21建 W120	木製品 下駄	完形	長 幅	14.9 5.0～ 7.7	高	3.2	柾目 クリ	小型の連歯下駄。前歯左側の側面は欠損。	一木連歯下駄。
第532図	21建 W121	木製品 下駄	完形	長 幅	21.9 7.0～ 8.0	高	5.9	芯持材 クリ	長方形一木の連歯下駄。幅は踵側が狭く、つま先側が広い。連歯の中間は丸味を有した抉りで外側は直角に切り出す。側面と表面の一部に黒漆が残る。ヒビによりつま先側と踵側が下がる。鼻緒孔付近に節が１つ。	一木連歯下駄。
第532図	21建 W122	木製品 下駄	完形	長 幅	22.0 7.5	高	4.2	芯持材 クリ	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第532図	21建 W123	木製品 下駄	ほぼ完形	長 幅	21.5 7.7	高	3.7	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第533図	21建 W124	木製品 下駄	完形	長 幅	22.1 7.8～ 8.2	高	6.2	板目 クリ	一木の刳り下駄。前後端を斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。台部中央は平坦な板状。台裏の鼻緒孔付近前歯は、３か所弧状に繰り込んだ中央に開ける。	一木刳り下駄。 PL.102
第533図	21建 W125	木製品 下駄	完形	長 幅	21.7 7.7～ 8.0	高	5.0	板目 クリ	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。鼻緒は前歯後ろ側３か所の抉り中の中央に開ける。前歯後ろ側両端は低く削り残す。後ろ歯の前側、横緒孔外側にも土手状に低く削り残す。台のつま先側右には節の抜け孔で深く抉れる。	一木刳り下駄。
第533図	21建 W126	木製品 下駄	完形	長 幅	21.5 7.3	高	4.2	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。土圧によるものか台は捻れる。鼻緒脇に節がある。	一木刳り下駄。
第533図	21建 W127	木製品 下駄	左後欠	長 幅	21.0 台8.0	高	3.2	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。弧状に抉った両側に狭い面取りを行う。歯は先端部は欠損か摩滅か不明。	一木刳り下駄。
第534図	21建 W128	木製品 下駄	前歯1/2穴	長 幅	– –	高	–	板目 クリ	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は弧状に抉った中央に開ける。右横緒孔には鼻緒繊維が残る。	一木刳り下駄。

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第534図	21建 W129	木製品 下駄	2/3	長 幅	– 6.9	高	2.9	柾目 ハンノキ属	後歯は欠損。横緒孔は、上面から向かって左側の一部が残る。前歯と後歯を削り出す。鼻緒は前歯後ろ側の３か所を抉り、その中央に開ける。歯は磨滅か。	一木刳り下駄。
第534図	21建 W130	木製品 下駄	一部欠	長 幅	20.3 4.4～ 7.3	高	3.7	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。「○上」焼き印。 PL.106
第535図	21建 W131- 1	木製品 下駄	完形	長 幅	20.9 台8.0	高	4.4	板目 サクラ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第535図	21建 W131- 2	木製品 下駄	ほぼ完形	長 幅	21.1 台7.5	高	4.0	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第535図	21建 W132	木製品 下駄	完形	長 幅	21.5 台8.0	高	3.2	板目 ハンノキ属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。横緒孔はややずれる。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を３か所弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第535図	21建 W133	木製品 下駄	両側一部欠	長 幅	21.3 台7.7	高	3.2	板目 ハンノキ属ハンノキ亜属	一木の刳り下駄。前後端は斜めにし、歯間を刳り込む。歯間が広く、横緒孔は後ろ歯の前に開ける。歯間の台は板状を呈する。鼻緒台裏部分は前歯を弧状に抉った中央に開ける。	一木刳り下駄。
第536図	21建 W134	木製品 下駄	右後欠	長 幅	22.2 台8.4	高	4.7	板目 ハンノキ属	台は板状で前後は直線的であるが、左右は弧状に張りを持つ。歯はほぼ垂直で箱形であろう。	一木連歯下駄。
第536図	21建 W135	木製品 下駄	完形	長 幅	20.2 6.1～ 8.8	高	4.7	板目 –	測縁がやや丸味を持つ長方形一木の連歯下駄。歯の側面は「ハ」の状に小さく開く。台部の厚さは不均一で、上面から向かって右側が1.5㎝、左側が1.1㎝である。台部裏側の傾斜は歯の高さで調整して水平を保っているようである。	一木連歯下駄。
第536図	21建 W136	木製品 下駄	完形	長 幅	22.4 6.0～ 8.7	高	5.4	板目 クリ	一木の連歯下駄。踵側端部の幅が最も狭い。四隅は小さく面取りを行う。前歯前方には直線的な刃物痕が残る。	一木連歯下駄。 PL.106
第536図	21建 W137	木製品 下駄	完形	長 幅	22.4 6.1～ 8.7	高	5.3	芯持材 クリ	測縁がやや丸味を持つ長方形一木の連歯下駄。連歯接地面側に芯側が来る材から直角に立ち上がる歯を切り出す。歯の側面は「ハ」の状に小さく開く。	一木連歯下駄。
第537図	21建 W138	木製品 下駄	後歯2/3欠	長 幅	21.5 3.8～ 7.0	高	10.7	板目 コナラ属コナラ節 モミ属	細身の台部に「ハ」の字状の歯を差し込む。台部は黒漆塗り。鼻緒は孔内に一部残る。後歯の2/3は欠損する。	陰卯下駄。
第537図	21建 W139	木製品 下駄		長 幅	21.3 13.1	厚 重	8.9 –	–	材はコナラか。	
第538図	21建 W140- 1	木製品 下駄	完形	長 幅	– –	高	–	–	台部裏側は船底状をなし、２箇所に「ハ」字状に開く高い歯を差し込む。歯は地獄ほぞ接ぎによる。横緒孔には鼻緒繊維が残る。黒漆塗りで、台表の漆はほとんど残らない。歯の漆塗りは薄い。歯先端は潰れて丸味を帯びる。	陰卯下駄。 PL.106
第538図	21建 W140- 2	木製品 下駄	完形	長 幅	– –	高	–	柾目 コナラ属コナラ節	台部裏側は船底状をなし、２箇所に高い歯を差し込む。歯は地獄ほぞ接ぎによる。歯は薄く、台表は擦れているが、全体に黒漆塗り。	陰卯下駄。
第539図	21建 W141- 1	木製品 下駄	台部と歯一部欠	長 幅	20.4 台7.1	高	8.7	板目 クリ	台部裏側は船底状をなし、２箇所に高い歯を差し込む。歯は地獄ほぞ接ぎによる。横緒孔には鼻緒繊維が残る。	陰卯下駄。 PL.106
第539図	21建 W141- 2	木製品 下駄	後歯一部欠	長 幅	21.4 台7.2	高	9.6	板目 コナラ属コナラ節	台部裏側は船底状をなし、２箇所に高い歯を差し込む。歯は地獄ほぞ接ぎによる。鼻緒孔には鼻緒繊維が残る。	陰卯下駄。 PL.106
第540図	21建 W142	木製品 桶	ほぼ完形	長 幅	29.0 28.8	厚	1.8	–	スギあるいはマツか。１枚造りの蓋(板目)、側板(柾目)18枚、底板(板目)３枚からなる桶。タガは３～４列。底板のあたった痕跡は側板に明瞭に残るが、蓋の痕跡は明瞭でない。	PL.105
第540図	21建 W143	木製品 桶	完形	長 幅	49.7 7.1	厚	1.7	–	底板４枚、板目。側板は17枚、板目と柾目の混在。５本から６本のタガ。	PL.104
第541図	21建 W144	木製品 桶		長 幅	41.1 22.2	厚	13.2	–	ほぼ完形の結樽である。板間南の雨落溝中出土。天井板に焼印あり、把手付である。	ミズオケか。
第541図	21建 W145	木製品 桶		長 幅	37.4 30.8	厚	32.7	–	直径32㎝、高さ27㎝。高さ37㎝の把手がある。つぶれた状態で出土。	PL.104
第542図	21建 W146	木製品 桶		長 幅	18.0 17.6	厚	1.4	–	スギ。板は全て柾目。底部外側に幅1.5㎝のタガの痕あり。裏面は荒れている。	PL.105
第542図	21建 W147	木製品 桶	1/3	径 高	38.0 19.0	– 重	– 1267.6	–	側板８枚と底板２枚が。鉄片が底板に付着している。側板は足りていない。内側に鍋が入った状態で出土している。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第542図	21建 W148	木製品 樽底板	3/4	長 幅	– –		–	板目 スギ	合い釘つけ接ぎにより４枚の板を接合。１枚は欠損。片面に大きく屋号と推測される文字を墨書。墨書面端部周縁は面取り。	「は」墨書。
第542図	21建 W149	木製品 板		長 幅	6.1 0.6	厚	6.2	–	上下とも表面割れている。本来はもっと厚かったか。表面に加工痕なし。底板か蓋か不明。柾目取り。	
第542図	21建 W150	木製品 蓋？		長 幅	13.6 0.5	厚	11.6	–	柾目の薄い丸板。蓋と思われる。	
第543図	21建 W151	木製品 鍋の蓋　取手有		長 幅	33.3 32.2	厚	1.9	–	柾目。竹クギが残る。	PL.107
第543図	21建 W152	木製品 蓋	完形	径 厚	10.3 1.5			板目 –	身の受け部を薄く平坦にした蓋。上面から周縁端部に朱漆。内面側は白木状態。上面の仕上げは粗く、木目が文様状に浮き出る。中央に方形孔をあけ、つまみを通す。つまみ下部は籤を通して抜け止めとしている。現状でつまみに朱漆は認められない。	
第543図	21建 W153-1	鉄製品 鉄鍋(表)		径 幅	34.0 17.0	厚 重	0.3 2470.7	–	蓋と鍋、弦が残存する。蓋は中心に紐で留める穴が空き、持ち手を固定している。耳の穴は３か所空き、耳の口縁は飛び出している。内部には有機質が付着している。外面に煤が付着する。湯口は明瞭。	PL.101
第544図	21建 W153-2	木製品 桶底板	1/3	径 高	38.0 19.0	－ 重	– 1267.6	–	側板８枚と底板２枚が。鉄片が底板に付着している。側板は足りていない。内側に鍋が入った状態で出土している。	PL.101
第545図	21建 W154	木製品 蓋		長 幅	77.2 63.4	厚	4.2	–	板目。刃物の跡やノコギリ切残痕が残る。	PL.107
第545図	21建 W155	木製品 扇子	一部欠	長 幅	31.5 1.5	長	骨30.0	竹 –	全長31.5㎝と大きい扇子。中骨に透かしはなく、紙は存在しない。要部の軸も欠損。	
第545図	21建 W156	植物製品 行李	一部分		–		–	–	行李の一部か。	W111に付着して出土。付着物
第545図	21建 W157	木製品 滑車？		長 幅	6.0 3.3	厚	3.4	–	中央が空洞な円形の木製品である。外側はU字状に掘られている。直径５㎝の小さな滑車か。	
第546図	21建 W158	金属・木製品 苧挽金	歯2/3欠	長 幅	10.6 5.8	厚	2.4	–	かまぼこ形の持ち手に金属板をはめ込む。歯の部分は湾曲する。持ち手の平坦部中央付近には、親指が入る大きさの窪みがある。歯は2/3ほど欠損。	
第546図	21建 W159	木製品 麻挽　刃なし		長 幅	10.8 4.9	厚 重	2.2 –	–	材はスギか。親指の使用痕がある。	PL.102
第546図	21建 W160	麻引か		長 幅	10.1 6.8	厚	2.6	–	麻引と思われる。両端に煤付着。刃部分の鉄全くなし。底面、中心付近がわずかにへこんでいる。	PL.102
第546図	21建 W161	木製品 ざる		長 幅	38.8 34.9	厚 重	4.9 –	–	ほぼ完形の箕である。編目が密である。把手部分は、２本の太い割竹を用い、底割竹をはさみ込み、割竹を巻いて固定している。	
第546図	21建 W162	木製品 アンギン編台		長 幅	63.0 33.6	厚 重	3.8 –	半裁材 クリ	表面は丸の自然面、裏面は割材により片方の側面のみ加工あり。	PL.105
第547図	21建 W165	木製品 糸車		長 幅	60.7 5.1	厚	3.0	–	糸車の台部分と思われる。広葉樹環孔材。	PL.93
第548図	21建 W163-1･2	木製品 アンギン編台		長 幅	76.6 55.0	厚 重	4.7 –	–	中央の台(割目あるもの)なし。自然の木を利用。表面全て加工痕あり。	
第548図	21建 W164	木製品 背負子		長 幅	78.7 28.3	厚 重	3.6	– クリ コナラ属コナラ節	背負子である。縦木２本、横木３本中２本残っている。ホゾ穴は４×1.5㎝と大きい。横木はやせているが、本来はもっと太かったと思われる。ナラの細い木をナタ等で削って作っている。ホゾ穴は大きく丁寧に作ってあるが、全体的に荒い作りである。コーナー部分は削って角をとっている。背部にあったと思われるナタ等はなし。	
第549図	21建 W166	木製品 竹べら？		長 幅	19.2 1.7	厚	0.2	–	節を持たない竹32枚、長さ全て19㎝と同じ。裏面に平らに削って、一部黒漆と思われる色が塗られている。	
第549図	21建 W167	木製品 馬の鞍の一部か	完形	長 径	7.9 2.1		–	芯持材 ヒノキ	細い芯持ち材の曲がった部分、若しくは曲げて利用する。両端部付近の周囲に刻みを入れて紐を巻く部分を作る。両端部には削り痕が残る。樹皮は剥いでいると考えられる。	
第550図	21建 W168	木製品 行灯の把手		長 幅	22.4 5.0	厚	1.1	–	行灯の把手部分。下に52053-２の板が付いて、行灯の上端の枠木と固定される。材はスギか。	
第550図	21建 W169	木製品 行灯の把手	一部欠	長 高	23.5 6.2	厚	1.9	柾目 スギ	製品の把手部分。上部を「ハ」の字状、下部に弧状の抉りを入れて持ち手を作出。両端には横木を渡したと推測される。両端部上面には木釘が認められる。	
第550図	21建 W170	木製品 把手	完形	長 幅	36.0 4.3	厚	2.2	角材 マツ属複維管束亜属	両端を肩を作るように削り、中央下面を弧状に抉り持ち手を作出する。両端下部は欠き接ぎで上面から鉄釘を打つ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第551図	21建 W171	木製品 柄		長 幅	72.0 3.5	厚	2.2	–	鍬の柄か。材はコナラか。	
第551図	21建 W172	木製品 材		長 幅	36.3 22.9	厚	1.9	–	材はクリか。	
第551図	21建 W173	木製品 オノの柄？		長 幅	78.3 4.1	厚	2.8	–	オノの柄あるいは天秤棒か。広葉樹。環孔材。	
第551図	21建 W174	木製品 角材		長 幅	50.2 8.5	厚 重	2.7	–	自在カギか。	
第551図	21建 W175	木製品 柄	柄のみ	長 幅	24.9 2.7	厚 重	2.0 40.4	–	金属製品の柄になっている。柄の内部に、柄を埋め込んだような形状をしている。製品名は不明。	
第551図	21建 W176	木製品 鞘	鞘	長 幅	17.0 2.1	厚	1.0	–	中空となっている。鞘と思われる。	
第552図	21建 W177	木製品 杵	完形	長 長	杵48.0 柄72.0	径	杵10.0	芯持材、割材 クリ	実測時に部材ごととなっており、復元的に組み合わせて測図した。このため柄の向きや楔位置が当初と異なっている可能性が高い。杵は枝を落とした芯持ち材を使用し、割材を断面楕円形に整形した柄を差し込み、楔で留める。	
第552図	21建 W178	木製品 木槌	完形	長 径	38.5 10.5	径	柄4.4	芯持ち材 広葉樹ゴンズイ	芯持ち材の一端を細く削り、持ち手とする。槌部には刃物によると考えられる直線的な傷が認められる。槌部中央付近は使用痕でやや窪む。	PL.106
第552図	21建 W179	木製品 横槌	一部欠	長 径	30.5 槌部 10.2	径	把手4.0	– ナシ亜科	芯持材から柄を削り出す。槌部中央付近は若干窪む。槌部中央付近には直線的な刃物痕が認められる。	
第552図	21建 W180	木製品 横槌	柄欠	長 短	11.2 10.3			芯持材 ガマズミ属	芯持ち材の一端を細く削り、持ち手とする。槌部には刃物によると考えられる直線的な傷が認められる。	PL.106
第552図	21建 W181	木製品 板		長 幅	28.3 56.0	厚 重	3.5 –	–	樹皮、ケヤキか。幹から樹皮をはがしてる。用途名称不明。	
第555図	21建 W182	木製品 仏壇部品		長 幅	78.4 6.0	厚 重	4.4 –	–	仏壇下戸棚鴨居。	
第555図	21建 W183	木製品 仏壇部品		長 幅	88.9 4.8	厚 重	4.3	–	仏壇の右柱。２面に溝あり。	
第555図	21建 W184	木製品 仏壇部品		長 幅	73.2 3.0	厚	2.2	–	仏壇の部品。観音開の左側ドア、枠下と思われる。材は広葉樹。	
第555図	21建 W185	木製品 仏壇部品		長 幅	87.1 4.5	厚 重	4.7	–	仏壇の左柱。２面に溝あり。	
第555図	21建 W186	木製品 仏壇部品		長 幅	88.2 4.1	厚 重	7.72	–	仏壇正面天井部横材。１面に溝とホゾ穴あり。	
第556図	21建 W187	木製品 角材		長 幅	121.6 4.1	厚 重	4.2	–	仏壇右奥の柱。	
第556図	21建 W188	木製品 角材		長 幅	124.4 5.2	厚 重	5.2	–	仏壇左奥の柱。	
第556図	21建 W189	木製品 角材		長 幅	– –	厚 重	– –	–	仏壇下戸棚奥の横木。	
第556図	21建 W190	木製品 仏壇　敷居		長 幅	– –	厚 重	– –	–	仏壇下戸棚敷居。	
第556図	21建 W191	木製品 仏壇		長 幅	– –	厚 重	– –	–	仏壇下戸棚右横木。	
第556図	21建 W192	木製品 床棚の一部		長 幅	– –	厚 重	– –	–	仏壇下戸棚左横木。	
第557図	21建 W193	木製品 位牌	完形	高 幅	26.9 8.1	厚	1.3	板目 マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「天明二壬寅年」「帰真　妙薫禅定尼　位」「十一月廿六日」の墨書。裏は無文字。台の前は弧状を呈する。台と本体は蟻形三枚組み接ぎで立てる。	
第557図	21建 W194	木製品 位牌	ほぼ完形	高 幅	27.8 7.8	厚	1.0	板目 マツ属複維管束亜属	やや平坦な剣先状の白木板に「寛延二己天」「歸真　□□圓乗　禅定尼　灵位」「四月十一日」の墨書。裏面にも墨書と推定される部分が認められるが、判読出来ない。台は長方形で一部面取りが残る。	
第557図	21建 W195	木製品 位牌	ほぼ完形	高 幅	30.4 6.4	厚	1.0	板目 マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「享保八卯天」「帰本　無外体説禅定門　霊　位」「十二月三日」の墨書。裏面には、墨書と考えられる複数の斜め線が認められる。台は板２枚重ねで、下方から木釘で位牌本体を留める。台下部の板には、他に４箇所の木釘や木釘孔が認められるが、上板には痕跡が認められない。	
第557図	21建 W196	木製品 位牌	台欠	高 幅	24.2 7.1	厚	1.4	板目 マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「明和五子年」「皈本　額點禅定門　灵位」「十月十六日」の墨書。裏面下位に「[　]忌ヵ」の墨書。台は見つかっていない。	點＝点の異体字
第557図	21建 W197	木製品 位牌	完形	高 幅	24.0 8.5	厚	0.8	板目 マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「元文三年」「□　性英禅定尼　霊　位」「五月十三日」の墨書。裏面に墨書は認められない。下端にほぞが折れた痕跡が認められないうえに、幅が広い割に薄い。また、裏面の削り痕が目立つなど、他の位牌と形状や特徴がが異なる。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第557図	21建 W198	木製品 位牌	完形	高 幅	26.4 6.6	厚	1.0	板目 マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「宝暦四甲戌天」「歸真　妙琳禅定尼　灵位」「十一月十□日」の墨書。裏に「□□□寶ヵ」の墨書。台は上面に面取りを施す。	
第558図	57建 W199	木製品 Y字加工材		長 幅	365.0 14.0	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	棟持柱か。細い丸太を利用し、上端は二叉となっており、ここに棟木を受けたか。下半は約60㎝ほど土中に埋まっていたものと思われる。地表面からＹ字までの高さ280㎝、柱は14～19㎝と細い。表面は枝の部分を切っているが、他の面は全く加工していない。	
第558図	57建 W200	木製品 Ｙ字状棒		長 幅	166.0 7.0	厚 重	8.0 –	芯持材 クリ	自然木の枝分かれ部分を利用した柱材か。細い丸太で表面に加工痕なし。表面全体荒れている。根元は土中に埋められたものか。欠けてはいない。上端は二叉になっている。小さな小屋の柱または洗濯干し用の柱か。	
第559図	廃材 W201	木製品 壺椀		長 幅	– –	高 重	4.5 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆、胴部外面赤色で梅の花と思われる絵が全面に描かれている。渋下地内面の赤色漆剥離少ない。外面の黒漆大量に剥離。口縁部内湾気味に立上る、口唇部欠損後の使用のためかにぶい黄褐色	
第559図	廃材 W202	木製品 下駄		長 幅	18.7 6.0	厚	3.7	– クリ	丸型連歯ゲタ。全体に風化しているが、残りは良好である。クリであり、壊れにくいものと思われる。台裏は３本溝で中央部少し薄くなっている。塗装なし。	
第559図	廃材 W203	木製品 (板材)		長 幅	46.5 12.5	厚 重	1.7 –	– ヒノキ科	桶把手接続部に直径１㎝の穴あり。上下２か所にタガ痕。外側は平らに丁寧に削られ、凸凹面なし。内側は削って細くしている。凸凹面残る。スギ材。全て柾目。	
第559図	廃材 W204	木製品 人形		長 幅	12.5 4.2	厚	3.4	–	長さ13㎝の栓に似た加工品である。首や目と思われる加工があるので、人形の顔と思われる。	
第559図	廃材 W205	木製品 板　加工あり		長 幅	35.6 4.8	厚 重	2.6 –	– クリ	クワの下の板部分。板が直角に入るように加工。上面は曲線、下面は直線。加工痕は不明。	PL.86

6区6号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第560図	15建 W1	木製品 土台		長 幅	225.0 14.0	厚 重	12.0 –	芯持材 広葉樹	柱ホゾ穴２か所側面に２×3.5㎝のホゾ穴、間渡穴あり、土壁。左側面、下面とも荒れている。ノコギリ痕少し残る。	
第560図	15建 W2	木製品 土台		長 幅	192.0 15.0	厚 重	12.5 –	芯持材 広葉樹	長さ約２間半、約90㎝間隔に５本立っていたようで11×4.5㎝のホゾ穴(２か所推定)残っていた。左端はさらに別の土台とつながっていた。表は平にきれいに整形、チョウナ痕が多く残るが平である。左側面にチョウナ痕あり、底面は荒れており整形痕不明。間渡穴３か所あり、この部分は土壁と思われる。	
第560図	15建 W3	木製品 土台		長 幅	119.0 15.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	土台。全体が風化しており、根太を掛るホゾ穴も明確ではない。７か所それらしき掘り込みあり。	
第560図	15建 W4	木製品 馬屋柱		長 幅	190.0 13.0	厚 重	12.0 –	芯持材 広葉樹	丸材を四面加工して馬屋の柱としている。表面は２か所、馬栓棒を入れる穴と馬栓棒を固定する止め具(棒)がついていた穴あり。この止め具を固定するために竹グシが使われている。下32㎝部分は土中に埋められているためか、丸材のまま下端は削られている。反対面も２か所、馬栓棒の受け穴と思われるものあり、２頭以上の馬小屋用の柱か。出土場所が馬屋から離れており転用材か。	
第560図	15建 W5	木製品 板		長 幅	90.0 15.0	厚 重	12.0 –	芯持材 クリ	表面平、ノコギリと思われる加工痕あり。床板と思われる。両端は現状留めており、長さは91㎝の床板。	
第561図	15建 W6	木製品 フタ？		長 幅	29.8 0.6	厚	29.4	– カツラ	柾目。2枚の板で蓋とする合わせ部分にホゾ。	

7区漂着物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第561図	W1	木製品 椀	完形	口 底	11.5 高台5.9	高	4.1 –	– ブナ	内外面赤色漆、口唇部黒漆、高台部内面黒色の文字で「上」渋下地、内外面の漆剥離少ない。高台部内面の器肉特に厚い。	
第561図	W2	木製品 しゃもじ	柄欠損	長 幅	12.4 7.5	厚	2.4	–	柾目。	
第561図	W3	木製品 踏み鍬		長 幅	88.9 19.4	厚 重	1.4 –	–	踏み鋤と思われる。刃先の鉄部分と後ろの踏み部分の一部欠損。表面は丁寧に整形されている。	

7区12号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第562図	42建 W1	木製品 囲炉裏枠木		長	119.0	厚	7.0	半裁材 クリ	内面は割った状態加工なし。外面は木表で全体を少し削っている。W2と同じ部材を二分したものか。	
				幅	12.0	重	−			
第562図	42建 W2	木製品 囲炉裏枠木		長	111.0	厚	6.0	半裁材 クリ	内面は割った状態で再加工なし。外面は木表で全体を少し削っている。42建W1と同じ部材を二分したものか。	
				幅	7.0	重	−			
第562図	42建 W3	木製品 囲炉裏枠木		長	114.0	厚	8.0	半裁材 クリ	土間と反対側の奥に位置する丸太を半分に割って、外側は丸いが削っている。両側も削っている。ホゾ２か所あり。他の枠木が入る。内面割った状態で加工していない。	
				幅	10.0	重	−			
第562図	42建 W4	木製品 椀		口	−	高	3.7	− ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆、外面赤色で絵か４箇所描かれている。渋下地特に外面漆剥離多い。胴～底部の器肉厚い。深椀と思われる。	PL.165
				底	高台6.0					
第562図	42建 W5	木製品 櫛		長	6.7	厚	1.1	−	１cm間隔に４本の歯､表面に黒漆。	
				幅	3.2					
第562図	42建 W6	木製品 櫛		長	7.8	厚	0.9	−	柾目。木目細かい。	
				幅	2.2					
第563図	42建 W7	木製品 下駄		長	22.3	厚	2.9	− クリ	上面中央に屋号あり。	
				幅	8.1					
第563図	42建 W8	木製品 蓋？丸底？		長	12.5	厚	8.6	− ヒノキ科	内外面黒漆。	
				幅	0.5					
第563図	42建 W9	木製品 しゃもじ		長	20.9	厚	9.8	− サクラ属	しゃもじである。ネコと付着している。裏面での実測である。	
				幅	6.9					
第563図	42建 W10	木製品 桶蓋 朱塗り		長	23.8	厚	1.2	−	お櫃の底板と思われる。底板３枚中の２枚である。内面赤色漆外面黒色漆。底端部に10個のクギ穴あり。内外面とも刃物傷と思われる傷多数あり。	PL.156
				幅	19.4					
第563図	42建 W11	木製品 火打ち金の木製部分		長	11.4	厚	0.9	−	全て柾目。材はスギか。	PL.156
				幅	3.4					
第564図	42建 W12	木製品 火打箱		長	25.6	厚	5.9	− マツ	２か所に箱状の堀込あり､左側に着火剤､右側に火打石や火打ち鉄等を入れたか｡左側が深い｡左側の着火部分に蓋がある｡蓋はツマミがついているが､ツマミ底部が穿孔され､底に紐が残っていた｡この紐で持ち上げたか｡底面と側壁下部､蓋の底面は炭化し黒色となっている｡ツマミの両側にノコギリ痕あり｡材は針葉樹､マツか。	PL.156
				幅	10.2					
第564図	42建 W13	木製品 箱		長	52.9	厚	1.2	− マツ科	物入れ。中に柄が２本入っていた。	
				幅	32.8					
第565図	42建 W14	木製品 箱物 一升枡		長	18.0	厚	10.2	− マツ	底板の上に四辺の横板を相欠で組んでいる。横板の上3.5㎝、下５㎝で統一している。表面はカンナ。底板下端、口縁部上端もカンナで削られ、やや丸みを持つ。底板と側板は３か所、横板は対角線状に各２個ずつ竹クギあり。	PL.158
				幅	17.8					
第565図	42建 W15	木製品 箱の底		長	16.2	厚	0.9	−	重箱の底板である。半分に割れている。底部内面暗赤褐色漆。底部外面黒色漆。底部外面に丸の中に九の刻印あり。底部外面に脚２本、剥落痕あり。材は針葉樹か。	
				幅	9.5					
第565図	42建 W16	木製品 箱物？と櫛		長	66.4	厚	1.0	− マツ	糸の圧痕ほぼ全面にあり。	
				幅	9.1					
第566図	42建 W17	木製品 重箱	完形	長	−	厚	−	− マツ − 広葉樹 タカノツメ	重箱の完形品である。内面赤色漆。外面は黒色漆。底面の黒漆は雑で少し剥げている。蓋上面、側板外面４面は、細かい点描のような凹凸をつくり、そこに絵が浮かび上がるように描かれている。天井底部とも脚はかまぼこ状に丸くしている。材は散孔材か。漆の剥離ほとんどない。木クギが使われている。	
				幅	−					
第567図	42建 W18	木製品 箱		長	31.2	厚	1.1	− ヒノキ科	裏面に刃物痕あり。	
				幅	23.9					

6区13号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第568図	46建 W1	木製品 桶底板		長	81.0	厚	2.5	分割材 マツ	桶の底板。クリ材。厚さ2.5㎝、幅26～27㎝の板３枚で直径80㎝の底板としてる。表裏面ともノコギリによる加工か。木表を上にしており、各板の接合面は平ら、カンナによるものか。各板にそれぞれ２か所づつクサビが打ち込まれ接合されている。クサビは竹と思われる。	
				幅	80.4					
第568図	46建 W2	木製品 桶底板		長	91.6	厚	4.1	板目 クリ	便槽桶の底板か。直径が約88㎝と大きい。口縁部は恐らく90㎝以上であろう。表面裏面ともチョウナで削られている。かなり荒い削り。多くの面が風化している。５枚の板を継ぐためにホゾ穴を掘り、やといホゾで継いでいる。内側の継ぎ方は残りが悪く不明。	PL.185
				幅	87.8					

6区14号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第568図	49建 W1	木製品 くわ？		長	37.8	厚	6.7	– クリ	名称用途不明。コナラ。	PL.176
				幅	22.6					
第568図	49建 W2	木製品 踏み鍬の柄		長	85.9	厚	2.4	–	柄鍬の底板部。表裏ともチョウナ等により削られ、凹凸あり。	PL.177
				幅	17.8					

5区15号屋敷

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第569図	27建 W1	木製品 土台		長	205.0	厚	13.0	芯持材 クリ	土台のコーナーの一部分。上部は他の土台と車知栓継でのびる。車知栓は横方向。下部は直交して他の土台と接合。他の土台か本土台の一部掘り込んで架かって、ホゾでつながっている。柱を受ける凹穴は２か所のみ。表面に土壁用の間渡穴３か所づつあり、中央の柱脇、間渡穴は二重となっている。	
				幅	15.0	重	–			
第569図	27建 W2	木製品 土台		長	97.0	厚	15.5	芯持材 クリ	土台の一部。上は車知栓、下は欠損。柱ホゾ１か所。土台下の礎石受けで削られている。幅13cm高さ15cmの土台。車知栓を交互でつないでいると思われる。表面は平らで丁寧に整形。左右側面は荒れているが丁寧に整形。	
				幅	13.0	重	–			
第569図	27建 W3	木製品 土台		長	240.0	厚	14.5	芯持材 クリ	土台と思われる。上端は蟻継、下端はホゾで上下さらに土台はつながっていたか。中央に柱用のホゾ。表面は少し荒れているが平で丁寧に整形。底面は土に触れていたように荒れている。	
				幅	17.5	重	–			
第570図	27建 W4	木製品 土台(ホゾ穴有り)		長	302.0	厚	13.0	半裁材 クリ	礎石３個の上に置かれた土台である。柱が12.5cmで３本立つ。左端は土台の角部分である。直交するホゾがあり、接合と反対側にホゾが少し出ている。下端は次の土台につながるホゾあり、３表面とも荒いチョウナ痕が残る。下部には３か所ヒカリツケによる削りが柱下部分にある。	
				幅	12.0	重	–			
第570図	27建 W5	木製品 土台		長	96.0	厚	13.5	芯持材 クリ	土台である。上端は横方向のシャチ栓で継いでさらに延びる。上面は間渡穴があり、土壁であった。表面と両側面ヨキにより削られている。その後丁寧な整形なし。底面は土に接して荒れている。	
				幅	15.0	重	–			
第570図	27建 W6	木製品 シャチ栓受		長	34.4	厚	4.9	– クリ	土台の一部。シャチ栓継ぎ用のホゾ部分。土台本体部分から割れている。右側面にチョウナ痕あり。	
				幅	7.6					
第571図	27建 W7	木製品 土台		長	235.0	厚	14.5	芯持材 クリ	土壁用の小舞穴あり。左端と右端に礎石受け用のヒカリ加工あり。左側にさらに土台がつながる。表・両側面チョウナ痕多く残る。底面もチョウナ痕。	
				幅	14.0	重	–			
第571図	27建 W8	木製品 土台　ホゾ穴有り		長	106.0	厚	14.0	芯持材 クリ	５寸角の土台である。間渡穴２か所、上端は１個所、凹の加工痕のみ。継ぎの技法不明。下は割れている。表面はチョウナ。側面は広刃斧か。底面は荒れていて不明。	
				幅	15.5	重	–			
第572図	27建 W9	木製品 土台		長	329.0	厚	14.5	分割材 クリ	左右とも別の土台につながるか。柱用ホゾ３本か。右端のホゾは2.2×3.5cmと小さい、ここにも柱か。底面以外は荒いチョウナ痕。柱の脇には間渡穴あり、土壁か。	
				幅	15.0	重	–			
第573図	27建 W10	木製品 土台		長	453.0	厚	16.0	芯持材 クリ	柱２本のホゾあり。割れてホゾのみ残る。底面礎石受５か所あり。土台上は全面土壁。間渡穴あり。加工は13.5cmの幅のマサカリ痕あり。	
				幅	16.0	重	–			
第574図	27建 W11	木製品 土台(根太掛けか？)		長	448.0	厚	14.5	分割材 クリ	土台(住居端部分)片側に９個根太受ホゾあり。横幅6.3、縦深６、奥行き２㎝、上面に多数のクギ穴あり。両端は段の形の仕口となっており、柱に組み込んで接合か。根太は約45cm間隔、底面中央に床束用のホゾ穴あり。東柱があった。整形は底面広刃斧(刀幅約12㎝)。両側面は平らである。ヨキかチョウナか不明。上面は平らである。整形痕不明。	
				幅	15.0	重	–			
第575図	27建 W12	木製品 柱(ホゾ穴有り)		長	232	厚	14	芯持材 クリ	柱と思われる。232cmと短い。下端のホゾは5.5×13.5cmと太くて長い。上端のホゾとは直交する。表面はチョウナ痕を残す。特に下面のチョウナ痕荒い。表面は丁寧できれいに整形。	
				幅	21.5	重				
第575図	27建 W13	木製品 角材 ホゾ穴有		長	117.0	厚	12.5	芯持材 クリ	柱上端部。上端に幅10.6cm、厚さ3.1cmのホゾあり。桁または梁等がくるか。貫２か所あり、表裏面に間渡穴あり。土壁か。表面はチョウナ等のあとでカンナか。きれいに整形されている。	
				幅	12.0	重	–			
第575図	27建 W14	木製品 土台？		長	196.0	厚	17.5	芯持材 クリ	表面にホゾ穴１個、その左右に２個の間渡穴あり、土壁か、土台と思われる。中央に間柱用と思われる小さなホゾ穴あり。左(上)面に横方向の巾12cmのホゾ穴あり。さらに上には土台につながる左右端部分の底面が削られている。礎石の土台を承けるためのひかりつけか。	
				幅	13.0	重	–			
第576図	27建 W15	木製品 柱		長	239.0	厚	13.0	芯持材 クリ	柱、残り良し。貫３か所。上下に凸、直交。	
				幅	12.0	重	–			

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第576図	27建 W16	木製品 柱		長 幅	245.5 12.5	厚 重	12.0 –	芯持材 クリ	貫３か所ある柱。貫の間に全く間渡穴なし、土壁ではないか。下のホゾは７㎝と長い。柱の高さは237㎝と高い。下の貫穴に貫が残っており、クサビも残っている。中央の貫穴にも貫あり、クサビなし。表面四面とも長さ７㎝、チョウナ間隔２～３㎝のチョウナ痕全面に残る。	
第577図	27建 W17	木製品 柱		長 幅	203.0 13.0	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	柱下端はヒカリツケ、上は欠け。３方床梁とその上に敷居か。４表面ともチョウナ痕なし、きれいに整形。	
第577図	27建 W18	木製品 柱		長 幅	273.0 15.0	厚 重	13.0 –	芯持材 クリ	五寸角の柱である。底部敷土台に接合する凸欠損。上端差鴨居部分で欠損。貫と同じ方向に差鴨居その上に込栓の一部穴残る。貫は12×３㎝クサビ残る。貫の間に間渡穴、丸竹及び割竹用の穴が２個づつある。表面チョウナ全面削りで丁寧に削っている。	
第578図	27建 W19	木製品 柱 (加工有り)		長 幅	244.0 9.0	厚 重	11.5 –	半裁材 クリ	礎石立の柱。ぬけておらず深さ６～７㎝で止まっているホゾ穴が４か所。下部のホゾはその上のホゾ穴間隔より短い。天井部は凸のように桁を受けるように加工している。表面にはチョウナの痕残る。	
第578図	27建 W20	木製品 柱		長 幅	187.0 12.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	上下ホゾ、下のホゾが大きい。太い貫３か所中央の貫には横からのクサビ痕。上のホゾは片側に少しずれて突き出ている。右側面１か所、裏面に２か所掘られた凹みあり。表面はチョウナ痕か。丁寧で痕跡は明瞭でない。貫はぬけていないことよりコーナー部分の柱か。	
第578図	27建 W21	木製品 柱		長 幅	220.0 14.0	厚 重	13.5 –	芯持材 クリ	貫３か所、貫の間に各２か所、間渡穴。裏側にも間渡穴。両面土壁。下部は土台と思われる。表面にチョウナ痕が多く残るが、丁寧な整形で荒くない。上の部分は材が細くなり、少し丸くなっている。端部に凸のホゾがあり、梁がくるものと思われる。	
第579図	27建 W22	木製品 柱		長 幅	160.0 12.0	厚 重	14.5 –	芯持材　クリ ほぞにささる板材 板目　マツ	５寸角弱の柱。貫１本残る。下面に貫１か所あり、上部は欠損。貫の間に間渡穴(丸)２か所あり、丸竹等使用か。下端は切られており、ホゾ等あったものか、1/3しか残っていないため不明。	
第579図	27建 W23	木製品 柱		長 幅	219.5 15.0	厚 重	14.5 –	芯持材 クリ	貫と思われるホゾ穴、１か所のみあり。ホゾ穴の１か所を切ってはずした後にはめ込んでいる。クサビと同じ働きか。表面全面荒いマサカリの削痕あり。上下端面のホゾは片端に寄っている。	
第580図	27建 W24	木製品 柱		長 幅	247.5 18.0	厚 重	17.5 –	芯持材 クリ	大黒柱。表四面カンナ。	
第580図	27建 W25	木製品 柱		長 幅	240.0 18.0	厚 重	20.0 –	芯持材 クリ	主柱、大黒柱の脇にくる柱か。貫があり、板壁か。礎石上のヒカリツケ、上部は差し鴨居。木柱あり。	
第581図	27建 W26	木製品 柱 (加工有り)		長 幅	173.0 12.5	厚 重	11.5 –	芯持材 クリ	丸材を加工して角材柱としている。部分的に丸面残る。上部は梁を受ける。下部は貫が続く間渡穴両面あり土壁と思われる。下部は続く。	
第581図	27建 W27	木製品 柱		長 幅	213.7 10.0	厚 重	8.0 –	芯持材 クリ	直径９㎝前後の丸材を加工し上端にホゾ、下端は削って杭のような形にしている。掘立柱と思われる。表面は丸であり、部分的にチョウナ等により削っている。削面が丸みを持っている。下に8.5×3.5㎝のホゾ穴あり。上端のホゾと同じ方向。ここに床板等の足固めか。上のホゾと下のホゾ穴の間に六角形のホゾなし。	
第581図	27建 W28	木製品 柱(大黒柱か？)		長 幅	119.0 16.0	厚 重	14.0 –	– クリ	柱(大黒柱)の上半分か、４面に鴨居や梁等を受ける大きなホゾ穴がある。上端はホゾがある。上端部完形。	
第581図	27建 W29	木製品 土台か？		長 幅	193.0 9.0	厚 重	7.0 –	芯持材 クリ	直径6.5～8.5㎝の丸木の表裏面を少し削って２個ホゾ穴をあけている。ホゾ穴から外側まで12.5～16.5㎝と遠い。北・南端部は平に削られており、ホゾなし。柱又は土台と思われるが、ホゾが幅6.5㎝と狭いため土台と思われる。ホゾ穴周辺のみ削っているが、他の面は丸のままでほとんど加工していない。	
第581図	27建 W30	木製品 根太		長 幅	72.0 10.0	厚 重	8.5 –	芯持材 クリ	72㎝と短い根太と思われる。	
第582図	27建 W31	木製品 梁		長 幅	475.0 18.0	厚 重	19.0 –	芯持材 クリ	梁と思われる。曲がっており、その曲がりをそのまま利用している。両端の仕口は異なり、左側は凸部、右側は凹部となっている。左側は桁に蟻掛け、右は桁の下にくるものと思われる。上面は広葉樹を斧で丁寧に削って平に、両面も同じで下面は丸い部分を残している。チョウナと思われる、整形は不明。裏面中央部にホゾ穴あり、この部分で柱を受けているか？端にずれているが、両端の柱部分からみると15㎝前後外側にずれている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第583図	27建 W32	木製品 大引		長 幅	650.0 28.0	厚 重	18.0 –	芯持材 クリ	約647(３間半)通しの大引である。13個の根太を架けた切り込みあり。裏側は床束と思われるホゾ２個(9.5×3.5、深さ7.5㎝)。大引に床束が確認されたのは同じ27建の床束ホゾだけであった。床束の下は礎石であろうか。床束部分は表面を削って広く平にし、中央にホゾを掘っている。	
第584図	27建 W33	木製品 大引		長 幅	453.0 15.0	厚 重	16.0 –	芯持材 クリ	長くて太い大引、丸木の一部を削って作成している。表面(正面)に８か所(１か所不明)根太受用ホゾ穴。両方から根太を受けている。左右のホゾ穴の形異なる。裏面中央部に床束のホゾ穴あり、八ッ場の調査の中で床束が確認されたのははじめて。	
第585図	27建 W34	木製品 束柱		長 幅	– –	厚 重	– –	–	三面中央に全て中心炭級あり。正面は横のみ炭線あり。上面は凸で大引に差し込まれていたものと思われる。底面はヒカリツケとなっており、礎石の上に置かれていたと思われる。４寸角である。裏面に刃幅６㎝のハマグリ刃のチョウナ削りあり、当遺跡では初めて。側面は長さ12㎝の広刃斧痕。右側面にハマグリ刃のチョウナ痕。表面は斧による加工。	
第585図	27建 W35	木製品 床束		長 幅	35.0 13.8	厚 重	13.5 –	–	長さが35㎝と短い。四面チョウナ痕あるが、凸凹ほとんどなく、丁寧である。ノコギリで切っているように平。上端はホゾあり、大引に差し込まれており、下端は底が凹状に削られている。礎石の上に置かれたものと思われ、ヒカリツケとなっている。	
第585図	27建 W36	木製品 束柱		長 幅	34.0 12.5	厚 重	12.5 –	芯持材 クリ	束柱と思われる。27建建材455と同様。455は27㎝、1034は30㎝と少し、1034が長い。幅は11.5㎝と12㎝でほぼ同じ。上端は長さ4.5㎝のホゾ。ホゾの位置は少し凸低くなっている。底面はヒカリツケで中央がへこんでいる。表面はチョウナと思われる加工痕が残る。	
第585図	27建 W37	木製品 床束		長 幅	26.5 13.5	厚 重	13.5 –	– クリ	四面とも加工により平になっている。ノコギリで切ったように平であるが、わずかに凸凹があり、ヨキまたはチョウナ等の加工痕あり。上端はホゾ、下端は中央部凹となり、礎石等の上に置くためのヒカリツケ。削ったチョウナ痕あり。	
第585図	27建 W38	木製品 床束		長 幅	32.5 13.0	厚 重	12.0 –	– クリ	２面平にして、チョウナ痕わずかに残る。ノコギリで切ったように平である。他の２面は丸い木ハダの状態で加工痕なし。上面はホゾで大引に差し込んだか。下端は中央部をチョウナ等で削り、0.5㎝ほどへこんでいる。	
第585図	27建 W39	木製品 床束		長 幅	23.5 13.0	厚 重	10.5 –	–	三面平にノコギリ等で切っているが、わずかに凸凹あり。上面はホゾあり。底面は他の床束が全てヒカリツケであったが、これは水平で全くヒカリツケなし。水平の礎石だったのか。材はクリか。	
第586図	27建 W40	木製品 根太		長 幅	459.0 13.0	厚 重	7.0 –	半裁材 マツ	長さ458(約２間半)の根太、表面は平にノコギリ、裏面は丸太のままで、２個所大引の上にくる所、重なる部分を削って平に重なるようにしている。表面に５×５のホゾ穴あり、ここに柱か?	
第586図	27建 W41	木製品 根太		長 幅	277.0 11.5	厚 重	5.5 –	半裁材 マツ	太くて長い(９尺)276.5㎝の根太である。中間に130㎝(４尺５寸)のところにある大引に架けるために幅25㎝、深さ１㎝以下の範囲で削って平にしている。両端は大引に架けるために３㎝幅で削って平にしている。表面は平でノコギリ等により、切られている。裏面は大部分丸い状態で表皮を残す。	
第586図	27建 W42	木製品 根太		長 幅	123.0 12.0	厚 重	5.5 –	半裁材 マツ	根太と思われる。自然木を半分にノコギリで切って、平にして根太としている。下端はほぼ残っている。上は欠損。表面は平でノコギリの痕跡残る。裏面(木表)は皮が残っている。	
第587図	27建 W43	木製品 柱(ホゾ穴有り)		長 幅	215.0 13.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	掘立柱で下部は土中に埋められていたものか。3.5×3.5、深さ２㎝のホゾ穴が表面に３個、左側の側面に各１個ある。丸材をチョウナで荒く削って四角としている。表皮部分が多く残る。	
第587図	27建 W44	木製品 根太		長 幅	148.4 12.2	厚 重	8.8 –	芯持材 マツ	大引にかかる部分の長さは125㎝前後である。丸材１本を２分せずに一方を削って根太としている。	
第587図	27建 W45	木製品 根太		長 幅	129.0 15.5	厚 重	7.0 –	半裁材 マツ	ホゾ穴に丸竹の痕跡。このホゾ穴に竹を横方向に通し、外側に草壁か。柱にそえて使用か。裏面は風化少ないが、表面、両側面風化して年輪浮き出ている。裏面は平でチョウナ痕不明。	
第587図	27建 W46	木製品 柱(根太に転用か?)		長 幅	223.0 15.0	厚 重	7.0 –	半裁材 クリ	柱を半分に薄く割って根太に転用か。側面に方形の浅いホゾ穴２個あり。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第588図	27建 W47	木製品 根太		長 幅	358.0 14.0	厚 重	9.0 –	半裁材 クリ	長さ357(２間弱)の根太。表面はほぼ平。下面は中央部、大引の上に置くために削られ平になっている。丸の表皮部分は荒れて風化している。	
第588図	27建 W48	木製品 根太		長 幅	213.0 15.0	厚 重	11.0 –	芯持材 クリ	太さ11～12㎝の材を用いた根太であり、両端を削って大引に掛けていると思われる。197㎝間隔の根太である。太いために柱等にする材の転用か。チョウナ痕なし。ノコギリで切っていると思われる。	
第588図	27建 W49	木製品 根太		長 幅	182.0 13.5	厚 重	7.5 –	半裁材 クリ	１本の丸太の中心近くをノコギリ等により切っている。裏面はほとんど丸。大引に架ける両端削っている。下端はホゾを作り出しているが、上端はホゾではなく、底辺と側面を削っている。	
第588図	27建 W50	木製品 根太		長 幅	88.5 9.5	厚 重	6.5 –	半裁材 マツ属複維管束亜属	7.5～9.5㎝の角材を利用。表面は平であるが荒れており加工痕不明。中央の凹は根太用のホゾ穴によくにている。	
第589図	27建 W51	木製品 柱		長 幅	154.0 10.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	丸太を部分的に加工して短い柱としている。底面はヒカリツケ、礎石立てと思われる。四角い柱を意識しているが、表面の丸が多く残る。小さな小屋柱と思われる。	
第589図	27建 W52	木製品 根太		長 幅	176.0 17.0	厚 重	10.0 –	芯持材 マツ	大引に架ける部分は上で６×5.5㎝、下で10.7×４㎝と同じではない。表面は平で、カンナをかけたようである。一部チョウナ痕残る。他の３面は丸く木ハダを残している。	
第589図	27建 W53	木製品 根太		長 幅	168.0 11.0	厚 重	10.0 –	分割材 マツ	丸太を1/4にノコギリで切って作っている。左側面煤けて黒くなっている。大引に架ける部分を少し削って細くしているが、加工は簡単である。	
第589図	27建 W54	木製品 根太か？		長 幅	137.0 10.0	厚 重	9.0 –	芯持材 マツ	根太と思われるが、幅が9.3×10㎝とやや太い。上端に大引等に掛けるためか段あり、中央側面には根太掛け用のホゾあり。表面は平らに整形している。	
第589図	27建 W55	木製品 根太か？		長 幅	156.0 12.5	厚 重	6.0 –	柾目 ケヤキ	根太か？ほぼ一定の長方形(断面)に加工。	
第589図	27建 W56	木製品 根太か？		長 幅	133.0 15.0	厚 重	5.0 –	板目 クリ	上端にはホゾあり。貫が１か所。貫を中心に縦方向に二つに割った材。	
第590図	27建 W57	木製品 根太か？		長 幅	229.0 13.5	厚 重	6.0 –	半裁材 マツ	幅14.5、長さ358㎝の大きな根太が約半分に割れている。中央裏面に平に削られた面あり。上端部は両面を削られ少し細くなっている。大引に掛けられたと思われる。上面は平でチョウナ痕なし、ノコギリか。側面と底面にはチョウナ痕。	
第590図	27建 W58	木製品 根太か？		長 幅	226.0 15.0	厚 重	8.0 –	半裁材 マツ	W57とほぼ同様の形態と加工である。	
第590図	27建 W59	木製品 根太か？		長 幅	183.0 13.0	厚 重	5.0 –	半裁材 クリ	丸い材を２つに割って、内側を平に削り根太としているものと思われる。	
第590図	27建 W60	木製品 根太か？		長 幅	118.0 9.0	厚 重	8.0 –	半裁材 マツ	根太と思われる。上端に大引に差し込んだような色のちがう部分が四面あり、差し込んだ深さ２㎝。四表面ともチョウナ痕があるがほぼ平である。	
第590図	27建 W61	木製品 根太		長 幅	277.0 13.0	厚 重	9.0 –	芯持材 スギ	名称用途不明。丸材を方形にチョウナにより削っている。角もチョウナで少し削っている。	
第591図	27建 W62	木製品 根太		長 幅	179.0 9.5	厚 重	7.0 –	芯持材 クリ	長さ175㎝の根太。自然木の一面中央部を削って、上面としている。表面の縁辺部丸みを残す。裏面は丸く削った跡なし。両端は削って大引に掛けている。上面はほぼ平で、一部チョウナの痕跡残るが、荒くなく綺麗に整形している。	
第591図	27建 W63	木製品 根太		長 幅	178.0 5.5	厚 重	4.5 –	–	杉？を中央からノコギリにより二分し、両端を削って細く方形にホゾを作り、大引にかけている根太と思われる。上下端は三方向から削っている。両側面は一部削っている。表は木裏はほ水平、裏は木表は丸で、皮がないだけ。３本に割れており、完形に接合しない。	
第591図	27建 W64	木製品 柱		長 幅	157.0 12.5	厚 重	5.0 –	半裁材 クリ	柱を割って根太掛けとしたもの。柱の表面は凸凹少しあり、チョウナ。側面もチョウナ。	
第591図	27建 W65	木製品 梯子か		長 幅	180.0 4.6	厚 重	11.0 –	半裁材 マツ	柱か。(木裏)内面に５個のホゾ穴あり。４個は完形、１個は下端に一部残る。片端にホゾなし。上の１個は貫通、他の４個は途中で止まっている。両側面は平に整形している。工具痕不明。裏面は木裏で中央部分削って平、端部は丸く削っていない。	
第592図	27建 W66	木製品 柱		長 幅	210.0 13.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	丸木を少し削って柱としている。３面にホゾ穴あり。下部は平であり、ホゾ無し。礎石の上に建てられたものか。	
第592図	27建 W67	木製品 馬屋出入口柱		長 幅	220.0 13.0	厚 重	13.0 –	芯持材 クリ	方形の小さなホゾ穴３面掘られている。馬屋の柱と思われる。	ホゾ穴有り
第592図	27建 W68	木製品 柱　馬屋出入口柱馬栓棒鍵		長 幅	221.0 18.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	馬屋出入り口の柱と思われるが、カギが１か所しかいなく不明。自然木の真ん中を少し削って面を作っている。周辺は丸のまま。上下端にホゾあり。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第593図	27建 W69	木製品 床板		長 幅	186.0 12.0	厚 重	2.6 –	芯持材 マツ	床板と思われる幅約11.7㎝、厚さ約2.5㎝で正確な床材としている。ノコギリにより丁寧に削っている。加工なし。両端にクギが残っている。裏面に根太痕らしき痕跡があるが、明瞭でない。	
第593図	27建 W70	木製品 板		長 幅	190.0 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ	柱と柱の間を継ぐ貫と思われる。上端はノコギリで少し切って半分の厚さに加工している。相欠けと思われる。表裏はノコギリか。平でチョウナ痕なく、両側面にチョウナ痕多数残る。鉄クギが１か所あり。	
第593図	27建 W71	木製品 板		長 幅	282.0 16	厚 重	2.5 –	板目 マツ	貫であり、柱の痕跡がある。七之元等？と書かれた墨書あり。表面はチョウナ痕が多く、裏面はノコギリ、両側面チョウナ痕。鉄クギなし。	
第593図	27建 W72	木製品 板		長 幅	181.4 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ	貫であり、柱に入れる部分細くなっている。表裏面ともノコギリ。細い木材の中央部分をノコギリで切り出している。右側は欠損。多くの貫は、木表に近い部分を使用して内側ノコギリ、外と両側面チョウナであったが、この材は木材が細く、中央部をノコギリで切り出し、貫としている。	
第593図	27建 W73	木製品 板		長 幅	180.8 23.0	厚	2.4 –	板目 クリ	厚さ２～2.3㎝の厚い板である。年輪は全て柾目。みかん割りをして取り出した板を表、裏、側面ともにチョウナにより削り、厚さ２～2.3㎝、幅22.5～23㎝の平らな板としている。長さは１間である。	
第593図	27建 W74	木製品 板		長 幅	153.0 17.0	厚 重	3.0 –	芯持材 クリ	厚さが2.8㎝と特に厚い板材である。クギ穴なし。木材の中央部分の材でほぼ征目。両辺部は木ハダに近い。平でなく、少しゆがんでいて、チョウナによって削られている。表裏ともノコギリ、下端にノコギリで切り残した部分が表裏面とも残っている。	
第594図	27建 W75	木製品 床板		長 幅	32.5 23.0	厚 重	1.6 –	–	上下２か所、２本づつクギ穴あり、１本はクギが残っている。芯持材で両側面は木ハダに近い辺材である。直径25cm前後の材であろう。表裏ともノコギリ。両側チョウナ削り。材はクリか。	
第594図	27建 W76	木製品 板		長 幅	92.0 10.0	厚 重	2.0 –	–	半間の長さの幅広の床板である。上下の板中央部分に１本づつ打たれているのはクギか。征目に近い年輪である。	
第594図	27建 W77	木製品 板		長 幅	100.0 13.0	厚 重	3.0 –	板目 マツ	床板、厚さ３㎝と厚い。表裏ともノコギリで切られている。側面の木表に近い部分チョウナ。木裏で芯に近い側面はノコギリ。太いクギ(約５㎝)２か所、板の中心部分に打たれていた。	
第594図	27建 W78	木製品 板		長 幅	90.0 19.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	クギなし、節ナシ。	
第594図	27建 W79	木製品 板		長 幅	92.5 22.5	厚 重	1.5 –	板目 クリ	クギ穴２か所。３個表裏ともノコギリ。両側面木ハダに近い部分、カンナで整形。W80と同じ位置に年輪、同じ材から切り出したか。	
第594図	27建 W80	木製品 板		長 幅	93.0 21.5	厚 重	2.0 –	板目 クリ	床板。クギ３か所あり。表裏ともノコギリ。側面は片側チョウナ。表肌に近い片側カンナ。ノコギリで切り残した痕跡あり。W79と同じ位置に年輪あり。同じ材から切り出しているか。	
第594図	27建 W81	木製品 板		長 幅	93.0 14.0	厚 重	2.0 –	柾目 ナラ類	上・下板中央部に各１個クギ残る。床板を固定したものか。表面はクギが打たれノコギリで平。裏面は木表に近いためか、ノコギリでなくチョウナ。材はクリか。	
第594図	27建 W82	木製品 板		長 幅	93.0 21.0	厚 重	2.0 –	板目 クリ	木の表に近い部分の材。内側はノコギリ、外側はチョウナ。両側面は表の木のハダに近く、丸味をもっており、一部削って平にしている。表面(木裏)部分をノコギリで切っており、その下端にノコギリの切残痕残る。裏面(木表)部分はチョウナ削りのため、ノコギリ切残痕はない。	
第595図	27建 W83	木製品 床板		長 幅	93.0 23.0	厚 重	1.5 –	板目 クリ	ほとんど征目であり、木の中心部に位置する材である。他のW83・W87と重なる木取りであり、フシ２か所の位置がほぼ同じ。クギは上側に２か所、下側中央部に１か所ある。	
第595図	27建 W84	木製品 床板		長 幅	93.0 15.0	厚 重	1.5 –	板目 クリ	板で片側に鉄クギが１本残る。表裏ともノコギリ、側面はチョウナ。床板として使われたものか。辺材ではなく、材を両面ノコギリで切って作っている。	
第595図	27建 W85	木製品 板		長 幅	87.0 30.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	幅広い板材である。表裏面ともノコギリでチョウナ痕なし。両側ノコギリか、すべすべしている。	
第595図	27建 W86	木製品 床板		長 幅	92.0 27.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	征目のために木表、木裏不明。上の表面に墨線１本あり、下面表面には墨線なし。表裏面ノコギリ側面平でなめらか、カンナか。クギ穴が上下２か所あり。	
第595図	27建 W87	木製品 床板		長 幅	90.0 27.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	床板W88と同じ材から切り出している。フシがほぼ同じ。木の中心に近い材がW83、その外側にW88がくる。表面はノコで切る。側面はカンナかけのようになめらか。木裏を表面にして、２か所墨で直線をひいて、そこに２個クギが打たれている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第595図	27建 W88	木製品 床板		長 幅	91.0 26.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	床板W87と同じ材より作る。フシがほぼ同じ。W87より外側の材。表面はノコ。側面はカンナかけのようになめらか。木裏を表面にして上下２か所、墨で直線をひいてそこに上１か所、下２か所、クギが打たれている。	
第595図	27建 W89	木製品 床板		長 幅	93.0 23.0	厚 重	2.0 –	板目 クリ	一部板目であるが、大部分征目。木の中心に近い部材。W83･W87と重なり、最も外側の材である。表面ノコ、側面はすべすべしておりカンナか、黒い線なし。	
第595図	27建 W90	木製品 床板		長 幅	92 23	厚 重	1.5 –	板目 クリ	一部板目であるが、大部分征目。木の中心に近い部分の材。W83･W89の中間に入る材と思われる。表面ノコ、側面はすべすべしているのでカンナ削りか、墨の線なし。	
第596図	27建 W91	木製品 板		長 幅	66.0 23.5	厚 重	1.5 –	柾目 マツ	幅広い板。横に広がった板が割れたためであろうか、横側面１か所にホゾ穴を掘って雇いホゾでつなげたものと思われる。この技法は桶の底板によく使われるものであるが、平面形が円形でないことや厚さが薄いことにより桶の底板ではないと思われる。表裏面ともノコギリでチョウナ痕なし。	
第596図	27建 W92	木製品 板		長 幅	84.0 14.0	厚 重	1.5 –	柾目 ナラ類	征目の割材の板。表裏とも加工痕ほとんどなし。一部分、表裏とも色が変わっており、少し細くなっている。壁板か。	
第596図	27建 W93	木製品 床板		長 幅	108.0 31.0	厚 重	2.0 –	板目 マツ	２階床下と思われる。木表部分が床下に木裏面が２階の上部分にあったが、45cm間隔にある根太の痕跡がないので違う所の床板か。クギなし。表裏面ノコギリ、両側面は木皮に近い。自然面で一部削っている。	
第596図	27建 W94	木製品 板　ムシロ付		長 幅	128.0 19.0	厚 重	– –	–	床板の上にムシロが付着し、キセルも落ちていた。両面はノコギリで加工。側面の加工不明。	
第596図	27建 W95	木製品 板		長 幅	108.0 9.5	厚 重	3.0 –	板目 マツ	幅９cmと狭い。貫は12.5cmが多いので貫ではない。厚さは2.5cmで貫と同じ。表裏ともチョウナ痕なし。ノコギリか。表裏とも荒れており、ノコギリの痕跡なし。表面の残りが良い。裏面は黒く煤けている。	
第596図	27建 W96	木製品 板		長 幅	82.0 14.5	厚 重	2.5 –	柾目 クリ	表裏とも荒れている。チョウナ痕なし。名称用途不明。材はクリか。	
第597図	27建 W97	木製品 板		長 幅	180.3 11.8	厚 重	2.7 –	追柾 クリ	幅10cm、厚さが2.7cmと他の板より２倍以上厚い長さ180cmの板材である。クギ穴下端と中央部２か所あり、側面チョウナ痕、樹種はナラであり、板材としては少ない。	
第597図	27建 W98	木製品 板		長 幅	182.0 13.0	厚 重	3.0 –	柾目 クリ	床板か。厚さ2.5cmと厚い。表裏ともノコギリ。片側面チョウナ。反対側側面割れている。クギ２か所。材のほぼ中央部分にあたる。ノコギリで切っている。	
第597図	27建 W99	木製品 板		長 幅	156.4 13.5	厚 重	2.6 –	追柾 クリ	曲がっている木材をノコギリで切って板としている。表面裏面ともノコで切った痕跡多く残す。下端にノコギリ切弾痕あり。木が曲がっており、背部は丸くなっているので、ノコではなくチョウナ削り、内側は欠損。	
第597図	27建 W100	木製品 板		長 幅	180.0 12.0	厚 重	2.5 –	追柾 マツ	貫と思われる。表面は木皮に近くチョウナ削り。裏面は木裏でノコギリ。両側面チョウナ削り。上端部はノコギリで凸状に加工している。柱の中で貫を継いでいるか。下端は柱中で突合わせで継いでいるか。	
第597図	27建 W101	木製品 板		長 幅	155.6 22.3	厚 重	1.9 –	板目 クリ	やや曲がっている木材をノコギリで両面とも切って板としている。表裏とも下端にノコギリ切残痕あり。裏面には部分的にチョウナ痕あり。ノコギリで切ったあとで再調整している。木表に近い場所の部分であり、両側面に木表の部分が残る。	
第597図	27建 W102	木製品 板(貫)		長 幅	129.0 13.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	丸材の端部分を使って作った貫。木表と両側面はチョウナ。木裏部分はノコギリで切られている。幅が12.5cmと広く、柱に入れるために少し削って狭くしている。	
第597図	27建 W103	木製品 貫板		長 幅	97.0 12.0	厚 重	3.0 –	板目 マツ	両側が柱の中に差し込まれていた痕跡残す。片端が少し細く狭くなっており、ススけていない。もう片方の端も少し細くなっている。木表部分チョウナ、木裏をノコギリ、側面はチョウナ痕。	
第598図	27建 W104	木製品 板		長 幅	155.0 28.0	厚 重	3.0 –	板目 マツ	座卓である。脚が左右２本、差し込めるようにつく。チョウナ痕なし。全体的に風化して年輪が目立つ。初めての出土である。	
第598図	27建 W105	木製品 貫板		長 幅	80.0 12.5	厚 重	3.0 –	板目 マツ	表面にチョウナの加工痕なく、もっと細い刃の痕跡あり。幅が13cmと広い。	
第598図	27建 W106	木製品		長 幅	81.0 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ	表裏ともノコギリ、側面チョウナ。何らかの器材の一部と思われるが不明。両端の近い所に４×４cmのホゾあり。	
第598図	27建 W107	木製品 板		長 幅	73.0 12.0	厚 重	4.0 –	柾目 ナラ類	用途名称不明。ナラ等の材を割ってつくった板材。表裏焼けて焦げている部分あり。端部は割れている。	
第598図	27建 W108	木製品 板		長 幅	88.2 14.3	厚 重	2.6 –	柾目 ナラ類	丸材をみかん割にしてつくった板。表裏、両側面ともチョウナで削り、柾目となっている。トラ斑あり。表裏とも変色しており、少し段を持ち、薄くなっている。板壁か。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第598図	27建 W109	木製品 板		長 幅	81.0 11.0	厚 重	2.0 –	柾目 ナラ類	用途名称不明。ナラ等の材を割って作成した板材。表面に焦げ３か所あり。両端が薄くなっている。放射状組織目立つ。	
第598図	27建 W110	木製品 板		長 幅	79.0 14.0	厚 重	1.5 –	柾目 ナラ類	割材の板。征目。表裏とも多くのチョウナ痕あり。色が異なり、少し細くなっている。W108･W92と共通壁材か。	
第599図	27建 W111	木製品 柱		長 幅	268.0 13.5	厚 重	14.0 –	分割材 マツ科	片面の広い面のみ丁寧に整形。チョウナ痕残さないように整形。他の３面はチョウナ痕を多く残し荒い。ホゾや仕口の加工全くなし。土台として使用予定か？	
第599図	27建 W112	木製品 根太		長 幅	177.0 10.0	厚 重	10.7 –	分割材 マツ	表面は水平に削られており、加工痕不明。丸太を1/4にノコギリで切り、内側２面ノコギリ、外側２面チョウナ削りである。大引に架ける部分は両側面を削って６～７㎝と細くしている。	
第599図	27建 W113	木製品 板		長 幅	142.0 13.5	厚 重	7.0 –	半裁材 マツ	丸太を２つに切って作った根太。ほぼ中心部から２分している。表面は平に整形、チョウナ痕なし。ノコギリか。節の部分も平である。大引に架ける部分、左右、下面を削っている。前後の太い根太である。底面中央部及び側面チョウナ削り。	
第599図	27建 W114	木製品 角材		長 幅	193.5 14.0	厚 重	7.5 –	分割材 マツ	丸太を1/4にノコギリで切って４本の角材を作っている。その中の１本である。内側２面はノコギリ､外側２面はチョウナ削りである。利用目的は不明。未使用であり、利用目的で屋敷の中に運び込んだものか。	
第600図	27建 W115	木製品 厚板		長 幅	189.0 30.0	厚 重	13.0 –	芯持材 マツ	W117、W116、W115)と同じような材。W116とW117は同じ材を二分しているが、この材の相手は不明。赤身(芯材)と白身(辺材)は赤身(芯材)部分の残りが良い。	
第600図	27建 W116	木製品 厚板		長 幅	187.0 29.0	厚 重	12.0 –	芯持材 マツ	W117と同じ材をノコギリにより切り離された半分の材。木裏はノコギリ、木表はチョウナ、上・下端はノコギリで切り出し後加工していない。	
第600図	27建 W117	木製品 厚板		長 幅	187.0 29.0	厚 重	12.0 –	半裁材 マツ	太さ40㎝近い材の中央をノコギリで二分し、均一の板を作り出している。木裏下端にノコギリ切残痕あり。切り出した後加工ないので、使う前の材か。	
第601図	27建 W118	木製品 柱		長 幅	300.0 15.0	厚 重	12.5 –	芯持材 クリ	上はホゾ、下端はヒカリツケ、両面ともチョウナ痕なし。下部のホゾは十字に交差している。	
第601図	27建 W119	木製品 柱		長 幅	318.0 14.0	厚 重	14.0 –	–	下端は荒れており不用、土台のホゾがあったか？下端上30㎝の位置に足固めが両面差し込まれている、車知栓か。竿の一部残ってている。内側に大引と思われるホゾ穴あり。足固めから天井部までの高さは268㎝と高い。足固め？の大きさは、横幅は柱と同じ約13.5㎝、縦幅16.3～17.6㎝で15㎝以上で縦方向の長い材か。表面、足固め穴下はチョウナ痕残るが、上は丁寧に整形され、整形痕なし、カンナと思われる。車知栓継ぎ用の竿が残っていた。	
第602図	27建 W120	木製品 縁側の縁框		長 幅	362.0 19.0	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	左端と右端は柱につながり、シャチ栓があるので、さらに延びて廊下となっている。内側に７個の根太受ホゾがあり、６×６、深さ4.5㎝とほぼ共通している。表面の外側端部に細い刃物キズ多く残る。底部中央に床束を受けるホゾ穴あり。左右を柱に差し込み、中央部は床束を使い、固定している。	
第603図	27建 W121	木製品 縁側の根太掛け		長 幅	42.0 12.0	厚 重	3.0 –	板目 マツ	上端は凸状に切られており、ここに根太がくるか。クギが１か所。	
第603図	27建 W122	木製品 根太		長 幅	118.0 6.0	厚 重	4.5 –	–	27建縁側根太と思われる。３本に割れている。上面に9か所、クギの痕残る。おそらく10か所あり、９枚の床が固定されたものと思われる。表面はカンナ等による整形か､平。右側面はノコギリか。左側面はチョウナ。上端は直角に加工､下端はホゾなし。そのまま大引等に架けたか。材はマツ。	
第603図	27建 W123	木製品 根太		長 幅	116.0 6.4	厚 重	6.5 –	–	27建縁側の根太。W124と同じ。４つに割れている。	
第603図	27建 W124	木製品 根太		長 幅	118.0 7.5	厚 重	6.0 –	– スギ	27建縁側の根太。W130と同じ。６片に割れている。	
第603図	27建 W125	木製品 根太		長 幅	118.0 7.5	厚 重	7.5 –	–	27建縁側の根太。表面はノコギリ､裏左右側面チョウナ。表面にクギ９か所､下端にクギなし。上端は先を細く加工､下端は凹状に加工。	
第603図	27建 W126	木製品 根太		長 幅	116.6 8.0	厚 重	6.0 –	– マツ科	27建縁側の根太。３片に割れている。W130と同じ。	
第603図	27建 W127	木製品 根太		長 幅	118.0 7.0	厚 重	7.5 –	芯持材 クリ	根太である。表面に多くのクギ跡あり。上端は直角に、下端は斜めに切り落とされたように加工している。	
第604図	27建 W128-1	木製品 縁側の縁框		長 幅	260.0 14.0	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	縁側のカマチである、５個の根太痕あり。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第604図	27建 W128- 2	木製品 縁側の縁框		長 幅	240.0 16.0	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	縁側の縁カマチの２本に割れている材の東側のカコチ。上は大引に下は柱に接合。	
第605図	27建 W129	木製品 板材　根太がけ		長 幅	454.0 13.0	厚 重	3.0 –	板目 マツ	長さ２間以上の根太掛けと思われる。ホゾの深さは３㎝と浅い。根太は根太掛けの上に４㎝前後出ているが、さらに長くなりそうである。ホゾ穴は８個残っているが最後か。板はここで破損している。表面は平でチョウナ痕等あり。幅厚さとも一定である。側面も平であるが、チョウナ痕等少し残っている。木の中心からはずれて木表に近い部分の材を利用しており、内側(木裏)はノコギリ、外側(木表)はチョウナで削って板としている。側面は片方ノコギリ、他の木表に近い部分はチョウナ。	
第606図	27建 W130	木製品 根太		長 幅	118 7.9	厚 重	5.5 –	–	27建縁側根太である。他の材同様９枚の床板が打ちつけられていた。表はノコギリ、裏、両側面チョウナ。家側にはホゾ入れ、外側にはホゾ穴あり。ホゾ穴にかけて固定していたものか。木裏を表にしている。	
第606図	27建 W131	木製品 根太		長 幅	116.6 8.0	厚 重	7.5 –	– クリ	縁側の根太である。19本の根太の１本である。クギが９か所打たれている。各２本が基本である。表面は木表でノコギリで切っている。両側面はチョウナ。裏面ともチョウナ削り。上端が差し込みホゾで下端は全体を細く削って、６㎝と長いホゾ状に削っている。	
第606図	27建 W132	木製品 根太		長 幅	115.0 6.0	厚 重	5.9 –	– マツ	建材W135と同じような加工。片端部分の加工の形が異なるが、板の乗る幅は107㎝と共通している。表・裏、両側面全てチョウナ。両端はノコギリ。	
第606図	27建 W133	木製品 根太		長 幅	111.0 11.0	厚 重	7.0 –	芯持材 クリ	根太である。上端を凸のようにホゾをつくり、大引に架けている。下橋は細く加工している。表面に多くのクギのあとが残っている。	
第606図	27建 W134	木製品 板		長 幅	114.0 7.5	厚 重	5.0 –	半裁材 クリ	縁側の根太。外側は上がりカマチに差し込んでおり、材は不明であるが、根太掛けに掛けていると思われる。直交方向に９枚の床板が貼られていた。	
第606図	27建 W135	木製品 根太		長 幅	114.5 8.9	厚 重	5.6 –	半裁材 マツ	27建縁側の根太である。19本の根太の１本か。９枚の床板があり、床板の側面にそれぞれクギを打っている。２本のクギの間は、板の境であり、境を表すように黒く線が残る。表面が木裏でノコギリで平に切ったいる。裏面は木表でチョウナで荒く削っている。上端は凸状、下端には溝が２本掘られている。	
第606図	27建 W136	木製品 根太		長 幅	114.0 9.6	厚 重	5.0 –	– クリ	W135とほぼ同じ加工。上端は凸状、下端は直角に切り落とされ、溝が２本掘られている。表裏、両側面チョウナ。ノミと思われる工具でキズを定期的につけている。キズの長さは1.8㎝。	
第606図	27建 W137	木製品 根太		長 幅	113.0 9.5	厚 重	7.5 –	半裁材 クリ	縁側の根太。外側は上がりカマチに差し込み、主屋側は根太掛けに掛けていると思われる。根太と直交方向に９枚の板が貼られていたか。加工はチョウナ痕が多く残っている。	
第606図	27建 W138	木製品 根太		長 幅	115.0 9.0	厚 重	6.0 –	半裁材 クリ	27建縁側床板下の根太である。四面平に削っており、上面に８か所、２本づつクギ穴あり。９枚の床板が打たれていた。上端に小さな溝が掘られている。用途不明。表面平、ノコギリか。一部チョウナ痕あり。両側面裏はチョウナ削り。	
第607図	27建 W139	木製品 床板		長 幅	260.0 13.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	縁側の床板。チョウナ痕全くなし、ノコと思われる。	
第607図	27建 W140	木製品 床板		長 幅	(422.0) 350.0 8.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	縁側の床板。東側の床板。東側にはもう１枚長さ466㎝の板と目違継でつながる。約45㎝幅で根太に打ち込んでいる。クギは２本づつ。上がりカマチのホゾは７個。	
第607図	27建 W141	木製品 床板		長 幅	375.0 12.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	縁側の板。端は平に切られている。表面荒れている。鉄クギが２本づつ８か所。	
第608図	27建 W142	木製品 床板		長 幅	369.0 12.5	厚 重	2.0 –	板目 マツ	27建西側縁側床板。長さは370㎝前後で東側の４ｍ以上の床板より短い。西側と東側、柱接地部分以外全て目違継となっている。表裏面ともノコギリ。両側面ノコギリ。	
第608図	27建 W143	木製品 床板		長 幅	467.0 13.0	厚 重	2.0 –	板目 マツ	縁側の床板。東側の床板で、西側にはもう１枚長さ370㎝の板と目違継でつながっている。約45㎝幅で根太に打ち込んでいる。上がりカマチのホゾ穴は９個であり、東端は上がりカマチと直交する材に打たれていたと思われる。表面にチョウナ全く痕なし。ノコギリと思われる。	
第609図	27建 W144	木製品 床板		長 幅	96.0 13.0	厚 重	2.0 –	板目 マツ	27建縁側床板で最も北側に並んでいた板。他の床板とほぼ共通する。上端は直角に切られており、ここに柱がきたか。上端の切られていない部分に４本のクギが打たれていた。表面は荒れており、裏面は２か所に根太痕あり。上端は根太痕不明。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第609図	27建 W145	木製品 床板		長 幅	96.0 13.5	厚 重	2.0 –	板目 マツ	W148と同じ。	
第609図	27建 W146	木製品 床板		長 幅	96.0 13.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	W148とほぼ同じ。目違継部分はほぼ完全に残っており、内部に凸状の部分が一部残っている。	
第609図	27建 W147	木製品 床板		長 幅	95.0 12.5	厚 重	2.0 –	板目 マツ	W148と同じ。	
第609図	27建 W148	木製品 床板		長 幅	96.0 12.5	厚 重	2.0 –	柾目 マツ	27建縁側床板の一部。長さ４m以上の板の一部のみで、他の部材は切断して持ってこなかった。表面は風化してノコギリの痕跡なし。裏面はノコギリ痕残る。裏側に約45cm間隔で根太痕２か所。下端は他の床板と接合するための加工あり。	
第609図	27建 W149	木製品 床板		長 幅	90.0 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ	W148とほぼ同じ。木材の表皮に近い部分であるため木表部分である。裏面はノコギリでなく、チョウナで削っている。木裏を表面にしている。	
第609図	27建 W150	木製品 床板		長 幅	94.4 12.0	厚 重	2.0 –	–	W148とほぼ同じ、木皮に近い。上端に目違継の加工なし。一部切り込まれている。ここに柱がきたのであろうか。表裏ともノコギリか。両側面ノコギリ。チョウナの痕跡なし。	
第610図	27建 W151	木製品 差し鴨居		長 幅	215.0 13.0	厚 重	26.0 –	分割材 クリ	差し鴨居。左右は同じようなホゾと込線２本か。片方の端部が残っている。W215のホゾ穴の中にホゾが残る。チョウナが表裏面に荒く残る。左右はノコ。	
第610図	27建 W152	木製品 敷居		長 幅	107.0 13.0	厚 重	6.0 –	芯持材 マツ	長さ約半間の狭い柱間の敷居である。２本溝である。表面と両側面はカンナか。丁寧に整形。裏面は平であるが、チョウナまたはヨキの削痕残る。	
第610図	27建 W153	木製品 敷居		長 幅	89.0 13.5	厚 重	6.0 –	半裁材 マツ	３本溝の敷居である。外側の溝２本と室内側の１本の溝では摩耗度が異なり、外側より内側１本の溝の摩耗が激しい。上部(欠損)は柱にホゾで差し込み、下部はホゾ差しができないので、雇いホゾで固定したものと思われる。側面は外側が風化しており、内側は風化少なくきれい。溝のある表面はきれいに整形しているが、裏面は丁寧に整形されていない。中央部がへこんでいる。	
第610図	27建 W154-1	木製品 敷居　溝なし		長 幅	50.5 12.5	厚 重	3.5 –	– マツ科	W154-2と同じ番号で取り上げられ、同じように上端にホゾがあるが、敷居の溝なし。木表を上にしている。W154-2とは別物である。	
第610図	27建 W154-2	木製品 敷居　2本溝		長 幅	25.0 12.5	厚 重	3.0 –	– マツ科	表、裏、両側面ノコギリか。チョウナ痕なし。木裏を上にしている上端はホゾを作り、柱に差し込んでいる。下は欠損。	
第611図	27建 W155	木製品 梁		長 幅	367.0 18.0	厚 重	36.5 –	半裁材 マツ科	２階大引部分。中央から片側半分、他側面1/3欠け。厚さ36cm、幅18cmと巨大。下面は２本柱を受ける凹穴あり。	
第612図	27建 W156	木製品 梁か？		長 幅	393.0 19.0	厚 重	26.5 –	芯持材 マツ科	中央の梁か。表面平に整形、中央部に両側から大引の接合痕あり。	
第613図	27建 W157	木製品 梁か？		長 幅	448.0 19.0	厚 重	28.0 –	芯持材 クリ	土間の上に作られている、２階の床板東端の大きな梁である。中央部が凸状で、凸部を上にして使用している。梁の西側には約45cm間隔で根太を受ける枘穴があるが東側には無い。南北端は、柱に組み込むように加工されている。凸部中央部に枘があり、この上に２階の柱あるいは束が組まれていたものと思われる。その枘穴西側は、幅12cm深さ12cmの枘穴あり、東西方向の中梁を受ける枘穴と思われる。西側両側面は平らに加工されているが、上下面は凸部中央部が平らに削られているが、他の面は丸の状態である。	
第614図	27建 W158	木製品 梁か？		長 幅	352.0 19.5	厚 重	27.0 –	– マツ科	２階大引。中央に渡アゴあり。その下に柱なし。下面に柱凹なし。	
第615図	27建 W159	木製品 小梁か？		長 幅	382.0 22.0	厚 重	11.5 –	芯持材 トチ	細い梁か。上端にホゾ、右端は中央部分欠損しているが、平に削っており、おそらくホゾ凸があり、柱に差し込まれていたか。表面荒れている。ノコギリ痕とチョウナ痕と思われる凸凹あり。丁寧に整形されている。	
第615図	27建 W160	木製品 根太		長 幅	173 12.0	厚 重	5.5 –	分割材 マツ	２階の根太。上端は大引に掛けるために加工。上面に７個の鉄クギ。４面ともチョウナで丁寧に整形。上面以外、煤けて黒くなっている。	
第615図	27建 W161	木製品 根太		長 幅	172.0 7.5	厚 重	6.0 –	分割材 マツ	ほぼ７×６の長方形に切りそろえられた根太。上端に大引にかけた部分の根跡残る。上面に多くの鉄クギ跡。下端は一部切って大引にかけるようにしている。表面は平で凸凹なし。ノコギリか。	
第615図	27建 W162	木製品 根太		長 幅	172.0 7.0	厚 重	6.0 –	分割材 マツ	２階の根太。４面煤で黒くなっている。４面ともチョウナ削り。下端は大引に差し込むための痕跡2.5cm。クギが７か所残っている。	
第615図	27建 W163	木製品 根太		長 幅	168.0 7.0	厚 重	5.8 –	分割材 マツ	２階の根太。４面ともほぼ平に加工。チョウナ痕が丁寧に加工、荒くない。床板を止めて鉄クギが５本残っている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第616図	27建 W164	木製品 根太		長 幅	193.0 7.0	厚 重	6.0 –	分割材 マツ科	２階の根太である。上面以外の３面は煤で黒くなっている。上面に６個クギ跡あり。４面チョウナ痕あり。下端に幅2.5㎝の大引への差し込み痕あり。	
第616図	27建 W165	木製品 根太		長 幅	192.0 7.5	厚 重	5.8 –	分割材 マツ科	２階床を支える根太である。表面は墨ですすけている。上面の床板部分にはクギの痕が５か所前後残っている。少し尖っている。四面ともチョウナ痕残る。丁寧に整形している。	
第616図	27建 W166	木製品 根太か？		長 幅	192.0 7.0	厚 重	6.0 –	四方柾 マツ科	２階根太である。両端２～2.5㎝、大引に差し込んだ痕あり、上面にクギ６か所残る。１か所不明。４面はチョウナで丁寧に削っている。上面以外の３面は煤で黒くなっている。	
第616図	27建 W167	木製品 根太		長 幅	192.0 7.0	厚 重	5.5 –	分割材 マツ	６×７㎝の切りそろえた根太。全体に均整とれている。チョウナにより削り痕が側面に多く残る。ノコギリ痕も多く残っている。	
第616図	27建 W168	木製品 根太		長 幅	190.0 7.0	厚 重	6.0 –	四方柾 マツ	均一に整形されているが、４面とも多くのチョウナ削痕を残している。幅広い面の上下端部に根太掛け痕、巾２～1.2㎝で残る。大引に掛ける深さは1.5～２㎝とわずかである。	
第616図	27建 W169	木製品 根太		長 幅	191.0 7.5	厚 重	6.0 –	分割材 マツ科	２階階段板下の根太である。チョウナ痕部分的に残る。基本的にノコギリと思われる。直線の加工である。左側面と下面すすけて黒くなっている。上面に板を固定したクギのあとが５個残っている。上面の床板部部に板を留めたクギ、４か所前後あり。他の３面は下が煙を受けて黒く墨が付着している。	
第617図	27建 W170	木製品 床板		長 幅	226.5 26.5	厚 重	1.5 –	板目 マツ	27建W171の板と同じ板である。表裏面にチョウナ痕なく、ノコギリ痕が残る。側面はカンナで削っているように平で、毛羽立っていない。根太痕は６か所あり、それぞれクギで留めている。囲炉裏の上にある板のために墨で黒い。材はマツ。	
第617図	27建 W171	木製品 床板		長 幅	226.0 24.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	ほぼ長方形の均一の板である。チョウナの痕跡、表裏面にはなし。ノコギリ痕が部分的に残る。両側面は平に削っており、チョウナ痕は明瞭に残っていないが多少の凸凹があり、チョウナ痕を丁寧に削っているものか。両側面に毛羽立ちがないのでカンナで削っているか。６か所根太痕あり。クギが打たれている。	
第617図	27建 W172	木製品 床板		長 幅	226.0 29.5	厚 重	1.5 –	板目 マツ	２階床板、裏面は煤を受けて黒くなっている。４本の根太痕と左右端及び片側は梁又は桁に架けており、その部分は煤けていない。クギは２個所３本のみ確認できる。表面側面ともチョウナ痕なし。表裏面の一部にノコギリ痕。ノコギリ切残痕なし。	
第617図	27建 W173	木製品 板材		長 幅	73.0 23.6	厚 重	1.4 –	–	27建２階床板か。表裏はノコギリ、根太の部分と胴差し部分のみ煤けていない。芯々で45㎝離れている。クギ穴２か所あり。両側面チョウナ削り。	
第618図	27建 W174	木製品 物干台？		長 幅	301.97 13.0	厚 重	6.6 –	芯持材 クリ	前庭に北から南方向に倒れていた。長さが306㎝あり、先端はＹ字状に分かれている。根元は細く削り地中に埋められていたものと思われる。クリの丸材を使用。表皮なし。東2.5ｍと4.5㎝の位置に同じような材が倒れており、先端に横方向に竹出土。３本とも長さ３ｍ前後あり洗濯物等を干す物干台と思われる。	
第618図	27建 W175	木製品 物干台？		長 幅	289.3 10.0	厚 重	5.2 –	芯持材 クリ	Ｙ字状の先端部を利用し、棟木を載せたか。下部は50㎝前後土中に埋まっており、地上には約240㎝出ていたことになる。建材W175は260㎝出ており、約20㎝、棟下部分にくる高さが低くなっている。他にもこのような細長い柱があるので、掘立柱の小屋があったと思われる。表面は全て丸のまま、木肌のままであり、一切加工していない。加工はＹ字状の先端部と下端の部分だけである。	
第618図	27建 W176	木製品 物干台？		長 幅	317.8 12.4	厚 重	9.9 –	芯持材 クリ	下部は50～60㎝ほど地中に埋められていた。表皮をはいで部分的に削っているが、大部分は皮を剥いた状態で利用している。	
第618図	27建 W177	木製品 物干台？		長 幅	266.0 10.0	厚 重	10.0 –	–	上部欠損しているが、表面は皮を剥いだ状態で一部加工あるのみ。地中に約50㎝ほど埋められていたと思われるが明瞭でない。下端部四方向が削られ細くなっている。材は軽い。	
第618図	27建 W178	木製品 有段クイ状		長 幅	76.0 9.5	厚 重	2.5 –	–	用途名称不明。全体チョウナ削り。木裏部分、細く削っている。材はコナラ。	
第618図	27建 W179	木製品 有段クイ状		長 幅	73.5 9.0	厚 重	2.3 –	–	用途名称不明。全体チョウナ削り。木裏部分、細く削っている。材はコナラ。	
第618図	27建 W180	木製品		長 幅	187.2 6.3	厚 重	5.9 –	芯持材 クリ	上部が欠損している。表面は皮を剥いた状態で下部の一部に加工がある。チョウナを使用。地中には40㎝ほど埋められていたと思われるが明らかでない。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第619図	27建 W181	木製品 木材		長 幅	86.0 19.3	厚 重	6.7 –	半裁材 クリ	材(クリ？)を半分に割ったもの。皮は全く残っていない。長さは86cm、約半間である。燃料として用意したものか。	
第619図	27建 W182	木製品 板		長 幅	99.5 19.9	厚 重	8.4 –	ミカン割 ナラ類	長さ99.5cmの割材である。直径50cm前後の太い材(コナラ類)を割っている。木肌部分はそのまま。表裏両面は割った状態で加工なし。上下端はヨキまたはナタ等により割っている。燃料等に使用か。	
第619図	27建 W183	木製品 角　ほぞ穴有り		長 幅	71.0 11.5	厚 重	4.0 –	芯持材 クリ	何らかの木製品の一部と思われるが不明。	
第619図	27建 W184	木製品 角材		長 幅	60.0 6.0	厚 重	5.0 –	分割材 クリ	木製品の一部か。表面は平に加工。用途名称不明。	
第619図	27建 W185	木製品 楔型木材		長 幅	31.43 10.5	厚 重	18.0 –	–	クサビ状の材である。三角形のような形をしていて、クサビとして柱を割るために使用したか。貫に打ち込んでも可能と思われる。先端部分に細い刃物傷が大量にある。	
第619図	27建 W186	木製品 板　厚い		長 幅	48.0 19.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	角材を利用した切台と思われる。上下両端部荒れており、加工痕不明。表裏も加工痕不明。	
第619図	27建 W187	木製品 板		長 幅	45.77 20.72	厚 重	4.64 –	–	アカマツ。表皮に近い部分の材。表面は樹皮がついている。裏側は剥がれた状態で加工なし。	
第619図	27建 W188	木製品 板(厚め)		長 幅	34.0 13.1	厚 重	6.4 –	– クリ	樹表に近い部分の材をはぎとって加工した材。上はチョウナ削り、下はノコギリで切っている。裏面は剥いだ状態で加工なし。材はクリ。	
第619図	27建 W189	木製品 板材		長 幅	67.5 6.5	厚 重	2.8 –	– クリ	上にホゾ穴があり木片が残っていた。木片はカギか。用途名称不明。	
第619図	27建 W190	木製品		長 幅	15.5 3.7	厚 重	4.5 –	– マツ科	表面は皮を剥いで一部加工。裏面は剥いだまま。両側面は削って平にしている。	
第619図	27建 W191	木製品 丸太(小)切り株		長 幅	47.75 37.74	厚 重	24.9 –	–	直径50cm前後の杉の丸太の根元に近い部分の材と思われる。表皮に１枚杉皮が残っている。上部は水平に切られている。下部も水平に切られているか。風化して凸凹になっており、加工痕不明。	
第620図	27建 W192	木製品 角材　加工有		長 幅	122.0 12.0	厚 重	6.5 –	半裁材 クリ	割材。幅12cmの角柱を中心部にある貫を境に二つに割っている。割面はそのままで加工していないため荒れている。表面にチョウナ、ノコギリ痕なし。特に節の所もノコギリ痕なし、カンナか。上にはホゾがあり、ホゾの幅９cm、ここに梁又は桁がくるものと思われる。割って転がした後の使用面的不明。	
第620図	27建 W193	木製品 角材		長 幅	140.0 7.0	厚 重	4.0 –	–	名称用途不明。３か所に凹状の切り込みあり。そこに３本クギ、２本クギ残る。クギの太さ５㎜。中央部の掘り込みが少し凹み状になっている。	
第620図	27建 W194	木製品 梯子？		長 幅	109.0 16.5	厚 重	8.0 –	半裁材 マツ	半丸材で貫通しているホゾ穴１、貫通していないホゾ穴１あり。梯子の一部か。	
第620図	27建 W195	角材		長 幅	– –	厚 重	– —	芯持材 クリ	短い根太である。丸木の上半を削り、床板をのせる。他の大部分は丸い状態を残している。	
第620図	27建 W196	木製品 根太か		長 幅	177.0 14.0	厚 重	7.0 –	半裁材 クリ	約１間の長さの根太。丸材を半分に中央から割って木裏を上にして根太として使用している。割ってできる表面の荒れはない。少し加工痕あり。上端は両端を少し削って細くしている。下端はほとんど加工なし。丸木を中心から割っているために割った面が柾目となっており、表面に年輪は少し凸凹で出ているが、ほぼ水平である。	
第620図	27建 W197	木製品 角材		長 幅	60.0 20.0	厚 重	25.0 –	–	切台か。大きな角材である。表面は平で、刃物傷が大量に残る。両側面はチョウナ、上下は平にノコギリ等により切ってある。大きな角材を切台等として利用したものか。	
第620図	27建 W198	木製品 板		長 幅	62.0 26.0	厚 重	5.0 –	板目 クリ	30cm前後の大きな丸太の中央部分を切り取った樹ハダ部分の材(ノコギリで材等を取り出した外材)。上端はチョウナ、ナタ、ヨキ等で切っている。下端はノコギリか。裏面はノコギリのため平。表面中央を少し削って丸材を平に加工している。用途不明。	
第621図	27建 W199	木製品 暖簾かけ？		長 幅	26.0 6.7	厚 重	2.6 –	– クリ	簾架けもしくは暖簾架けか。同じ27建W200とほぼ同じ場所から出土。下部欠損。	
第621図	27建 W200	木製品 暖簾かけ？		長 幅	23.9 8.82	厚 重	2.1 –	– コナラ属コナラ節	簾架けもしくは暖簾架けか。同じ27建W192とほぼ同じ場所から出土。下部欠損。	
第621図	27建 W201	木製品 板		長 幅	97.0 30.0	厚 重	5.0 –	板目 トチノキ	厚い板である。木裏部分が表と思われ、平で、包丁等の刃物跡多く残る。右側に直径34cmの円形で沈んでいる又は一部炭化している痕跡あり。丸く熱い鉄等が置かれたか。切台やナベ置等の働きをした板か。	
第621図	27建 W202	木製品 棒		長 幅	115.0 3.0	厚 重	– –	–	表面全体丁寧に削っている。端部分に差し込んだような痕跡あり。	
第621図	27建 W203	木製品 まな板		長 幅	65.4 27.4	厚	4.5	–	まな板か。表面に多量の包丁の刃を思われる痕跡残る。両側面ノコギリ。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第621図	27建 W204	木製品 木材　切台		長 幅	86.2 17.9	厚 重	15.0 –	–	切台(刃物で枝等を切る時に刃を保護するための台、切りやすくするための台)。表面チョウナ、裏面チョウナ跡か。表面は数多く切台として使用されたためか、削られて中央が凹状になっている。	
第621図	27建 W205	木製品 のし板？		長 幅	87.0 60.7	厚 重	4.6 –	板目 トチノキ	のし板として取り上げているが不明。幅広の１枚板で厚さは一定。表面は平らで、刃物痕らしき痕跡多く残る。裏面は平らで、刃物らしき痕跡なし。表裏ともチョウナ痕残る。	
第622図	27建 W206- 1～3	木製品 階段		長 幅	260.0 13.0	厚 重	14.0 –	板目　1.クリ、 2.クリ　マツ科、 3.スギ	ほぼ完形の階段である。詳細について27号建物第２項(９)で説明あり。	PL.198
第623図	27建 W207	木製品 出入口土台 (大戸用敷居付)		長 幅	314.0 15.0	厚 重	18.0 –	角材 芯持材　クリ 板 板目　クリ 角材と板を繋ぐ部材分 割角材　クリ	大戸の敷居を内側に取りつけた土台と敷居。土台から４cm離して側板を取りつける。40～60cm間隔に横木を土台に打ち込み。内側を厚くし、板をはめて、外側にクサビを打って固定している。上面に二個の柱ホゾ。この部分、間渡穴で土壁、その内側に大戸。大戸の幅180cm。左側に柱ホゾ。左側に間渡穴なし。出入口と思われる。柱から180cm前後が出入口と思われる。さらに左側に90cmほど続いていると思われる。表面の加工は土台、板とも丁寧に加工痕明確ではない。	
第624図	27建 W208- 1	木製品 大戸縦木		長 幅	144.0 5.0	厚 重	3.0 –		ほぼ完形の大戸の部材である。詳細について27号建物第２項(６)で説明あり。以下W208-2～W208-10は同じ大戸の部材である。 大戸内側横方向の材である。５本出土している。内側に５か所縦方向の薄い材を受けるための切り込みあり。彫り込みの幅３cm深さ１cmである。	PL.195
第624図	27建 W208- 2	木製品 大戸下木		長 幅	156.0 13.0	厚 重	8.0 –		大戸の下の材である。底面に２個木製の戸車があり、土台に取り付けられたレールの上を移動するようになっている。	PL.195
第624図	27建 W208- 3	木製品 大戸横木		長 幅	174.0 0.3	厚 重	1.0 –	–	大戸内側縦方向の細い材である。５本出土している。６枚の縦方向の板が接合する部分内側に取り付けられる。W208-2内側と直行する。	
第625図	27建 W208- 4	木製品 大戸縦枠木		長 幅	189.0 6.0	厚 重	6.0 –	–	大戸縦方向外枠である。底部に戸車のついたW208-2、その上に５本のW208-1が組み込まれる。最も上端にはW208-1のような横木は接合されない。	
第626図	27建 W208- 5～10	木製品 大戸戸板		長 幅	175.0 24.0	厚 重	0.5 –	5.板目　マツ科 6.分割材　クリ 7.柾目　ミズキ属 7.削出　ミズキ属 8.四方柾　マツ属 複維管束亜属 9.四方柾　マツ科 10.柾目　マツ科	大戸外側縦方向の板である。６枚が組み込まれていた。幅24cm・長さ175cm・厚さ0.5cmと大きさは同じである。釘の痕跡が上下５か所横方向に明瞭に残っている。その場所は、W208-1と重なる部分であり、板はW208-1に打ち付けられて固定されていた。板に残る年輪は、近い位置にあり同じ部材から切り出した可能性が高い。	PL.196
第625図	27建 W209	木製品 大戸上の細長い板		長 幅	322.0 32.0	厚 重	3.0 –	板目 スギ	大戸は敷居のかわりに土台内側のレール上を移動する。鴨居のかわりに桁の内側に取りつけられた細長い板と桁の間を移動するその細長い板である。	
第628図	27建 W210	木製品 柱		長 幅	240.0 13.0	厚 重	12.0 –	芯持材 クリ	土壁のある柱。貫穴３個貫穴の間に間寝穴２個あり。表面の加工は全てチョウナ痕ほとんどなし。丁寧に平にしている。	PL.207
第629図	27建 W211	木製品 土壁の貫		長 幅	142.0 11.0	厚 重	2.5 –	板目 マツ	貫と思われる。木表表面はチョウナ。木裏はノコギリ。両側面はチョウナ。木表は煤けている。木裏は少し煤けている。	PL.207
第629図	27建 W212	木製品 土壁の貫		長 幅	173.0 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ	木裏が部屋の内側に出ている。その部分が煤けて黒くなっている。壁内に位置する裏側、木表は煤けていない。木表及び両側面はチョウナ、木裏はノコギリ。両端は柱に差し込まれていた。貫の一部は欠損している。	PL.207
第629図	27建 W213	木製品 土壁の貫		長 幅	182.0 12.5	厚 重	2.3 –	板目 マツ科	貫で周辺部材を使用。木表はチョウナ。木裏はノコギリで切られている。両端はノコギリで平に切られている。厚さも一定しているが、中央部が少し薄くなっている。両側面はチョウナで削られている。	PL.207
第629図	27建 W214	木製品 土壁の貫		長 幅	184.0 12.5	厚 重	2.5 –	板目 マツ科	貫と思われる。両端を柱に差し込み、そこで終わって抜けていない。左端は凸、右側は細く削っている。表面に大量に付着している植物は幅６～７cmと広く、毛は立っていない、稲わらではない植物である。	PL.207
第629図	27建 W215	木製品 柱		長 幅	260.0 15.0	厚 重	15.0 –	芯持材 クリ	西側に大戸、東側は土壁がくるので、貫通していない貫３個所と貫の間に間渡竹用のホゾ穴２個、下端は土台用ホゾ上部は桁を固定するための込栓、その上に梁用の太くて長いホゾ穴。	PL.207

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第630図	27建 W216	木製品 柱		長 幅	329.0 13.0	厚 重	13.0 –	芯持材 マツ科	上に鴨居、下に敷居、その下に足固用ホゾ。鴨居の上は土壁。鴨居と敷居の間178.5cm、敷居と天井までの高さ271cmと高い。鴨居の反対側にも差し鴨居。上端は２方向の材。下端はヒカリツケで礎石立ち。	W217と接合 PL.202
第630図	27建 W217	木製品 鴨居(３本溝)		長 幅	209.0 12.0	厚 重	23.0 –	半裁材 クリ	３本溝の鴨居。左右端の仕口は異なっている。表面加工はカンナか。	W216と接合 PL.202
第630図	27建 W218	木製品 敷居(３本溝)		長 幅	170.0 13.5	厚 重	5.0 –	– マツ科	W216の柱と接合、W217の三本溝鴨居と一体になる三本溝の敷居。厚さは５cmと薄い。下は足固となっている。W216の柱とW217の鴨居は接合状態で出土したが、この敷居は別の場所から出土。	PL.202
第632図	27建 W219	木製品 障子		長 幅	177.0 89.0	厚 重	3.5 –	–	障子(W219)板戸１(W222)板戸２(W223)が重なって出土、最も上から出土した室内側に位置する障子である。幅89cm長さ177cm、詳細について27号建物第２項(14)で説明あり。27号建物W220障子の縦方向の枠木と思われる	PL.202
第632図	27建 W220	木製品 障子の桟？		長 幅	112.0 4.0	厚 重	3.5 –	分割材 マツ	障子W219の右側相当縦方向の枠木と思われる。上端に鴨居の差し込む加工あり、内側に細い枘穴が約12cm間隔で掘られている。障子W219と同じように細い横方向の軸木が差し込まれていたものと思われる。	
第632図	27建 W221	木製品 枠　障子		長 幅	87.0 4.0	厚 重	3.0 –	分割材 針葉樹	障子W219の右側相当縦方向の枠木と下段腰板上の横木と思われる。	
第633図	27建 W222	木製品 戸板		長 幅	176.0 87	厚 重	3.0 –	–	障子(W219)板戸１(W222)板戸２(W223)が重なって出土した中間の板戸１である。長さ177cm幅87cmであり、幅が障子より２cm狭い。詳細について27号建物第２項(14)で説明あり。	PL.202
第634図	27建 W223	木製品 戸板		長 幅	176.0 87.0	厚 重	– –	–	障子(W219)板戸１(W222)板戸２(W223)が重なって出土した最も下の板戸２である。大きさは板戸１(W221)とほぼ同じである。異なるのは下から３段目の横桟の上５cmのところに鍵と思われる。桟木が別に作られている。詳細について27号建物第２項(14)で説明あり	PL.202
第635図	27建 W224	木製品 囲炉裏枠木		長 幅	96.0 7.0	厚 重	5.5 –	分割材 クリ	１号囲炉裏南側枠木。上部に十字のホゾ。下部に１か所ホゾあり。	
第635図	27建 W225	木製品 囲炉裏枠木		長 幅	107.2 106.3	厚 重	6.6 –	–	囲炉裏(板床)の枠木。片側にホゾ、対応する面にホゾ穴がある。内側に燃えたためか少しへこんで黒くなっている面があり、上面も全体に煤けている。	
第636図	27建 W226-1	木製品 支脚		長 幅	110.0 28.5	厚 重	24.3 –	芯持材 クリ	支脚、キネ、石臼がセットで出土している。地中に60cm前後埋まっており、地上には45cm前後出ていたと思われる。表面は水平に綺麗に整形されている。	
第637図	27建 W226-2	木製品 板			–		–	–	薄い板材である。唐臼柄と支脚が固定される場所で、柄と支脚の間に隙間を埋めるように置かれていた板材の一部である。21号建物W50がほぼ同じ機能を持つ板の完形品である。	
第637図	27建 W226-3	木製品 杵回転軸木		長 幅	29.1 4.8	厚 重	4.5 –	–	唐臼の柄と支脚を固定するための軸木、中央の方形部分は柄の中で固定。両脇の丸い部分は支脚で固定。	
第637図	27建 W226-4	木製品 杵	ほぼ完形	長 幅	75.8 12.2	厚 重	3.6 –	–	唐臼の杵。材質不明。針葉樹。	
第637図	27建 W226-5	木製品 唐臼柄(踏木)		長 幅	251.8 17.1	厚 重	12.0 –	芯持材 クリ	現場ではキネ、キネの上には石が乗っていた。全体的に残りが最も良好なセットであり、支脚に踏木が乗った状態で、支脚と踏木を固定する軸がついていた。これまでの出土例の中で最良である。支脚と踏木との間に板が挟まっていた。穴が２つあるのは使い分けの時の軸の位置をずらすためか。	
第638図	27建 W227	木製品 飼葉桶		長 幅	115.7 34.0	厚 重	26.3 –	芯持材 トチノキ	馬小屋南付近から底面を上にした状態で出土。側面と底面、外面は平らで丁寧に整形。加工用具はほとんどチョウナか。ノコギリの痕跡なし。材はトチノキ。	
第638図	27建 W228	木製品 飼葉桶		長 幅	80.4 30.2	厚 重	20.6 –	芯持材 クリ	飼葉桶と思われる。側面は丁寧に平らに削っている。内側底面は少し凸凹がある。外側底面は丁寧に整形し平らである。東宮１号屋敷の飼葉桶と比べると少し小さい。内側底面は東宮の方が少し丁寧である。	
第639図	27建 W229	木製品 飼葉桶		長 幅	88.9 30.9	厚 重	24.2 –	芯持材 マツ科	馬小屋東土間部分から、底面を上にした状態で出土。側面と底面外部は丁寧に整形。加工用具はほとんどチョウナかと思われる。材はマツ。	PL.232
第639図	27建 W230	木製品 飼葉桶		長 幅	52.3 33.2	厚 重	16.5 –	芯持材 クリ	一本の木をくり抜いて作った飼葉桶である。大きさは約50×33、深さ15cmと小さい。深さは内側11～12cm。	
第640図	27建 W231	木製品 鞍		長 幅	54.6 47.4	厚	4.7	– クリ　ケヤキ	鞍の一部である。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第641図	27建 W232	鞍		長 幅	61.7 46.2	厚	3.9	– クリ	外側の面、ヒモをかけるためか、少しへこんでいる。内側にはない。	PL.232
第641図	27建 W233	木製品 鞍		長 幅	52.6 46.8	厚	4.2	–	他の鞍と異なり、鞍の一部である。27建には鞍は２個存在していたと思われる。	PL.232
第641図	27建 W234	馬具		長 幅	11.9 9.1	厚	8.9	–	鞍の下、馬のお腹の下でヒモを結ぶときに使用したもの。	
第642図	27建 W235	木製品 馬ブラシ		長 幅	27.2 10.3	厚	2.7	– マツ科	羽子板状の板表面ほぼ全面に太さ0.3㎝、長さ２㎝前後の竹でできた細長い歯？が打ち込まれている。ブラシのような材である。馬の毛等のブラシとして使用されたものか。ノコギリ切溝残る。材はマツと思われる。	
第642図	27建 W236	木製品 おろし		長 幅	28.0 8.7	厚	1.8	– クリ	27建から出土したものと同じ馬用のブラシか。歯の長さが0.6㎝と短い。太さは0.3㎝。先端が削られているため、本来の長さであると思われる。裏面には４×2.5㎝の範囲の中に、同じようにブラシ状に竹が打ち込まれていた。密で長さが0.1～0.2㎝ときわめて短い。一部抜けている穴あり、太さは0.3～0.6㎝と同一でない。材はクリ。	
第643図	27建 W237	木製品 板(おろし板？)		長 幅	25.6 11.8	厚	3.9	– マツ科	おろし板は27建物W235、W236とこのW237の３個出土している。大きさは25.3㎝～28㎝、幅8.5～11.5㎝で、このW237は長さが短いが幅が広い。上面には竹ブラシのように多くの竹がクギのように折り込まれている。竹グシの幅は0.3㎝前後が多い、長さは全て0.5㎝以下である。先端が削られているため本来の長さであったと思われる。竹クギの打たれている範囲は10×14㎝。材は針葉樹、マツか。	
第644図	27建 W238-1	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.7 9.3	高 重	3.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さほぼ均一。肩部に稜線なし。口径が小さく器高が高い蓋である。	蓋と身が重なっていたものを分離して処理
第644図	27建 W238-2	木製品 漆壺椀		口 底	10.0 5.4	高 重	6.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離わずか。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。口縁部が一部欠損。	蓋と身が重なっていたものを分離して処理
第644図	27建 W238-3	木製品 漆壺蓋	完形	口 底	摘4.7 9.4	高 重	4.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一であるが、ツマミ内側の天井部がやや厚い。肩部に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	PL.224
第644図	27建 W238-4	木製品 漆壺椀	完形	口 底	10.0 5.5	高 重	6.5 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離わずか。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。口縁部がわずかに歪んでいる。	PL.224
第644図	27建 W238-5	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.2 8.8	高 重	3.3 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離はほとんどなし。器肉の厚さはツマミ内側の天井部が最も高く稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	PL.224
第644図	27建 W238-6	木製品 漆壺椀		口 底	10.2 5.4	高 重	6.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離わずか。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。口縁部がわずかにゆがんでいる。	PL.224
第644図	27建 W238-7	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.4 9.0	高 重	3.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一で５㎜前後である。肩に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	PL.224
第644図	27建 W238-8	木製品 漆壺椀		口 底	10.2 5.3	高 重	6.5 –	– ブナ属	内面赤褐色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第645図	27建 W238-9	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.8 9.1	高 重	3.1 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一であるが、ツマミ内側の天井部がやや厚い。肩部に稜線なし。口径が小さく器高が高い蓋である。	PL.224
第645図	27建 W238-10	木製品 漆壺椀		口 底	9.8 5.3	高 重	6.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第645図	27建 W238-11	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.8 9.3	高 重	3.5 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆の剥離はほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一。肩部に稜線なく、口径が小さく器高の高い蓋である。	蓋と身が重なっていたものを分離して処理

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第645図	27建 W238- 12	木製品 漆壺椀		口 底	9.8 5.4	高 重	6.6 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離わずか。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。口縁部が一部欠損。	蓋と身が重なっていたものを分離して処理
第645図	27建 W238- 13	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.5 9.1	高 重	3.6 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはツマミ内側の天井部が最も厚く10㎜前後ある。肩部に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	
第645図	27建 W238- 14	木製品 漆壺椀		口 底	10.2 5.5	高 重	6.4 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	
第645図	27建 W238- 15	木製品 漆壺蓋	完形	口 底	摘4.2 9.0	高 重	3.2 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはツマミ内側の天井部が最も高く10㎜前後ある。肩部に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	
第645図	27建 W238- 16	木製品 漆壺椀	完形	口 底	9.9 5.0	高 重	6.6 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	
第646図	27建 W238- 17	木製品 漆壺蓋		口 底	摘5.0 8.6	高 重	3.1 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一であるが、ツマミ内側の天井部がやや厚い。肩部に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	
第646図	27建 W238- 18	木製品 漆壺椀		口 底	10.1 5.5	高 重	6.4 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	
第646図	27建 W238- 19	木製品 漆壺蓋		口 底	摘4.2 9.1	高 重	3.6 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一で５㎜前後である。肩部に稜線なし。口径が小さく器高の高い蓋である。	PL.224
第646図	27建 W238- 20	木製品 漆壺椀	ほぼ完形	口 底	9.9 5.2	高 重	6.1 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離は少ない。器肉が最も厚いのは底部。口縁部は直立する。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第646図	27建 W239- 1	木製品 漆平蓋		口 底	摘5.0 11.3	高 重	3.2 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」漆下地、内外面の漆剥離少ない。ツマミ内側天井部の器肉少し厚い。肩に稜線なし。	PL.224
第646図	27建 W239- 2	木製品 漆平椀		口 底	12.0 6.6	高 重	5.0 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第646図	27建 W239- 3	木製品 漆平蓋	完形	口 底	摘4.7 10.9	高 重	2.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離少ない。器肉が最も厚いのは天井部。肩に稜線なし。	PL.224
第646図	27建 W239- 4	木製品 漆平椀	完形	口 底	11.5 15.9	高 重	5.0 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離多い。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第647図	27建 W239- 5	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.9 9.9	高 重	2.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、赤色の文字による「吉」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩に稜線あり。ツマミ内側、天井部の器肉やや薄い。口径が小さく肩部に稜を持つことから他の平椀と異なる特色を持つが、平椀とセットで出土しているため平蓋か(W239-14)に近い。	PL.224
第647図	27建 W239- 6	木製品 漆平椀		口 底	11.9 6.4	高 重	4.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.224
第647図	27建 W239- 7	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.9 11.0	高 重	2.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離少ない。器肉が最も厚いのは天井部。肩に稜線なし。	PL.224
第647図	27建 W239- 8	木製品 漆平椀		口 底	11.8 –	高 重	4.3 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆の剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。口唇部、大部分少し欠けている。高台部、大部分欠損。	PL.224
第647図	27建 W239- 9	木製品 漆平蓋	完形	口 底	摘4.5 10.6	高 重	2.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離少ない。器肉が最も厚いのは天井部。肩に稜線なし。	PL.224

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第647図	27建 W239- 10	木製品 漆平椀	完形	口 底	10.5 6.0	高 重	4.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、金色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	
第647図	27建 W239- 11	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.9 10.9	高 重	2.9 –		内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一。肩に稜線なし。	
第647図	27建 W239- 12	木製品 漆平椀		口 底	11.8 6.3	高 重	4.9 –		内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	
第648図	27建 W239- 13	木製品 漆平蓋		口 底	摘5.2 10.9	高 重	3.0 –		内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一である。肩に稜線なし。	
第648図	27建 W239- 14	木製品 漆平蓋	完形	口 底	摘– 9.8	高 重	– –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面に文字なし。渋下地、内外面の漆の別離少ない。肩部に稜線あり。口径が小さいことから浅蓋に近いが、器肉の厚さの特色は平蓋に近い。平椀と平蓋に加えてこの蓋が出土。平椀の蓋か。(W239-5に近い)	
第648図	27建 W240- 1	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.5 11.2	高 重	3.1 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆の剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一。肩に稜線なし。	
第648図	27建 W240- 2	木製品 漆平椀		口 底	– 6.3	高 重	4.6 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	
第648図	27建 W240- 3	木製品 漆平蓋		口 底	摘5.0 10.9	高 重	3.1 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一である。肩に稜線なし。	
第648図	27建 W240- 4	木製品 漆平椀		口 底	– 6.4	高 重	4.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。口唇部欠損。	
第648図	27建 W240- 5	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.9 11.0	高 重	2.8 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側、金色の文字で「月」渋下地、内外面漆の剥離ほとんどない。器肉が最も厚いのは天井部。肩に稜線なし。口縁部に欠損多い。	
第648図	27建 W240- 6	木製品 漆平椀		口 底	12.1 6.2	高 重	5.2 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	
第649図	27建 W241- 1	木製品 漆深蓋		口 底	摘5.4 10.4	高 重	3.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。摘み内側赤色の文字で「吉」渋下地、内外面の漆剥離やや多い。肩部に稜緑あり。摘み内側天井部の器肉薄い。	
第649図	27建 W241- 2	木製品 漆椀		口 底	12.0 高台径 6.0	高 重	7.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。底部の器肉厚く高台部高い、口唇部一部欠損	
第649図	27建 W241- 3	木製品 漆浅蓋		口 底	摘5.2 10.2	高 重	2.7 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。摘み内側赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜緑あり。	
第649図	27建 W241- 4	木製品 漆椀		口 底	11.1 高台径 5.2	高 重	4.7 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離少ない。高台部の残り良好、口唇部使用により一部欠損	
第649図	27建 W242- 1	木製品 漆深椀		口 底	12.0 –	高 重	6.5 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内側、赤色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。底部の器肉厚い。胴下半の稜線の位置低い。高台部下端欠損。	
第649図	27建 W242- 2	木製品 漆浅椀		口 底	10.9 5.4	高 重	5.1 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台内面赤色文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。胴下半の稜線の位置低い。高台部内側底部の器肉少し薄くなっている。	
第649図	27建 W243- 1	木製品 漆深椀	完形	口 底	12.0 5.5	高 重	7.7 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離多い。底部の器肉厚く高台高い。胴下半の稜線の位置が低い。	
第649図	27建 W243- 2	木製品 漆深椀	口縁～胴部欠	口 底	12.0 –	高 重	6.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離多い。底部の器肉厚く、高台部高い。胴下半の稜線の位置が低い。	
第650図	27建 W243- 3	木製品 漆深椀	口縁部と高台部欠損	口 底	– –	高 重	6.2 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離多い。底部の器肉厚く、高台高い。胴下半の稜線の位置が低い。	
第650図	27建 W243- 4	木製品 漆深蓋	完形	口 底	摘5.5 10.3	高 重	3.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側赤色文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜線あり。ツマミ内側天井部の器肉特に薄い。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第650図	27建 W243- 5	木製品 漆深蓋	口縁部一部欠	口 底	摘5.0 10.2	高 重	3.7 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面赤色の文字で「月」渋下地、表面凹凸、内外面の漆剥離箇所多い。肩部に稜線あり。ツマミ内側天井部の器肉薄い。	
第650図	27建 W243- 6	木製品 漆深蓋		口 底	摘5.6 10.8	高 重	3.7 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離多い。肩部に稜線。ツマミ内側、天井部の器肉特に薄い。	
第650図	27建 W243- 7	木製品 漆浅椀		口 底	11.4 5.3	高 重	4.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤漆による「月」の文字。渋下地、表面凹凸、内外面の漆剥離多い。胴下半の稜線の位置が低い。高台部内側底部の器肉薄い。	
第650図	27建 W243- 8	木製品 漆浅椀	ほぼ完形	口 底	11.2 5.7	高 重	4.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。胴下半の稜線の位置低い。高台部内側底部の器肉薄い。	
第650図	27建 W243- 9	木製品 漆浅椀		口 底	11.5 5.8	高 重	4.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。胴下半の稜線の位置が低い。高台部内側の底部の器肉薄い。	
第650図	27建 W243- 10	木製品 漆浅蓋		口 底	摘4.8 9.6	高 重	3.0 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側赤色文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜線あり。ツマミ内側天井部の器肉薄い。	
第651図	27建 W243- 11	木製品 漆浅蓋		口 底	摘5.0 9.8	高 重	2.9 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内側、赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離多い。肩部に稜線あり。ツマミ内側、天井部の器肉特に薄い。	
第651図	27建 W243- 12	木製品 漆浅蓋	口縁の大部分 欠損	口 底	摘5.6 10.4	高 重	2.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、赤色文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離箇所多い。肩部に稜線あり。ツマミ内側天井部の器肉薄い。天井部も一部欠損。	
第651図	27建 W244	木製品 漆平椀	口縁部一部欠 損	口 底	12.0 6.6	高 重	5.1 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面金色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離少ない。器肉が最も厚いのは胴部と底部の境付近。胴下半の稜線の位置が高い。	PL.233
第651図	27建 W245	木製品 漆深蓋		口 底	摘5.4 10.4	高 重	3.6 –	– モクレン属	内外面赤色漆。ツマミ内面、黒色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆面剥離ほとんどなし。肩に稜線あり。器肉は肩部が最も厚く、ツマミ内側天井部は薄い。内外面赤色漆の出土例は少ない。	PL.233
第651図	27建 W246- 1	木製品 漆椀		口 底	– –	高 重	6.8 –	– ブナ	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離多い。底部の器肉厚く高台高い。胴下半の稜線の位置が低い。口唇部、高台下端部欠損。	
第651図	27建 W246- 2	木製品 椀漆		口 底	11.1 –	高 重	4.4 –	– ブナ	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台内面、赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。胴下半の稜線の位置低い。胴下半の稜線の位置低い。高台部内側底部の器肉が少し薄くなっている。高台部下半欠損。口縁部も約1/2欠損。	
第651図	27建 W246- 3	木製品 漆深蓋		口 底	摘5.4 –	高 重	3.3 –	– ブナ	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離多い。肩部に稜あり。ツマミ内側、天井部の器肉薄い。口縁部欠損。	
第652図	27建 W247	木製品 漆深蓋		口 底	摘5.2 10.3	高 重	3.8 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面赤色の文字で「月」、渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜緑あり。摘み内側天井部の器肉は薄い。	
第652図	27建 W248	木製品 漆深蓋		口 底	摘4.9 10.2	高 重	4.0 –	–	内外面赤色漆、ツマミ口唇部と底面に黒漆。ツマミ内面、黒色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆の剥離少ない。器肉が最も薄いのはツマミ内側天井部。肩部に稜線あり。外面に赤色漆であること、文字が黒色であること、肩部の稜が鋭角であること等、他の深蓋と異なる。	PL.233
第652図	27建 W249	木製品 漆浅蓋		口 底	摘5.4 10.1	高 重	2.8 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面赤色文字で「月」。渋下地、表面凹凸、内外面の漆剥離ほとんどなし。肩部に稜線あり。ツマミ内側天井部の器肉特に薄い。	
第652図	27建 W250	木製品 漆蓋		口 底	– –	高 重	3.1 –	– ブナ	内外面黒色漆(黒色は唯一)ツマミ内面赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆面剥離少ないが亀裂が多く入っている。肩に稜線あり。器肉の厚さはほぼ均一。内外面黒色の製品出土例少ない。	
第652図	27建 W251	木製品 漆浅蓋	口縁部3/5欠損	口 底	摘5.0 9.6	高 重	2.7 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。肩部に稜線あり。器肉の厚さほぼ均一。	
第652図	27建 W252	木製品 漆浅蓋	4/5	口 底	摘– 10.2	高 重	2.9 –	– モクレン属	内外面赤色漆、口唇部黒漆。ツマミ内面、黒色の文字あり判読不明。渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜あり。器肉の厚さはほぼ均一。	
第653図	27建 W253- 1	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.7 11.2	高 重	2.7 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面、金色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離多い。器肉の厚さはほぼ均一。肩に稜線なし。器肉が薄いのは風化して素地の残りが悪いためか。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第653図	27建 W253- 2	椀 漆蓋		口 底	摘5.0 11.4	高 重	4.9 –	– –	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面にモミジと思われる赤色と金色の２葉、ツマミ外面下に赤色１葉と金色３葉、ツマミ外面上に金色の２葉、計３か所描かれている。渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一である。肩部に稜線あり。器形は深蓋に近いが、器肉の特色は平蓋に近い。	
第653図	27建 W254	木製品 壺蓋		口 底	摘3.9 9.8	高 重	2.9 –	– –	内外面暗赤褐色漆。ツマミ内面に文字なし。渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。ツマミの径は、他の壺蓋では4.5㎝であるが、この蓋は3.3㎝と１㎝以上小さい。器高も0.5㎝前後低い。内面に金色と黒色で絵が描かれている。器肉はツマミ内側の天井部が最も薄い。肩に稜線なし。器形の特色から壺蓋と思われる。	
第653図	27建 W255	木製品 漆蓋		口 底	摘(4.5) 9.1	高	3.0	– ハンノキ属	茶碗の蓋と思われる。２つに割れている。内面赤色漆。外面黒色漆。	
第653図	27建 W256	椀 漆蓋		口 底	摘5.0 11.4	高 重	4.9 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面にモミジと思われる赤色と金色の２葉、ツマミ外面下に赤色１葉と金色３葉、ツマミ外面上に金色の２葉、計３か所描かれている。渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなし。器肉の厚さはほぼ均一である。肩部に稜線あり。器形は深蓋に近いが、器肉の特色は平蓋に近い。	
第653図	27建 W257	木製品 漆平蓋		口 底	摘4.8 11.1	高 重	3.2 –	–	内面赤色漆、外面黒色漆。ツマミ内面に文字なし。渋下地、内外面の漆の剥離多い。ツマミの径は他の平蓋より５㎜前後小さい。器肉全体が厚く、他の平蓋と異なる。肩に稜線なし。	
第654図	27建 W258	木製品 おひつ 曲げ物		長 幅	– –	厚	–	– ヒノキ科	全体に暗褐色漆。外面の木目は漆でよく見えない。内面はやや薄い暗褐色漆で木目が見える。	
第654図	27建 W259	木製品 曲げ物		長 幅	21.3 8.5	厚	7.8	– ツガ属	飯櫃の側板(曲物)と底板である。蓋はなし。底板2/5ほど残り、側板一部残る。側板外面黒色漆。内面暗赤褐色漆。側板の重なる部分は桜皮等で細く綴られている。その上から黒漆が厚く塗られている。高さや直径は完形でないため不明。	PL.234
第654図	27建 W260	木製品 おひつの蓋		長 幅	24.4 24.4	厚	9.2	–	表面は濃い黒漆で年輪ほとんど見えない。裏面は薄い黒漆、年輪すけて見える。裏面にカエリの凹状の浅い溝残る。一部欠けて残ったカエリの材あり。	
第655図	27建 W261	木製品 曲げ物		長 幅	24.4 8.0	厚	9.1	– ツガ属	おひつの底板と側板か。高さは９㎝残っているが、さらに高かったものと思われる。裏面に焼き印あり。	
第655図	27建 W262	木製品 曲げ物		長 幅	23.6 23.5	厚	1.0	– スギ	口縁部に幅0.6㎝の黒い付着物。天井板外側に柾目の曲物のクワがついていたものと思われる。ワキ板は接合で重なる範囲は20㎝前後と長い。接合部３か所は、中央３段、両端５段で桜皮？で結ばれている。天井板とワキ板を打ち付ける竹クギは10か所。	
第655図	27建 W263	木製品 わっぱ		長 幅	23.1 9.4	厚	2.1	– ヒノキ科	側板外面は下地に朱漆を使い、その上に和紙を貼り、さらに黒漆を塗ったか。口唇部、黒漆あり。外枠があったものと思われる。接合部は桜皮をテープ状に延ばして接着している。内側接合部は桜皮を細く組んで結い、その上に桜皮状のテープを貼り付けている。	PL.236
第656図	27建 W264	木製品 柄杓の身の 部分		長 幅	– –	厚	–	– モミ属	柄杓の身の部分である。柄はなし。柄の差込口から反対側の側板まで貫通しており、そこに柄を差し込んでいる。反対側の側板を補強するために縦方向に細長い棒を固定し、そこに柄を通し、側板まで柄を貫通させている。底板外側に「左や」の焼印あり。柾目。材は針葉樹。綴に桜皮を使用。	
第656図	27建 W265	木製品 わっぱ		長 幅	14.8 14.9	厚	5.3	–	側板と底板の間に竹クギ４本。底板はほぼ中央で割れている。柾目。針葉樹。	PL.237
第656図	27建 W266	木製品 わっぱ		長 幅	23.2 14.2	厚	22.2	– ケヤキ	底面外側に文字あり。底面内側黒漆。外面漆なし。底板が1.5㎝と厚い。側板は厚さ２～４㎜、４枚重ねて１㎝の厚さとしている。	PL.234
第657図	27建 W267	木製品 わっぱ	ほぼ完形	長 幅	11.0 8.6	厚	4.2	–	木クギを使用。木目荒い。柾目。材は針葉樹。	
第657図	27建 W268	木製品 わっぱ	ほぼ完形	長 幅	10.7 7.6	厚	11.2	– モミ属	押しつぶされてはいるが、ほぼ完形。柾目。	PL.234
第657図	27建 W269	木製品 わっぱ		長 幅	16.1 7.9	厚	16.6	–	曲物である。唐臼№134の中に入っていた。ほぼ完形品である。	
第657図	27建 W270	木製品 わっぱ		長 幅	14.8 6.1	厚	14.9	– スギ	押しつぶされいる。クギ２か所。材はスギか。表面やや荒く。年輪が目立つ。	
第657図	27建 W271	木製品 わっぱ		長 幅	15.3 14.8	厚	7.9	– ツガ属	曲物(わっぱ)の側板と底板である。両者とも柾目である。底板の外側に円形に曲げた側板をまきつけ、４か所クギを打ち込み、側板と底板を固定している。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第658図	27建 W272	木製品 わっぱ		長 幅	29.2 13.9	厚	11.0	－ ヒノキ科	蒸器として使用か。	
第658図	27建 W273	木製品 わっぱ		長 幅	36.8 7.9	厚	1.1	－ ヒノキ科	外面に黒漆。柾目。材は針葉樹、桜か。	
第659図	27建 W274-1	木製品 わっぱ		長 幅	23.5 1.9	厚	25.0	－ ヒノキ科	底板、側面にクギなし。柾目。針葉樹。内外面全面黒漆。	
第659図	27建 W274-2	木製品 わっぱ		長 幅	24.5 2.1	厚	24.5	－ ヒノキ科	クギ穴２か所のみ。重なり幅は15㎝。３か所の脚のうち、残っているのは１か所、取れているが残っているのが１か所、脚は残っておらずホゾ穴のみが１か所。	
第659図	27建 W274-3	木製品 わっぱ		長 幅	23.7 2.0	厚	24.0	－ ヒノキ科	表裏黒漆。風化していて残りが悪い。３か所の脚のうち、完全に残っているのは１か所、１部欠けが１か所、脚は残っていないのが１か所。	
第660図	27建 W275	木製品 お櫃の底板		長 幅	23.5 23.8	厚	0.9	－	お櫃の底板。表面は内外とも茶褐色の漆。表面に膜を持つ渋下地なし。漆の剥離全くなし。年輪が見える。木クギは全て木で方形。竹は使用していない。木クギを２か所に用いて２枚の板を固定。51建から出土したお櫃の底板は上部の幅0.8㎝、下端の幅0.3㎝と逆台形になっていたが、27建の底板は底部に接する側板の厚さ１㎝と上部から細くない。底部から木クギ８本で底板と側板を固定している。	
第660図	27建 W276	木製品 丸膳の底板		長 幅	24.0 23.5	厚	0.9	－	丸繕の底板である。側板(高さ２㎝)も一部出土している。脚出土なし。底面に３個所脚を差し込む長方形の掘り込みあり、表面は光沢のある黒漆で木目は見えない。下面は薄い黒漆で光沢なし、木目が見える。表裏面とも刃物による傷多数あり。	
第660図	27建 W277	木製品 お櫃の蓋		長 幅	22.4 23.0	厚	1.6	－ ヒノキ科	おひつの蓋。側板も部分的に残っている。つくりは丁寧。厚さは１㎝と厚い。側板は漆等で接合か。蓋上面、黒漆。蓋下面、赤色漆。両面とも木地見えない。材は広葉樹か。	
第661図	27建 W278-1	木製品 お膳		長 幅	30.2 30.18	厚	7.62	－ モミ属	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第661図	27建 W278-2	木製品 お膳		長 幅	29.9 29.5	厚	6.5	－ モミ属	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第661図	27建 W278-3	木製品 お膳		長 幅	29.2 30.3	厚	6.8	－ クリ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第662図	27建 W278-4	木製品 お膳		長 幅	29.8 29.9	厚 重	6.9	－ モミ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第662図	27建 W278-5	木製品 お膳		長 幅	28.7 29.7	厚	7.1	－ 針葉樹モミ属	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第662図	27建 W278- 6	木製品 お膳		長 幅	29.9 29.2	厚	8.0	– 針葉樹	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。脚が内側に折れている。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第663図	27建 W278- 7	木製品 お膳		長 幅	29.6 29.8	厚	7.0	– クリ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第663図	27建 W278- 8	木製品 お膳		長 幅	29.9 29.8	厚	7.0	– モミ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第663図	27建 W278- 9	木製品 お膳		長 幅	29.1 30.4	厚	7.0	– モミ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第663図	27建 W278- 10	木製品 お膳		長 幅	29.0 29.9	厚	7.0	– マツ	全面黒漆のお膳である。身の四周に枠木を回し、脚はホゾの中に差し込み、接着剤で固定している。表が木表で凹状にゆがんでいる製品が多い。脚は木裏に付く、凹状にゆがむのを防ぐ位置。木クギは足の付く面に５本、他の面に４本打って枠木を固定している。表面に赤色漆で梅と思われる絵が描かれている。他は枠木の上端のみ暗赤褐色漆。材は針葉樹、マツか。	PL.225 PL.226
第664図	27建 W279	木製品 三宝？		長 幅	14.3 14.2	厚	7.6	–	４枚の側板で正方形に組み、上から0.6㎝下がった位置に天井板を固定し、お膳又は三宝のような置台としている。４枚の側板には全て直径4.8㎝の円形の窓が開けられている。天井板の天井部及び側板の天井右から上の部分、赤色漆側板内外面黒色漆。天井板は四辺の側板から木クギで固定されている。	
第664図	27建 W280	木製品 置台		長 幅	15.7 14.7	厚	7.8	– ブナ	27建W279と同じ構造の置台、お膳。天井板は側板から0.9㎝低い場所に付く、この天井板を固定するために４面の側板に各２個所の穴があり、木クギで固定している。天井板は小さく破損していて復元不可能。天井板の上は赤色漆。下面は黒色漆。	PL.233
第665図	27建 W281	木製品 重箱		長 幅	17.7 15.7	厚	4.9	– ホオノキ　モクレン属	重箱の身。蓋なし。内面は暗赤色漆。外面は黒色漆。側板外面は四辺とも草の葉のような紋様が描かれている。底板外面の脚欠損、痕跡が残る。横の長さが、縦の長さより約２㎝長い。細かい点描のような凹凸面をつくり、その上から絵を描いている。そのために同じ黒色の漆面である絵が浮かび上がってわかるようになっている。	PL.238
第665図	27建 W282	木製品 重箱		長 幅	19.2 17.3	厚	5.6	–	重箱の側板と底板である。内面赤色、側板内外面赤色。側板上端口唇部黒色、底板外面黒色漆。底板外面に２本の脚が付くが全て剥離して残っていない。材は針葉樹、散孔材か。	
第666図	27建 W283	木製品 重箱		長 幅	19.7 17.8	厚	5.8	– モクレン属	蓋内外面赤色漆。側板内外面赤色漆。側板上端黒色漆。側板内外面に紋様なし。底面外側黒色漆。	
第666図	27建 W284	木製品 重箱		長 幅	19.8 18.5	厚	0.9	– ハンノキ属	重箱の蓋。身の側板と底板なし。大きさは横が約20㎝、縦は約18.5㎝の長方形。蓋の内側に脚２本が付く、脚の内面は溝状に削られている。蓋の上端は削られている。漆は外面暗赤褐色。内面赤色。内外面とも漆の剥離少ない。蓋の上面には、多くの刃物数が残っている。この面を切場板として利用したのであろうか。材はヒノキか。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第667図	27建 W285	木製品 膳		長 幅	49.5 26.4	厚	0.7	–	四端に脚の付く膳か。脚は４本外側から蟻柄に掘られた溝に脚を外側から差し込んだものと思われる。表面は黒漆ほとんどなし。底面は黒漆。枠木の痕跡残る。	
第667図	27建 W286	木製品 重箱底板		長 幅	14.6 12.7	厚	0.6	–	小さな重箱である。底板のみ残存。内面赤色漆。外面黒色漆。外面に２本足付着。部分的に足が残り、他の痕跡２本の足は裏面から２か所にクギ(材は竹か)で固定されている。底板上面は四周に側板の痕跡残る。クギが底面から側板に各２本づつ打たれている。	
第667図	27建 W287	木製品 重箱のフタ (漆絵付)		長 幅	13.9 12.9	厚	1.2	–	表面は漆下地に黒漆、金色漆の葉に赤色漆の線。側面は漆下地に黒漆。裏面は漆下地に赤漆。表の黒漆は剥離が多く、裏の赤漆は剥離が少ない。反らないように木裏に樹木の横方向に足を付けている。	
第668図	27建 W288- 1	木製品 箱の底		長 幅	47.2 21.0	厚	15.0	–	箱である。中から出土した俎板が蓋のように置かれたものと思われる。長い側板の口縁部下１㎝の所に俎板を受ける横木が両側にある。細い側板の片方には２×3.5×8.5㎝の短い横木がある。反対側の側板にはない。底板には多くの木クギが打たれており、側板を固定している。材は針葉樹、マツか。	PL.238
第668図	27建 W288- 2	木製品 箱の中板		長 幅	28.6 18.2	厚	1.7	–	W288-1の木箱の中に２つに折られた状態で入っていた。表裏面とも刃物の切り傷多数あり。材は広葉樹、還孔材か。	
第669図	27建 W289	木製品 箱製品		長 幅	29.6 17.8	厚	14.0	–	外面黒漆。内面は黒漆がわずかに残る。底板と側板の材が異なる。底板の材は針葉樹。側板の材は広葉樹、散孔材。	PL.238
第669図	27建 W290	木製品 箱		長 幅	22.9 16.7	厚	7.01	–	箱であり、底面部よりも口唇部が長い、上にかけて広がっていく形のものと思われる。口唇部はやや丸みを持つ。	PL.238
第670図	27建 W291	木製品 箱		長 幅	24.6 32.8	厚	3.6	–	漆は塗られていない。外面煤けている。表面に凸凹あり、平らではない。カンナ等の加工痕不明。全体的に荒い加工である。大部分は竹クギまたは穴のみで鉄釘は３本残る。柾目。	PL.238
第670図	27建 W292	木製品 箱		長 幅	18.3 16.8	厚	10.1	– マツ科	正方形ではない。枡に近いが枡ではないと思われる。蓋なし。蓋をクギで打った痕跡なし。側板と底板の厚さ同じ。全て板目。底板内面黒褐色、汚れている。	PL.239
第671図	27建 W293	木製品 丸型しゃもじ		長 幅	28.4 7.7	厚	2.8	–	内外面茶色に塗られている、漆か。柿渋を塗っただけで炭粉なしか。51建から出土したしゃもじに少し似ているが、幅が１㎝ほど広く、長さが３㎝ほど長い。銅の小破片付着している。	
第671図	27建 W294	木製品 しゃもじ		長 幅	25.9 6.4	厚	0.7	–	しゃもじである。柄の部分は厚さ0.5㎝～0.7㎝、身の部分は厚さ0.2～0.5㎝と薄く削っている。柄から身の先端までほぼ直線である。身の部分はわずかに中央部が薄くなっているが、ほぼ水平である。	PL.236
第671図	27建 W295	木製品 杓子		長 幅	25.3 6.3	厚	0.7	–	素地の上に渋下地を塗り、赤漆を塗ったと思われる。深さは0.6㎝と浅い杓子である。赤漆の別離少なく、渋下地の後、磨いたあとに赤漆を塗ったか。広葉樹。散孔材。	
第671図	27建 W296	木製品 しゃもじ		長 幅	182.9 9.4	厚	0.8	– ブナ属	幅の広いしゃもじである。先端部は平らで丸くない。柄の部分は中央が厚くなっている。材は散孔材。	PL.237
第671図	27建 W297	木製品 しゃもじ		長 幅	18.6 9.1	厚	1.0	– ケヤキ	柄の部分が太くなっている。柾目取。	
第672図	27建 W298	木製品 とうじカゴ		長 幅	20.2 9.7	厚	1.7	–	細い枝の幹部分を切って、枝を丸くまわして、枝の反対側の幹に差し込んでいる。細長い、曲線部に20か所穴が開けられ、そこに竹ではない太さ0.3㎝程の植物が差し込まれている。網状に組んで、とうじカゴとしたものと思われる。表面を削って６面体等に加工。材は広葉樹、散孔材。竹は全く使っていない。	
第672図	27建 W299	木製品 スイノウ		長 幅	71.8 26.6	厚	2.2	– マタタビ属	すいのう。枝が丸く１周し先端を幹に差し込み、竹クイ？等で固定している。綱を固定する穴は現状で26個。	PL.240
第672図	27建 W300	木製品 つけ木		長 幅	10.5 4.2	厚	–	–	25枚まとまって出土。表面はカンナをかけたように平らであり、凸凹少ない。硫黄と思われる付着痕あり。柾目。針葉樹。現代に伝わる骨董屋で売っている製品は長さ10.6㎝、幅は６㎝で約1.5㎝ほど広くなっている。	
第673図	27建 W301	竹製品 茶筅		長 幅	14.2 3.0	厚	3.4	–	刷毛部分は幅0.1～0.2㎝と一定ではない。先端では幅0.1㎝、厚さ0.01㎝と細く、薄くなっている。厚さは根元部分で0.1㎝、先端で0.01㎝。刷毛部分は内側を削って厚さを0.3㎝から0.1㎝まで細くしている。刷毛部分は、２本１組、外側２本、内側２本となっている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第673図	27建 W302	竹製品 茶筅		長 幅	17.8 7.6	厚	6.0	–	竹の一部、節の上1.5cm、節の下14cm、計15.5cmを切り、節の下３cmまでを下から割って、刷毛部分を作ったものと思われる。割られた筅部分の厚さは0.2cm、下端先端部は細く削られ、幅・厚さとも0.1cm前後である。内側縁取り。内側は薄く削られて段となっている。厚さが0.5～0.1cmと薄くなり、刷毛状の細い茶筅となっている。	
第673図	27建 W303	竹製品 茶筅		長 幅	14.9 46.1	厚	2.9	–	刷毛は外内交互にヒモで分けてあり、このヒモが多く残っている。ヒモは縄である。刷毛の幅２㎜で根元と先端とも同じ幅であり、先端を特に細く削ってはいない。ヒモは外側の竹ヒゴのみしばっている。	
第673図	27建 W304	竹製品 茶筅		長 幅	13.2 3.2	厚	0.4	–	刷毛は外側２本、内側２本の間にヒモを通して外側と内側に分けている。このヒモが部分的に残っている。このヒモは糸ではなく植物の表皮(例藤皮)等の細い繊維と思われる。刷毛は根元部分で幅0.1cm、厚さ0.1cm、先端部分では、幅0.05cm、厚さ0.01cm前後(実測不可能)で細くなっている。根元の丸竹内側は少し削っており、木製の柄等を差し込めるように工夫している。	
第673図	27建 W305	木製品 茶道具		長 短	9.5 9.8	厚	0.9	–	小さな板である。用途名称不明。茶筅や茶杓等置く台か。表面にノコギリで切られた痕跡残る。表面の一部が焼けて黒く炭化している。材は針葉樹か。	
第674図	27建 W306	木製品 茶道具		長 幅	11.5 3.2	厚	3.4	–	散孔材。W307と同じ茶筅の柄と思われる。	
第674図	27建 W307	木製品 茶道具		長 幅	13.7 3.0	厚	3.3	–	茶筅の柄と思われる。同じカゴの中からW305・W306・W307がまとまって出土。	
第674図	27建 W308	竹製品 茶杓		長 幅	42.0 6.4	厚	6.4	–	柄は長さ4.7cm、ホゾ部分は0.5cm前後、48.2cm前後を割って作成。柄の先端部分をホゾとして差し込んでいる。柄と器の留め具として内側で竹クギを使用。柄の節と節の間は長さ約38cmと長い。	PL.236
第675図	27建 W309	竹製品 茶杓		長 幅	44.3 1.6	厚	6.8	–	カゴ(取り上げられず)の中にこのW309の茶杓とW304の茶筅が入っており、その上にNo.10・No.11(陶器、瀬戸美濃茶碗)がまとまって出土した。柄は杓の中部分が２つに分かれており、先端が差し込まれている。一部欠損しているが、柄が抜けないように竹クギ等が差し込まれていたと思われる穴あり。この場所には３か所から茶筅が出土しており、カゴの中やザルの中に茶筅、茶碗、茶杓等が入っていた。	
第675図	27建 W310	土製品 器		長 幅	7.3 4.0	厚	7.2	–	強い火を受けている小さな壺状の器。口唇部、黒色の炭素吸着、断面も吸い込んでいる。断面は強い火を受けて少し赤化。他の外面は還元されて少し灰色に近い。	
第675図	27建 W311	木製品 柄杓		長 幅	36.5 12.0	厚	7.6	–	全て柾目。木目が細くつまっている。底板も柾目。	PL.234
第676図	27建 W312	木製品 柄杓		長 幅	60.0 12.7	厚	24.3	– マツ属複維管束亜属 底　スギ	柄は曲物の重なった部分から差し込み、反対側の側板に柄の先端を丸いホゾ状にして差し込んでいる。樹種は曲物に適している針葉樹。材は全て柾目。柄、クギが底板は２か所、木クギで固定している。	
第676図	27建 W313	木製品 柄杓		長 幅	51.3 13.9	厚	15.6	– マツ科	側板が上下に割れないために半円状の補強材がつけられている。綴は桜皮６段。柄が曲げ物から抜けないように竹クシを打っている。材は針葉樹。	PL.237
第677図	27建 W314	竹製品 竹製品		長 幅	26.6 7.0	厚	9.9	–	タバコ盆の灰落としか。口縁部縁取り。本来底の節はあったと思われる。	
第677図	27建 W315	竹製品 –		長 幅	16.7 7.9	厚	4.6	–	竹製の物入れか。墨が厚く付着している箇所あり。筆等の入れ物か。外側にノコギリ切溝、内側にノコギリの痕と刃物による溝が残る。底部は欠損しているが、本来は存在しており、欠けたものと思われる。竹の直径は約6.5cm。	PL.241
第677図	27建 W316	竹製品 不明		長 幅	20.3 7.1	厚	7.0	–	口唇部斜の縁取りなし。底面の節は中央部で欠損しているが、本来はあったものと思われる。地中に差し込んで使用した花指か。根に近い部分の真竹と思われる。	
第677図	27建 W317	竹製品 箸入れ		長 幅	38.0 4.0	厚	–	–	竹製の箸入れ(水筒の転用か？)とその中に入っていた箸５本。上下の節部分に竹枝の根元が残る。枝のない竹の下の部分ではなく、枝が出始めている竹を使用。上下の節は破損しており、大部分が残っていない。他の箸入れには空いていない穴が空いている。箸は全て渋下地なし。(１)１本は完形で長さ23.5cm。表面黒褐色の薄い漆か。(２)は一部に赤色漆が黒褐色漆の上から塗られている。先端部欠損。(３)は黒褐色漆。先端部欠損。(４)黒褐色漆。(５)小破片。	PL.240

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第677図	27建 W318	水筒？		長 幅	30.4 5.0	厚 重	4.1	–	水筒と思われる。５つに割れている。節は割れているか元々残っていたと思われる。	
第677図	27建 W319	竹製品 箸？		長 幅	24.0 2.0	厚	–	–	東側の割れている板戸上から出土。竹筒(長さ16.5cm太さ２cm)の中に文字の書かれた竹製の幅広の箸のようなものが２個入っていた(長さ23.6cm太さ１cm)。文字は判読できなかった。竹筒は他の箸入(W317長さ34cm太さ3.8cm)(W318長さ25cm太さ4.6cm)より短く細い、竹は根元に近い部分ではなく上の細い部分であり断面が凹状となっている。	
第678図	27建 W320	竹製品 水筒		長 幅	43.5 5.3	厚	7.8	–	大きな水筒と思われる。四つに割れており、接合で１個となる。竹の天の部分を上にして、１節分(長さ33cm)の中に水を貯えることができる。容積は約１ℓである。上端を1/3ほど切って、残った側面の左右に穴があけられている。ここにヒモを通して吊り下げたか。上端、注ぎ口部分に水筒の中を出して飲んだものと思われる。上下にある節は割れている。上節の注ぎ口部分に穴があけられていたと思われる。水筒は２本重なった状態で割れて出土している。	PL.240
第678図	27建 W321	竹製品 水筒		長 幅	49.9 6.1	厚	8.0	–	W320とほぼ同じ。容積は約１ℓ強。	
第678図	27建 W322	木製品 柄杓の柄		長 幅	64.4 2.0	厚	1.5	– ツガ属	芯去り材。柾目板。カンナ削り。先端部を削って細くしている。	
第679図	27建 W323	木製品 櫛		長 幅	12.4 3.3	厚	1.41	–	歯の数の密度は中密。歯が斜めに曲がっている。櫛歯の数は１cm幅につき６本。福利久。	PL.242
第679図	27建 W324	木製品 櫛		長 幅	12.1 3.5	厚	0.6	–	曲線の少ない細長い櫛である。厚さも他の櫛が１cm前後と厚いのに比較して0.6cmと薄い。剥げてはいるが、茶色の漆が歯の部分以外全面に塗られていたものと思われる。一部残っている茶色漆の下地に渋下地なし。黒く塗られていない。長さ15cm前後と長い櫛だと思われる。歯の数の密度は中密。櫛歯の数は１cm幅につき６本。利久。	PL.242
第679図	27建 W325	木製品 櫛		長 幅	11.5 3.7	厚	1.0	–	歯の数は中密か。51建W67より幅が１cm近く短く、両端の高さが１cm以上高い。27建はこの型の櫛が多い。櫛歯の数は１cm幅につき６本。福利久。	PL.242
第679図	27建 W326	木製品 櫛		長 幅	9.3 4.1	厚	0.8	–	長方形に近い。歯と身の幅は身の方が幅広い櫛である。歯が密で１cm幅に10本と最も多い。櫛歯の数は１cm幅につき10本。お六片歯。	PL.242
第679図	27建 W327	木製品 櫛		長 幅	12.3 3.9	厚	1.0	–	歯の数の密度は中密。櫛歯の数は１cm幅につき５本。福利久。	PL.242
第679図	27建 W328-1	木製品 櫛		長 幅	8.0 4.3	厚	1.0	–	中歯。一緒に取り上げられたW328は細歯、別物である。櫛歯の数は１cm幅につき５本。利久。	PL.242
第679図	27建 W328-2	木製品 櫛		長 幅	2.4 3.5	厚	0.6	–	歯の数の密度、密。櫛歯の数は１cm幅につき10本。福利久。	
第680図	27建 W329-1	木製品 下駄	完形	長 幅	21.6 7.8	厚	4.0	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。	
第680図	27建 W329-2	木製品 下駄		長 幅	21.5 8.6	厚	3.8	–	縄の鼻緒の残っている下駄である。	PL.243
第680図	27建 W330	木製品 下駄	完形	長 幅	21.3 7.0	厚	3.5	– トチノキ	刳り下駄の完形品。一部に渋下地が残る。丸型である。	
第680図	27建 W331	木製品 下駄	完形	長 幅	21.2 8.3	厚	4.1	–	刳り下駄の完形品。塗装は歯の外側に渋下地と黒漆か。黒漆と思われる部分少し残る。	
第681図	27建 W332	木製品 下駄	完形	長 幅	22.2 8.4	厚	3.5	–	刳り下駄の完形品。一部黒色塗装あり、渋下地があったものと思われる。全体的に白い。ノコギリ歯溝残る。丸型である。	PL.243
第681図	27建 W333	木製品 下駄	完形	長 幅	21.4 7.6	厚	3.6	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。一部に渋下地が残る。丸型である。材はハンノキ。	
第681図	27建 W334	木製品 下駄	完形	長 幅	21.4 8.1	厚	3.4	–	刳り下駄の完形品。全体的に白い。丸型である。歯の外側に黒色塗装、渋下地か。黒漆は残っていない。	PL.243
第682図	27建 W335	木製品 下駄	完形	長 幅	20.7 8.0	厚	4.2	– カエデ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。散孔材。	
第682図	27建 W336	木製品 下駄		長 幅	20.4 7.6	厚	2.4	– ハンノキ属	後ろの鼻緒の穴は、後ろの歯ギリギリではなく、少し離れている。丁寧なつくりの下駄はこのようなことはなかった。素人がつくった下駄と思われる。２つに割れている。多く使用されている。材は散孔材。	
第682図	27建 W337	木製品 下駄	完形	長 幅	21.8 8.1	厚	4.5	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。塗装全くなく、全体的に白い。丸型である。材は散孔材。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第682図	27建 W338	木製品 下駄		長 幅	21.7 7.5	厚	4.6	– ハンノキ属	木材の節のある木の表面に近い材を利用してつくった下駄である。材としては不良であるが、加工して下駄としている。鼻緒の一部が残っており、使用していたものと思われる。節により歪んでいる個所や木の表皮がとれた状態の個所がある。	PL.243
第683図	27建 W339	木製品 下駄	完形	長 幅	20.2 7.2	厚	4.2	– トチノキ	刳り下駄の完形品。塗装全くなく、全体的に白い。丸型である。３つに割れている。やや雑なつくりである。圧痕、押されてへこんでいる箇所が残る。	
第683図	27建 W340	木製品 下駄		長 幅	21.1 7.5	厚	3.3	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。	
第683図	27建 W341	木製品 下駄		長 幅	21.5 7.5	厚	3.8	– ヤナギ属	刳り下駄。部分的に渋下地と思われる黒色残る。	
第684図	27建 W342	木製品 下駄	ほぼ完形	長 幅	21.5 8.1	厚	3.5	– ハンノキ属ハンノキ亜属	刳り下駄の完形品。前歯外面黒色、渋下地か。全体的に白い。丸型である。割れたものを３個接合でほぼ完形に。	
第684図	27建 W343	木製品 下駄	完形	長 幅	21.5 7.6	厚	3.5	– ハンノキ属	刳り下駄の完形品。塗装は全くなく、全体的に白い。丸型である。	
第685図	27建 W344	木製品 下駄		長 幅	23.7 8.0	厚 重	8.4 –	– クリ	丸型連歯ゲタ。未製品。歯の高さが７cmと高い。歯は差歯と違いほぼ垂直。歯が高裏部に接している場所の厚さは3.5cmと厚い。前壺や横緒孔なし。	
第685図	27建 W345	木製品 下駄		長 幅	21.4 8.4	厚	4.8	– ハンノキ属	台部分は、ほぼ垂直で全体的に少し丸くなっている。歯が少し後ろに傾いている。台の裏面は削られていない。両端をノコギリで切って中央を取り除いている。丸ノミは使用していない。全体に色の白い樹種。クリではない。３か所に割れている。角型に近いが、わずかに丸味を持つ。この連歯ゲタの大部分はクリ材を使用しているが、これは散孔材、おそらくハンノキを使用している。これまでに例のないゲタである。クリ材なら恐らく割れてなかったと思われる。	PL.243
第685図	27建 W346	木製品 下駄		長 幅	19.8 8.9	厚	5.1	– クリ	丸型連歯ゲタ。歯は垂直に付けられている。台の上、下面とも表面が風化しており残り悪い。	
第686・ 687図	27建 W347	木製品 樽		長 幅	31.7 32.1	厚	33.8	–	北壁２の内側から出土。ほぼ完形の樽である。底板・側板・蓋板・蓋板の栓、底板外側付近に３本のタガ、蓋板外側付近に２本のタガがほぼ完全な形で残っていた。底板・蓋板は、厚さ３cmで厚い芯持材である。ともに木裏が下面、木表が上面となっている。側板は板目取りとしている。側板と蓋板の外縁部は、断面が垂直でなく上端を少し、下端を多く削って凸状に加工している。底板が側板と直角に接する接合部は面ではなく線に近い。この状態で外からタガ締めて水漏れを防いでいる。	PL.235
第688図	27建 W348	木製品 栓		長 幅	10.9 4.3	厚	4.3	– 針葉樹	栓と思われる。樽の側板には、節の部分までが差し込まれていたか。節までの幅は4.5cm。	
第689図	27建 W349	木製品 樽		長 幅	44.7 46.2	厚	2.6	– スギ	樽の底板だと思われる。	
第689図	27建 W350	木製品 桶		長 幅	28.7 43.7	厚	1.8	– スギ	板は底板側板とも柾目。側板底部に底板の痕跡。外面底部近くに２本？、口縁部近くに近くに１本のタガ痕あり。側板の数は14枚。	
第689図	27建 W351	木製品 桶		長 幅	78.0 14.8	厚	2.5	–	桶の側板の一部か。板は桶と同じような曲線で加工されている。木取りは柾目取りであり、桶に共通する。 上部側面が円形に削られている。他に出土例がなく名称や用途不明である。	
第689図	27建 W352	木製品 桶		長 幅	53.7 64.0	厚	3.3	– スギ	底径27cm、側板の高さ32cmの側板15枚で作られた桶と思われる。底板は板目、側板は柾目である。	PL.235
第690図	27建 W353	木製品 桶		長 幅	30.8 16.8	厚	17.4	– スギ	底径12cm、口径15cm、側板の高さ29cm、側板９枚で作られた桶である。底板は2.5cm前後と厚い。底板下側に２本、蓋板部分に１本のタガが回っている。全体に残りが良好で解体できない。上蓋に栓を差し込む直径３cmの円形の穴がある。樽の多くは板目取りであるが側板は柾目取りであり、桶として使われていたと思われる。ミズオケか。	PL.235
第690図	27建 W354	木製品 蓋		長 幅	16.5 4.4	厚	17.6	– マツ科	鉄クギ３本、蓋とつまみを打ってつないでいる。加工は全体的に荒く、素人が作っている。	PL.235
第690図	27建 W355	木製品 桶のふた		長 幅	52.2 55.7	厚	1.4	– マツ	桶の蓋。厚さは１cm前後と薄い。木取りはほぼ柾目取りである。年輪と直行する方向で４列穴が多く開いている。蓋のつまみ２列を固定した時の釘、あるいはひもを固定した時の穴と思われる。両端の断面は垂直でなく下端が削られている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第690図	27建 W356	木製品 栓	完形	長 幅	18.4 3.3	厚 重	3.6 41.1	– –	中空の栓と一方の端部が尖る栓が組み合わされる。中空の栓は樽の内側、外側をつなげるものと見られる。中空の栓の外側口部分に金属の口金状のものが付けられている。先端が尖る栓は上部は断面八角形。中段は八角形だがやや丸みを帯び、下部は円形。	PL.244
第690図	27建 W357	木製品 栓		長 幅	11.9 2.5	厚	1.7	– マツ	樽のセンと思われる。丸竹と木製の栓(マツ)で１組となっている。栓は頸部が白くなっており、この部分で竹筒と密着か。密着部分の竹に幅0.5㎝、奥行1.2㎝の掘り込みあり、注口か。	
第690図	27建 W358	木製品 栓		長 幅	7.7 1.8	厚	1.8	–	方形に近い。丸ではない芯材。丸に近いが方形を残す。上部分はフチ取りされ、多面形に削られている。針葉樹。	
第690図	27建 W359	木製品 桶木柱		高 径	4.2 3.6	厚	–	–	桶の木柱と思われる。同心円状の材(針葉樹)を使い、上部が下部より太くなるように整形、表面は刃物で丁寧に整形。	
第691図	27建 W360	木製品 桶		長 幅	73.8 29.1	厚	2.2	– スギ	手洗い桶か。側板、底板全て柾目。側板外側に２か所タガ痕あり。側板の数は19枚。	PL.234
第691図	27建 W361	木製品 手桶		長 幅	31.4 48.0	厚	1.7	– ヒノキ科	手桶。１部側面欠損。すべて柾目。年輪が細かい。針葉樹、スギか。内面黒色。	
第691図	27建 W362	木製品 桶		長 幅	– –	厚	–	– スギ	直径22.3㎝、高さ9.3㎝の浅い楕円形の桶である。側板上下２か所にタガの痕跡残る。	PL.234
第691図	27建 W363	木製品 樽	ほぼ完形	長 幅	27.3 28.4	厚	1.4	–	底板３枚、厚さ1.8㎝、板目。うち１枚は柾目に近い。側板17枚、幅４～8.5㎝、厚さ0.9㎝、全て板目。側木内面、底面より1.5㎝上に幅１㎝の底板の痕跡。側木外面、底面より５㎝の高さまでタガ痕。口縁部に幅５㎝のタガ痕。材はスギか。	
第692図	27建 W364	木製品 手桶		長 幅	26.0 42.5	厚	1.5	– スギ	手桶である。底板は直径25㎝、厚さ1.5㎝と薄い。側板は長さ20.5㎝と42㎝の２種類ある。長い側板上部には長方形の長さ２㎝、幅１㎝の小さな穴がある。取手の横板が差し込まれていたものと思われる。木取りは底板と側板とも柾目である。	
第692図	27建 W365	木製品 桶の側、蓋		長 幅	40.5 15.4	厚	1.5	– スギ	側板の厚さ0.7㎝、幅3.7～7.7㎝と狭い。底部の厚さは1.5㎝、側板の倍。側板底面下部に底板の痕跡。側板外側に４本のタガ痕あり。底板は３枚板目、１枚柾目。	
第692図	27建 W366	木製品 桶		長 幅	37.8 27.2	厚	1.2	–	側板は全て柾目。底板は板目。把手をつけた痕跡なし。側板の数は18枚。楕円形の桶である。	
第692図	27建 W367	木製品 蓋		長 幅	25.9 25.7	厚	1.0	– モミ属	蓋もしくは底板か。柾目。表面に鉄サビと固い物質付着。曲物の底板か。	
第693図	27建 W368	木製品 盥	完形	長 幅	42.7 45.0	厚	15.4	– スギ	完形の盥である。底板は板目で側板は柾目。外面にタガが３段。スギ。	PL.236
第693図	27建 W369	木製品 樽		長 幅	26.8 32.5	厚	9.7	– スギ	側板の厚さ0.6～0.8㎝と薄く、幅も４～11.5㎝と狭い。一方で底板は厚さ2.5㎝と側板の４倍近く厚い。一見セットとしてはおかしいと思うが、写真等による出土状態から間違いない。蓋は天井部にあり、厚さは1.5㎝前後で底板より１㎝薄いが、側板より２倍ほど厚い。底板は底面より４㎝ほど高い位置。木取は全て柾目。側板外面のタガ痕は残りが悪い。確認できる所で上端から幅4.5㎝。タガが２本あったか。下部外面は下から10.5㎝までタガの痕あり。４本前後のタガか。	PL.235
第694図	27建 W370	木製品 団扇		長 幅	38.6 1.3	厚 重	0.6 –	芯持材 クリ	ほぼ完形品の団扇である。取り上げ後の実測図である、写真で数えると、歯数は32本であった。平柄である。	PL.240
第694図	27建 W371	木製品 団扇		長 幅	30.2 14.2	厚	1.0	–	廊下の板物の上から出土。一文字状の竹が柄の部分に付くうちわであり、越生団扇と共通する。東宮遺跡１号建物№250がこの団扇であり、良好な状態で出土している。	PL.240
第694図	27建 W372	木製品 三味線	棹	長 幅	81.0 3.3	厚 重	2.0 –	–	三味線の棹、糸蔵、天神部分と思われる。胴部は残っていなかった。全長は80㎝、全体に加工は荒削りで、丁寧な仕上げはしていない。糸蔵部分は内径６×1.7の長方形に削り、両側に３本の穴がある。(１・２・３)の糸巻の穴があり、左側面、中央の穴が大きく、左右の１、３の糸巻は逆方向から指し込まれている糸巻であり、穴は小さい。糸巻から天神部分は大きく曲がっている。この部分は自然木の曲がりである。あて材を利用している。裏面の加工も荒い。	PL.245
第695図	27建 W373	木製品 六角独楽	一部欠損	長 幅	15.9 3.5	高 重	6.0 –	–	６面に鍵、丁字、三宝、小槌、笠、蓑の宝尽くしの図案が描かれている。独楽は上下を円形の木の板で作り周囲に薄い板を回して外面を六角形に作っていた。そのため内部は空洞である。出土時には板はほとんどが乾燥により劣化していたため推定復元をおこなっている。心棒は持ち手部分が細く、下端部に向けて太くなる。	PL.245

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第696図	27建 W373- 1	木製品 木札(笠)	完形	長 幅	8.7 5.5	高 重	0.2 18.8	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。表裏で向きを縦と横で使用しており、図案が90度回転する。札を縦に使用した面は札に図案が収まり切らなかったようにみえる。柾目の板を使用している。	
第696図	27建 W373- 2	木製品 木札(蓑)	完形	長 幅	8.9 5.6	高 重	0.2 17.3	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。特に房の表現が表と裏で異なる。一部墨が消えかかっている。柾目の板を使用している。	
第696図	27建 W373- 3	木製品 木札(鍵)	完形	長 幅	8.8 5.6	高 重	0.2 16.5	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。表裏ともに鍵が描かれているが、向きや房の表現は異なる。柾目の板を使用している。	
第697図	27建 W373- 4	木製品 木札(三宝)	完形	長 幅	8.8 5.8	高 重	0.3 18.9	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。表裏で３つの宝珠が盤に乗っている図案と盤がない図案の２種類となっている。盤に乗っている図案の方が宝珠が細い線で描かれている。柾目の板を使用している。	
第697図	27建 W373- 5	木製品 木札(丁字)	完形	長 幅	8.9 5.6	高 重	0.3 17.4	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。表裏の図案は変わらないが、大きさは異なる。柾目の板を使用している。	
第697図	27建 W373- 6	木製品 木札(小槌)	完形	長 幅	8.8 5.7	高 重	0.3 17.1	–	重なって出土した６枚組の札の一つ。表裏では房の表現が異なる。また、小槌の外面に木目の描き方に違いがある。柾目の板を使用している。	
第698図	27建 W374- 1	木製品 木人形頭①	一部欠損	長 幅	2.7 1.6	高 重	1.6 0.7	–	土の塊として残存している。髪や顔の表現がかろうじて確認できる。木の先端に取り付けられている。	
第698図	27建 W374- 2	木製品 木人形頭②	一部欠損	長 幅	3.6 1.9	高 重	1.3 1.6	–	土の塊として残存する。顔の表現はほぼわからない。棒状の木質の端部に取り付けられている。もう一方の端部は斜めに切り落とされている。切り落とされている端部から上に0.7㎝の所に横方向の金属線の痕跡が見られる。	
第698図	27建 W374- 3	木製品 大部品③	完形	長 幅	10.5 2.0	高 重	1.3 4.7	–	断面楕円形の部品とみられる木製品。切り口が平らな端部はやせが生じている。木釘の穴が残っているか。もう一方の端部近くには切り込みが入れられており、金属線が残存している。金属線の先端には土の塊が付着している。	
第698図	27建 W374- 4	木製品 大部品③	完形	長 幅	10.5 2.2	高 重	1.4 8.4	–	断面楕円形の部品とみられる木製品。切り口が平らな端部があり、もう一方の端部近くには切り込みが入れられており、金属線が残存している。金属線の先端には土の塊が付着している。	
第698図	27建 W374- 5	木製品 大部品①	完形	長 幅	8.2 1.8	高 重	1.1 4.6	–	断面楕円形の部品とみられる木製品。切り口が平らな端部には木釘のようなものが木口の中心に残存する。もう一方の端部近くには切り込みが入れられ、金属線が取り付けられている。	
第698図	27建 W374- 6	木製品 大部品②	完形	長 幅	9.6 2.0	高 重	1.1 2.9	–	断面楕円形の部品とみられる木製品。切り口が平らな端部はやせが生じている。もう一方の端部近くには切り込みが入れられている。	
第699図	27建 W374- 7	木製品 小部品①	完形	長 幅	2.0 0.7	高 重	0.8 0.1	–	断面楕円形の小さな木製品。長辺部に小さな貫通する穴が開けられている。	
第699図	27建 W374- 8	木製品 小部品②	完形	長 幅	2.6 0.7	高 重	0.7 0.2	–	錆が付着する小さな木製品。一方の端部は段がつけられ斜めに切り落とされている。もう一方は木口部分に錆が付着し、金属線の痕跡が確認できる。	
第699図	27建 W374- 9	木製品 小部品③	完形	長 幅	2.1 0.6	高 重	0.6 0.2	–	長辺の１か所に穴が開けられている。一方の端部は斜めに切り落とされており、もう一方は細い金属線が確認できる。	
第699図	27建 W374- 10	木製品 小部品④	完形	長 幅	3.0 0.5	高 重	0.6 0.3	–	錆が付着する小さな木製品。一方の端部は斜めに加工され、一方は木口部分に錆が付着していることから金属片が含まれるとみられる。	
第699図	27建 W374- 11	木製品 板部品②		長 幅	4.8 3.3	高 重	0.4 5.8	–	長辺の中央部のほぼ等間隔に２か所穴が開いており、その内１つには小さな木片が刺さっている。用途不明。	
第699図	27建 W374- 12	木製品 板部品⑤	完形	長 幅	3.6 3.0	高 重	0.3 1.8	–	中央に近い２か所にややずらして穴が開けられ、有機質で２つの穴がつながっている。	
第699図	27建 W374- 13	木製品 板部品④	完形	長 幅	5.4 4.4	高 重	1.2 5.9	–	墨書が残るやや大きめの板。２か所に穴が開けられ、１か所は縁に近くもう１か所は中心に近い。中心に近い１か所には木釘のようなものが残存している。	
第699図	27建 W374- 14	木製品 板部品①		長 幅	4.7 3.6	高 重	3.0 9.0	–	３か所に穴が開いている木の板。３つの穴の内２か所に小さな木の棒が刺さっており、２本の棒の長さは異なる。用途不明。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第699図	27建 W374-15	木製品 板部品⑦	完形	長	4.5	高	0.3	–	３片に割れた板。角、中心近く、縁近くの３か所に穴が開けられている。柾目のやせが見られる。	
				幅	3.3	重	1.5			
第699図	27建 W374-16	木製品 板部品⑥	完形	長	3.7	高	0.4	–	中央に近い２か所にややずれて穴が開いている。木釘のような木製品が穴の内部に残存している。	
				幅	3.2	重	2.6			
第699図	27建 W374-17	木製品 板部品⑧	完形	長	4.7	高	0.9	–	縁近くの３か所に穴が開けられている。内、１か所に木釘のような木片が残存する。	
				幅	3.2	重	3.2			
第699図	27建 W374-18	木製品 板部品③		長	4.0	高	0.5	–	やや厚めの木の板。同様の他の板よりやや小ぶりとなっている。	
				幅	4.6	重	7.6			
第700図	27建 W375	木製品 織機		長	70.6	厚	4.9	–	機織機の一部と思われるが、不明な部材である。	PL.232
				幅	8.9					
第700図	27建 W376	木製品 機織りの一部か？		長	61.4	厚	3.1	–	用途名称不明。表裏ともチョウナで加工。ホゾ穴２個。	
				幅	13.2					
第700図	27建 W377	木製品 織機		長	55.9	厚	2.7	–	織機まねきを受ける軸か。	
				幅	5.0					
第700図	27建 W378	木製品 コモ編台		長	68.4	厚	3.7	–	表面チョウナ加工。裏面チョウナ加工なし。荒い作り。	PL.232
				幅	8.2					
第700図	27建 W379	木製品 機織台か？		長	121.6	厚	4.3	– クリ	地機の台部分の一部と思われる。一部焦げて黒くなっている。	
				幅	6.2	重				
第701図	27建 W380	木製品 糸枠　枠木		長	36.4	厚	3.2	– スギ	横木を固定するための栓は上側の左側、下側の右側に各１個あり、反対側まで貫通している。栓は竹ではなく木。材は針葉樹。	
				幅	2.5					
第701図	27建 W381	木製品 糸枠　枠木		長	36.2	厚	3.1	– マツ科	一方の端は、ホゾ穴部分から下が割れて欠損、ホゾ穴から上の部分の残る。もう片方の端、木栓のホゾ穴なし。横木を固定するための栓は使用していない。黒い灰が付着している。	
				幅	2.7					
第701図	27建 W382	木製品 糸車		長	18.9	厚	1.5	–	糸枠の部材である。	PL.239
				幅	18.6					
第701図	27建 W383	木製品 糸車		長	18.9	厚	1.5	–	糸枠の部材である。	
				幅	18.6					
第702図	27建 W384	木製品 火打ち入れ箱		長	28.9	厚	7.5	–	両方とも底部が火を受けて炭化している。着火剤(炭)が入れられ、火打石からの火を受けて着火していたものを思われる。内部に灰は残っていない。蓋の底面は炭で真っ黒になっている。	PL.238
				幅	12.3					
第703図	27建 W385	木製品 こね鉢		長	54.8	厚	3.5	– ケヤキ	直径54cmの大きなコネ鉢である。一部欠損しているが、残りは良好である。底部外面に筵が付着している。	
				幅	35.6					
第703図	27建 W386	木製品 竹		長	48.7	厚	0.8	–	上端が弓のように加工されているが、用途名称不明。裏面の加工が雑である。	
				幅	2.0	重				
第703図	27建 W387	竹製品 竹べら？		長	31.4	厚	0.5	–	竹べらか。内外面に黒、茶、赤色の漆付着。漆を塗るときに使用したものか。	
				幅	2.1					
第704図	27建 W388	木製品 戸棚の敷居		長	168.3	厚	3.5	– モミ属	大きな戸棚である。敷居の長さ168cm、高さ約72cm、奥行き約60cm。表側に敷居と鴨居(２本溝長さ154cm)があり、引き戸２枚(幅約79cm、引き戸両側に立て縦桟を加える)がある。２枚の引き幅を加えると158cmとなり、敷居の溝長さ154cmよりcm４ほど長いこの部分が２枚の引き戸が重なる部分と思われる。引き戸は下桟と板戸の最上部から22cm下がった位置に上桟が１本打ち付けられていた。敷居・鴨居・縦横方向の桟木等は、ホゾ組で精巧に組まれていた。側面の板は桟木に掘られていた溝に組み込まれていた。	
				幅	8.3	重				
第704図	27建 W389	木製品 戸棚の鴨居		長	171.3	厚	5.3	–	敷居であるW388上の鴨居である。引き戸が組み込まれる溝の深さは、敷居が0.5cm鴨居１cmで鴨居の溝の深さは敷居の倍である。両端に左右の柱を受ける切り込みと枘穴が掘られている。上面片側に天井の桟木を受ける２個の枘穴が等間隔に掘られている。	
				幅	8.2	重	–			
第704図	27建 W390	木製品 角材　戸棚		長	162.3	厚	2.0	–	戸棚下枠奥の横木と思われる。戸棚正面の敷居や鴨居より細い材を使用している。W389とほぼ同じ位置に枘穴あり、縦方向の桟木が組まれるものと思われる。	
				幅	3.4	重	–			
第704図	27建 W391	木製品 戸棚上枠横木		長	59.9	厚	4.8	–	戸棚上枠左の横木と思われる。両端部分に正面の鴨居(W388)奥の横木さらに縦方向の左側の柱(W393)と奥の柱を組み込む加工あり。	
				幅	59.5	重	–			
第704図	27建 W392	木製品 戸棚　縦の柱		長	61.8	厚	4.8	–	戸棚右側手前縦方向の柱と思われる。奥の側面に側板を受ける溝あり、全体に残りが悪いが、左側の柱W393と対応する柱と思われる。	
				幅	7.3	重	–			

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第705図	27建 W393	木製品 縦の柱		長 幅	62.5 7.7	厚 重	7.2 –	– –	戸棚左側手前縦方向の柱と思われる。奥の側面に側板を受ける溝あり、上下の枘は残っていない。中央部にW394の横木を受ける枘穴あり。右側の柱W392と対応する柱と思われる。	
第705図	27建 W394	木製品 戸棚の横木		長 幅	42.9 3.8	厚 重	2.7 –	– モミ属	戸棚左側横方向の細い材と思われる。両端に縦方向の柱に差し込む枘あり、側面に側板を固定するための釘の跡が多く残っている。	
第705図	27建 W395	木製品 戸棚の横木		長 幅	– –	厚 重	– –	–	戸棚右側横方向の細い材と思われる。両端に縦方向の柱に差し込む枘あり、側面に側板を固定するための釘の跡が多く残っている。	
第705図	27建 W396	木製品 縦の柱		長 幅	32.2 6.9	厚 重	5.8 –	–	戸棚右側奥縦方向の柱と思われる。奥の側面に側板を受ける溝あり、全体に残りが悪い。	
第705図	27建 W397- 1・2	木製品 戸棚　引戸		高 幅	63.0 75.0	厚 重	0.4 –	–	戸棚の板戸２枚である。１枚の戸板の大きさは幅75㎝高さ63㎝である。戸板は３枚の板の外側に底・両脇・上端から下1.8㎝の位置に細い桟木を釘で打ち付けて作られていた。底の桟木は２枚とも残っていなかった。他の板戸同様に上端に桟木は打たれていなかった。	
第708図	27建 W398	木製品 天秤棒?		長 幅	114.9 5.5	厚	2.4	– カエデ属	表面全面チョウナ。カンナ使用なし。	
第708図	27建 W399	木製品 自在鍵		長 幅	145.1 6.7	厚	6.0	–	自在鍵。竹製。中は空洞、外面は煤で黒色。中のカギは細い木製で下半分欠損している。天井からつるすために両側に２個穴があけられている。	
第708図	27建 W400	木製品 自在鉤		長 幅	28.1 7.7	厚	2.7	– ハンノキ属	上面は煤の付着多く、下面は煤の付着少ない。材は広葉樹、散孔材か。	
第708図	27建 W401	木製品 自在鍵？		長 幅	23.5 6.8	厚	2.0	–	クギが３か所残っている。上面は煤なし。下面煤多い。自在鍵と思われるが不明。	
第709図	27建 W402- 1	木製品 自在鉤		長 幅	33.7 2.6	厚	2.6	– モミ属	上面にはほとんど煤が無く、下面は厚く煤が付着している。コナラ。	
第709図	27建 W402- 2	木製品 自在鉤		長 幅	29.1 6.3	厚	2.5	– ハンノキ属	W406同様な自在鉤と思われる。	
第709図	27建 W403	木製品 火打金の柄		長 幅	12.4 3.3	厚	1.7	–	火打金の柄である金部分は残っていなかった。上部に小さな穴が開いている、ひもを通すための穴と思われる。	
第709図	27建 W404	木製品		長 幅	10.7 11.0	厚	2.1	–	行灯の明かりの受け皿として使われたものか。年輪細い。	
第709図	27建 W405	木製品 鎌差し		長 幅	– –	厚	–	–	鎌を板に空いた空間に差し込んで保管した板。	
第710図	27建 W406	箕		長 幅	54.8 35.1	厚	2.3	–	ほぼ完形の箕である。内面を上にして出土した。竹を密に組んでいる。束約２mにほぼ完形の箕(W407)が出土している。	
第710図	27建 W407	箕		長 幅	61.2 40.6	厚	2.1	–	ほぼ完形の箕である。外面を上にして出土した。西約２mにほぼ完形の箕(W406)が出土している。	
第711図	27建 W408	竹籠		長 幅	44.4 40.1	厚	17.8	–	折り曲がっているが、竹製のカゴと思われる。	PL.241
第711図	27建 W409	ホウキ		長 幅	63.2 20.2	厚	3.7	–	草ホウキと思われる。箕に接して出土している。	
第711図	27建 W410	木製品+金属製品 籠	ほぼ完形	縦 横	22.0 18.4	高	11.0	–	カゴ内下部にキセル吸い口と銭貨、火打ちがねが入っていた。竹を編んだ籠。口の部分は横方向に10本程度まとめてねじられた竹材に縦方向の竹材を絡ませて整形している。体部はござ目編み。底部は崩れており、詳細不明。	PL.241
第711図	27建 W411	竹製品 籠		–	–	–	–	–	口縁部が欠損している籠である。膳弱であり実測でなく写真を掲載。	
第712図	27建 W412	木製品 風呂鍬	完形	長 幅	119.2 50.1	厚	3.3	–	柄の下端部は少し幅広く加工し抜けないようにしているが、幅１㎝以上の帯状の高まりなし。柄と鍬の角度60度。柄、トラフあり、環孔材、放射組織あり、広葉樹。	
第712図	27建 W413	木製品 鍬		長 幅	104.2 46.1	厚	3.2	–	W412とほぼ同じと思われる。柄が風化して残りが悪く、刃先が残っていない。	PL.237
第713図	27建 W414	鍬	完形	長 幅	風呂 48.0 風呂 12.2	高 重	108 1867.4	–	完形の鍬。刃は片刃。刃先と風呂装着部分の金属を接合している様子が確認できる。柄は風呂と別作りで、風呂に当たる部分はきっかきがあり、固定できるようになっている。柄の装着後、くさびを打ち固定する。	PL.237
第713図	27建 W415	木製品 柄		長 幅	119.0 8.0	厚	2.9	– コナラ属コナラ節	鍬の柄完成品。材は環孔材。	
第713図	27建 W416	木製品 柄		長 幅	40.5 4.6	厚	2.5	– 広葉樹	鉄斧の柄と思われる。鉄斧の付着部分から割れている。	
第714図	27建 W417	木製品 自在カギ		長 幅	69.2 11.7	厚	3.4	– ハンノキ属	小さな材を用いた自在カギ。加工痕なし。	
第714図	27建 W418	木製品 柄		長 幅	45.7 4.5	厚	23.4	– クリ	幹と枝部分の分かれ目を利用して作られた柄と思われる。表面はチョウナ削り。鉄製の刃物をつけた痕跡なし。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第714図	27建 W419	木製品 木		長 幅	21.8 18.2	厚	3.9	– 	自在カギのような形。L字状の先端は切られており、延びていない、終わっている。表面チョウナで削っている。断面は方形で、全体的に丸より角を意識している。	
第714図	27建 W420	柄？ 		長 幅	46.9 81.4	厚	2.9	– コナラ属コナラ節	幹と枝でなく、１本の木を直角に曲げて柄としたものと思われる。石臼の柄として意識的に直角に曲げたものか。石臼の中に打込み面一部欠損している。	
第714図	27建 W421	把手 		長 幅	49.8 8.8	厚	3.1	– アワブキ属	石臼の把手と思われる。１本の枝の直角部分を利用。枝部分は長い把手。石臼への打込部分は幹。材は散孔材。	
第714図	27建 W422	木製品 		長 幅	60.7 13.6	厚	3.1	– 	柄。鉄付着痕跡あり。鉄鍬の刃がついていたか。環孔材。導管太く多数。	PL.236
第715図	27建 W423	木製品 エンガ		長 幅	104.3 18.3	厚	1.8	– サクラ属	全長106㎝の踏み鍬であり、先端鉄部以外は残り良好。表面に柄を固定するためのホゾ穴２か所と柄を挿入するホゾ穴あり、柄は付着していない。	
第715図	27建 W424	木製品 踏み鍬の柄		長 幅	135.3 4.5	厚 重	3.4	芯持材 クリ	踏鍬の柄の完成品である。全長134.8㎝、鍬を固定するためのホゾ穴が上下２か所ある。	
第716図	27建 W425	木製品 杵		長 幅	44.5 37.5	厚	11.2	– ハンノキ属	27号建物南の水場より出土した杵。杵部分に柄が差し込まれた状態で出土。杵は丸材、柄は角材、杵に柄を差込、両側からクサビを打込み固定している。天井部に刃物の痕跡あり。	
第716図	27建 W426	木製品 木槌		長 幅	35.5 12.9	厚	1.2	– ナラ類	小さな軽い木槌。頭部で柄は割れているが接合している。	
第716図	27建 W427	木製品 木槌		長 幅	36.5 12.6	厚	1.1	打部　カエデ属 柄　　サクラ属	頭部に表皮が付いている。	PL.244
第717図	27建 W428	木製品 木槌		長 幅	32.8 13.4	厚	11.4	– 	散孔材。放射組織多数。	PL.236
第717図	27建 W429	木製品 木槌		長 幅	34.0 6.7	厚	5.3	– カエデ属	軽い材が使われている。散孔材か。底面が風化している。	PL.239
第717図	27建 W430	木製品 木槌	2/3	長 幅	29.3 11.0	厚	8.0	– カエデ属	頭部表面に刃物痕、側面に加工痕が残る。	
第717図	27建 W431	木製品 臼	1/2	長 幅	52.1 52.4	厚	4.9	– ケヤキ	臼の約半分と思われる。上面は深さ21.5㎝、幅46㎝、掘り込んでおり、下面は深さ７㎝前後掘り込んでいる。	
第717図	27建 W432	木製品 杵		長 幅	67.4 10.3	厚	9.8	– 	両手で持つ杵。表面の多くは皮を剥いだ状態。加工痕跡なし。	
第718図	27建 W433	木製品 不明		長 幅	39.6 30.5	厚	2.7	– クリ	名称不明。あんどん上部の取っ手部分とも思われるが、十字の形にクロスしており不明。表面は全てチョウナ削り。	
第718図	27建 W434	木製品 不明		長 幅	11.9 4.4	厚	4.5	– ナラ類	用途名称不明。	
第718図	27建 W435	木製品 不明		長 幅	16.9 2.4	厚	2.4	– 環孔材ウルシ科	用途名称不明。中央部に長さ4.8㎝と長い茎の穴あり。	
第718図	27建 W436	木製品 木鉢		長 幅	19.3 17.5	厚	4.9	– トチノキ	全体的に歪んでいる。底面は削りすぎて穴が空いている。内外面とも荒削りの状態である。作る途中で穴が空いて使用しないで放棄したものか。材は広葉樹、散孔材。	
第718図	27建 W437	木製品 板		長 幅	23.9 17.6	厚	1.4	– 	用途名称不明。表面カンナ。クギの痕跡なし。	
第718図	27建 W438	木製品 不明		長 短	5.5 5.3	高	1.3	– 	花びらのように上面を加工している。下面に花びら状の加工なし。飾りのための部材か？広葉樹。	
第718図	27建 W439	木製品 板戸		長 幅	11.3 10.6	厚	2.3	– スギ	本文323頁(イ)東側の障子と板戸の頁で説明あり。	
第718図	27建 W440	木(小片) 不明		長 幅	5.3 4.0	厚	3.7	– 	名称用途不明。中央に太さ0.2㎜ほどの穴が貫通している。材は針葉樹。	
第718図	27建 W441	木製品 不明		長 短	5.2 4.2	厚	0.6	– 	小さな板の表面に「あみ」と墨書で書かれている。文字の左右に穴があり、中に竹ヒモが残る。裏面に文字なし。板材は針葉樹と思われる。	
第719図	27建 W442	木製品 不明		長 幅	63.0 7.0	厚	4.5	 	用途名称不明。ホゾ穴あり。	PL.245
第719図	27建 W443	木製品 穴あき板		長 幅	35.2 11.5	厚	1.2	– マツ科	戸棚または引戸か。表裏ともチョウナ削りなし。カンナか。	
第719図	27建 W444	木製品 板		長 幅	41.9 15	厚	1.6	– マツ科(仮)	用途名称不明。内外面チョウナ削り。	
第719図	27建 W445	木製品 板		長 幅	51.0 13.0	厚	3.7	– マツ科	W444と同じように２か所方形の穴あり。	ホゾ穴４あり
第719図	27建 W446	木製品 板		長 幅	67.5 10.5	厚	4.0	– 	用途名称不明。W444、W445に似ている。	ホゾ穴２あり
第719図	27建 W447	木製品 土台か？		長 幅	77.3 16.8	厚	7.8	半裁材 クリ	木製品の土台部分と思われる。中心からやや下に6.5×４㎝、深さ７㎝のホゾ穴がある。油絞り機等の土台か。	
第719図	27建 W448	木製品 不明		長 幅	77.8 19.8	厚 重	7.1 –	板目 クリ	名称用途不明。厚い板の中央に７×５、深さ6.5㎝のホゾ穴あり。表面は平ら。裏面は荒れている。	
第720図	27建 W449	木製品 木　加工品		長 幅	64.0 23.0	厚 重	18.0	芯持材 クリ	唐臼の上に置かれたものか。上面はきれいであるが、底面は風化して荒れている。チョウナ痕なし。1本の木を割って二つにした可能性もある。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第720図	27建 W450	木製品 板		長	47.0	厚	2.8	– マツ属複維管束亜属	用途名称不明。加工は表面全てチョウナ。	
				幅	12.5	重	–			
第720図	27建 W451	木製品 石臼の芯		長	11.8			–	石臼の内部から出てきたもの。芯を外した割材を使用している。一方の端部は段が付けられ、細くなる。もう一方はやや丸くなる。	
				幅	3.3	重	–			
第720図	27建 W452	木製品 板(加工あり)		長	35.6	厚	2.6	– クリ	クワの下の板部分。板が直角に入るように加工。上面は曲線、下面は直線。加工痕は不明。	
				幅	4.8	重	–			
第720図	27建 W453	木製品 糸枠 枠木		長	37.2	厚	2.8	– クリ	この上から糸枠出土。こちらとの接合不明。長さが37㎝と長い。この長さの枠木はW453の36㎝が近い。大・中、２種類の糸枠が存在していた。	
				幅	2.9					
第720図	27建 W454	木製品 台形		長	18.0	厚	6.4	–	台形の製品。上に物を置くための台か。底面を平にして置くと安定する。底面・両側面チョウナ。広い側面ノコギリ。	
				幅	10.0	重	–			
第721図	52建 W455	木製品 ワッパ		長	12.4	厚	12.4	– マツ科	材はスギか。重なる部分は口径の約1/4。つなぎ穴には桜皮を使用か。	
				幅	5.0					
第721図	52建 W456	木製品 底板		長	77.3	厚	2.7	底板 柾目・板目 クリ 木釘 削出 タケ亜科	表面は一部チョウナ痕が残るが、平らで丁寧に整形されている。裏面と側面は荒れている。３枚の板は右側３個、左側４個の竹クギでつながっている。	
				幅	76.8	重				
第721図	52建 W457	木製品 鍬		長	34.0	厚	1.7	– コナラ属コナラ節	鍬の底板部。金属部はなし。	
				幅	11.0					
第722図	53建 W458	木製品 鋤		長	95.4	厚	3.0	–	柄鍬の底板部。表裏とも多少の凹凸、チョウナ削りか。上面が木裏、下面が木表。	
				幅	18.5					
第722図	53建 W459	木製品 鋤	ほぼ完形	長	103.9	厚	2.3	–	柄鍬の底板部。表裏とも多少の凹凸、チョウナ削りか。上面が木裏、下面が木表。	
				幅	16.6					

屋敷外建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第723図	50建 W1	木製品 柱		長	305.0	厚	18.0	芯持材 クリ	１間×２間(南北方向に長い)掘立柱６本中南東コーナー部分の大きな柱である。自然木を95㎝と深く埋めている。地上には195㎝の長さ、上部はホゾがあり(13㎝)梁を受け、その上にケタがくるものと思われる。丸木の四周を削って平にしているが、端部分は丸くなっている。４か所ホゾ穴あり。横木棒を受けるもので、横木棒の外側は草壁か。ホゾの大きさは３㎝前後深さ2.5㎝。	PL.283
				幅	23.0	重	–			
第723図	50建 W2	木製品 掘立柱 下部		長	122.3	厚	15.9	芯持材 クリ	掘立柱の下部。長さ2.5mまで残っていたが、地上部の大部分は残りが悪く、一部しか取り上げられなかった。Pit３の柱は2.9mまで残っていた(地上部分2.1m)。クリの丸太を削って整形し、底面は平らに切られている。Pit１より出土。	
				幅	17.9	重	–			
第724図	51建 W1	木製品 柱		長	214.0	厚	11.0	芯持材 クリ	3/4下部分割れている３㎝四方の間渡桟木穴３か所(４か所中１か所欠か)上端は凸あり。元来曲がった木を柱として利用している。木の丸い部分も多くある。チョウナ痕全面にあり。	
				幅	10.0	重	–			
第724図	51建 W2	木製品 柱(掘立)		長	255.0	厚	13.0	芯持材 クリ	掘立柱である。下端は土中、上端にホゾ、側面に４個ホゾ穴あり。柱間は横棒で結んでいる、竹壁か。曲がった材を利用している。	
				幅	13.0	重	–			
第724図	51建 W3	木製品 柱		長	192.0	厚	12.0	芯持材 クリ	曲がっている丸木を加工して柱としている。特に曲がって出っ張っている部分を削り、薄くなっても削って、ほぼまっすぐにしている。ホゾ穴はほぞ直線となるように工夫しているが、直線にならなくとも柱としている。直線で削る必要のない部分は加工していない。上端はホゾ、下端はホゾ穴の下、土中に埋められている。ホゾは45～62㎝と間隔も一定しない。このホゾ穴に竹又は細い木を差して片側に草茎等をあて、その外側に竹を通して、しばって草壁としていると思われる。	
				幅	13.5	重	–			
第724図	51建 W4	木製品 柱		長	203.0	厚	12.0	芯持材 クリ	両側面に４個づつホゾ穴あり。ほぼ等間隔。上端にホゾ、中心から折れている。下端で堀立で土中で腐り残っていない。九木の一部加工したのみで、大部分九材のまま使用。枝部分と曲がっている部分のみ加工。	
				幅	15.0	重	–			
第725図	51建 W５	木製品 柱		長	225.4	厚	11.5	芯持材 クリ	51建の主柱と思われる。この建物の柱は、曲がっている材をほとんど加工することなく、一部を削り、柱の側面にホゾ穴を４か所(３×３、深さ2.5㎝)堀り、そこに丸竹を差し込み、草壁としている。下端は地中に埋めている。天井部は片側に寄せたホゾを作りだして、梁または桁と組ませている。	
				幅	13.5	重				

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第725図	51建 W6	木製品 柱		長 幅	222.0 15.0	厚 重	13.0 –	芯持材 クリ	下部分は土中、上端は凸で梁や木片等を受けている。貫はなく貫渡桟木穴４か所、穴間隔約57㎝。丸材の周辺を四角に削って平らにしているが、周辺部は丸い木表を残している。51建より４本出土しており、貫渡桟木穴の位置は全てほとんど同じ。	
第725図	51建 W7	木製品 柱		長 幅	208.0 13.5	厚 重	13.5 –	芯持材 マツ科	柱と思われるが不明。貫は４×11と他の細い貫３×12より太く短い力桁？内のち貫か。表面は少しチョウナと思われる加工痕残るが、丁寧に整形している。	
第725図	51建 W8	木製品 棒(杭)		長 幅	191.9 7.0	厚	5.8 –	芯持材 クリ	地上に出ている部分は160㎝前後と低い。表面は全く加工痕なし。上下の端のみ削っている。表面全体が荒れている。	
第726図	51建 W9	木製品 板		長 幅	91.0 36.0	厚 重	3.5 –	–	柾目の板。ほぼ水平の厚さ、裏面は荒れており、加工痕不明。側面は平らに整形されているが、加工痕不明。	
第726図	51建 W10	木製品 板		長 幅	48.0 30.5	厚 重	4.0 –	板目 クリ	木材の表面を薄く剥いだ材。表は木ハダのまま、裏面は剥いだまま加工なし。荒れて凸凹激しい。チョウナ、ナタ、またはヨキ等で切っている。	
第726図	51建 W11	木製品 板		長 幅	64.0 30.0	厚 重	1.5 –	板目 マツ	長さ64㎝と狭い板である。木の中心付近の材であり、表裏ともノコギリ、チョウナ痕なし。表に植物の茎付着、床板上に敷かれたものか。木表側の側は丸くなっており、木の表面に近い。木ハダが残って加工なし。	
第726図	51建 W12	木製品 板		長 幅	126.0 19.0	厚 重	7.5 –	半裁材 マツ	名称用途不明。一定の厚さの材であり、6.1×3.9㎝、深さ6.7㎝のホゾ穴あり。表裏面ともチョウナか。丁寧に整形されている。側面チョウナ、少し荒い。	
第726図	51建 W13	木製品 角材		長 幅	125.0 21.0	厚 重	9.0 –	半裁材 クリ	電車の枕木に似ている。穴２個。表面は平らで、裏面少し荒れている。用途名称不明。	
第727図	51建 W14	木製品 麦打台		長 幅	140.0 70.0	厚 重	8.0 –	–	麦打ち台と思われる。仏壇北側で最も上面から出土。各部材を接合し図のように復元した。竹はまとまって出土したが、図の順番ではなく復元して図化している。最近まで使用されていた麦打ち台とほとんど同じである。	
第728図	51建 W15	木製品 戸板		長 幅	169 4.0	厚 重	4.0 –	–	囲炉裏の上から内側に向かって左右に折れた状態で出土、内面にネコが多く残っていた。残りが悪いが、27号建物W221同様の板戸と思われる。ほぼ同じ位置に横木や縦方向の桟木等がある。	
第728図	51建 W16	木製品 仏壇下の材		長 幅	86.0 7.61	厚 重	6.8 –	–	丸木(クリ材？)の両端をナタ等で切り、囲炉裏の四方を囲む枠木として利用したものと思われる。表面は全体が煤けて黒くなっている。全体に刃物の小さな傷があり、囲炉裏に薪木をくべるときに短く切るための台としても使用したのではないか。裏面は煤けておらず、刃物の傷もわずかに残るだけである。囲炉裏の枠木が泥流により押し流され、仏壇の下まで流れたか。	
第728図	51建 W17	木製品 飼葉桶		長 幅	89.5 38.1	厚	15.4 –	半裁材 クリ	底面を欠損した飼葉桶か。直径50㎝近くの大きな木の中央部をくりぬいている。表面全体が風化しており、加工痕不明。	
第729図	51建 W18	木製品 囲炉裏、枠木		長 幅	77.0 13.7	厚 重	10.0 –	芯持材 クリ	51建の囲炉裏を３方向から囲んでいた３本の枠木のうちの１本。枠木はもともと１本の栗材であり､それを３本に切って利用している。表皮は全て付いており、はがすことはしていない。囲炉裏の枠木は３本であり、北側の１本は最初からなかったか。枠木３本に炎等により焦げている様子はない。	
第729図	51建 W19	木製品 囲炉裏、枠木		長 幅	97.0 14	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	51建の囲炉裏を３方向から囲んでいた３本の枠木のうちの１本。枠木はもともと１本の栗材であり､それを３本に切って利用している。表皮は全て付いており、はがすことはしていない。囲炉裏の枠木は３本であり、北側の１本は最初からなかったか。枠木３本に炎等により焦げている様子はない。	
第729図	51建 W20	木製品 囲炉裏、枠木		長 幅	92.0 15	厚 重	14.0 –	芯持材 クリ	51建の囲炉裏を３方向から囲んでいた３本の枠木のうちの１本。枠木はもともと１本の栗材であり､それを３本に切って利用している。表皮は全て付いており、はがすことはしていない。囲炉裏の枠木は３本であり、北側の１本は最初からなかったか。枠木３本に炎等により焦げている様子はない。	
第729図	51建 W21	木製品 丸太		長 幅	77.0 9.5	厚 重	9.5 –	芯持材 クリ	丸木として取り上げているが、取上番号W18～20の３本の囲炉裏枠木の残りの１本と思われる。長さが３本中最も短い。W18の76.5㎝に近い。同じ、栗材の丸太を使い、４本の中で最も細い材であり、枝に近い最も上になる木であったが、両端はナタ等により切られている。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第729図	51建 W22	木製品 木材		長 幅	120.0 13.0	厚 重	5.0 –	半裁材 クリ	名称用途不明。側面に多量の刃物痕あり。切台として使用されていると思われる。囲炉裏の枠木のとなりに置いてあった材。多くの刃物痕は、この上でボヤ木をナタ等により切って、囲炉裏で燃やしたときにできた傷か。裏面は土の上に直接置かれていたので、風化している。	
第730図	51建 W23-1	木製品 漆深椀蓋		口 底	摘6.0 11.2	高 重	35.0 –	– マツ科	内面赤色漆、外面黒色漆摘み内面に赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなく、肩部に稜緑あり。摘み内側の天井部の器肉薄い、下端口唇部使用により多く剥離している。	漆器４枚が重なる
第730図	51建 W23-2	木製品 漆椀		口 底	12.8 –	高 重	7.1 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面、オリーブ褐色漆、高台部内面赤色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離少ない。底部の器肉厚い。	漆器４枚が重なる
第730図	51建 W23-3	木製品 漆浅椀蓋		口 底	摘5.2 10.4	高 重	2.6 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆摘み内面に赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離ほとんどなく、肩部に稜緑あり。下端口唇部欠損後も使用のためかにぶい黄褐色。	漆器４枚が重なる
第730図	51建 W23-4	木製品 漆浅椀		口 底	11.4 5.7	高 重	4.6 –	–	内面赤色漆、外面黒色漆高台部内面文字なし。渋下地、内外面の漆剥離少ない。底部の器肉特に薄い。	漆器４枚が重なる
第730図	51建 W24-1	木製品 漆深椀蓋		口 底	摘5.2 10.8	高 重	3.5 –	–	内外面赤色漆、下端口唇部黒色漆、摘み口唇部黒色漆、摘み内面黒色の文字で「源」渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に稜緑あり。	３枚がずれて重なる
第730図	51建 W24-2	木製品 漆深椀			– –	高 重	7.5 –	–	内外面赤色漆、高台部内面欠損、文字の有無不明。渋下地、内外面の漆剥離やや多い。高部の器肉厚く、高台高い	３枚がずれて重なる
第730図	51建 W24-3	木製品 漆浅椀		口	11.8	高 重	5.5 –	–	内外面赤色漆、口唇部黒色漆、高台部内面、黒色の文字で「源」渋下地、内外面の漆剥離少ない。高台部内側底部の器肉特に厚い。口唇部、使用により多く欠損している。	３枚がずれて重なる
第730図	51建 W25	木製品 漆平椀			– –	高 重	3.8 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面オリーブ褐色で漆、胴部外面オリーブ褐色で家紋「丸に九枚笹」３箇所、口緑部丸味を持って内湾気味に立上る。口唇部と高台部全て欠損	
第730図	51建 W26	木製品 漆椀の蓋	完形	口 底	摘3.1 9.5	高 重	2.3 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面文字なし。内面赤色漆の上に金色の仮名文字多く書かれている。渋下地、外面に同心円状の沈線多数ツマミは他の浅蓋より径が狭く高さが低い。肩部に稜線なし。器肉が最も厚いのはツマミ内側の天井部である。	PL.263
第730図	51建 W27	木製品 漆椀蓋	口縁部欠	口 底	摘– 10.3	高 重	– –	– 広葉樹	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。ツマミ内面やや赤い赤褐色漆。家紋と思われる丸に九枚笹がツマミ内面に１箇所、外面に３箇所描かれている。渋下地、内外面の漆剥離少ない。口緑部が内湾する。他の深蓋とやや異質。肩部に稜線あり。	PL.268
第730図	51建 W28	木製品 漆深椀		口 底	12.0 高台 6.0	高 重	7.2 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆、胴部外面オリーブ褐色で家紋「丸に九枚笹」３箇所。高台部内面赤色の文字で「本子」か？口緑部丸味を持って内湾気味に立上る。口唇部欠損後も使用のためかにぶい黄褐色。	
第730図	51建 W29	木製品 漆浅椀蓋		口 底	摘4.8 9.8	高 重	2.5 –	– ブナ属	内外面赤色漆、内外面文字で「月」渋下地、漆剥離少ない。肩部に稜線あり。摘み内側天井部の器肉特に薄い。	
第731図	51建 W30-1	木製品 漆深椀蓋		口 底	摘5.4 11.0	高 重	3.6 –	–	内面赤色漆、外面オリーブ褐色、摘み内側赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離の少ない。肩部にに稜線あり。摘み内側天井部の器肉特に薄い。口唇部使用により少し欠損している。	３枚が重なる
第731図	51建 W30-2	木製品 漆深椀	完形	口 底	12.0 5.1	高 重	7.5 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆。高台部内側、赤色の文字で「月野」。渋下地、内外面の漆剥離多い。底部の器肉厚く、高台高い。胴下半の稜線の位置が低い。	
第731図	51建 W30-3	木製品 漆椀蓋		口 底	摘6.0 11.2	高 重	2.7 —	–	内面赤色漆、外面黒色漆。高台部内側、赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離の漆剥離少ない。高台部内側底部の器肉特に厚い。口唇部使用により多く欠損している。	３枚が重なる
第731図	51建 W30-4	木製品 漆浅椀		口 底	5.4 10.4	高 重	4.7 –	–	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆、摘み内側赤色の文字で「月」。渋下地、内外面の漆剥離の少ない。肩部にに稜線あり。天井部の器肉特に薄くなっている。	３枚が重なる
第731図	51建 W31-1	木製品 漆深椀蓋		口 底	摘5.4 10.7	高 重	4.1 –	– ブナ属	内外面赤色漆、外面オリーブ褐色摘み内面赤色の文字で「月」渋下地、内外面の漆剥離少ない。肩部に明瞭な稜線あり。下部口唇部使用により一部欠損。	３枚がずれて重なる
第731図	51建 W31-2	木製品 漆深椀		口 底	12.4 高台 6.0	高 重	7.4 –	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆、高台部内面赤色の文字で「月野」渋下地、内外面の漆剥離多い、胴下半から底部の器肉厚い。	３枚がずれて重なる
第731図	51建 W31-3	木製品 漆深椀		口 底	高台 6.0	重	–	– ブナ属	内面赤色漆、外面黒色漆、高台部内面赤色の筆で「入山形に久」外面オリーブ褐色で、梅の花と思われる絵が描かれている。渋下地、内外面の漆の剥離少ない。底部の器肉厚く高台高い。	３枚がずれて重なる
第731図	51建 W32	木製品 漆平椀		口	11.0 –	高 重	4.5 –	– ブナ属	内外面赤色漆、口唇部黒色漆、高台部内面黒色の文字で「源」渋下地、内外面の漆剥離やや多い。高台部多くが欠損。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第731図	51建 W33	木製品 漆平椀	高台部・口縁部 欠損	口 底	－ －	高 重	－ －	－ トチノキ	内面赤色漆、外面暗赤褐色漆。高台部内面文字なし。渋下地、内外面の漆剥離少ない。	
第731図	51建 W34	木製品 漆杯		長 幅	8.7 8.7	厚	2.5	－	口径8.3cmの小さな杯と思われる。内面赤色。外面緑色系漆塗り。外面の塗りは悪く剝離が見られるため、PEGにより接着をおこなった。県内での出土例はなく器形も反りがあり特殊である。自然科学分析をおこない結果を報告している。第８節緑色系漆器の分析。	PL.268
第732図	51建 W35-1	木製品 メンパ		長 幅	19.1 11.4	厚	8.9	－	蓋と身が重なった状態で、仏壇の戸棚の中から出土した。中身は空であった。	PL.262
第732図	51建 W35-2	木製品 蓋		長 幅	20.7 9.6	厚	9.0	－ ヒノキ科	蓋と身が重なった状態で、仏壇の戸棚の中から出土した。中身は空であった。	PL.262
第733図	51建 W36	木製品 おひつ		長 幅	24.0 23.7	厚	9.6	－ ヒノキ科	内外全面茶漆。漆下地と思われる。表面を磨いた後、茶漆を重ね塗りしているものと思われる。漆は全く剥げていない。渋下地なし。綴部分は桜皮か。側板は先を細くして底板に差し込んでいる。仏壇下の戸棚の中に２個重ねてあったおひつのうち、上のおひつ。器表面全て密で、年輪が表面に浮かび出るようなことはない。	PL.261
第733図	51建 W37	木製品 蓋		長 幅	12.2 12.6	厚	2.0	－	上部表面に厚い渋下地と黒漆。わずかに内側に凹状になっている。	
第734図	51建 W38	木製品 おひつ		長 幅	12.1 12.0	厚	8.5	－ ヒノキ科	W36と重なっていたおひつ。W36より直径が２cm以上小さいが下に置かれていた。蓋や下板とも形や漆の状態はW36と同じである。しかし、側板はやせ衰えており、表面に年輪が凸凹状になっていた。厚さはW36が上端で0.8cm、下端で0.3cmであったが、W38は上端0.3cm、下端は0.2cmであった。内部は空。	
第734図	51建 W39	木製品 丸膳		長 幅	16.1 16.1	厚	3.5	－	小さな丸い膳である。21号建物では８～９枚まとまって丸い膳が出土しているが、直径は約30cm、それに比べ、この膳は約半分の大きさである。上面は赤色漆、下面は黒色漆で全く剥離していない。渋下地のあと、磨いて表面を平らにし、漆を塗っている。丁寧なつくりである。裏面は渋下地後、相当磨いて黒色が薄くなった上に黒漆を塗っている。内部は空。	
第735図	51建 W40	木製品 丸膳		長 幅	28.3 2.9	厚	2.7	－ スギ	丸善の一部。内外面黒漆。脚が３本つくものと思われる。裏面に「本」の墨書。側板のつなぎ目にバンド状の桜皮が張りつけられている。底板の直径は約30cm。材の木目は細かい、針葉樹か。	
第735図	51建 W41	木製品 お盆		長 幅	22.8 23.3	厚	2.3	－	内外面全面黒漆。長さ1.5cmの竹クギが４か所。茶碗の圧痕が４か所見受けられる。外側板のつなぎ目部分はテープ状のもので固定されている。	
第735図	51建 W42	木製品 柄杓		長 幅	40.3 11.2	厚	8.7	－ マツ科	柄杓の身の部分。底板、側板共に柾目。つなぎ目に使われる材は桜皮か。	
第736図	51建 W43	木製品 柄杓の柄		長 幅	64.2 2.6	厚	1.4	－ マツ科	27建にも同じ長さの柄杓の柄W322が出土している。	
第736図	51建 W44	木製品 曲物の桶か		長 幅	23.4 19.1	厚	15.0	－	曲物でつくられた桶等の入れ物か。１枚の板を２重にして曲物の側板としている。口径が20cm以上と大きく、側板の厚さが４～５㎜と薄いため、側板を２重にして強度を高めている。口縁部外側にハチマキ状に側板が１周している。側板の上端は厚さ0.5cmと一定の厚さを持つが、底部に近い所では厚さ0.3cmと薄くなっている。綴は桜皮と思われるもので７か所固定している。全て柾目。材は針葉樹。桶の中上部、泥流の上に２本の団扇が残っていた。	
第737図	51建 W45	木製品 柄杓		長 幅	12.4 10.9	厚	0.8	－ マツ科	柄杓のほぼ完形品である。身は直径13cm、高さ11cm、柄も完形品であり、長さは35.5cmである。柄は身が２重になった部分で身の上から３cm下へ差し込まれ、その部分が上下に裂けないように左右に木の皮で補強している。身に差し込まれた柄の先端部は細く削られ、反対側の内面に上から７cmの所で小穴に差し込み固定している。差し込まれた先端部の身が上下に裂けないように小穴の左右に木の皮で補強している。	
第738図	51建 W46	木製品 蓋		長 幅	28.4 28.5	厚	16.6	－ スギ	柾目。渋下地なし。表面が赤色に塗られている。光沢はなく、漆ではないと思われる。裏面に色は塗られていない。クギが残っている。	
第738図	51建 W47	木製品 蓋		長 幅	24.0 4.7	厚	1.9	－ スギ	周辺部削って丸くしているが、正円ではない。木クギ４か所。ホゾ穴は浅く0.1cm。	
第738図	51建 W48	木製品 しゃもじ		長 幅	21.9 7.5	厚	4.7	－	歪んでいて、どちらの面が上か下か不明。	PL.268

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第738図	51建 W49	木製品 しゃもじ		長 幅	9.4 3.4	厚	0.2	–	平らで凹凸なし。幅が約3.4㎝と狭いのでしゃもじとしては疑問。匙的な道具か。	
第739図	51建 W50-1	木製品 しゃもじ	完形	長 幅	22.7 6.1	厚	1.4	–	木製のしゃもじである。全面赤漆。完形品である。漆は剥離少ない。丁寧な塗りである。放射組織、散孔材、材はカシか。	しゃもじと漆椀と竹
第739図	51建 W50-2	木製品 しゃもじ		長 幅	22.0 9.4	厚	5.5	–	W50-1と重なって出土したしゃもじ。下に位置するお玉か。柄は竹、身は漆椀(蓋？)を使って作ったものである。	しゃもじと漆椀と竹
第740図	51建 W51	木製品 竹製品		長 幅	34.7 2.4	厚	2.3	–	箸入れ。箸が２本。箸入れの材は竹。箸の材は木。	
第740図	51建 W52	木製品 箸		長 幅	23.7 0.5	厚	43.0	–	木製の箸。	
第740図	51建 W53	木製品 箸		長 幅	28.3 0.8	厚	0.7	–	51建仏壇の戸棚の中の底板の上に他の陶器やおりん等とともに置かれた状態で出土。数は６本。削った加工側面なし。漆なし。長さは現状で19.5㎝であるが、写真等から想定すると約23㎝である。太さはほぼ全て異なり、太さ約0.8㎝～0.5㎝である。中空の木質材であり、散孔材と思われる。ウツギの枝を切って太い部分から細い枝部分まで使ってつくった箸か。竹筒に入っていた箸は空木(中空の材)ではなく、材を削って四角形に近い形に加工し、漆を塗っている。このように竹筒の中にある箸とは全く異なる材と加工によりつくられた箸と思われる。仏壇の中に置かれていた仏壇用の箸か。	PL.262
第740図	51建 W54- 1･2	木製品 箸・箸入れ		長 幅	– –	厚	–	–	長い箸と細い箸の２本１組が竹の中に入っていた。長い箸は長さ24.5㎝、短い箸は長さ23.3㎝で約1.2㎝長い箸が長い。長い箸は主人で、短い箸は妻用か。４本とも木制で細く削られている。太さは約0.4㎝であり、太さの違いはあまりない。上下の区別は不明。木製で表面に赤褐色漆が塗られている。両端は直角に削られており、先端が細く鋭角になっていない。この４本の箸が竹の水筒に似た入物に入っていた。節内の長さは約33.5㎝であり、箸の長さは24.5㎝、完全に中に入ってしまい外からは見えない。底部の節はほぼ完全に残っている。上部の節は上部分を少し残し、下の把手のある部分は大部分残っていない。水筒の穴と同じように開けられている。ここから箸を出したものと思われる。竹は根元に近い枝の出ない真丸ではなく、上下の節とも枝の出る部分があるのでやや断面は凹みのある竹を使用。水筒は全て枝のない丸い竹を使用しているので異なる。把手部分に水筒と同じように２個の穴がある例もあるが、これには穴はない。	
第741図	51建 W55	木製品 とうじかご		長 幅	48.6 11.7	厚	7.5	– ハンノキ属ハンノキ亜属	籠の網目部分の材は竹ではないと思われる。	
第741図	51建 W56	木製品 すいのう		長 幅	35.0 1.7	厚	27.0	–	すいのうと思われる。柄の長さ35㎝、輪部分は一部欠損している。穴は13個残っている。直径は不明。	
第742図	51建 W57	木製品 器		長 幅	13.0 13.0	厚	5.2	– カエデ属	木製の香炉型の製品である。中央に芯を持つ。心持材。ロクロで削り出しており、内外面にロクロ削痕。素地に漆下地なし。暗赤褐色漆？が全面に塗られている。丁寧なつくりである。底面に敷物のねこに近い織物が付着している。内外面とも炭の付着なし。焼けた痕跡なし。	
第742図	51建 W58	竹製品 竹製		長 幅	32.7 6.0	厚	5.5	–	口縁部に栓が残っているほぼ完形の水筒である。竹の上部には竹を半分ほど切り残したトヨ状の突起があり、上端の両端に細い穴が空けられ、ヒモ等を通すことができる。上の節の奥に栓を入れる穴が空けられ、そこに木製の栓が差し込まれていた。栓は長さ６㎝太さ1.5㎝で、上1/3の場所に、ヒモで栓を縛るための溝状の切り込みあり。	PL.269
第743図	51建 W59	木製品 箱		長 幅	18.6 12.8	厚	11.4	–	仏壇の段上に置かれていた箱である。２重構造となっており、深い下段の箱は引出せる。	W81-3の板とセットか
第743･ 744図	51建 W60-1 ~3	木製品 重箱		長 幅	19.0 17.7	厚	5.5	– モクレン属	三段重か。天井蓋なし。内面赤色漆。側面外側赤色漆に黒色笹葉９葉文と思われる紋様あり。底板外面２本の台付、全面黒漆。庄痕でへこんでいる箇所がある。	
第745図	51建 W61	木製品 一合升		長 幅	9.1 9.4	厚	5.5	– キリ	表面全体(内外面)褐色に塗られている。底部が割れており、補強用の材と思われるものがついている。側面に２本の竹クギ、底面には竹クギ多数。升の容量は約157cc。	PL.269
第745図	51建 W62	木製品 箱		長 幅	28.8 19.8	厚	4.7	– マツ科	小さな箱あるいは引き出しか。側板は手前部分が低くなっている。手前側板上端に刃物の傷痕多く残る。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第745図	51建 W63	木製品 升	完形	長 幅	11.6 11.5	厚	6.0	– カツラ	２合枡の完形品。側板は竹クギと思われるクギで各２本、底部は各辺各２本の竹クギで、８か所側板を固定。内側の深さは５㎝と深い。	PL.269
第745図	51建 W64	木製品 火打箱		長 幅	17.0 9.5	厚	6.3	– クリ	炭の小片が大量に入っている。底面、側面とも炭化して黒くなっている。着火剤の蓋にヒモらしきものが残る。このヒモを持って蓋を持ち上げたか。蓋の両面とも少し炭はあるが、真っ黒ではない。上面にはほとんど炭はなく、ヒモの残っている面が上。下面の一部黒色の炭付着。	
第746図	51建 W65	木製品 板箱		長 幅	85.9 50.6	厚	0.7	– マツ科	内面滑らか、外面ノコギリ、少し荒れている。この箱の中にW60の重箱と陶器。	
第746図	51建 W66	木製品 箱		長 幅	24.3 16.0	厚	4.1	– マツ科	文箱。内外面全面黒漆。底板の内面は黒漆。外面漆なし。内面漆の上に刃物傷多数。漆枠の一部に鉄さび付着。	
第747図	51建 W67-1	木製品 櫛		長 幅	11.7 3.4	厚	0.5	–	仏壇下の戸棚の中、３本重なって出土した櫛の内の一つ。歯のある部分の幅11㎝。総歯数104本。10㎝範囲の歯の数は97本。歯の数の密度が高く、最も細かい。櫛歯の数は１㎝幅につき９本。福利久。	PL.263
第747図	51建 W67-2	木製品 櫛		長 幅	12.2 3.5	厚	1.0	–	仏壇下の戸棚の中、３本重なって出土した櫛の内の一つ。歯のある部分の幅11.7㎝。総歯数70本。10㎝範囲の歯の数は58本。歯の数の密度、中密。櫛歯の数は１㎝幅につき６本。福利久。	PL.263
第747図	51建 W67-3	木製品 櫛	完形	長 幅	12.2 3.5	厚	1.0	–	仏壇下の戸棚の中、３本重なって出土した櫛の内の一つ。少しゆがんでいる。歯のある部分の幅11.3㎝。総歯数42本。10㎝範囲の歯の数は37本。歯の数の密度は粗い。櫛歯の数は１㎝幅につき４本。福利久。	PL.263
第747図	51建 W68	木製品 櫛		長 幅	17.4 3.5	厚	7.2	–	細長い櫛である。利久。歯の部分黒漆、他の表面全て赤漆。櫛歯の数は１㎝幅につき５本。中歯の櫛である。	
第747図	51建 W69	木製品 ハケ		長 幅	15.0 6.3	厚	1.2	–	柾目。厚さ0.2㎝、長さ2.5㎝の範囲に刷毛の毛が残っている。	PL.259
第747図	51建 W70	木製品 筆？		長 幅	15.8 0.7	厚	0.7	–	筆の根元を差し込む部分のみ少し削って広くし、そこに筆の根元を差し込んでいる。削ったときに竹の内側は円形でなく少し直線的になっている。	
第747図	51建 W71	木製品 不詳		長 短	3.1 1.9	厚 重	1.1	–	名称、用途不明。散孔材の板材の片方に２本突起反対側に１個穴あり。	
第748図	51建 W72	木製品 おろし板	完形	長 幅	24.5 10.5	厚	1.8	– マツ科	はご板状の薄い板の表側に格子状に多くの竹グシが差さっている。竹グシは裏面まで出ているものが約半分。出ていないで、小さな穴が空いたままのものが約半分ほどある。事前に格子状に線引きして交点部分に細い穴をあけて、そこに竹グシを打ち込んでいる。表面に出ている竹グシは、頭部を削って高さをほぼそろえている。	
第748図	51建 W73-1	木製品 麻引		長 幅	8.1 7.0	厚	3.4	– ヒノキ科	麻引きと思われる。一部金属が残っているが、メタル反応なし。底面、中心付近がわずかにへこんでいる。	PL.261
第748図	51建 W73-2	木製品 麻引		長 幅	10.1 7.4	厚	3.4	– ヒノキ科	麻引きと思われる。一部金属が残っているが、メタル反応なし。底面、中心付近がわずかにへこんでいる。	PL.261
第748図	51建 W73-3	木製品 麻引		長 幅	9.2 6.0	厚	2.9	– ハンノキ属	麻引きと思われる。刃部分は鉄ではなく、細い木を差し込んで刃としている。	PL.261
第749図	51建 W74	木製品 大ベラか？		長 幅	97.5 8.7	厚	7.9	–	表面加工痕なし。割った状態。	
第749図	51建 W75	木製品 鋤鍬		長 幅	27.9 13.4	厚	3.4	– コナラ属コナラ節	底面はほぼ水平。	
第749図	51建 W76	木製品 墨壺		長 幅	18.4 4.5	厚	7.6	–	墨壺と思われる。内部に黒墨が布についた状態で残っていた。中央の回転輪には別の樹皮の皮？等が組み込まれている。	PL.263
第750図	51建 W77	木製品		長 幅	5.0 3.3	厚	5.0	–	小さな壺状の木製品。回転のロクロで削りだして作成。内面もロクロ痕明瞭に残る。内面全体炭により真っ黒。墨書が残る。蓋は材質が異なり、煤けている部分少ない。別に作られたものか。材は身は広葉樹、環孔材。蓋は広葉樹、散孔材。	PL.269
第750図	51建 W78	木製品 板		長 幅	54.7 10.6	厚	8.6	– マツ科	板表面にV字状の彫り込み５か所あり、用途名称不明。道具入れか	
第750図	51建 W79	木製品 サルノコシカケ		長 幅	19.6 9.0	厚	4.0	–	キノコである。両側が削られている。	
第751図	51建 W80	木製品 箱		長 幅	48.8 29.7	厚	1.7	– マツ科	長辺側板。２枚の板。つなぎ目に３個のホゾ。木栓。	PL.265
第751図	51建 W81-1	木製品 箱		長 幅	31.3 16.2	厚	1.4	–	短辺側板。	
第751図	51建 W81-2	木製品 箱		長 幅	– –	厚	–	–	短辺側板。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第752図	51建 W81-3	木製品 箱上板		長 幅	47.3 29.3	厚	4.1	–	上に大量の遺物あり。W59の箱板、さらにその上に扇(W81-4)と植物が乗っていた。下面にゴマの実のようなものが残っていた。	
第752図	51建 W81-4	木製品 扇子		長 幅	67.2 3.3	厚	1.5	–	紙らしき痕跡残る。涼をとるものではなく装飾品か。厚さ１㎜以下、中央12枚の中骨。中骨の加工に変化なし。中骨の数が少ない、江戸扇子か。	
第753図	51建 W81-5	木製品 箱中段板		長 幅	87.0 4.5	厚	4.0	–	仏壇の手前に置かれていた49×31cm、高さ28cmの長方形の箱である。底板の底面には土間の上に敷かれていた。「ネコ」が付着しており、「ネコ」の上に置かれていた。横板は３枚あり、全て１枚板である。最も下の底板とその上に中段の横板W81-5が重なっていた。W81-5、W81-6の横板の間に置物なし。おそらく当初から重なっていたものと思われる。横板W81-5の上に横板W81-3があり、横板W81-5の上には銭、箸、すきぐし？、毛抜き、キセル、ゴムの種、ヒモ等が置かれていた。その上の横板W81-3の上には、完形の扇子があり、扇子の上には草に近い植物が厚さ2.5cm程かぶさるように残っていた。横板W81-3の上には、高さ5.6cmと小さな徳利が２個置いてあった。箱の底板W81-5は、クギで側板を三辺固定していたが一辺にクギなし。天井部の蓋は不明。底板W81-6は四辺に側板が付く箱状となっており、W81-5は一回り大きな箱の中に「入れ子」のように納められていたものと思われる。	
第754図	51建 W81-6	木製品 箱底板		長 幅	47.4 29.1	厚	0.9	–	クギ穴なし。麻がらの厚みは0.5cmと厚い。ねこは厚さ１～２㎜と薄い。	
第757図	51建 W82-1	木製品 仏壇		長 幅	87.0 4.0	厚	4.0	–	以下仏壇の部材について説明する。これらの部材はまとまって出土したが、北から押し寄せた天明泥流により南側に押し倒された状態で倒れており、完全な状態の出土ではない。腐敗した部材も多い。板の多くは割れてほとんど復元できなかった。それらの部材を集めて実測図や写真等を用いて復元したが、解釈の間違い等もあると思われる。復元図等を作成して図化したが、間違っているものもあると思われる。第755・756図参照。仏壇下戸棚土台奥の横木である。左端でW82-2，右端でW82-4と直行して接合。接合部に仏壇奥縦方向の柱の枘を受ける枘穴あり。上面に裏の板を組み込む溝あり。	
第757図	51建 W82-2	木製品 仏壇		長 幅	3.6 4.0	厚	4.0	– マツ科	仏壇下戸棚土台左の横木である。手前でW82-5，奥でW82-1と直行して接合。接合部に仏壇奥縦方向の柱の枘を受ける枘穴あり。上面に裏の板を組み込む溝あり。溝の深さ0.5cm。	
第757図	51建 W82-3	木製品 仏壇		長 幅	3.6 3.0	厚	2.0	–	仏壇下戸棚土台中央の細い横木である。手前でW82-5，奥でW82-4と直行して接合。両端に枘あり。上面に釘の穴あり。底板が打ち付けられたものと思われる。	
第757図	51建 W82-4	木製品 仏壇		長 幅	3.6 4.0	厚	4.0	–	仏壇下戸棚土台右の横木である。手前でW82-5，奥でW82-1と直行して接合。接合部に仏壇奥縦方向の柱の枘を受ける枘穴あり。上面に裏の板を組み込む溝あり。	
第757図	51建 W82-5	木製品 仏壇		長 幅	87.0 4.0	厚	4.0	–	仏壇下戸棚土台手前の敷居である。左端でW82-2，右端でW82-4と直行して接合。接合部に仏壇手前縦方向の柱の枘を受ける枘穴あり。上面に引き戸用の溝２本掘られている敷居である。	
第757図	51建 W83	木製品 仏壇		長 幅	79.0 35.0	厚	1.0	–	仏壇下戸棚土台上の床板である。１枚板であり、上面に載っていた陶磁器等の痕跡が丸く残っている。裏面には多くのネコが付着していた。	
第758図	51建 W84	木製品 仏壇		長 幅	– 4.0	厚	4.0	– スギ	仏壇天井部手前上端横木と思われる。左端でW96とW94と直行して接合。接合部には、材を受ける加工と枘穴あり。下面に板を組み込む溝なし。	
第758図	51建 W85	木製品 仏壇		長 幅	3.5 3.0	厚	2.0	–	仏壇天井部中央の細い横木である。手前でW84，奥でW86と直行して接合。上面に釘の穴あり。天井板が打ち付けられたものと思われる。	
第758図	51建 W86	木製品 仏壇		長 幅	87.0 4.0	厚	4.0	– スギ	仏壇天井部奥の横木である。左端でW96と直行して接合。接合部に材を受ける加工と枘穴あり。下面に板を組み込む溝あり。	
第758図	51建 W87	木製品 仏壇		長 幅	120.0 4.0	厚	4.0	–	仏壇右奥の柱である。上下のホゾは残っていなかったが。ほぼ全体の長さを残している。東に接して仏壇の３枚の背板がありその上には５枚の位牌がおいた状態で出土した。下から26cmその上58の場所にホゾ穴がある。ホゾ穴は直行した２面に掘られていた。下のホゾ穴から下は仏壇下の戸棚、上が仏壇となっており、仏壇中間に細い横材(W97)が組み込まれていた。	

挿図 PL.No.	No.	種　類 器　種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備　考
第758図	51建 W88	木製品 仏壇		長 幅	- 3.0	厚	2.0	- マツ属複維管束亜属	仏壇中央の奥の細い横材W97と同様な中間の材である。裏面に背板を打ち付けた釘穴と思われる穴多くあり。	
第758図	51建 W89	木製品 仏壇		長 幅	61.0 9.0	厚	3.0	-	仏壇下戸棚引戸上の鴨居である。一部欠損している。左端でW94と直行して接合するものと思われる。下面に引き戸用の溝２本掘られている。溝の深さは１cmで鴨居の溝の深さ0.5cmより深い。	
第758図	51建 W90	木製品 仏壇		長 幅	78.0 2.5	厚	1.5	- マツ科	仏壇の位牌が置かれていた面の奥の横木である。中央部片面に凹状の切込みあり。仏壇床板下の細い材を受けるための加工と思われる。外面に背板を打ち付けたと思われる。釘の穴が３か所残っている。	
第758図	51建 W91	木製品 仏壇		長 幅	9.5 7.8	厚	3.2	- マツ科	仏壇の位牌は、床面より一段高い段の上に並べられていた。段はW91同様の材を３個756図想定復元図のように置き、上面と手前に細長い板を釘で打ち付けて作られていた。小さい材であるが安定しておけるように幅が3.2cmと厚い。上面と側面に釘穴が各２個残っていた。	
第759図	51建 W92	木製品 仏壇		長 幅	74.5 21.0	厚	1.5	-	仏壇左戸板と思われる。残りが悪くどのように固定したか、あるいはどのように開閉したかについては不明である。上の欄間とともに固定されていたか？	
第759図	51建 W93	木製品 仏壇		長 幅	74.5 21.0	厚	1.5	- マツ科	仏壇右戸板と思われる。残りが悪くどのように固定したか、あるいはどのように開閉したかについては不明である。上の欄間とともに固定されていたか？	
第759図	51建 W94	木製品 仏壇		長 幅	93.0 4.0	厚	4.0	-	仏壇左側の柱と思われる。同じ柱であるW87と比較すると仏壇下の戸棚部分が欠損していることがわかる。W87にはないホゾ穴が上から17cmのところにある。ここに仏壇正面の上の欄間の板が固定されていたのではないだろうか。第755・756図参照	
第759図	51建 W95	木製品 仏壇		長 幅	103.0 19.0	厚	1.0	-	仏壇右側板と思われる。板は残りが悪くほとんど図化できなかった。第755・756図参照	
第759図	51建 W96	木製品 仏壇		長 幅	40.0	厚	4.5	-	仏壇天井部左側の枠木と思われる。手前端部はW94・W84と接合する。後側も同様に接合するので、そのための細かな加工が行われている。上面には天井板が打ち付けられたときの穴が５個残っていた。	
第759図	51建 W97	木製品 仏壇		長 幅	35.0 3.7	厚 重	2.4 -	- マツ科	仏壇右中段の横木と思われる。奥で垂直方向のW87と接合する。	
第759図	51建 W98	木製品 仏壇		長 幅	38.5 3.5	厚	2.5	-	仏戸棚左上の横材と思われる。手前で垂直方向のW94と接合。両端にホゾあり、背中面に側板を釘等で打ち付けた穴５カ所あり。	
第759図	51建 W99	木製品 箱(位牌下)		長 幅	34.7 2.6	厚 重	4.1 -	- マツ科	仏壇の奥に位牌を置くための中段が造られている。中段には上と手前に板が貼られている。その板を支えるために置かれた３個の方形の板材である。奥行き7.5cm高さ9.2cm幅３cmの角材である。上と手前側面に各２か所釘の跡が残っている。天板と側板が釘で固定されていた。	
第759図	51建 W100- 1	木製品 扉		長 幅	39.7 25.6	厚 重	2.0 -	- マツ科	仏壇下の戸棚の引き戸である。仏壇は横幅86.5cm、高さ約128cm、奥行き約44cmであり、下段の戸棚は内径で幅77cm奥行き37cm高さ24cmである。表側に敷居と鴨居(２本溝長さ77cm)があり、引き戸２枚(幅約39.5cm)がある。２枚の引き戸幅を加えると79cmとなり、敷居の溝長さ77cmより２cmほど長い。この部分が２枚の引き戸が重なる部分と思われる。引き戸は横方向に細い横木４本が打ち付けられていた(上桟と下桟含む)。上桟と下桟は、板の端に打ち付けられており、敷居と鴨居の溝に入るのは桟木の先端部だけである。板と桟木は釘で固定されていた。	
第759図	51建 W100- 2	木製品 扉		長 幅	39.7 25.6	厚 重	2.0 -	- マツ科	W101-1とほぼ同じ。	
第760図	51建 W101	木製品 位牌	一部欠	長 幅	41.5 8.0	厚	0.5	本体　柾目　スギ 台　分割材　キリ	白木であるが、表側縁と台正面下部抉り部に赤色塗採が認められる。文字は確認できない。身は薄く、台座も厚みがない。台のほぞ穴から底面に円形の穴をあけている。	
第760図	51建 W102	木製品 位牌	完形	長 幅	28.2 8.3	厚	0.8	本体　柾目マツ属複維管束亜属 台　柾目　マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「享保六亥天」「歸空　法光智傳禅定仁灵位」「正月八日」の墨書。台は一枚板にほぞ穴を穿ったものである。	
第760図	51建 W103	木製品 位牌	完形	長 幅	30.2 8.0	厚	1.0	本体　柾目マツ属複維管束亜属 台　柾目　マツ属複維管束亜属	剣先状の白木板に「享保三戌天」「歸空　□圓禅定門　灵位」「十二月八日」の墨書。台は方形板にほぞ穴を穿ったものである。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第760図	51建 W104	木製品 位牌	完形	長	28.3	厚	0.7	本体　板目マツ属 複維管束亜属 台　追柾　マツ属 複維管束亜属	剣先状の白木板に「享保四亥天」「歸去　不少残真禅定門 霊位」「五月十二日」の墨書。台は方形板にほぞ穴を穿ったものである。	
				幅	8.7					
第760図	51建 W105	木製品 位牌	完形	長	27.5	厚	1.0	本体　柾目マツ属 複維管束亜属 台　柾目　マツ属 複維管束亜属	先端が丸みを帯びるが、当初は剣先状と考えられる。白木板に「享保八癸卯天」「皈元　智全禅定尼　灵位」「十一月 朔日」の墨書。台は方形板にほぞ穴を穿ったものである。	
				幅	7.0					

5区道

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第761図	7道W1	木製品 木材		長	109.0	厚	11.0	芯持材 マツ	名称用途不明。中央に幅3.5㎝の溝あり。溝の底部はすべすべしており、戸板等で滑らしていたか。１本溝であり不明。5.7㎝と幅広いホゾ穴あり、貫通しており、土台のホゾ穴ではない。	
				幅	14.0	重	–			
第761図	7道W2	木製品 下駄		長	21.5	厚	3.1	–	連歯ゲタ。前後歯ともほぼ良好に残る。塗装なし。材はクリ。	
				幅	8.3	重	–			
第761図	7道W3	木製品 硯		長	8.6	厚	1.5	– マツ科	表面全体に炭付着、硯と思われるが木製である。墨堂(オカ)部分わずかに腐ったように中央部わずかに凹となっている。底面は平で凹状の加工なし。模造品か。	
				短	3.5	重	–			

5区水路

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第762図	3水路 W1	木製品		長	15.6	厚	1.5	–	３号水路北４ｍの地点から出土。建物の柱と梁の一部が組んだ状態で出土した。梁は曲線部分を使用している。梁の上部にはホゾ穴があり、上屋構造の材が組まれていたものと思われる。	
				幅	2.0					
第762図	3水路 W2	木製品 筆？		長	12.9	厚	1.0	–	用途名称不明。空洞となっており、中に朱色のものがつまっている。筆として使用したものか。	
						重	–			
第762図	3水路 W3	木製品 根太掛け か？		長	63.0	厚	5.0	板目 マツ	土台の内側に付けて根太を受けるための横架材か。底部が厚く、上部が薄くなっている。根太を受けるためのホゾは扇ホゾとなっている。表面は荒れており、加工痕不明。	
				幅	14.0	重	–			

5区１面

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第763図	W1	木製品 しゃもじ		長	12.4	厚	2.4	柾目 サクラ属	しゃもじ中央が凹状となっている。	
				幅	7.5					
第763図	W2	木製品		長	35.5	厚	2.3	– コナラ属コナラ節	鍬の刃部分、柄を受けるホゾ穴は垂直。上部は凸状で高くなっている。底面は平らで溝状になっている。	
				幅	11.0	重	–			
第763図	W3	木製品		長	48.2	厚	1.7	– ケヤキ	幹から分かれた枝部分を利用した工具の柄。刃の部分にどうのような鉄具がついたのか不明。	
				幅	28.0	重	–			

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第688集

石川原遺跡（４）第５分冊 自然科学分析・遺物観察表編

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第78集

令和３(2021)年７月８日　印刷

令和３(2021)年７月30日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／朝日印刷工業株式会社